

千葉県文化財センター

研究紀要

20

平成 12 年 3 月

財団法人 千葉県文化財センター

発刊の辞

財団法人千葉県文化財センターは、昭和49年11月の創立以来、埋蔵文化財に関する数多くの調査、研究、普及活動を実施してまいりました。その成果は、発掘調査報告書をはじめとする多数の刊行物等に見られるとおりです。

研究活動につきましては、研究紀要の刊行をはじめ、埋蔵文化財調査に関連する独自の研究事業を行ってまいりました。昭和51年度に第1号を刊行しました研究紀要は、第1期から第3期の共通テーマによる調査・研究の成果として14冊を刊行いたしました。さらに「創立10周年記念論集」、「創立20周年記念論集」として研究紀要10号・16号を、県内出土の青銅製品の生産と流通の実態を明らかにした「県内の青銅製品の集成と分析」を17号として、それぞれ刊行いたしました。

当センターでは、昭和56年度以来、千葉県教育委員会の委託を受け、古代寺院跡・中近世城館跡・貝塚・古墳等を対象とする国庫補助事業重要遺跡確認調査を継続して実施してまいりました。そこで、その成果の検討を、研究紀要の第4期の共通テーマとすることとし、「重要遺跡確認調査の成果と課題」と題して、平成5年度から共同研究を開始いたしました。平成9年度には、その成果報告の第1冊目として研究紀要18号「古代仏教遺跡の諸問題」を平成10年度には研究紀要19号「貝塚出土資料の分析」をそれぞれ刊行いたしました。

このたび、第3冊目として研究紀要20号「中近世城館跡の構造と特質」を刊行いたします。本書が、考古学研究はもとより、埋蔵文化財調査の技術向上のための資料として、広く活用されることを期待してやみません。

平成12年3月

財団法人 千葉県文化財センター
理事長 中村好成

目 次

中近世城館跡の構造と特質

— 重要遺跡確認調査の成果と課題 3 —

はじめに	3
序 章	7
第1節 はじめに	7
第2節 城館をめぐる房総の中近世史	10
第3節 研究史概要	23
第1章 城館の構造等について	33
第1節 データについて	33
第2節 地域別特色	147
第3節 地域、時期、城・城主クラス別特色	154
第4節 まとめと課題	177
第2章 検出遺構について	183
第1節 障子堀の分類と編年	183
第2節 地下式坑のデータ分析	191
第3章 出土遺物について	215
第1節 はじめに	215
第2節 千葉県および周縁の土器研究史	216
第3節 所収遺跡の概説と出土土器	222
第4節 土器編年	278
第5節 まとめと課題	303
付章 文献目録	311

挿図目次

序-2 城館をめぐる房総の中近世史

第1図	千葉県内中近世城館跡分布	11
第2図	房総の戦国末期主要城館分布	17
第3図	近世初期(天正18年後半)の房総の諸土	20
第4図	千葉県地形分類図	21
1-1 データについて		
第5図	千葉県地域・市町村区分図	37
第6図	北西部の中近世城館跡分布	38
第7図	北部中央の中近世城館跡分布	39
第8図	北東部の中近世城館跡分布	40
第9図	中央西部の中近世城館跡分布	41
第10図	中央東部の中近世城館跡分布	42
第11図	南部の中近世城館跡分布	43
第12図	野田市金井野城跡(1)概念図	62
第13図	柏市松ヶ崎城跡(3)概念図	62
第14図	鎌ヶ谷市佐津間城跡(10)概念図	63
第15図	柏市戸張城跡(2)概念図	64
第16図	柏市増尾城跡(4)測量図	64
第17図	我孫子市根戸城跡(5)概念図	65
第18図	沼南町箕輪城跡(9)概念図	65
第19図	松戸市小金城跡(6)概念図	66
第20図	佐倉市大篠塚城跡(37)概念図	67
第21図	四街道市池ノ尻館跡(45)発掘調査全測図	67
第22図	印西市小林城跡(12,15)発掘調査全測図	68
第23図	本埜村笠神城跡(16)概念図	68
第24図	印旛村師戸城跡(18)概念図	69
第25図	印旛村高田山城跡(17)概念図	69
第26図	成田市荒海城跡(24)概念図	70
第27図	成田市長沼城跡(23)概念図	70
第28図	成田市駒井野城跡(25)概念図	71
第29図	成田市東和田城跡(22)発掘調査全測図	71
第30図	佐倉市太田要害城跡(36)概念図	72
第31図	佐倉市小篠塚城跡(31)概念図	72
第32図	佐倉市白井田宿内砦跡(35)概念図	73

第 33 図	四街道市鹿渡城跡(39)測量図	73
第 34 図	四街道市福星寺館跡(43)概念図	74
第 35 図	四街道市木出城跡(40)概念図	74
第 36 図	四街道市古屋城跡(38)・北ノ作遺跡(42,44)測量図・概念図	75
第 37 図	四街道市北ノ作遺跡(42,44)発掘調査全測図	75
第 38 図	四街道市和良比堀込城跡(41)発掘調査全測図	76
第 39 図	酒々井町長勝寺脇館跡(49)発掘調査全測図	76
第 40 図	酒々井町本佐倉城跡(47)・向根古屋城跡(48)概念図	77
第 41 図	佐倉市白井城跡(26)周辺概念図	78
第 42 図	佐倉市岩富城跡(27)測量図	79
第 43 図	佐倉市佐倉城跡(28)概念図	80
第 44 図	千葉市南屋敷遺跡(67)発掘調査全測図	81
第 45 図	千葉市城の腰城跡(61)測量図	81
第 46 図	千葉市立堀城跡(66)概念図	82
第 47 図	千葉市城山城跡(62)測量図	82
第 48 図	千葉市高品城跡(58)発掘調査全測図	83
第 49 図	千葉市小弓城跡(57)概念図	84
第 50 図	千葉市生実城跡(56)概念図	85
第 51 図	千葉市御茶屋御殿跡(63)発掘調査全測図	86
第 52 図	神崎町小松城跡(75)概念図	87
第 53 図	佐原市鶴崎新タテ古タテ城跡(83)概念図	87
第 54 図	佐原市上小川城跡(89)概念図	88
第 55 図	佐原市大倉城跡(85)概念図	88
第 56 図	山田町府馬城跡(101)概念図	89
第 57 図	東庄町大友城跡(105)概念図	89
第 58 図	下総町名木城跡(72)概念図	89
第 59 図	下総町小帝城跡(70)概念図	90
第 60 図	神崎町武田城跡(74)概念図	90
第 61 図	大栄町津富浦城跡(80)概念図	90
第 62 図	大栄町久井崎城跡(77)概念図	91
第 63 図	大栄町南敷城跡(82)概念図	91
第 64 図	大栄町馬洗城跡(79)発掘調査全測図	91
第 65 図	佐原市山崎城跡(86)測量図	92
第 66 図	佐原市下小野城跡(87)概念図	92
第 67 図	多古町並木城跡(91)概念図	93
第 68 図	小見川町上小堀城跡(99)概念図	93
第 69 図	下総町名古屋城跡(68)概念図	94

第70図	干潟町鎬木城跡(103)測量図	94
第71図	東庄町沼闕城跡(104)概念図	95
第72図	下総町助崎城跡(69)測量図	95
第73図	小見川町森山城跡(97)概念図	96
第74図	小見川町須賀山城跡(98)概念図	96
第75図	佐原市大崎城(矢作城)跡(84)概念図	96
第76図	光町篠本城跡(108)発掘調査全測図	97
第77図	八日市場市大堀城跡(112)測量図	98
第78図	八日市場市飯塚砦跡(116)概念図	98
第79図	海上町見廣城跡(117)概念図	98
第80図	八日市場市大浦城跡(114)概念図	99
第81図	八日市場市久方城跡(110)概念図	99
第82図	八日市場市新城跡(115)概念図	100
第83図	銚子市中島城跡(118)測量図	100
第84図	芝山町岩山城跡(124)概念図	101
第85図	山武町埴谷周路遺跡(126)発掘調査全測図	101
第86図	東金市田間城跡(133)概念図	101
第87図	千葉市大椎城跡(136)概念図	102
第88図	芝山町山中北城跡(122)・南城跡(123)概念図	102
第89図	成東町津辺城跡(131)概念図	103
第90図	大網白里町小西城跡(137)概念図	103
第91図	大網白里町大網城跡(138)概念図	104
第92図	松尾町山室城跡(128)概念図	104
第93図	芝山町大台城跡(120)概念図	105
第94図	芝山町田向城跡(121)概念図	105
第95図	芝山町飯櫃城跡(119)測量図	106
第96図	横芝町坂田城跡(129)概念図	106
第97図	東金市東金城跡(132)測量図	107
第98図	千葉市土気城跡(135)概念図	107
第99図	松尾町松尾城(127)計画図	108
第100図	長南町下芝原城跡(151)概念図	109
第101図	睦沢町碓城跡(155)概念図	109
第102図	茂原市小林城跡(144)概念図	110
第103図	長南町利根里城跡(149)概念図	110
第104図	茂原市石神城跡(143)概念図	111
第105図	長柄町榎本城跡(139)概念図	111
第106図	長南町根古屋城跡(150)概念図	112

第107図	長柄町立鳥城跡(140)概念図	112
第108図	茂原市真名宿谷城跡(146)概念図	112
第109図	一宮町一宮城跡(157)概念図	112
第110図	睦沢町勝見城跡(153)概念図	113
第111図	睦沢町高藤山城跡(156)概念図	113
第112図	茂原市本納城跡(141)概念図	114
第113図	茂原市真名城跡(142)測量図	115
第114図	長南町長南城跡(148)概念図	116
第115図	岬町中滝城跡(164)測量図	117
第116図	御宿町最明寺裏城跡(169)概念図	117
第117図	夷隅町大野城跡(160)測量図	118
第118図	岬町矢竹城跡(163)概念図	118
第119図	岬町鶴か城跡(162)概念図	119
第120図	大原町城谷城跡(166)概念図	120
第121図	大原町金山城跡(167)概念図	121
第122図	大原町布施殿台城跡(165)概念図	122
第123図	勝浦市興津城跡(172)概念図	122
第124図	勝浦市吉尾城跡(170)概念図	123
第125図	勝浦市勝浦城跡(171)概念図	123
第126図	夷隅町万喜城跡(159)概念図	124
第127図	大多喜町大多喜城跡(158)概念図	125
第128図	市原市平蔵城跡(180)・平蔵城部田城跡(183)概念図	126
第129図	市原市吉沢城跡(181)概念図	126
第130図	市原市犬成城跡(176)・犬成向山城跡(179)概念図	127
第131図	市原市池和田城跡(177)概念図	127
第132図	市原市雀ヶ崎城跡(182)概念図	128
第133図	市原市真ヶ谷城跡(175)概念図	128
第134図	市原市椎津城跡(174)概念図	129
第135図	市原市分目要害城跡(178)概念図	129
第136図	市原市佐是城跡(173)概念図	130
第137図	袖ヶ浦市高谷館群(185,186)概念図	131
第138図	木更津市三直城跡(197)概念図	131
第139図	木更津市笹子城跡発掘調査全測図	132
第140図	木更津市中尾城跡(192)概念図	133
第141図	木更津市天神台城跡(191)概念図	133
第142図	木更津市要害城跡(190)概念図	133
第143図	富津市天神山城跡(203)概念図	134

第144図	君津市秋本城（小糸城）跡(195)概念図	134
第145図	君津市千本城跡(194)概念図	134
第146図	富津市峰上城跡(200)概念図	135
第147図	富津市造海城（百首城）跡(201)測量図	135
第148図	木更津市真里谷城跡(188)概念図	136
第149図	木更津市真武根陣屋跡(189)概念図	136
第150図	富津市飯野陣屋跡(198)測量図	137
第151図	君津市久留里城跡(193)概念図	137
第152図	富津市佐貫城跡(199)概念図	138
第153図	鋸南町下ノ坊館跡(204)発掘調査全測図・館域推定図	139
第154図	鴨川市西郷氏館跡(209)発掘調査全測図	140
第155図	丸山町石堂城跡(208)概念図	141
第156図	千倉町宇田城跡(216)概念図	141
第157図	館山市稲村城跡(214)測量図	142
第158図	館山市山本城跡(215)概念図	143
第159図	富山町富山城跡(205)概念図	143
第160図	鴨川市山之城城跡(211)・藤四郎台館跡(210)概念図	144
第161図	富浦町宮本城跡(207)概念図	144
第162図	天津小湊町葛ヶ崎城跡(212)概念図	145
第163図	富浦町岡本城跡(206)測量図	146
第164図	館山市館山城跡(213)概念図	146

1-2 地域別特色

第165図	地域別データグラフ1（立地他）	149
第166図	地域別データグラフ2（曲輪数他）	150
第167図	地域別データグラフ3（堀長さ他）	151

1-3 地域、時期、城・城主クラス別特色

第168図	地域、時期、城・城主クラス別曲輪数	157
第169図	地域、時期、城・城主クラス別曲輪面積	158
第170図	地域、時期、城・城主クラス別堀数	159
第171図	地域、時期、城・城主クラス別堀・土塁長さ	160
第172図	地域、時期、城・城主クラス別特殊構造	161
第173図	地域、時期、城・城主クラス別地名	162

2-1 障子堀の分類と編年

第174図	障子堀分類模式図	185
-------	----------	-----

2-2 地下式坑のデータ分析

第175図	地下式坑主室面積	208
第176図	地下式坑深さ	209

第177図	地下式坑段差	209
3-2 千葉県および周縁の土器研究史		
第178図	所収遺跡位置図	221
3-3 所収遺跡の概説と出土土器		
第179図	文脇遺跡	222
第180図	外箕輪遺跡	223
第181図	下ノ坊遺跡B地点	224
第182図	天神前遺跡	224
第183図	荒久遺跡	226
第184図	台遺跡	227
第185図	神田遺跡	227
第186図	真里谷城跡	228
第187図	椎津城跡	229
第188図	久留里城跡	229
第189図	村上遺跡	230
第190図	野乃間古墳	230
第191図	富津陣屋跡	231
第192図	飯野陣屋跡	232
第193図	岩川遺跡	232
第194図	神田山第Ⅲ遺跡	233
第195図	山室城跡	233
第196図	田向城跡	234
第197図	一宮城城之内遺跡	235
第198図	大多喜城跡	236
第199図	山中台遺跡	236
第200図	古宿・上谷遺跡	237
第201図	上宿遺跡	238
第202図	長倉宮脇遺跡	239
第203図	西屋敷遺跡	239
第204図	千葉城跡	240
第205図	廿五里城跡	241
第206図	生実城跡	241
第207図	高品城跡	242
第208図	南屋敷遺跡	243
第209図	井戸向遺跡	243
第210図	黒ハギ遺跡	244
第211図	根木内遺跡第4地点	244

第212図	小金城跡	245
第213図	鹿島前遺跡	246
第214図	三輪ノ山第Ⅲ遺跡	246
第215図	花前Ⅱ-1遺跡	247
第216図	駒井野西ノ下遺跡	247
第217図	小林城跡	248
第218図	高岡大福寺遺跡	249
第219図	駒井野荒追遺跡	250
第220図	北ノ作遺跡	250
第221図	池ノ尻館跡	252
第222図	和良比堀込城跡	253
第223図	臼井城跡	254
第224図	本佐倉城跡	256
第225図	長勝寺脇館跡	256
第226図	佐倉城跡	258
第227図	烏内遺跡	260
第228図	南広遺跡	260
第229図	弥勒東台遺跡	261
第230図	曲輪ノ内遺跡(1次)	261
第231図	内野遺跡	262
第232図	篠本城跡	263
第233図	神代夏方遺跡	264
第234図	吉原三王遺跡	265
第235図	大六天遺跡	266
第236図	大堺・塔ノ前遺跡	267
第237図	馬洗城	268
第238図	綱原屋敷跡遺跡	268
第239図	久井崎城跡	269
第240図	高岡陣屋跡	270
第241図	守谷城跡	271
第242図	葛西城(1~20)、柴又帝釈天遺跡(21~23)、上千葉遺跡(24~28)	273

3-4 土器編年

第243図	カワラケ(安房・君津・市原)	281
第244図	カワラケ(山武・長生・夷隅)	282
第245図	カワラケ(千葉・八千代)	283
第246図	カワラケ(印旛(1))	284
第247図	カワラケ(印旛(2))	285

第248図	カワラケ (香取・海上・匝瑳)	286
第249図	カワラケ (東葛飾・守谷城・葛西城)	287
第250図	カワラケ (全県下)	288
第251図	内耳土器・土器播鉢 (上総)	293
第252図	内耳土器・土器播鉢 (千葉・八千代・東葛飾)	293
第253図	内耳土器・土器播鉢 (印旛)	294
第254図	内耳土器 (香取・海上・匝瑳)	294
第255図	土器播鉢・土釜 (香取・海上・匝瑳)	295
第256図	内耳土器 (佐倉城)	296
第257図	内耳土器 (印旛・香取)	297
第258図	内耳土器 (上総)	298
第259図	内耳土器 (東葛飾)	299
第260図	両角分類図	300
第261図	深鉢型土器	302

表目次

序-2 城館をめぐる房総の中近世史

第1表	千葉県内中近世城館関係年表	12
第2表	戦国末期房総の勢力分布	16
1-1 データについて		
第3表	千葉県内中近世城館跡 構造・地名・時期等データ	44
1-2 地域別特色		
第4表	千葉県内中近世城館跡構造等 地域別データ集計	148
1-3 地域、時期、城・城主クラス別特色		
第5表	千葉県内中近世城館跡構造等 地域、時期、城・城主クラス別データ	155
2-1 障子堀の分類と編年		
第6表	全国の城館検出障子堀形態	187
第7表	障子堀の出現時期 (案)	188
2-2 地下式坑のデータ分析		
第8表	地下式坑一覧	196
第9表	地下式坑出土遺物	206
第10表	地下式坑検出遺跡一覧	207
3-3 所収遺跡の概説と出土土器		
第11表	所収遺跡一覧	275

3-5 まとめと課題

第12表 近世城館跡・陣屋跡の調査経歴	308
---------------------------	-----

付 文献目録

第13表 文献目録①（自治体史）	312
第14表 文献目録②（雑誌・定期刊行物）	313
第15表 文献目録③（発掘・測量調査報告書）	320
第16表 文献目録④（単行本）	325
第17表 文献目録⑤（第3章参考論文）	330

図版目次

図版 1

1. 松戸市小金城跡 金杉口畝状空堀
2. 印西市小林城跡 I 郭虎口門跡

図版 2

1. 印西市小林城跡 II 郭虎口門跡（I期）
2. 印西市小林城跡 II 郭虎口門跡（II期）

図版 3

1. 四街道市館ノ山遺跡 航空写真
2. 四街道市館ノ山遺跡 台地整形区画内

図版 4

1. 四街道市北ノ作遺跡 航空写真（台地上）
2. 四街道市北ノ作遺跡 航空写真（斜面部）

図版 5

1. 四街道市北ノ作遺跡 航空写真（真上から）
2. 四街道市北ノ作遺跡 斜面部

図版 6

1. 四街道市和良比堀込城跡 近景
2. 酒々井町長勝寺脇館跡 航空写真

図版 7

1. 千葉市高品城跡 航空写真
2. 千葉市生実城跡 番後台地区畝堀

図版 8

1. 千葉市千葉御茶屋御殿跡 航空写真
2. 大栄町久井崎城跡 航空写真

図版 9

1. 光町篠本城跡 航空写真
2. 芝山町田向城跡 航空写真

図版10

1. 横芝町坂田城跡 航空写真
2. 長南町岩川館跡 航空写真

図版11

1. 木更津市笹子城跡 北端部 航空写真
2. 富津市造海城跡 航空写真

図版12

1. 富津市富津陣屋跡 航空写真
2. 鴨川市西郷氏館跡 航空写真

中近世城館跡の構造と特質

— 重要遺跡確認調査の成果と課題 3 —

はじめに

資料部長 阪田正一

財団法人千葉県文化財センターは、昭和49年に創立以来、埋蔵文化財の発掘調査及びこれに関連する研究事業・普及事業を主要な業務として実施している。研究活動については、発掘調査の現場で、また、報告書の作成過程でと、日々の業務の中でも行われていると言えるが、センターとして共通したテーマのもとに共同研究を継続して実施しており、その成果は『千葉県文化財センター研究紀要』として逐次刊行してきたところである。

『研究紀要』は、文字どおり当センター職員の研究成果を世に問うものであり、昭和51年に第1号を刊行して以来号を重ね、本書で20号を数えるに至った。この間、昭和61年3月に創立10周年記念論集（第10号）を、平成7年1月に創立20周年記念論集（第16号）を、それぞれ論文集として刊行した以外は共通テーマを設定したシリーズとして刊行している。以下、各シリーズのテーマと目的、研究内容について記しておく。第1期（第1号～第5号）は、昭和50年度から55年度にかけて、「考古学から見た房総文化の解明」という主題のもとに資料の集成を行い、原始古代における房総地域の文化について、時代ごとに解明することを試みた。第2期（第6号～第9号、第11号）は、「自然科学の手法による遺跡・遺物の研究」というテーマで、自然科学的分析方法の考古学分野への応用に関する問題について研究し、その成果を昭和56年度から61年度にかけて刊行した。第3期（第12号～第15号）は、「生産遺跡の研究」をテーマとして、生産・流通・消費に関する諸問題について、考古学のみならず様々な視点から検討を加え、昭和62年度から平成6年度までに4冊を刊行した。また、共通テーマによるシリーズとは別に、平成2年度から7年度にかけては「県内の青銅製品の集成と分析」をテーマに未着手であった青銅製品の成分分析等の共同研究を実施し、平成8年度にはその成果として第17号を刊行した。第18号からは、現シリーズである「重要遺跡確認調査の成果と課題」というテーマのもとに、第4期として共同研究を開始した。

当センターでは、昭和56年度以来、千葉県教育委員会からの委託を受け、県内に所在する古代寺院跡や中近世城館跡、貝塚、古墳等重要なものを対象とする国庫補助事業「重要遺跡確認調査」を継続して実施してきた。調査成果については個別の報告書として年度ごとに刊行してきたが、調査結果の取りまとめと成果の集成作業については、これまでにセンターの事業として実施する機会がなかった。そこで、重要遺跡確認調査の成果を基礎として県内の同種の遺跡をも併せて検討することを目的に「重要遺跡確認調査の成果と課題」という共通テーマに基づいて、平成5年度から共同研究を開始することになった。平成9年度にその成果の第1冊目として「古代寺院跡確認調査事業」の成果に基づく「古代仏教遺跡の諸問題」を、平成10年度には第2冊目として「県内主要貝塚確認調査事業」の成果に基づく「県内主要貝塚の研究」として刊行した。本書は第3冊目として「県内主要城跡確認調査事業」の成果に基づく「房総の中近世城館跡の構造と特質」として刊行するものである。

千葉県教育委員会は、県内の中・近世遺跡の実態を把握するために、昭和45・46年度に分布調査を実施し、その成果を『千葉県中近世遺跡目録』1970・1971として刊行している。また、昭和55年度から保存策

はじめに

を講ずるための資料を得ることを目的に、重要度の高いものを選び、測量調査及び確認調査を開始し、平成9年度まで継続され、『千葉県中近世城跡研究調査報告書』を18冊刊行している。当センターは、昭和56年度から平成7年度まで15年にわたり調査を実施している。なお、昭和55年度は明治大学教授小室栄一を団長とする佐貫城跡・本佐倉城跡発掘調査団によって両城跡が調査され、佐貫城跡の最北端部において石垣の基底部分とピットを伴う土壇版築遺構を検出するなどの成果を得ている。平成8・9年度は千葉県立関宿城博物館によって実施されている。

調査は、航空測量を中心とし、補足的に地上測量によって城館跡の特徴を図化することによって、城館跡の詳細を記録することが可能となり、従前の城館跡研究で一般的であった歩測による縄張図や簡易測量に対して、格段に正確な図面が作成され、それに基づいた概念図も付けられた。また、各城跡100m²程度のトレンチによる確認調査であったが、大規模造成の様子把握、建物跡等の遺構の検出、中世遺物の出土等、多くの成果を得ることができた。大規模造成が窺える城館跡としては、東金市に所在する東金城跡においてII郭に設定したトレンチ調査によって、I郭の直下に検出した空堀が従来の認識を改めることとなった。建物跡等の遺構を検出した城館跡としては、富浦町に所在する岡本城跡において凝灰質砂岩の岩盤を掘り込んだ大規模な掘立柱建物跡をIb郭において検出し、天守閣に相当する高層建物の存在を推定することが可能となった。特徴的な遺物を出土した城館跡としては、市原市に所在する椎津城跡において、主郭部分に配置したトレンチから15世紀後半から16世紀後半に相当する舶載陶磁器、瀬戸・美濃窯系陶器をはじめ土師質土器を大量に検出した。また、室町時代前期の特徴をもった宝篋印塔を検出するなど、かつて出土した板碑との関係からも貴重な資料を得ることができたのは大きな成果であった。

千葉県教育委員会では中近世城跡研究調査を進める一方、平成2年度から7年度までの6か年計画で、中近世城館跡の詳細分布調査を実施し、『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告』I・IIを刊行し、分布状況をはじめ、主要な城館跡181か所について測量図とその詳細が記述され、併せて文献一覧が付されるなど遺跡の保護対策資料としてだけでなく中近世城館跡の研究に大きく寄与したと言える。

本書は、千葉県教育委員会が行ってきた中近世城館跡に関する一連の事業成果に基づいているが、その中心となっているのは15年間にわたり実施してきた中近世城跡研究調査に伴う成果であるとともに、当センターをはじめ、県内調査機関が実施した開発に伴う発掘調査成果を可能な限り取り上げるように心掛けた。中近世城館跡研究は古く江戸時代から始まったもので、縄張り研究が盛んに行われたが、近年は発掘調査例の増加に伴い、その調査成果に基づいた考古学的研究が主流となっている。千葉県は、特に北部の城館跡は台地上に立地するため、昭和40年代というかなり早い時期から開発の対象となっていたため、全国的にも中近世城館跡の調査数が突出して多く、貴重な研究や調査成果を提供し注目されている。一方、平成10年に本佐倉城跡が県内の城館跡として初めて国の史跡に指定され、中近世の城館跡に対する認識が深まった。本書はこのような状況を踏まえて、平成8年度から10年度までの3か年を費やした共同研究として実施してきた成果をまとめたもので、千葉県内外を問わず、今後の中近世城館跡研究にいささかなりとも役立つことがあれば幸いである。本書の執筆分担は井上哲朗、豊田秀治、鳴田浩司の三名である。文献目録は三名が共同で作成した。本書の編集作業に当たっては資料部資料課主任研究員渡邊智信が行った。

最後に、共同研究から本編をまとめるまでの間において、関係各位からは多大なる御指導、御協力をいただいた。ここに御芳名を録し、深く感謝の意を表するものである。

<協力機関>

豊島区教育委員会、つくば市教育委員会、小田原市教育委員会、松戸市教育委員会、四街道市教育委員会、千葉市教育委員会、富津市教育委員会、鴨川市教育委員会、守谷町教育委員会、酒々井町教育委員会、芝山町教育委員会、八戸市博物館、八王子市郷土資料館、茂原市郷土資料館、市浦村歴史民俗資料館、浪岡町中世の館、浪岡町史編纂室、豊島区遺跡調査会、財団法人茨城県教育財団、財団法人千葉県史料研究財団、財団法人千葉市文化財調査協会、財団法人印旛郡市文化財センター、財団法人香取郡市文化財センター、財団法人東総文化財センター、財団法人山武郡市文化財センター、財団法人君津郡市文化財センター、財団法人総南文化財センター、出光美術館

<協力者> (五十音順、敬称略)

石川 功、猪俣佳二、内野 正、小高春雄、小野正敏、金沢 陽、木内達彦、喜多圭介、北澤 滋、工藤清泰、榊原滋高、佐々木浩一、鈴木裕子、諏訪間順、高橋健一、滝川恒昭、谷口 栄、玉井輝男、津田芳男、戸井晴夫、土井義夫、遠山成一、外山信司、中井さやか、白田正子、橋口定志、藤澤良祐、星 龍象、馬淵和雄、水本和美、道上 文、道澤 明、築瀬裕一、山口剛志、山本賢一郎

<担当者>

平成8年度～平成10年度 鳴田浩司、井上哲朗、豊田秀治

<年度別調査城館跡>

昭和155年度 佐貫城跡(富津市)・本佐倉城跡(酒々井町)
昭和156年度 本納城跡(茂原市)・森山城跡(小見川町)
昭和157年度 大友城跡(東庄町)・坂田城跡(横芝町)
昭和158年度 稲村城跡(館山市)・臼井城跡(佐倉市)
昭和159年度 大崎城跡(佐原市)・万喜城跡(夷隅町)
昭和160年度 佐是城跡(市原市)・岡本城跡(富浦町)
昭和161年度 飯櫃城跡(芝山町)・籾木城跡(干潟町)
昭和162年度 飯野陣屋跡(富津市)・山崎城跡(佐原市)
昭和163年度 東金城跡(東金市)・城山城跡(千葉市)
平成元年度 椎津城跡(市原市)・大堀城跡(八日市場市)
平成2年度 中島城跡(銚子市)・鹿渡城跡(四街道市)
平成3年度 峰上城跡(富津市)
平成4年度 鶴ヶ城跡・亀ヶ城跡(岬町)
平成5年度 土気城跡(千葉市)・池和田城跡(市原市)
平成6年度 造海城跡(富津市)
平成7年度 真名城跡(茂原市)
平成8年度 助崎城跡(下総町)
平成9年度 増尾城跡(柏市)・佐津間城跡(鎌ヶ谷市)

序 章

井上哲朗

第1節 はじめに

中近世の城館跡研究は、文献史学・縄張り構造論・歴史地理学・考古学等の諸分野の総合的研究が必要であるが、本書では、主に考古学の立場からの視点を中心に房総の中近世城館跡の研究を試みたものである。

序章は、城館を中心とした千葉県の中近世史と城館跡研究史を概観したものである。

第1章は、縄張り構造を中心に地名・発掘成果等を数値化したデータベースを作成して、その統計処理を試みることによって、地域・時期、また、城及び城主の階級（クラス）の差がどのように現れるかを試みた。縄張り構造の比較による研究手法は、江戸時代の軍学から近代の軍事目的を経て現在に受け継がれるものであるが、城館を遺構「もの」として扱う性格から、広い意味では考古学の中に含まれる分野と考えられる。その資料となるのが、歩測によって描かれた縄張図（概念図）だけでなく、等高線によって表示する地形測量図であり、千葉県教育委員会によって実施されてきた県内中近世城館跡の測量調査もその一つである。従来、城郭研究者によって、城館の縄張り構造の地域論・発展論等が全国各地で行われてはいるが、漠然としたイメージであって、対象とする遺構の規模があまりに大きいために、その数量的計測には膨大な労力が必要であり、縄張り構造全体の様相の比較や織豊系城郭の虎口等の部分的な分類や編年が行われてきたにすぎなかったと言えよう。県内でもおおよその傾向は、城郭研究者の中では周知されているが、対象とする遺構の規模が大きいために数量的処理はなされてこなかった。本稿でも県内全ての城館跡を対象としたものではなく、縄張図（概念図）や測量図が公表されているものに限った。なお、「縄張図」と「概念図」はほぼ同様の意味であるが、恣意的な想像図ではなく、構造を地表面地形から推測する意味で、本章では「概念図」を使用することにしたい。

地表面観察で作成される概念図や測量図は、実際の発掘調査の結果、埋没した空堀や斜面の新たな小曲輪が必ず検出される。よって、データベースも理想としては、全面発掘調査された資料を基にするべきであるが、現状としては、そうした例は少なく、発掘調査は城域の一部にすぎない。ただ、地表面観察の状況でも発掘調査後とそれほど変わらないものは、曲輪数・曲輪面積・全体的な曲輪や空堀の配置（縄張り構造）等であり、これらは、基礎データとして使えるものである。

千葉県においては、1990年代前半、千葉県教育委員会によって千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査が行われ、多くの概念図・測量図が掲載された報告書が1995年・1996年に刊行されたが、本章はまずそれを基本資料として、他の文献（発掘調査等報告書・論文・単行本等）の資料を加えたものであり、意義の一つとして詳細分布調査報告書に掲載されなかった“まとめ”の意味も持たせている。

第2章は、発掘調査の結果、検出された遺構について考察したもので、障子堀と地下式坑について、分析等を試みたものである。

障子堀は、従来、小田原城や山中城等、後北条氏関係の城郭で多く造られるものとされていたが、近年全国的に城館跡の発掘調査が進み、東北から近畿地方まで、多くの形態の障子堀（堀内障壁）が検出

され、後北条氏関係の遺構とは言えなくなってきた。千葉県内でも、15世紀前半から障子堀を有する城館跡の発掘調査成果が多く蓄積されてきた。第1節では、多くの形態を有する障子堀の分類と編年試案を提示したものである。なお、本稿の概略については、井上が既に発表したものであるが、ここに加筆修正したものを掲載することにした。^{②-376}

地下式坑は、中世城館のみならず、台地上の集落・墓地等の遺跡でも多く検出されるもので、多くは台地整形区画に伴う。城館跡の曲輪も台地整形の一種であり、築城以前に墓域であった城館も多い。その性格については、直接伴う遺物が少ないことから、多くの事例があるにもかかわらず諸説があり、まだ解決されていない。墓域に伴う例が多いことから墓の一種であるという説、江戸期の地下室に構造が類似することから倉庫だという説に大きく分かれる。総体的な所見からすれば、墓域検出のものは、直接遺体が埋葬される例が少ないことから、土坑墓あるいは火葬墓に葬られる前に、一時的に遺体を安置しておく施設ではないかと考えられる。第2節では、城館と集落・墓地で検出された地下式坑の差があるか分析を試み、城館内の曲輪の使われ方としての検討資料の一つを提示したものである。

第3章は、房総全体の、主に城館跡出土の遺物について、全体的様相を概観すると共に、東国内において研究が特に進んでいるとは言い難い千葉県の在地産土器（カワラケ・土器揃鉢・内耳土器など）の編年を試みたものである。カワラケは、本来、儀式で使われたものと考えられ、中世遺跡では全国的にも集落や墓地遺跡よりも城館跡で多く出土が見られる。従来、房総では、貿易陶磁器や瀬戸・美濃産、常滑産等の搬入品も多くこれらの編年に頼っていた部分がある。しかし、文献上、また発展した縄張り構造上、16世紀末まで確実に機能した筈の城館跡で当概期の瀬戸・美濃製品があまり出土しない例がある。瀬戸・美濃製品の供給量の減少或いは常駐しなくなった城館の機能の差であろうか、それを明らかにするためにも、在地産土器の編年作業はその基礎となるものであり、第1章の城館全体や第2章の遺構等の研究上、その時期確定のためにも今後必要な作業であると考えられる。

文献目録は、千葉城郭研究会による『千葉城郭研究』第1号（1989年）～5号（1998年）掲載の文献目録を基礎として修正・補完したものであり、基本的には平成11（1999）年度上半期内で入手できたものとした。^{②-178,241,283,327,373}

なお、本書の作成に当たっては、多くの方々に協力を得ており、その概略を記して深甚なる感謝の意を表したい。まず、千葉県内における中近世城館跡の発掘資料に関しては、佐倉城跡を佐倉市教育委員会の高橋健一氏・猪股圭二氏に、本佐倉城跡・長勝寺館跡・大堀館跡を酒々井町教育委員会の木内達彦氏に、篠本城跡を財団法人東総文化財センターの道澤明氏に、長生・市原地域の城館跡を千葉県立総南博物館の小高春男氏にそれぞれ御教示をいただいた。

次に県内の中近世遺跡発掘調査により出土した遺物に関しては、三輪ノ山遺跡出土資料を流山市教育委員会の北澤滋氏に、船橋市内の遺跡出土資料を船橋市郷土資料館の道上文氏に、印旛地域内の遺跡出土資料を財団法人印旛郡市文化財センターの喜多圭介氏に、千葉城跡・高品城跡・黒ハギ遺跡の出土資料を財団法人千葉市文化財調査協会の築瀬祐一氏に、長生地域内の遺跡出土資料を茂原市郷土資料館の津田芳男氏にそれぞれ御教示をいただいた。

次に千葉県周辺地域における中近世遺跡の発掘成果及び出土遺物を把握するため、茨城県内出土の近世土器を財団法人茨城県教育財団の白田正子氏、つくば市教育委員会の山本賢一氏に、土浦城跡出土のカワラケを土浦市上高津貝塚ふるさと歴史の広場の石川功氏に、真壁城跡出土のカワラケを真壁町歴史民俗資

料館の星龍象氏に、葛西城跡出土資料を葛飾区郷土と天文の博物館の谷口栄氏に、尾張藩江戸上屋敷跡の発掘成果を東京都埋蔵文化財センターの内野正氏に、鎌倉市内の遺跡出土資料を鎌倉考古学研究所の馬淵和雄氏にそれぞれ御教示をいただいた。

次に土器編年の作成に関しては、貿易陶磁器を国立歴史民俗博物館の小野正敏氏、出光美術館の金沢陽氏に、瀬戸・美濃陶器を財団法人瀬戸市埋蔵文化財センターの藤澤良祐氏に、近世陶磁器を豊島区教育委員会の橋口定志氏、豊島区遺跡調査会の鈴木裕子氏・中井さやか氏・水本和美氏にそれぞれ御教示をいただいた。

次に中近世城館跡に関する文献史料に関しては、印旛・千葉地域を財団法人千葉県史料研究財団の外山信司氏に、香取・海匝・山武地域を千葉県立佐倉東高等学校の遠山成一氏に、君津・安房地域を千葉県立船橋高等学校の滝川恒昭氏にそれぞれ御教示をいただいた。

最後に、県外の中近世遺跡及び城館跡の資料収集に関しては、根城跡を八戸市博物館の佐々木浩一氏に、浪岡城跡を浪岡町史編纂室の工藤清泰氏に、十三湊遺跡群を市浦村教育委員会の榊原滋高氏に、八王子城跡を八王子教育委員会の戸井晴夫氏に、小田原城跡を小田原市教育委員会の諏訪間順氏・山口剛志氏に、守谷城跡を守谷市教育委員会の玉井輝男氏にそれぞれ御教示をいただいた。

第2節 城館をめぐる房総の中近世史

本節では、従来の研究から導き出されている房総の中近世城館の変遷を歴史的背景を踏まえて概観するものである。その多くは、千葉城郭研究会編『千葉城郭研究』第1号(1989年)所収の「城郭からみた千葉県の中世史概説」を参考にしながら、その後の研究成果を追加したものである。^{②-178}

なお、千葉県内の中近世城館跡全体の分布傾向は第1図を、時代の流れは以下の本文と照らして第1表を参照されたい。

1. 平安時代後期

(1) 10世紀 この時期は、武士団の形成期にあたる。天慶2年(939)の平将門の乱を記した『将門記』によると、地方軍事貴族の拠点には「宅」・「営所」と呼ばれる居館であった。営所の周囲に「従類」の住む「小宅」が集まっていた。

(2) 11世紀 長元元年(1027)の平忠常の乱では、忠常の拠点は、伝承では大友城(東庄町)や大椎城(千葉市)とされてきたが根拠はない。大椎城の発達した縄張構造(第87図)は明らかに16世紀代であり、11世紀に忠常が拠点としたとすれば、居館は山の下にあった可能性がある。なお、『今昔物語集』からは、忠常が香取浦に面した居館に住して水運を掌握していたことがわかる。

2. 中世前期

(1) 12世紀 1180年に源頼朝が石橋山合戦に敗れ、安房国に上陸するが、『吾妻鏡』には、安房の在地領主である安西景盛の館、頼朝の滞在した「鷲沼御旅館」(習志野市)が、『源平闘諍録』には「千葉館」、千田判官藤原親政の「匝瑳之北条内山館」・「千田庄ノ次浦館」が登場する。

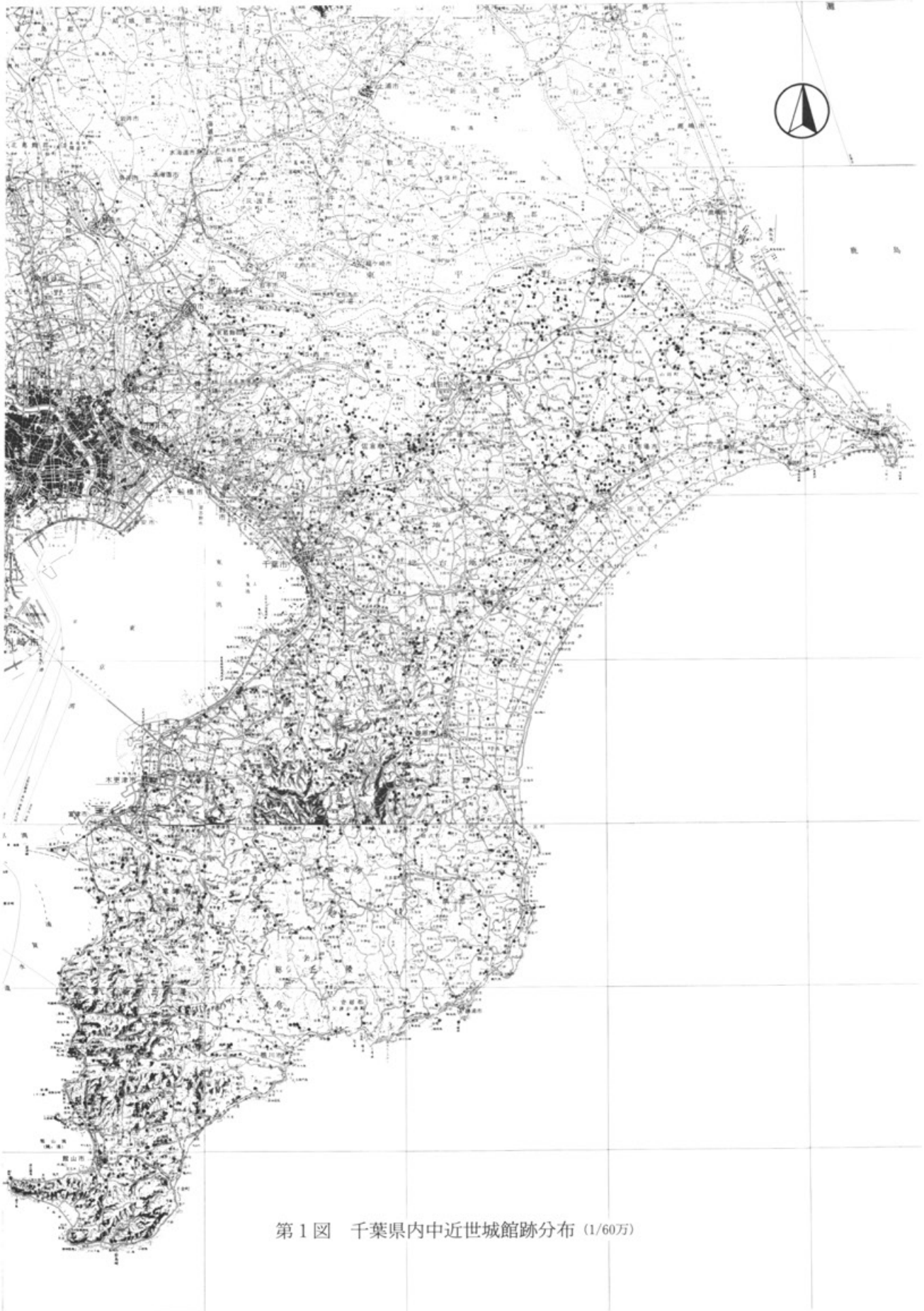
(2) 13世紀 千葉秀胤は、宝治元年(1247年)の宝治合戦で三浦氏側に属して北条氏に討たれたが、『吾妻鏡』によると、秀胤は本拠地の大柳館(長生郡睦沢町か)の「郭外」に炭や薪を積み上げて放火して自害した。これにより、大柳館に「郭」と「外」があり、「門」や「馬場」がり、その内部に「数十字の舎屋」が存在したことがわかる。なお、発掘調査では、四街道市池ノ尻館跡(第21図)・長南町岩川館跡(図版10-2)・鋸南町下ノ坊館跡(第153図)等の館跡はこの頃から機能していたことが判明している。

(3) 14世紀 南北朝の動乱期で、建武2年(1335)、相馬親胤と千田胤貞は「千葉楯」を攻撃し、この頃、千田庄(多古町周辺)では胤貞方と千葉介方が戦闘を行ない、「土橋城」・「大島城」・「並木城」が登場する(『金沢文庫文書』)。

なお、『延慶本平家物語』には、長寛元年(1163)三浦義明の嫡男の梶本義宗が「安房国長狭城責」を行っており、同書が著された14世紀初頭には既に「城」という言葉が使用されている。

3. 中世後期1(戦国期前半)

(1) 15世紀前半～中葉 室町幕府の関東行政機関である鎌倉府の長、鎌倉公方とその執事関東管領との関東をめぐる覇権争いの結果、応永23年(1416)に勃発した上杉禅秀の乱の後、禅秀派の残党による上総本一揆(応永25年(1418))が起きる。その一揆の拠点として「平之城」(市原市平蔵城か)・「坂水城」(大原町か)が登場する。



第1図 千葉県内中近世城館跡分布 (1/60万)

第1表 千葉県内中近世城館関係年表

世紀	元号	西暦	国内の主な事件等	旧下総国	旧上総国	旧安房国
10	天慶2	939	この頃、藤原純友の乱	平将門の乱。拠点は「宅」・「営所」(「水守の営所」・「石井の営所」・「石井の宿」)(『将門記』)		
	長元元	1027		平忠常の乱。伝承ではその拠点は太友城(東庄町)・大椎城(千葉市)、後忠常子孫が両総各地に武士団形成。有力者上総氏。		
11	永承6	1051	前九年の役			
	康平2	1059	後三年の役			
	保元元	1156	保元の乱			
	平治元	1159	平治の乱			
12	長寛元	1163				三浦義明嫡男堀本義宗が「安房国長狭城賣」を行う。(『延慶本平家物語』14世紀初頭)
	治承4	1180	源頼朝挙兵	「千葉館」(千葉市)・「鷲沼御旅館」(習志野市)・「匝瑳之北条内山館」・「千田庄ノ次浦館」(多古町)。下総国守護千葉常胤。	上総国守護上総介広常	源頼朝安房上陸。「安西景益の館」。この頃安房の在地領主は丸・安東・安西・神余氏等。以後、鎌倉幕府御家人。
	寿永2	1183			広常鎌倉にて誅殺。所領は和田義盛・千葉常秀に。	
	建久3	1192	源頼朝、鎌倉幕府開府			
13	建保元	1213	和田義盛の乱			
	承久3	1221	承久の乱			
	宝治元	1247	宝治合戦。三浦康村、北条時頼に討たれる。	千葉時常所領増生荘は足利義氏に。後、北条実時に。	三浦氏親戚千葉秀胤(上総千葉氏)・千葉時常、東・大須賀氏らに追われ、大柳館(睦沢町か)の郭外に火を放ち自害。「郭」・「門」・「馬場」・「数十字の舎屋」等存在。(『吾妻鏡』)	
	文永11	1274	文永の役	千葉介頼胤、九州で戦死。子胤貞継ぎ千田氏と称し、下総守護は貞胤に継承。		
	弘安4	1281	弘安の役			
14	元弘3	1333	鎌倉幕府滅亡			
	建武元	1334	建武新政、鎌倉府成立			
	建武2	1335		陸奥国小高城主相馬親胤・千田胤貞、「千葉城(楯)」攻撃のため、下総に侵攻。この頃、千田庄(多古町周辺)で胤貞方と千葉介方が戦う(「土橋城」・「大島城」・「並木城」登場。(『金沢文庫文書』))。		
	暦応元	1338	足利尊氏室町幕府開府			
15	明德3	1392	南北朝合一			
	応永23	1416	上杉禪秀の乱。関東管領上杉氏憲(禪秀)、鎌倉公方足利持氏に反抗。		この頃、上総国守護犬懸上杉氏。	
	応永25	1418			上総本一揆。一揆の本拠は「平之城」(市原市平蔵城か)・「坂木城」(大原町か)。	
	永享10~11	1438~39	永享の乱。室町幕府足利持氏を討つ。			
	永享12~13	1440~41		結城合戦。結城氏朝、持氏遺児を擁し挙兵。		
	嘉吉元	1441	嘉吉の乱			
	享徳3~5	1454~56	享徳の大乱。足利成氏古河城入部、古河公方成立。	成氏方原胤房、上杉方千葉介胤直を千葉城に襲い、胤直ら円城寺氏を頼って千田庄に逃亡。原氏、馬加康胤を立て多古・島岡城を攻撃し、胤直滅ぼす。他、東常縁馬加城攻撃。常縁武将浜春利東金城に拠る。胤直遺子市川城籠城。原信濃守拠点松戸城郭。	この頃、武田氏上総入部。武田信長、長南城(長南町)・真里谷城(木更津市)築城。	この頃、里見氏安房入部。
15	長祿元	1457	幕府、足利政知を関東に下す(堀越公方)。古河公方対堀越公方・関東管領上杉氏			
	応仁元~文明9	1467~1477	応仁・文明の乱			

世紀	元号	西暦	国内の主な事件等	旧下総国	旧上総国	旧安房国
	文明3	1471		足利成氏、佐倉の千葉孝胤頼る。(この頃までに千葉宗家、本佐倉城を拠点とする。)		
	文明4	1472		千葉・武田・里見氏、古河城攻撃。足利成氏を古河城に戻す。		
	文明10	1478		境根原の戦い(柏市)。太田道灌、千葉孝胤・原氏軍破る。		
	文明11	1479		太田資忠・千葉自胤、臼井城攻略。武田氏の長南城・真里谷城、海上氏の飯沼城も攻撃。		
	文明14	1482	古河公方と堀越公方(政氏対高基・義明)。	幕府方一時和解するが、上杉家内争乱(山内対扇谷)・足利家内争乱		
	明応4	1495	北条早雲・氏綱、小田原城入部。			
	永正9	1509		連歌師宗長、原胤隆の「小弓の館」訪問、千葉の妙見祭り等楽しむ。		
	永正14	1517		足利義明、原氏の小弓城(千葉市)攻撃し落城。弥富(佐倉市)も攻撃。小弓公方の成立。	足利義明、武田信保を助け、三上城(茂原市)攻撃。	
	永正16	1519			足利高基、義明下真里谷武田氏の椎津城(市原市)攻撃。	
	大永6	1526				里見夷堯、鎌倉攻撃。
	天文2 ~3	1533 ~34				里見義豊、正木大膳大夫・叔父夷堯を討つが、夷堯子息義堯および後北条・正木氏に反撃される。(天文の内乱)(稲村城(館山市)・滝田城(三芳村)・百首城(富津市))
	天文6	1537				真里谷真隆、峰上城・百首城(富津市)・「真里谷新地之城」(木更津市)で北条氏に通じ、足利義明・里見義堯、真隆攻撃。
	天文7	1538	古河公方足利晴氏、北条氏綱に義明攻撃依頼。	第一次国府台合戦(市川市)。(足利義明・里見義堯対北条氏綱・氏康、義明戦死。)		
	天文12	1543	鉄砲伝来		武田信茂の笹子城(木更津市)、北条氏と里見氏の攻防により落城	
	天文13	1544			里見・武田軍、中尾城(木更津市)攻略。正木時茂、小田喜城(大多喜町)攻略。	
	天文21	1552	足利晴氏、義氏に古河公方譲る。			
	天文22	1553			上総・安房に北条氏に内応した内乱。妙本寺住職日我、金谷城(富津市)に避難。同城攻撃される。	
	弘治3	1557		千葉胤富、千葉介を継ぎ、森山城(小見川町)から本佐倉城(酒々井町)に移る。		
	永禄元	1558		北条氏康、足利義氏家臣梁田晴助と盟約し、義氏、関宿城(関宿町)に移る。		
	永禄3	1560	上杉謙信関東へ南下。		北条氏康、里見義堯の久留里城の向かいに「新地」を取り立てる。	
	永禄4	1561	上杉謙信小田原城を囲む(房総諸氏も参加)。鎌倉で関東管領職受ける。	古河公方義氏、関宿城脱出し高城氏の小金城(松戸市)、さらに江戸城へ。足利藤氏古河城入部。		
	永禄5	1562			足利藤氏、古河城脱出し里見氏を頼る。	
	永禄6	1563	武田・北条軍北関東攻撃。			
	永禄7	1564	上杉謙信関東侵入。里見義弘と共に北条氏康攻撃を謀る。	第二次国府台合戦(市川市)。(里見義弘方対北条氏康)、里見方敗退。	正木時忠、北条氏と通じ、一宮城(一宮町)攻撃、後海上・香取郡へ侵攻。小見川城(小見川町)落城。	
16	永禄8	1565			正木時茂の小田喜城・土気酒井氏の土気城(千葉市)、北条氏政方(原・臼井・東金酒井氏)に攻撃受ける。「宿城」・「善生寺口」・「金谷口」で攻防戦。	
	永禄9	1566		上杉謙信、下総侵攻。原胤貞の臼井城包囲。「実城堀一重」まで攻められ		
	永禄10	1567		里見氏、松戸市・市川市・臼井まで侵攻。		三船山(君津市)の合戦。里見義弘方対北条氏。里見方勝利。
	永禄12	1569 ~71	越相一和(上杉・北条同盟)			
	元龜2	1571 ~82	甲相一和(武田・北条同盟)			

世紀	元号	西暦	国内の主な事件等	旧下総国	旧上総国	旧安房国
16	天正元	1573	室町幕府滅亡	北条氏政、梁田氏の関宿城攻略。 「作倉領」に北条氏の禁制発布。	土気城酒井胤治、北条方に属す。	
	天正2	1574				
	天正3	1575				
	天正4	1576	織田信長安土城築城			
	天正5	1577				
	天正6 ～8	1578 ～80			北条氏政、上総侵入。土気・東金・両酒井氏・土岐氏(万喜城)ら北条方に属す。この頃、有木城(市原市)、北条氏の上総攻略の「惣番手城」として機能。	
	天正9	1581			里見義弘死。後家臣団の内紛(義頼方対梅王丸方)。義頼は岡本城(富浦町)、梅王丸方は佐貫城・百首城(富津市)・久留里城・千本城(君津市)等。	
	天正10	1582	本能寺の変		小滝(小田喜)城主正木憲時、里見義頼に反し北条方に属し、義頼正木氏を滅ぼす。後、義頼次男を正木大膳として正木氏を復活させる。	
	天正14 ～15	1583 ～84	豊臣秀吉、関東に「惣無事令」発布。			里見義頼、北条氏と結ぶ。
	天正18	1590	秀吉軍小田原城攻略し北条氏滅亡。徳川家康江戸入部。	北条方の諸氏、小田原城籠城戦へ。下総・上総の諸城、秀吉軍浅野・本多らにより落城。両総に家康家臣団配置される。一万石以上の家臣の居城は以下の通り。 矢作城(鳥居)・臼井城(酒井)・本 大佐倉城(三浦)・岩富城(北条)・関須賀)・佐貫城(内藤)・鳴戸城宿城(松平)・芦戸城(木曾)	大多喜城(本多)・久留里城(大須賀)・佐貫城(内藤)・鳴戸城(石川)	里見氏、豊臣方に属す。里見義頼、安房一国のみ与えられる。館山城築城。
天正19	1591		下総・上総国に検地。			
文禄元	1592	文禄の役。秀吉軍朝鮮出兵。この頃、肥前(長崎県)に名護屋城、朝鮮に倭城築城。				
慶長2	1597	慶長の役。秀吉軍朝鮮再出兵。				
慶長5	1600	関ヶ原の戦い。				
17	慶長8	1603	家康、江戸幕府開府。	臼井城(臼井藩酒井家次)廃城。 岩富城(岩富藩北条氏重)廃城。		里見氏伯耆(鳥取県)へ転封。館山城破却。
	慶長9	1604				
	慶長18	1613				
	慶長19	1614				
	元和元	1615	大坂冬の陣・夏の陣。豊臣氏滅亡。一国一城令・武家諸法度・禁中並公家諸法度等制定。			
	元和3	1617		佐倉藩土井利勝、佐倉城築城。		
	寛永2	1625		生実藩、森川陣屋築館。		
	寛永14	1637	島原の乱			
	寛永16	1639	鎖国開始			
	慶安元	1648			飯野藩、飯野陣屋構える。	
18	享保年間	1716 ～35	享保の改革他			
	安永7	1778	ロシア船蝦夷地来訪			
	天明元	1781				館山藩再立藩(稲葉氏)。
19	文政8	1825	外国船打払令			
	文政9	1826			一宮藩成立。	
	嘉永3	1850			請西藩成立。貝淵陣屋築く。	
	安政元	1854	日米和親条約			
	安政5	1858	日米修好通商条約			
	慶応3	1867	大政奉還			
	明治元	1868	明治維新			
	明治2	1869	版籍奉還			
明治4	1871	廃藩置県	各城廃城。	松尾藩、松尾城築城開始、同年各城廃城。	各城廃城。	

その後も鎌倉府を古河に移した古河公方と関東管領との争いが続き、享徳4年(1454)足利成氏方の原胤房は上杉方の千葉介胤直を千葉城に襲い、胤直らは円城寺氏を頼って千田庄に逃げるが、原胤房は馬加康胤と共に多古・島両城を攻撃している。また、この大乱では、東常縁が攻撃した馬加城(千葉市)、常縁の武将浜春利の拠った東金城(東金市)、胤直の弟胤賢の遺子実胤・自胤(後の武蔵千葉氏)の籠もった市川城(市川市)、原信濃守の「松戸城郭」等が登場する(享徳の大乱)。

(2) 15世紀後半 享徳の大乱の後、文明3年(1471)には、足利成氏が長尾景春に追われ佐倉の千葉孝胤を頼って来ており、この頃までには千葉宗家が本佐倉城(酒々井町)に本拠を移していたことがわかる。文明10年(1478)には、上杉氏の家宰太田道灌は、境根原(松戸市)の戦いで千葉孝胤・原氏の連合軍を破り、半年に及ぶ攻防戦で臼井城を落城させ、攻撃軍は長南城(長南町)・真里谷城(木更津市)に拠る武田氏、飯沼城(銚子市)の海上氏も攻撃している。

(3) 15世紀末～16世紀前葉 この頃、下総中央部では、臼井城を本拠とし鹿島川の西岸地域(臼井庄・現佐倉市西部～四街道市)に勢力を持っていた臼井氏一族が千葉宗家に取り込まれ、臼井城は原氏に奪取され、原氏は生実城と臼井城を本拠とする。永正9年(1509)、連歌師宗長は原氏の「小弓の館」を訪れ、千葉の妙見祭り等を楽しんでいる(『東路の津登』)。

享徳の大乱を契機として房総に入部したと考えられる武田氏と里見氏は、この頃史料上に登場してくる。

武田氏によって古河公方に対向して擁立された足利義明は、永正14年(1517)三上城(茂原市)、小弓城(千葉市)を攻めて原氏を追い出し小弓公方として小弓城に入部した。対する足利高基は、永正16年(1518)義明下の真里谷武田氏の椎津城(市原市)を攻撃している。

里見氏は、義通の代に安房国を掌握したと見られ、子義豊は16世紀初め頃に対岸を渡海して鎌倉を攻撃した。天文2年(1533)、重臣正木氏をめぐる一族内の対立が起こる(天文の内乱)。この内乱の舞台とした城館は、稲村城(館山市)、滝田城(三芳村)、百首城(富津市)が推測されている。

天文4年(1535)、古河公方足利高基死去後、それを継承した晴氏と義明の抗争へ移るが、晴氏は後北条氏を頼り房総へも進出してくる。また、武田氏内部も内乱が起こっており、里見氏がこれに介入した結果、後北条氏と里見氏が衝突し、椎津城(市原市)・「百首之要害」(造海城)(富津市)・「真里谷新地之城」(木更津市)で攻防戦が行われている。この里見氏の反撃によって、原氏は岩富城や小弓城で討たれている。天文7年(1538)、義晴方の後北条氏と義明方の里見氏が国府台で戦い(第1次国府台合戦)、義明は討ち死にし、里見氏は敗走する。以降、後北条氏の房総への影響力が強まる。

その結果、北条氏との関係を深めた原氏は小弓城に復帰し北に生実城を築き、高城氏は小金城(松戸市)に拠り、後北条氏の房総進出の拠点となる。千葉宗家では天文15年(1546)に北条氏康の女婿利胤が継いだ。また、真里谷武田氏は後北条氏寄りの信隆が宗主となるが、里見氏は国府台合戦で敗走しながらも逆に義明の死により西上総へ進出する。真里谷武田氏一族内の乱によって、笹子城・中尾城(木更津市)が里見氏の介入で落城し、里見義堯は佐貫城(富津市)に子義弘を置いた。なお、東上総では、里見氏重臣でもありながら半ば独立的な正木氏が勝浦城(勝浦市)・小田喜城(大多喜町)を本拠とし、土気・東金には酒井氏が領国を形成していた。

4. 中世後期2(戦国期後半)(第2表、第2図)

(1) 16世紀後半 第1次国府台合戦以降、後北条氏と里見氏の攻防が繰り返されるが、この頃、里見氏方

第2表 戦国末期房総の勢力分布

城 名	関東八州諸城覚書1	関東八州諸城覚書2	北条氏人数覚書	騎馬数	城主の系列	豊臣期の在城者
結木の城（下総・結城城） 山川の城（同・山川城）	結木晴友 （結城晴朝）	結城晴友 （結城晴朝） 山川右衛門尉 （山川晴重）			結城氏	結城秀康10.1 山川晴重・朝貞
（同・古河城） 水見城（同・水海城） 関宿（同・関宿城） 栗橋（同・栗橋城） （同・守谷城）	北条陸奥守（氏照） 同 同	北条陸奥守（氏照） 同 同	北条陸奥守（氏照） 惣馬（相馬）小次郎	4500騎 の内 100騎	北条氏 （古河公方）	小笠原秀政3.0 松平康元2.0 菅沼定政1.0
さくら（同・本佐倉城） 白井城（同・白井城） こかね井城（同・小金城） ふ川の城（同・布川城） わう大ノ城（同・大台城） かふらき城（同・鎭木城） 矢はきの城（同・矢作城） （同・小見川城） （同・多古城） （同・岩富城） （同・山崎城） （同・蘆戸城）	千葉助（千葉重胤） 原大炊助 高木（高城胤則） 十嶋（豊島三河守） 板野刑部大夫 蕪木駿河守 小窪（国分）五郎	千葉助（千葉重胤） 原大炊助 高木（高城胤則） 外嶋（豊島三河守） 坂野形（刑）部大夫 蕪木駿河守 小窪（国分）五郎	千葉介（重胤） 原大炊助 高木（高城胤則） 十嶋（豊島三河守） 板野形部大夫 蕪木駿河守 小窪（国分）五郎	3000騎 2500騎 700騎 150騎 150騎 300騎 500騎	（千葉氏）	三浦義次1.0、の ち武田信吉4.0 酒井家次3.0 武田信吉3.0 鳥居元忠4.0 松平家忠1.0 保科正光1.0 北条氏勝1.0 岡部長盛1.2 木曾義昌1.0
とうかねの城（上総・東金 城） とけの城（同・土気城） （同・鳴渡城）	坂井右衛門尉 （酒井政辰） 同左衛門佐 （酒井康治）	坂井左衛門尉居城 （酒井政辰） 坂井伯耆（守）居城 （酒井康治）	坂井右衛門尉 （酒井政辰） 坂井左衛門尉 （酒井康治）	150騎 300騎	（酒井氏）	石川康通2.0
長南之城（同・長南城） 池和田之城（同・池和田） かつみの城（同・勝見城）	長南刑部大夫 （武田豊信） 同 同	竹田兵部太輔居城 （武田豊信） 竹田兵部抱 同		1500騎	（武田氏）	
まん木ノ城（同・万木城） へびうかの城（同・不明） 鶴賀ノ城（同・鶴賀城）	土岐少弼 同 同	とき（土岐）大弼居 城 とき大弼抱 とき弾正大弼抱	とき（土岐）少弼 同 同	1000騎	（土岐氏）	本多忠勝10.0、 のち小田喜城
小田喜（同・大多喜城） さぬき城（同・佐貫城） 岡本之城（安房・岡本城） （安房・館山城） かち山之城（同・勝山城） つくろふみの城（上総・造 海城） 小さいの城（同・小糸城） くるりの城（同・久留里城） かつらの城（同・勝浦城） おつ木の城（同・興津城） よしょうの城（同・吉字城） 一宮ノ城（同・一宮城） かなや（同・金谷城）	さつみの義晴 （里見義康） 同 同 同 同 同 同 同	真崎大膳城主也 真崎石見守当時代也 加藤大郎左衛門 左馬頭居城里見義安 （里見義康） 正木右衛門大夫 安芸守居城 真崎淡路守家城 里見弾正少弼居城 山本越前守 正木左近大夫居城 （正木頼忠） 正木左近大夫抱 鶴見甲斐守居城 真崎淡路守抱		3000騎	里見氏	内藤家長2.0 里見義康9.2 松平忠政3.0

1) 本表は、「毛利家文書」所収の3点の文書を典拠として作成した。

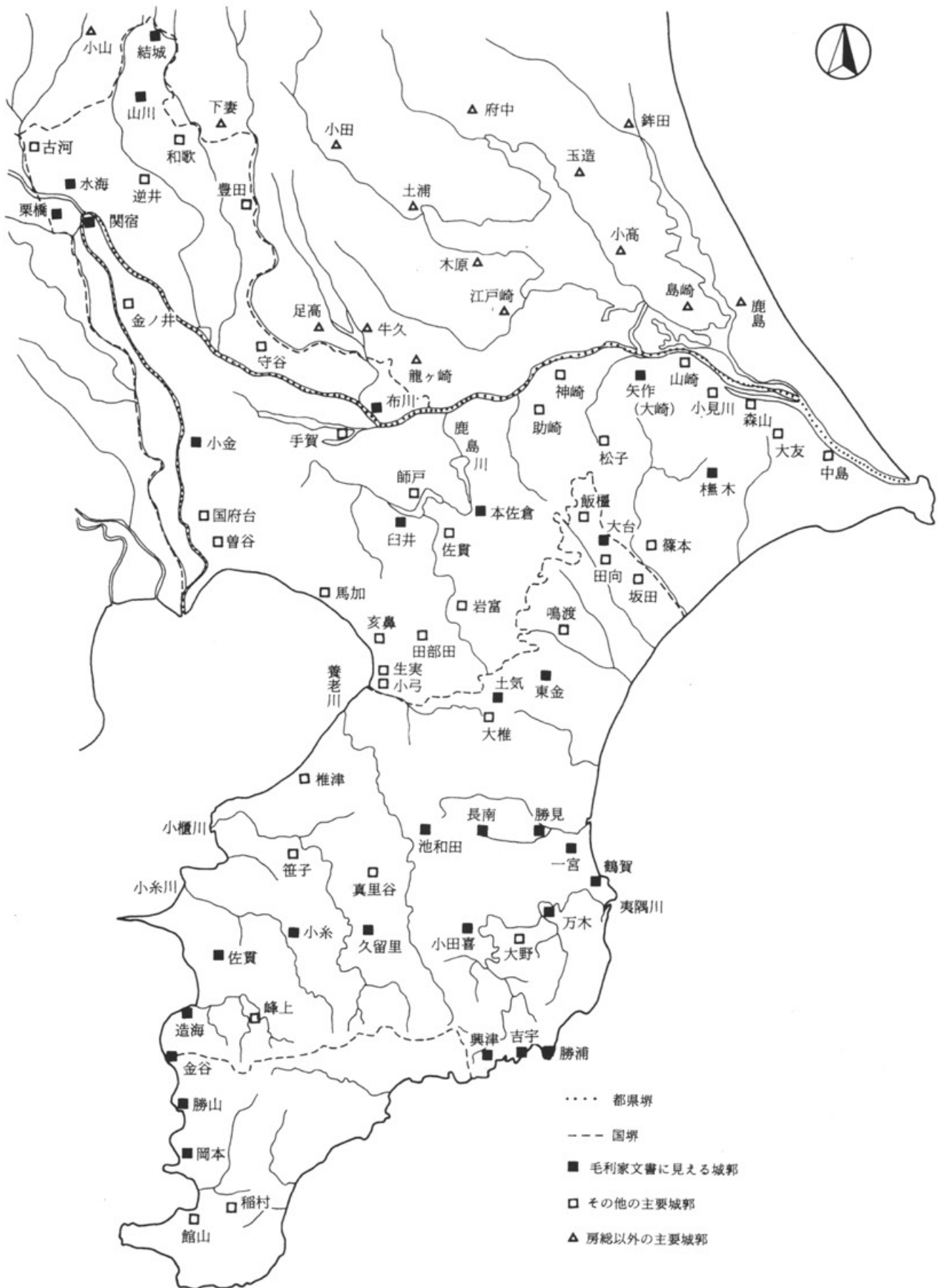
2) 本表では、茨城県域に属する旧下総国の城郭についても扱っている。

3) 天正18～慶長5年に在城者がいながら、上記の文書に記載の見えない城郭については、括弧内にその城郭名と国名のみを記した。

4) 騎馬数は、関東八州諸城覚書2と北条氏人数覚書の両者に見える場合、妥当性の高いものを記した。ただし、この数字は戦国末期に豊臣方からそのように評価されていたことを示すものである。

5) 「豊臣期の在城者」の欄に見える人名のつぎの数字は石高（万単位）を示す。

〔市村高男「房総における中世城館跡の地域的時代的分布とその特質」
『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書II』1995年より〕



第2図 房総の戦国末期主要城館分布

(市村高男「房総における中近世城館跡の地域的時代的分布とその特質」より)

の峰上城（富津市）に詰めていた吉原玄藩助や「尾崎曲輪廿二人衆」らの小土豪層に対し、後北条氏の懐柔政策が行われている。天文22年（1553）、この渦中で妙本寺住僧日我は金谷城（富津市）に避難するが、兵火に掛かる。永禄3年（1560）、北条氏康は里見義堯の久留里城（君津市）の向かいに「新地」を取り立て攻防戦が行われたが、里見氏の要請により上杉謙信が関東に出兵したため、後北条氏は撤退する。翌年、謙信は後北条氏の本城小田原城を囲み、鎌倉で関東管領職を譲り受ける。永禄6年（1563）、甲斐の武田・後北条軍は北関東を攻撃し、上杉氏は里見氏と挟み撃ちを試み、翌年、第2次国府台合戦が起こる。この結果、里見氏は再び敗れ、後北条方は上総へも進出する。また、正木時忠も後北条氏に通じ、一宮城（一宮町）を攻撃し、海上・香取地域にも侵攻する。翌年には正木時茂の小田喜城・土気酒井氏の土気城（千葉市）が後北条方に攻撃されるが、この攻撃軍は原氏や臼井氏らであった。土気城の攻防戦では「宿城」・「善生寺口」・「金谷口」が舞台となった（第98図）。一方、永禄9年（1566）、上杉謙信は後北条方となった下総地域に侵攻し、原胤貞の臼井城を包囲して「実城堀一重」まで攻めるが撤退する。翌年には、三船山（君津市）において後北条氏と里見氏が合戦を行い里見氏が勝利し、しばらくは里見氏の上総経営は安定するようである。

この時期は、本丸としての「実城」、居住区に推定される「根小屋」、外郭としての「宿城」、また、臨時的な「陣城」等が史料上に登場する。

(2) 16世紀末 この時期は、後北条氏の関東進出が著しく、天正2年（1574）には築田氏の関宿城（関宿町）が落城し、土気酒井氏や万喜城（夷隅町）の土岐氏も後北条方に属す。翌年（1575）には「作倉領」に後北条氏の直接の禁制が出され、有木城（市原市）は後北条氏の「惣番手城」として上総攻略の拠点となっていた。

下総では、本佐倉城の普請も後北条氏に近い井田氏や後北条氏家臣によって行われ、在番勢力が置かれ、佐倉の船舶の課役や森山城の樹木の伐採も後北条氏の直接命令によって行われるようになった。小金城（松戸市）の高城氏と大台城（芝山町）・坂田城（横芝町）の井田氏は後北条氏の直接軍事指揮下に入り、牛久城（茨城県牛久市）や川越城（埼玉県川越市）の在番を務めている。北条氏政の5男直重の下に「佐倉御旗本」が組織され、千葉氏の分国「佐倉領」は後北条氏の支城領化の傾向が見られた。なお、原氏は千葉氏配下から半独立的となり、臼井・生実城を中心に印西・手賀・岩富・小西等に拠点を持ち、二千騎の家臣団を直接掌握するようになった。

上総・安房では、後北条氏勢力の房総浸透により、里見氏も天正5年（1577）には後北条氏と同盟を結ぶ形となり、家臣団の分裂も起こる。天正6年（1578）里見義弘の死による相続争いで、子義頼に対抗した義兄弟梅王丸支持勢力は、佐貫城・百首城（富津市）、久留里城・千本城（君津市）等である。また、その直後、正木憲時が里見氏に対して反乱を起こす。この大膳亮系正木氏は小田喜城（大多喜町）・興津城（勝浦市）を中心に浜萩城（天津小湊町）・金山城（鴨川市）・吉宇城（勝浦市）等を本拠にしていたが、里見義頼は小田喜城に正木氏を滅ぼす。しかし、その後、二男に正木大膳の名跡を継承し復活させるが、同時に里見氏一門として家臣団の再編が行われた。この時期は里見氏と後北条氏は直接抗争することも殆ど無かったようである。

一方、この時期、畿内・西国では豊臣秀吉による全国統一が推進されつつあり、天正14・15年（1586・87）には東国を対象とした「惣無事令」が出され、関東に広く勢力を拡大していた後北条氏は、危機感を強め、配下の諸城の大改造を行わせたことが考えられる。こうした状況下、里見氏は義頼の子、義康以降、

秀吉方に付くことになる。

天正18年(1590)、豊臣秀吉軍が後北条氏領国に侵攻し小田原城は落城し、後北条方の房総の諸軍本体は小田原城に籠城したため、房総諸城も別働隊によって開城となる。豊臣方が把握していた房総の諸城と兵力は『毛利家文書』の「関東八州諸城之覚書」や「北条氏人数覚書」に記されている(第2表・第2図)。ここで、列挙すると、佐倉(千葉氏)3000騎、臼井(原氏)2000騎、小金(高城氏)700騎、府川(豊島氏)150騎、守谷(相馬氏)100騎、鐔木(鐔木氏)300騎、矢作(国分氏)150騎、東金(酒井氏)150騎、土気(酒井氏)300騎、長南・池和田・勝見(長南武田氏)1500騎、万喜・へびうか(位置不明)・鶴が城(土岐氏)1500騎が後北条氏方であり、一方、里見方は、岡本(里見義康)、金谷・勝山・造海・かつら(勝浦)・よしう(吉字)(正木氏)、一宮(鶴見氏)、久留里(山本氏)、小糸(里見氏)、佐貫(加藤氏)で3000騎である。しかし、これらは、豊臣方に把握されていたもので主要城郭であり、各城にはさらに支城群が存在したことが考えられる。

16世紀後半から末期つまり、戦国時代末期の房総の城郭について概観すると、現在までに次の様な地域的差異が考えられている。

(上総北部から下総全域の下総台地地帯)

千葉氏の分国「佐倉領」の領域支配の中心として機能し、最後には後北条氏領国の有力支城となった本佐倉城(第40図)、広範囲な領域支配の拠点となった原氏の臼井城(第41図)があり、これらは城下集落を取り込む「惣構」を有し、周囲には支城群を配置している。また、高城氏の小金城(第19図)や土気酒井氏の土気城(第98図)、原氏の生実城(第50図)も広域支配の拠点となり、本佐倉城や臼井城に準じた「外郭部」を有していた。なお、縄張り構造的には「柵形」・「折り歪み」・「馬出し」等の近世城郭につながる様な発展した形態もこの地域で見られる。

(上総中央部から南部の丘陵地帯)

丘陵地形はそれ自体要害であることや広い面の造成が困難であること等から、台地上の城とは縄張り構造が全く異なる。しかし、丘陵の城郭でも長南武田氏の長南城(第114図)や土岐氏の万喜城(第126図)の様に尾根部に延々と手を加え広大な城域を形成するものや、長南武田氏の支城である池和田城(第131図)・勝見城(第110図)、土岐氏の鶴か城(第119図)・大野城(第117図)の様に広大な平坦面を城域に取り込み外郭部とする様な形態もある。

(上総南部から安房の丘陵地帯)

当地域は、里見氏領国内であるが、同氏の居城は以北の有力者の本城が領域内で突出した規模であったのに比較して差異が少ない傾向があり、機能的に分散されていた傾向が窺える。これは、里見氏が居城を何度も変遷させたこと、正木氏の独立性の強さに代表される非中央集権的構造であったこと等の背景が考えられる。また、金谷城・造海城(第147図)・勝山城等里見水軍の拠点としての「海賊城」の視点も考えられる。

5. 近世～近代(第3図)

(1) 16世紀末～17世紀前葉 天正18年の小田原征伐後、徳川家康が関東に入部し房総には家康家臣団が配置された(第3図)。一万石以上の上級家臣の居城は中世城郭を利用したもので次の通りである。

大多喜城(本多氏)、久留里城(大須賀氏)、佐貫城(内藤氏)、鳴戸城(石川氏)、矢作城(鳥居氏)、臼



第3図 近世初期(天正18年後半)の房総の諸士
(『角川地名辞典』所収の図を基に作成)



第4図 千葉県地形分類図
 (『角川日本地名大辞典12 千葉県』より)

井城（酒井氏）、本佐倉城（三浦氏）、岩富城（北条氏）、関宿城（松平氏）、芦戸城（木曾氏）。

また、里見氏は上総を没収され、安房一国のみの領国となり、館山城を築城するが、慶長19年（1614）には伯耆国（鳥取県）へ転封され、同城は破却される。

(2) 17世紀前葉～19世紀後半 近世を通じて機能した城は、大多喜城（第127図）・久留里城（第151図）・佐倉城（第43図）・関宿城である。しかし、房総には城を有しない小藩も多く存在し、陣屋が数多く設置された。陣屋の中には生実藩の森川陣屋の様に北生実城跡内に造られたものもあった（第50図）が、発掘調査によると、中世の大規模な空堀が埋められて浅い堀が使われたという事実があり、身分による城郭形態の差が統制されていたと見られる。

異質な城館として、徳川将軍の鷹狩りのための休息所として、御成街道沿いに造られた船橋御殿・御茶屋御殿・東金御殿がある。現存する御茶屋御殿跡（第51図）は単郭方形館ながら虎口に内枳形を用いるなど、中世城館の集大成ともいえる形態である。

(3) 19世紀後半～20世紀前半 幕末には、外国船に対する防御のために沿岸部に砲台・台場（造海城・富津台場など）などが築かれ、その後の第二次世界大戦のアメリカ軍上陸に備えた要塞としても機能した。また、江戸幕府滅亡により徳川氏が駿府に移され、代わりに駿河・遠江の諸藩が房総に移封され、例えば松尾藩は明治に入って稜堡式の洋風城郭の築城に着手したが、廃藩置県により廃城となった。

第3節 研究史概要

本節では、千葉県を中心に城館研究の概要を時代・時期を追いながら、方法論別に概観したい。

1. 江戸時代

文献研究では、戦国時代の争乱が終結した後、「家」(氏族)の系譜・歴史を明らかにするためもあるが、「読み物」として多くの軍記物が作成される。関東全体に関わるものでは、『関八州古戦録』・『東国戦記』等が著名であるが、房総では特に『房総里見軍記』等里見氏関係や『土気城双鹿記』・『土気東金両酒井記』等土気・東金酒井氏関係が多い。これらは、戦国期に家臣として従した者が江戸時代に入って記録したものもあるが、その性格上、概ね書き手(家)の立場上有利な推測が史実の様に書かれており、年代も一次史料と矛盾するものが多い。また、江戸時代は「国学」が盛んとなるが、房総における中世史については、軍記物の域を出ていないと言ってよいであろう。

城そのものに対する研究も盛んとなる。江戸時代には戦乱が収まったために城郭の性格が変容した。その変容は既に戦国期後半には現れていたが、臨時的・実戦的な城から領地経営の本拠地として、また、半永久的な権威の象徴として築城された。これによって、戦国時代の築城方法を研究する「築城学」が誕生する。これは、軍隊の攻撃・防御法を研究した「軍学」や「兵学」の中の一分野であった。築城学は、各地に残る中世城館跡を計測した絵図を作成し、それを元に研究されたが、これは、近現代の陸軍に継承された。さらに陸軍で使われた歩測を元に描く縄張図の描写法は現代の縄張図(概念図)へ継承されている。しかしながら、本来城の攻防戦を想定した「軍学」の範疇であるため、城郭研究は軍事史的側面の研究が主であった。

遺物研究については、江戸時代には武家のしきたり・法令・衣服・古典等を研究する「有職故実」や、動植物・鉱物等を対象としたいわゆる博物学「本草学」が盛んとなり、「好事家」と呼ばれた町人学者は多くの「もの」を収集してスケッチした書物を発行し、貨幣や刀剣や陶磁器などの中近世の遺物を扱ったものも多かった。これらは現代の考古学に継承されている。

2. 明治・大正～第2次大戦

文献研究では、『房総叢書』(1912年～)で、江戸時代の軍記物も含めた史料集が県によって収集・刊行された。また、個人研究では、大野太平氏の『房総里見氏の研究』(1933年)^{④-006}は現在の里見氏研究の基礎となっている。

城郭研究については、明治初期に安川柳溪氏の『上総国誌』^{①-001}(1878年)が刊行され、大正時代には『印旛郡誌』^{①-003}(1912年)・『市原郡誌』^{①-008}(1916年)・『千葉縣誌』^{①-011}(1919年)・『夷隅郡誌』^{①-017}(1923年)・『東葛飾郡誌』^{①-016}(1923年)・『千葉郡誌』^{①-018}(1926年)等、自治体史が刊行され始めたが、城館研究の分野では城跡の地勢や城主・攻防戦の紹介が主であり、それも江戸時代の軍記物や伝承を記しているものが多く、一次史料に基づくものは少ない。自治体史の章立てで「名勝・旧蹟」として掲載された例が多いことはこれを物語るものであろう。ただ、『君津郡誌』^{①-020}(1927年)等、字名・遺構の形状・面積等を記しているものもある。また、県による『史跡名勝天然記念物調査』^{④-003}(1926年)では、土気城・勝浦城・小弓城等の主要城郭が取り上げられたにすぎなかったが、従来の説明や鳥瞰図の他に地籍図・地形図が取り入れられた。

3. 戦後～1960年代

第二次世界大戦後は現在の城郭研究が歴史学研究の一つとして確立していく直接の過程であるので、方法別に分けて概要を記すことにする。つまり、①縄張り研究、②考古学研究、③文献研究、④歴史地理学研究に大別したい。

(1) 縄張り研究

戦後は更に郷土史研究の気運が高まり、雑誌類に個人の個別城館跡の研究が掲載されはじめ、自治体史は『本納町史』^{①-025}・『銚子市史』^{①-026}・『船橋市史』^{①-028}等、1910年代から続いて各地で刊行された。しかし、これらは戦前と同様、伝承等を紹介するものが多かったと言えよう。しかし、1960年代後半には、縄張図（概念図）を図示して城郭遺構の解説を入れたものが見られるようになり、個人研究論文も多く登場するようになる。縄張図等が図示された例としては、小室栄一氏の『中世城郭の研究』^{④-018}（1965年）・大多和晃紀氏の『関東百城』^{④-030}（1969年）・『日本城郭史論叢』（1969年）所収の篠丸頼彦氏の「二つの佐倉城」^{④-029-2}等がある。小室・大多和両氏は千葉県内を含む関東地域の主な城館跡の概念図を掲載し、特に小室氏は実測図の重要性を実践・提言しており、縄張図（概念図）が重要な歴史資料として活用できることを示したと言えよう。

(2) 考古学研究

千葉県内の城館跡を対象として発掘調査された最初の例は、1962年の小金城跡（松戸市）であり、測量調査も実施されているが、幸いに古代集落が残存していたことが発掘調査を可能にしたものであろう。以降しばらくは中近世城館跡の発掘調査は殆ど実施されていない。未だこの段階では、中世城館跡の文化財としての認識は低かったといえよう。この時期の主な発掘調査報告書には、戸張城跡・根戸城跡（柏市）^{③-001}等がある。^{③-003}

(3) 文献研究・(4) 歴史地理学的研究

千葉耀胤氏の館山城跡と城下町に関する書籍が1963,64年に発刊され、大多喜城跡と城下町についての研究が1967年、平野元三郎・渡辺包夫・篠丸頼彦・森輝・川村優各氏により発表されている。^{④-016,017}しかしながら、研究者にとっては未だ関心が薄い時期であった。^{②-034~037}

4. 1970年代

(1) 縄張り研究

個人研究は、1960年代後半以降から引き続いて多く発表された。1969,70年、清川一史氏は県内98か所の縄張図を紹介している。^{②-046}また、1970年代以降は各自治体による調査研究の数が増加し、自治体史において城館跡が概念図を掲載して紹介される例が増える。例えば、篠丸頼彦氏・伊禮正雄氏は1971年、『佐倉市史』^{①-032}において印旛地域を中心に調査した成果をはじめて独立した章立ての中で公表している。

分布論的には、清川一史氏が1971年、下総から上総北部の城館跡の曲輪取りの広さから在地領主層の騎馬軍団的性格を指摘した。^{②-058}伊藤一男氏は「千葉県中近世遺跡調査目録」の調査成果から、県内の中世城郭を占地や「囲郭型式」から「型式分類」し、館から館城へ、山城・丘陵（台地）城から平城への「編年」を県内城館跡で示し、臼井城や坂田城については本城と支城群の関係を図示した（1973,1974,1975年）。^{②-075,082,④-052}氏の曲輪配置の分類によると、単郭で方形・単郭雑形、多郭で同心円・直線連郭・雑形とし、単郭式の砦・

館は香取地方に、直線連郭は香取・東葛飾・千葉・山武に、多郭雑形は君津・印旛・市原に多く分布するとした。伊禮正雄氏も1978年、県内の城址について、①城郭の数が多、②丘陵城郭が多、③直線連郭を基本型式とする、④曲輪取りがおおまか、⑤二重土塁が少ない、⑥虎口の合い矢構造が特に上総方面に多、⑦櫓台が活用されている、⑧両総の西北側にすぐれた城郭が多く南方ほど築城術が未発達ないし停顿気味である、等の特色をあげている。これらは、県内全域の城館跡について^{②-106}占地や縄張構造を分析したもので、この時期では非常に評価されるものであろう。しかし、この時点では発掘調査例が少なく、特に時期的な変遷についての立証は1980年代後半以降となる。

(2) 考古学研究

千葉県教育委員会による『千葉県中近世遺跡調査目録』^{④-038,041}(1971,72)は1960年代後半からの調査集成であるが、城館跡が考古学の対象つまり埋蔵文化財として認知された証拠である。1970年には松子城跡(大栄町)の発掘調査が行われたが、トレンチ調査と簡単な概念図を主体とするものであった。以降しばらくは城館跡の発掘調査はトレンチ調査が中心で面的な調査は少ない。これは、中近世の考古学への認知の有無の他に、福井県一乗谷の山上の「一乗城山」と谷内の「朝倉館」に代表され教科書にも叙述された様に、多くの中世城郭のイメージが「いざというときに立てこもる臨時的な場所であり、常時生活していたのではないから建物も遺物も少ない筈」というものであったからではないかと考えられる。この誤解は以降1990年代の城館跡の発掘調査増加に伴って修正されてきたと考えられる。

なお、学術調査による地形測量は、大椎城跡が千葉市教育委員会により実施され、1972,1973年後藤和民氏^{②-062,071}によって公表された。また、立教大学考古学研究会は1976年、大野城跡(夷隅町)の調査報告書を刊行^{③-040}した。

1970年代の開発に伴う主な発掘調査は、国立歴史民俗博物館建設に伴う佐倉城跡(佐倉市)、13世紀から15世紀の遺物が多く出土した池ノ尻館跡(四街道市)、船尾城跡(印西町)、城の腰城跡・武石館跡(千葉市)、県立総南博物館建設に伴う大多喜城跡(大多喜町)、大野城跡(夷隅町)、市立博物館建設に伴う久留里城跡(君津市)、県内最初に沖積地の館跡が検出された菅生遺跡・主郭内から多くの貿易陶磁器が出土した真里谷城跡(木更津市)等である。発行された主な発掘調査報告書は、小金城跡(1970年)^{③-010}、松子城跡(1971年)^{③-007,031,044,066,073}、佐倉城跡(1971年～1981年)^{③-037~039}、菅生遺跡(木更津市 1973年)^{③-015}、大多喜城跡(1974年)^{③-022}、小堤要害城跡(横芝町 1976年)^{③-052}、船尾城跡(印西町 1978年)^{③-054}、大野城跡(夷隅町 1978年)^{③-055,062}、館山城跡(1978,79年)^{③-059}、城の腰城跡(千葉市 1979年)^{③-060}、久留里城跡(君津市 1979年)^{③-061}、真里谷城跡(木更津市 1979年)等がある。また、学術調査では、保存整備のために実施され始めた御茶屋御殿跡(千葉市 1976年)がある。

(3) 文献研究・(4) 歴史地理学的研究

1960年代に続き、1970,1971年、森輝・川村優氏^{②-048,064}が大多喜藩についての調査報告を行い、篠丸頼彦氏が佐倉城周辺について発表している(1971年)^{①-032}が、未だ城郭に直接関するもの関心が薄かったためであろうか、この時期は他に見るべきものはない。

5. 1980年代

この時期は、全国的に城郭研究が盛んとなった時期で、特に縄張り研究が浸透し、考古学研究や文献史学も城郭研究に深く関わり始めた時期といえよう。

(1) 縄張り研究

『日本城郭体系』^{④-073}は全国の主要城館跡を紹介したものであり、以降、1990年代の各県教育委員会による中近世城館跡詳細分布調査報告書刊行まで、城郭研究のバイブル的存在となった。それまで趣味的に扱われがちであった城郭研究が考古学研究者を含めた歴史学研究者にとってその重要性が認知され始めたのではないだろうか。ただ、同書は未だこの段階では文章のみが多く、図示されても概略図や写真が主で、詳細な概念図（線張図）の掲載例は少数であった。しかし、群馬県については、後の多くの縄張り研究者にとっての模範とされた詳細な縄張り図が既に山崎一氏によって集成されていた（『群馬県古城址の研究』上・下巻（1978年）、補遺篇上・下巻（1979年））ので、突出した感がある。その後、1987年には『中世城郭事典』^{④-104}が発刊され、全国を対象に各県限られた数ではあるが、取り上げた全ての城館跡の概念図を掲載しており、比較検討できる歴史資料としての城館跡概念図が全国的に認識されたと言えよう。千葉県については、21城館跡が掲載されたが、縄張り研究者の詳細な概念図の他に臼井城跡・大野城跡・稲村城跡・岡本城跡については地形測量図が掲載された。また、万喜城跡については地形測量図を参考にした概念図が掲載された。大野城跡は1970年代の立教大学考古学研究会の成果であるが、他は後述する1980年度から始まった千葉県教育委員会の測量調査の成果である。

自治体史においては、城館跡の概念図提示が一般化する。例えば、伊藤一男氏『松尾町の歴史』（1984年）、^{①-063}高橋三千夫氏『印旛村史』^{①-062}、『酒々井町史』^{①-073}（1987年）、小高春雄氏『大網白里町史』^{①-070}（1986年）等である。個々の論考では、1988年の遠山成一氏による東金城跡の概念図提示と考察^{②-168}がある。

(2) 考古学研究

盛んな開発行為と埋蔵文化財行政の進展、そして中近世城館跡が埋蔵文化財として一般にも認知され始めたことによって、千葉県内では多くの城館跡の発掘調査が行われた。県内の発掘調査組織は、かつては財団法人千葉県文化財センターと民営組織であり、教育委員会の多くは大学等の機関や有識者に「調査団」として調査を委託したが、この時期、広域法人による郡市文化財センターが充実したこともある。

開発に伴う主な発掘調査は、本佐倉城跡の外郭部に位置して中世末期の墓域や集落域が検出された北大堀遺跡・上宿遺跡や長勝寺脇館跡（第39図・図版6-2）（酒々井町）、和良比堀込城跡（四街道市）（第38図・図版6-1）、南敷城跡・馬洗城跡（大栄町）、菊水城跡（下総町）、一宮城跡（一宮町）、中滝城跡（岬町）、村上城跡（市原市）、真里谷城跡（木更津市）等がある。主な発掘調査報告書は、菅生遺跡（木更津市）^{③-070}、金谷城跡（富津市）^{③-075}、埴谷周路遺跡（山武町）^{③-093,094}、小林城跡（印西町）^{③-098}、一宮城跡（一宮町）^{③-106,107}、真里谷城跡（木更津市）^{③-109}、池ノ尻館跡・戸崎館跡（四街道市）^{③-128}、大羽根城郭跡（市原市）^{③-135}、村上城跡（市原市）^{③-137}、関宿城跡（関宿町）^{③-140,149,158}、南敷城跡（大栄町）^{③-143}、馬洗城跡（大栄町）^{③-160}、外箕輪遺跡（君津市）^{③-164}等があり、意外に豊富な出土遺物と掘立柱建物跡等の遺構の検出によって、城館内の生活について良好な研究資料が蓄積され始めたと言ってよいであろう。

多くの調査の内、中近世城館跡の資料としての意識普及に果たした役割の大きなものとして、1980年から1998年まで県教育委員会によって行われた測量と若干の発掘調査がある（重要遺跡確認調査）。これは、重要性が高くかつ開発の影響を受けるおそれがある中近世城跡を選び、その規模・構造等を把握し保存策を講ずる資料を得るために実施された。以下、1980年代のこの調査を列挙する。1980年 本佐倉城跡（酒々井町）・佐貫城跡（富津市）、1981年 森山城跡（小見川町）・本納城跡（茂原市）、1982年 大友城跡（東庄町）・坂田城跡（横芝町）、1983年 稲村城跡（館山市）（第157図）・臼井城跡（佐倉市）、1984年 大崎城跡（佐原市）・万喜城跡（夷隅町）、1985年 佐是城跡（市原市）・岡本城跡（富浦町）（第163図）、1986

年 飯櫃城跡（芝山町）（第95図）・籙木城跡（干潟町）（第70図）、1987年 飯野陣屋跡（富津市）（第150図）・山崎城跡（佐原市）（第65図）、1988年 東金城跡（東金市）（第97図）・城山城跡（千葉市）（第47図）、1989年 大堀城跡（八日市場市）（第77図）・椎津城跡（市原市）。この一連の調査は、学術的には城館跡の規模・構造等の客観的資料としての地形測量や小面積ながらも築城方法や時期等が解明される発掘調査の重要性が、埋蔵文化財行政的には調査の継続性等が、全国的にも評価されるものであろう。

他の学術発掘調査としては、自治体（教育委員会）による佐倉城跡（佐倉市）、八木ヶ谷城跡（船橋市）、根戸城跡（我孫子市）、小見川城跡（小見川町）や臼井城跡研究会による臼井城跡（佐倉市）、立教大学考古学研究会による中滝城跡（岬町）等があり、測量調査には、中滝城跡の他、自治体（教育委員会）による米本城跡・高津城跡（八千代市）、小竹城跡・臼井城跡・岩富城跡・城城跡（佐倉市）等がある。

考古学的視点による論考については、発掘調査例が増加したこともあってようやく登場する。橋口定志氏は1980年、大野城跡の調査成果から1615年の一国一城令に伴う「城割」の可能性を示唆し、柴田龍司氏は1986年、国道296号線や重要遺跡の調査成果から本佐倉城や臼井城の「惣構」構造を指摘し、1987年、外郭部の規模を分類して個々の城郭機能を明らかにしようとし、さらに1988年、房総の戦国期城下集落について分類した。発掘調査例を分類・検討する柴田氏の方法は城館研究に考古学的視点を取り入れた県内最初の例であろう。また、鳴田浩司氏は1989年、県教育委員会で調査した飯野陣屋跡の出土陶磁器について考察しているが、東京における江戸遺跡の調査・研究が進展し始めた時期であり、千葉県内においても近世考古学の必要性が指摘され、城館研究の面でも縄張り構造論だけでなく遺物研究の重要性が示唆されたと言ってよいであろう。

(3) 文献研究・(4) 歴史地理学的研究

1980年代後半、ようやく文献史学分野から城館を視点とした研究が多く登場する。井上は1988年、中世の文献史学研究が積み上げてきた領主制論や村落論を城郭研究に取り入れるべきことを目的として領主権力からのみの視点からではなく、民衆からの視点として「村の城」の存在を提唱し、齋藤慎一氏は恒常的な城は15世紀半ば以降に多く登場することを立証し、市村高男氏は1988年、「根子屋」の性格を検討し、16世紀後半に登場するとした。県内については、外山信司氏は1988年、『本土寺過去帳』等の史料に登場する「サクラ」（佐倉）地名や「サクラ」で死去した人々の階層に着目し、戦国末期の本佐倉城下に居住した家臣団が千葉宗家直臣層にほぼ限られることを明らかにし、遠山成一・外山信司氏は1986年、岩富原氏の動向を明らかにし今後の岩富城研究の基礎を築いたこと等があげられる。

(5) その他

1986年、東京で「全国城郭研究者セミナー」が開催され以降毎年実施されており、翌年から『中世城郭研究』の発行が始まり、千葉県内の城館跡を対象にした論考も多く載るようになる。中近世城館研究が全国的に認知され始めたと言えよう。また、県内でも、縄張り研究だけではなく考古学・文献史学等他分野を含めた研究を目指して埋蔵文化財関係者、教員等を中心に1985年「千葉城郭研究会」が発足した。そして、1989年『千葉城郭研究』第1号が発刊され、以降隔年で発刊されている。1号は「城郭からみた千葉県の中世史」・「研究史」・「文献目録」で構成され、研究史・文献目録は以降各号で追加されている。縄張り構造に懲り散策等の懐古的趣味に走らず純粋学問的な地域の「城郭研究会」設立は全国的には恐らく初めてあり、内容的にも評価されたと言えよう。

6. 1990年代

全国的に中世城館研究が盛んとなり、各地で様々なテーマのシンポジウムや研究集会が開催され、一般向けの単行本・雑誌も多く出版されるようになる。研究方法としては、縄張り研究中心から、全国的な城館跡発掘調査例の増加に伴い次第に考古学研究が主流となってくる。

(1) 縄張り研究

千葉県教育委員会によって県内外の城郭研究者が集められ、1990年度から県内中近世城館跡の新規発見を含む分布調査と主要城館跡の概念図作成が開始され、1995年『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅰ－旧下総国地域－』^{③-245}、1996年『同書Ⅱ－旧上総・安房国地域－』^{③-263}が刊行された。4か年度の調査によって、中世城館跡967か所、近世城跡・陣屋跡・砲台跡90か所の合計1,057か所が確認され、1988年の『千葉県埋蔵文化財分布地図』段階では817か所であったので、240か所の新発見があった訳である。同書の特徴としては、未作成であった大規模城郭を中心とする精緻な縄張図（概念図）が184か所と数多く掲載されたこと、関係史料一覧が掲載されたこと、『同書Ⅱ』で、市村高男氏の「房総における中世城館跡の地域的、年代的分布とその特徴」、小野正敏氏の「出土陶磁よりみた千葉の城館」が掲載され、前者で縄張り・文献・分布論が、後者で遺物論がまとめられたこと等がある。こうした充実度は、同時期多くの県外教育委員会で進められている詳細分布調査報告書に比べ出色の出来と考えられる。しかし、時間的・予算的制約から、小規模城館跡の掲載が少ないこと、発掘調査成果が少ないこと、調査担当者による全体のまとめがないこと等があげられる。

縄張図（概念図）の集成としては、個人によるものが2点ある。小高春雄氏は長生地域の中近世城館跡の概念図32城跡を集成して自費出版し（1991年）^{④-116}、1995年他界した清川一史氏の遺稿集が1998年刊行され、74城館跡の概念図が掲載された。^{④-146}

その他、個人の業績では、八巻孝夫氏は1990年、後北条氏領国の「馬出し」について考察し、千葉県内では新村城跡（八日市場市）・津辺城跡（成東町）・森山城跡（小見川町）・土気城跡（千葉市）・箕輪城跡（沼南町）^{②-190}について縄張図を提示しながら考察した。池田誠氏は、1997年、上総・下総の馬出・杵形・ライン防御・櫓台・二郭構造を有する城郭が、徳川家康家臣による天正20年頃の築城とする説を出したが、^{④-355}縄張り構造の視点のみではなく、文献史学や考古学の成果を踏まえる必要があろう。

(2) 考古学研究

1980年度から開始された千葉県教育委員会による城館跡の測量及び確認発掘調査は、平成2年(1990)度から発掘調査が無くなり、測量調査と周辺の中近世景観復元等を含めた調査となった。以下列举すると、1990年 中島城跡（銚子市）（第83図）・鹿渡城跡（四街道市）（第33図）、1991年 峰上城跡（富津市）、1992年 鶴ヶ城跡・亀ヶ城跡（岬町）、1993年 土気城跡（千葉市）・池和田城跡（市原市）、1994年 造海城跡（富津市）（第147図）、1995年 真名城跡（茂原市）（第113図）、1996年 助崎城跡（下総町）（第72図）、1997年 増尾城跡（柏市）（第16図）・佐津間城跡（鎌ヶ谷市）である。

発掘調査については、1980年代後半から注目される調査例が増えたが、その成果の一部は1990年、千葉城郭研究会・千葉歴史学会共催で国立歴史民俗博物館において開催された講演会「発掘された房総の中世城館跡」で一般にも公開された。大野城跡（夷隅町）・岩川遺跡（長南町）・金谷城跡（富津市）・下ノ坊遺跡B地点（鋸南町）・長勝寺脇館跡（酒々井町）の調査報告がなされ、小野正敏氏は出土陶磁器について城館や曲輪のタイプによる在り方の検討の必要性をあげ、以降の考古学研究の指針となった。これらは、翌

②-203, 204, 206, 208~210
年『千葉史学』にまとめられた。

1990年代は城館跡に関する考古学研究の進展が著しいので、以降は1990年代を前半と後半に分けて説明したい。

1990年代前半の発掘調査の中で、開発に伴い比較的広範囲な調査が行われた例としては、小林城跡（印西市）（第22図・図版1, 2）、石川館跡・本佐倉大堀遺跡（佐倉市）、東和田城跡（成田市）（第29図）、生実城跡（図版7-2）・南屋敷遺跡（第44図）（千葉市）、鴛崎城跡（佐原市）、久井崎城跡（大栄町）（図版8-2）、武田砦跡（神崎町）、多古城跡（多古町）、篠本城跡（光町）（第76図・図版9-1）、小野城跡（東金市）、田向城跡（芝山町）（図版9-2）、分目要害城跡（市原市）、笹子城跡（木更津市）（第139図・図版11-1）、飯野陣屋跡（富津市）、等がある。城域のほぼ全体にかかるものも多く、貴重な資料を得られた。

1993年から開始された篠本城跡（光町）の発掘調査は大きな成果をもたらした。同城跡は地表面観察では土塁も堀も殆ど確認できない状況であったが、斜面には腰曲輪が巡り、台地上は空堀で区画された中に掘立柱建物跡が密集して検出された。遺物からは、城本体が14世紀初頭から始まり、15世紀前半が最盛期であり、15世紀末から16世紀初頭に廃絶したことが明らかとなった。注目すべき点は、台地上の区画には、高低差や建物跡の差がなく、一般の城に見られる郭の差（江戸時代の城では本丸・二の丸・三の丸等の違い）が見られない点がある。1995年、シンポジウム「よみがえる篠本城跡」で、調査成果（道澤明氏）、中世篠本郷の村落（伊藤一男氏）、出土遺物（小野正敏氏）、東総地域の中世城郭（椎名幸一氏）、房総の中世城館の構造（柴田龍司氏）、篠本城跡出土の仏教遺物（橋浦芳朗氏）、栗山川流域の中世城館跡（遠山成一氏）の講演が行われた。^{④-130}ここで議論となった点として、中世篠本村全体が山に移動して「村の城」を形成したという柴田氏に対して、井上自身疑問に思うのは、笹子城跡でも同様であるが、中世村落全体が宗教的施設や耕地をはじめ、様々な既得権を複雑に持つ村から村人全員が移動できたかということである。むしろ、掘立柱建物跡の規模等から推測すると、台地上には農村内でも上層部の名主クラスが入ったのではないかと思われる。その後、支谷部さらに支谷を挟んだ対岸の台地も調査され、同時期の集落や墓域が検出されたが、台地上の建物規模よりも小規模なもので、これらが一般農民集落ではないかと考えられる。とするならば、確かに村全体が移動したのかも知れないが、台地上と周辺部の階層差が表われていると考えたい。

1990年代前半は、良好な発掘調査例の増加により、考古学による城館の変遷に関する論考が多く登場する。柴田龍司氏は1991年、館と城の時期から館城への展開に代表される城館における15世紀半ばの画期を提示した。^{④-119-1}また、同氏は1992年、堀込城跡（四街道市）・南敷砦跡（大栄町）・椎津城跡（市原市）・臼井城跡（佐倉市）・生実城跡（千葉市）の発掘調査例から、堀や曲輪から出土する石塔類が「城割り」行為によるものとした。^{②-238}また、吉田博之氏は1993年、大須賀氏系列城跡の発掘調査から、本城松子城（大栄町）から遠い鴛崎城（佐原市）・武田砦（神崎町）は日常生活痕跡は薄く16世紀前半に廃城するが、近接する久井崎城・馬洗城（大栄町）は日常生活痕跡が濃く16世紀後半まで存続し、16世紀後半に在地城が廃棄され本城周辺に集まる可能性を明らかにした。^{②-250}1993年には、柴田氏・笹生衛氏他によって中世遺跡発掘調査例が集中した小櫃川流域遺跡の調査概要と変遷がまとめられ、中世前期に成立した集落が15世紀に廃絶し以降の集落は集村化し近世に連続すること、16世紀前半の城郭には日常生活空間があり城郭と集落が一体化したものであるが、後半はより軍事性を重視した施設へ変化すること等が指摘され、今後の城館研究は中近

世遺跡全体の中で行われるべきであるという視点が既に提示されている。集落との関係では、柴田氏は1994年、戦国期前半には集落と一体化した構造の城郭がある（村落型城郭＝笹子城先端部・埴谷周路遺跡・池ノ尻館跡）が、戦国期後半には惣構構造の城郭が登場（都市型城郭＝本佐倉城跡・臼井城跡・馬洗城跡）し、集落一体型城郭の多くが廃城になることを打ち出し、1995年には県内中世城館の変遷を概観した。また、井上は1995年、小林城跡の調査成果から改造・「破城」行為に着目し、15世紀から16世紀にかけての同城について、村の墓域→方形単郭館→腰曲輪造成→城割による堀の埋めたて（廃城）という変遷を明らかにした。これらは、「もの」の時期的変化から歴史を構築するという点、正に城郭研究法の主力が考古学に移行してきたことを意味すると考えられる。1994年、当センターによる『房総考古学ライブラリー 8 歴史時代(2)』が刊行された。井上は、柴田氏と同様に城館の変遷や県内地域毎の主要中世城館跡の特色を概略し、鳴田浩司氏は近世城館跡の調査成果を提示したが、これが千葉県内中近世城館跡の考古学的成果をまとめた最初であろう。

1990年代後半の主な発掘調査例としては、北ノ作遺跡・館ノ山遺跡（四街道市）、高品城跡（千葉市）（第48図・図版7-1）、松尾城跡（松尾町）、富津陣屋跡（富津市）（図版12-1）、西郷氏館跡（鴨川市）（図版12-2）等がある。北ノ作遺跡では、斜面も含むほぼ全域が発掘調査されて斜面部の整形が確認され、15世紀末から16世紀前葉の建物群・障子堀・大規模井戸等が検出された（第37図・図版4, 5）。同遺跡に近い館ノ山遺跡は、空堀で区画されながらも15世紀前半を中心とする屋敷跡が検出され、篠本城跡の小型タイプの様相を示す（図版3）。また、富津陣屋跡（富津市）や松尾城跡（松尾町）の発掘調査は幕末から近代にかけての調査例として注目されるものである。また、北大堀遺跡をはじめとした本佐倉城跡（酒々井町）周辺の遺跡発掘調査報告書が続々刊行され、今後の「惣構研究」の進展が期待される。

最近の個人研究では、発掘された遺構に関する研究は未だ少ないが、池田光雄氏は1996年、「堀内部障壁」について千葉県内の発掘調査例を紹介し、従来後北条氏系列の城館に造られる施設と認識されていた「障子堀」や障壁が在り地土豪のオリジナルである可能性をあげ、井上は、1998年、千葉県を中心に全国の調査例から堀内部障壁を分類し、既に15世紀前半には各地で障子堀が登場し次第に発展進化したことを明らかにした。また、眞嗣史氏は1997年、君津地域の中近世遺跡調査例の存続期間を出土遺物から集成したが、16世紀後半の遺物が検出される例が少ないことを明らかにした。この空白は集落の移動や城館の機能分化の問題を含むもので、県内他地域でも同様な傾向である。遺物論では、笹生衛氏は1991年、従来空白であった房総の中世土器（カワラケ）編年を提示し、以降の指針となった。また、藤沢良祐氏は、『瀬戸市史』（1993年）で瀬戸・美濃窯の古瀬戸後期様式（15世紀後半）から大窯5期（17世紀前半）の製品が出土した千葉県内の23遺跡（内城館跡18か所）を表で取りあげ、遺跡ごとの盛衰を集成している。

1998年、現在の県内中世遺跡研究の到達点として、新編千葉県史ともいべき『千葉県の歴史 資料編 中世1 考古資料』が刊行された。年代推定基準としての土器・陶磁器の編年が示され、多くの県内埋蔵文化財担当者によって各地の中世遺跡の考古学的調査成果が集成された。千葉県は中世遺跡調査例が多いが、これだけの集成は自治体史としては出色の出来であろう。また、城館研究にとっては、縄張り構造主体の集成であった『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書』（1995, 1996年）の考古学的成果を補完し、従来の自治体史のスタイルである縄張り研究や文献史学による叙述に対し、集落や墓域等も含めた中世遺跡全体の中で研究すべきであるという視点が見られ、今後の城館研究（中近世考古学）の主流となるものと言えよう。そういった例として最近では、笹生衛氏が1999年、14世紀後半と15世紀後半の村落構造・景

観の変化に着目して城館との関連を考察している。^{②-375}

(3) 文献研究

千葉歴史学会中世史部会が作成した論文集『中世房総の権力と社会』^{④-112} (1991年)では、直接城館に関わるものはないが、後北条氏権力の関宿城や本佐倉城支配について、長塚孝氏・黒田基樹氏・外山信司氏によって考察されている。また、滝川恒昭氏は従来にない視点として「海城」・「湊」等の水上交通に着目した^{②-251,278,279,353} (1993,1994,1997年)。考古学と合わせた研究としては、柴田龍司氏が1992年、東国の中世史料上に登場する「曲輪」を検討し、主郭部に含まれない区画であったこと等を明らかにした。^{②-239}

(4) 歴史地理学的研究

近年は交通の視点で城郭を見直す論考が出ている。文献史学の項でも取り上げた「海城」の他、遠山成一氏は、陸上交通や、「舟戸」・「船津」地名に注目して水運について集成し^{②-268,269} (1994,1996年)。外山信司氏も1997年、高品城跡(千葉市)について陸上交通の面から検討している。^{②-340}

7. 今後の課題

縄張り研究に関しては、資料としての縄張り図(概念図)・測量図等が集成されてきたので、比較・検討が必要である。特に、従来の漠然としたイメージではなく、数値化したデータによる比較・検討が必要であろう。

考古学研究に関しては、まず、発掘された遺構群の比較・検討が殆ど行われていないので、今後必要であろう。具体的には、空堀・土塁・掘立柱建物跡・門跡・土坑・地下式坑等である。また、遺物については、貿易陶磁器・瀬戸美濃・常滑・渥美等の搬入品の編年は深化しているものの、カワラケ・瓦質土器(播鉢・内耳鍋)等の在地土器の地域を細分した編年研究が必要である。今後最も必要な課題は、16世紀後半の問題である。つまり、文献史料上、または縄張り構造上、16世紀後半から末まで機能していたと推測される城館に当概期の遺物群の出土が少ないことである。これは、遺物の出土がなく生活痕跡が見られなくなることは、①大規模城郭に取り込まれて廃城となったのか、②機能が変化し常駐しない城となったのか、の二とおり考えられるがいずれなのかを各城館跡で検討しなければならない。なお、この時期東国において瀬戸美濃製品の搬入量が減少することとも関連するが、中近世全般の時期ごとによる搬入陶磁器の搬入量や在地土器の生産量も含めて考えるべきものであろう。さらに、重要な視点としては、城館跡に限るのではなく、中近世遺跡全体の歴史的変動の中で検討する必要があるであろう。

文献史学、歴史地理学研究に関しては、従来通り個別城館跡の検討が必要であるが、例えば、江戸時代の軍記物の検討や城館関連地名のマクロ的検討等が可能であろう。

以上、方法論別に課題を記したが、補完しながらの総合的な研究は既に開始されており、今後更にその必要性が求められるものであろう。本書は、以上の様々な課題に近づける様、縄張り構造等のデータ化、遺構の分析、在地土器の編年を試みたものであるが、今後の研究の叩き台となれば幸いである。

第1章 城館の構造等について

井上哲朗

第1節 データについて

1. はじめに

千葉県内の中近世城館跡の内、概念図や測量図が作成され、それが報告書・雑誌・単行本等の印刷物によって公表されているものを対象とした。したがって、県内全域の城館跡約1,000箇所全てではなく、発掘調査が行われて大きな成果があっても、過去に破壊される等の結果、全体の縄張り構造が不明なものは除外した。第3表 千葉県内中近世城館跡構造・地名・時期等データの計測等に使用した主な文献は以下の通りである。

- ・千葉県教育委員会『千葉県中近世城跡研究調査報告書』第1集 (1981年) ～第18集 (1998年)^{③-074,083,092,113,137,145,155,162,174,187,203,221,232,241,260,281,291}
- ・小高春雄『長生の城』 (1991年)^{④-116}
- ・千葉県教育委員会『千葉県内中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅰ－旧下総国地域－』 (1995年)^{③-245}
- ・千葉県教育委員会『千葉県内中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ－旧上総・安房国地域－』 (1996年)^{③-263}
- ・千葉県『千葉県の歴史 資料編 中世1 (考古資料)』 (1998年)^{①-091}
- ・その他、各城館跡発掘・測量調査報告書

以下、データ計測方法や留意点等を記して表の凡例としたい。

なお、地域区分と市町村番号については第5図を参照されたい。第6図～第11図は、1/20万の城館跡分布図であり、図中の番号は第3表及び第12図～第164図中の各城館跡に付した番号に一致する。第3表の並び順は、①地域 (A～K)、②市町村番号 (1～81)、③曲輪面積 (大→小) とした。

2. 立地

地形区分は、丘陵地形・台地地形・低地の3区分とした。丘陵と台地の区別は、比高があり山上は尾根沿いに狭い平地を持つものを丘陵、比高がなく山上に比較的広い平地がある地形を台地としたが、千葉県内の丘陵・台地の境は比較的わかりやすい (第4図参照) とはいえ、主観的な判断も強い。低地は、いわゆる沖積地や台地や丘陵の下部 (裾部) である。地形内位置は、丘陵・台地地形のうち、城跡が占地する範囲が先端部か内部 (奥) か、先端部から奥 (広域に広がる) かで分けた。低地の沖積地の城館跡については、仮に内部 (奥) に分類した。比高は、基本的には周囲の水田面から主郭面までの高さとしたが、周囲の水田面の計測位置により差があるため、特に丘陵の城郭では数mの誤差がある。

3. 曲輪数・曲輪面積

主要郭は、基本的には山上の比較的広い平地が相当する。主郭は、縄張り構造上、攻撃され、また防御の際、最終的に行き着くと考えられる平地 (最終的な詰めの部分) で城主クラスの駐屯地区または居住区でもありと考えられる部分、Ⅱ郭・Ⅲ郭・Ⅳ郭等は、それに準ずる平地で家臣団クラス以下の駐屯地区と想定した。主郭は、中世では「実城」・「御城」等、江戸時代は「本丸」と言われ、それに準ずる郭は、中

世は「中城」・「一曲輪」等、江戸時代は「二ノ丸」・「三ノ丸」等と言われる。他の主要郭は、山上ではあるが、防御上の優先順位が低いもの、腰曲輪は斜面に造成された平場である。ただ、丘陵の城郭では、山頂ではなく、斜面に造成された平場が主要郭となる場合が多い。外郭部は、主要郭の外側に位置する広い平場部分で、土塁等の明確な遺構が見られない場合もあるが、戦略上、城域に含めた方がよいと考えられる地区で、機能的には城下町衆や百姓等の避難区域或いは足軽や馬の駐屯地と考えられる地区である。ただ、本佐倉城や佐倉城などの城下町域を含む「惣構」は、外郭部としては表中には含んでいない。曲輪の数や面積合計については、従来、 $\bigcirc\text{m} \times \bigcirc\text{m}$ と測定されていた城域面積が、斜面部を含むので、例えば丘陵の城郭面積が台地の城館に対して膨大となってしまうのに対し、より城郭規模や城主階級の比較判断材料となるものであろう。なお、面積測定にはプランメーターを使用したがる、概念図の精度の問題で、1の位、場合によっては10の位を四捨五入した。

4. 堀

堀には堀切・横堀・豎堀等の種類がある。堀切は尾根や台地の上を切るもの、横堀は斜面のコンタに平行になるように切るもの、豎堀は斜面のコンタに対して垂直になるように山上から下に切るものである。横堀の数については、一部埋もれているものもあり、堀切と連続して曲輪を巡らすものが多いので、各曲輪に対するセットの数を数えた。なお、長さについては、埋もれているものも多い筈なので、明らかに埋没していると推定できるものは、その長さに含めた。

5. 土塁

土塁も堀同様、破壊されて一部しか残存していないものもあるが、明らかに存在したと推測されるものについてはその長さに含めた。土塁状尾根については、丘陵の城郭に多く見られるもので、馬の背状の尾根頂部を残し、直下から数m下の斜面に平場を造成することによって、尾根筋が平場（曲輪）間の通路を含む土塁的機能を有すると推測されるものである。

6. 特殊構造

城郭構造の発展や領主による差異を検討するものとして、折れ歪み数・枳形虎口数・馬出し曲輪数を入れた。折れ歪みについては、鍵の手状の2回折れを1として数えた。なお、丘陵城郭では、尾根と谷による自然地形に沿った形で造成されて直線的ではなくても平場が折れ歪み状となる場合が多く、限りなくなってしまうので、基本的に空堀に伴うものとした。ただ、空堀は斜面による障害を造り出す施設であるので、比高があり斜面の傾斜がきつい丘陵城郭では少なく、比高のない台地城館では多く見られるので、丘陵城郭ではデータに表れない平場の折れ歪みは多い。つまり、同地形であれば数の違いは城主の階層・城の機能・時期等を表す指標になるが、異地形間の比較については留意しなければならないだろう。枳形虎口については、近世城郭の様に直線的に土塁を配置して明確な枳形空間を造り出したものと、曲輪の虎口外側に存在する空堀の片方を虎口付近で折り曲げて片矢構造としているものを、枳形空間を意識しているものとして不明確な枳形虎口に分けた。なお、合い矢構造のものは明確な枳形虎口として捉えた。

7. 地名

城館跡内または周辺の字名・通称地名・屋号等のうち、頻繁に見受けられる「掘之内」・「要害」・「城山」・「根小（古）屋」・「宿」の有無を記し、他の地名も掲載した。「根小屋」の機能は、山上の「詰め」部分とセットになる常駐地区で16世紀後半に多く現れる名称と考えられている。しかし、近年の発掘調査では、山上の曲輪内でも多くの建物跡や遺物が検出されて生活痕跡が確認されており、「根小屋」の機能は再検討される必要が出てきたと言えよう。また、「宿」は城下町の原初的形態と見られることから、それらが縄張構造や発掘調査例と合わせて検証できるか試みたものである。ただ、今回取り上げた城館跡は全体構造等がわかるもののみであるので、城館関連地名としてのデータは不足と言える。

8. 発掘調査遺物時期

県内の発掘調査事例と瀬戸・美濃編年から、①12世紀～14世紀前半、②14世紀後半～15世紀前半、③15世紀後半～16世紀初頭、④16世紀前葉～中葉、⑤16世紀後半～17世紀初頭、⑥17世紀前葉～19世紀の6期に分類した。①と②の境は、集落の景観が散村から集村化し古瀬戸後期の遺物が出土し始める14世紀後半を一つの画期と考えた。②と③の境は、山上（丘陵・台地上）の城館跡に古瀬戸後IV期～大窯1期までの製品が出土する例が多いので一つの画期と考えた。④は大窯1・2期で、房総内部での国人領主間の勢力紛争期にあたり、⑤は大窯3・4期の出土遺物が検出されたもので、遺物の年代的には近世初頭まで連続する傾向がある。後北条氏による両総支配が行われた16世紀半ばから幕藩体制が確立していく時期である。

9. 伝承

主に近世軍記物を元に著された『上総国誌』（1877年）や『千葉縣誌』（1919年）等を参考とした。一次史料の少ない東国においては、近世初頭に書かれた史料は当然のことながら、伝承もまた参考史料となろう。また、全く伝承も存在しない城館跡もそれなりの意味があると考えられる。

10. 確実な史資料からと推測

城主・攻防等は、第一次文献史料や発掘調査成果から推定される城主や城館の機能について記した。時期区分としては、以下の様にI期～III期が中世、IV期・V期が近世の5期に分類した。

I期（12世紀～15世紀前半） 鎌倉時代・南北朝時代・室町時代前期。

II期（15世紀後半～16世紀初頭） 戦国時代前半、国人領主間の勢力争いの時期。

III期（16世紀前葉～16世紀末） 戦国時代後半、後北条氏の両総侵攻と支配及び里見氏の対抗の時期。

IV期（16世紀末～17世紀初頭） 徳川家臣団の入部と幕藩体制確立期。

V期（17世紀前葉～19世紀） 幕藩体制充実期から幕末の対外国船対策・廃藩置県までの時期。

発掘調査出土遺物による区分より1時期少ないのは、城館跡における遺物出土が少ないのでまず①と②を合わせてI期とした。また、④（16世紀前葉～中葉）と⑤（16世紀後半～17世紀初頭）については、全面的な発掘調査をされていないものが多いこと、16世紀後半に常駐しない（遺物を伴わない）城が現れた可能性があること等から細分が不可能なものが多いので、16世紀前葉～16世紀末をIII期としたことによる。

城・城主クラスについても確実な文献史料や発掘調査成果等を元にしたが、資料を有しないその他の多くの城館跡については、規模・構造・地名・伝承等から類推したものである。つまり、表中の時期と城・

城主クラスの比定の多くは、底章第3節研究史概要で紹介した、主に1980年代後半以降現在までに解明されつつある千葉県内中近世城館の発展過程に基づいて、井上が推測した仮定である。城・城主クラスの分類は次の通りである。

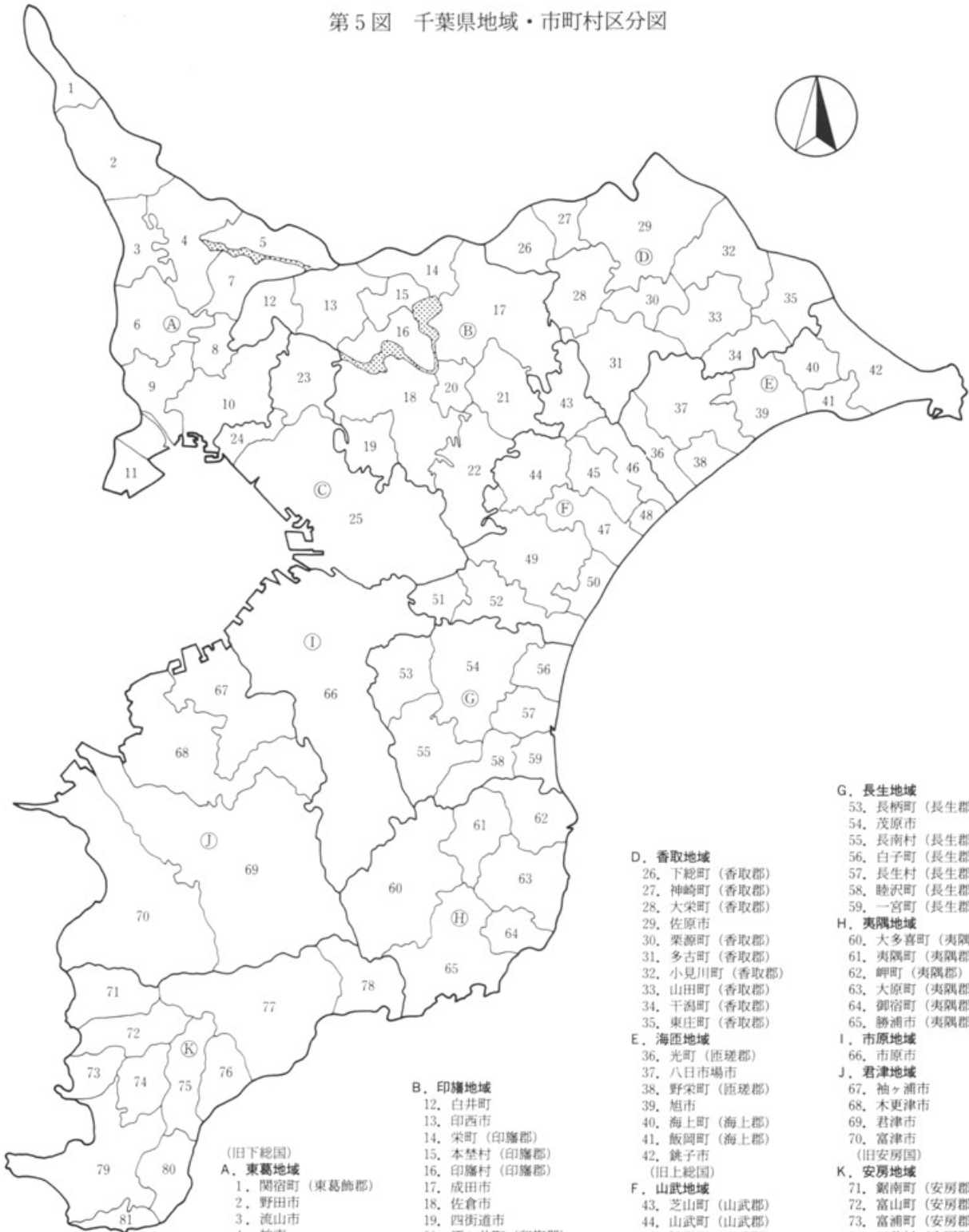
- Aクラス 一国以上の領域を持つ戦国大名（千葉宗家・里見氏）の本城
- Bクラス 一郡～数郡程度の領域を持つ国人領主層・戦国大名被官
（高城・原・大須賀・国分・酒井・正木・武田氏等）の本城＝戦国大名の支城
- Cクラス 現市町村規模の領域を持つ国人領主重臣層の本城
- Dクラス 数村規模の領域を持つ在地領主層の城
- Eクラス 一村程度の領域を持つ小領主層・上層農民層の城

この仮定による地域、時期、城・城主クラスの分析がどの様に表れるかを第2・第3節で検討していきたい。

11. 概念図・測量図について（第12図～第164図）

計測してデータ表に掲載した城館跡の概念図・測量図については、なるべく多く掲載したが、紙数の都合上全ては収録していない。スケールは、1/2,500と1/5,000を基本としたが、発掘調査全体図は1/500・1/1,000のものもある。各城館跡の主郭・II郭・III郭・その他の主要郭・腰曲輪・外郭部・空堀・土塁・土塁状尾根等は、計測の前にまず、図上で判断して色鉛筆で塗り分ける作業があった。その際、特に主要郭の位置づけは、基本的には各文献・概念図等作成者の判断によるが、井上が変更したものも多く、図中に「I」「II」「III」「外郭」等のキャプションで表示した。

第5図 千葉県地域・市町村区分図



(旧下総国)
A. 東葛地域

- 1. 関宿町 (東葛飾郡)
- 2. 野田市
- 3. 流山市
- 4. 柏市
- 5. 我孫子市
- 6. 松戸市
- 7. 沼南町 (東葛飾郡)
- 8. 鎌ヶ谷市
- 9. 市川市
- 10. 船橋市
- 11. 浦安市

B. 印旛地域

- 12. 白井町
- 13. 印西市
- 14. 栄町 (印旛郡)
- 15. 本埜村 (印旛郡)
- 16. 印旛村 (印旛郡)
- 17. 成田市
- 18. 佐倉市
- 19. 四街道市
- 20. 酒々井町 (印旛郡)
- 21. 富里町 (印旛郡)
- 22. 八街市

C. 千葉地域

- 23. 八千代市
- 24. 習志野市
- 25. 千葉市
(旧山武郡土気地区を除く)

D. 香取地域

- 26. 下総町 (香取郡)
- 27. 神崎町 (香取郡)
- 28. 大栄町 (香取郡)
- 29. 佐原市
- 30. 栗源町 (香取郡)
- 31. 多古町 (香取郡)
- 32. 小見川町 (香取郡)
- 33. 山田町 (香取郡)
- 34. 千鶴町 (香取郡)
- 35. 東庄町 (香取郡)

E. 海匝地域

- 36. 光町 (匝瑳郡)
- 37. 八日市場市
- 38. 野栄町 (匝瑳郡)
- 39. 旭市
- 40. 海上町 (海上郡)
- 41. 飯岡町 (海上郡)
- 42. 銚子市
(旧上総国)

F. 山武地域

- 43. 芝山町 (山武郡)
- 44. 山武町 (山武郡)
- 45. 松尾町 (山武郡)
- 46. 横芝町 (山武郡)
- 47. 成東町 (山武郡)
- 48. 蓮沼村 (山武郡)
- 49. 東金市
- 50. 九十九里町 (山武郡)
- 51. 千葉市土気地区
- 52. 大網白里町 (山武郡)

G. 長生地域

- 53. 長柄町 (長生郡)
- 54. 茂原市
- 55. 長南村 (長生郡)
- 56. 白子町 (長生郡)
- 57. 長生村 (長生郡)
- 58. 睦沢町 (長生郡)
- 59. 一宮町 (長生郡)

H. 夷隅地域

- 60. 大多喜町 (夷隅郡)
- 61. 夷隅町 (夷隅郡)
- 62. 岬町 (夷隅郡)
- 63. 大原町 (夷隅郡)
- 64. 御宿町 (夷隅郡)
- 65. 勝浦市 (夷隅郡)

I. 市原地域

- 66. 市原市

J. 君津地域

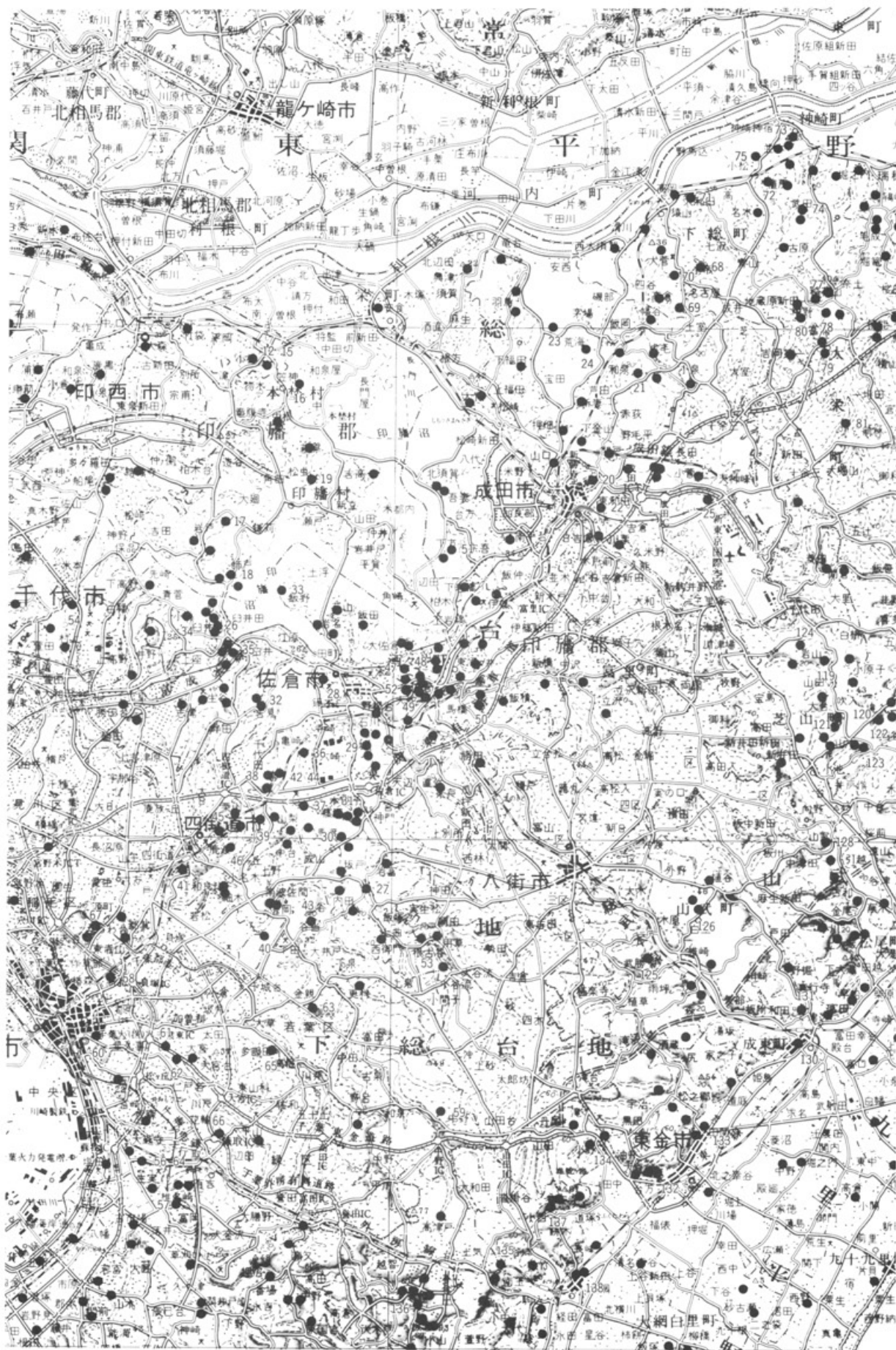
- 67. 袖ヶ浦市
- 68. 木更津市
- 69. 君津市
- 70. 富津市
(旧安房国)

K. 安房地域

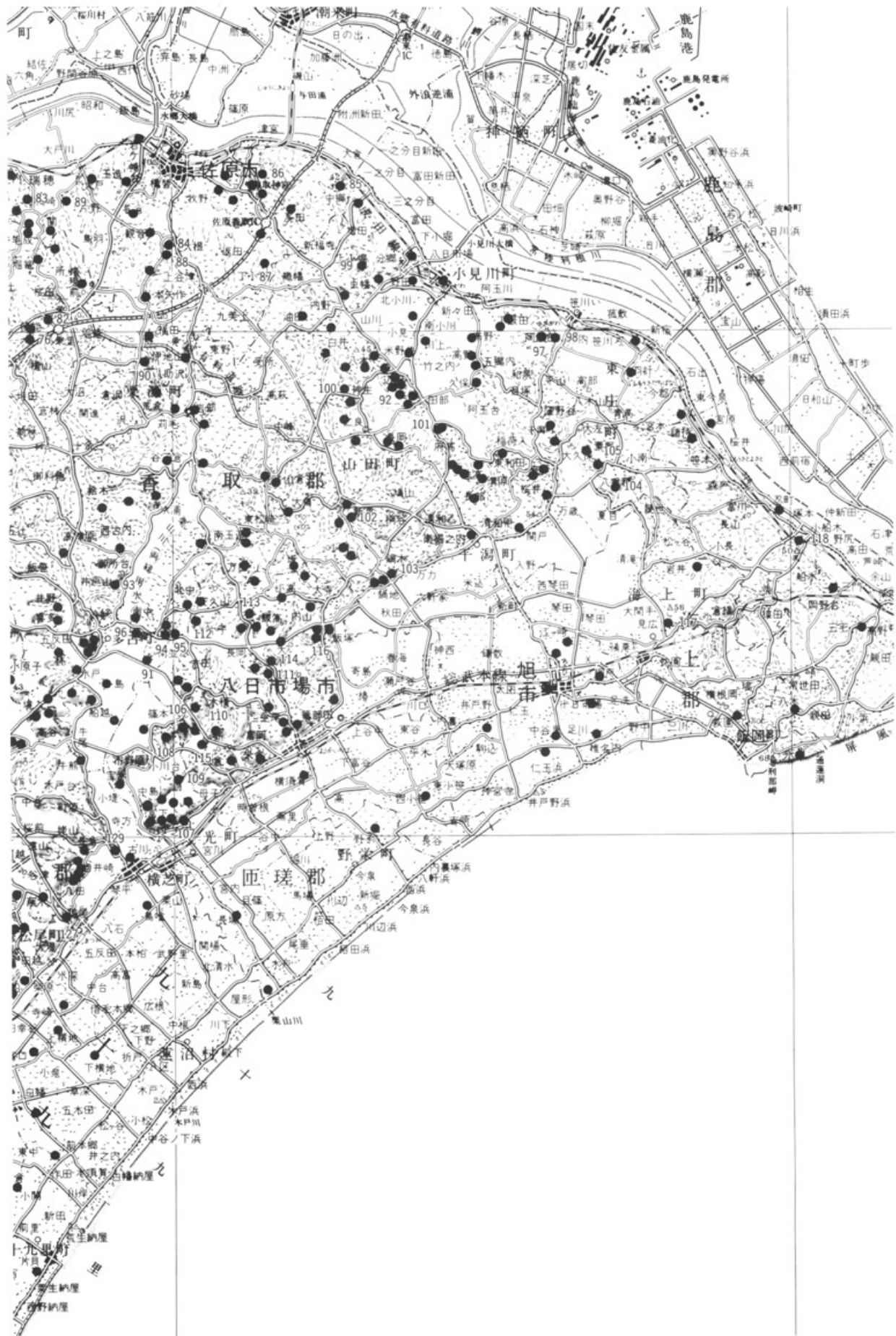
- 71. 鋸南町 (安房郡)
- 72. 富山町 (安房郡)
- 73. 富浦町 (安房郡)
- 74. 三芳村 (安房郡)
- 75. 丸山町 (安房郡)
- 76. 和田町 (安房郡)
- 77. 鴨川市
- 78. 天津小湊町 (安房郡)
- 79. 館山市
- 80. 千倉町 (安房郡)
- 81. 白浜町 (安房郡)



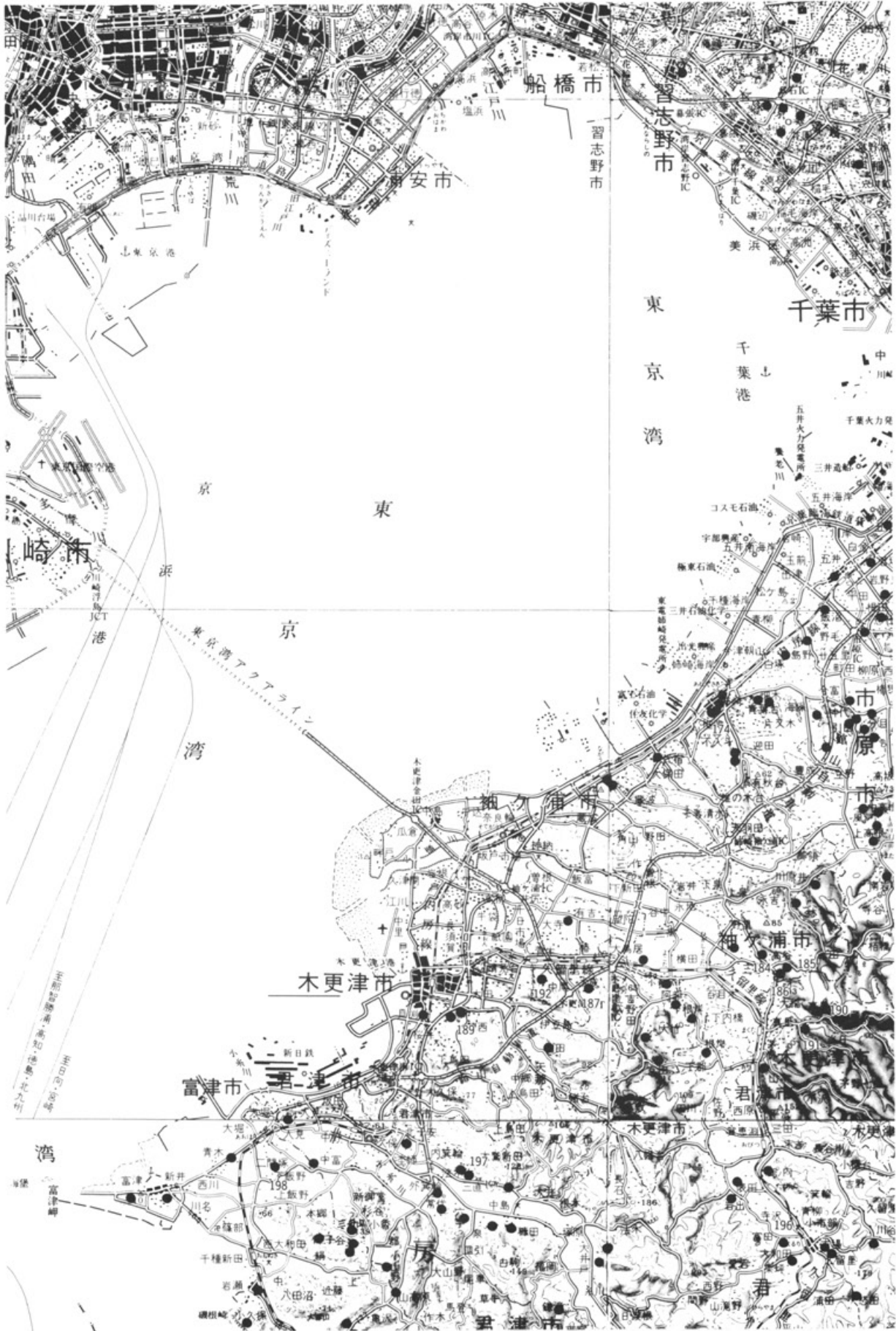
第6図 北西部の中近世城館跡分布 (1/20万)



第7図 北部中央の中近世城館跡分布 (1/20万)



第8図 北東部の中近世城館跡分布 (1/20万)



第9図 中央西部の中近世城館跡分布 (1/20万)



第11図 南部の中近世城館跡分布 (1/20万)

第1章 城館の構造等について

第3表 千葉県内中近世城館跡 構造・地名・時期等データ

並び順：①地域、②市町村、③曲輪面積大→小

城・城主クラス：A：一国以上の領域を持つ戦国大名（千葉宗家・里見氏）の本城/B：一部～数郡の領域を持つ、国人領主層・戦国大名被官（原・大須賀・国分・酒井・正木・武田等）の本城＝戦国大名の支城/C：現市町村規模の領域を持つ、国人領主重臣層の本城/D：数村規模の領域を持つ在地領主層の城/E：一村程度の領域を持つ小領主層・上層農民層の城

番号	遺跡名	所在地		立地							曲輪数			曲輪面積 (㎡)							空堀					
		現在地名	地域	市町村	地形区分			地形内位置				主要	他・腰	合計	主郭	II郭	III郭	他の主要郭	主要郭面積合計	腰曲輪	外郭部	合計	横堀セツト数	堀切数	堅堀数	堀長さ
					丘陵	台地	低地	先端	内部・奥	先端から奥	比高															
1	金野井城跡	野田市金野井字堀の内	A	2	0	1	0	1	1	0	1	3	0	3	3100	3470	7420		13990			13990	3	0	0	820
2	戸張城跡	柏市戸張城山台	A	4	0	1	0	1	0	0	15	2	3	5	3710	7310			11020	540	12920	24480	0	0	0	160
3	松ヶ崎城跡	柏市松ヶ崎字善	A	4	0	1	0	1	0	0	16	2	12	14	1150	300			1450	3520	14310	19280	1	1	2	350
4	増尾城跡	柏市増尾稲荷木	A	4	0	1	0	1	0	0	14	2	11	13	220	5310			5530	850		6380	2	0	1	380
5	根戸城跡	我孫子市根戸字荒迫	A	5	0	1	0	1	0	0	11	2	7	9	720	680			1400	600		2000	2	0	0	220
6	小金城跡	松戸市谷口字本城	A	6	0	1	0	1	0	0	19	5	10	15	6460	8170	21900	16200	52730	9900	165600	228230	2	0	4	5050
7	手賀城跡	東葛飾郡沼南町手賀字下ノ坊他	A	7	0	1	0	1	0	0	15	9	18	27	2920	?	?	82500	85420	15000	26000	126420	?	?	1	150
8	藤ヶ谷城跡	東葛飾郡沼南町藤ヶ谷字城ノ堀	A	7	0	1	0	1	0	0	10	1	10	11	1700	?	?	75000	76700	23000		99700	?	2	?	240
9	箕輪城跡	東葛飾郡沼南町箕輪字城山	A	7	0	1	0	1	0	0	17	5	3	8	3200	2100	3450	400	9150	250		9400	3	0	0	490
10	佐津間城跡	鎌ヶ谷市佐津間字敷敷	A	8	0	1	0	1	0	0	13	1	2	3	840				840	290	13090	14220	2	0	0	380
A:東葛飾地域平均値				0.0	1.0	0.0	1.0	0.1	0.0	13	3.2	8	11	2402	3906	10923	43525	25823	5994	46384	54410	1.9	0.3	0.9	824	
11	小森城跡	印旛郡白井町平塚	B	12	0	1	0	1	0	0	17	2	1	3	2310	3770			6080	200		6280	2	0	0	400
12	小林城跡(新)	印西市小林字城山	B	13	0	1	0	1	0	0	29	3	6	9	510	710	880		2100	1680		3780	1	0	6	300
13	手倉岩跡	印西市白旗字楡山	B	13	0	1	0	1	0	0	15	2	0	2	1690	1420			3110			3110	2	1	0	350
14	竜塚城跡	印西市浦部字神山	B	13	0	1	0	1	0	0	13	1	6	7	1870				1870	990		2860	1	0	0	100
15	小林城跡(古)	印西市小林字城山	B	13	0	1	0	1	0	0	29	1	0	1	1230				1230			1230	1	0	0	230
16	笠神城跡	印旛郡本埜村笠神	B	15	0	1	0	1	0	0	24	5	5	10	1320	650	410	490	2870	3930		6800	0	3	0	50
17	高田山城跡	印旛郡印旛村岩戸字高田山	B	16	0	1	0	1	0	0	23	2	5	7	3010	6100			9110	280	49280	58670	2	0	0	380
18	師戸城跡	印旛郡印旛村師戸字竜ヶ谷	B	16	0	1	0	1	0	0	23	3	2	5	1780	2650	12230		16660	1050	6710	24420	3	0	0	590
19	松虫陣屋跡	印旛郡印旛村松虫字談合所	B	16	0	1	0	1	0	0	25	1	2	3	1200				1200	720	2870	4790	1	0	0	170
20	寺台城跡	成田市寺台字保目	B	17	0	1	0	1	0	0	20	4	6	10	3770	3570		10140	17480	7440		24920		1	0	90
21	東和泉城跡	成田市東和泉字城山	B	17	0	1	0	1	0	0	20	4	18	22	1470	3360		1900	6730	12870		19600	0	0	1	80
22	東和田城跡	成田市東和田字要害御所内	B	17	0	1	0	1	0	0	28	3	5	8	2950	730	2700		6380	1370		7750	1	0	1	175
23	長沼城跡	成田市長沼字城ノ内	B	17	0	1	0	1	0	0	22	1	6	7	5200				5200	2330		7530	1	0	0	90
24	荒海城跡	成田市荒海字橋本	B	17	0	1	0	1	0	0	26	2	17	19	3040	300			3340	2080	420	5840	0	3	0	80
25	駒井野城跡	成田市駒井野字東・本郷・館曲輪	B	17	0	1	0	1	0	0	17	3	4	7	1100	2770		140	4010	500		4510	0	0	0	80
26	臼井城跡	佐倉市臼井田字城ノ内	B	18	0	1	0	0	0	1	20	2	10	12	7670	9420			17100	3230	103010	123340	2	3	1	1400
27	岩富城跡	佐倉市岩富町城手下・本宿・下宿他	B	18	0	1	0	0	0	1	24	2	4	6	4020		6020		10040	3550	61520	75110	1	0	0	190

土 壘		構 造				地 名						発掘調査遺物時期					伝承(近世軍記物等)	確実な史資料からと推測										
土壘長さ	土壘扶尾根	折れ歪み数	櫓形虎口(明確)	櫓形虎口(不明確)	馬出し	堀之内	要害	城山	根小(古)屋	宿	他	12c ~14c前	14c 後~15c前	15c 後~16c初	16c 前~中	16c 後~17c初		17c 中~19c	城主・攻防等	I期	II期	III期	IV期	V期				
270	0	2	0	0	0	1	0	1	0	0			1						?	D	--	--	--					
200	0	1	0	0	0	0	1	1	0	0	城山谷・城下・用替	1	1	1			15c中~相馬行胤子孫戸張		?	C	C	--	--					
280	0	4	1	0	0	0	0	0	0	0	本郷								?	C	C	--	--					
560	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	本郷・木戸前							14c相馬師胤→16c高城氏家臣平川若狭守	?	C	C	--	--					
320	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0			1				13c末相馬胤光(根戸氏)→15c後葉太田資長築城		?	C	C	--	--					
1120	0	15	0	0	0	0	0	0	1	0	本城・馬場・金杉口	1		1	1	1	13c中葉千葉胤頼築城、1460年高城胤忠根木内城築城→1537年孫胤吉築城→孫胤利→1590年廃城	1590年「関東八州諸城覚書」・「北条氏人数覚書」高木(高城)胤則700騎(以下<>内)	?	B	B	--	--					
470	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	馬場・木戸脇							手賀原3代~胤采時1590年廃城		?	B	B	--	--				
	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	城ノ囀・中木戸・馬場							16c初藤ヶ谷氏		?	D	C	--	--				
920	0	3	0	0	0	0	0	1	0	0			1					高城伊勢守		?	D	C	--	--				
400	0	4	0	0	0	0	0	0	1	0	南木戸	1								?	D	D	--	--				
504	0	3.9	0.1	0.1	0.0	0.1	0.1	0.3	0.2	0.0			4	3	2	1	1	0	左右は合計					0	10	9	0	0
310	0	2	0	0	0	0	1	0	0	0	本郷								千葉氏系	?	D	?	--	--				
250	0	3	0	0	0	0	0	1	1	1	大門下・馬場		1					原肥前守、別説原伊予守~1590年廃城	16c原氏系か	--	D	D	--	--				
360	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0										?	D	--	--	--				
150	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1										?	D	--	--	--				
170	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			1							E	--	--	--	--				
200	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0								笠上信濃(千葉氏家臣)、他説原豊前守		?	D	D	--	--				
450	0	8	0	1	0	0	0	0	0	0										?	D	D	--	--				
590	0	4	0	1	0	0	0	0	1	0	道場台							14c師戸氏	16c原氏系か	?	D	D	--	--				
170	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0								栗林	臼井・原氏系	?	D	D	--	--				
40	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0								東胤文(馬場氏)→胤門→胤郷→14c前葉千葉胤重(馬場氏)→胤忠→胤有→胤友→胤森~1590年勝政		?	D	D	--	--				
120	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	登城門							13c初大須賀英胤	大須賀範胤(成毛氏)か	?	D	D	--	--				
15	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	御所内	1	1							?	D	D	--	--				
270	5	1	0	0	0	0	0	0	0	0	城ノ内							長沼武俊(千葉氏系)		?	D	D	--	--				
70	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0								千葉常胤孫胤村(荒見氏)		?	D	D	--	--				
120	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	館曲輪									?	D	D	--	--				
240	0	4	0	1	0	0	0	0	0	1	御屋敷・城内・城ノ内・外城			1	1	1		千葉常安(臼井氏)後代々→原胤貞~1590年孫胤義→酒井家次(1593年火災)~1604年廃城	15c臼井氏→16c原氏→<原大炊助2500騎>17c初酒井氏	?	B	B	B	--				
530	0	3	0	1	0	0	0	0	0	1	城手下・外口・木戸・本宿・台宿							15c~16c岩富原氏→17c初北条氏勝	15c~16c岩富原氏→17c初北条氏勝~1613年	?	B	B	B	--				

第1章 城館の構造等について

番号	遺跡名	所在地		立地						曲輪数			曲輪面積 (㎡)							空堀						
		現在地名	地域	地形区分			地形内位置			比高	主要	他・腰	合計	主郭	日郭	皿郭	他の主要郭	主要郭面積合計	腰曲輪	外郭部	合計	横堀セツト数	堀切数	竪堀数	堀長さ	
				丘陵	台地	低地	先端	内部・奥	先端から奥																	
28	佐倉城跡	佐倉市城内町	B	18	0	1	0	0	0	1	28	4	8	12	1490	2270	3340	1560	8660	500	49280	58440	5	0	0	2310
29	城跡	佐倉市城	B	18	0	1	0	1	0	0	20	2	10	12	2730	3620			6350	2070	2640	11060	0	1	0	100
30	馬渡大内城跡	佐倉市馬渡字大内	B	18	0	1	0	1	0	0	18	3	3	6	3530	600	2700		6830	1240		8070	0	0	0	220
31	小森塚城跡	佐倉市小森塚	B	18	0	1	0	1	0	0	18	4	10	14	3270	1820	750	580	6420	1520		7940	3	0	0	240
32	臼井屋敷跡	佐倉市吉見字臼井屋敷	B	18	0	1	0	1	0	0	14	3	0	3	940	960		540	2440		3720	6160	0	0	0	150
33	飯野城跡	佐倉市飯野	B	18	0	1	0	1	0	0	19	2	4	6	3960				3960	650		4610	0	0	0	40
34	小竹城跡	佐倉市小竹字中内	B	18	0	1	0	1	0	0	18	1	0	1	4100				4100			4100	1	0	0	300
35	臼井田宿内砦跡	佐倉市臼井田宿内	B	18	0	1	0	1	0	0	20	2	10	12	500	800			1300	1710		3010	0	0	0	30
36	太田要害城跡	佐倉市太田字用替	B	18	0	1	0	1	0	0	28	1	3	4	2510				2510	450		2960	1	0	2	350
37	大森塚城跡	佐倉市大森塚童替	B	18	0	1	0	1	0	0	20	1	5	6	150				150	240		390	1	0	4	270
38	古屋城跡	四街道市物井字北ノ作	B	19	0	1	0	1	0	0	17	3	12	15	4400	4000	300		8700	3800		12500	1	0	0	350
39	鹿渡城跡	四街道市鹿渡字戸崎	B	19	0	1	0	1	0	0	16	4	7	11	2720	1300	230	2300	6550	1150		7700	1	2	4	530
40	木出城跡	四街道市古岡字木出	B	19	0	1	0	1	0	0	8	1	0	1	3720				3720		2600	6320	1	0	0	450
41	和良比堀込城跡	四街道市和良比字堀込	B	19	0	1	0	1	0	0	15	2	4	6	1200	1770	460	810	4240	1270		5510	1	1	1	480
42	北ノ作遺跡(新)	四街道市物井字北ノ作	B	19	0	1	0	1	0	0	16	1	12	13	2000				2000	1000	1250	4250	1	2	1	150
43	福星寺館跡(古岡城)	四街道市古岡字下夕山	B	19	0	1	0	0	1	0	15	1	0	1	2710				2710			2710	1	0	0	240
44	北ノ作遺跡(古)	四街道市物井字北ノ作	B	19	0	1	0	1	0	0	16	1	4	5	2000				2000	350		2350	1	2	1	100
45	池ノ尻館跡	四街道市栗山字池ノ尻	B	19	0	1	0	0	1	0	20	3	0	3	600	150			750			750	1	0	0	160
46	東作城跡	四街道市鹿渡字東作	B	19	0	1	0	1	0	0	22	2	5	7	160	100			260	250		510	1	0	0	70
47	本佐倉城跡	印旛郡酒々井町本佐倉字城内他	B	20	0	1	0	0	0	1	24	5	35	40	3480	6380	2170	3220	15250	40310	41000	96560	1	4	1	2480
48	向根古谷城跡	印旛郡酒々井町本佐倉	B	20	0	1	0	1	0	0	24	2	17	19	19200	3300			22500		13500	36000	1	2	0	400
49	長勝寺館跡	印旛郡酒々井町上佐倉字上宿	B	20	0	1	0	1	0	0	17	5	13	18	640	370	480	1000	2490	3300	2600	8390	3	2	1	290
50	墨りゅうがい城跡	印旛郡酒々井町墨	B	20	0	1	0	1	0	0	20	3	0	3	2420	2380			4800		2820	7620	1	0	0	520
51	下岩橋城跡	印旛郡酒々井町下岩橋字城山	B	20	0	1	0	1	0	0	25	2	4	6	2530	1220			3750	930		4680	1	0	0	100
52	妙胤寺館跡	印旛郡酒々井町酒々井字猿楽場	B	20	0	1	0	1	0	0	14	2	2	4	2500				2500			2500	2	0	0	450
53	根古谷城跡	八街市根古谷字丸ノ内他	B	22	0	1	0	1	0	0	10	2	2	4	1170	2840			4010	980		4990	1	0	0	80
B:印旛地域平均値					0.0	1.0	0.0	0.9	0.0	0.1	20	2.4	6	9	2762	2391	2513	2062	5662	3150	22881	16061	1.1	0.6	0.6	363
54	米本城跡	八千代市米本字内宿南	C	23	0	1	0	1	0	0	19	4	1	5	4000	3400	2600	10630	20630	1160		21790	1	2	0	230
55	古橋城跡	八千代市古橋字尾崎	C	23	0	1	0	1	0	0	15	2	1	3	2670	4650			7320	550		7870	1	1	5	240
56	生実城跡(北小弓城)	千葉市中央区生実町字本城	C	25	0	1	0	0	1	0	15	5	0	5	2090	3450	4810	15160	25510		221170	246680	3	0	0	1770
57	小弓城跡(南生実城跡)	千葉市中央区生実町字古城	C	25	0	1	0	1	0	0	20	1	3	4	13400				13400	4580	108480	126460	1	0	0	400

第1章 城館の構造等について

番号	遺跡名	所在地		立地							曲輪数			曲輪面積 (㎡)							空堀					
		現在地名	地域	市町村	地形区分			地形内位置				主要	他・腰	合計	主郭	II郭	III郭	他の主要郭	主要郭面積合計	腰曲輪	外郭部	合計	横堀セット数	堀切数	堅堀数	堀長さ
					丘陵	台地	低地	先端	内部・奥	先端から奥	比高															
58	高品城跡	千葉市若葉区高品町	C	25	0	1	0	0	0	1	20	4	6	10	2300	2300	2000	5500	12100	15000	34000	61100	1	5	1	380
59	中野城跡	千葉市緑区中野町	C	25	0	1	0	0	1	0	26	2	0	2	5620	17140			22760			22760	2	0	1	500
60	支鼻城跡 (千葉城跡)	千葉市中央区支鼻町	C	25	0	1	0	1	0	0	18	2	1	3	11580	270	?	?	11850	460	?	12310	0	0	0	30
61	城ノ腰城跡	千葉市若葉区大宮町字城ノ腰他	C	25	0	1	0	1	0	0	13	1	0	1	10470				10470			10470	0	1	0	150
62	城山城跡	千葉市若葉区大宮町	C	25	0	1	0	1	0	0	23	5	17	22	3560	1420	650	590	6220	3610		9830	0	3	2	290
63	御茶屋御殿跡	千葉市若葉区御殿町字津志野	C	25	0	1	0	0	1	0	13	1	0	1	9020				9020			9020	1	0	0	450
64	森川陣屋跡	千葉市中央区生実町字本城	C	25	0	1	0	0	1	0	0	1	0	1	8000				8000			8000	1	0	0	470
65	多部田城跡	千葉市若葉区多部田町字松崎他	C	25	0	1	0	1	0	0	12	4	1	5	2600	1760	1040	260	5660	50		5710	3	1	0	350
66	立堀城跡	千葉市緑区辺田町	C	25	0	1	0	1	0	0	20	2	5	7	1125	2500			3625	1830		5455	1	0	0	390
67	南屋敷遺跡	千葉市若葉区源町	C	25	0	1	0	0	1	0	22	4	0	4	510	100	140	50	800			800	1	0	0	180
C:千葉地域平均値				0.0	1.0	0.0	0.6	0.4	0.1	17	2.7	3	5	5496	3699	1873	5365	11240	3405	121217	39161	1.1	0.9	0.6	416	
68	名古屋城跡	香取郡下総町名古屋字城山他	D	26	0	1	0	1	0	0	22	2	9	11	6720	48240			54960	3970		58930	0	1	0	160
69	助崎城跡	香取郡下総町名古屋	D	26	0	1	0	1	0	0	20	3	36	39	3220	5690	11730	930	21570	4530		26100	2	0	2	1220
70	小帝城跡	香取郡下総町名古屋字小帝	D	26	0	1	0	1	0	0	34	1	12	13	1300				1300	1350	6750	9400	1	0	0	180
71	大和田城跡	香取郡下総町字城ノ内	D	26	0	1	0	1	0	0	25	2	10	12	1870	520			2390	5620		8010	1	0	2	250
72	名木城跡	香取郡下総町名木字城山	D	26	0	1	0	1	0	0	24	1	5	6	3040				3040	4600		7640	0	2	0	110
73	神崎城跡	香取郡神崎町並木字東ノ城、中ノ城、西ノ城	D	27	0	1	0	1	0	0	25	3	15	18	2520	7410	7630		17560	7600		25160	0	1	1	200
74	武田城跡	香取郡神崎町武田字登城他	D	27	0	1	0	1	0	0	24	2	13	15	2000	2000			4000	3700		7700	0	2	2	160
75	小松城跡	香取郡神崎町小松	D	27	1	0	0	1	0	0	15	2	17	19	900	310			1210	2380	290	3880	0	4	0	0
76	伊能城跡	香取郡大栄町字城山	D	28	0	1	0	1	0	0	33	5	34	39	1730	650	640	2620	5640	17200		22840	0	0	0	270
77	久井崎城跡	香取郡大栄町久井崎字福荷山他	D	28	0	1	0	1	0	0	20	4	16	20	3000	8400	1100	4500	17000	3950	680	21630	1	2	0	480
78	松子城跡	香取郡大栄町松子字要害他	D	28	0	1	0	1	0	0	26	3	4	7	3330	5790	7040		16160	3790		19950	1	0	0	410
79	馬洗城跡	香取郡大栄町松子字馬洗	D	28	0	1	0	1	0	0	20	4	50	54	4250	1900	1200	1350	8700	9500		18200	1	4	4	325
80	津富浦城跡	香取郡大栄町津富浦字要害	D	28	0	1	0	1	0	0	33	4	4	8	2780	2550	1320	420	7070	780	690	8540	2	1	3	500
81	前林城跡	香取郡大栄町前林	D	28	0	1	0	1	0	0	22	1	1	2	1800				1800	2770		4570	0	0	0	0
82	南敷城跡	香取郡大栄町南敷字高野	D	28	0	1	0	1	0	0	32	2	6	8	690	870			1560	380		1940	2	0	0	220

第1節 データについて

土 塁		構 造				地 名					発掘調査遺物時期					確かな史資料からと推測								
土塁長さ	土塁伏尾根	折れ歪み数	櫓形虎口(明確)	櫓形虎口(不明確)	馬出し	堀之内	要害	城山	根小(古)屋	宿	他	12c ~14c 前	14c 後~15c 前	15c 後~16c 初	16c 前~中	16c 後~17c 初	17c 中~19c	伝承(近世軍記物等)	城主・攻防等	I期	II期	III期	IV期	V期
																				12c ~15c 前半	15c 後半~16c 初頭	16c 前半~16c 末	16c 末~17c 初	17c 前半以降
400	0	3	1	0	0	0	0	0	0	0	城下・本郷			1					15c末~16c初安藤氏	--	D	B	--	--
550	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	本郷・殿内・馬場							15c後葉酒井定隆築城~1487年土気城へ、1489年定隆本城寺創建	15c後酒井氏か	?	B	D	--	--
150	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0			1					平常村築城→子→子大権城へ、1126年子常重復帰後代々~胤直1455年、後一時康胤、1479年本佐倉城へ	15c後千葉宗家	B	C	--	--	--
280	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	城之腰・東堀切・南堀切	1	1						15c代千葉城支城か	D	D	--	--	--
220	0	3	0	0	0	0	0	1	0	1	坊屋敷	1	1					坂尾五郎治	15c代千葉城支城か	--	D	D	--	--
420	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0						1			17c前徳川家康	--	--	--	(A)	(A)
310	0	5	0	1	0	0	0	0	0	1					1	1		1625年森川出羽守重俊築館後代々~1871年	1625年森川出羽守重俊築館後代々~1871年	--	--	--	C	C
390	0	2	0	0	0	0	0	0	0	1	馬渡・陣馬・豊前屋敷								15c~16c多部田氏→原氏領城	?	D	D	--	--
500	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	立堀(館堀か)								構造は福屋寺館跡・木出城跡に類似	?	D	D	--	--
130	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			1							--	E	--	--	--
382	0	2.4	0.4	0.1	0.2	0.0	0.0	0.1	0.1	0.4		0	3	6	1	1	2	左右は合計		2	11	7	2	2
160	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	城山・新宿									?	C	C	--	--
1150	0	3	0	1	0	0	0	0	1	1	倉城・二ノ丸・殿井戸・殿治谷・内宿			1				千葉常胤子大須賀四郎胤信後代々~1590年廃城	助崎大須賀氏・(16c後葉北条氏下)~1590年	?	B	B	--	--
220	0	2	0	0	0	0	0	1	1	0	根小屋台									?	?	D	--	--
70	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0										?	D	--	--	--
140	0	1	0	0	0	0	0	1	1	0	根小屋台									?	D	D	--	--
320	20	3	1	0	0	0	0	0	0	0	東ノ城、中ノ城、西ノ城									?	C	?	--	--
130	0	1	1	0	0	0	0	0	1	0	登城			1				武田信濃守信光築城後代々~信家大須賀城にて死し1590年廃城		--	--	D	--	--
40	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	立の前							13c神崎氏(千葉氏系)	大須賀氏	?	D	?	--	--
290	0	1	0	1	0	0	1	0	0	0	戸張								在地領主または大須賀氏系	?	D	?	--	--
290	0	3	0	2	0	0	0	1	0	0	居山・東門・西門			1	1			成毛孫四郎		--	--	D	--	--
120	0	1	1	0	0	0	1	0	1	0	後詰・用害・城ノ内・戸張			1	1			1176年千葉常胤築城→子大須賀四郎左衛門胤信後代々大須賀氏本城~20代孫弥六政次1590年廃城	大須賀氏	--	B	B	--	--
320	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	馬洗				1	1			松子城外郭か	--	--	C	--	--
320	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	居山							千葉胤貞	大須賀氏系	?	?	D	--	--
20	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0								16c後半前林志摩守		?	E	--	--	--
100	40	2	0	0	0	0	0	0	1	0	高野					1			下田川流域両権または大須賀氏直轄	--	?	D	--	--

第1章 城館の構造等について

番号	遺跡名	所在地		立地						曲輪数			曲輪面積 (㎡)							空堀					
		現在地名	地域 市町村	地形区分			地形内位置			主要 他・腰	合計	主郭	II郭	III郭	他の主要郭	主要郭面積合計	腰曲輪	外郭部	合計	横堀セツト数	堀切数	堀数	堀長さ		
				丘陵	台地	低地	先端	内部・奥	先端から奥															比高	
83	鶴崎新タテ古タテ城跡	佐原市鶴崎字タテ他	D 29	0	1	0	1	0	0	24	4	12	16	14480	20150	4520	9810	48960	2160		51120	1	2	0	340
84	大崎城跡(矢作城)	佐原市大崎字城ノ内他	D 29	0	1	0	1	0	0	24	4	26	30	3820	1430	2040	2910	10200	21820		32020	0	4	7	420
85	大倉城跡	佐原市大倉字御城	D 29	0	1	0	1	0	0	30	3	14	17	3830	940	2640		7410	5230		12640	1	2	5	300
86	山崎城跡	佐原市香取丁子	D 29	0	1	0	1	0	0	27	2	18	20	1550			2500	4050	6350		10400	0	3	0	50
87	下小野城跡	佐原市下小野字城山	D 29	0	1	0	1	0	0	40	3	46	49	500	1090	1130		2720	5100		7820	3	2	7	420
88	大根氏館跡	佐原市大根字館	D 29	0	1	0	1	0	0	24	1	1	2	2380				2380	240	4440	7060	0	0	0	80
89	上小川城跡	佐原市上小川字城他	D 29	1	0	0	1	0	0	25	2	9	11	900	710			1610	1000		2610	0	0	0	70
90	伊地山城跡	佐原市伊地山字外城	D 29	0	1	0	0	1	0	24	1	1	2	1800				1800	570	140	2510	1	0	0	100
91	並木城跡	香取郡多古町南並木字平台	D 31	0	1	0	1	0	0	24	3	24	27	8500	19310			27810	4000	23140	54950	1	0	5	460
92	南玉造城跡	香取郡多古町南玉造字南台	D 31	0	1	0	1	0	0	16	2	8	10	340	2270			2610	9070	1920	13600	0	2	2	70
93	土橋城跡	香取郡多古町御所台字城・堀合他	D 31	0	1	0	1	0	0	23	2	4	6	260	6300			6560	1540	5400	13500	0	2	0	80
94	物見台城跡	香取郡多古町鴻ノ巣	D 31	0	1	0	1	0	0	23	1	6	7	6830				6830	1730		8560	1	0	3	460
95	土やぐら城跡	香取郡多古町南借当	D 31	0	1	0	1	0	0	22	1	4	5	1860				1860	1420		3280	1	0	1	120
96	分城跡	香取郡多古町高田	D 31	0	1	0	1	0	0	21	1	1	2	560	1420			1980	1000		2980	2	0	2	390
97	森山城跡	香取郡小見川町字根小屋・仲城・三城他	D 32	0	1	0	1	0	0	50	3	34	37	14000	26850	10520		51370	23500		74870	2	0	0	1000
98	須賀山城跡	香取郡小見川町岡飯田字天ノ宮	D 32	0	1	0	1	0	0	38	3	18	21	3910	1000	2610	8440	15960	14200		30160	2	0	0	400
99	上小堀城跡	香取郡小見川町上小堀字古屋山	D 32	0	1	0	1	0	0	30	1	8	9	2270				2270	960		3230	1	2	0	430
100	神生城跡	香取郡山田町神生字身城	D 33	0	1	0	1	0	0	20	4	10	14	4000	4860	6680	2150	17690	10600		28290	1	0	1	320
101	府馬城跡	香取郡山田町府馬字茶畑他	D 33	0	1	0	1	0	0	25	5	53	58	2110	1050	1430	660	5250	21380		26630	0	1	3	300
102	要害城跡	香取郡山田町新里字ゆうがえ	D 33	0	1	0	1	0	0	20	1	8	9	2860				2860	6600	5000	14460	1	0	1	400
103	鑪木城跡	香取郡干潟町鑪木字古城他	D 34	0	1	0	1	0	0	36	3	26	29	3720	3590	5850		13160	13170		26330	0	3	1	230
104	沼間城跡	香取郡東庄町小南字城山	D 35	0	1	0	1	0	0	41	3	18	21	9410	28810	3270		41490	4080		45570	1	3	3	260
105	大友城跡	香取郡東庄町大友	D 35	0	1	0	1	0	0	42	2	21	23	14800	9200			24000	6500		30500	0	0	0	0
D:香取地域平均値				0.1	0.9	0.0	1.0	0.0	0.0	27	2.5	16	18	3785	7618	4197	3299	12231	6167	4845	19673	0.8	1.1	1.4	294
106	寒風城跡	西茨郡光町藤本字城台	E 36	0	1	0	1	0	0	30	3	14	17	12350	4160	4410		20920	10400		31320	0	7	1	180
107	古城跡	西茨郡光町史生字古城	E 36	0	1	0	1	0	0	31	1	7	8	5650				5650	14030		19680	0	2	2	70
108	藤本城跡	西茨郡光町藤本字城山	E 36	0	1	0	1	0	0	27	5	13	18				7340	7340	4600		11940	2	0	0	500
109	岩室砦跡	西茨郡光町小川台字柳内	E 36	0	1	0	1	0	0	25	2	7	9	1760	2340			4100	650		4750	1	1	0	330
110	久方城跡	八日市市場久方	E 37	0	1	0	1	0	0	27	3	3	6	1810	1210	19170		22190	360		22550	2	0	8	500
111	宮和田城跡	八日市市場大浦字両塚	E 37	0	1	0	1	0	0	25	3	12	15	1570	4490	2990		9050	7880		16930	0	7	0	0
112	大堀城跡	八日市市場大堀字アラク	E 37	0	1	0	1	0	0	28	2	0	2	2960	1900	240		5100	30	8550	13680	0	1	1	80

土 壘	構 造					地 名					発掘調査遺物時期					伝承（近世軍記物等）	確実な史資料からと推測											
	土壘長さ	土壘伏尾根	折れ歪み数	櫓形虎口（明確）	櫓形虎口（不明確）	馬出し	堀之内	要害	城山	根小（古）屋	宿	他	12c～14c前	14c後～15c前	15c後～16c初		16c前～中	16c後～17c初	17c中～19c	城主・攻防等	I期	II期	III期	IV期	V期			
320	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	タテ・新タテ・腰巻・南の口・向井口			1														
280	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	城ノ内・戸張	1				1		国分泰胤矢作城より移り矢作城と称す～16c後葉正木氏により落城	<小窪（国分五郎）500騎>	B	B	—	B	—				
120	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1	御城									?	D	D	—	—				
180	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	御城	1								16c国分氏下か	—	D	D	—	—			
410	80	7	0	0	0	0	0	1	0	1	本郷・塙									?	?	C	—	—				
200	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	館									?	E	—	—	—				
180	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	馬場・南口・馬場先・城									?	D	—	—	—				
210	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	外堀・内屋敷										?	D	—	—	—			
340	60	7	0	0	0	0	0	0	0	0											?	?	D	—	—			
280	0	1	0	0	0	0	1	0	0	1											?	D	D	—	—			
50	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	城・馬場										14c千田氏→16c円城寺氏	?	C	?	—	—		
350	0	3	0	1	0	0	0	0	0	0											?	D	—	—	—			
70	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0											?	E	—	—	—			
320	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0												?	D	?	—	—		
580	0	5	0	2	1	0	1	0	1	0	ゆうかい・実城											1218年千葉常胤子東六郎胤頼築城後代々～東下野守直胤1590年廃城	16c前千葉胤高（在城石毛・海上・原・安藤氏）→16c後須賀山城を吸収	?	?	B	—	—
160	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	西曲輪・大六天											東胤頼築城後森山城へ	16c後新曲輪として森山城に組み込まれる。在番野平・木村氏	?	?	B	—	—
440	0	6	0	0	0	0	0	0	1	0	古屋											16c増田氏	?	?	D	—	—	
570	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0												?	D	D	—	—		
120	40	1	0	0	0	0	1	0	1	1	妙見											国分常朝築城→子越前五郎時常（府馬氏）、左衛門尉時持里見氏方へ、鍋木・八木氏と戦い米井菅攻撃し木内氏滅ぼし香取・大須賀氏と戦い敗死し廃城		?	D	D	—	—
240	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	ゆうかへ												?	D	?	—	—	
60	0	3	0	1	0	0	0	0	1	1	古城											鍋木胤定、胤泰等代々～備後守胤家里見氏攻撃により廃城	<黒木駿河守300騎>	?	?	C	—	—
690	10	2	0	1	0	0	0	1	1	0	大門・木戸下・堀道											1005年平忠常築城、12c末～東盛胤後代々～1590年廃城		?	?	C	—	—
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	政所台・遠所台・小姑屋敷・観治屋敷											11c平忠常、16c後大友忠信・孫三郎		?	D	—	—	—
259	7	1.7	0.1	0.3	0.1	0.0	0.2	0.2	0.3	0.2		0	2	5	3	1	2		左右は合計	1	24	22	1	0				
260	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	城台											?	D	?	—	—		
260	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	城台											?	D	—	—	—		
0	0	6	0	0	0	0	1	1	0	0	大門	1	1									城台	小領主連合か	D	D	—	—	
170	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	城ノ下												岩室（権名氏系）	?	D	—	—	—
210	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	向根・居山・居後												?	D	D	—	—	
230	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0													?	D	?	—	—	
370	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	奥城・中城・前城												那須・藤崎	?	D	—	—	—

第1章 城館の構造等について

番号	遺跡名	所在地		立地						曲輪数			曲輪面積 (㎡)							空堀					
		現在地名	地域	地形区分			地形内位置			比高	主要	他・腰	合計	主郭	日郭	川郭	他の主要郭	主要郭面積合計	腰曲輪	外郭部	合計	横堀セツト数	堀切数	竪堀数	堀長さ
				丘陵	台地	低地	先端	内部・奥	先端から奥																
113	飯高城跡	八日市場市飯高字城下	E 37	0	1	0	1	0	0	25	2	6	8	2890	4820			7710	2000	2210	11920	0	1	2	60
114	大浦城跡	八日市場市大浦字城	E 37	0	1	0	1	0	0	24	4	38	42	1450	480	2350	590	4870	6810		11680	0	6	0	200
115	新城跡	八日市場市新字要害	E 37	0	1	0	1	0	0	22	5	12	17	2200	620	2550	1310	6680	4610		11290	1	3	0	110
116	飯塚岩跡	八日市場市飯塚字ハツ山	E 37	0	1	0	1	0	0	28	5	15	20	800	300	720	1250	3070	4330		7400	2	2	0	250
117	見廣城跡	海上郡海上町見廣要害山	E 40	1	0	0	1	0	0	50	2	22	24	930	1880			2810	5180		7990	0	2	1	80
118	中島城跡(海上城)	鏡子市中島町要害	E 42	0	1	0	0	0	1	27	5	16	21	5620	8800	3280	23380	41080	20000	57660	118740	3	2	2	710
E:海浜地域平均値				0.1	0.9	0.0	0.9	0.0	0.1	28	3.2	13	16	3333	2818	4464	6774	10813	6222	22807	22298	0.8	2.6	1.3	236
119	飯櫃城跡	山武郡芝山町飯櫃字城ノ内	F 43	0	1	0	1	0	0	20	3	22	25	6180	12360	8370		26910	13950		40860	1	0	0	480
120	大台城跡	山武郡芝山町大台字城ノ内他	F 43	0	1	0	1	0	0	15	3	15	18	5500	14000	3000		22500	15300		37800	0	2	2	200
121	田向城跡	山武郡芝山町小池字城山・城台	F 43	0	1	0	1	0	0	30	7	56	63	1480	1690	2090	2050	7310	11840		19150	5	2	5	760
122	山中北城跡	山武郡芝山町山中	F 43	0	1	0	1	0	0	28	3	6	9	1020	2840	1120		4980	1510		6490	1	0	2	280
123	山中南城跡	山武郡芝山町山中	F 43	0	1	0	1	0	0	30	3	14	17	2850	1050	400		4300	2180		6480	0	3	0	60
124	岩山城跡	山武郡芝山町岩山字谷	F 43	0	1	0	1	0	0	20	3	8	11	630	410	480		1520	1710		3230	0	4	0	60
125	木原城跡	山武郡山武町木原字古宿	F 44	0	1	0	1	0	0	20	2	3	5	1420	2480			3900	510		4410	1	0	0	350
126	堀谷周路遺跡	山武郡山武町堀谷周路	F 44	0	1	0	0	0	1	7	1	0	1	1020	110			1130			1130	1	0	0	220
127	松尾城跡(計画段階)	山武郡松尾町松尾字桔梗台	F 44	0	1	0	0	0	1	30	2	0	2					164000				0	1	1	200
128	山室城跡	山武郡松尾町山室字城台他	F 45	0	1	0	0	0	1	23	3	12	15	1350	4800	5340		11490	3000	6000	20490	2	1	3	720
129	坂田城跡	山武郡横芝町坂田	F 46	0	1	0	0	0	1	23	4	41	45	4740	2700	11560	47970	66970	9490		76460	1	2	1	780
130	成東城跡	山武郡成東町成東	F 47	0	1	0	0	0	1	40	4	6	10	2580	2730	4120	600	10030	2550	23870	36450	5	0	0	760
131	津辺城跡	山武郡成東町津辺本村	F 47	0	1	0	0	0	1	38	4	15	19	2480	10500	1520	3500	18000	13660		31660	1	0	5	580

第1節 データについて

土 壘	構 造					地 名					発掘調査遺物時期					伝承(近世軍記物等)	確実な史資料からと推測											
	土壘長さ	土壘伏尾根	折れ歪み数	櫓形虎口(明確)	櫓形虎口(不明確)	馬出し	堀之内	要害	城山	根小(古)屋	宿	他	12c ~14c前	14c 後~15c前	15c 後~16c初		16c 前~中	16c 後~17c初	17c 中~19c	城主・攻防等	I期	II期	III期	IV期	V期			
110	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0							平常兼孫政胤(飯高氏)→子→孫、平山常時~16c後築廃城	飯高氏→平山氏	?	D	D	—	—				
140	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	城・外堀・堀之内						権名胤光子胤貞(飯倉氏)子行胤(長岡氏)子胤基(大浦氏)		?	D	D	—	—				
280	0	1	1	0	1	0	1	0	0	0	0	小門						16c三谷氏		?	?	C	—	—				
440	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0									?	D	?	—	—				
180	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	要害山						島田忠広、16c後築正木大藩により落城		?	D	?	—	—				
330	0	3	0	0	0	1	1	0	0	0	0	御城		1	1			平常兼子常衛(海上氏)→子常幹、14c前築東風頼孫胤方(海上氏)→子胤景→子胤康→子胤胤→子胤胤守(15c前築)、千葉孝胤子胤興(海上氏)→子某山城守→千葉昌胤子胤盛→16c末	13c~16c海上氏	C	B	B	—	—				
229	0	1.1	0.2	0.0	0.1	0.2	0.3	0.1	0.1	0.0			0	1	2	1	0	0	左右は合計					2	12	5	0	0
180	0	4	0	0	0	0	0	0	1	1	1	城ノ内・大堀切・外宿				1		16c前築山室飛騨守常隆築城→氏勝・光勝~1590年廃城		—	—	C	—	—				
100	0	1	0	0	0	0	0	1	1	1	1	マス台・出田丸・妙見台・倉ノ台・英雄宿						井田友胤~1556年(坂田城へ)、別説・神保氏	<板野(井田)刑部大夫150騎>	?	C	C	—	—				
640	0	13	0	1	0	0	0	1	0	0	0	城台		1						—	D	C	—	—				
230	0	2	0	0	0	0	0	0	0	1	1	宿谷						山室氏家臣和田胤信→胤富~1590年廃城		?	D	D	—	—				
200	0	2	0	0	0	0	0	0	1	1	1	宿谷						山室氏家臣和田胤信→胤富~1590年廃城		?	D	D	—	—				
60	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0							山室氏家臣齋藤助四郎長谷辺の清長		?	D	?	—	—				
270	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1								16c末木原氏	?	E	E	—	—				
200	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	小屋の台・屋敷山		1	1			15c初緒谷豊前守景正→子大丞左近将監→子寅菊丸廃城	14c~15c前緒谷→穴倉か	D	D	—	—	—				
2700	0	12	2	0	0	0	0	0	0	0	0	倉屋敷・大手前					1		松尾藩、三稜郭として計画されたが明治3年~明治4年築城途中で廃城		—	—	—	—	B			
800	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	城ノ下・城ノ腰・物見台・外郭		1	1			山室飛騨守常隆~1532年		D	C	C	—	—				
1090	0	13	3	0	1	0	0	0	1	0	0	牙城・道城・輪ノ内・登城・中郭・本館・外城・ムジョウ						三谷信慈→1556年井田友胤~1590年廃城、別説・千葉氏→16c末井田因幡守		?	—	C	—	—				
180	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0							13c前築以降印東氏(千葉氏系)→羽賀越前守常道→山口主膳→粟飯原某→権名某→千葉胤定→勝定→16c末芳賀伊予守→1590年→石川康直(家康家臣)→1601年青山忠成→忠俊~1620年廃城	1590年石川康通~1600年	?	?	D	B	—				
260	0	6	2	0	2	0	1	0	1	0	0							石井将監(千葉氏家臣)、別説・白樹氏(井田氏被官)		?	?	D	—	—				

第1章 城館の構造等について

番号	遺跡名	所在地		立地							曲輪数			曲輪面積 (㎡)							空堀				
		現在地名	地域 市町村	地形区分			地形内位置				主要	他・腰	合計	主郭	II郭	III郭	他の主要郭	主要郭面積合計	腰曲輪	外郭部	合計	横堀セット数	堀切数	竪堀数	堀長さ
				丘陵	台地	低地	先端	内部・奥	先端から奥	比高															
132	東金城跡	東金市東金	F 49	1	0	0	0	0	1	52	4	80	84	1140	2620	500	4700	8960	21700	30660	0	8	5	380	
133	田間城跡	東金市田間	F 49	0	1	0	0	0	1	28	2	48	50	1290	3880			5170	17400	22570	0	4	2	160	
134	小野城跡	東金市小野上ノ城	F 49	1	0	0	1	0	0	50	1	15	16	2600				2600	7000	9600	1	0	0	60	
135	土気城跡	千葉市緑区土気町	F 51	0	1	0	0	0	1	50	2	50	52	4950	25510			30460	26780	57240	3	0	0	1290	
136	大権城跡	千葉市緑区大権町他	F 51	0	1	0	1	0	0	42	3	19	22	4450	1820	1860		8130	4230	12360	0	8	5	300	
137	小西城跡	山武郡大網白里町小西字城山	F 52	0	1	0	0	0	1	56	4	5	9	2100	5600	600	1200	9500	2300	11800	1	1	1	140	
138	大網城跡	山武郡大網白里町大網字本宿	F 52	1	0	0	0	0	1	25	7	14	21	170	360	150	2000	2680	2500	5180	0	5	0	40	
F:山武地域平均値				0.2	0.9	0.0	0.5	0.0	0.6	31	3	21	25	2524	5303	2936	8860	20527	8756	14935	22843	1.2	2.1	1.6	391
139	榎本城跡	長生郡長柄町榎本	G 53	1	0	0	1	0		20	2	28	30	750	650			1400	10000	11400	0	5	0	40	
140	立鳥城跡	長生郡長柄町立鳥	G 53	1	0	0	1	0		35	3	35	38	400	250	220		870	8300	9170	0	14	0	120	
141	本納城跡	茂原市本納	G 54	1	0	0	0	0	1	40	6	60	66	1500	2700	600	1250	6050	31000	37050	0	8	5	160	
142	真名城跡	茂原市真名字小諸	G 54	1	0	0	0	0	1	50	10	190	200	2090	1140	920	800	4950	18820	23770	0	8	5	250	
143	石神城跡	茂原市石神	G 54	1	0	0	0	0	1	30	9	101	110	900	650	150	600	2300	18000	20300	0	2	0	15	
144	小林城跡	茂原市小林	G 54	1	0	0	1	0	0	25	5	20	25	250	200	4500	200	5150	3000	8150	0	4	0	40	
145	上永古城跡	茂原市上永古	G 54	1	0	0	1	0	0	45	4	25	29	850	300	150	600	1900	3600	5500	0	9	0	110	
146	真名宿谷城跡	茂原市真名	G 54	1	0	0	1	0	0	50	3	22	25	250	100	800		1150	3800	4950	0	6	1	65	
147	鞘戸城跡	茂原市本納	G 54	1	0	0	0	0	1	50	3	16	19	280	400	80		760	3000	3760	0	5	3	100	
148	長南城跡	長生郡長南町長南字中城他	G 55	1	0	0	0	1	0	50	8	122	130	1400	850	1600	13300	17150	19600	36750	0	21	2	180	
149	利根利城跡	長生郡長南町坂本字利根利	G 55	1	0	0	1	0	0	40	3	22	25	1100	750	950		2800	6000	8800	0	1	0	10	
150	根古屋城跡	長生郡長南町下小野田	G 55	1	0	0	0	0	1	50	3	10	13	970	1300	900		3170	3250	6420	0	4	0	35	
151	下芝原城跡	長生郡長南町下芝原	G 55	1	0	0	1	0	0	30	2	16	18	450	220			670	1000	1670	0	2	0	10	
152	城ヶ谷城跡	長生郡長南町中原字城ヶ谷	G 55	1	0	0	1	0	0	20	2	4	6	140	180			320	1200	1520	0	2	0	80	
153	勝見城跡	長生郡睦沢町勝見城之内他	G 58	1	0	0	0	1	0	40	7	44	51	1380	3570	750	3000	8700	16000	24700	0	10	1	110	
154	福喜楽城跡(大柳館跡)	長生郡睦沢町寺崎字城之内	G 58	1	0	0	1	0	0	20	2	5	7	2000	1300			3300	2000	5300	0	1	0	50	
155	碓城跡	長生郡睦沢町大上字城之内	G 58	1	0	0	0	0	1	50	0	0	0				300	300	300	0	9	0	70		

第1節 データについて

土 壘		構 造					地 名					発掘調査遺物時期					確実な史資料からと推測											
土壘長さ	土壘伏尾根	折れ歪み数	櫓形虎口(明確)	櫓形虎口(不明確)	馬出し	堀之内	要害	城山	根小(古)屋	宿	他	12c ~14c前	14c 後~15c前	15c 後~16c初	16c 前~中	16c 後~17c初	17c 中~19c	伝承(近世軍記物等)	城主・攻防等	I期	II期	III期	IV期	V期				
																				12c ~15c前半	15c 後半~16c初頭	16c 前半~16c末	16c 末~17c初	17c 前半以降				
60	500	0	0	0	0	0	0	0	0	1	山城下・大門・馬場・上宿・新宿			1			千葉氏→1455年浜春利(東常陸家臣)~15c後葉→山口主膳→1521年酒井定隆・隆敏~政辰5代~1590年廃城→1613年徳川家康東金御殿築城~1671年廃城	15c~16c末東金酒井氏<坂井(酒井)右衛門尉(政辰)150騎>	—	B	B	—	(A)					
80	10	1	0	0	0	0	0	0	0	1	山小屋						16c初酒井定隆		?	C	—	—	—					
180	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	上ノ城・殿台								?	D	—	—	—					
1440	0	6	0	1	1	1	0	0	0	1	城之内・見土堀・大手			1	1	1	土気太郎(相馬氏)地頭→葛山氏→1488年酒井定隆~康治5代→1590年廃城	16c後土気酒井氏<坂井(酒井)左衛門尉(康治)300騎>	—	B	B	—	—					
260	0	3	1	0	0	0	0	0	1	0	東要・西要						平忠常→千葉常兼再修~1126年廃城	16c酒井氏	?	D	D	—	—					
70	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	古城・城谷・向城下・殿前						16c後葉原胤継築城	16c中小西氏(原氏系)	?	D	D	—	—					
0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1	城手・西新堀・東新堀・南門・下屋敷・本宿・新宿・浜宿						16c土気酒井築城→家臣板倉		?	D	D	—	—					
450	26	3.7	0.4	0.2	0.3	0.1	0.1	0.2	0.3	0.5			0	2	5	1	2	1	左右は合計					2	15	15	1	2
80	470	0	0	0	0	0	1	0	0	1							櫻本之助豊俊	櫻本→16c後長南武田氏か	?	?	D	—	—					
0	350	0	0	0	0	0	0	0	0	0								16c後長南武田一族または被官	?	?	C	—	—					
0	160	0	0	0	0	0	0	0	0	1	本城・大手下・右衛門郭・騎出・石射台・蔵屋敷・馬場						黒熊大膳亮景古→1569年土気酒井		?	C	C	—	—					
110	100	0	0	0	0	0	0	0	0	0							三上右衛門信長→16c中真里谷武田		?	D	C	—	—					
0	720	0	0	0	0	0	0	0	0	0	大木櫓・番場台・車作								?	C	?	—	—					
10	180	0	0	0	0	0	0	0	0	0							15c~16c前三上氏	真名城三上氏の支城か	?	D	—	—	—					
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0									?	D	—	—	—					
50	110	0	0	0	0	1	0	0	0	1	宿谷							1581年笠森寺観音堂須彌壇遺跡「国府之城主口丸」		?	?	D	—	—				
5	280	1	0	0	0	0	0	0	0	0	城の谷						本納城の後ろの佐也止の砦	本納城支城か	?	?	D	—	—					
40	1400	0	0	0	0	0	1	0	0	1	本城・城ノ内・城谷・城出版・武田・元宿・仲宿・上宿						15c中葉武田信長築城後代々	<長南刑部大夫・竹田兵部大輔(武田豊信)1500騎(長南武田氏全体)>	?	B	B	—	—					
40	160	0	0	0	0	0	0	0	0	0							16c後池和田・権津城等と共に北条方により落城		?	D	—	—	—					
10	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0									?	?	D	—	—					
120	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0									?	E	—	—	—					
0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	城ヶ谷								?	E	—	—	—					
40	100	0	0	0	0	0	0	0	1	0	城之内・井戸那・小屋ノ谷・沖小屋ノ谷						16c金田氏		?	C	C	—	—					
65	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	城之内						堺平次兵尉常房・秀胤	15c後~16c前金田氏か	?	D	—	—	—					
0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	城之内						太田新九郎勝重	堀之内の防御線か	?	E	—	—	—					

第1章 城館の構造等について

番号	遺跡名	所在地			立地							曲輪数			曲輪面積 (㎡)							空堀					
		現在地名	地域	市町村	地形区分			地形内位置				比高	主要	他・腰	合計	主郭	II郭	III郭	他の主要郭	主要郭面積合計	腰曲輪	外郭部	合計	横堀セツト数	堀切数	竪堀数	堀長さ
					丘陵	台地	低地	先端	内部・奥	先端から奥																	
156	高藤山城跡	長生郡一宮町高藤山	G	59	1	0	0	0	0	1	70	4	43	47	600	800	240		1640	7400		9040	0	14	0	180	
157	一宮城跡	長生郡一宮町一宮城ノ内	G	59	0	1	0	1	0	0	20	3	25	28	2000	580	1240		3820	2790		6610	3	3	0	170	
G:長生地域平均値					0.9	0.1	0.0	0.5	0.1	0.4	39	4.2	41	46	962	886	936	2506	3495	8820	0	11851	0.2	6.7	0.9	94	
158	大多喜城跡	夷隅郡大多喜町大多喜	H	61	0	1	0	0	0	1	40	9	61	70	6090	1430	12630	55800	75950	48480		124430	0	8	2	230	
159	万喜城跡	夷隅郡夷隅町	H	61	1	0	0	0	0	1	70	15	156	171	1580	2430	1060	3430	8500	48800		57300	1	15	12	80	
160	大野城跡	夷隅郡夷隅町大野	H	61	0	1	0	1	0	0	25	5	16	21	8000	8400	9000	1600	27000		22500	49500	0	5	0	350	
161	権現城跡	夷隅郡夷隅町松丸字向台	H	61	0	1	0	1	0	0	20	3	20	23	8110	2120	2090		12320	8890		21210	0	6	1	400	
162	鶴か城跡	夷隅郡岬町中原字古地他	H	62	1	0	0	0	0	1	30	9	190	199	2100	7500	3500	17900	31000	99000	28000	158000	1	25	8	640	
163	矢竹城跡	夷隅郡岬町桑田字矢竹	H	62	1	0	0	1	0	0	10	3	42	45	630	530	380		1540	6000		7540	0	4	4	85	
164	中滝城跡	夷隅郡岬町中滝字熊ノ山	H	62	0	1	0	1	0	0	47	3	9	12	770	710	930		2410	1000		3410	0	4	0	100	
165	布施殿台城跡	夷隅郡大原町上布施	H	63	1	0	0	1	0	0	15	4	64	68	7490	5360	3000	1220	17070	14270		31340	0	5	10	500	
166	城谷城跡(岬山城跡)	夷隅郡大原町山田	H	63	1	0	0	0	0	1	55	6	84	90	270	340	150	2090	2850	8190		11040	0	11	8	270	
167	金山城跡	夷隅郡大原町長志	H	63	1	0	0	1	0	0	75	2	92	94	690	560			1250	8800		10050	1	12	13	230	
168	日在城跡	夷隅郡大原町日在字大山他	H	63	1	0	0	1	0	0	50	3	7	10	900	650	140		1690	750		2440	0	8	2	130	
169	最明寺裏城跡	夷隅郡御宿町須賀	H	64	1	0	0	0	0	1	30	4	40	44	480			1010	1490	7680		9170	0	5	0	60	
170	吉尾城跡	勝浦市吉尾	H	65	1	0	0	1	0	0	40	6	32	38	1500	1140	2580	2570	7790	14760		22550	0	7	1	210	
171	勝浦城跡	勝浦市勝浦字郭内	H	65	1	0	0	0	0	1	30	3	10	13	2170	2090	490		4750	2530		7280	0	3	0	20	
172	奥津城跡	勝浦市奥津字要害	H	65	1	0	0	0	1	0	40	3	21	24	1710	770	480		2960	3060		6020	0	6	0	90	
H:夷隅地域平均値					0.7	0.3	0.0	0.5	0.1	0.4	38	5.2	56	61	2833	2431	2802	10703	13238	19444	25250	34752	0.2	8.3	4.1	226	
173	佐是城跡	市原市佐是字武城	I	66	0	1	0	1	0	0	40	5	30	35	4750	25630	6100	24540	61020	27980		89000	2	1	1	1000	
174	樺津城跡	市原市樺津字城山	I	66	0	1	0		0	1	19	2	37	39	2130	3900	28000		34030	31400	23400	88830	0	3	0	240	
175	真ヶ谷城跡	市原市真ヶ谷宿要害	I	66	1	0	0	1	0	0	60	7	23	30	4740	7960		700	13400	19250		32650	0	6	4	170	

土 壘		構 造					地 名					発掘調査遺物時期					確実な史料からと推測							
土壘長さ	土壘伏尾根	折れ歪み数	樹形虎口(明確)	樹形虎口(不明確)	馬出し	堀之内	要害	城山	根小(古)屋	宿	他	12c ~ 14c 前	14c 後 ~ 15c 前	15c 後 ~ 16c 初	16c 前 ~ 中	16c 後 ~ 17c 初	17c 中 ~ 19c	伝承(近世軍記物等)	城主・攻防等	I期	II期	III期	IV期	V期
																				12c ~ 15c 前半	15c 後半 ~ 16c 初頭	16c 前半 ~ 16c 末	16c 末 ~ 17c 初	17c 前半 以降
320	45	0	0	0	1	0	0	0	0	0	高藤山・高塔・軍坂台・番細工・番細工敷治給							上総権介広常	16c後金田氏または正木氏	?	?	C	--	--
330	10	1	0	0	0	0	0	0	0	1	城ノ内・矢倉前・陣屋・内宿		1	1	1	1		鶴見甲斐守義春→一時正木大炊助	正木→16c後北条→鶴見甲斐守(里見義康下) > 19c加納藩陣屋	--	C	C	--	C
64	215	0.2	0.0	0.0	0.1	0.1	0.1	0.0	0.1	0.3		0	0	1	1	1	1	左右は合計		0	13	11	0	1

300	10	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	二ノ丸・三ノ丸・南郭・外郭・上宿・下宿		1	1	1	1	12c末源頼朝陣→和田義盛→16c前葉正木氏代々→1590年本多忠勝→1601年本多忠朝・正明→1617年阿部正次→1630年幕府代官所轄→1651年阿部氏3代→1702年稲葉重富→1703年松平正久後代々→1871年廃城	15c後武田→16c里見→正木→<貞崎(正木)大膳(里見義康下)>→16c末本多忠勝	--	B	B	B	B	
390	730	0	0	0	0	0	0	0	0	1	小屋の台・屋敷山		1	1				里見方土岐頼元築城→為頼→頼春→北条氏に属す→1590年廃城	15c末~16c末土岐氏	--	B	B	--	--	
350	0	2	0	0	0	0	1	0	1	0	外城・中城		1	1				平広常築城	15c野野氏→16c土岐または正木	--	D	D	--	--	
20	20	2	0	0	1	0	0	0	0	0	陣幕台							1589年武田信栄万喜城攻撃		?	--	C	--	--	
270	750	0	0	0	1	0	0	0	1	0	古地・東根方・西根方・屋敷台・コヤ							1574年土岐為頼築城・鶴城・鶴見行綱・龜城佐々木信家	<とき(土岐)禰正大抱>	?	?	C	--	--	
5	210	0	0	0	0	0	0	0	0	0								麻生主水亮在城		?	?	D	--	--	
30	30	0	0	0	0	0	0	0	0	0			1					土岐氏系		--	D	--	--	--	
200	200	0	0	1	0	0	0	0	1	0	奥殿台・前殿台										?	?	C	--	--
210	30	3	0	1	0	0	0	0	0	0	上城谷・下城谷・立壁										?	?	C	--	--
170	130	5	1	0	0	0	0	0	0	0	高野台・金山・天王台								平広常家臣金山将監		?	?	C	--	--
30	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	東小屋庭・西小屋庭・西小屋								16c後半横山石見氏(土岐氏方)		?	E	C	--	--
10	70	0	0	0	0	0	1	0	0	0	要害台								御宿屋太郎	正木系か	?	C	--	--	--
100	30	0	0	0	0	0	0	0	0	0									16c末勝浦正木氏		?	?	C	--	--
0	150	0	0	0	0	0	0	0	0	0	郭内							10c前葉上総守興世王築城→12c末上総景俊→1441年正木頼忠修築後代々→1587年正木時通武田氏方へ里見氏と争う→1590年本多忠勝・植村泰忠攻撃	<正木左近大夫(正木頼忠)(里見義康下) > 勝浦正木氏→16c末植村氏	?	B	B	--	--	
100	40	0	0	0	0	0	1	0	0	0								12c中葉佐久間兵庫介重古・同兵庫頭重定→1534年真里谷朝信→1544年正木時忠攻撃・家臣岡本大学→1590年廃城	1581.82年正木実時側→勝浦正木氏→<里見義康下>	?	C	C	--	--	
146	160	0.9	0.1	0.1	0.1	0.0	0.2	0.0	0.3	0.1		0	0	4	2	2	1	左右は合計		0	16	13	2	1	

740	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	城ノ内・曲輪・武城・馬場							16c前武田信長孫国信		?	C	C	--	--	
220	0	1	0	0	0	0	1	1	0	0	五雲台・外曲輪・根ノ上		1	1	1			16c前葉真里谷信政→里見義亮→木曾左馬(里見氏家臣)→1564年白幡六郎(北条氏家臣)	15c中武田→16c里見↔北条	?	C	C	--	--	
110	140	2	0	0	0	1	1	0	0	1	殿部田								真里谷武田影響下		?	D	D	--	--

第1章 城館の構造等について

番号	遺跡名	所在地		立地							曲輪数			曲輪面積 (㎡)							空堀				
		現在地名	地域	地形区分			地形内位置				主要	他・腰	合計	主郭	II郭	III郭	他の主要郭	主要郭面積合計	腰曲輪	外郭部	合計	横堀セツト数	堀切数	縦堀数	堀長さ
				丘陵	台地	低地	先端	内部・奥	先端から奥	比高															
176	大成城跡	市原市大成字湯武倉	I 66	0	1	0	1	0	0	50	3	19	22	2100	1400	11500		15000	13000		28000	3	0	2	700
177	池和田城跡	市原市池和田字城廻	I 66	0	1	0	1	0	0	20	3	48	51	2730	2790	350		5870	9850		15720	1	0	0	280
178	分目要害城跡主要部	市原市分目字要害	I 66	0	0	1	1	0	0	3	4	7	11	1410	4290	900	1880	8480	1620		10100	4	0	0	830
179	大成向山城跡	市原市大成字湯武倉	I 66	1	0	0	1	0	0	50	1	1	2	7500				7500	550		8050	1	1	1	200
180	平蔵城跡	市原市平蔵城山地先	I 66	1	0	0	1	0	0	70	1	50	51	160				160	6800		6960	0	1	1	30
181	吉沢城跡	市原市吉沢字櫻台	I 66	1	0	0	0	1	0	53	4	12	16	1440	1180	630	260	3510	2230		5740	0	3	0	50
182	雀ヶ崎城跡	市原市敷字外部田	I 66	0	1	0	1	0	0	30	3	18	21	590	370	430		1390	1750		3140	2	0	0	170
183	平蔵城部田城跡	市原市平蔵	I 66	1	0	0	1	0	0	70	3	5	8	240	80	70		390	600		990	0	2	1	30
I:市原地域平均値				0.5	0.5	0.1	0.9	0.1	0.1	42	3.3	23	26	2526	5289	5998	6845	13705	10457	23400	26289	1.2	1.5	0.9	336
184	高谷堀之内城跡	袖ヶ浦市高谷字堀之内	J 67	0	0	1	1	0	0	5	3	0	3	1930	2340	1900		6170		4960	11130	0	0	0	60
185	高谷館跡(2)	袖ヶ浦市高谷	J 67	0	1	0	0	1	0	11	1	0	1	3130				3130			3130	1	0	0	100
186	高谷館跡(1)	袖ヶ浦市高谷	J 67	0	1	0	1	0	0	10	2	0	2	410	1400			1810			1810	0	1	0	40
187	笹子城跡全体(含免屋区)	木更津市笹子字根小屋	J 68	1	0	0	0	0	1	35	5	60	65	5000	1750	1000	4000	11750	70000	13000	94750	6	20	8	800
188	真里谷城跡	木更津市真里谷	J 68	1	0	0	1	0	0	90	6	77	83	2580	1550	1740	5090	10960	29270		40230	0	8	30	990
189	真武根陣屋跡	木更津市請西字堰の上他	J 68	0	1	0	1	0	0	17	4	11	15	3530	2560	2990	10750	19830	8600	4950	33380	1	0	0	160
190	要害城跡	木更津市真里谷字要害他	J 68	1	0	0	1	0	0	60	5	56	61	620	330	300	2700	3950	16500		20450	2	12	3	520
191	天神台城跡	木更津市真里谷字天神台他	J 68	1	0	0	1	0	0	80	5	18	23	1960	6500	2660	3400	14520	4940		19460	1	7	4	490
192	中尾城跡	木更津市中尾字小門	J 68	1	0	0	1	0	0	38	5	18	23	350	1360	1160	1750	4620	4120		8740	0	4	4	200
193	久留里城跡	君津市久留里字内山	J 69	1	0	0	0	0	1	100	6	96	102	1790	1750	450	2760	6750	15390		22140	0	12	9	350
194	千本城跡	君津市千本	J 69	1	0	0	0	1	0	110	8	31	39	870	1030	520		2420	5010	9620	17050	0	10	2	350
195	秋元城跡(古城・青鬼城・小糸城)	君津市西粟倉字古城	J 69	1	0	0	1	0	0	60	5	54	59	790	740	580	4000	6110	8580		14690	0	6	2	230
196	岩室城跡	君津市向郷字岩室	J 69	1	0	0	1	0	1	30	3	14	17	370	1400	930		2700	6400		9100	0	3	2	110
197	三直城跡	君津市三直字宇曾貝	J 69	0	1	0	1	0	0	17	4	8	12	1470	1600	900	3750	7720	1600	3190	12510	1	1	0	300
198	飯野陣屋	富津市下飯野字本丸他	J 70	0	0	1	0	1	0	0	3	1	4	29860	26800	43240		99900		60000	159900	3	0	0	2270
199	佐貫城跡	富津市佐貫字城山	J 70	1	0	0	0	1	0	49	7	51	58	4470	7090	6750	11500	29810	38230		68040	0	6	2	250

土 塁		構 造				地 名					発掘調査遺物時期					確実な史資料から推測								
土塁長さ	土塁状尾根	折れ歪み数	櫓形虎口(明確)	櫓形虎口(不明確)	馬出し	堀之内	要害	城山	根小(古)屋	宿	他	12c ~14c前	14c 後~15c前	15c 後~16c初	16c前 ~中	16c後 ~17c初	17c中 ~19c	伝承(近世軍記物等)	城主・攻防等	I期	II期	III期	IV期	V期
																				12c ~15c前半	15c 後半~16c初頭	16c 前半~16c末	16c 末~17c初	17c 前半以降
200	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	上屋敷・下屋敷・竹ノ入							土気城出城か	?	?	D	--	--	
310	0	2	1	0	0	0	1	0	0	1	城廻・古宿							16c後多賀藏人	長南刑部大夫・竹田兵部大輔(武田豊信)抱	?	D	D	--	--
160	0	3	0	0	0	0	1	0	1	0	東門			1	1	1		村上→北条	--	D	C	--	--	
100	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	向山							土気城出城か	?	?	D	--	--	
70	10	0	0	0	0	0	0	1	1	0								土橋平蔵政幸、上総本一揆本城か		?	D	D	--	--
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	妙見・宿ノ台							土橋平蔵忠勝		?	D	?	--	--
120	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0								16c後湯浅氏		?	D	D	--	--
0	20	0	0	0	0	0	0	1	0	1	城部田・上宿・中宿・下宿							土橋平蔵政幸		?	D	?	--	--
185	15	1.8	0.2	0.0	0.1	0.1	0.4	0.3	0.2	0.4								左右は合計		0	9	9	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0										?	D	D	--	--
120	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0								15c小領主層		?	E	--	--	--
130	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0								15c小領主層		?	E	--	--	--
200	0	1	1	0	1	0	0	0	1	0			1	1				15c後~1543年武田三郎信栄・武田信茂		--	C	C	--	--
610	230	1	0	1	0	0	0	1	0	0	城ノ越・城ノ下			1	1			真里谷上総介・真里谷道環・武田三河守豊三	15c中~16c前真里谷武田氏	--	B	B	--	--
950	0	4	2	0	0	0	0	0	0	0						1		1850年林肥後守忠相貝淵陣屋より移す~1868年廃城	林忠相(請西藩)	--	--	B	--	C
330	50	7	0	0	0	0	1	0	0	1	北片宿								16c後北条氏	?	--	C	--	--
460	470	11	0	0	0	0	0	0	0	1									16c前真里谷武田氏(真里谷新地之城か)	?	--	C	--	--
400	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	小門							16c前葉後藤信安→真里谷信隆により落城		?	C	C	--	--
400	250	0	0	0	0	0	0	1	0	0	大手内・大手外・戸張				1			千葉頼胤→田原秀国→武田逸江守→1471年里見義堯・義弘→1590年大須賀忠政→1602年土屋忠直→孫直樹→1679年廃城・1742年黒田直純後数世→明治初	<山本越前守(里見義康下)>	--	B	A	--	B
250	0	7	1	0	1	0	1	0	0	0	用替・曲輪			1	1			東平安芸守(里見義弘家臣)	久留里城支城か	--	B	B	--	--
320	130	1	0	0	0	0	0	0	1	0	古城・城出根							16c初秋本義正→齋藤大和守正房(北条方)→里見方	16c秋本義正(里見氏方)→1564年北条氏→<里見禰正少弼(里見義康下)>	?	?	B	--	--
40	280	0	0	0	0	0	0	0	0	0									16c後対里見か	?	?	D	--	--
345	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0								16c後忍足三直治部少輔(里見方)		?	?	D	--	--
1720	0	4	1	0	0	0	0	0	0	1	本丸・御門口・櫓形							1631年保科正貞築城後代々~1869年保科正益廃城	1631年保科正貞築城後代々~1869年保科正益廃城	--	--	B	--	C
260	660	1	0	0	0	0	0	1	0	1	御殿山・陣場・殿町・北新宿・南新宿							15c中葉武田義広築城→16c前葉里見氏→1590年内藤家長・政長→1623年~1684年松平勝隆→1688年~1694年柳沢吉保→1710年阿部正頼後数世→1869年藩庁→1871年県庁→同年廃庁	15c後武田→里見→北条→<加藤太郎左衛門(里見義康下)>→16c末内藤・松平・柳沢・阿部	?	B	A	B	B

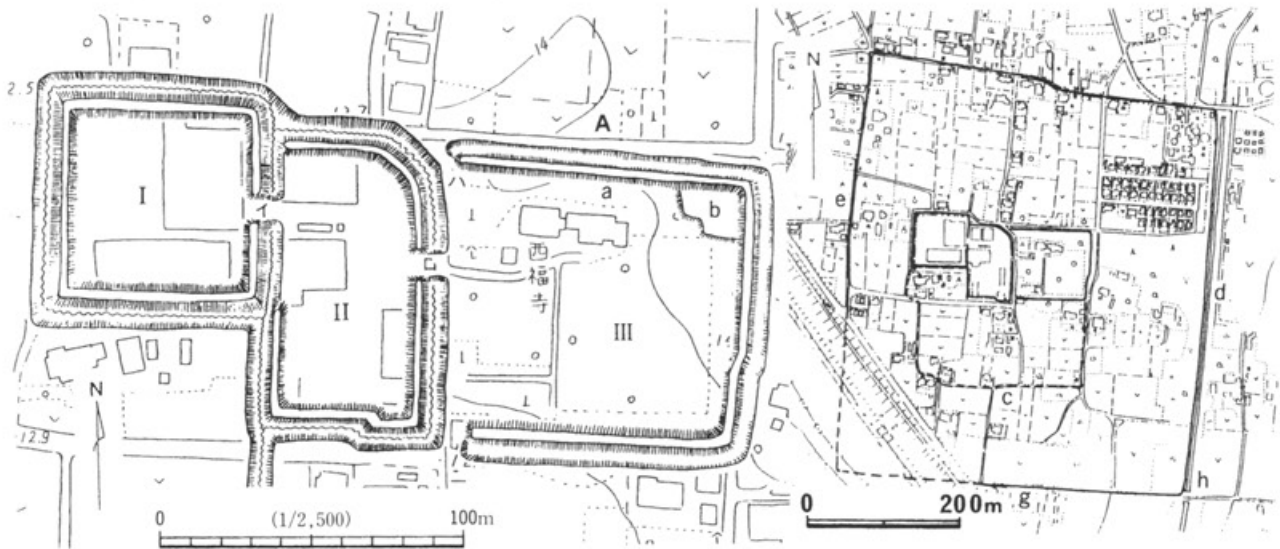
第1章 城館の構造等について

番号	遺跡名	所在地		立地							曲輪数			曲輪面積 (㎡)							空堀							
		現在地名	地域	地形区分			地形内位置				主要	他・腰	合計	主郭	II郭	III郭	他の主要郭	主要郭面積合計	腰曲輪	外郭部	合計	横堀セット数	堀切数	縦堀数	堀長さ			
				丘陵	台地	低地	先端	内部・奥	先端から奥	比高																0.7	0.2	0.1
200	峰上城跡	富津市上後字	J 70	1	0	0	0	0	1	90	13	240	253	2270	4340	3480	9950	20040	40470		60510	0	25	15	800			
201	造海城跡	富津市竹岡字城山	J 70	1	0	0	1	0	0	89	7	190	197	1000	290	1070	2160	4520	25050		29570	0	3	2	60			
202	金谷城跡	富津市金谷字御代袋	J 70	1	0	0	0	0	1	100	6	7	13	850	1700	150		2700	7000		9700	0	0	0	0			
203	天神山城跡	富津市海良天神台・真光塚	J 70	1	0	0	0	0	1	90	3	13	16	830	760	500	90	2180	2500	4320	9000	0	6	0	50			
J: 富津地域平均値				0.7	0.2	0.1	0.6	0.2	0.3	54	5.1	47	52	3204	3436	3907	4762	13080	17729	14291	32265	0.8	6.2	4.2	407			
204	下ノ坊館跡	安房郡鋸南町保田字下ノ坊	K 71	0	0	1	0	1	0	0	1	1	10700				10700			10700	1	0	0	0				
205	富山城跡(用田要害城)	安房郡富山町平久里中字用田	K 72	1	0	0	1	0	0	110	2	17	19	1580	1240	3600		6420	12590		19010	0	1	1	20			
206	岡本城跡	安房郡富浦町豊岡字聖山・要害他	K 73	1	0	0	1	0	0	50	5	58	63	1940	5670	2530	2730	12870	24340		37210	0	3	1	50			
207	宮本城跡	安房郡富浦町大津字要害	K 73	1	0	0	0	1	0	150	2	80	82	1560	550	750		2860	17110		19970	0	6	7	250			
208	石堂城跡	安房郡丸山町石堂	K 75	1	0	0	0	1	0	43	2	2	4	620	40			660	170		830	0	2	1	40			
209	西郷氏館跡(中世)	鴨川市東町字宝性寺	K 77	0	0	1	0	1	0	0	1	1	10300				10300			10300	1	0	0	0				
210	藤四郎台館跡	鴨川市主基西字福岡東上牧	K 77	1	0	0	0	1	0	190	2	10	12	2520	1580			4100	6800		10900	0	3	0	100			
211	山之城城跡	鴨川市主基西字福岡東上牧	K 77	1	0	0	0	1	0	250	2	8	10	740	1860			2600	6730		9330	0	1	0	40			
212	鶴ヶ崎城跡	安房郡天津小湊町天津字引土	K 78	1	0	0	1	0	0	70	3	151	154	970	60	60		1090	16600		17690	0	2	0	100			
213	館山城跡	館山市館山字城山	K 79	1	0	0	1	0	0	40	4	75	79	3450	1600	5380	6650	17080	25110		42190	0	1	0	10			
214	稲村城跡	館山市稲	K 79	1	0	0	0	0	1	45	5	75	80	2140	1270	1510	4630	9550	15250		24800	0	3	2	250			
215	山本城跡	館山市山本字堀ノ内	K 79	1	0	0	1	0	0	30	1	2	3	660				660	400		1060	0	1	0	50			
216	宇田城跡	安房郡千倉町宇田字本郷	K 80	1	0	0	1	0	0	30	3	14	17	1670	940	170		2780	3930		6710	0	2	1	40			
K: 安房地域平均値				0.8	0.0	0.2	0.5	0.5	0.1	78	2.5	45	40	2988	1481	2000	4670	6282	11730	0	16208	0.0	1.9	1.0	73			

第1節 データについて

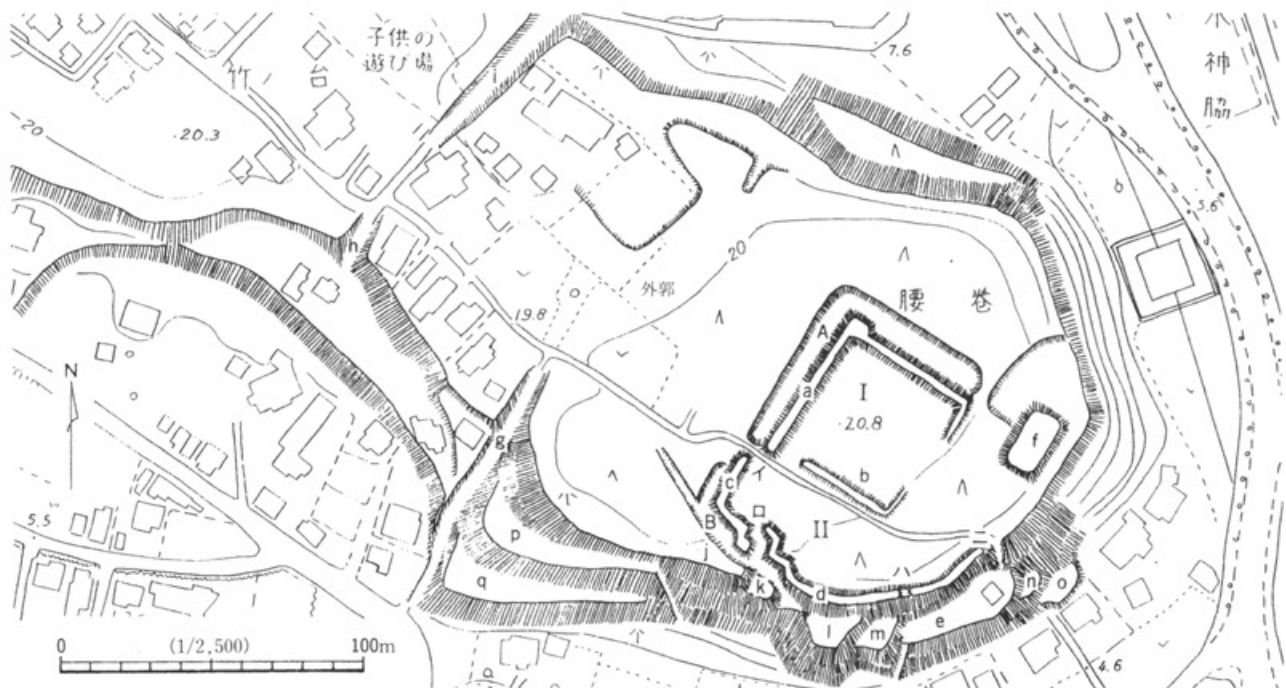
土 壘		構 造				地 名						発掘調査遺物時期					伝承（近世軍記物等）	確実な史資料からと推測							
土壘長さ	土壘伏尾根	折れ歪み数	櫓形虎口（明確）	櫓形虎口（不明確）	馬出し	堀之内	要害	城山	根小（古）屋	宿	他	12c ～14c前	14c後 ～15c前	15c後 ～16c初	16c前 ～中	16c後 ～17c初		17c中 ～19c	城主・攻防等	I期	II期	III期	IV期	V期	
																				12c ～15c前半	15c後半 ～16c初頭	16c前半 ～16c末	16c末 ～17c初	17c前半以降	
980	20	0	0	0	0	0	1	0	0	0	本城・中城・後城・尾崎曲輪・横馬場							真里谷道環築城→堀内蔵入貞行（里見氏家臣）～1564年廃城	15c後武田→16c後北条 環神社 門口「天文6年（1537）峰上城主摩利支天」	?	B	B	—	—	
280	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	木出根							真里谷道環築城・子丹波→15c後里見義成。1811年松平越中守砲台築く	16c前里見・真里谷武田→<真崎（正木）淡路守（里見義康下）	?	B	B	—	—	
0	0	0	1	0	0	0	1	0	1	0	本町・新町・仲町・木出			1	1	1			里見方1553年炎上→北条方→<真崎淡路守抱>	—	C	C	—	—	
0	40	0	0	0	0	0	0	0	1	0								15c後葉真里谷氏→戸崎玄蕃頭頼久・峰上城と同時廃城		?	C	C	—	—	
390	107	1.9	0.3	0.1	0.1	0.0	0.2	0.2	0.2	0.2		0	1	4	3	1	2	左右は合計		0	13	18	1	4	
0	0	0.2	0	0	0	0	0	0	0	0		1	1						13c～15c安西氏または笹生氏	D	—	—	—	—	
0	210	0	0	0	0	0	1	0	0	0									16c前里見氏か	?	C	C	—	—	
100	100	0	0	0	0	0	0	0	0	1						1		1570年里見義弘築城→義頼→淳泰	1579年里見氏本城<里見義康>	—	—	A	—	—	
50	60	0	0	0	0	0	1	1	0	0								1491年里見成義築城→義豊→宮本宮内・鎌田孫六（里見氏家臣）		?	A	B	—	—	
30	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0									15c石堂寺か	?	D	—	—	—	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		1	1						13c～15c東条氏、17c～西郷氏？	D	—	—	—	—	
20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0								16c前酒井藤四郎（正木家臣）		?	D	?	—	—	
70	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0								16c前正木時綱		?	?	C	—	—	
0	15	0	0	0	0	0	0	1	0	0									16c後正木憲時→里見義頼	?	?	B	—	—	
220	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	千疊敷・遠見槽跡・太鼓槽跡・御殿・城井戸・城下			1	1			1578年里見義頼築城→義康→忠義	15c～17c初、～里見義康・忠義	—	—	A	A	—	
180	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	城ノ内・古屋敷							里見成義→義道→義亮→義豊		?	A	—	—	—	
60	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	城ノ内・古屋敷									16c後山本氏か	?	E	E	—	—
0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0									15c丸または安藤	?	D	—	—	—	
56	30	0.0	0.0	0.1	0.0	0.1	0.3	0.2	0.1	0.1		2	2	0	1	2	1	左右は合計		2	7	7	1	0	

東葛地域-1



(原図・石田守一)

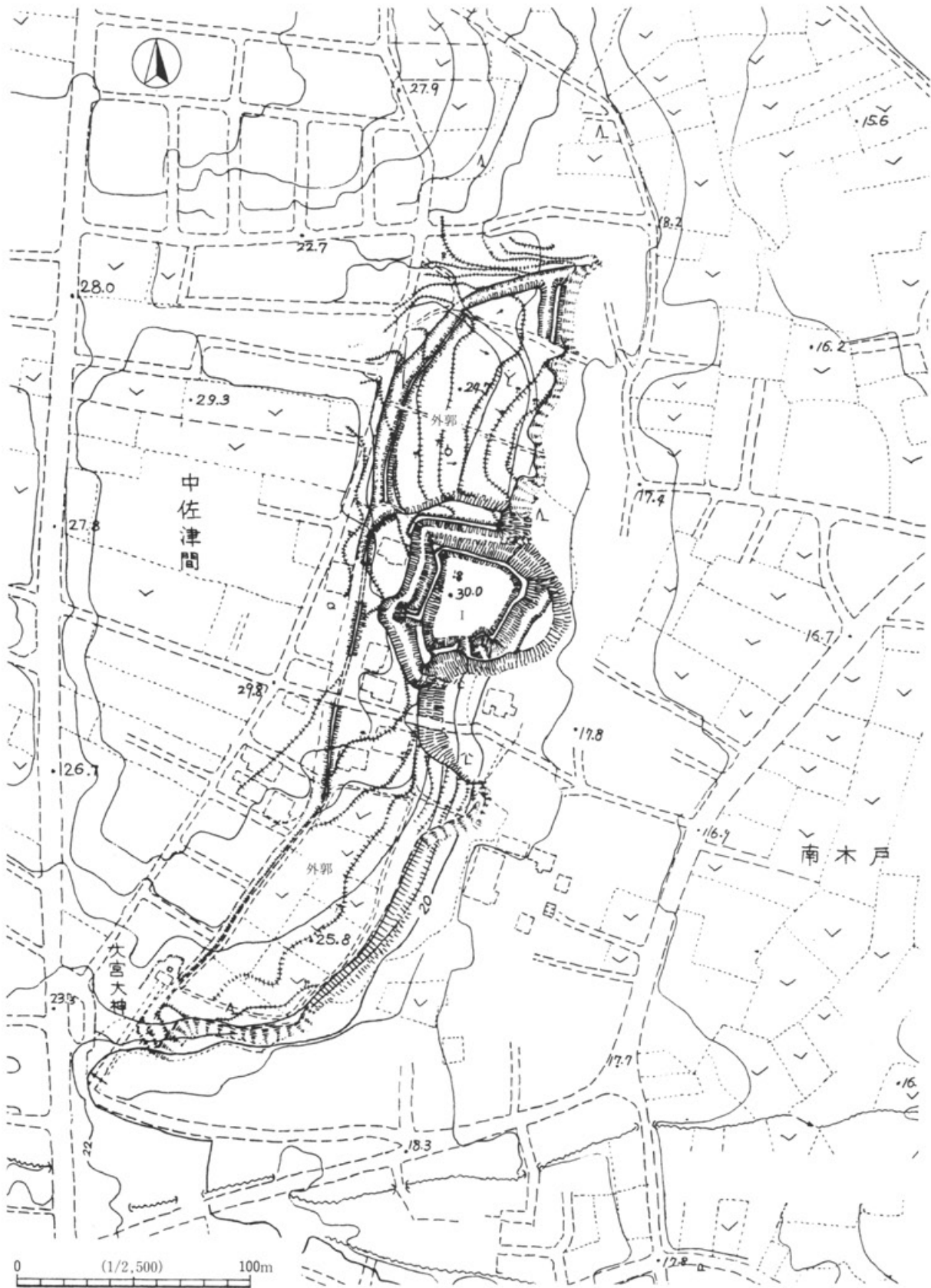
第12図 野田市金井野城跡(1)概念図 (最終II期、城・城主クラスD)
(『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 I』より)



(原図・石田守一)

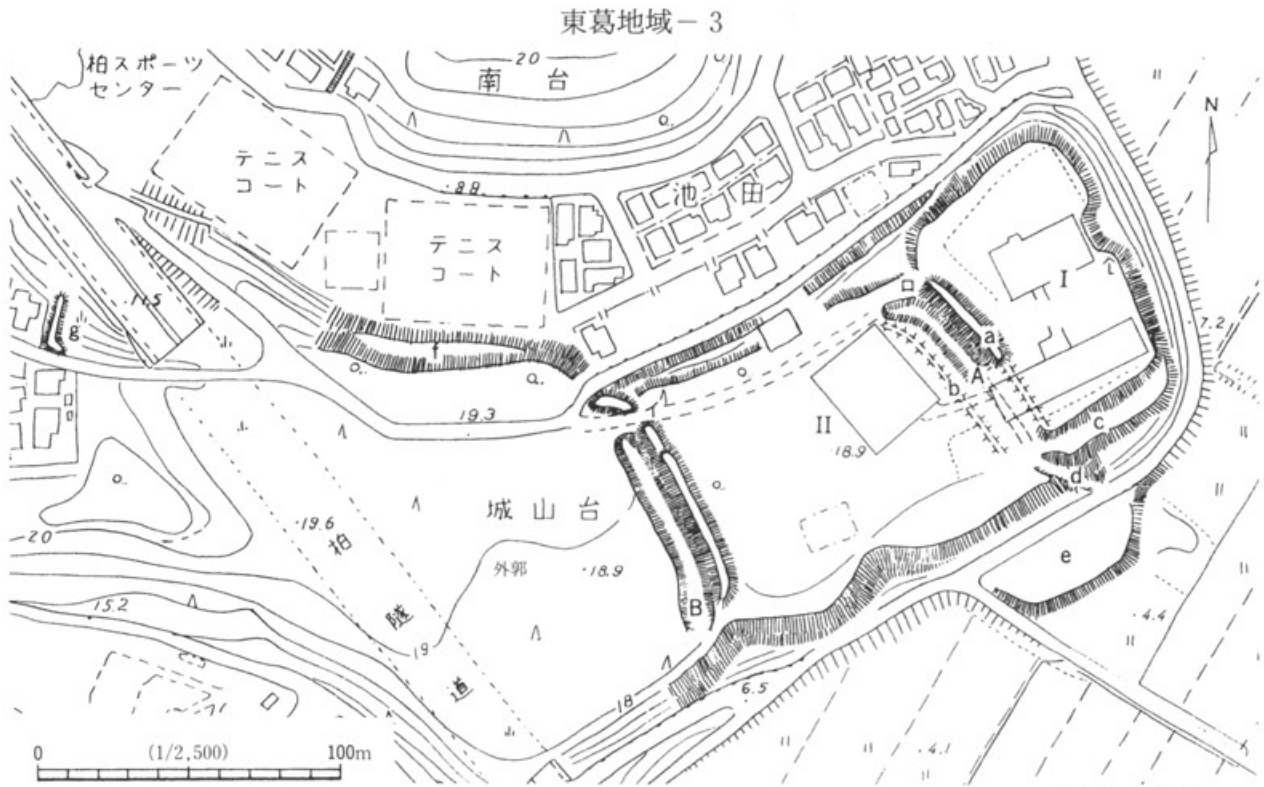
第13図 柏市松ヶ崎城跡(3)概念図 (最終III期、城・城主クラスD)
(『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 I』より)

東葛地域-2



(原図・池田 誠)

第14図 鎌ヶ谷市佐津間城跡(10)概念図 (最終III期、城・城主クラスD)
(『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 I』より)



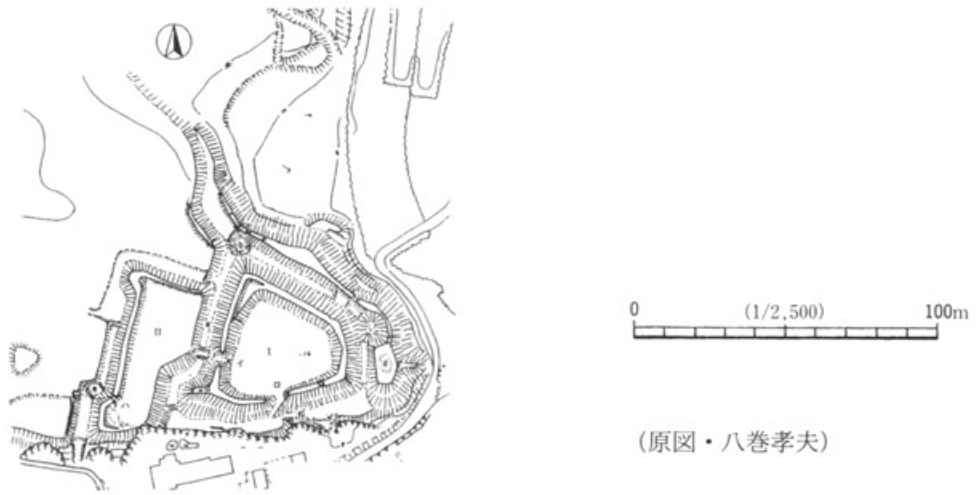
(原図・石田守一)

第15図 柏市戸張城跡(2)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスC)
 (『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 I』より)

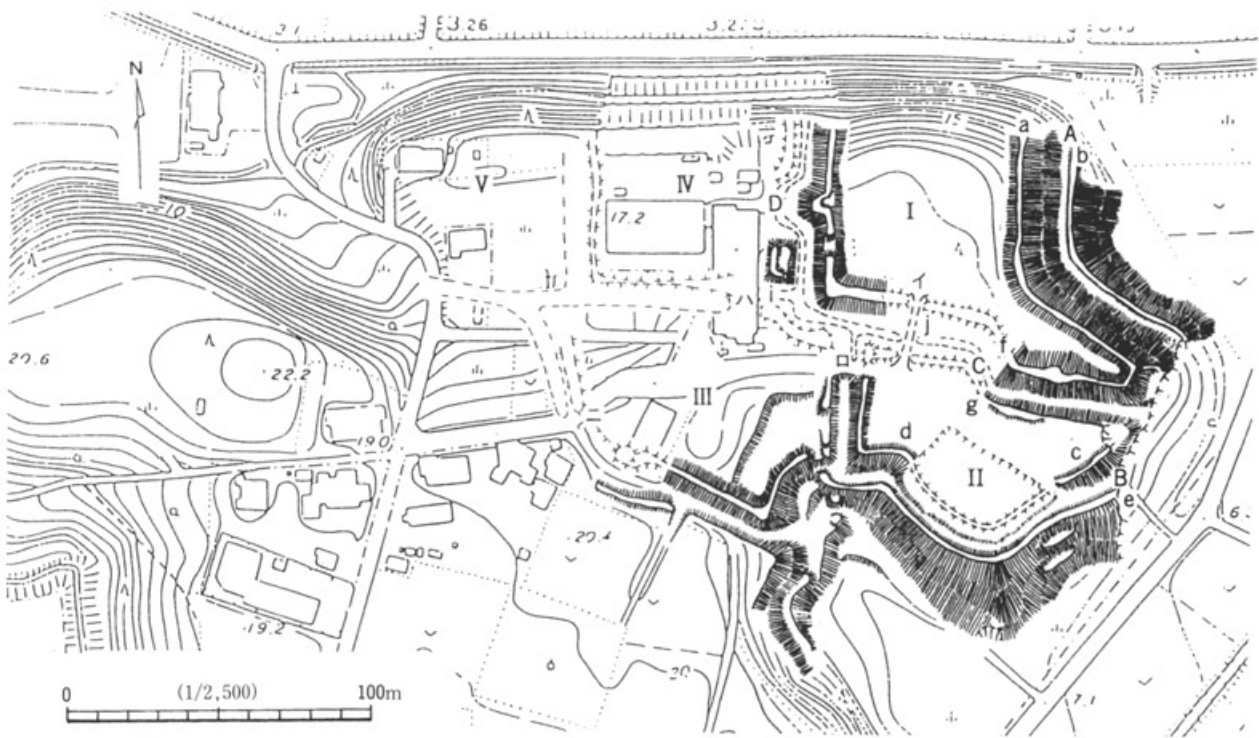


第16図 柏市増尾城跡(4)測量図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスC)
 (『千葉県中近世城跡研究調査報告書 第18集』より)

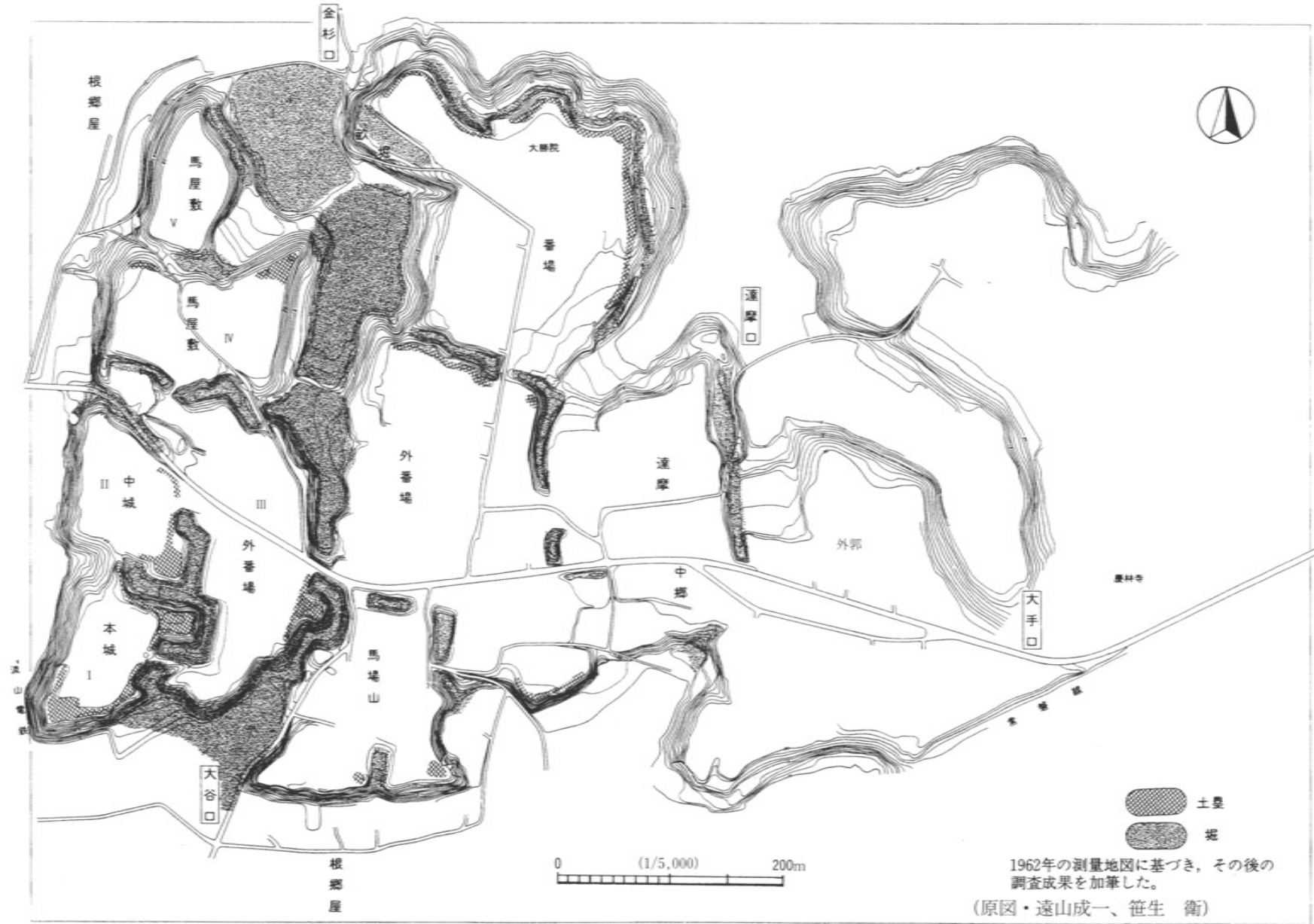
東葛地域-4



第17図 我孫子市根戸城跡(5)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスC)
〔千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 I〕より

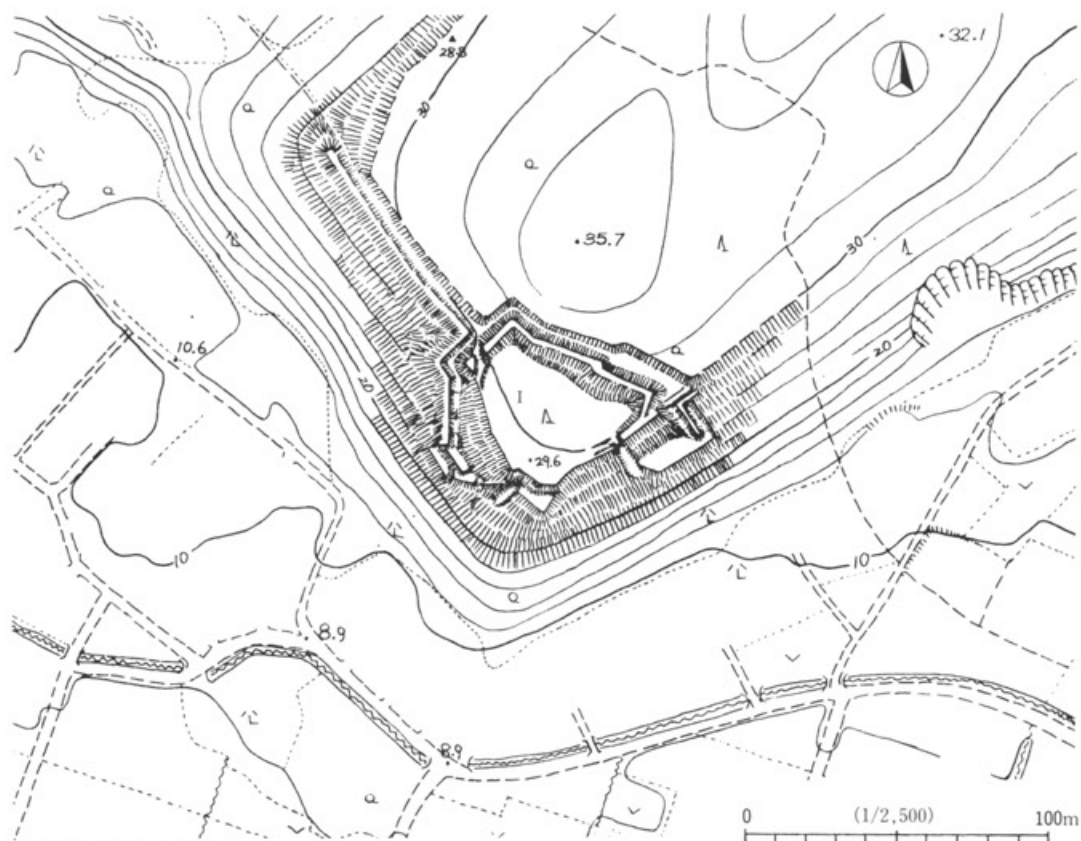


第18図 沼南町箕輪城跡(9)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスC)
〔千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 I〕より



第19図 松戸市小金城跡(6)概念図 (最終III期、城・城主クラスB)
〔千葉県歴史資料編 中世1〕より

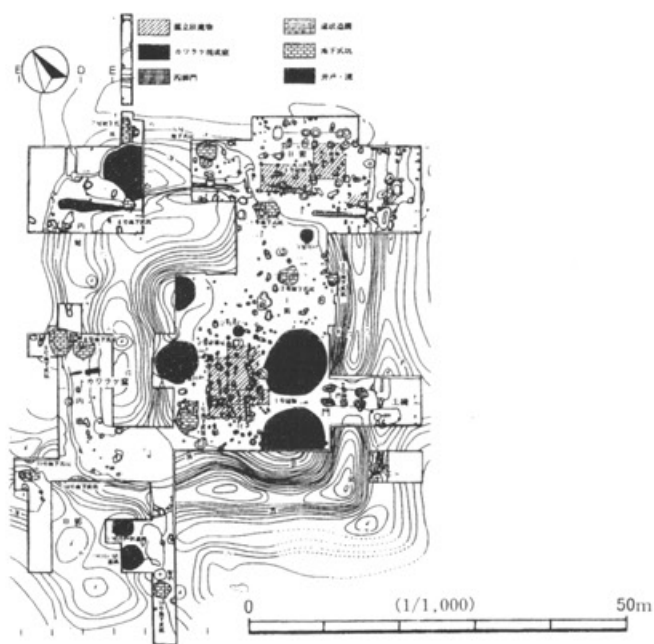
印旛地域-1



(原図・池田 誠)

第20図 佐倉市大篠塚城跡(37)概念図 (最終II期、城・城主クラスE)

(『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 I』より)



第21図 四街道市池ノ尻館跡(45)発掘調査全測図 (最終II期、城・城主クラスD)

(『千葉県の歴史 資料編 中世1』より)

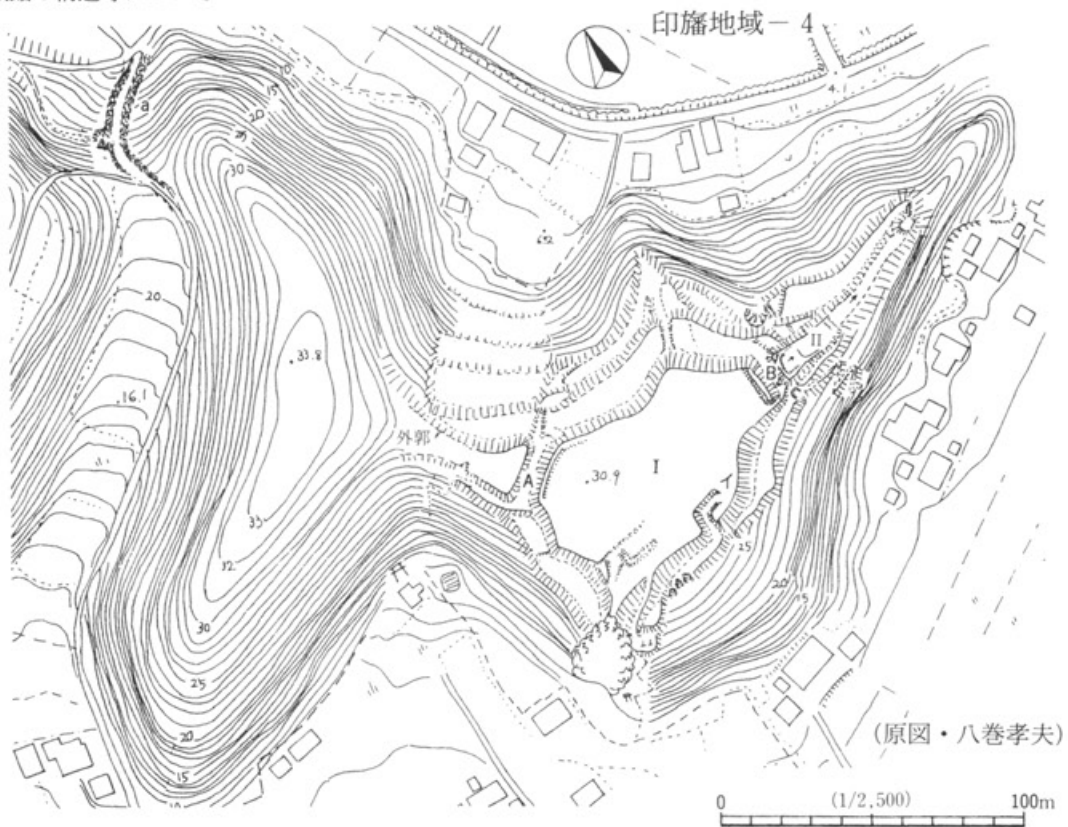
印旛地域-2



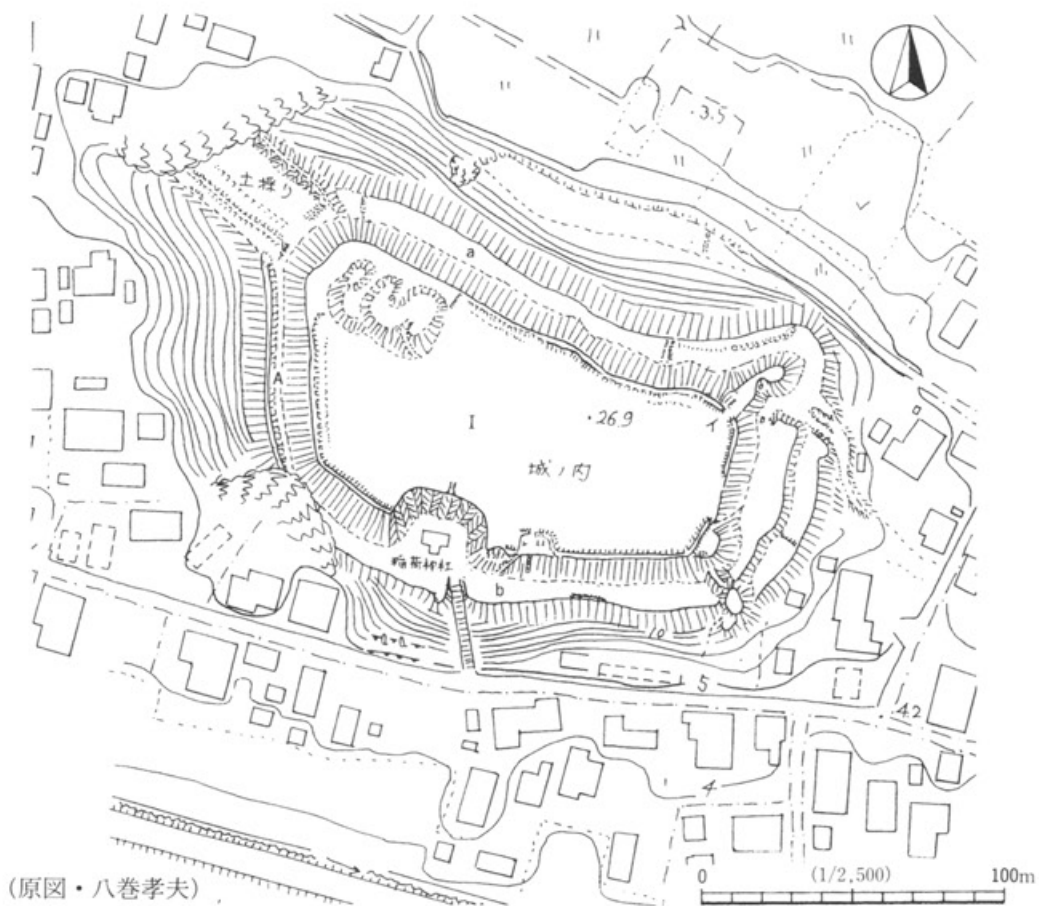
第22図 印西市小林城跡(12,15)発掘調査全測図 (II期EクラスからIII期Dクラスへ)
〔印西町小林城跡〕より



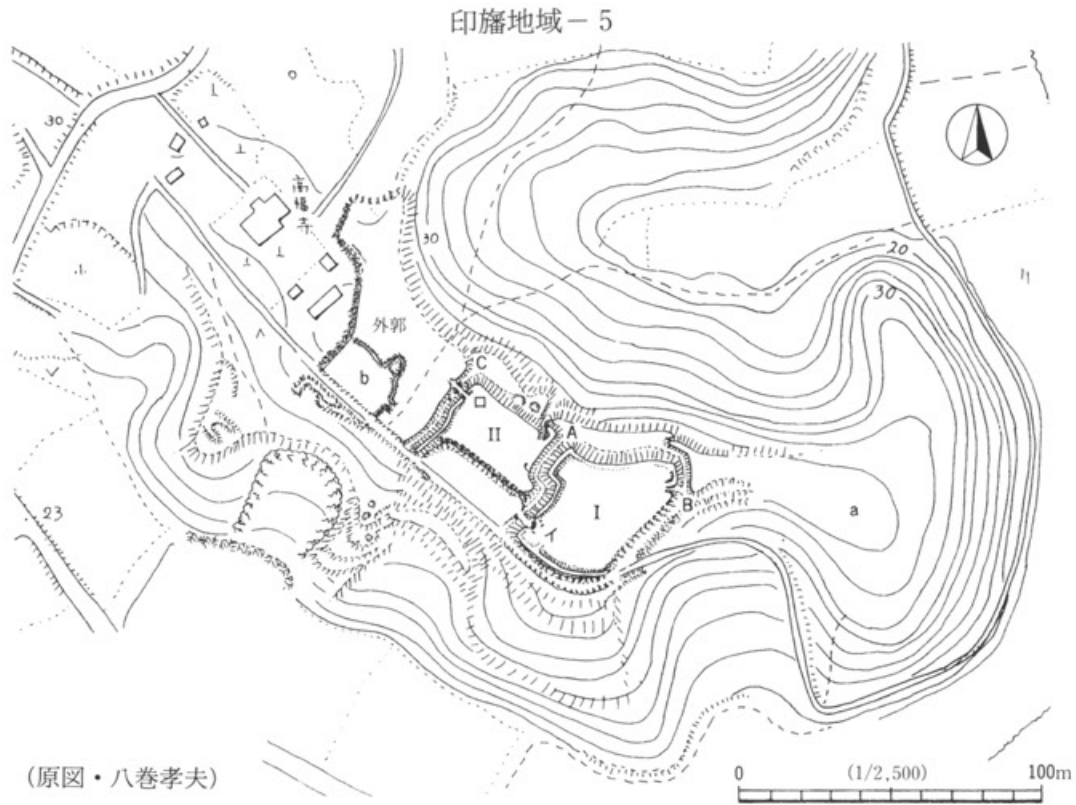
第23図 本埜村笠神城跡(16)概念図 (最終III期、城・城主クラスD)
〔印西町小林城跡〕より



第26図 成田市荒海城跡(24)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスD)
 (『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 I』より)



第27図 成田市長沼城跡(23)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスD)
 (『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 I』より)

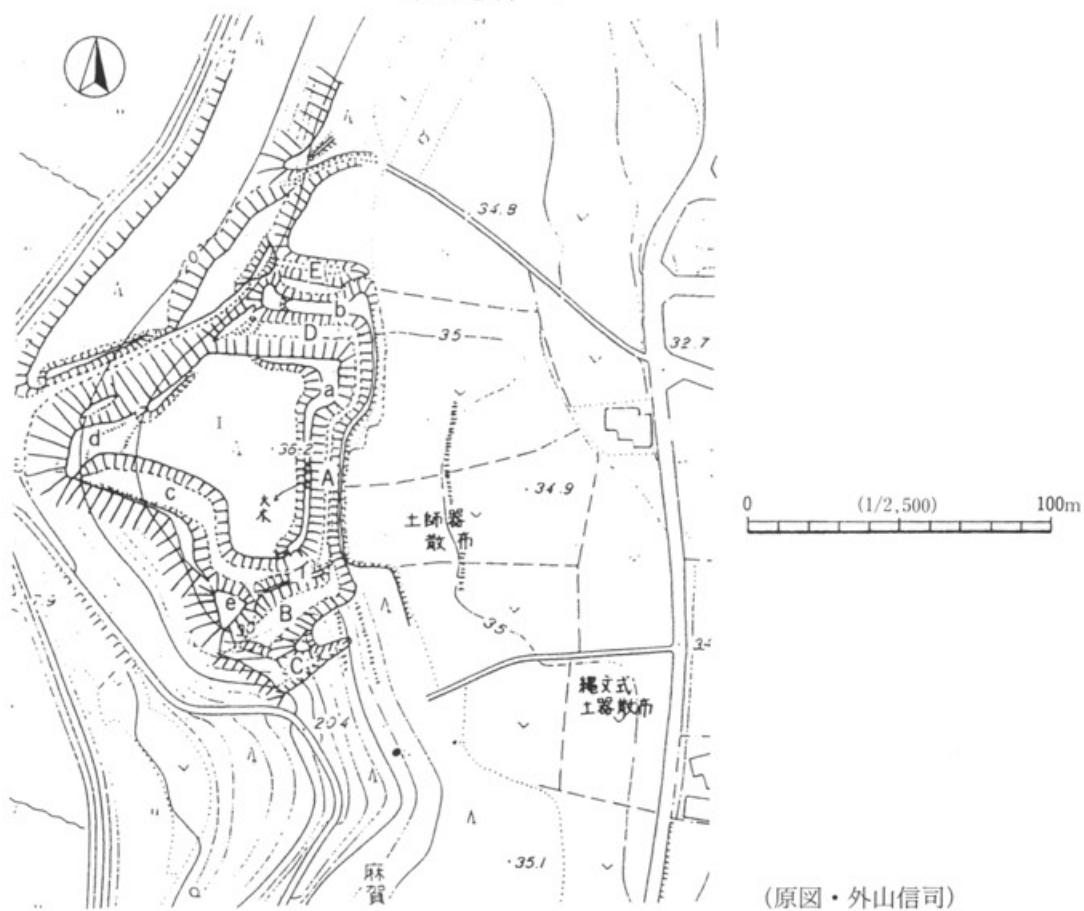


第28図 成田市駒井野城跡(25)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスD)
〔千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅰ〕より

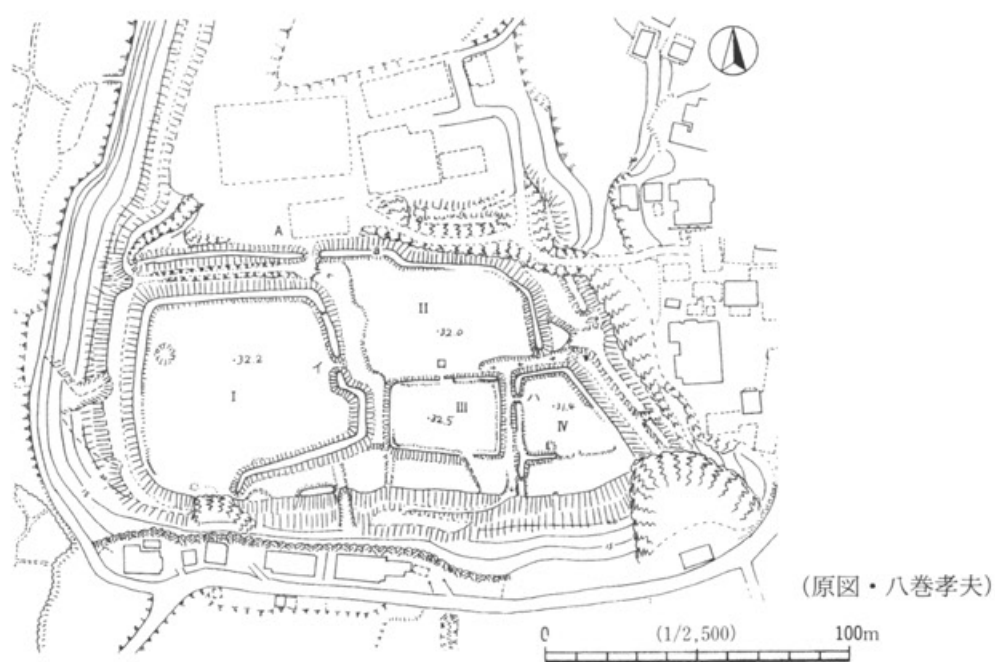


第29図 成田市東和田城跡(22)発掘調査全測図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスD)
〔千葉県の歴史 資料編 中世Ⅰ〕より

印旛地域-6



第30図 佐倉市太田要害城跡(36)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスD)
 (『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 I』より)



第31図 佐倉市小篠塚城跡(31)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスD)
 (『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 I』より)

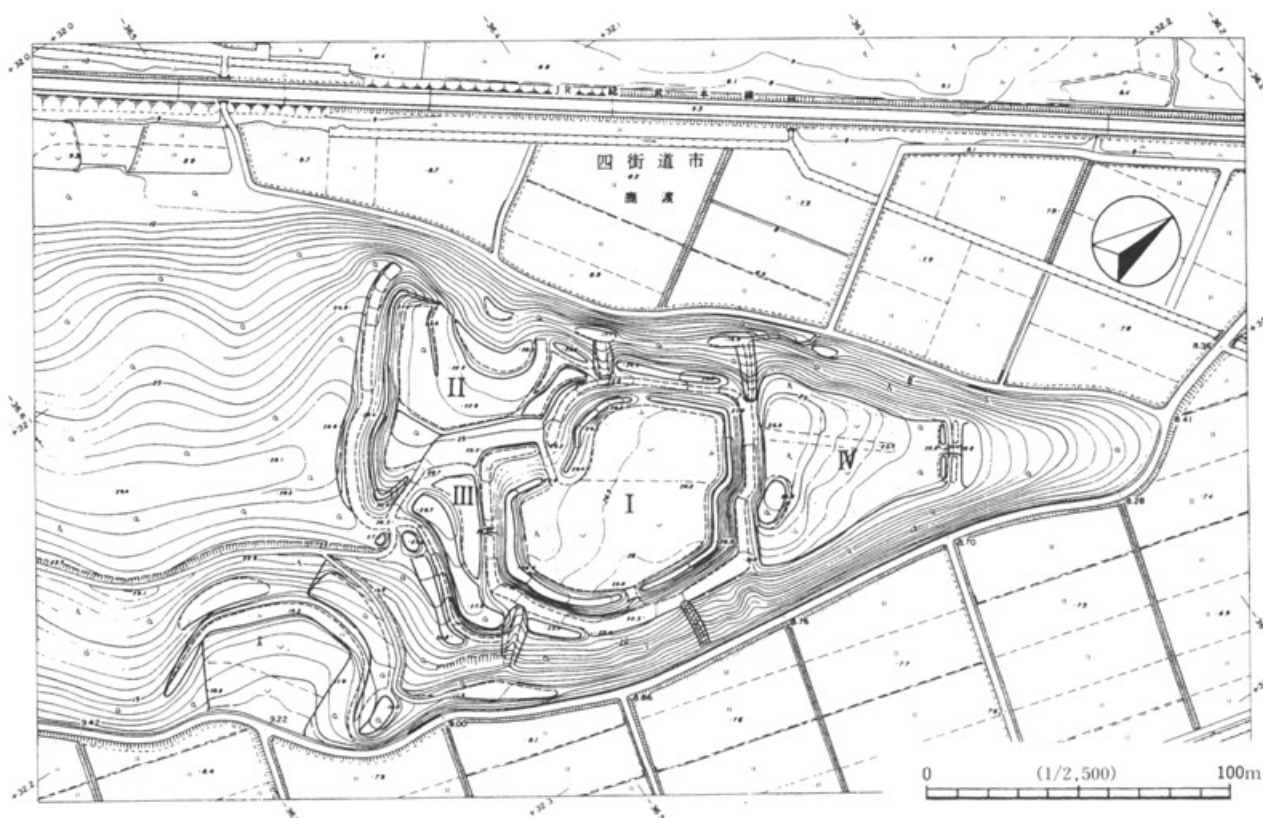
印旛地域-7



(原図・外山信司)

第32図 佐倉市白井田宿内砦跡(35)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスD)

(『千葉県所在中近世城跡詳細分布調査報告書 I』より)



第33図 四街道市鹿渡城跡(39)測量図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスD)

(『千葉県中近世城跡研究調査報告書 第11集』より)

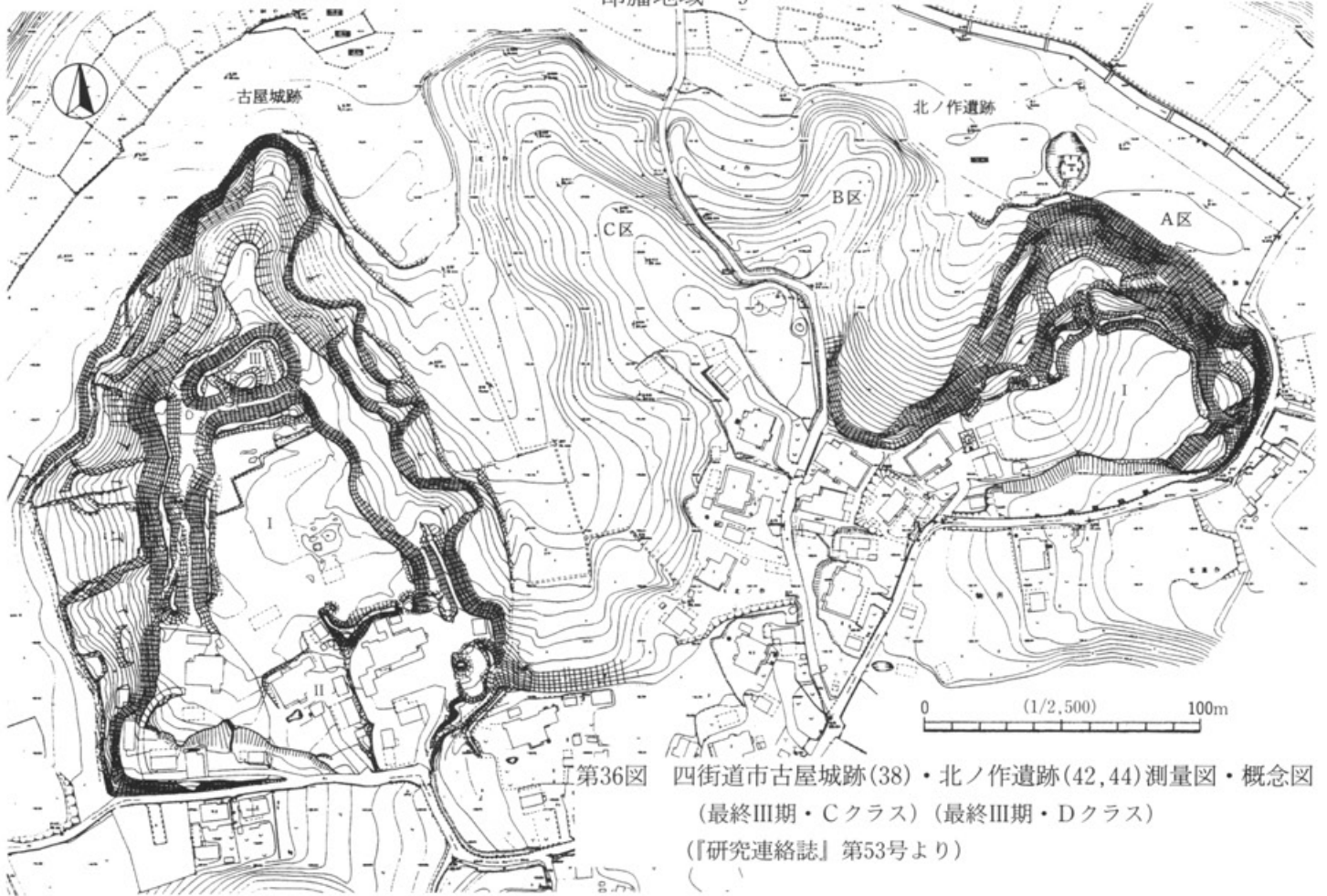


第34図 四街道市福星寺跡(43)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスD)
 (『千葉城郭研究』5号より)

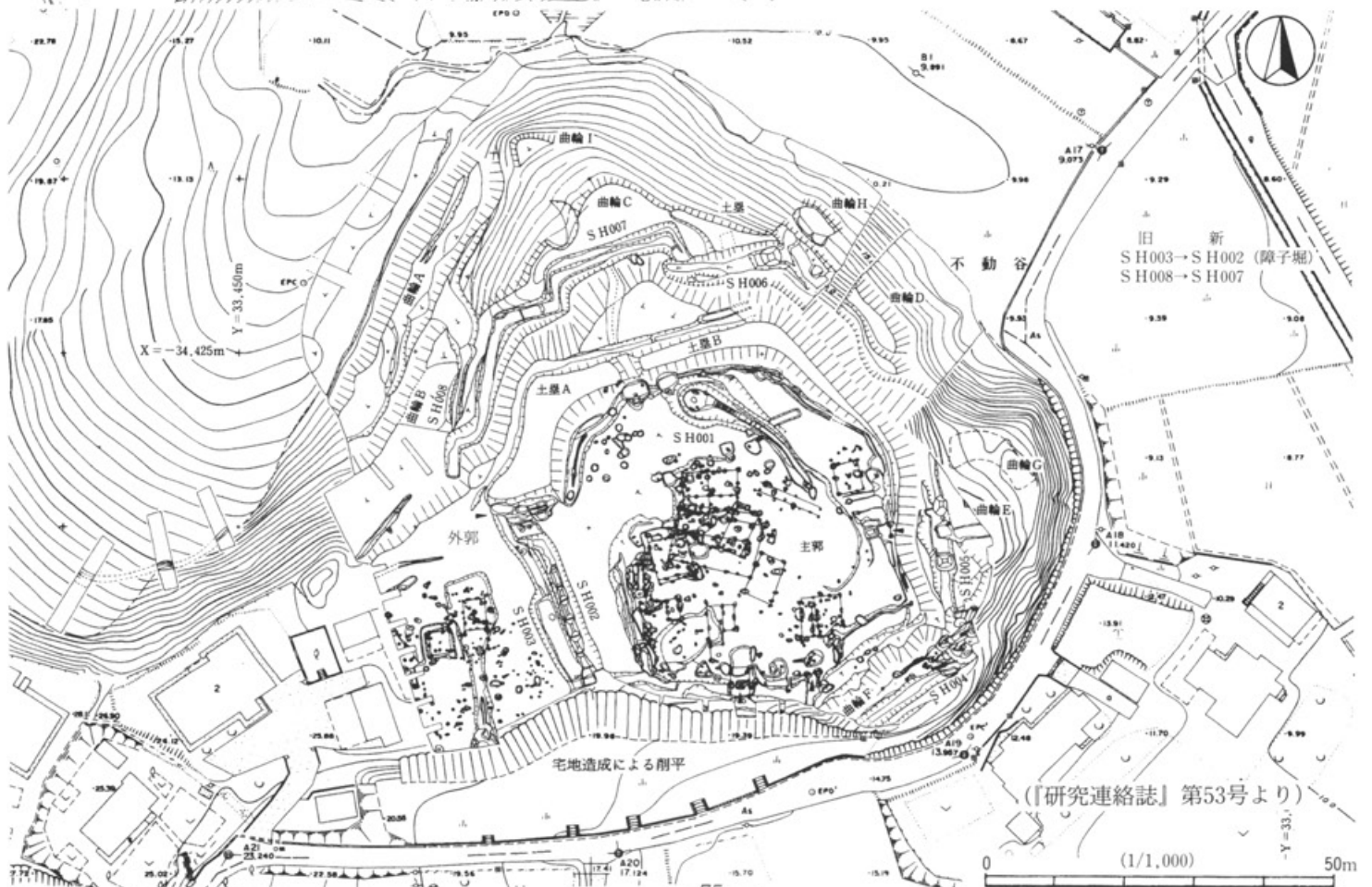


第35図 四街道市木出城跡(40)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスD)
 (『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 I』より)

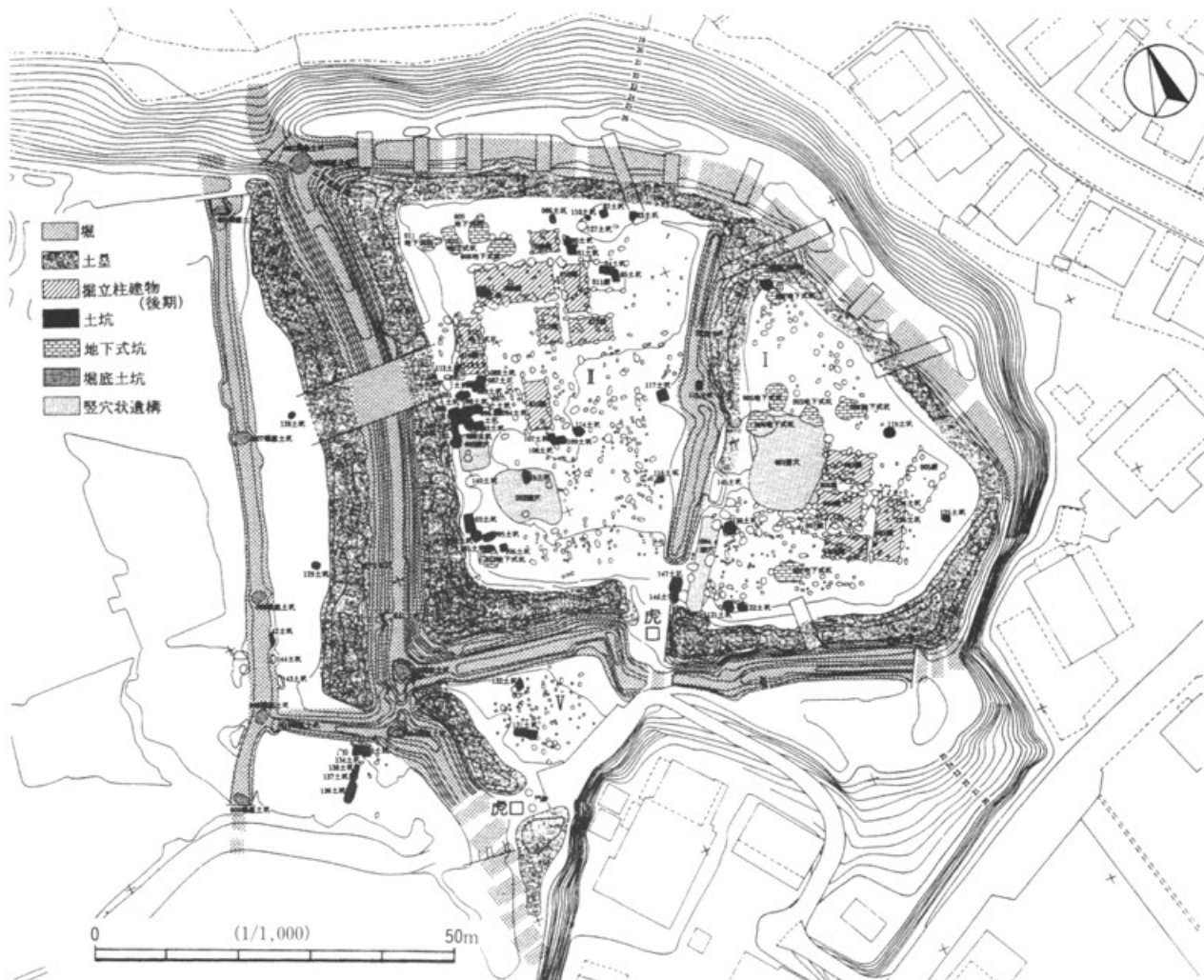
印旛地域-9



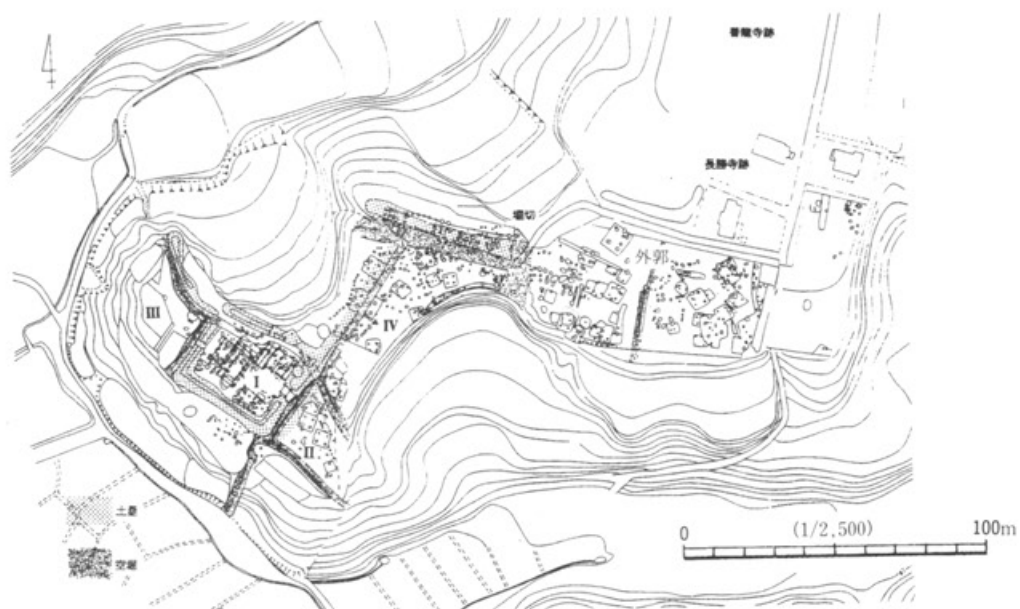
第36図 四街道市古屋城跡(38)・北ノ作遺跡(42,44)測量図・概念図
 (最終Ⅲ期・Cクラス) (最終Ⅲ期・Dクラス)
 (『研究連絡誌』第53号より)



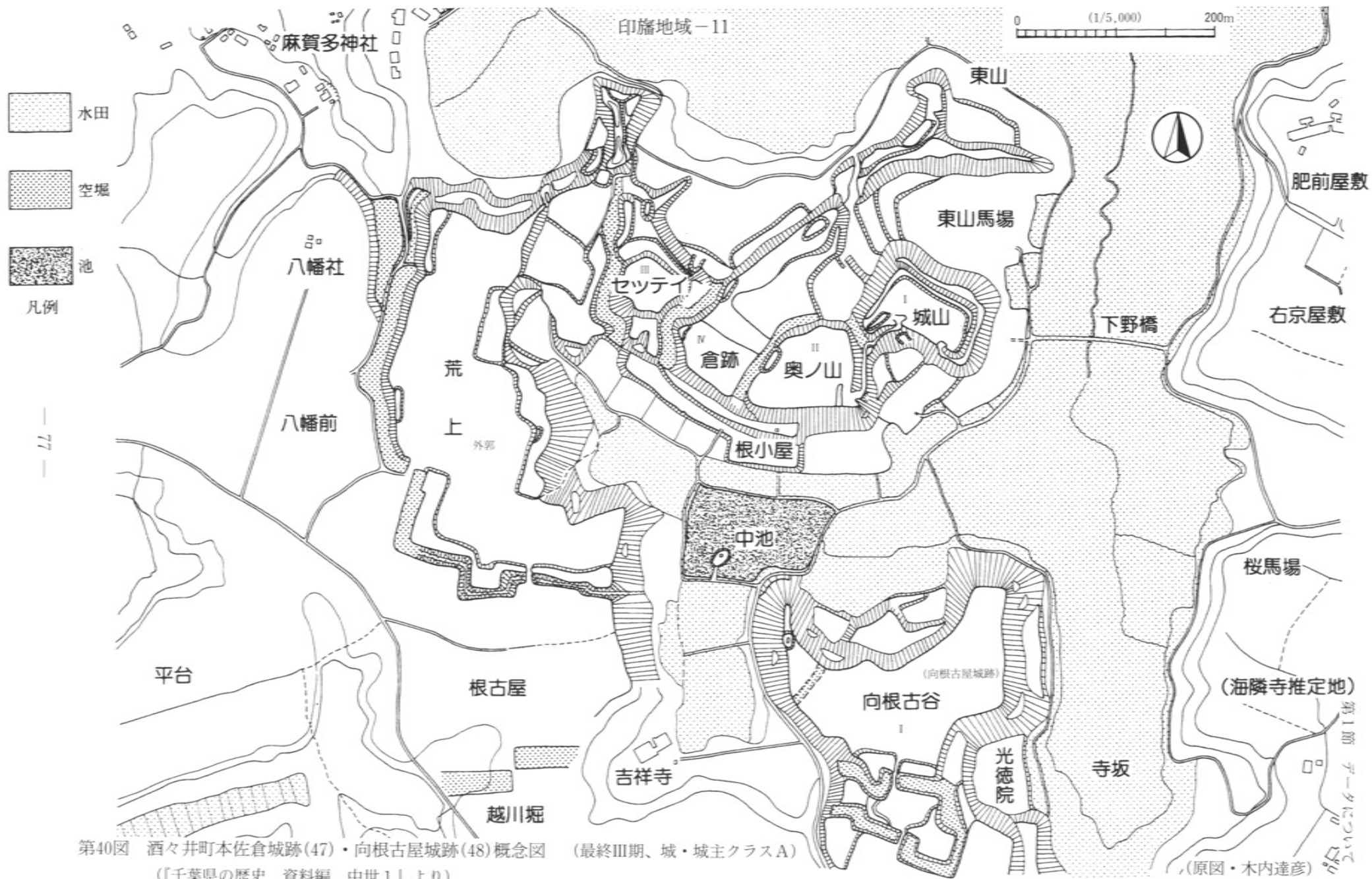
第37図 四街道市北ノ作遺跡(42,44)発掘調査全測図
 (Ⅱ期・DクラスからⅢ期・Dクラスへ)



第38図 四街道市和良比堀込城跡(41)発掘調査全測図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスC)
 (『千葉県の歴史 資料編 中世1』より)

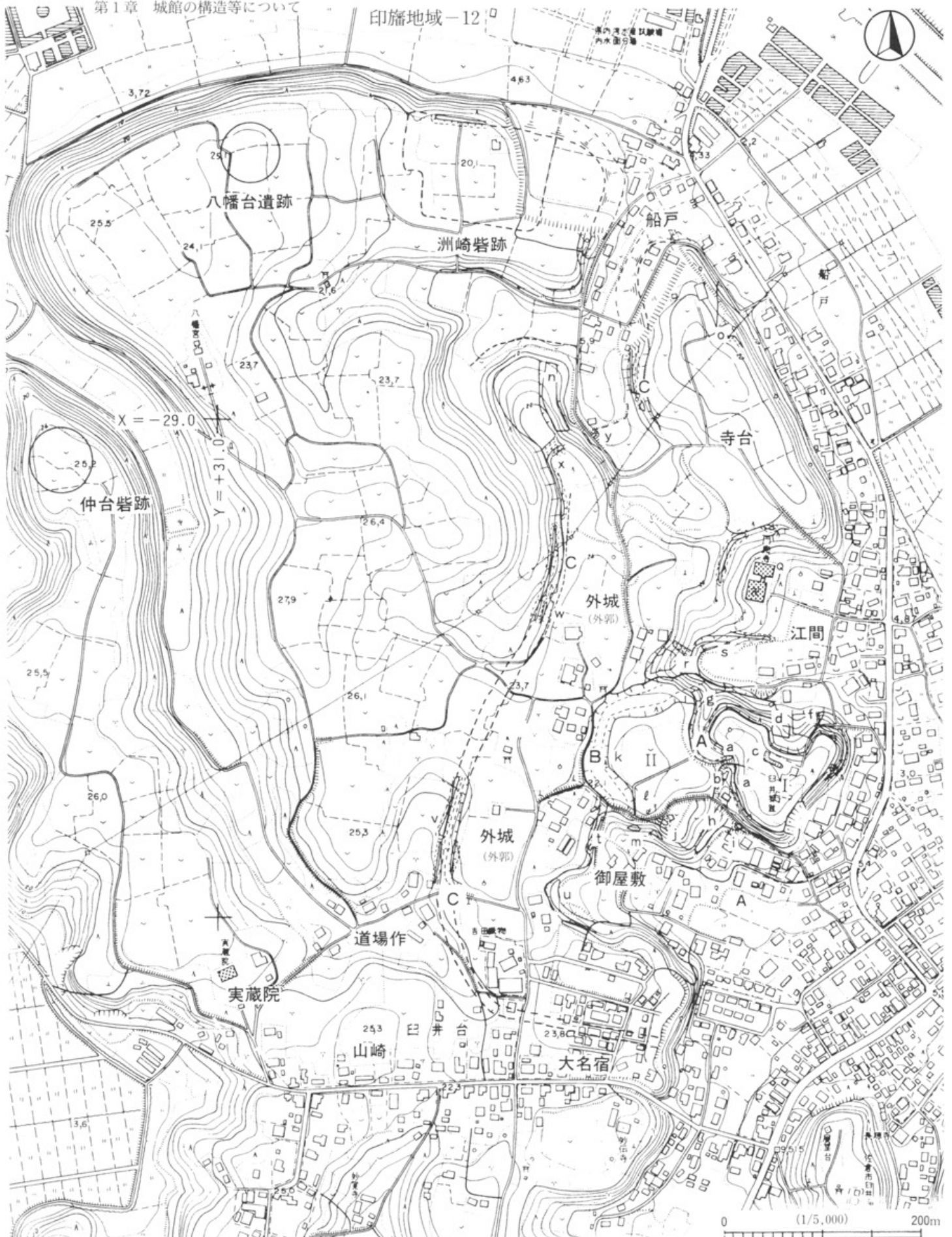


第39図 酒々井町長勝寺脇館跡(49)発掘調査全測図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスC)
 (『長勝寺館跡』より)



第40図 酒々井町本佐倉城跡(47)・向根古屋城跡(48)概念図 (最終III期、城・城主クラスA)
 (『千葉県の歴史 資料編 中世1』より)

(原図・木内達彦)

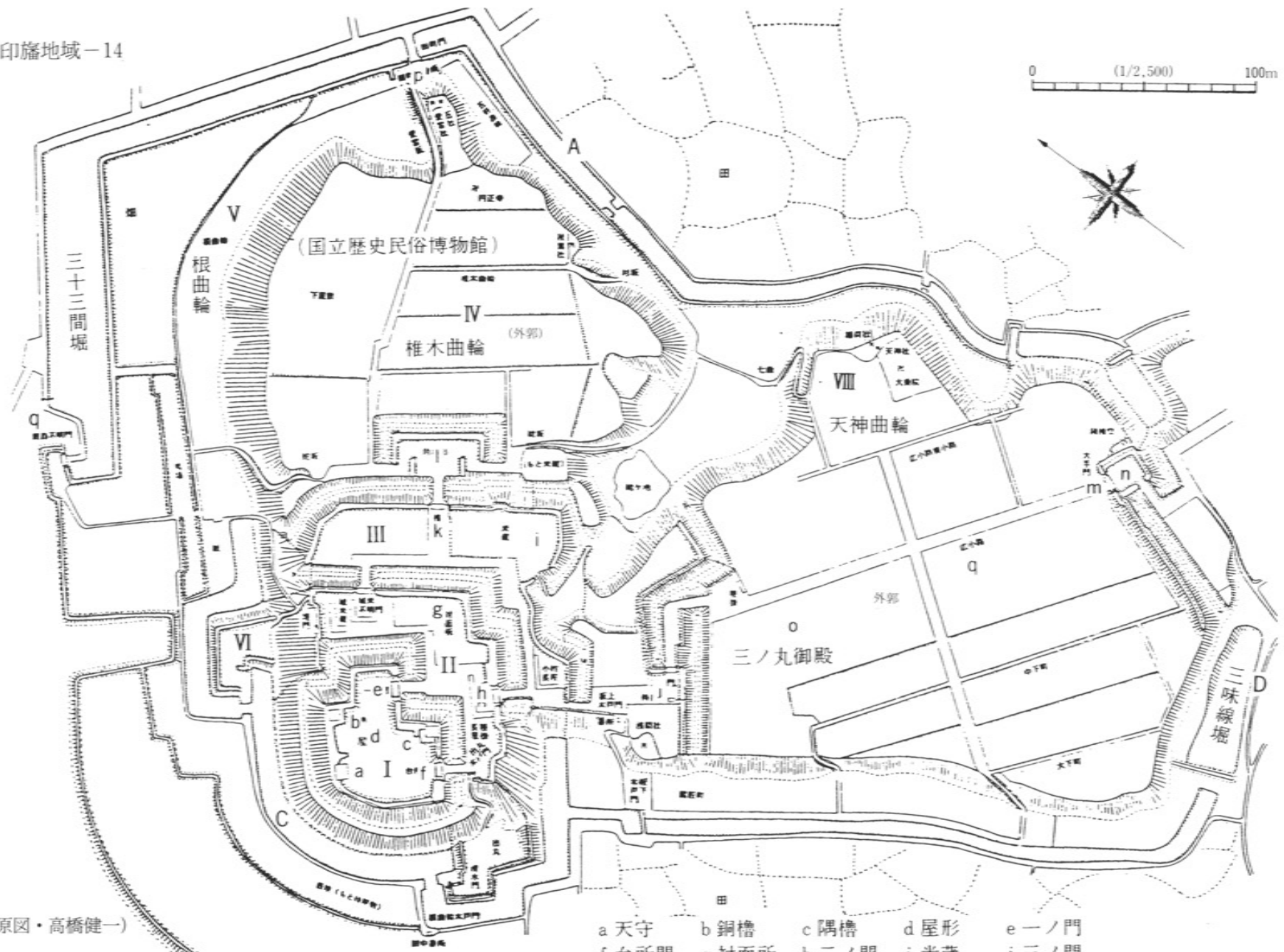


第41図 佐倉市白井城跡(26)周辺概念図 (最終IV期、城・城主クラスB)

(『千葉県中近世城跡研究調査報告書 第4集』より)



第42図 佐倉市岩富城跡(27)測量図 (最終IV期、城・城主クラスB)
〔千葉県歴史資料編 中世1〕より



(原図・高橋健一)

第43図 佐倉市佐倉城跡(28)概念図 (最終V期、城・城主クラスA)

(「千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 I」より)

- | | | | | |
|-------|---------|-----------|------|---------|
| a 天守 | b 銅櫓 | c 隅櫓 | d 屋形 | e 一ノ門 |
| f 台所門 | g 対面所 | h 二ノ門 | i 米蔵 | j 三ノ門 |
| k 椎木門 | l 馬出 | m 追手門 | n 枡形 | o 三ノ丸御殿 |
| p 田町門 | q 鹿島不明門 | VI・VII 出丸 | | |

千葉地域-1

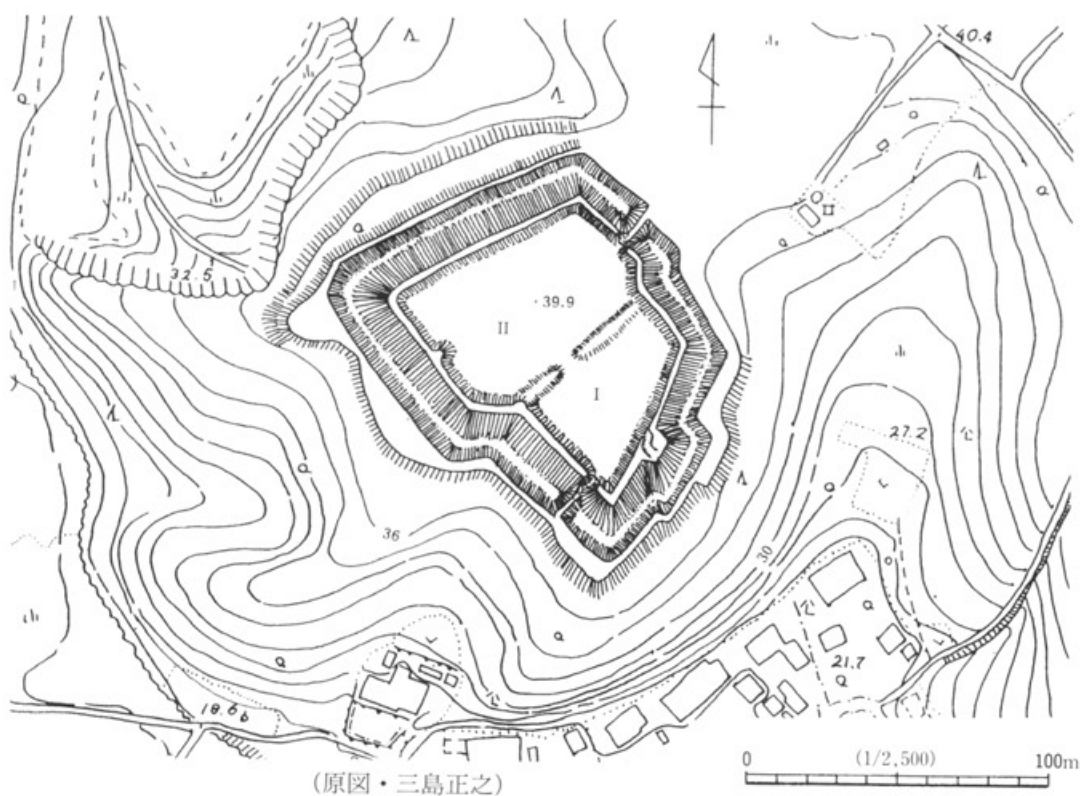


第44図 千葉市南屋敷遺跡(67)発掘調査全測図 (最終II期、城・城主クラスE)
〔『千葉県の歴史 資料編 中世1』より〕

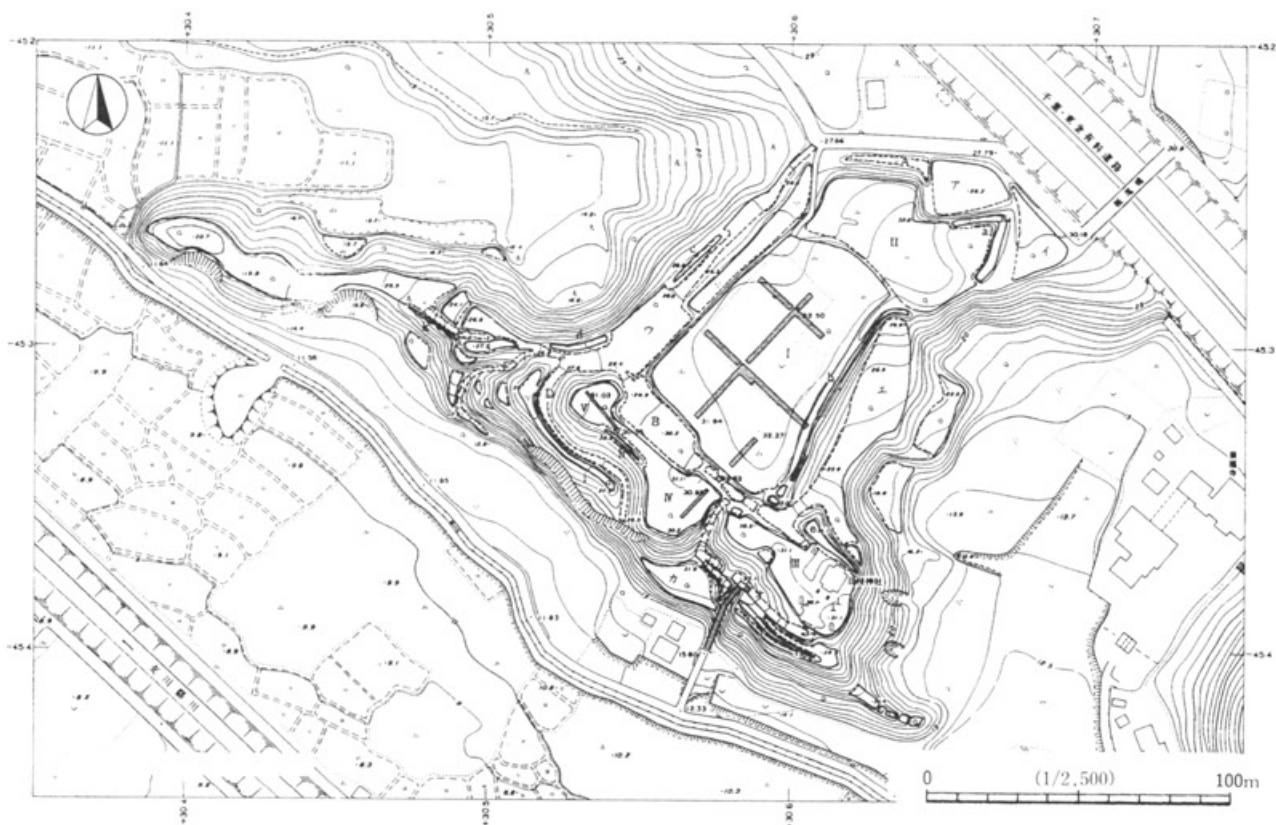


第45図 千葉市城の腰城跡(61)測量図 (最終II期、城・城主クラスD)
〔『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 1』より〕

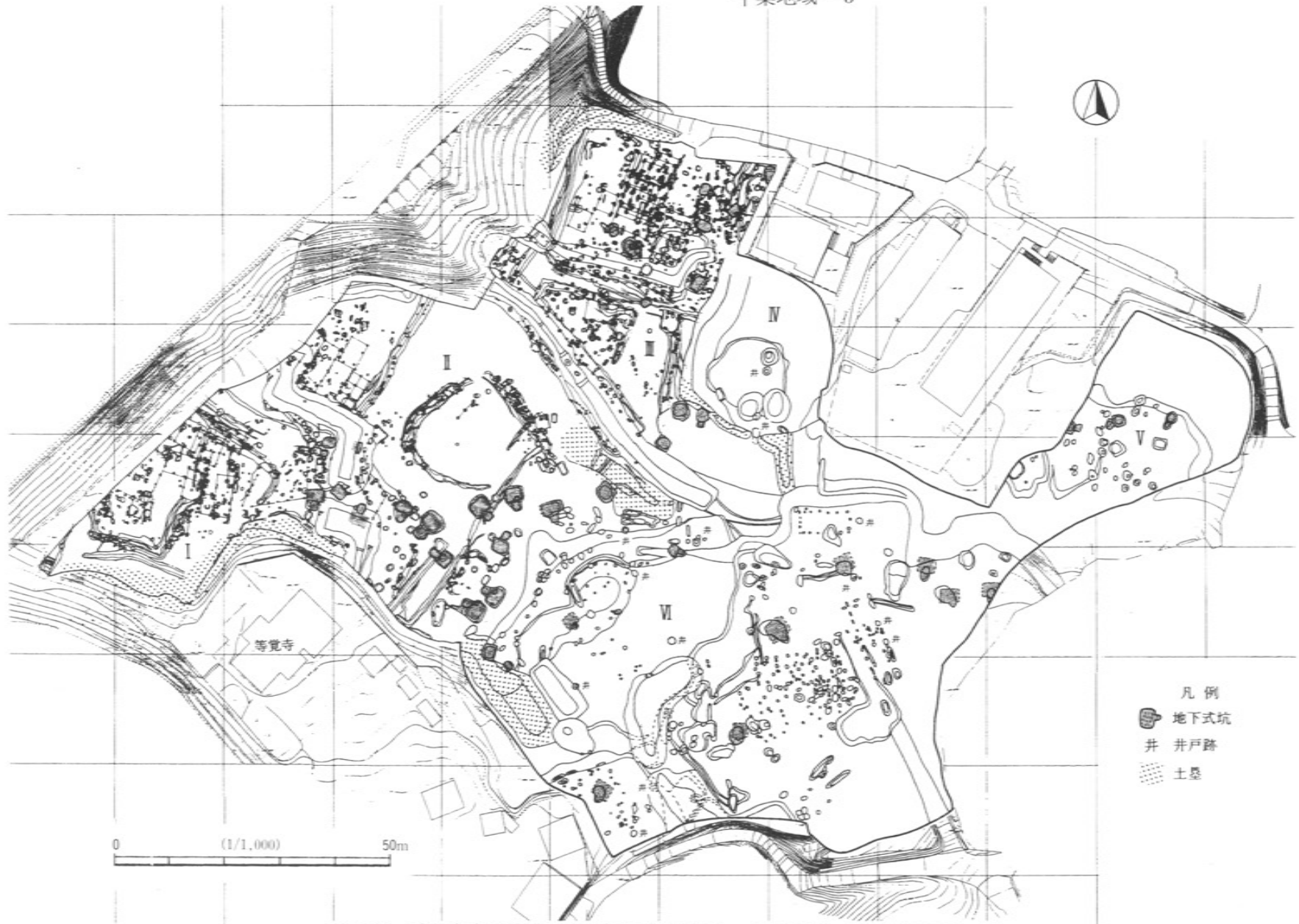
千葉地域-2



第46図 千葉市立堀城跡(66)概念図 (最終III期、城・城主クラスD)
(『図説中世城郭事典 一』より)



第47図 千葉市城山城跡(62)測量図 (最終III期、城・城主クラスD)
(『千葉県中近世城跡研究調査報告書 第9集』より)



第48図 千葉市高品城跡(58)発掘調査全測図 (最終III期、城・城主クラスB)
 (『千葉県の歴史 資料編 中世1』より)

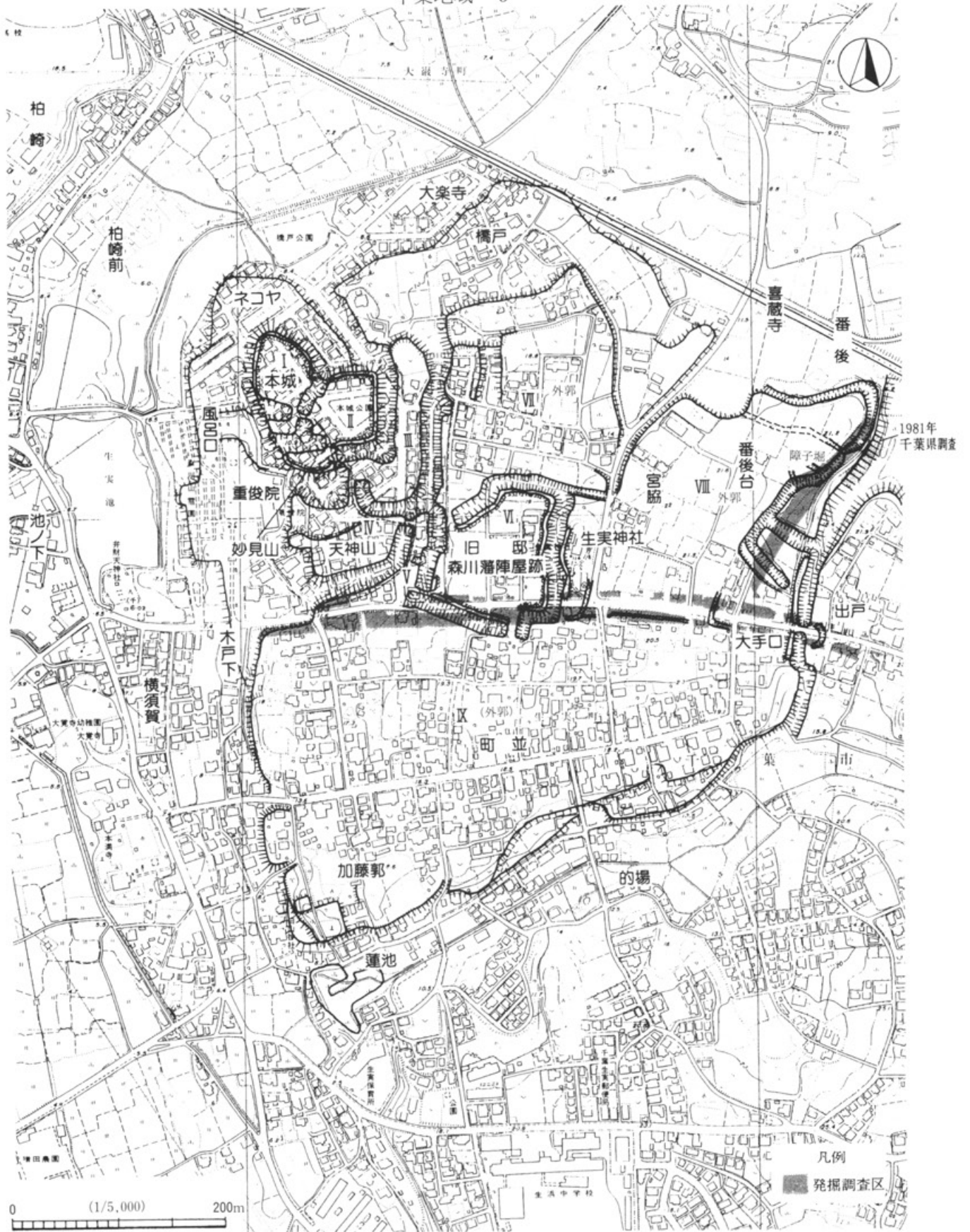


(原図・小高春雄)

第49図 千葉市小弓城跡(57)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスB)

(『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 I』より)

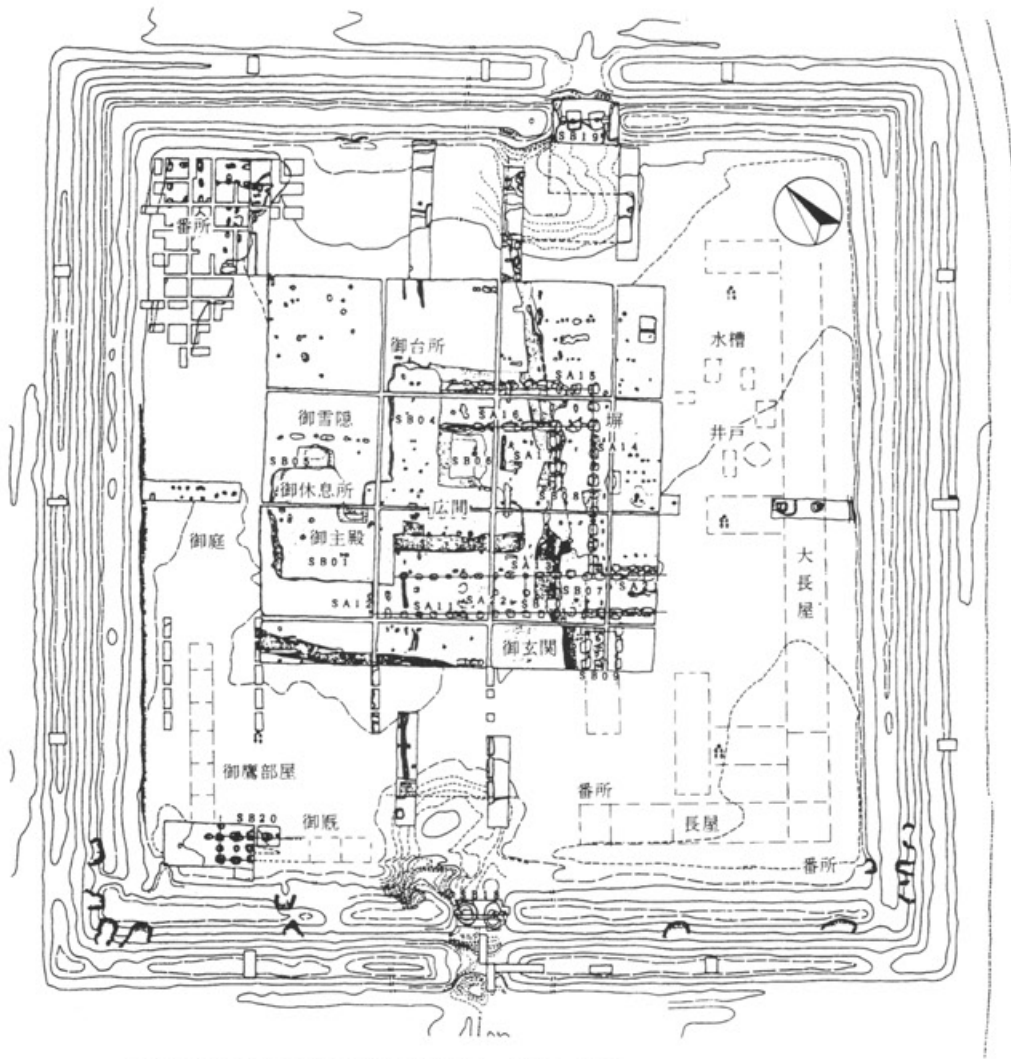
千葉地域-5



第50図 千葉市生実城跡(56)概念図 (最終III期、城・城主クラスB)
 (『千葉県の歴史 資料編 中世1』より)

(原図・小高春雄)

千葉地域-6

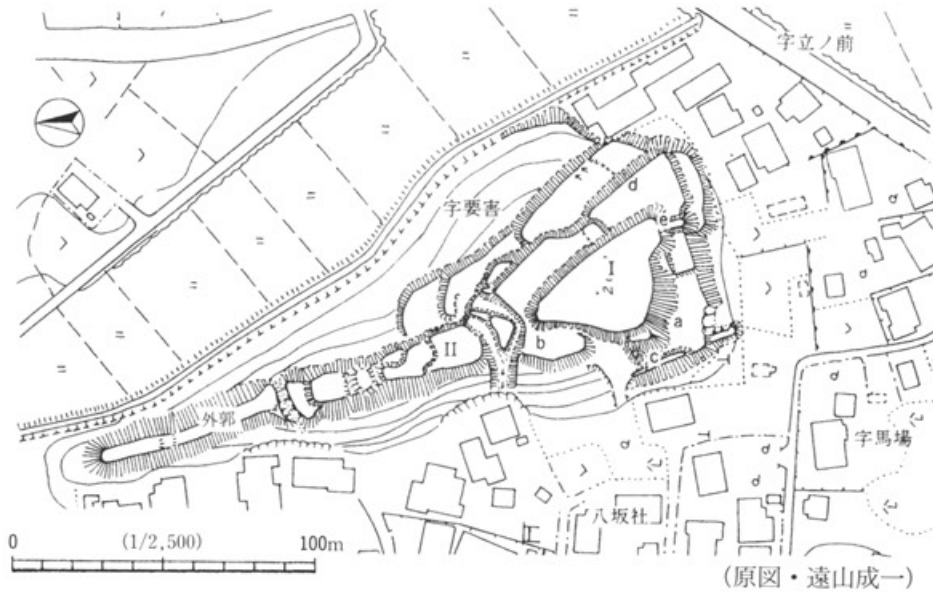


(『千葉御茶屋御殿跡第5次調査概報』・『第7次調査現説資料』(破線部分)より)

0 (1/1,000) 50m

第51図 千葉市御茶屋御殿跡(63)発掘調査全測図 (最終IV期、城・城主クラス(A))
(『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 I』より)

香取地域-1



第52図 神崎町小松城跡(75)概念図 (最終II期、城・城主クラスD)
〔千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 I〕より

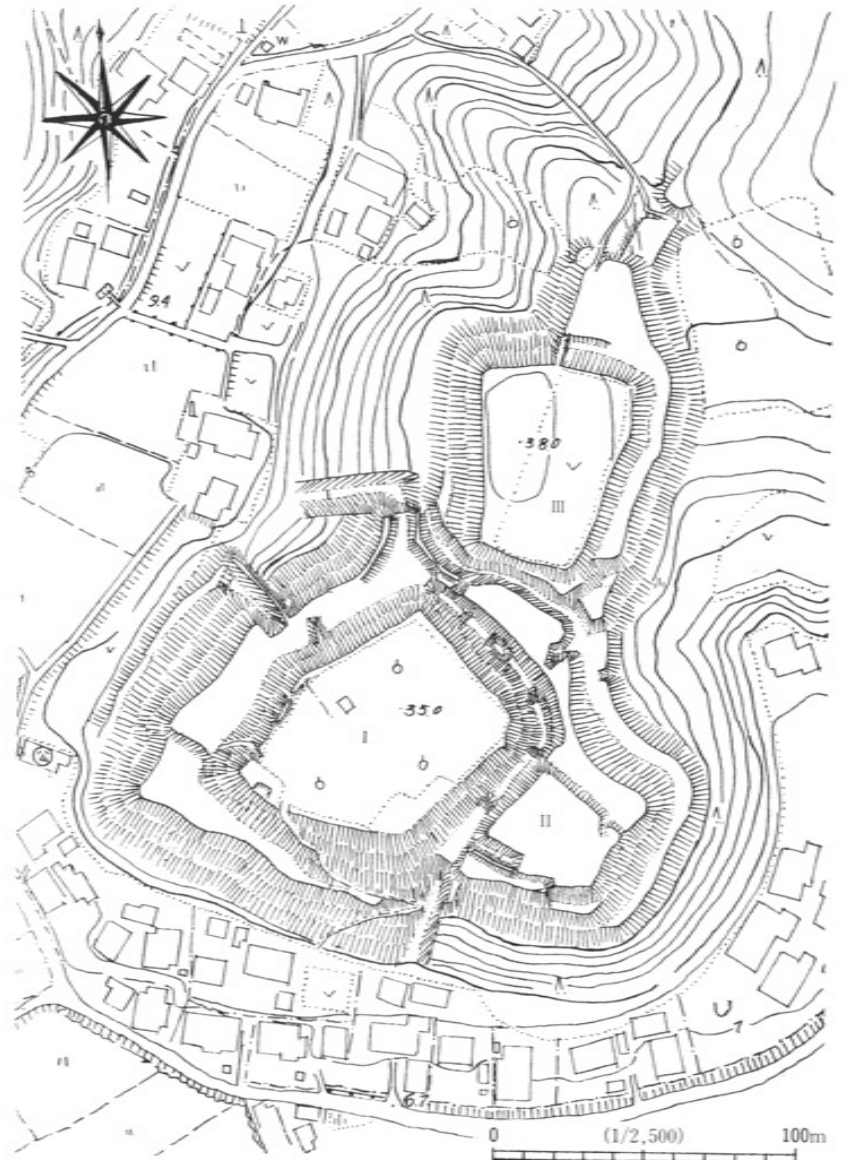


第53図 佐原市鶴崎新タテ古タテ城跡(83)概念図 (最終II期、城・城主クラスD)
〔千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 I〕より



(原図・吉田博之)

第54図 佐原市上小川城跡(89)概念図 (最終II期、城・城主クラスD)
〔千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 I〕より



(原図・三島正之)

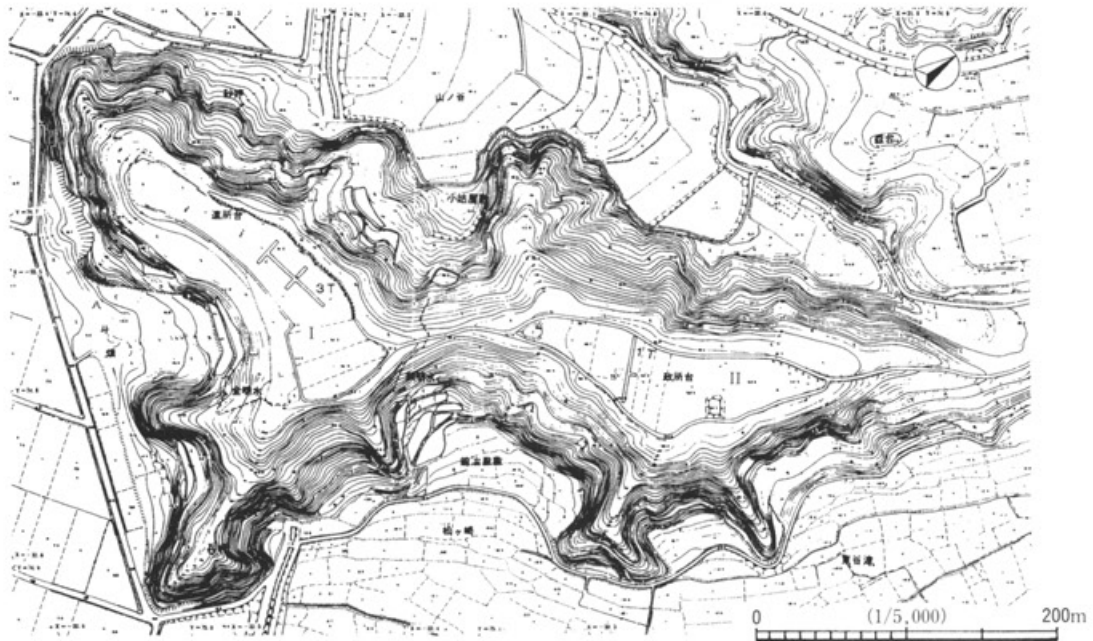
第55図 佐原市大倉城跡(85)概念図 (最終II期、城・城主クラスD)
〔千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 II〕より

香取地域-3



(原図・小高春雄)

第56図 山田町府馬城跡(101)概念図 (最終II期、城・城主クラスD)
 (『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 I』より)



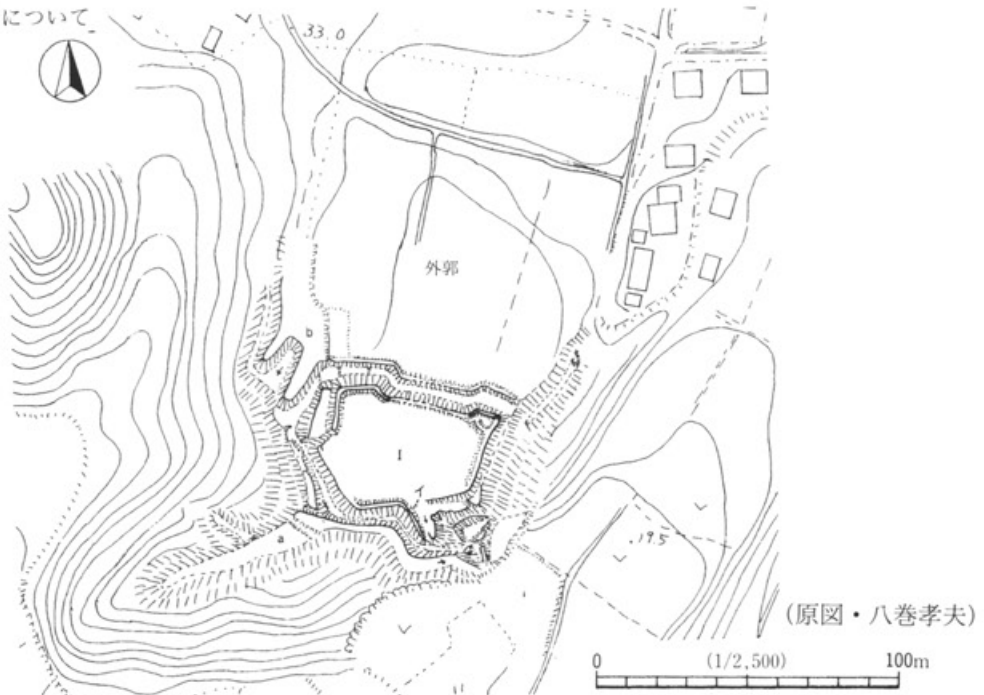
第57図 東庄町大友城跡(105)概念図 (最終II期、城・城主クラスD)
 (『千葉県中近世城跡研究調査報告書 第3集』より)



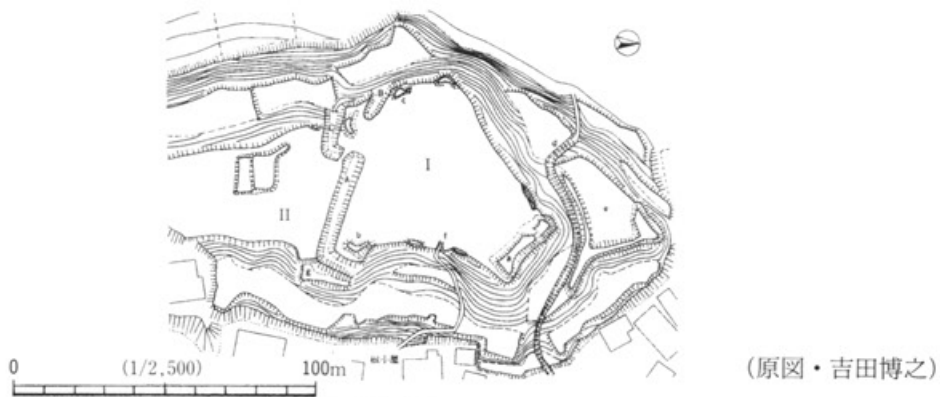
(原図・中井正代)

第58図 下総町名木城跡(72)概念図 (最終III期、城・城主クラスD)
 (『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 I』より)

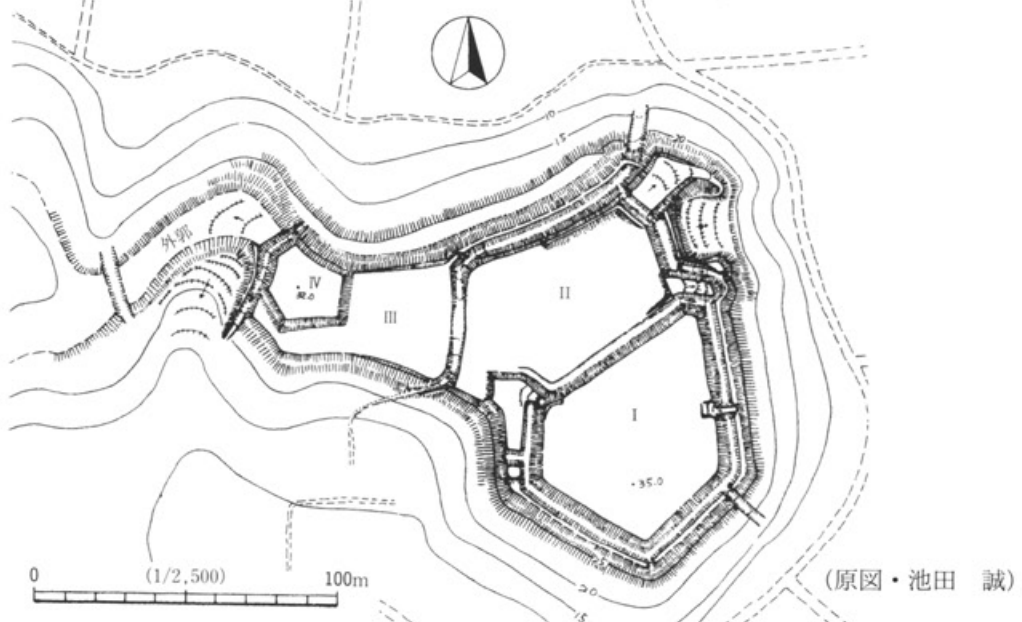
香取地域 - 4



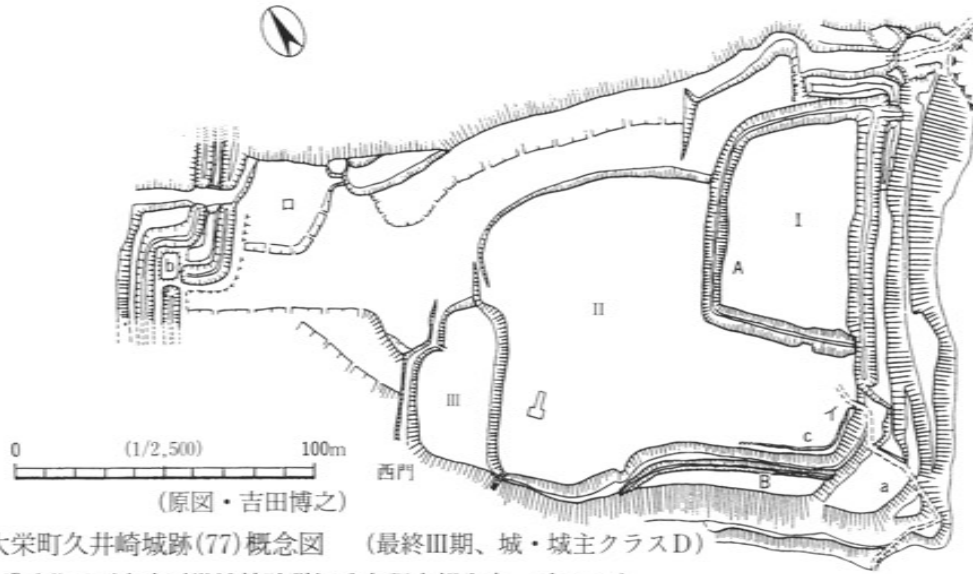
第59図 下総町小帝城跡(70)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスD)
〔千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅰ〕より



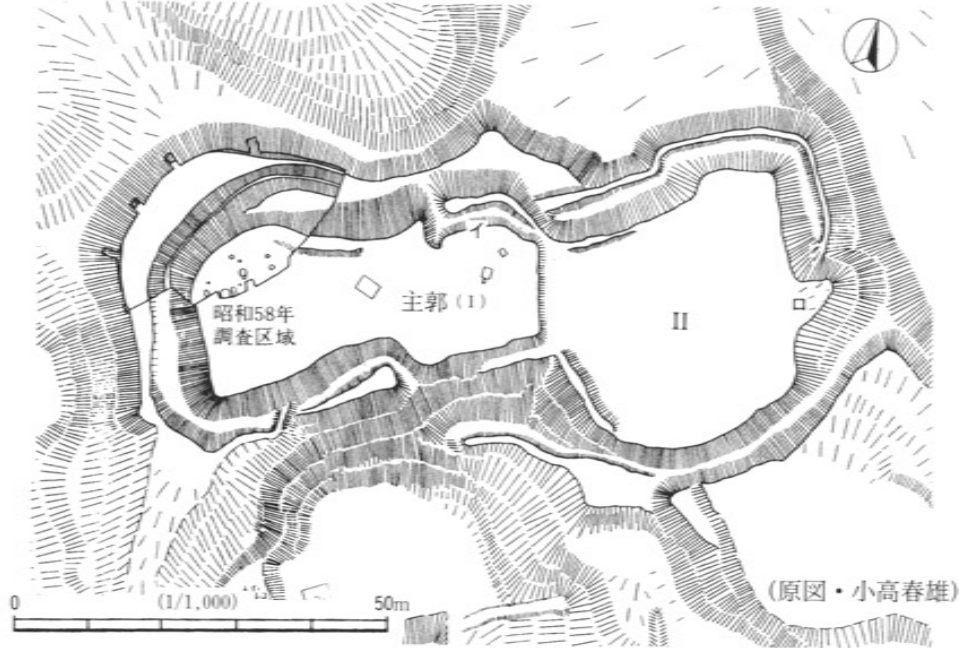
第60図 神崎町武田城跡(74)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスD)
〔千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅰ〕より



第61図 大栄町津富浦城跡(80)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスD)
〔千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅰ〕より



第62図 大栄町久井崎城跡(77)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスD)
 (『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 I』より)



第63図 大栄町南敷城跡(82)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスD)
 (『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 I』より)



第64図 大栄町馬洗城跡(79)発掘調査全測図
 (最終Ⅲ期、城・城主クラスD)
 (『千葉県大栄町馬洗城址発掘調査報告書』より)

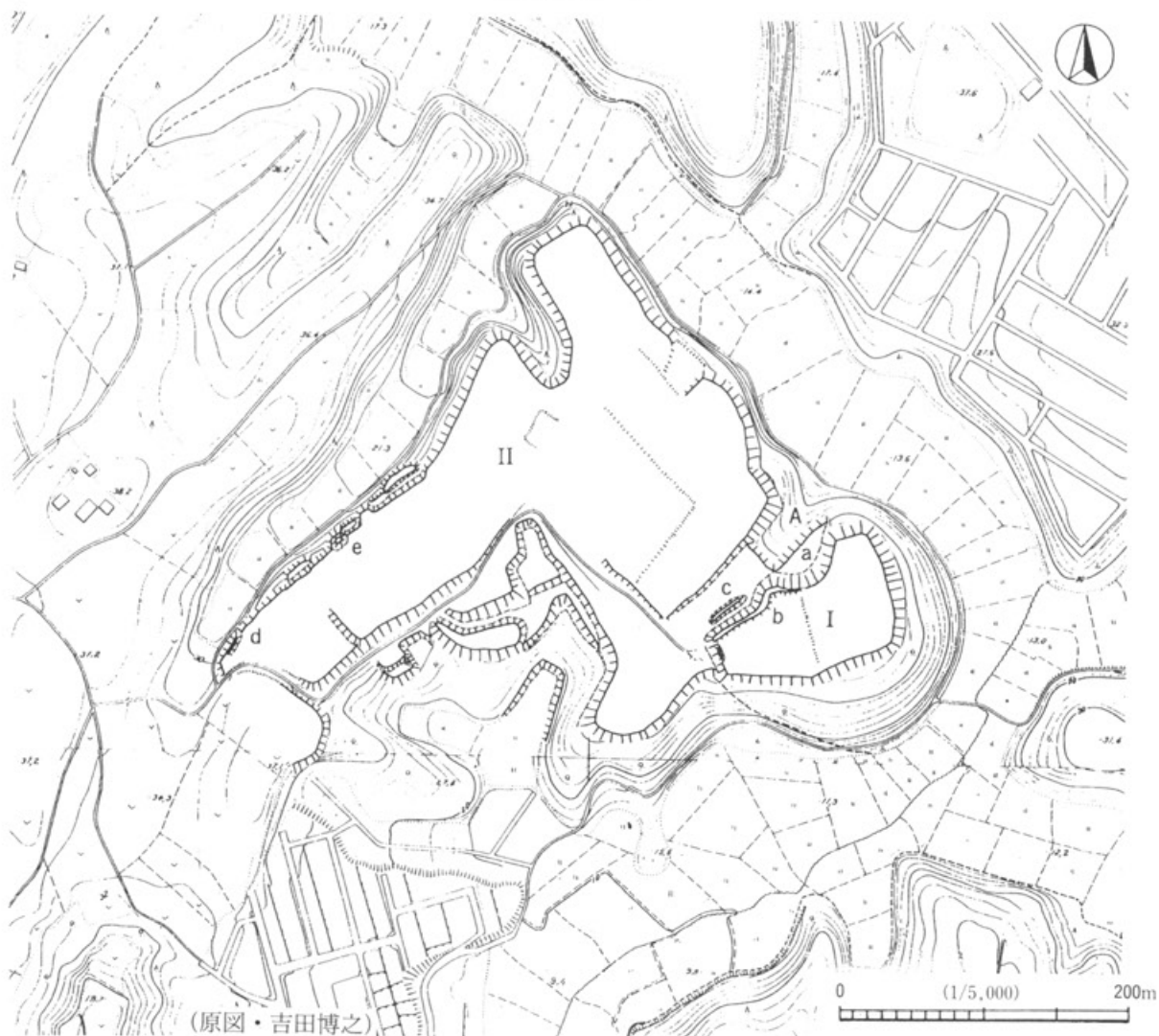


第65図 佐原市山崎城跡(86)測量図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスD)
 (『千葉県中近世城跡研究調査報告書 第8集』より)



第66図 佐原市下小野城跡(87)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスD)
 (『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 II』より)

香取地域-8



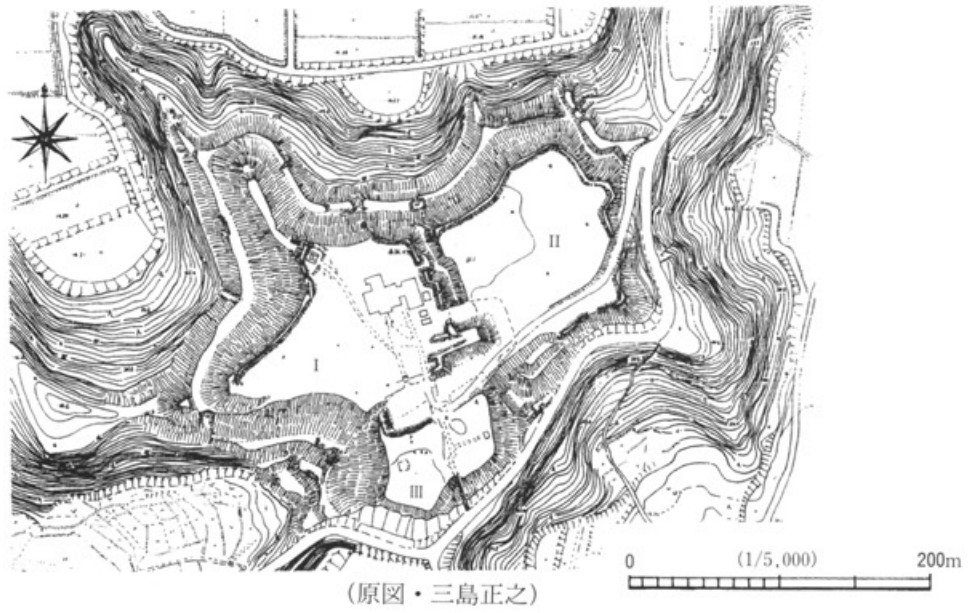
(原図・吉田博之)

第69図 下総町名古屋城跡(68)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスC)
〔千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅰ〕より)

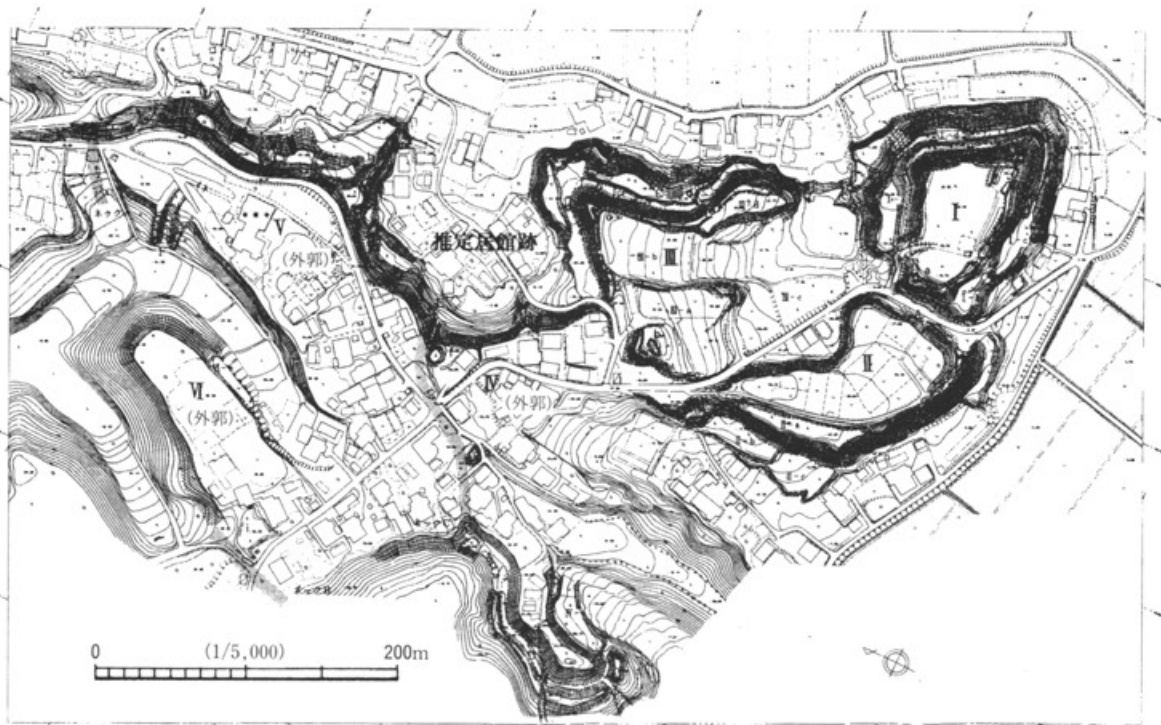


第70図 干潟町簗木城跡(103)測量図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスC)
〔千葉県中近世城跡研究調査報告書 第7集〕より)

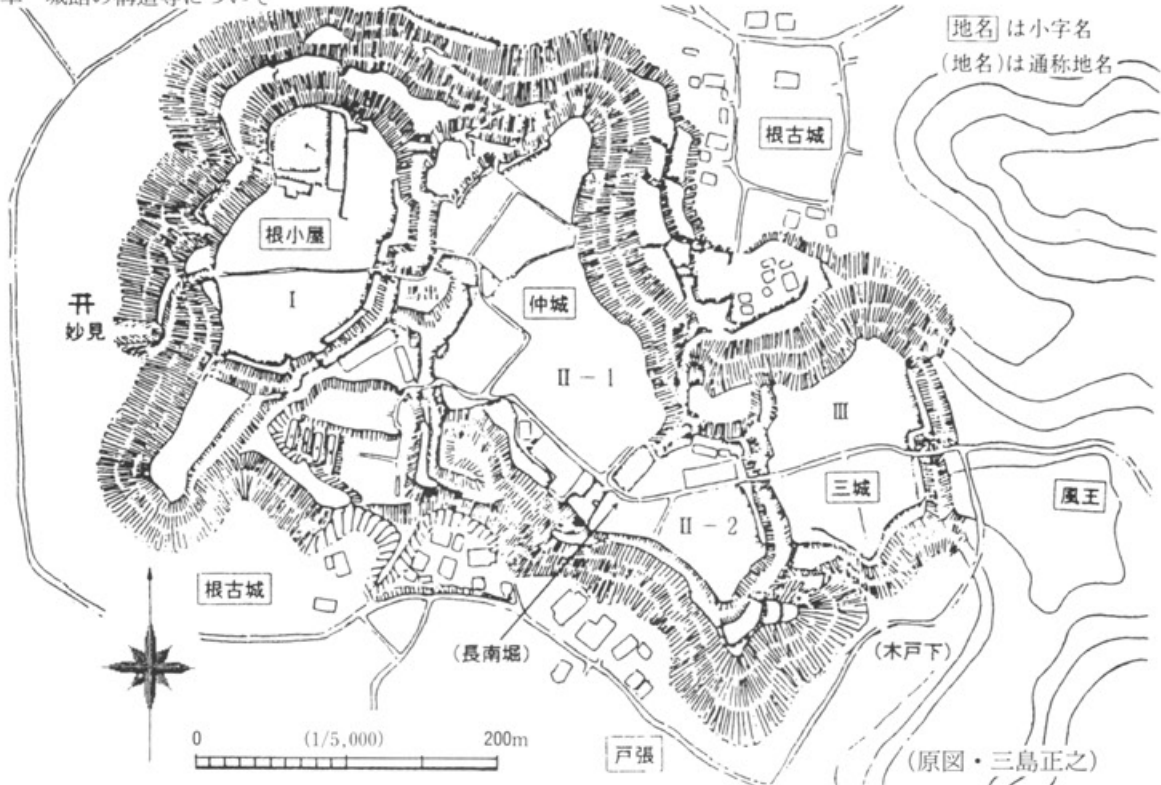
香取地域 - 9



第71図 東庄町沼関城跡(104)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスC)
(『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ』より)

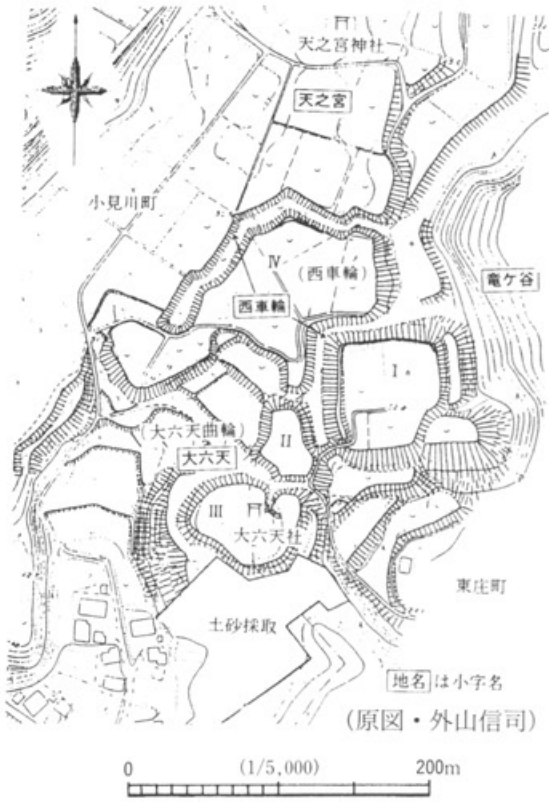


第72図 下総町助崎城跡(69)測量図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスB)
(『千葉県中近世城跡研究調査報告書 第17集』より)



第73図 小見川町森山城跡(97)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスB)
 (『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 I』より)

香取地域-10



第74図 小見川町須賀山城跡(98)概念図
 (最終Ⅲ期、城・城主クラスB)

(『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 I』より)



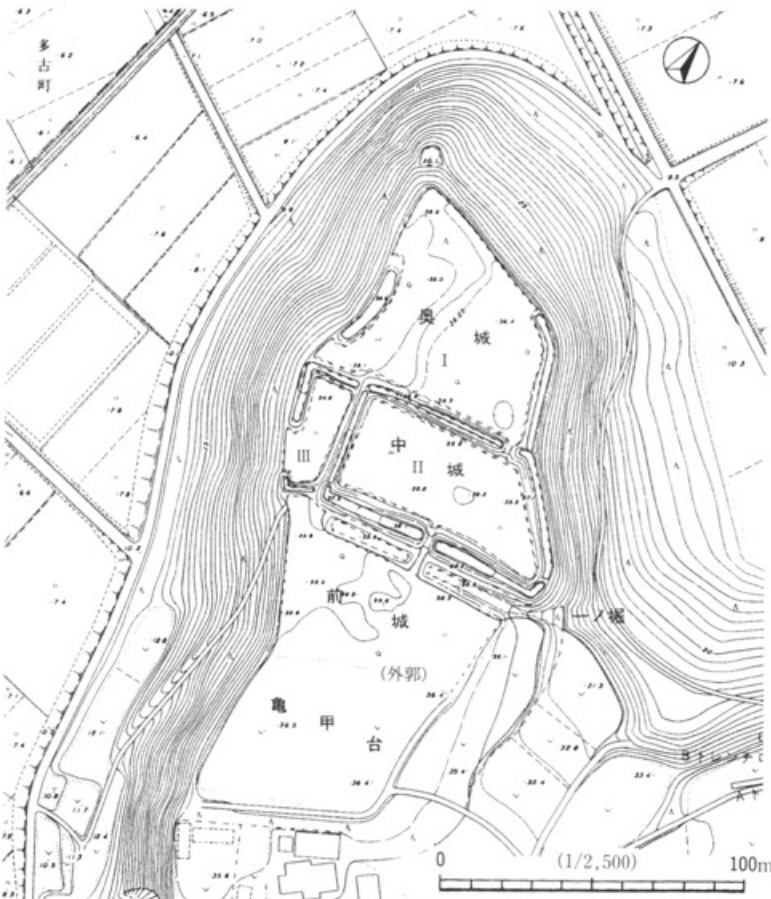
第75図 佐原市大崎城(矢作城)跡(84)概念図
 (最終Ⅳ期、城・城主クラスB)

(『千葉県中近世城跡研究調査報告書 第5集』より)

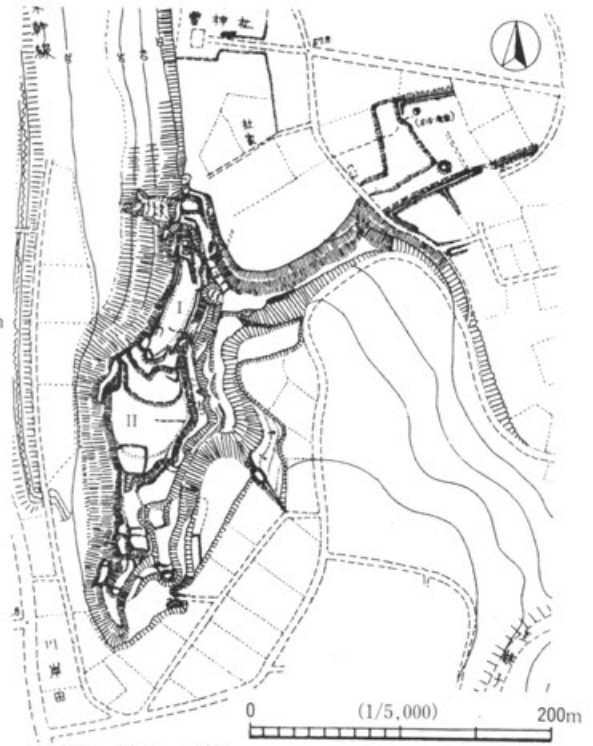
海匠地域-1



第76図 光町篠本城跡(108)発掘調査全測図 (最終II期、城・城主クラスD (Eの連合か))
 (『千葉県の歴史 資料編 中世1』より)



第77図 八日市場市大堀城跡(112)測量図
 (最終Ⅱ期、城・城主クラスD)
 (『千葉県中近世城跡研究調査報告書 第10集』より)



(原図・池田 誠)
 第79図 海上町見廣城跡(117)概念図
 (最終Ⅱ期、城・城主クラスD)
 (『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 I』より)



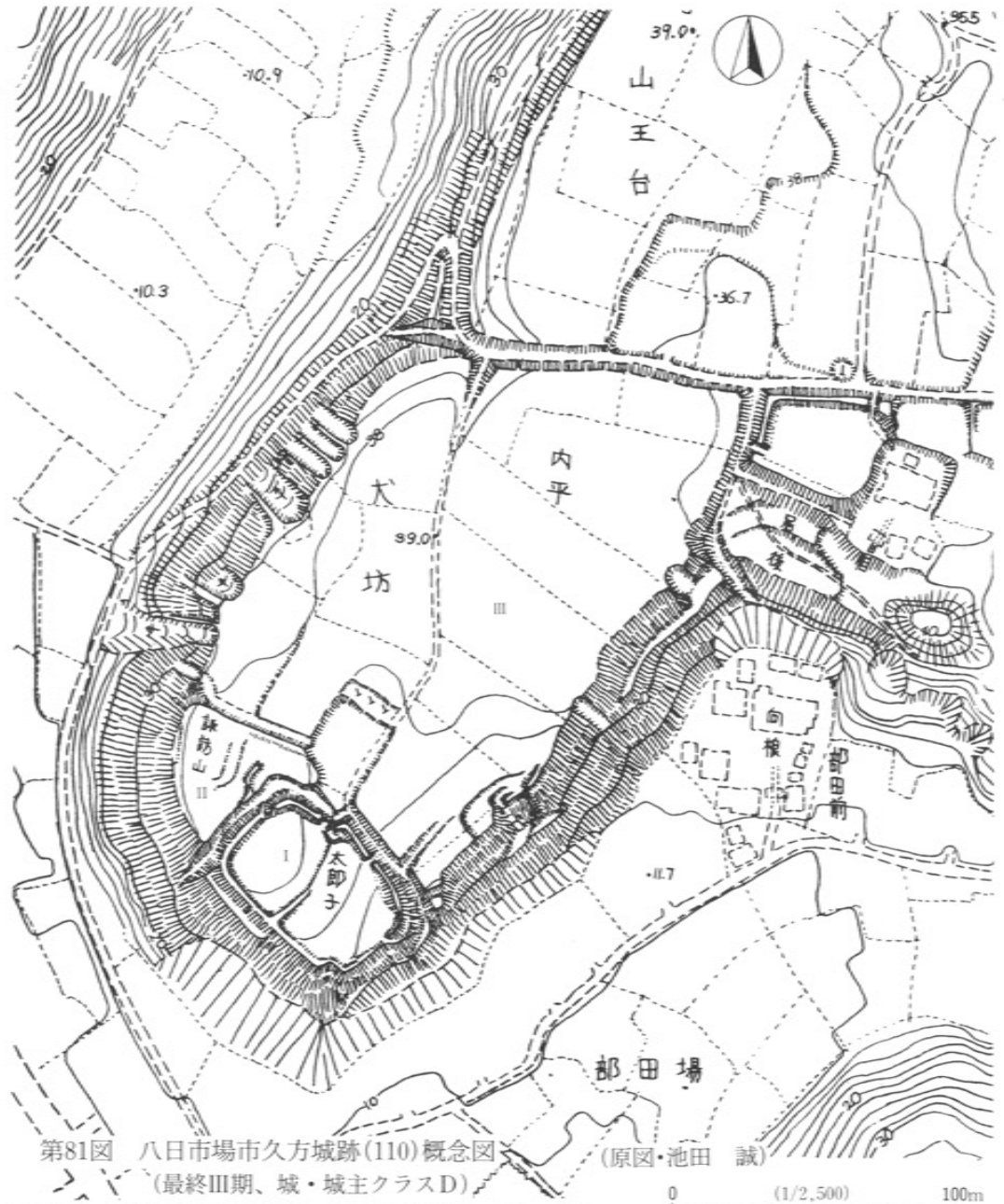
(原図・椎名幸一)
 第78図 八日市場市飯塚砦跡(116)概念図
 (最終Ⅱ期、城・城主クラスD)
 (『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 I』より)



(原図・椎名幸一)

第80図 八日市場市大浦城跡(114)概念図
(最終Ⅲ期、城・城主クラスD)

(『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 I』より)

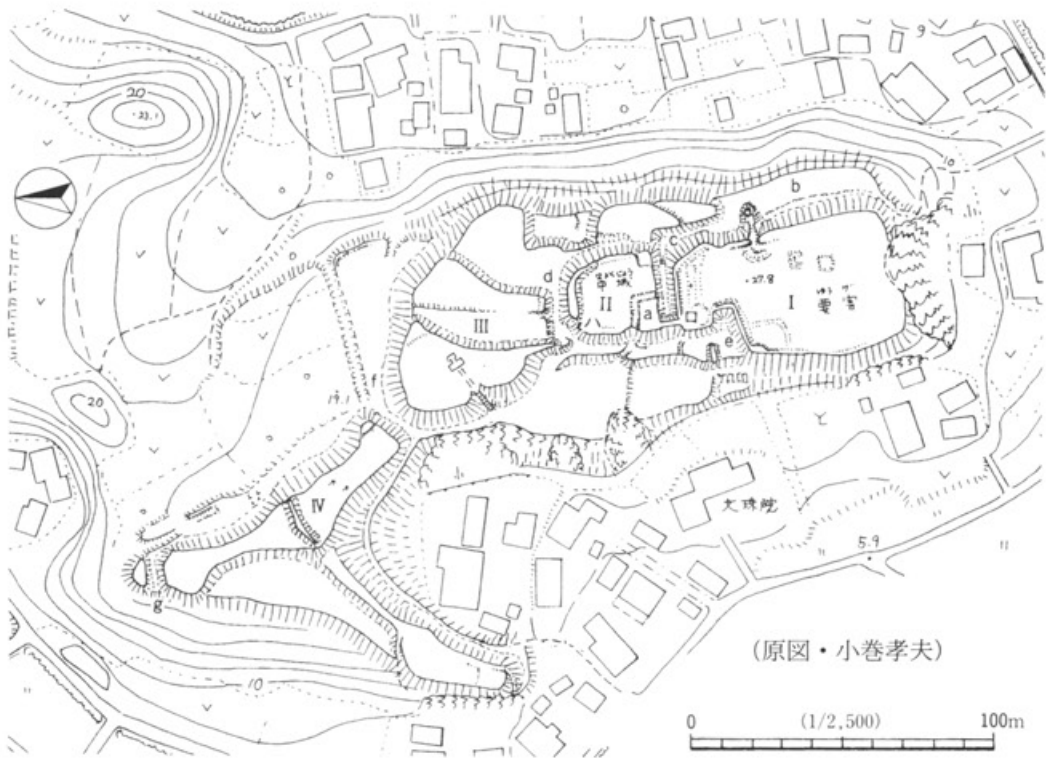


第81図 八日市場市久方城跡(110)概念図
(最終Ⅲ期、城・城主クラスD)

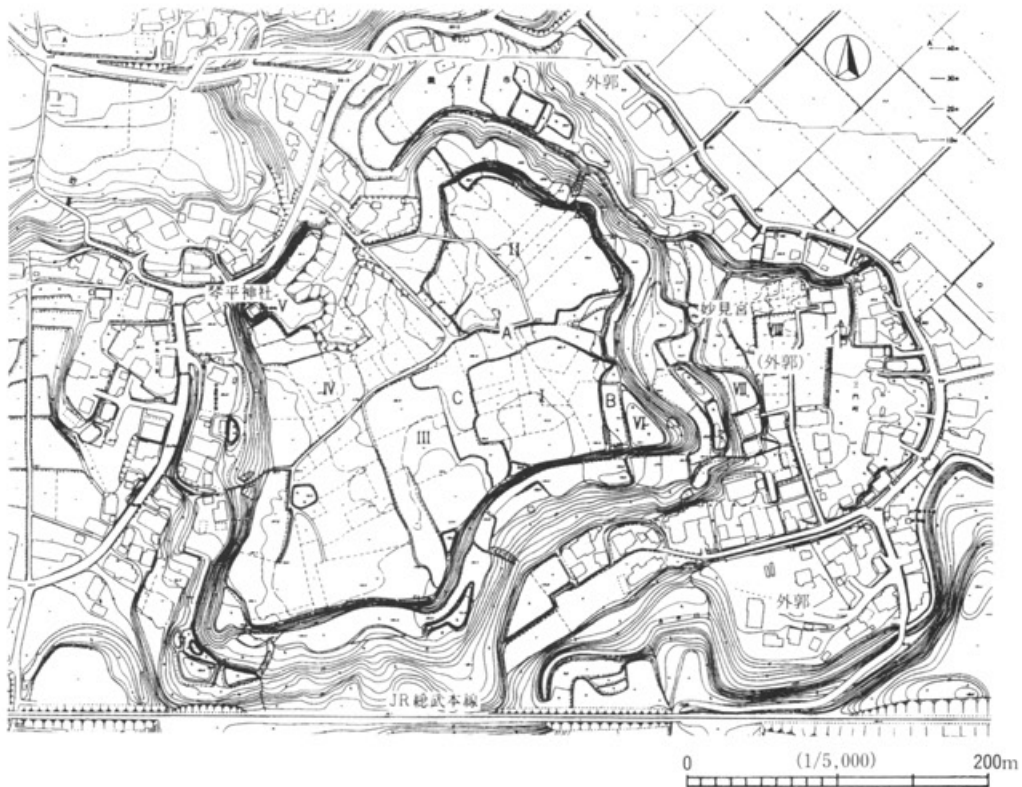
(原図・池田 誠)

(『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 I』より)

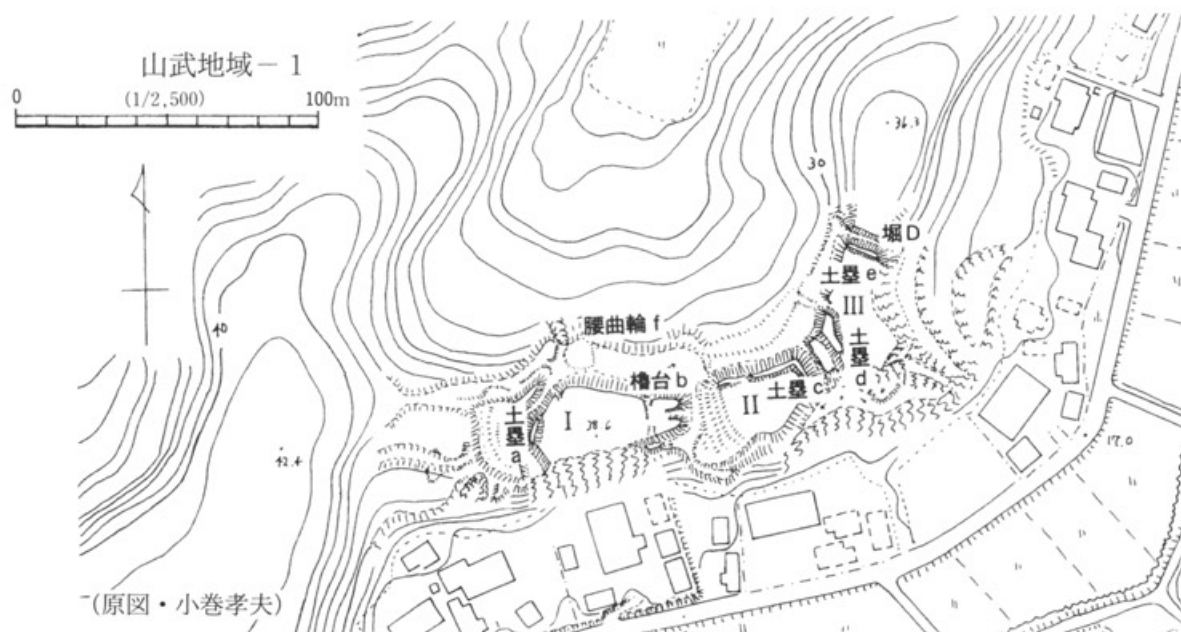
海匝地域-4



第82図 八日市場市新城跡(115)概念図 (最終III期、城・城主クラスC)
(『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 I』より)



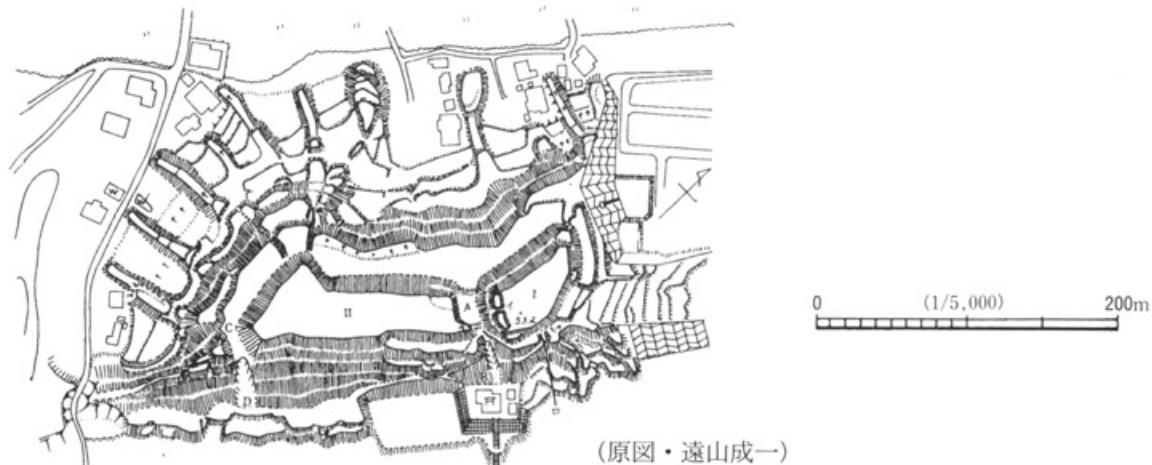
第83図 銚子市中島城跡(118)測量図 (最終III期、城・城主クラスB)
(『千葉県中近世城跡研究調査報告書 第11集』より)



第84図 芝山町岩山城跡(124)概念図 (最終Ⅱ期、城・城主クラスD)
 (『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ』より)



第85図 山武町埴谷周路遺跡(126)発掘調査全測図 (最終Ⅱ期、城・城主クラスD)
 (『千葉県の歴史 資料編 中世1』より)



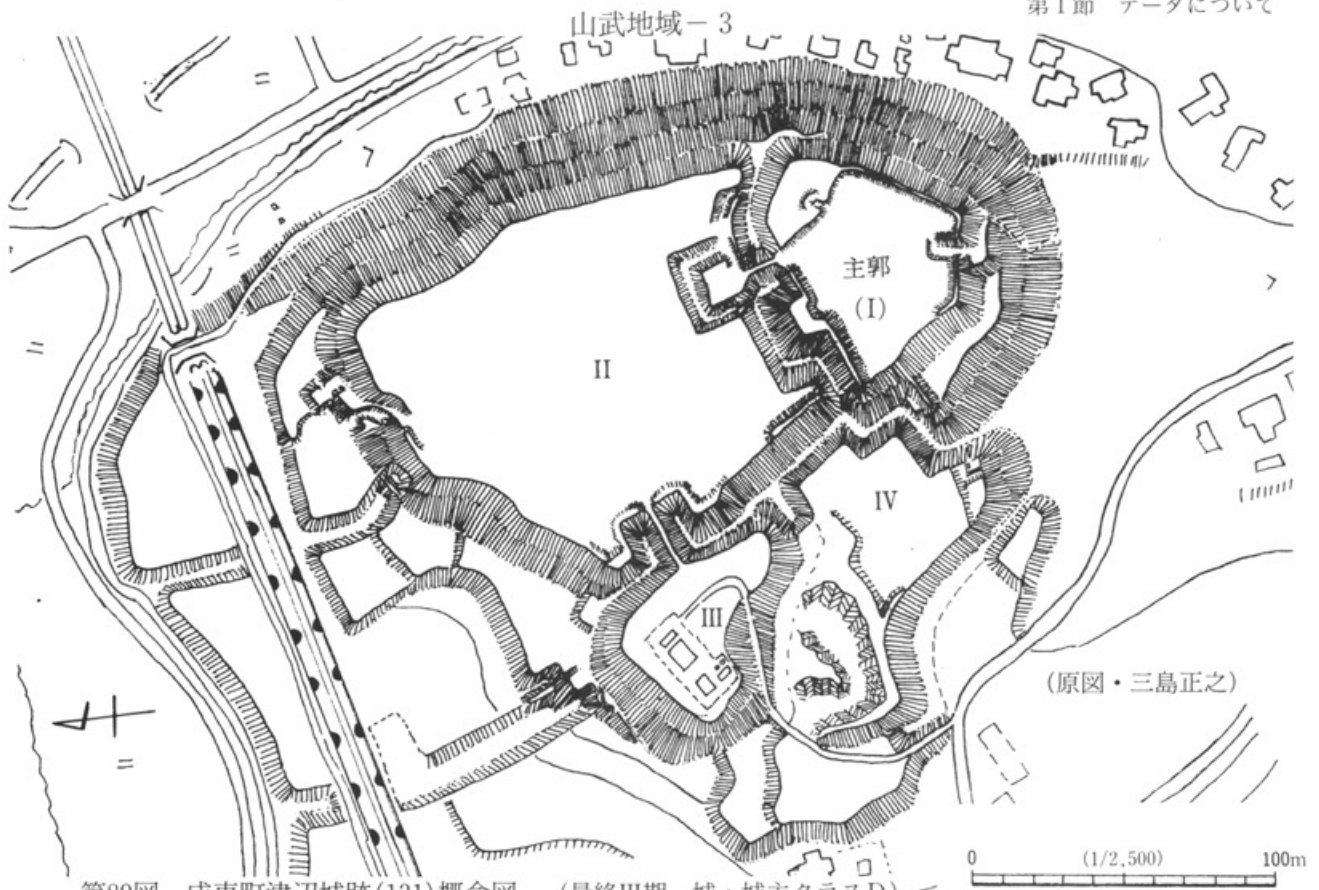
第86図 東金市田間城跡(133)概念図 (最終Ⅱ期、城・城主クラスC)
 (『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ』より)



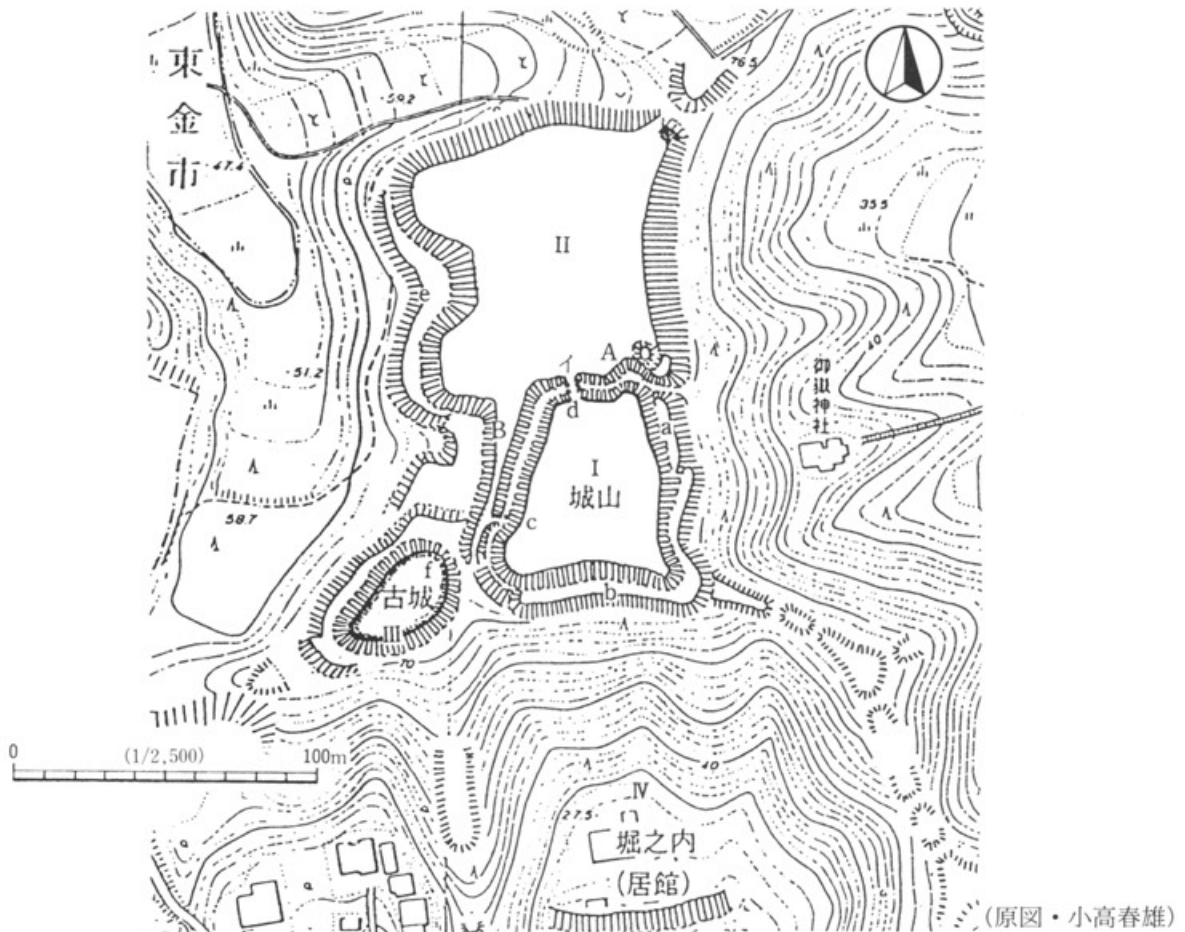
第87図 千葉市大椎城跡(136)概念図 (最終III期、城・城主クラスD) (『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 I』より) (原図・三島正之)



第88図 芝山町山中北城跡(122)・南城跡(123)概念図 (最終III期、城・城主クラスD) (『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 II』より) (原図・八巻孝夫)



第89図 成東町津辺城跡(131)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスD)
 (『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 II』より)



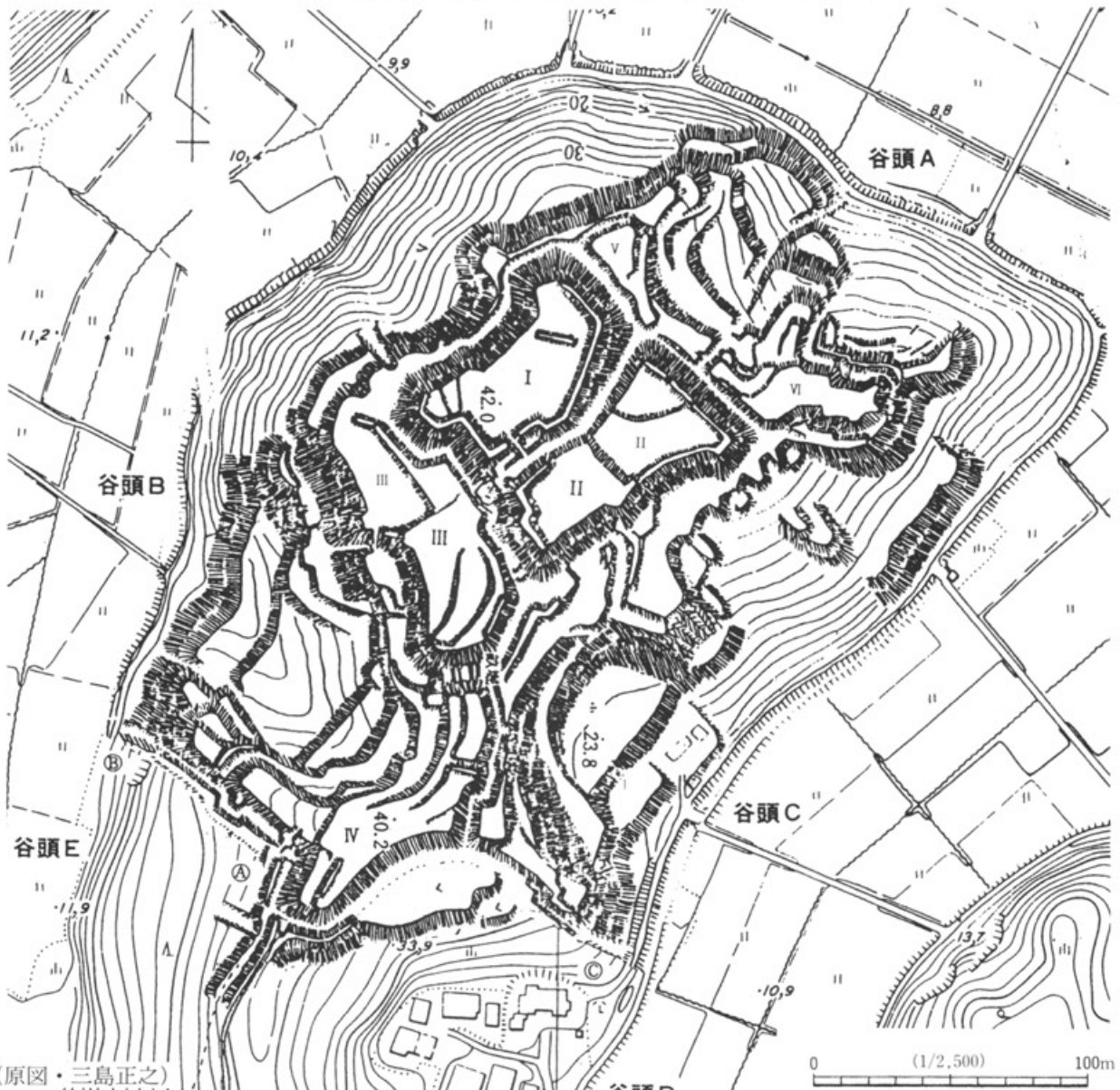
第90図 大網白里町小西城跡(137)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスD)
 (『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 II』より)

山武地域-5



(原図・外山信司)

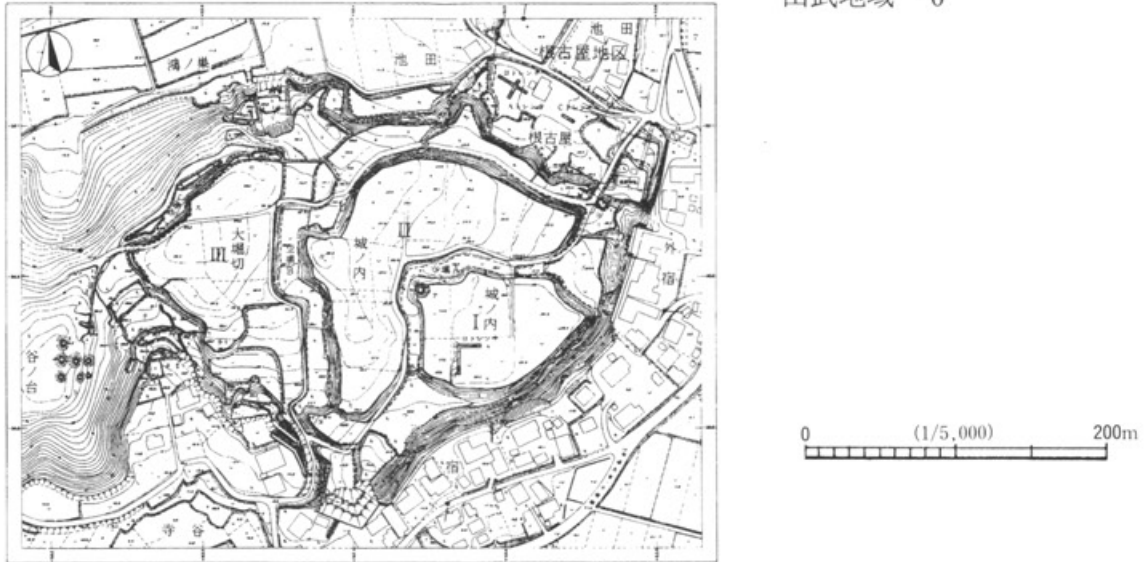
第93図 芝山町大台城跡(120)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスC)
〔千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ〕より



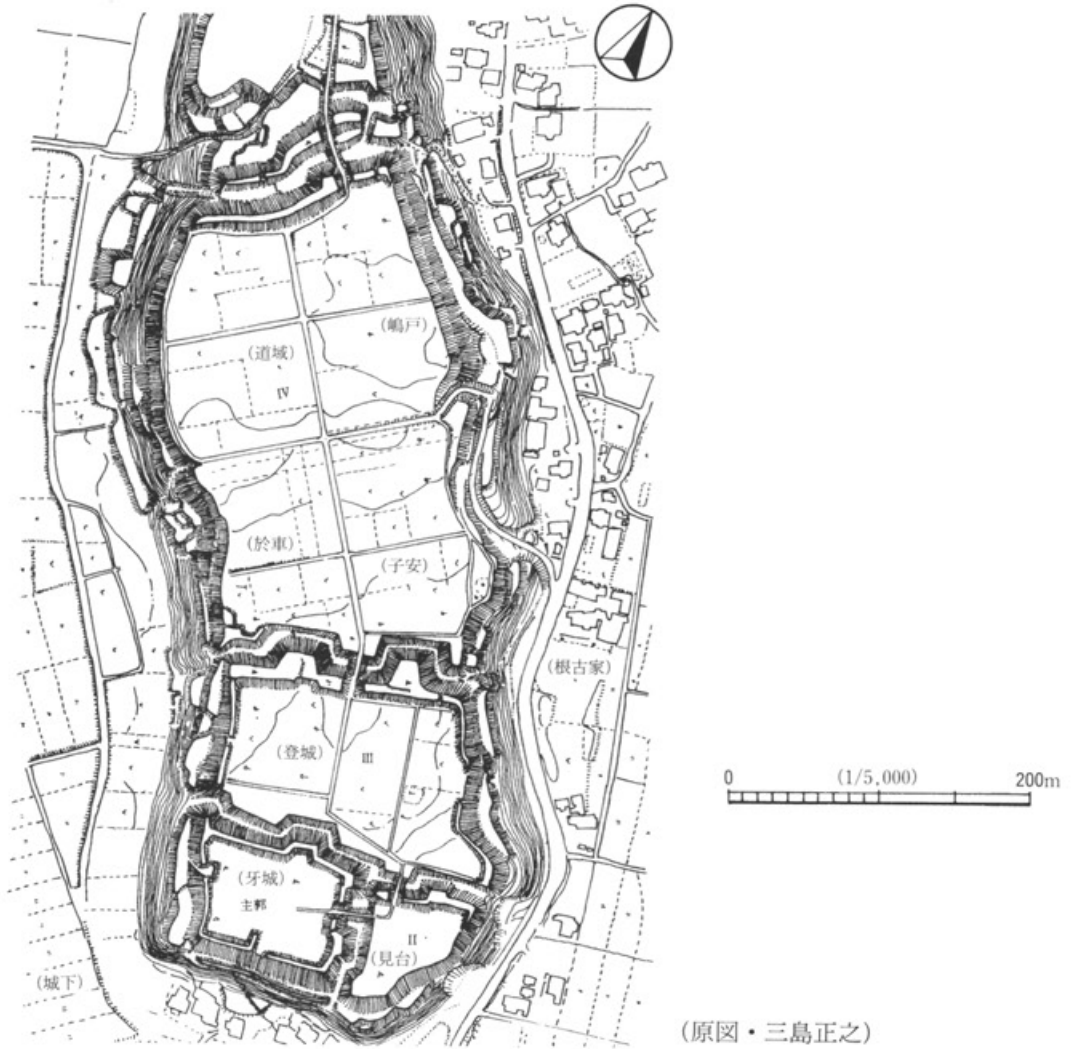
(原図・三島正之)

第94図 芝山町田向城跡(121)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスC)

〔千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ〕より



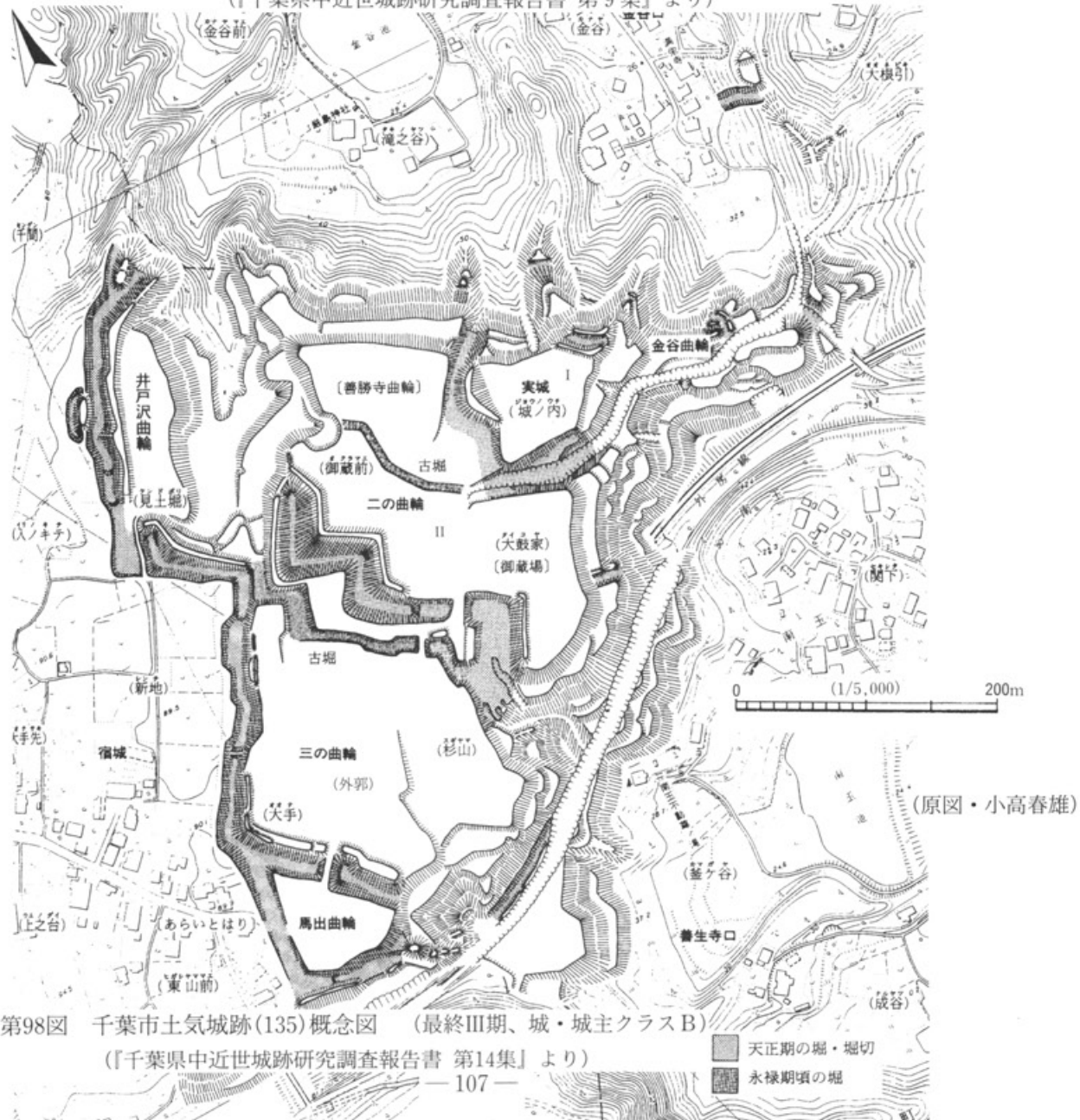
第95図 芝山町飯櫃城跡(119)測量図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスC)
〔千葉県中近世城跡研究調査報告書 第7集〕より



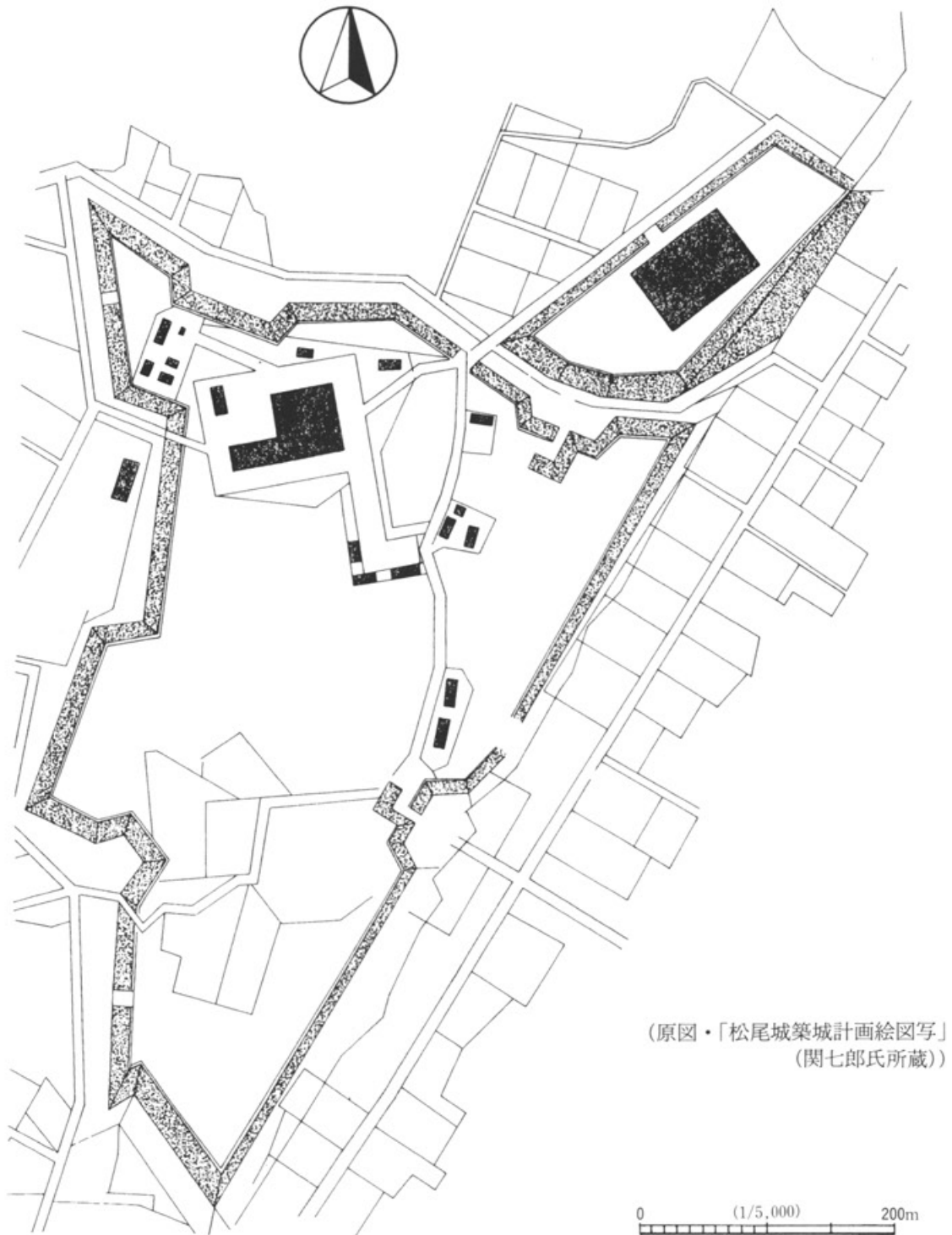
第96図 横芝町坂田城跡(129)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスC)
〔千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 II〕より



〔千葉県中近世城跡研究調査報告書 第9集〕より

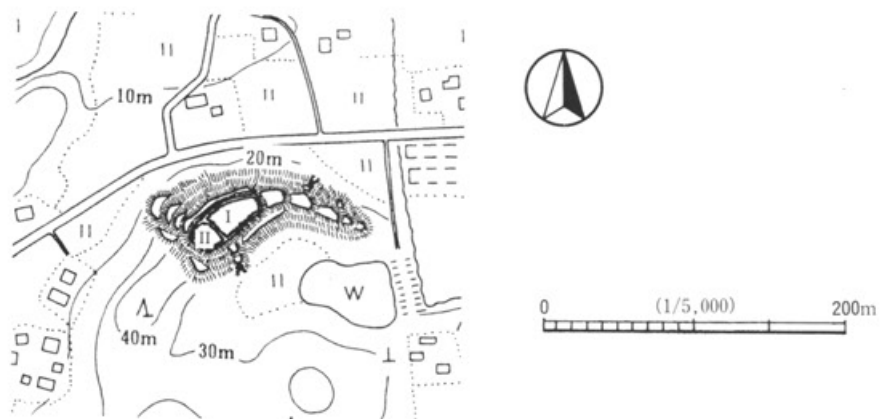


山武地域 - 8

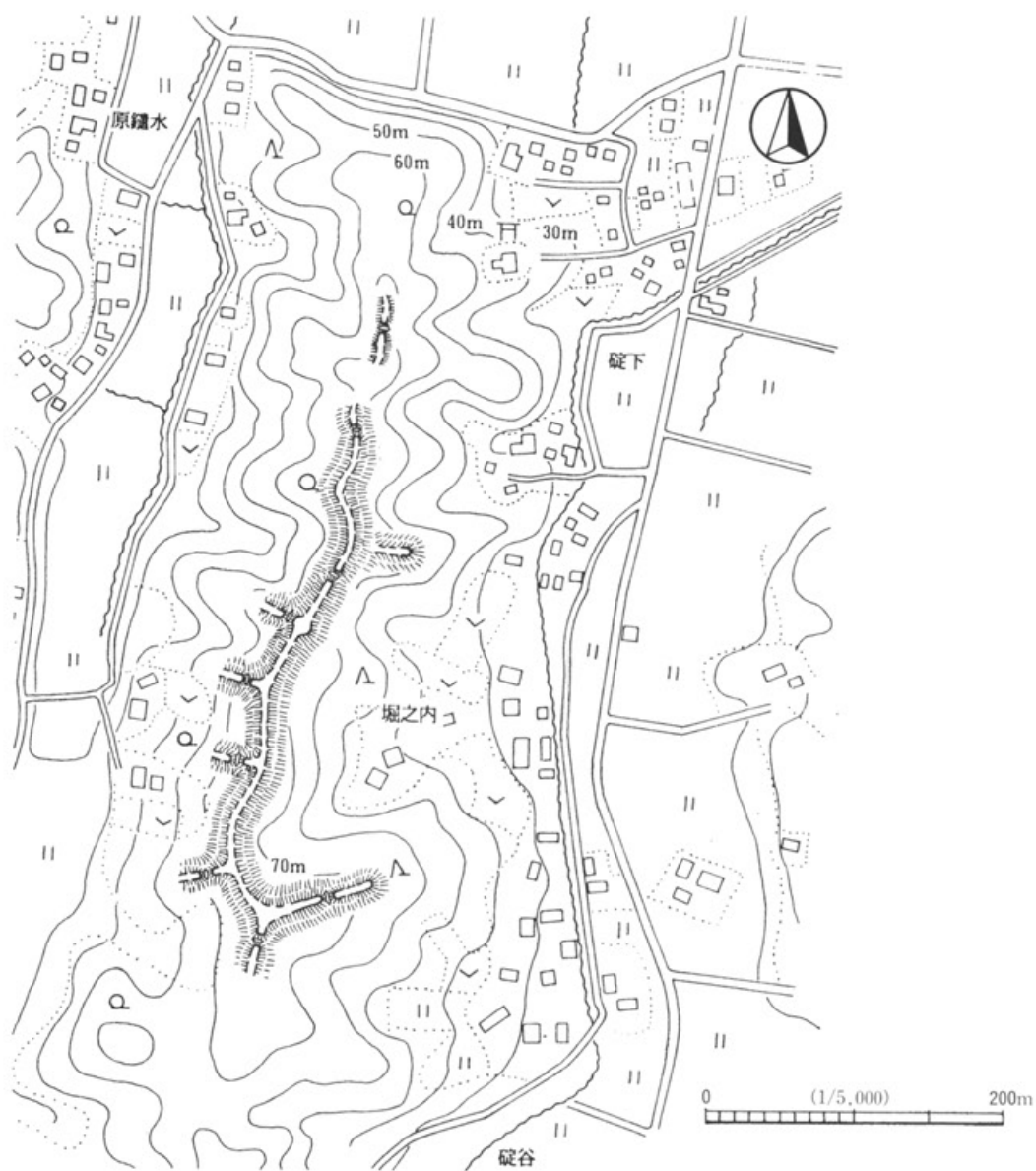


第99図 松尾町松尾城(127)計画図 (最終V期、城・城主クラスB)
(「松尾城跡I」より)

長生地域-1

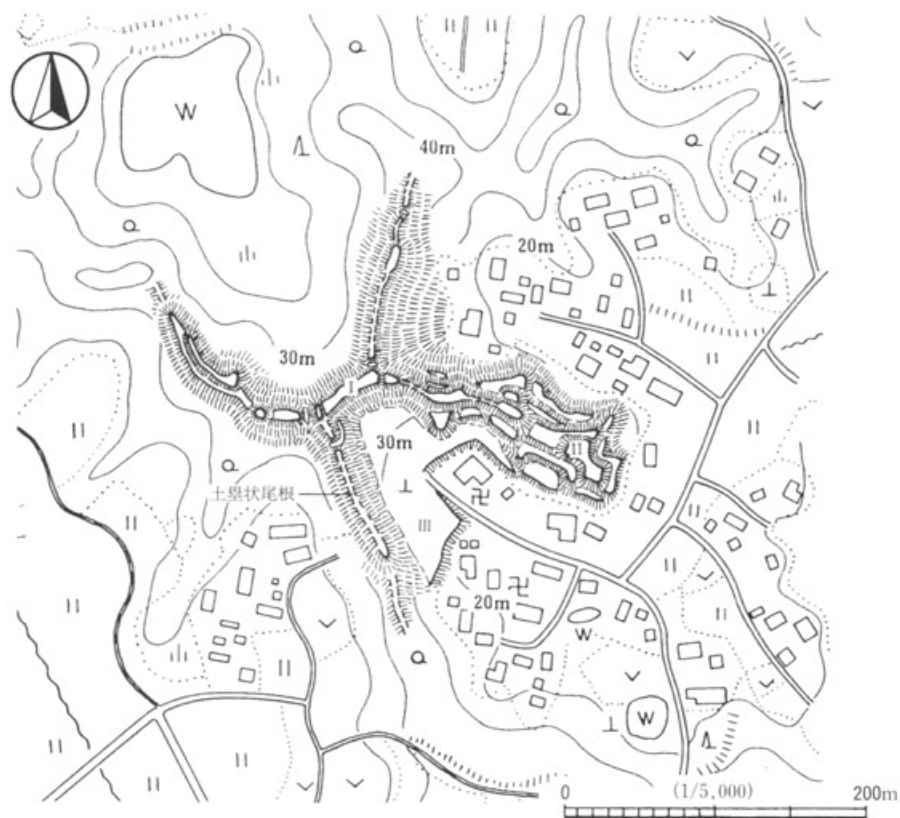


第100図 長南町下芝原城跡(151)概念図 (最終II期、城・城主クラスE)
(小高春雄『長生の城』より)

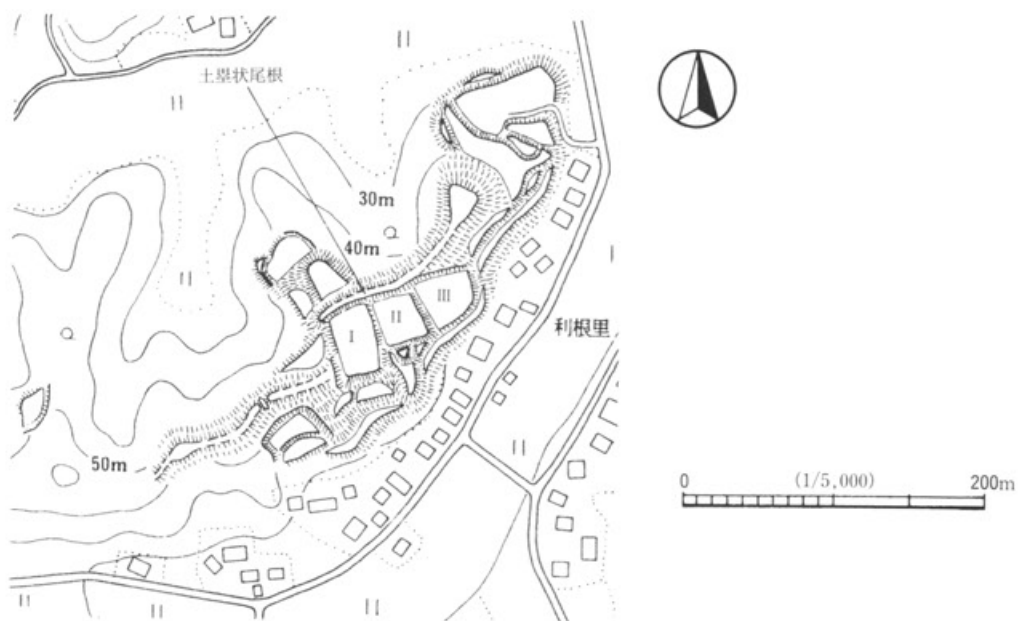


第101図 睦沢町碓城跡(155)概念図 (最終II期、城・城主クラスE)
(『長生の城』より)

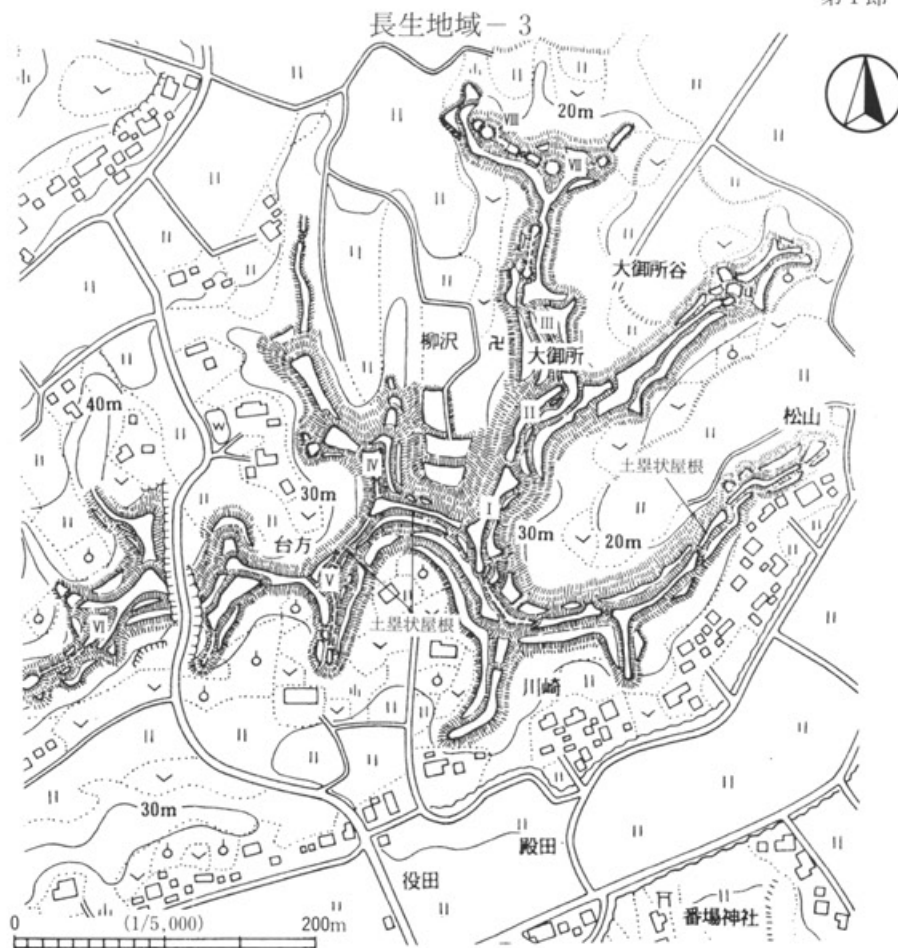
長生地域-2



第102図 茂原市小名城跡(144)概念図 (最終Ⅱ期、城・城主クラスD)
(['長生の城']より)



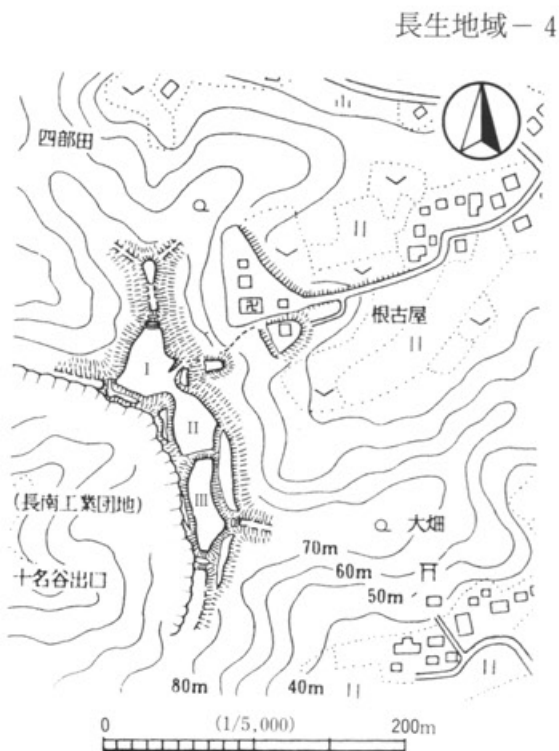
第103図 長南町利根里城跡(149)概念図 (最終Ⅱ期、城・城主クラスD)
(['長生の城']より)



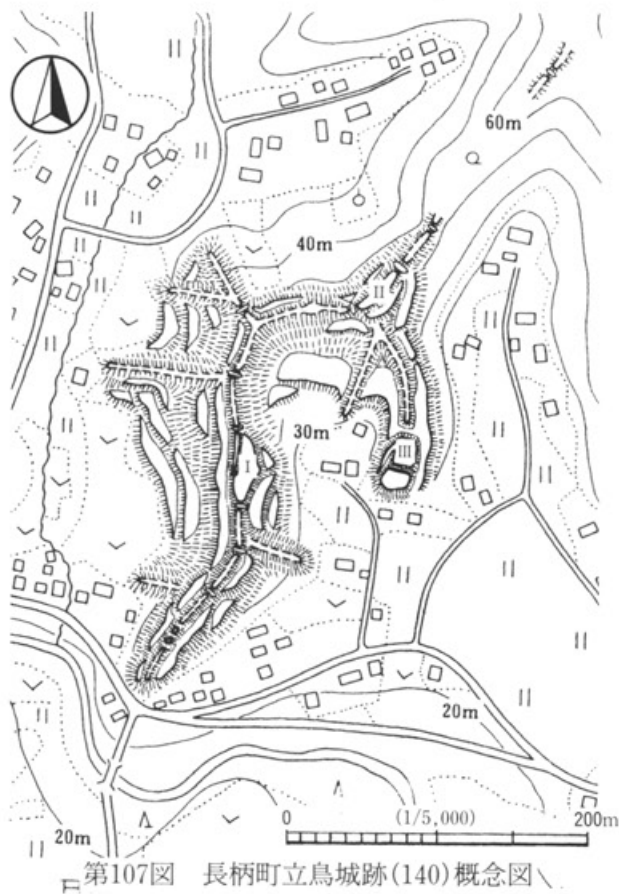
第104図 茂原市石神城跡(143)概念図 (最終II期、城・城主クラスC)
 (『長生の城』より)



第105図 長柄町榎本城跡(139)概念図 (最終III期、城・城主クラスD)
 (『長生の城』より)



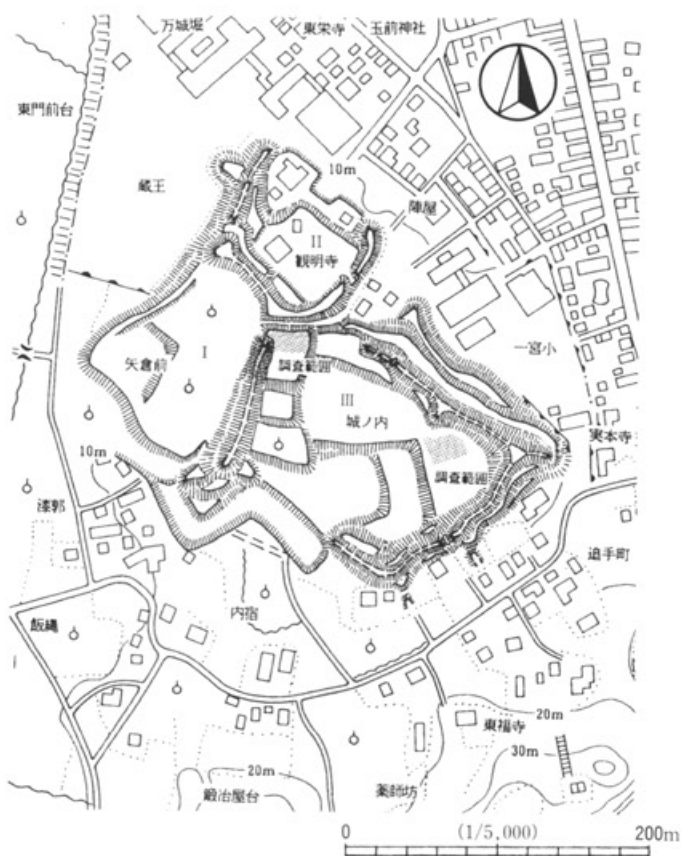
第106図 長南町根古屋城跡(150)概念図
(最終Ⅲ期、城・城主クラスD)
(『長生の城』より)



第107図 長柄町立烏城跡(140)概念図
(最終Ⅲ期、城・城主クラスC) (『長生の城』より)

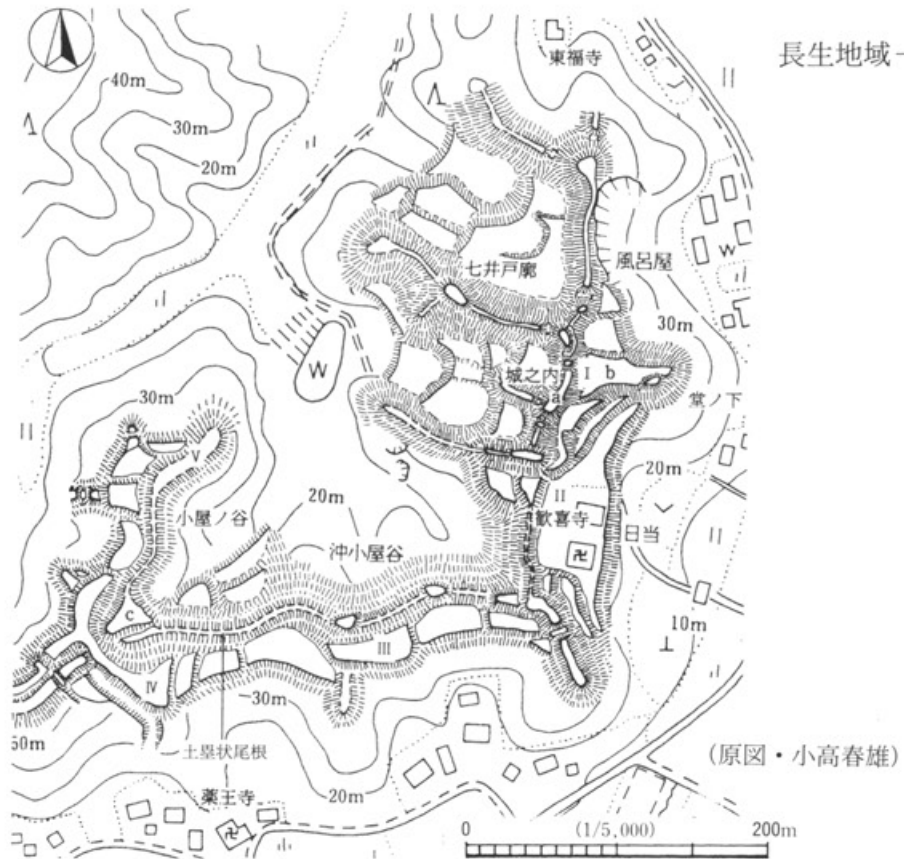


第108図 茂原市真名宿谷城跡(146)概念図
(最終Ⅲ期、城・城主クラスC)
(『長生の城』より)

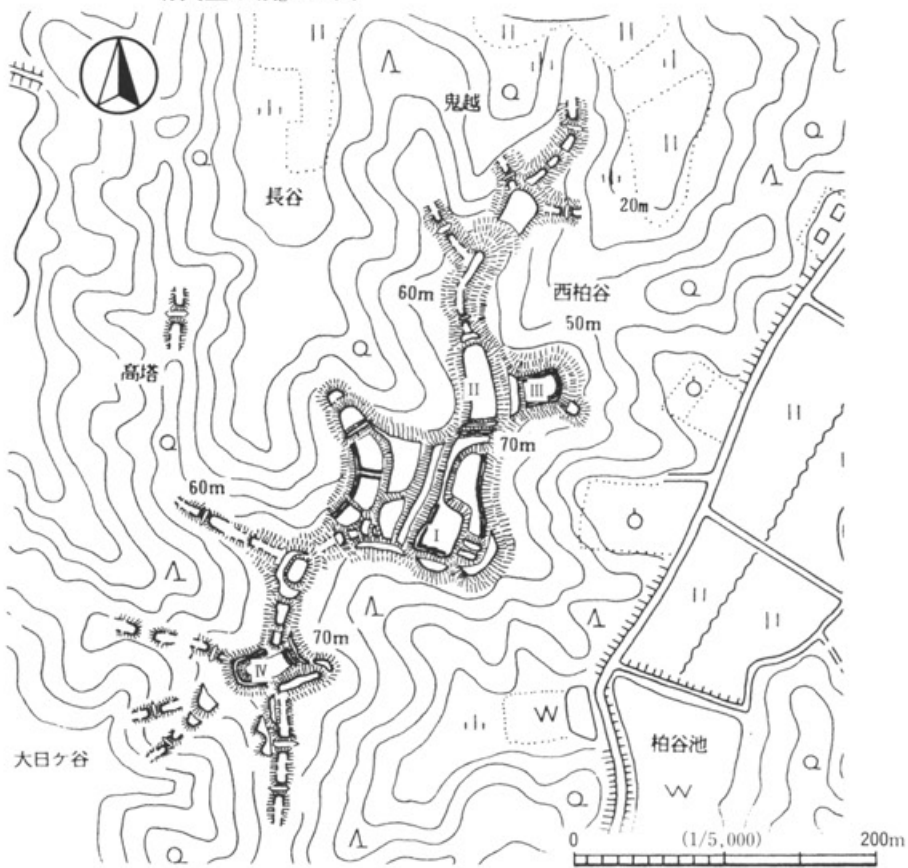


第109図 一宮町一宮城跡(157)概念図
(最終Ⅴ期、城・城主クラスC) (『長生の城』より)

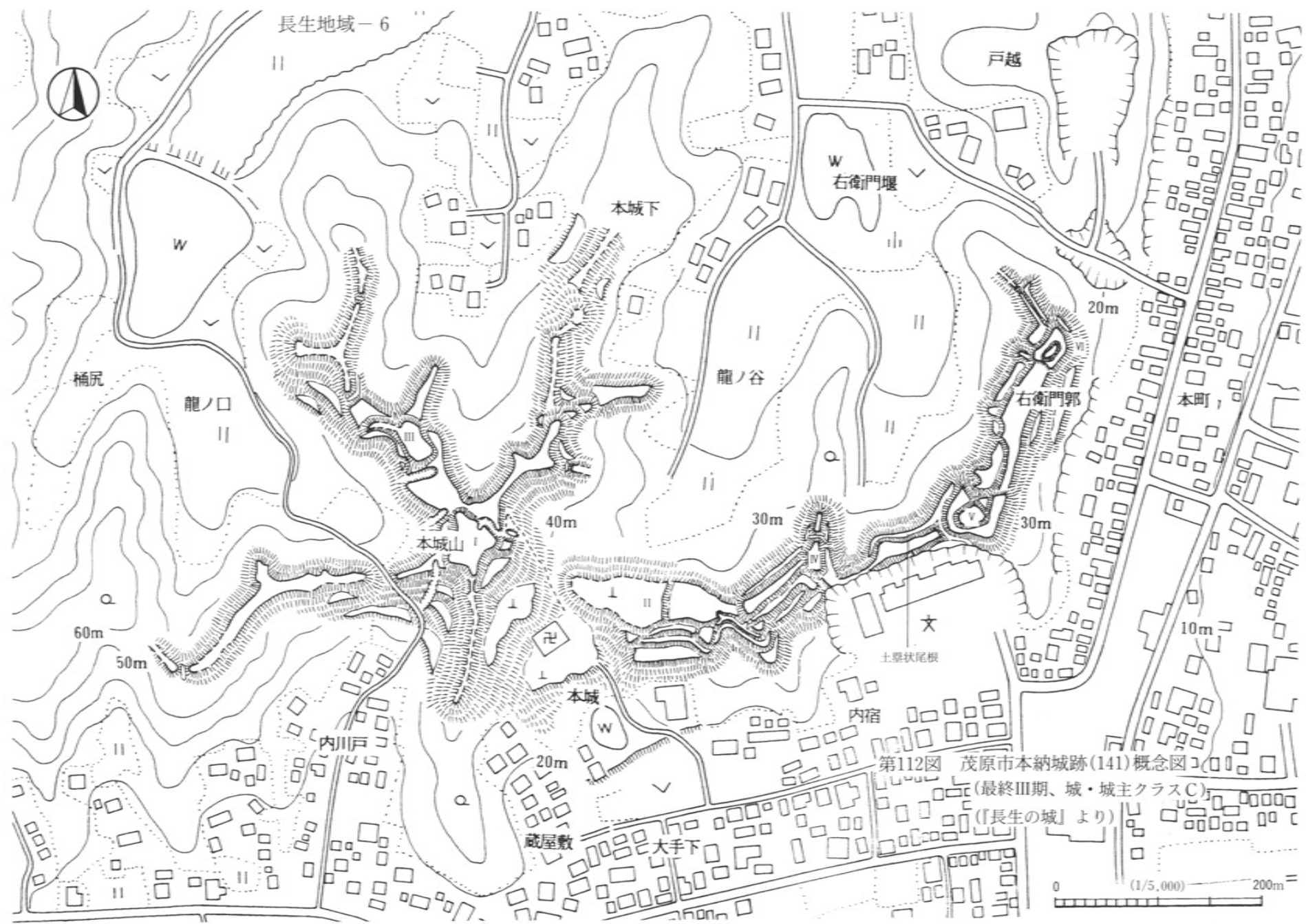
長生地域-5



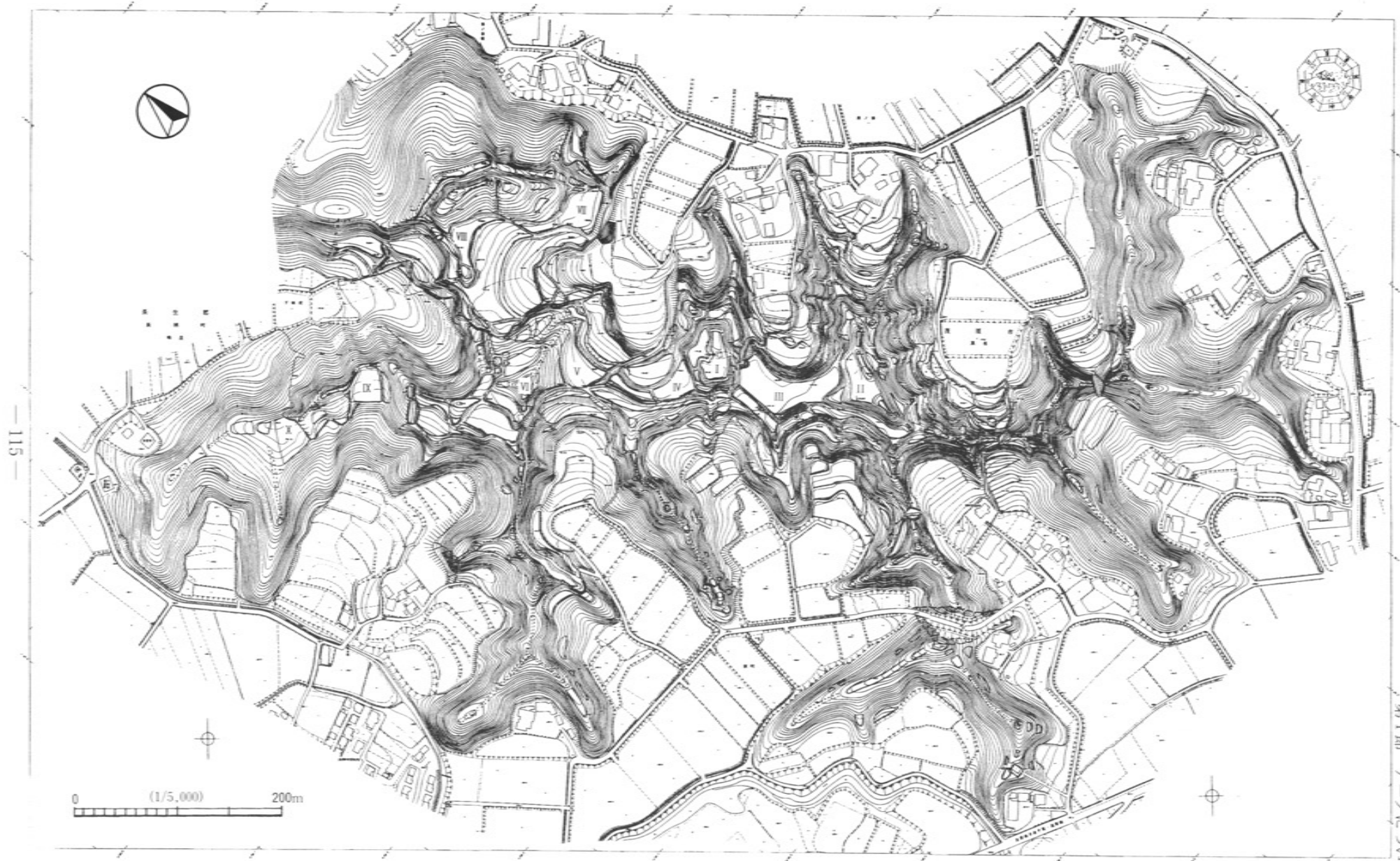
第110図 睦沢町勝見城跡(153)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスC)
 (『長生の城』より)



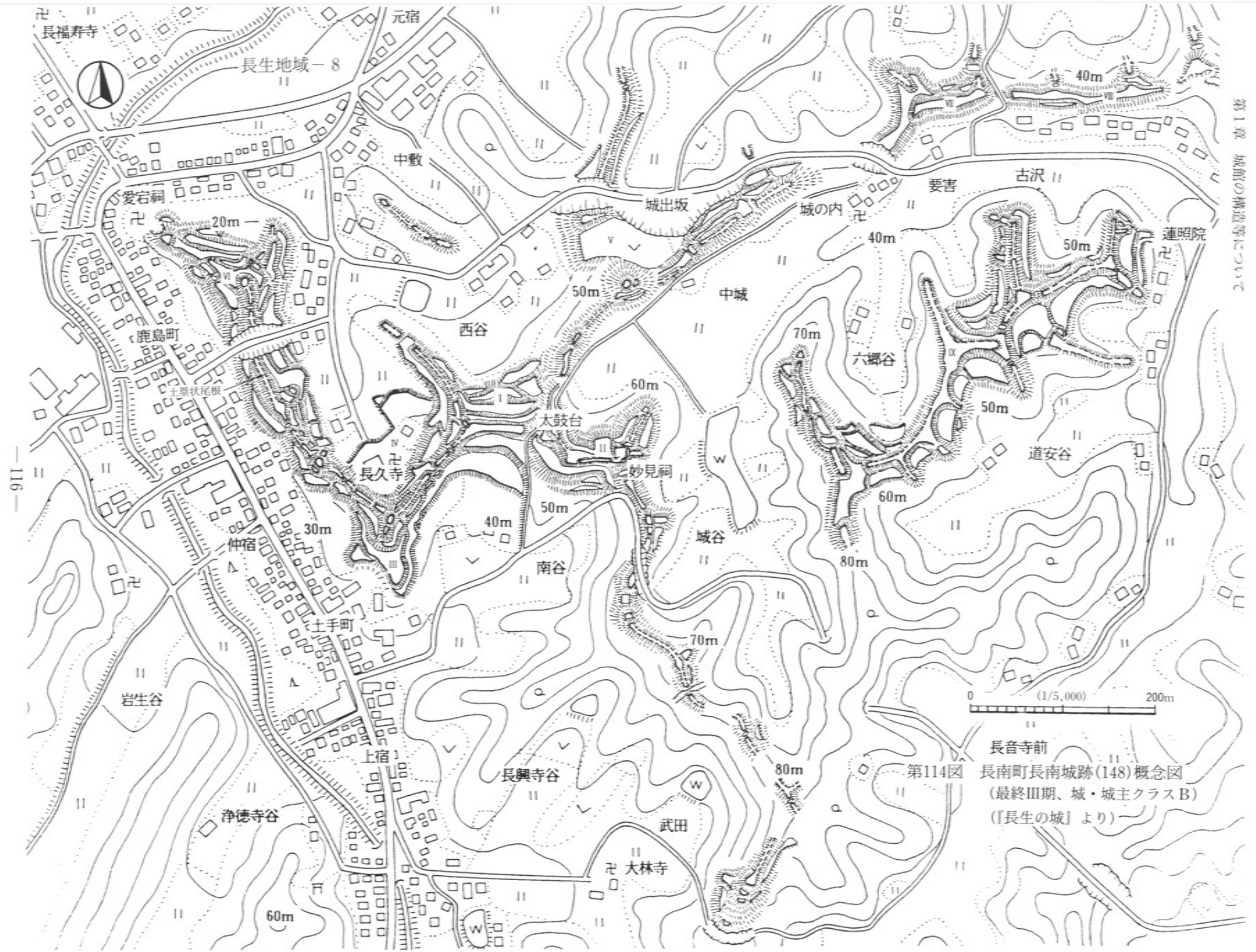
第111図 睦沢町高藤山城跡(156)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスC)
 (『長生の城』より)



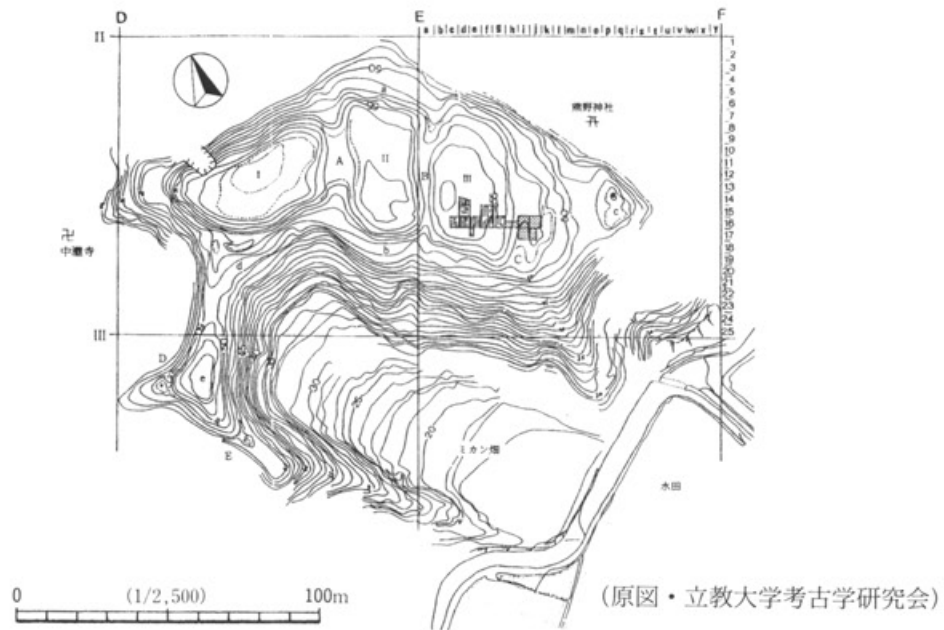
第112図 茂原市本納城跡(141)概念図
(最終Ⅲ期、城・城主クラスC)
(「長生の城」より)



第113図 茂原市真名城跡(142)測量図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスC)
〔千葉県中近世城跡研究調査報告書 第16集〕より



夷隅地域-1

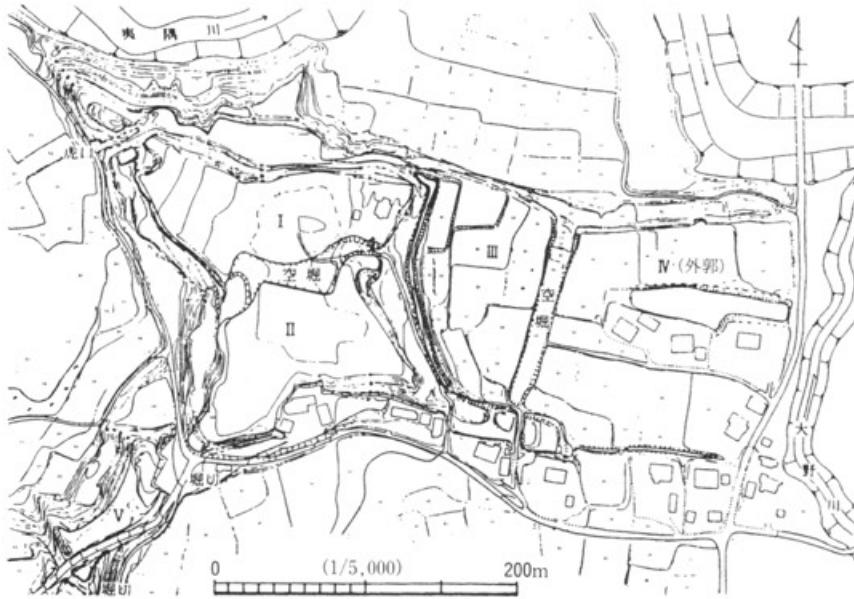


第115図 岬町中滝城跡(164)測量図 (最終II期、城・城主クラスD)
 (『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 II』より)



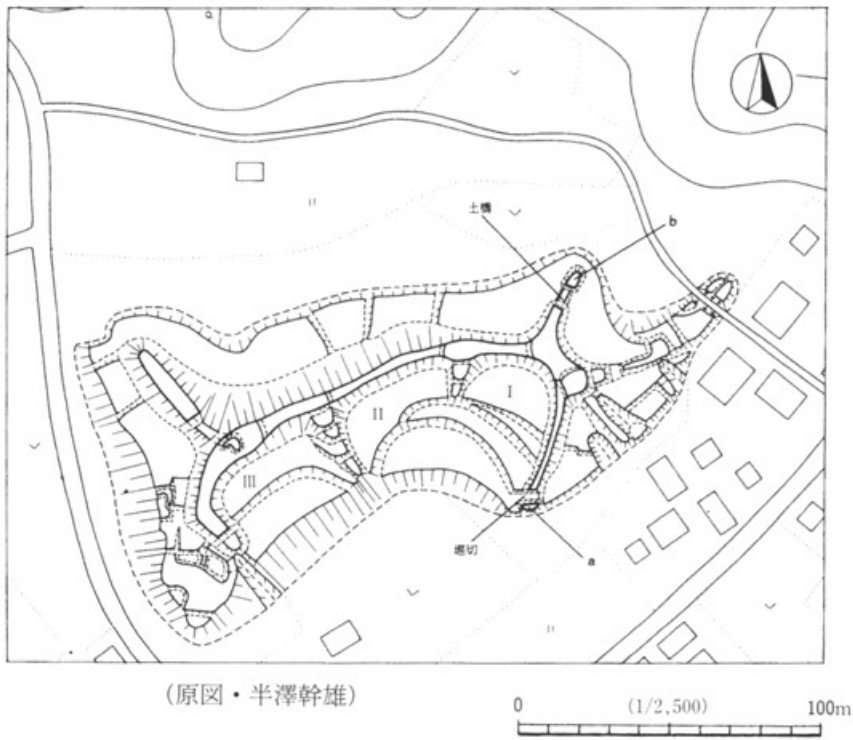
第116図 御宿町最明寺裏城跡(169)概念図 (最終II期、城・城主クラスC)
 (『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 II』より)

夷隅地域-2



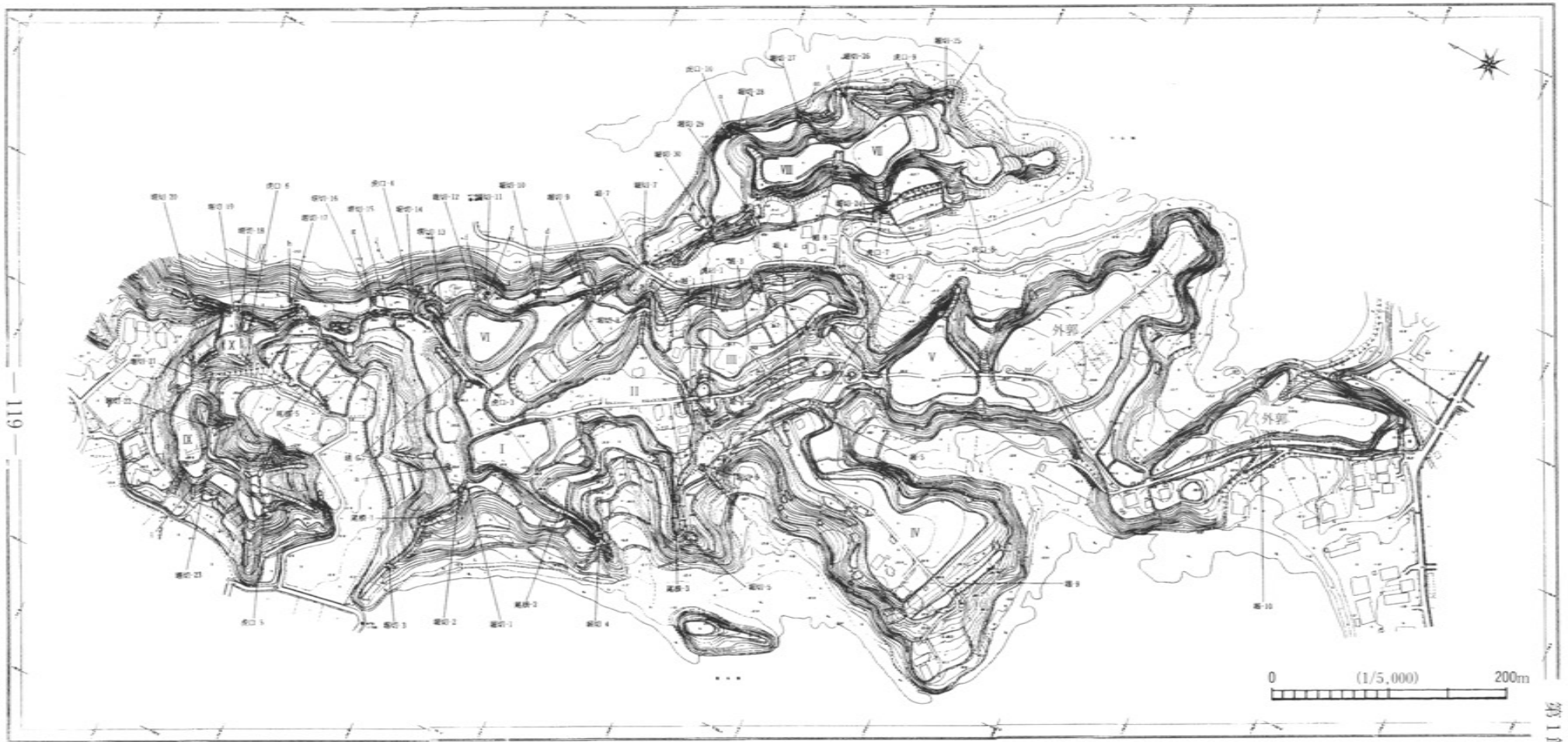
(原図・立教大学考古学研究会)

第117図 夷隅町大野城跡(160)測量図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスD)
(『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 II』より)



(原図・半澤幹雄)

第118図 岬町矢竹城跡(163)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスD)
(『千葉県中近世城跡研究調査報告書 第13集』より)

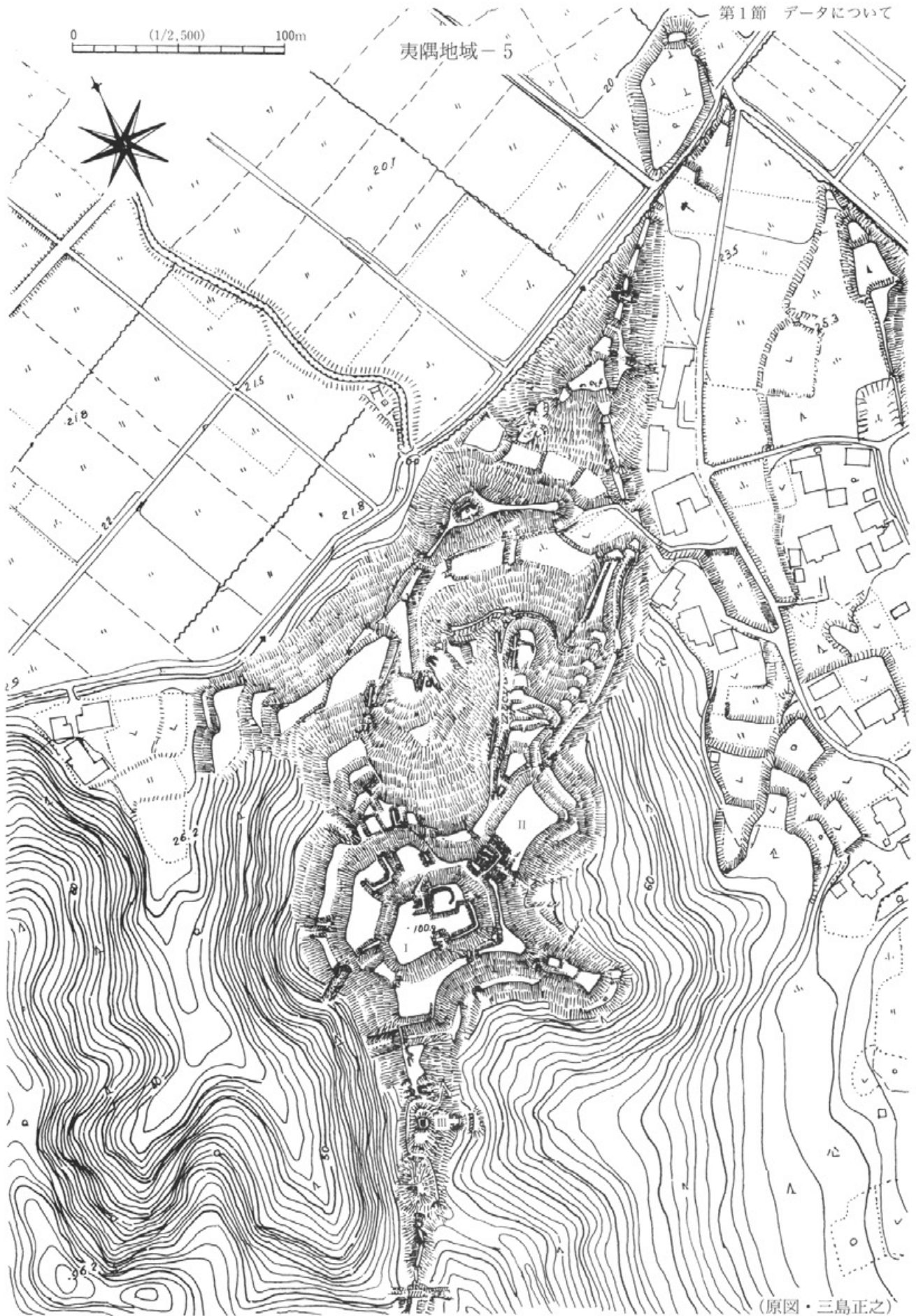


第119図 岬町鶴か城跡(162)概念図 (最終III期、城・城主クラスC)
〔千葉県中近世城跡研究調査報告書 第13集〕より



第120図 大原町城谷城跡(166)概念図 (最終III期、城・城主クラスC)

(「千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 II」より)



第121図 大原町金山城跡(167)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスC)
(『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ』より)

夷隅地域-6



第122図 大原町布施殿台城跡(165)概念図 (最終III期、城・城主クラスC)
(『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 II』より)



第123図 勝浦市興津城跡(172)概念図 (最終III期、城・城主クラスC)
(『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 II』より)

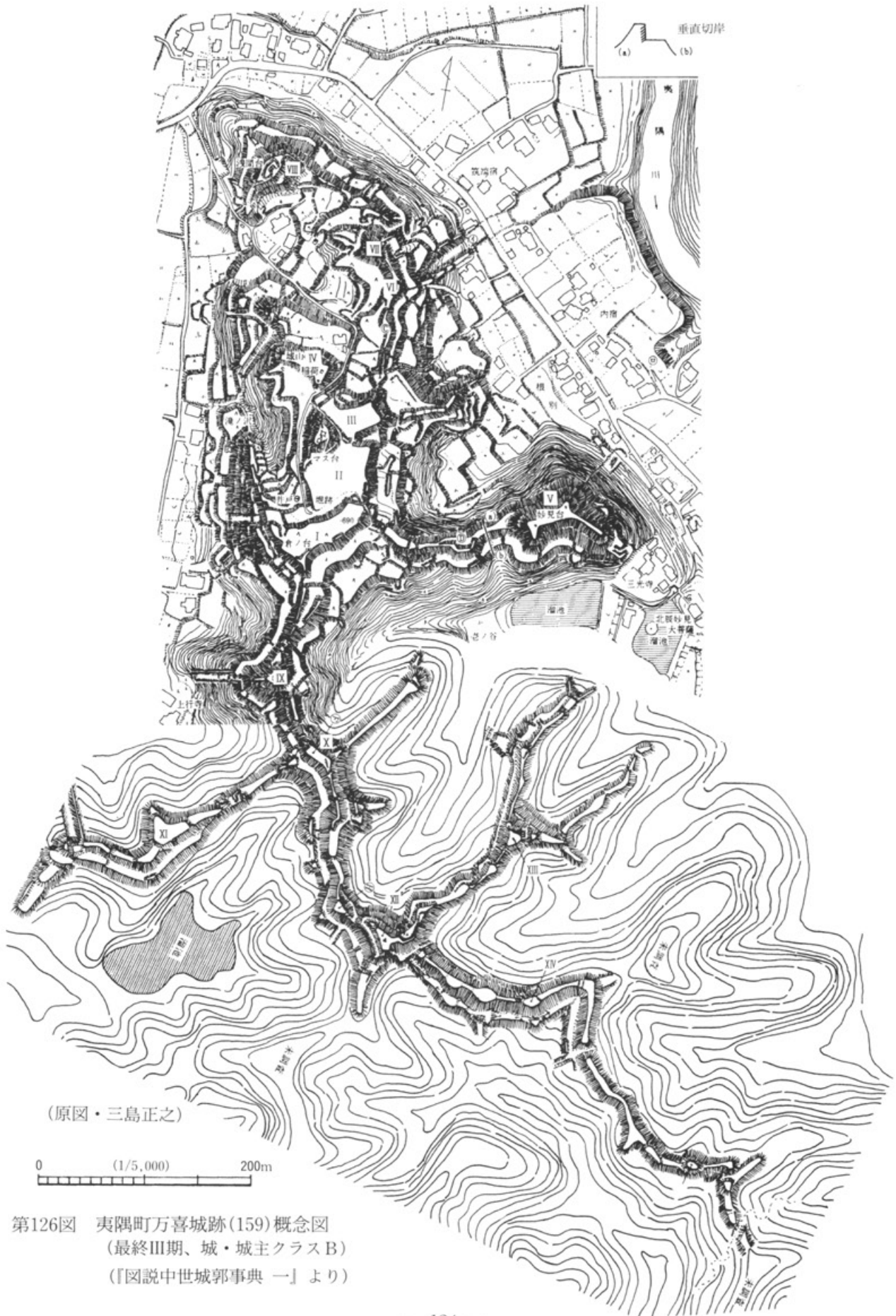


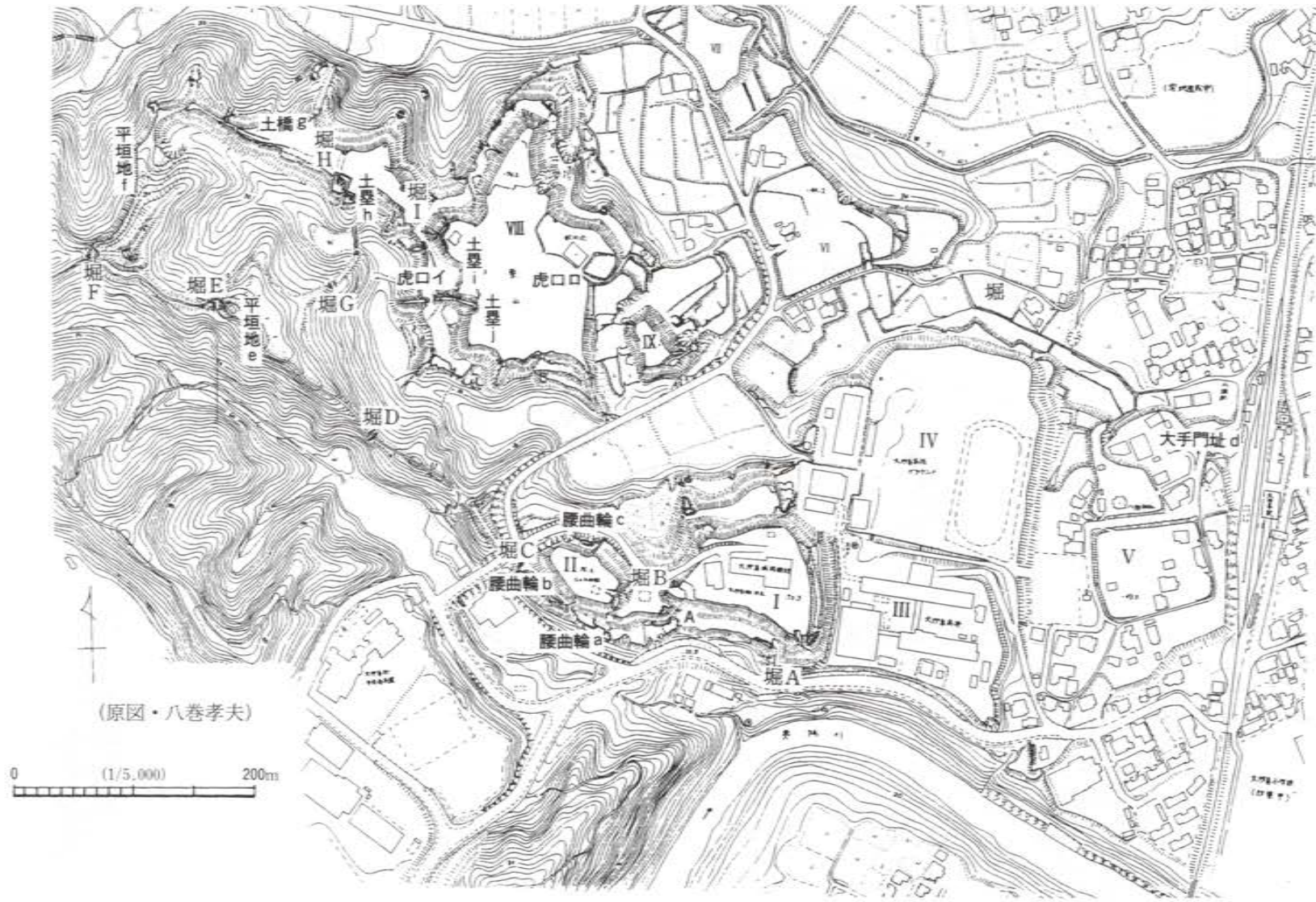
第124図 勝浦市吉尾城跡(170)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスC)
 (『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ』より)



第125図 勝浦市勝浦城跡(171)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスB)
 (『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ』より)

夷隅地域-8



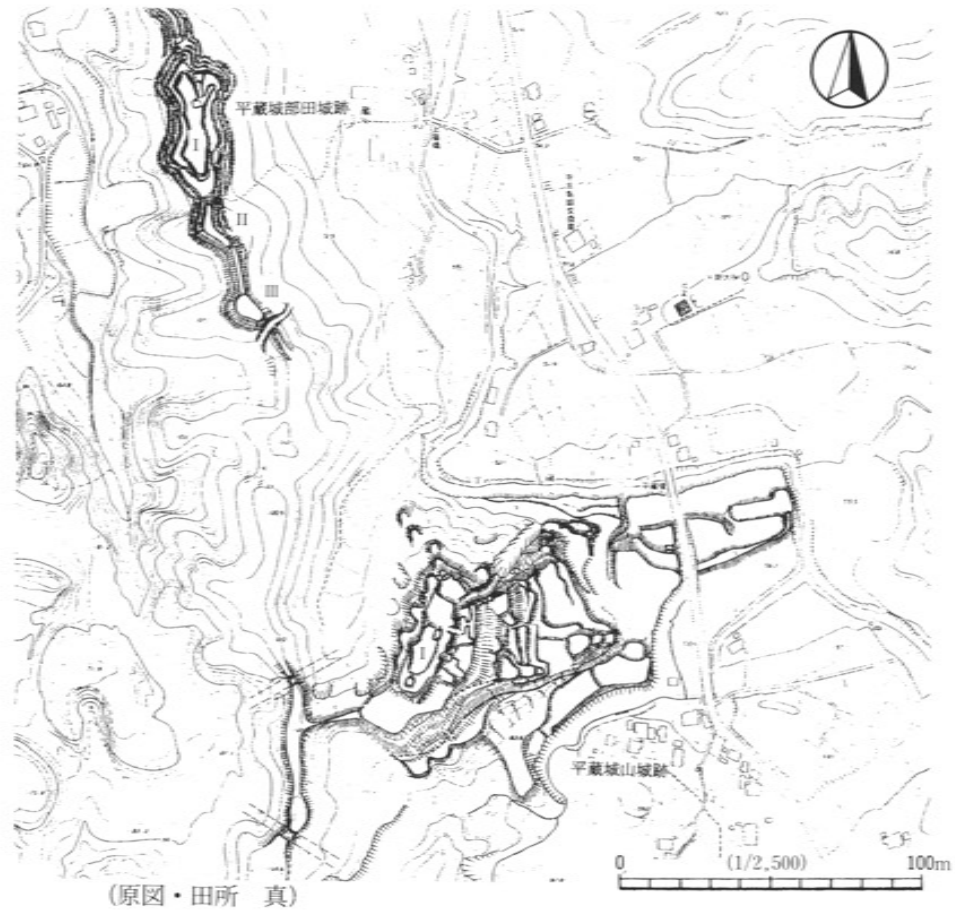


(原図・八巻孝夫)

0 (1/5,000) 200m

第127図 大多喜町大多喜城跡(158)概念図 (最終V期、城・城主クラスB)
(『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 II』より)

市原地域-1



(原図・田所 真)

第128図 市原市平蔵城跡(180)・平蔵城部田城跡(183)概念図
(最終Ⅲ期、城・城主クラスD) (最終Ⅱ期、城・城主クラスD)
(『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ』より)



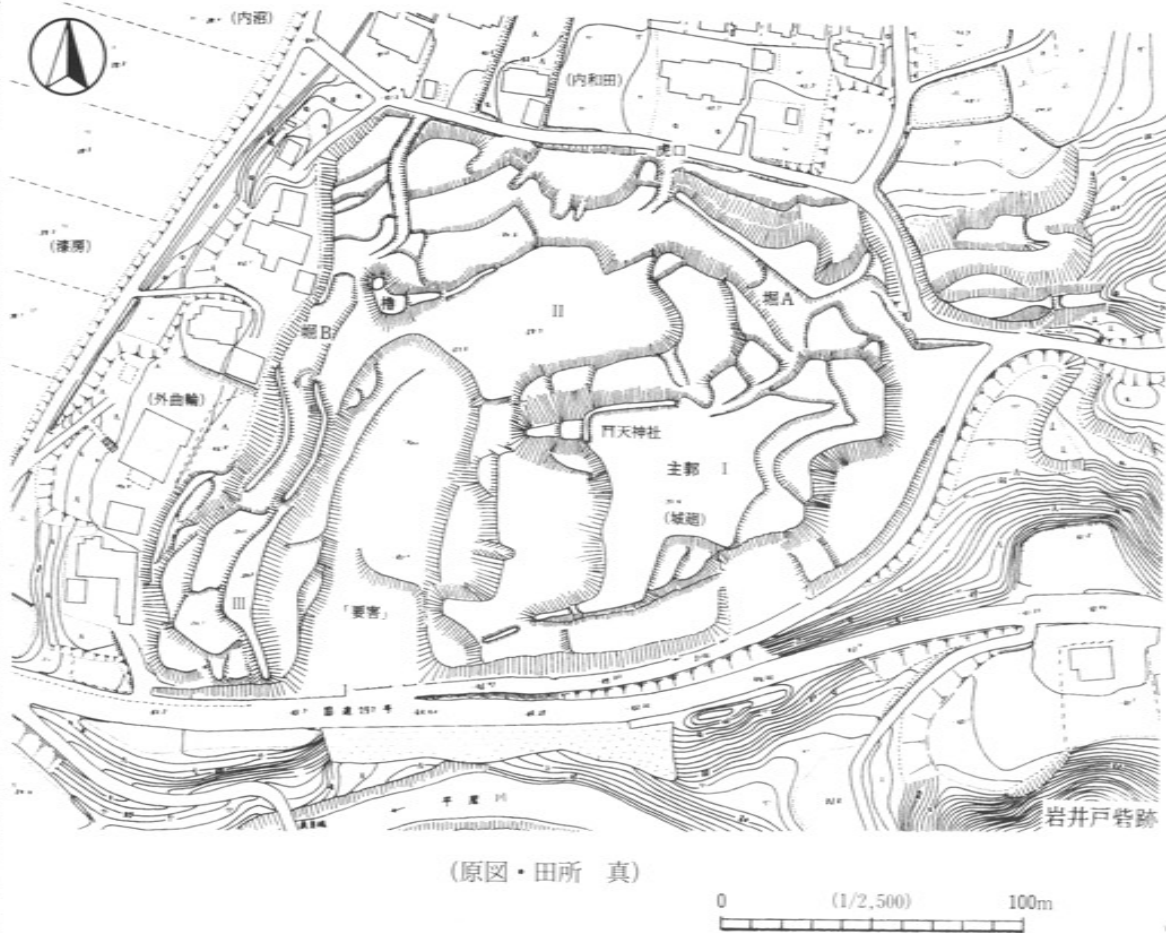
(原図・田所 真)

第129図 市原市吉沢城跡(181)概念図 (最終Ⅱ期、城・城主クラスD)
(『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ』より)

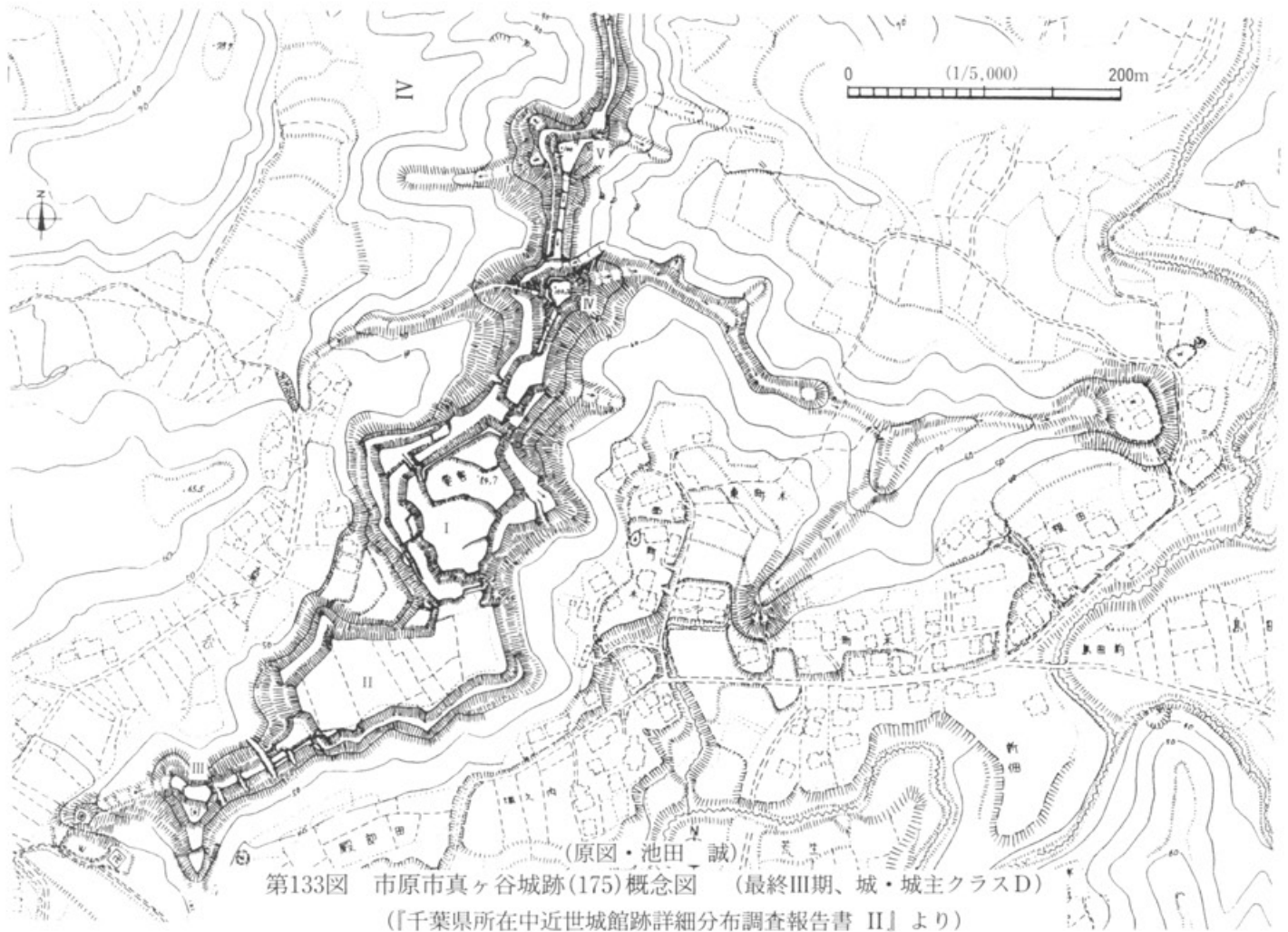
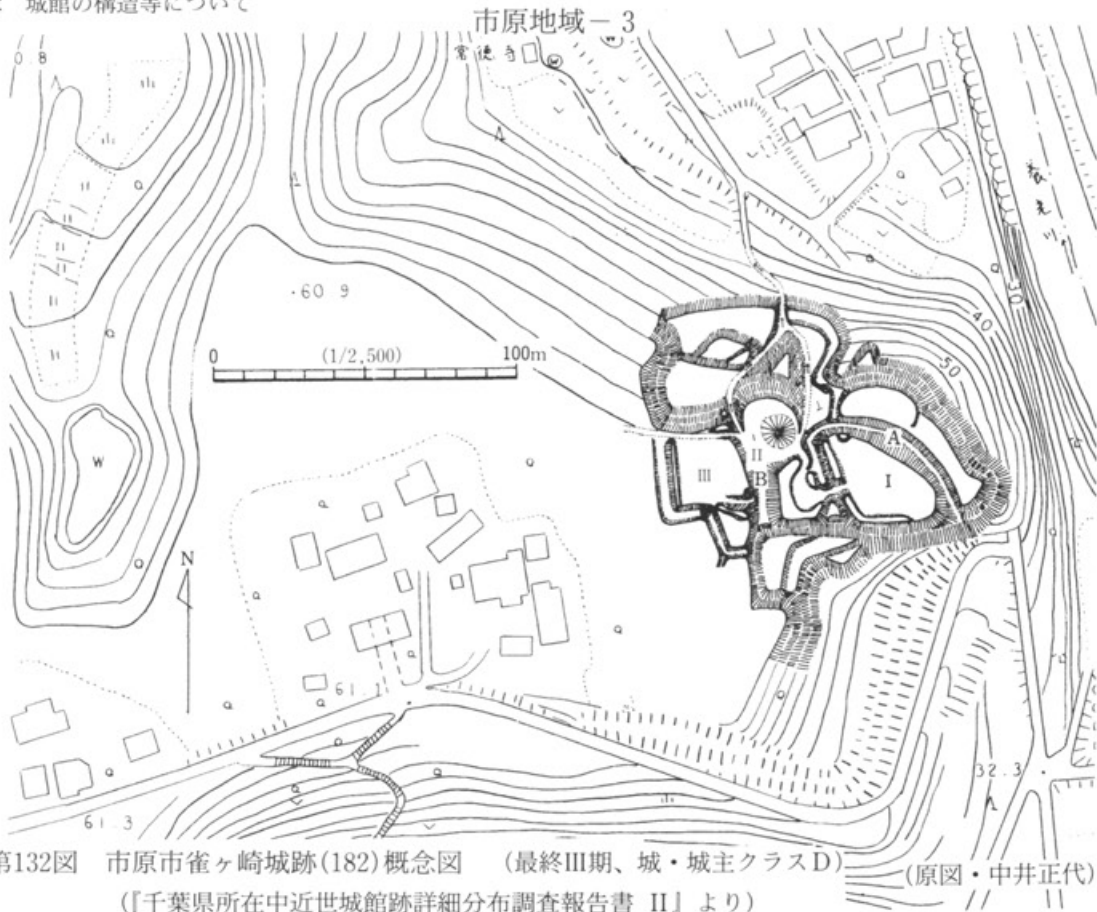


第130図 市原市犬成城跡(176)・犬成向山城跡(179)概念図 (最終Ⅱ期、城・城主クラスD)
 (『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ』より)

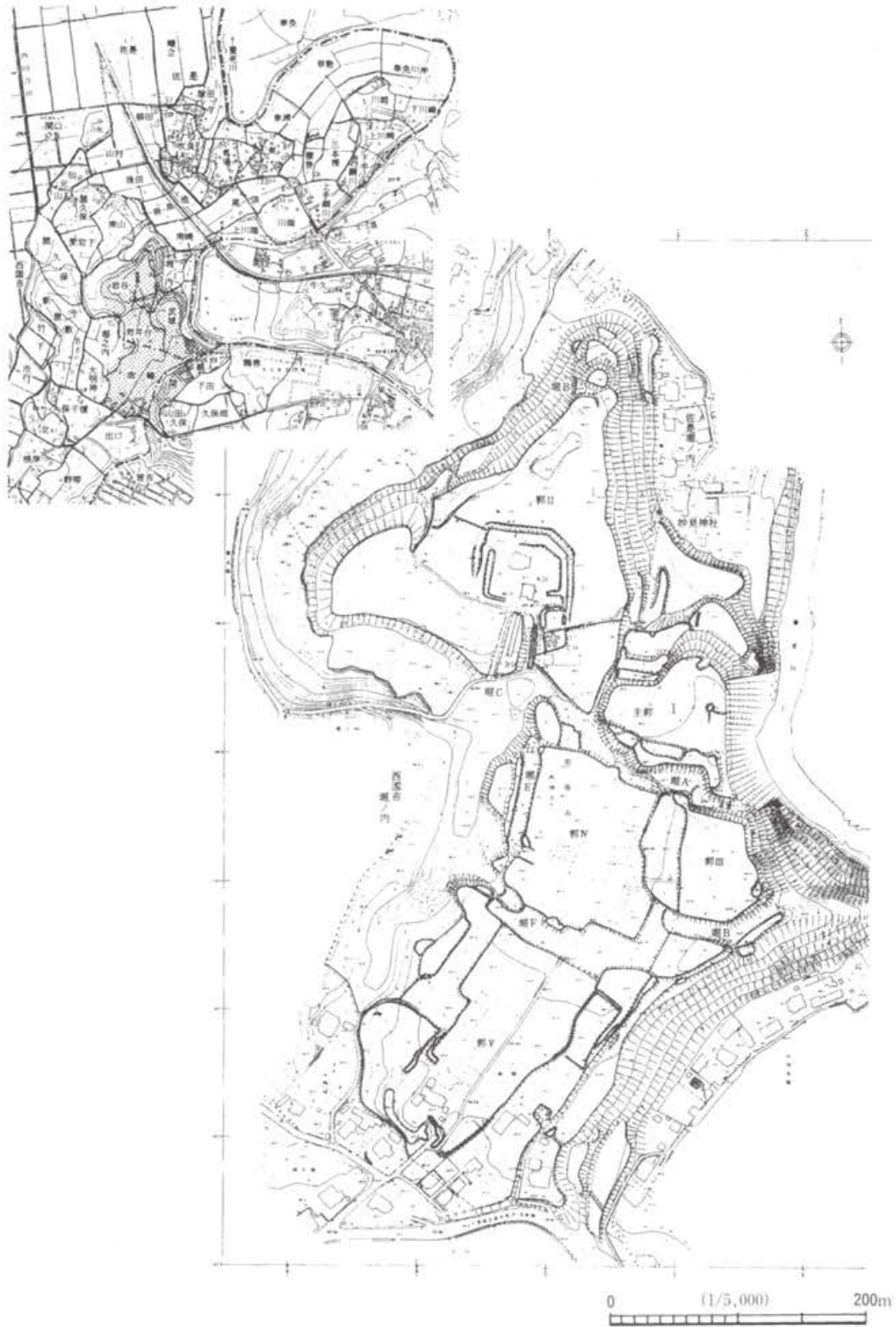
市原地域-2



第131図 市原市池和田城跡(177)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスD)
 (『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ』より)

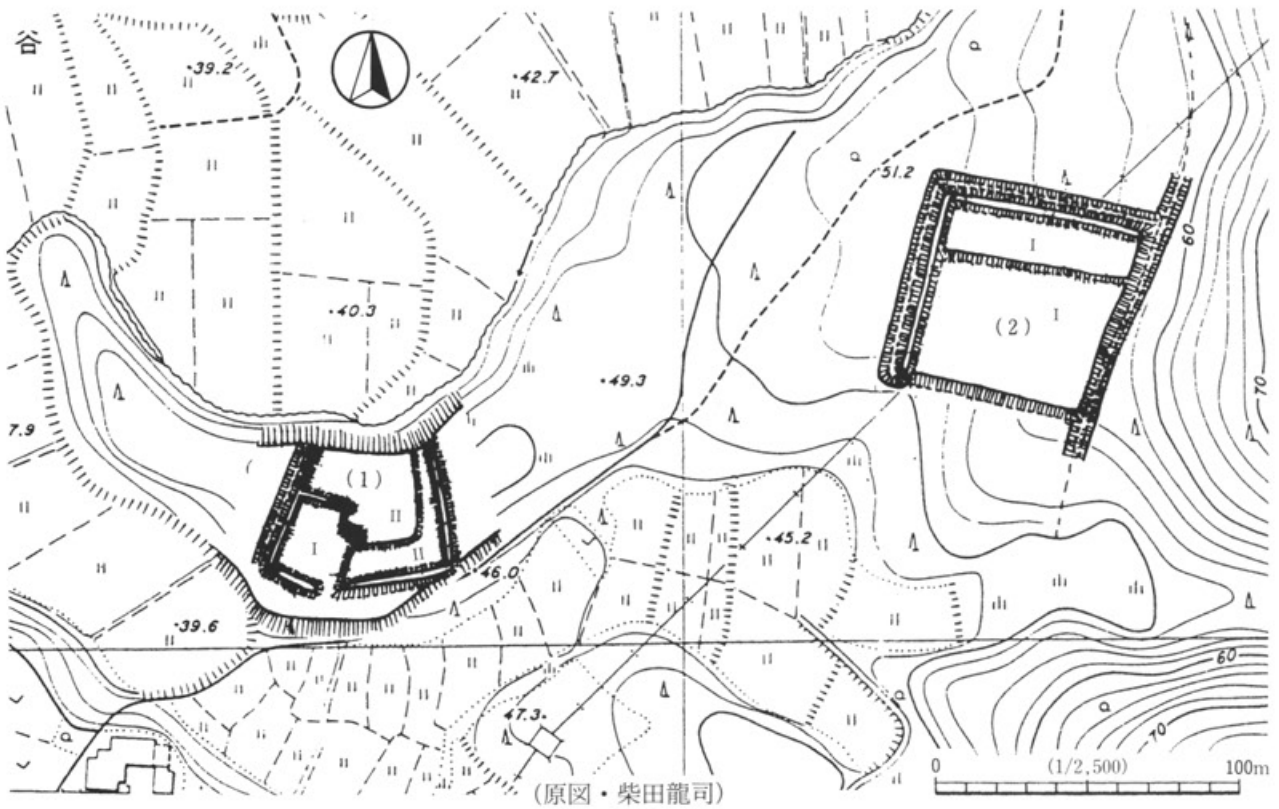


市原地域-5



第136図 市原市佐是城跡(173)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスC)
(『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ』より)

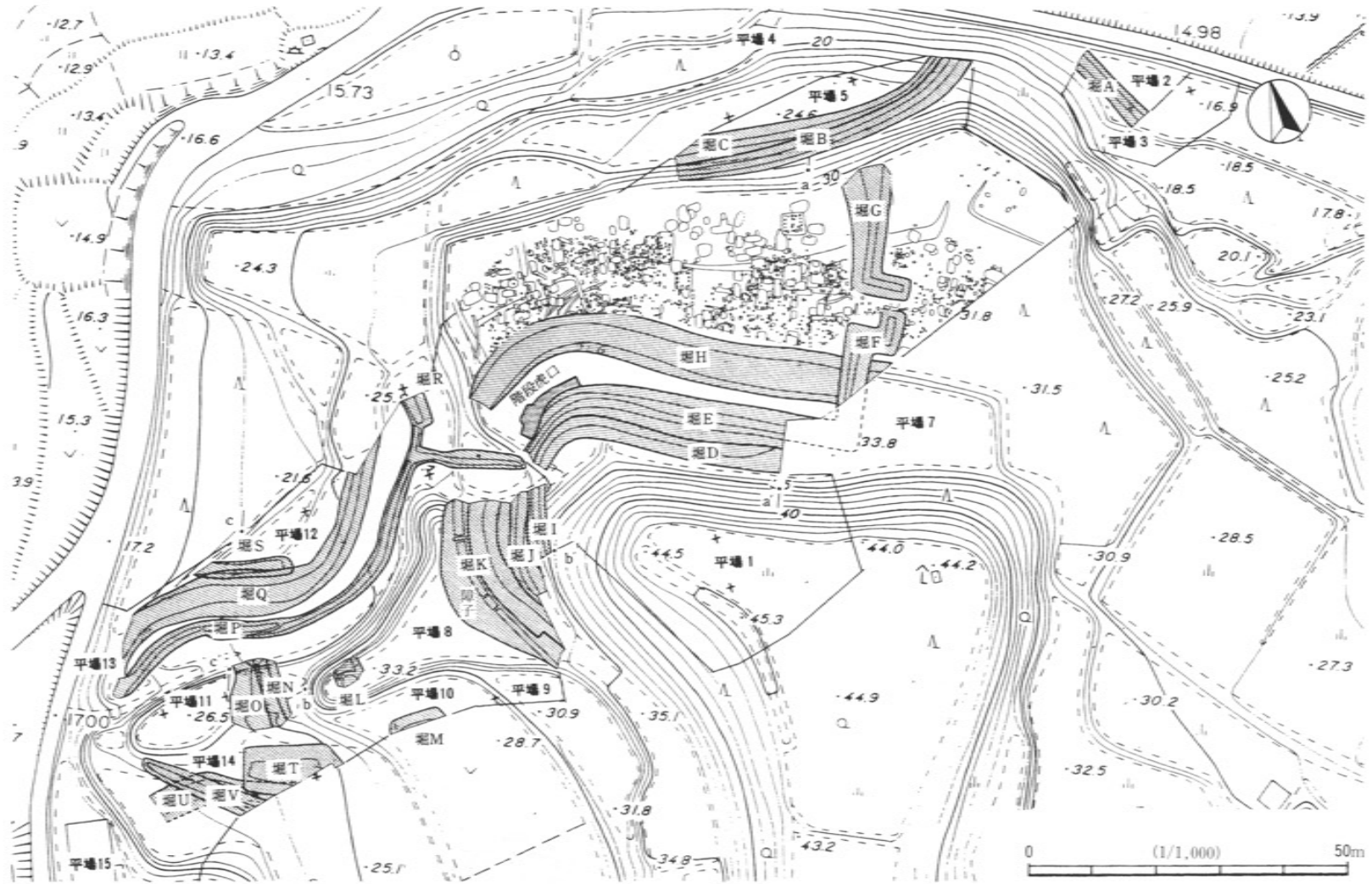
君津地域-1



第137図 袖ヶ浦市高谷館群(185,186)概念図 (最終II期、城・城主クラスE)
 (『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 II』より)



第138図 木更津市三直城跡(197)概念図 (最終III期、城・城主クラスD)
 (『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 II』より)



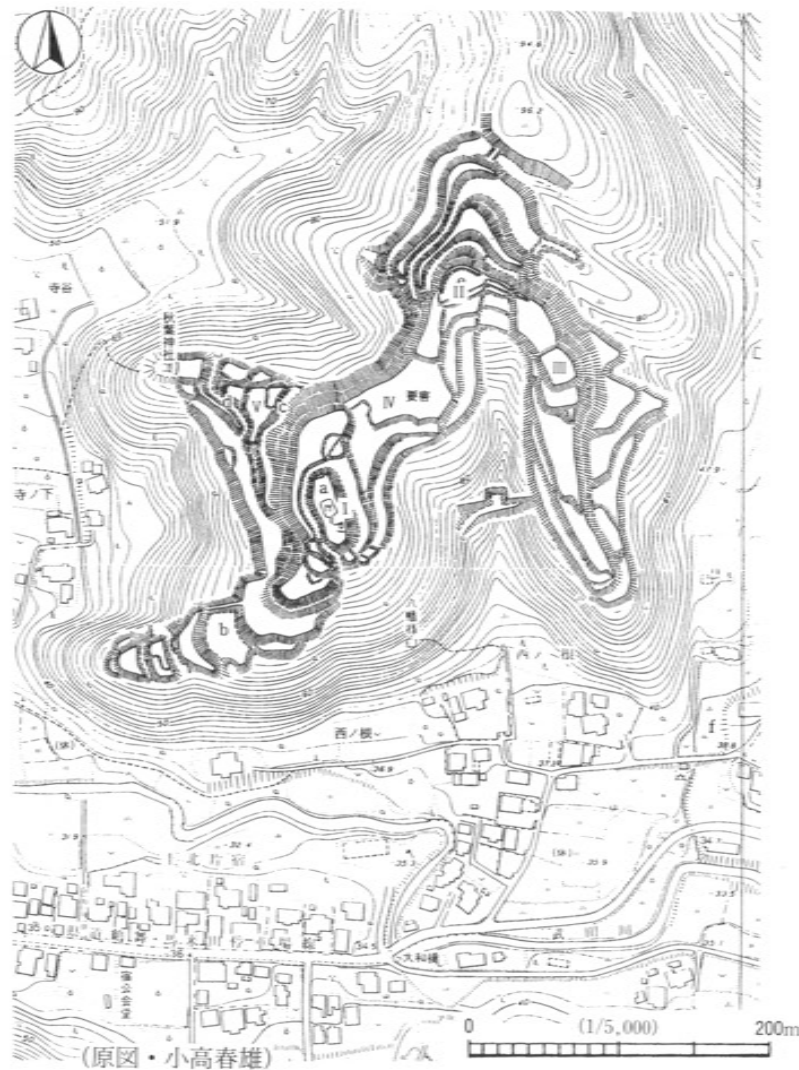
第139図 木更津市笹子城跡発掘調査全測図 (最終Ⅱ期、城・城主クラスC)
 (『研究連絡誌』第37号に加筆)



第140図 木更津市中尾城跡(192)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスC)
 (『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 II』より)



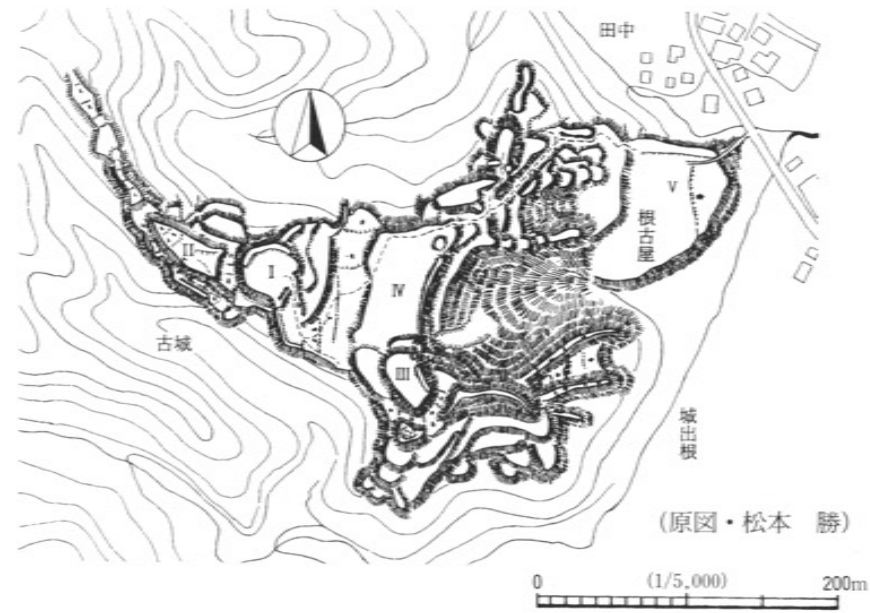
第141図 木更津市天神台城跡(191)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスC)
 (『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 II』より)



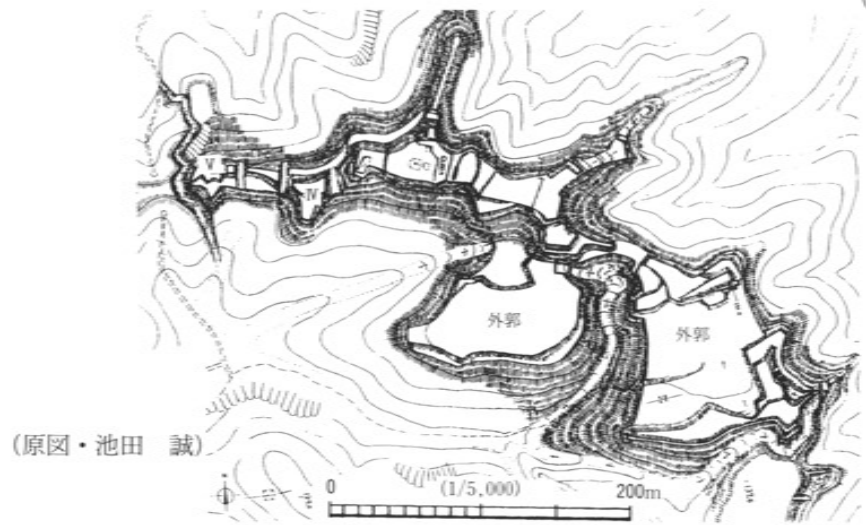
第142図 木更津市要害城跡(190)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスC)
 (『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 II』より)



第143図 富津市天神山城跡(203)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスC)
 (『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 II』より)

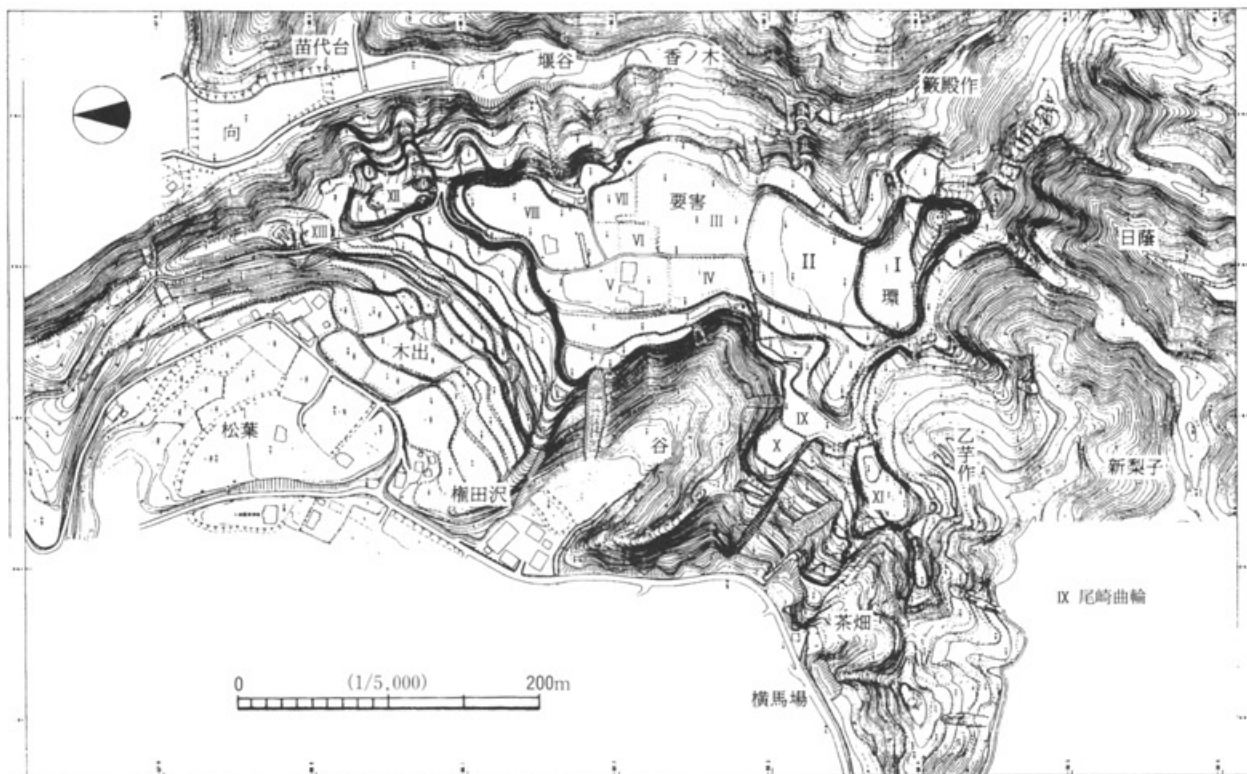


第144図 君津市秋本城(小糸城)跡(195)概念図
 (最終Ⅲ期、城・城主クラスB)
 (『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 II』より)



第145図 君津市千本城跡(194)概念図
 (最終Ⅲ期、城・城主クラスB)
 (『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 II』より)

君津地域-5



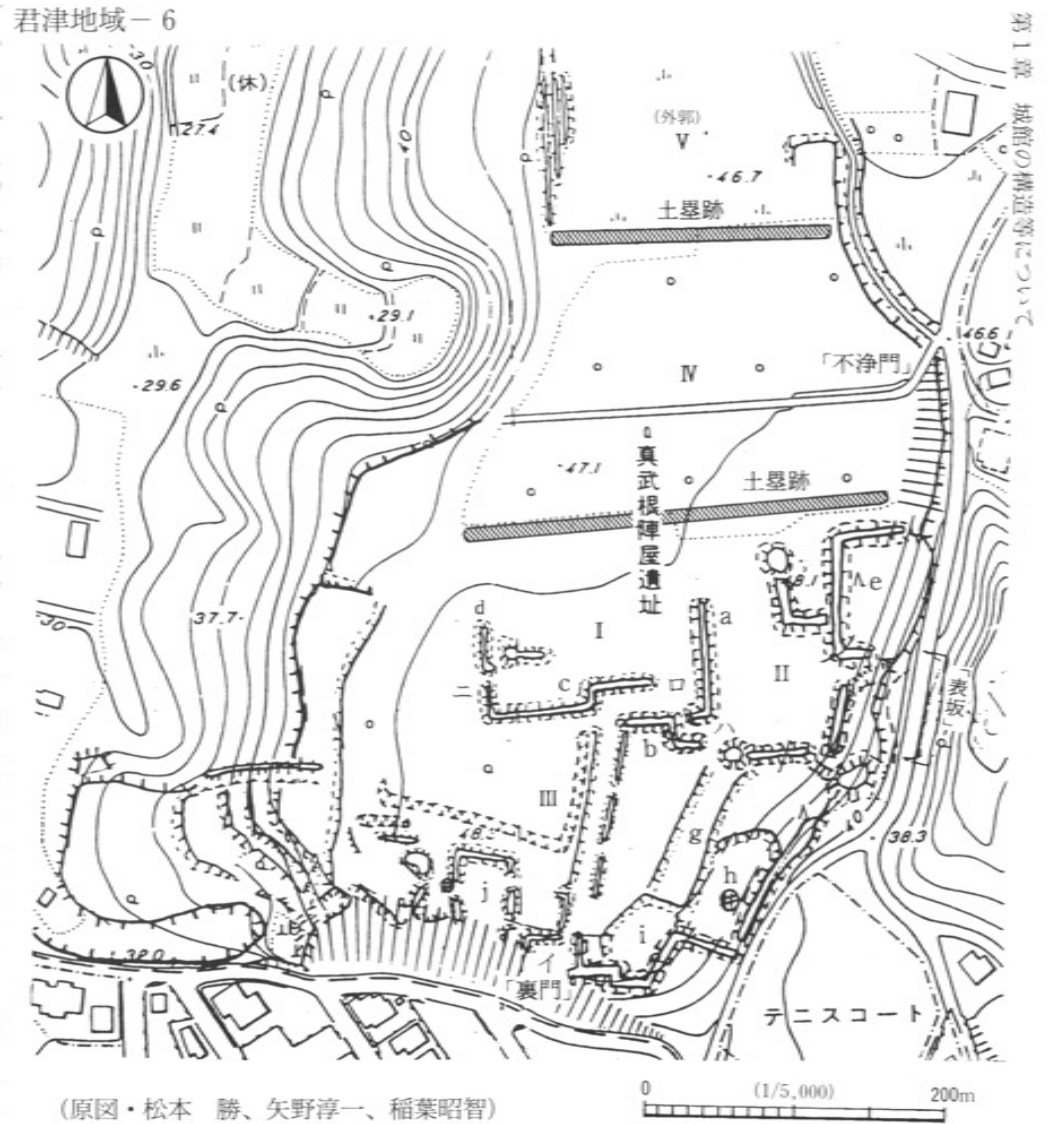
第146図 富津市峰上城跡(200)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスB)
(『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 II』より)



第147図 富津市造海城(百首城)跡(201)測量図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスB)
(『千葉県の歴史 資料編 中世1』より)

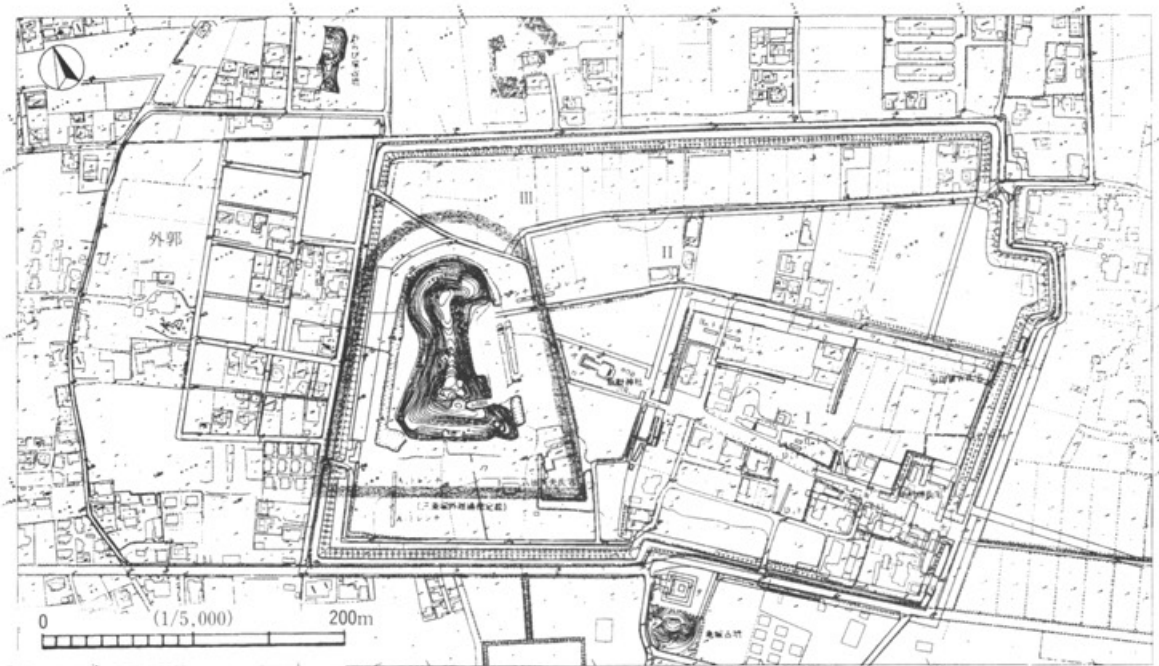


(原図・池田 誠)
 第148図 木更津市真里谷城跡(188)概念図
 (最終Ⅲ期、城・城主クラスB)
 (『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 II』より)

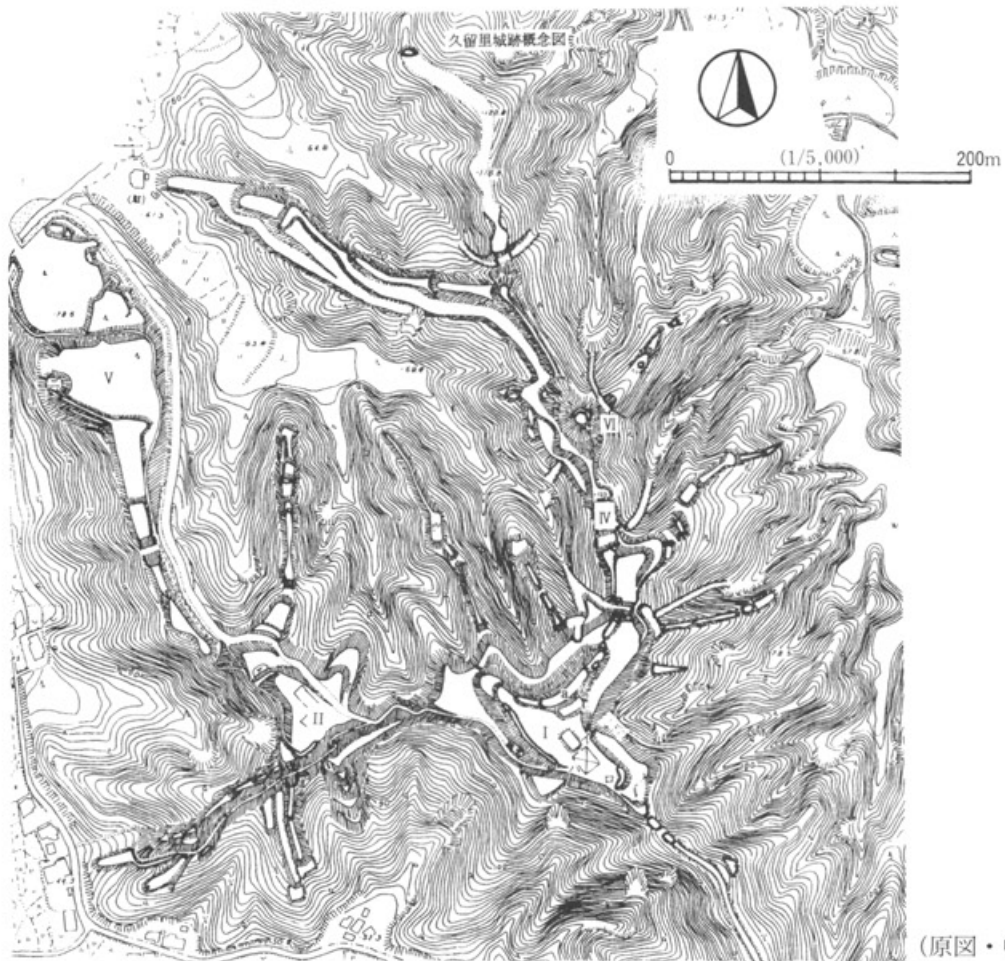


(原図・松本 勝、矢野淳一、稲葉昭智)
 第149図 木更津市真武根陣屋跡(189)概念図 (最終Ⅴ期、城・城主クラスC)
 (『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 II』より)

君津地域-7



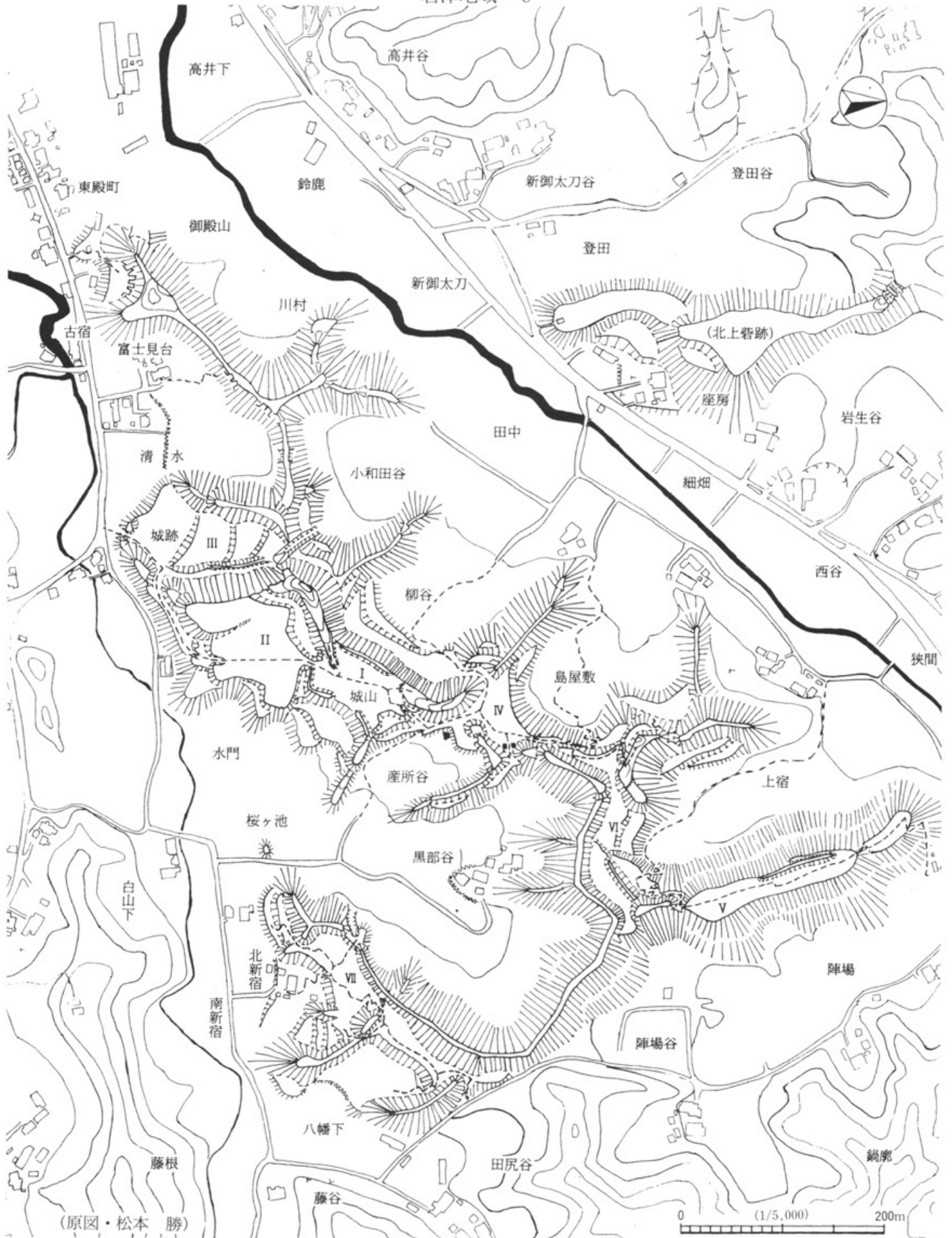
第150図 富津市飯野陣屋跡(198)測量図 (最終V期、城・城主クラスC)
(『千葉県中近世城跡研究調査報告書 第8集』より)



第151図 君津市久留里城跡(193)概念図 (最終V期、城・城主クラスB)
(『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 II』より)

(原図・中井正代)

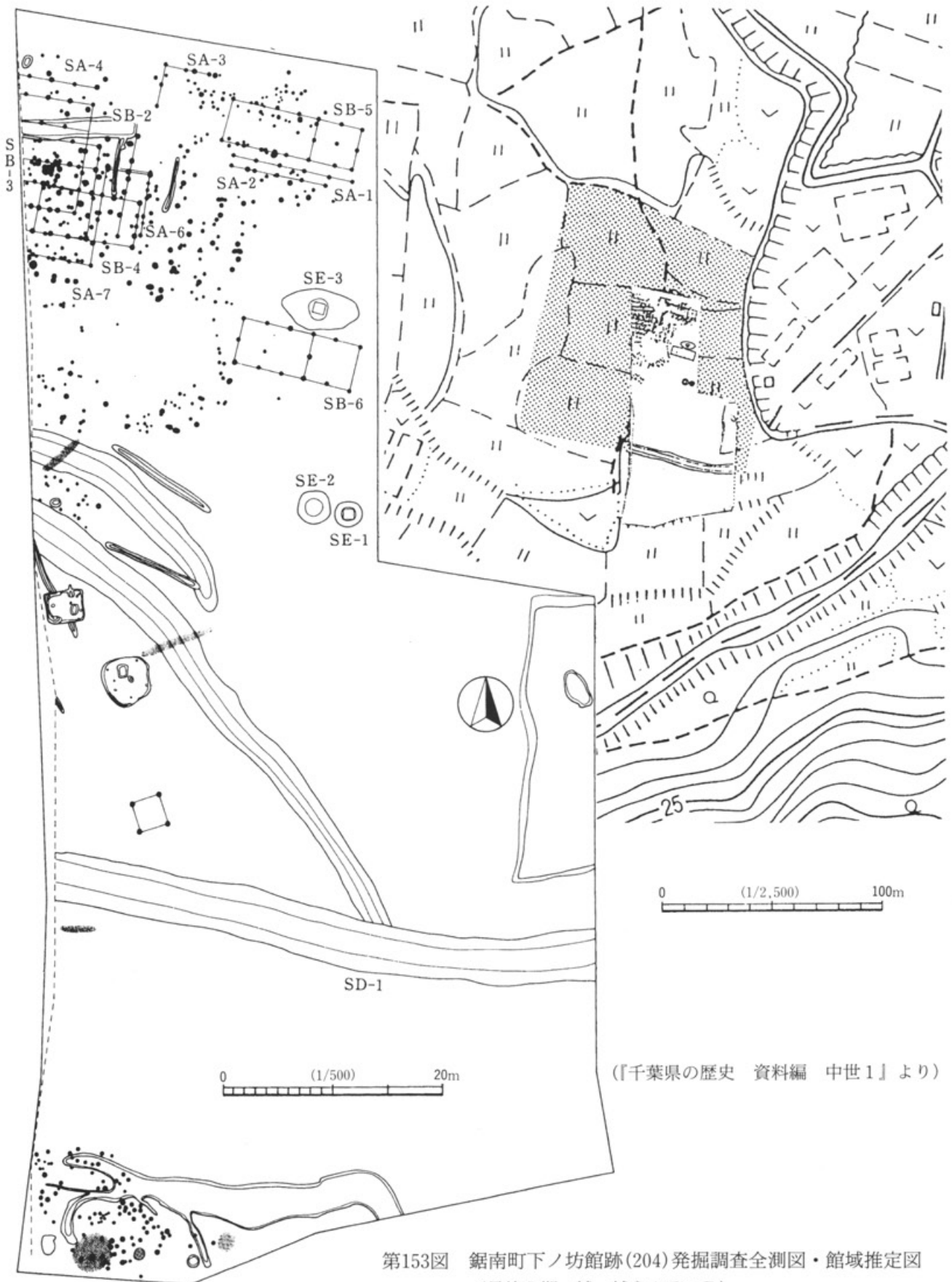
君津地域-8



第152図 富津市佐貫城跡(199)概念図 (最終V期、城・城主クラスB)

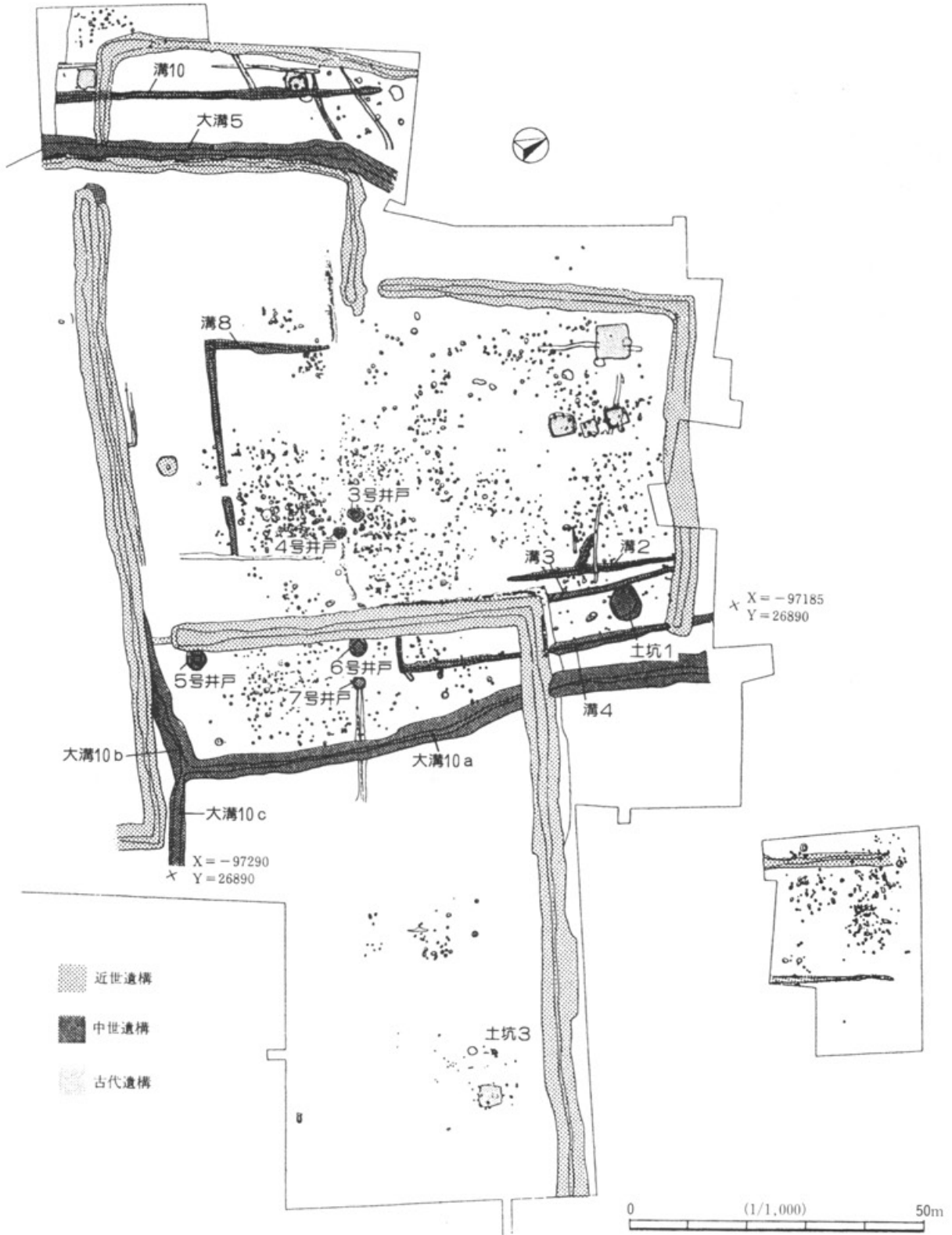
(『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 II』より)

安房地域-1



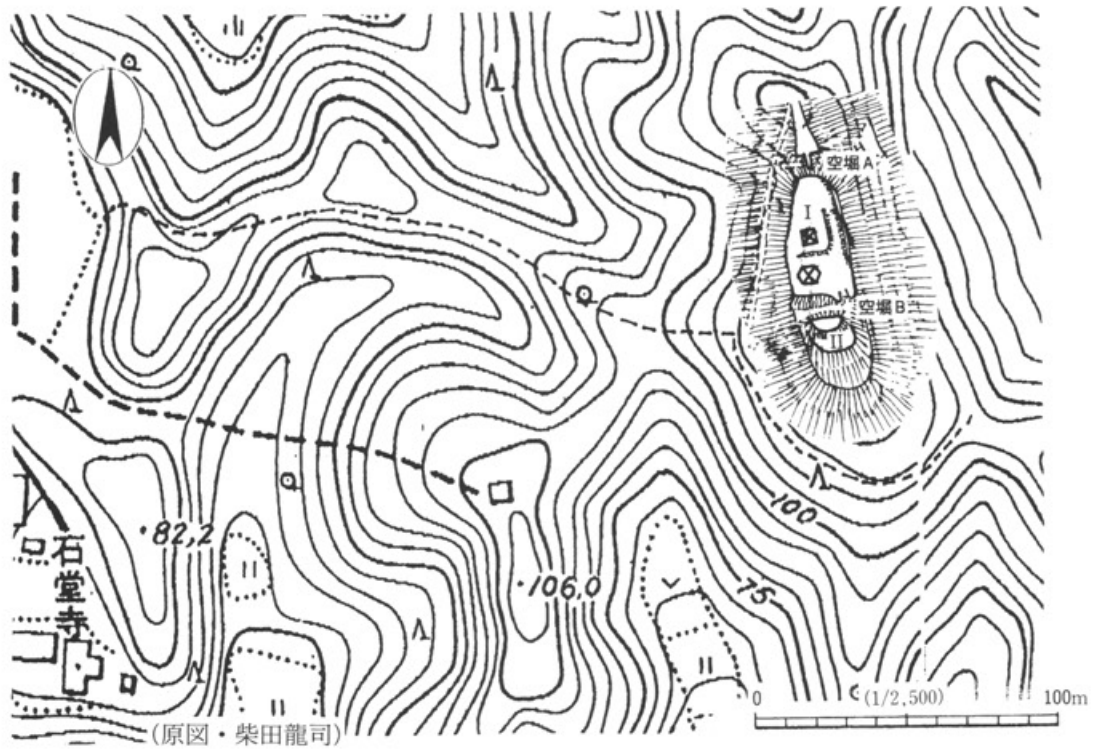
第153図 鋸南町下ノ坊館跡(204)発掘調査全測図・館域推定図
(最終I期、城・城主クラスD)

安房地域-2

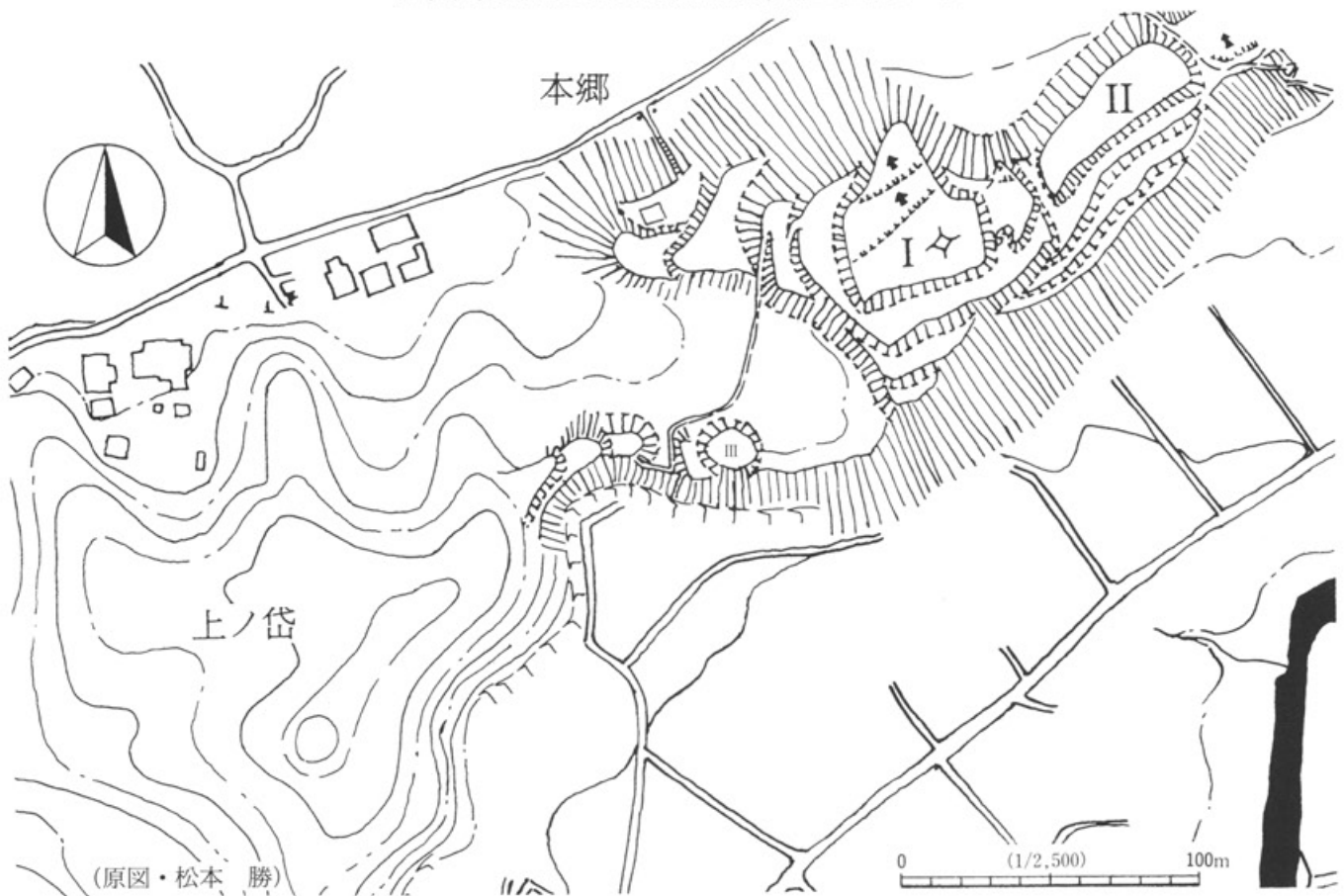


第154図 鴨川市西郷氏館跡(209)発掘調査全測図 (最終I期、城・城主クラスD)
(『千葉県歴史資料編 中世1』より)

安房地域-3



第155図 丸山町石堂城跡(208)概念図 (最終II期、城・城主クラスD)
〔千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 II〕より

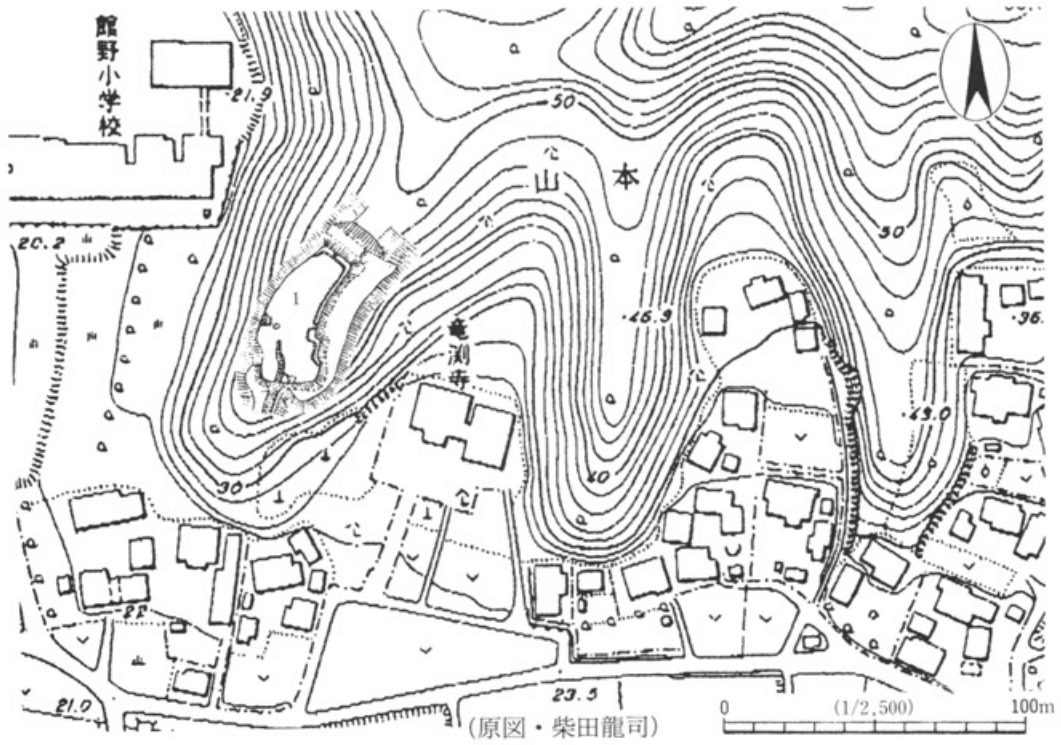


第156図 千倉町宇田城跡(216)概念図 (最終II期、城・城主クラスD)
〔千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 II〕より

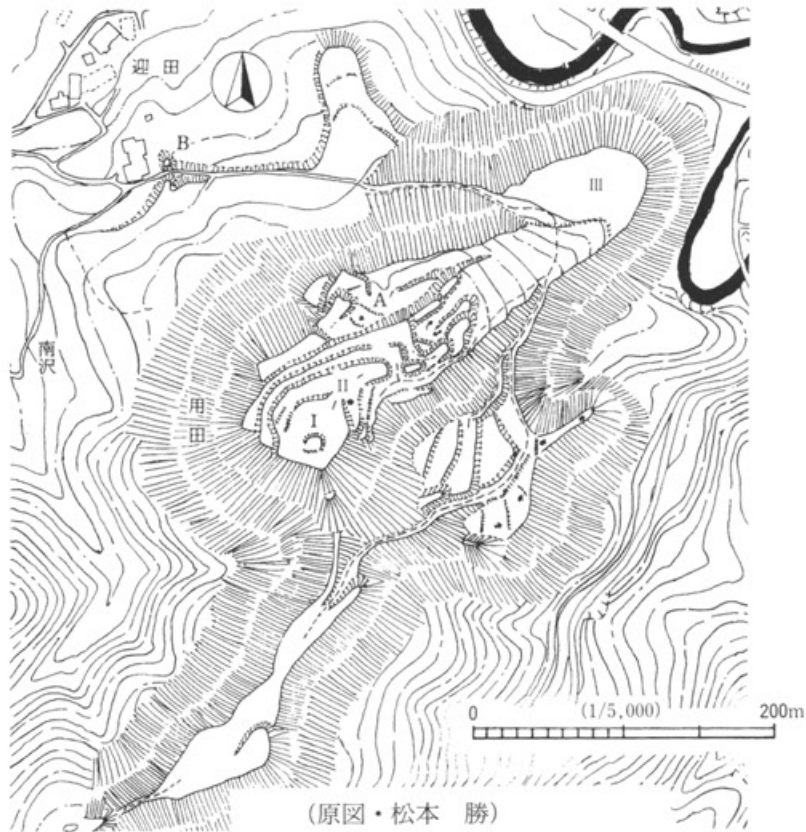
第157図 館山市稲村城跡(214)測量図 (最終Ⅱ期、城・城主クラスA)
〔千葉県中近世城跡研究調査報告書 第4集〕より



安房地域-5



第158図 館山市山本城跡(215)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスE)
〔千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ〕より



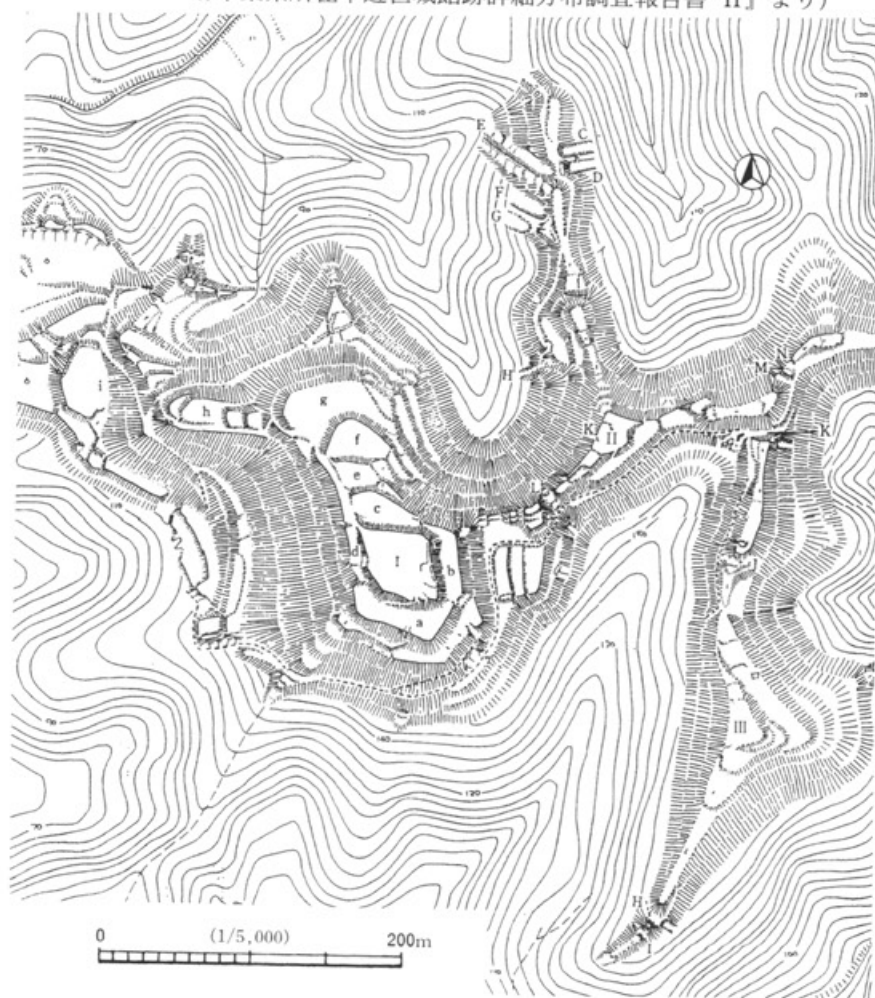
第159図 富山町富山城跡(205)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスC)
〔千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ〕より

安房地域-6



(原図・松本 勝)

第160図 鴨川市山之城城跡(211)・藤四郎台館跡(210)概念図
(最終Ⅲ期、城・城主クラスC) (最終Ⅱ期、城・城主クラスD)
〔千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ〕より



(原図・遠山成一)

第161図 富浦町宮本城跡(207)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスB)
〔千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ〕より

安房地域-7



第162図 天津小湊町葛ヶ崎城跡(212)概念図 (最終Ⅲ期、城・城主クラスB)
(『葛ヶ崎城跡調査報告書』より)

第2節 地域別特色

本節では、県内の城館跡について、時期や機能や城主等の諸要素は除外したもので、その地域的特色の概要を数量的に把握するために試みたものである。房総は地域によって地形が全く異なり、それによって、領主権力は、如何に地形に即した有効な城館を築くかを意識していたに違いなく、地形を無視した分類・考察等は有効性がないと考えている。

1. 立地について（第4表、第165図）

地形区分については、地質図（第4図）でも明らかではあるが、東飾・印旛・千葉・香取・海匠・山武等県北部地域における占地は殆どが台地上である。丘陵の占地については、香取・山武で若干見られ、市原は台地とほぼ同割合、次いで君津・夷隅の占地は台地の半分以下が丘陵、長生・安房は殆どが丘陵に占地する。また、県南部の市原・君津・安房地域で若干低地の館跡が検出されている。これは、県北部の台地地域の谷が狭い樹枝状を呈するのに比べ、南部では河川が比較的広大な沖積地を形成していること、沖積地上にも古代遺跡が確認されており、その調査に伴って検出されたことなどに起因するであろう。

立地内の位置については、先端部が東飾・印旛・香取・海匠・市原地域に多く、千葉・安房が内部とほぼ同割合、山武・長生・夷隅・君津等房総中央部が先端から奥（山全域）が先端部とほぼ同割合である。千葉・安房地域の台地または丘陵内部の城館跡については、南屋敷遺跡（第44図）・池ノ尻館跡（第21図）等、千葉・印旛地域の発掘調査例から、15世紀前半までの防御をあまり意識しない館跡の可能性があろう。また、山全体に占地するものが多い地域は、井田・酒井・武田・土岐・正木氏等の国人領主権力の大きさや築城意識も考えられよう。

立地する比高については、まさに地形に即したものであるが、南に行くほど高くなる傾向が明白である。

2. 曲輪数について（第4表、第166図）

主要郭数については、大差はないが、夷隅・君津地域が若干多い。しかし、腰曲輪数については、地域により大きな差があり、夷隅地域が50以上、君津・安房地域が40～50、長生地域が40余りでこの4地域が突出している。次いで山武・市原地域が20余り、香取・海匠地域が15前後、東飾・印旛・千葉地域が10以下である。これらは、やはり台地地形と丘陵地形の占地の差によるものが大きい、長生・夷隅・君津・安房地域の曲輪数の多さは、立地の項で述べた様に、丘陵斜面に無数の平場を造成する領主の築城意識によるものもあろう。

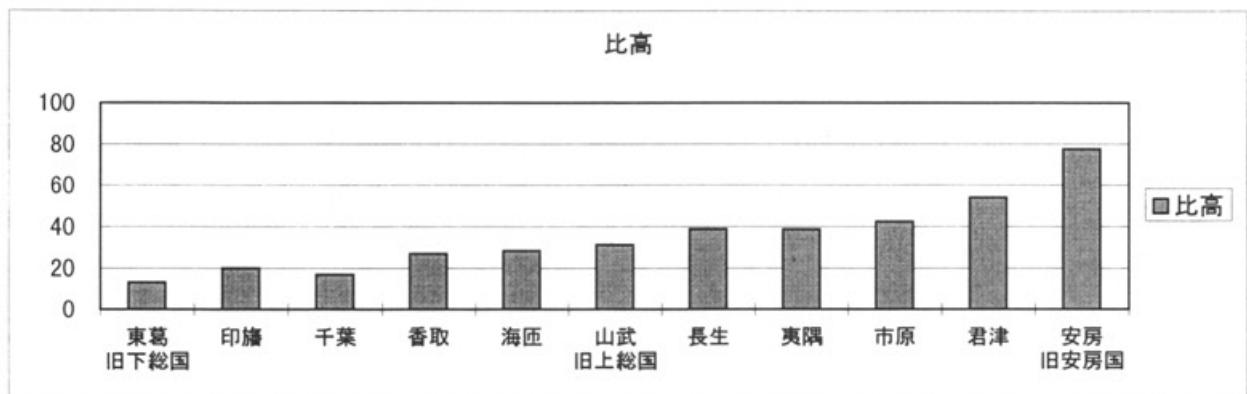
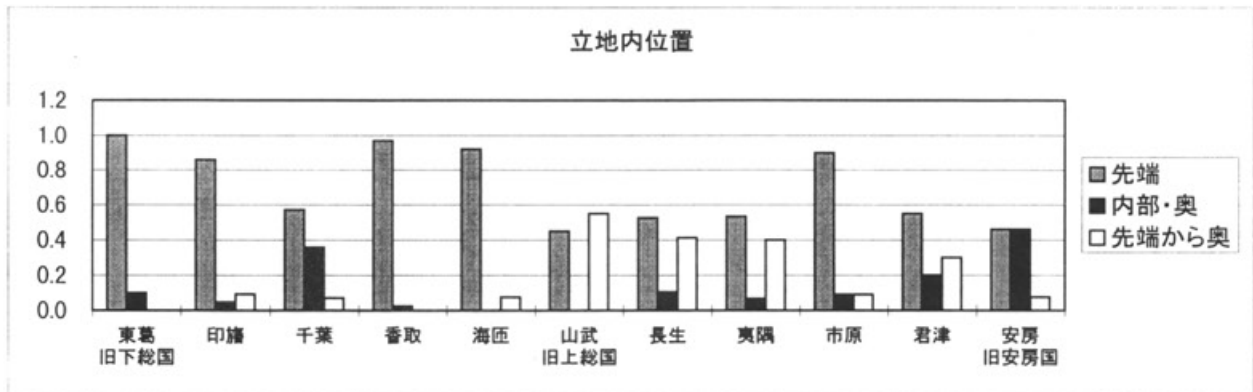
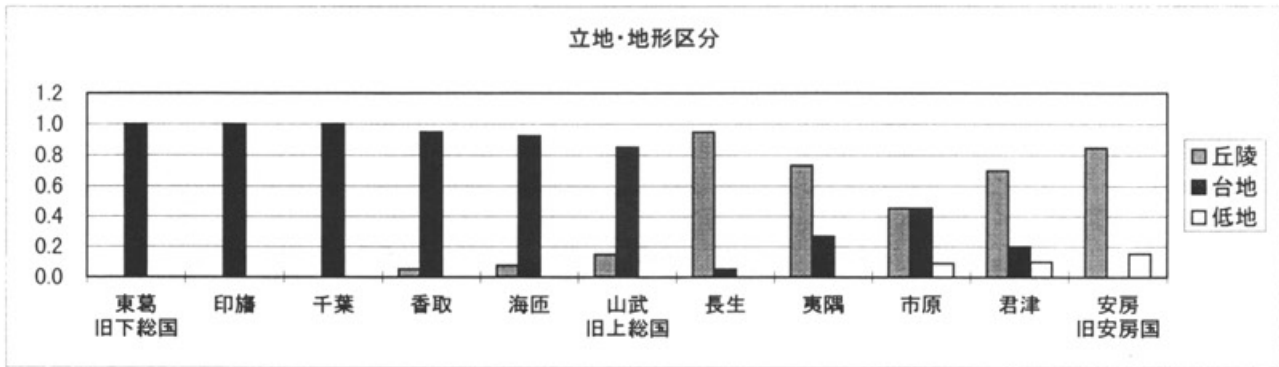
3. 曲輪面積について（第4表、第166図）

主要郭の面積については大差ないが、広い台地地形を有する東飾地域がやや広い。腰曲輪については、前項の曲輪数と同様、夷隅・君津地域の面積がやや広い。外郭部については、千葉地域が突出し、次いで東飾地域が顕著である。これは抽出したデータにもよるが、東飾地域は、古くからの開発によって破壊されて概念図がない城館跡も多く、小金城（第19図）等の広域な面積の城館跡が平均面積を上げていること、千葉地域については、生実城（第50図）・小弓城（第49図）が平均面積をあげていることがある。しかし、基本的には台地上の城郭が広い曲輪を確保し易いことが要因であろう。長生・安房地域はデータ上、外郭

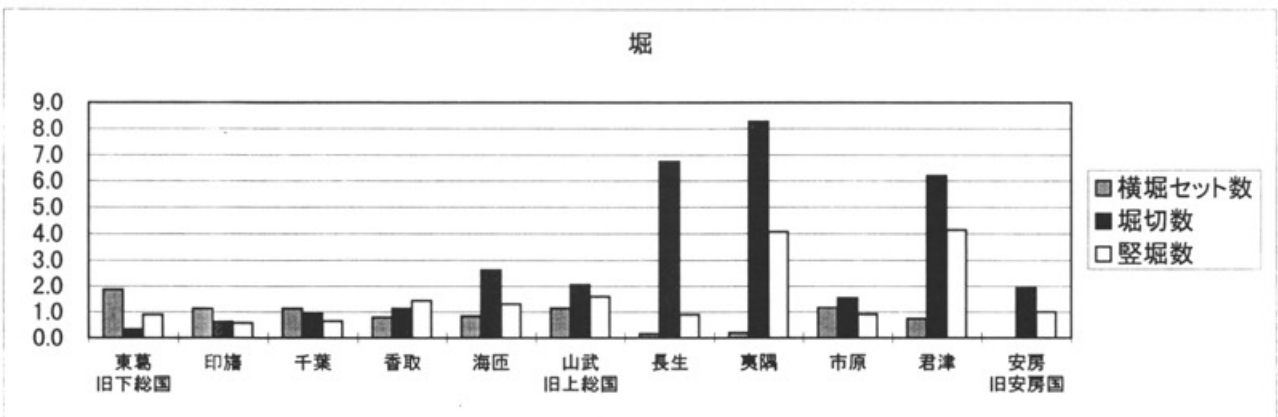
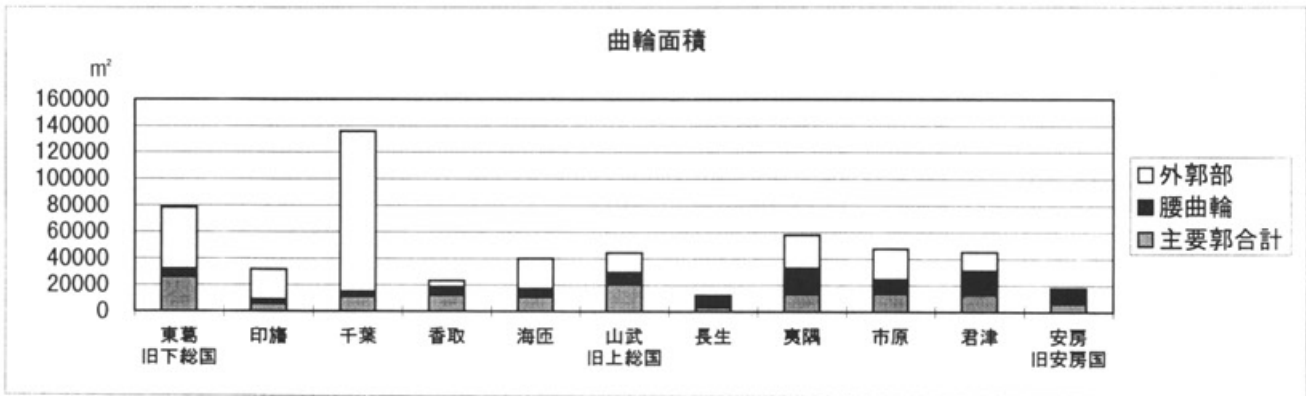
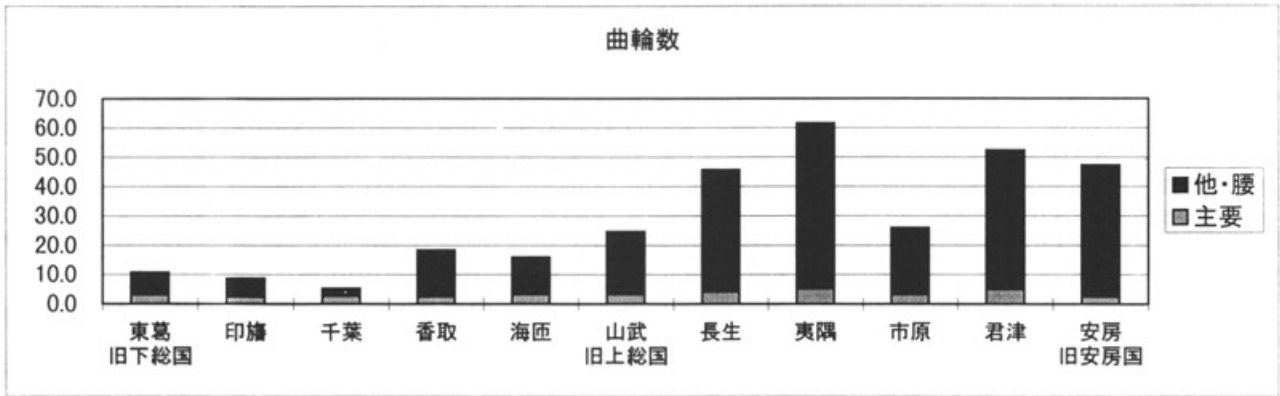
第4表 千葉県内中近世城館跡構造等 地域別データ集計

城・城主クラス：A：一国以上の領域を持つ戦国大名（千葉宗家・里見氏）の本城/B：一部～数郡の領域を持つ、国人領主層・戦国大名被官（原・大須賀・国分・酒井・正木・武田等）の本城＝戦国大名の支城/C：現市町村規模の領域を持つ、国人領主重臣層の本城/D：数村規模の領域を持つ在地領主層の城/E：一村程度の領域を持つ小領主層・土層農民層の城

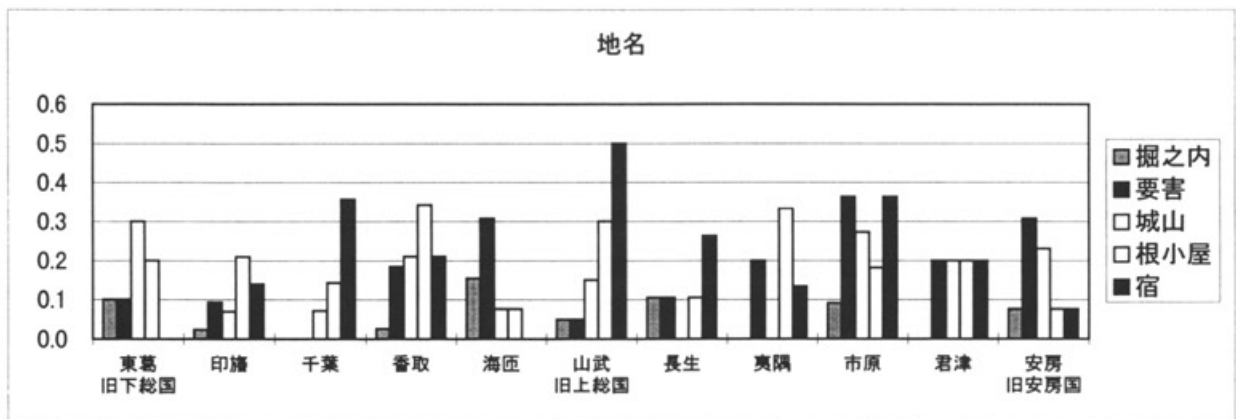
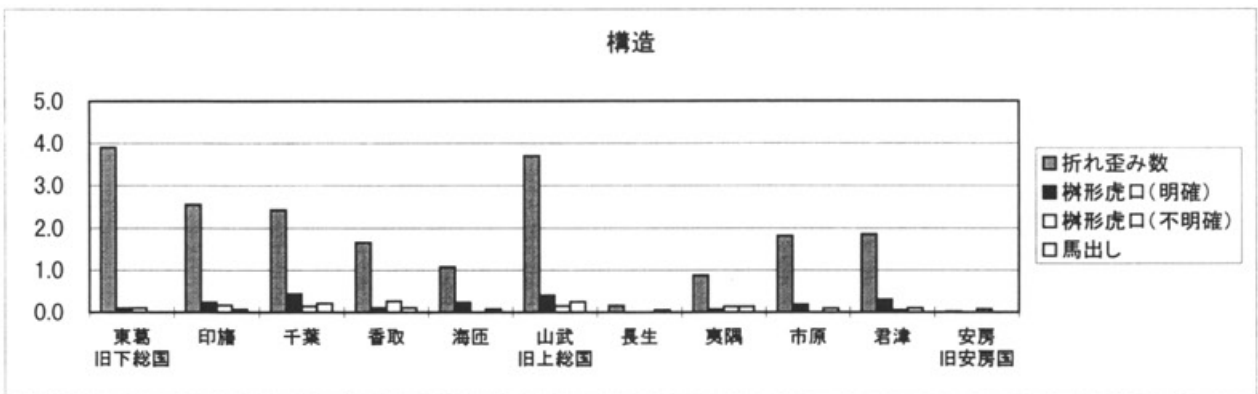
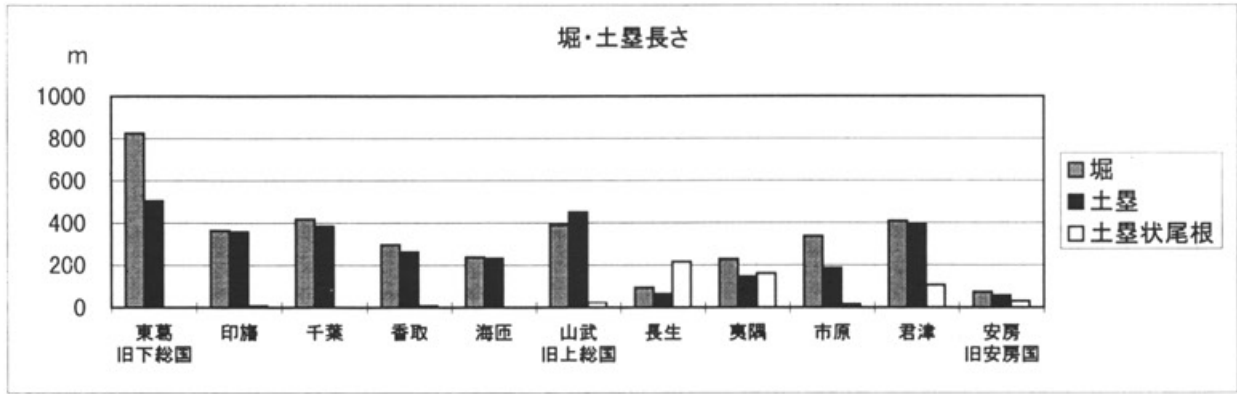
地域	立地							曲輪数			曲輪面積 (㎡)							空堀			土塁		構造			地名					発掘調査遺物時期					城主クラス									
	地形区分			地形内位置				主要	他・腰	合計	主郭	Ⅱ郭	Ⅲ郭	他の主要郭	主要郭面積合計	腰曲輪	外郭部	合計	横堀セメント数	堀切数	塹壕数	堀長さ	土塁長さ	土塁状尾根	折れ至み数	樹形虎口(明確)	樹形虎口(不明確)	馬出し	堀之内	要害	城山	根小(古)屋	宿	12c～14c前	14c後～15c前	15c後～16c初	16c前中	16c後～17c前	17c中～19c	I期	II期	III期	IV期	V期	
	丘陵	台地	低地	先端	内部・奥	先端から奥	比高																																	12c～15c前半	15c後半～16c初頭	16c前半～16c末	16c末～17c初	17c前半以降	
旧下総国	東葛	0.0	1.0	0.0	1.0	0.1	0.0	13	3.2	8	11	2402	3906	10923	43525	25823	5994	46384	54410	1.9	0.3	0.9	824	504	0	3.9	0.1	0.1	0.0	0.1	0.1	0.3	0.2	0.0	4	3	2	1	1	0	0	10	9	0	0
	印旛	0.0	1.0	0.0	0.9	0.0	0.1	20	2.4	6	9	2762	2391	2513	2062	5662	3150	22881	16061	1.1	0.6	0.6	363	357	7	2.6	0.2	0.2	0.1	0.0	0.1	0.1	0.2	0.1	2	4	11	6	4	1	4	38	30	3	1
	千葉	0.0	1.0	0.0	0.6	0.4	0.1	17	2.7	3	5	5496	3699	1873	5365	11240	3405	121217	39161	1.1	0.9	0.6	416	382	0	2.4	0.4	0.1	0.2	0.0	0.0	0.1	0.1	0.4	0	3	6	1	1	2	2	11	7	2	2
	香取	0.1	0.9	0.0	1.0	0.0	0.0	27	2.5	16	18	3785	7618	4197	3299	12231	6167	4845	19673	0.8	1.1	1.4	294	259	7	1.7	0.1	0.3	0.1	0.0	0.2	0.2	0.3	0.2	0	2	5	3	1	2	1	24	22	1	0
	梅厩	0.1	0.9	0.0	0.9	0.0	0.1	28	3.2	13	16	3333	2818	4464	6774	10813	6222	22807	22298	0.8	2.6	1.3	236	229	0	1.1	0.2	0.0	0.1	0.2	0.3	0.1	0.1	0.0	0	1	2	1	0	0	2	12	5	0	0
	下総	0.0	1.0	0.0	0.9	0.1	0.0	21	2.8	9	12	3556	4086	4794	12205	13154	4988	43627	30321	1.2	1.1	1.0	427	346	3	2.3	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.2	0.1	6	13	26	12	7	5	9	95	73	6	3
旧上総国	山武	0.2	0.9	0.0	0.5	0.0	0.6	31	3.3	21	25	2524	5303	2936	8860	20527	8756	14935	22843	1.2	2.1	1.6	391	450	26	3.7	0.4	0.2	0.3	0.1	0.1	0.2	0.3	0.5	0	2	5	1	2	1	2	15	15	1	2
	長生	0.9	0.1	0.0	0.5	0.1	0.4	39	4.2	41	46	962	886	936	2506	3495	8820	0	11851	0.2	6.7	0.9	94	64	215	0.2	0.0	0.0	0.1	0.1	0.1	0.0	0.1	0.3	0	0	1	1	1	1	0	13	11	0	1
	夷隅	0.7	0.3	0.0	0.5	0.1	0.4	38	5.2	56	61	2833	2431	2802	10703	13238	19444	25250	34752	0.2	8.3	4.1	226	146	160	0.9	0.1	0.1	0.1	0.0	0.2	0.0	0.3	0.1	0	0	4	2	2	1	0	16	13	2	1
	市原	0.5	0.5	0.1	0.9	0.1	0.1	42	3.3	23	26	2526	5289	5998	6845	13705	10457	23400	26289	1.2	1.5	0.9	336	185	15	1.8	0.2	0.0	0.1	0.1	0.4	0.3	0.2	0.4	0	0	2	2	2	0	0	9	9	0	0
	君津	0.7	0.2	0.1	0.6	0.2	0.3	54	5.1	47	52	3204	3436	3907	4762	13080	17729	14291	32265	0.8	6.2	4.2	407	390	107	1.9	0.3	0.1	0.1	0.0	0.2	0.2	0.2	0.2	0	1	4	3	1	2	0	13	18	1	4
	上総	0.6	0.4	0.0	0.6	0.1	0.4	41	4.2	38	42	2410	3469	3316	6735	12809	13041	15575	25600	0.7	5.0	2.3	291	247	105	1.7	0.2	0.1	0.1	0.0	0.2	0.1	0.2	0.3	0	3	16	9	8	5	2	66	66	4	8
旧安房国	安房	0.8	0.0	0.2	0.5	0.5	0.1	78	2.5	45	40	2988	1481	2000	4670	6282	11730	0	16208	0.0	1.9	1.0	73	56	30	0.0	0.0	0.1	0.0	0.1	0.3	0.2	0.1	0.1	2	2	0	1	2	1	2	7	7	1	0
平均値																				合計値																									



第165図 地域別データグラフ1 (立地他)



第166図 地域別データグラフ2 (曲輪数他)



第167図 地域別データグラフ3 (堀長さ他)

部は見られないが、丘陵の城郭も各曲輪は小規模ながら、集合体として外郭部としての機能を有していた可能性もあろう。

4. 堀について (第4表、第166図)

横堀セット数については、東飾地域に多く、次いで多いのが、山武・市原・印旛・千葉地域である。逆に少ないのは長生・夷隅地域で、安房地域には殆ど無い。

堀切数については、夷隅・長生・君津地域が突出し、東飾・印旛地域が極端に少ない。これは、丘陵の城郭が尾根の堀切を多用するからである。

竪堀数については、夷隅・君津地域が突出している。概念図作成者の見方もあるだろうが、丘陵の城郭の施設として、充実した構造を有する地域として良いであろう。

堀の長さについては、東飾地域が800m余と突出し、印旛・千葉・山武・市原・君津地域が400m前後で土塁の長さとはほぼ一致する。逆に短い地域は長生・安房地域である。堀は、台地では丘陵の様な天然の斜面距離が少ないから長く、丘陵の城郭は短いといえる。なお、長生地域の堀の短さは、数が多いが尾根筋が馬の背状の為、堀切の長さも短くなったものであろう。

5. 土塁について (第4表、第167図)

土塁の長さについては、東飾地域が500m、次いで印旛・千葉・山武・君津地域が400m近く、長生・安房地域が100m前後である。長生・安房地域の丘陵城郭では、堀の長さと同様、比高のある急斜面自体が天然の防御施設となっているためであろう。

土塁状尾根については、長生・夷隅・君津地域に見られるが、他地域にはほとんど見られない。これは、丘陵の馬の背状の尾根を有効に利用したものであろう。

6. 特殊構造について (第4表、第167図)

折れ歪み数については、東飾・山武地域が突出し、次いで印旛・千葉地域、次いで市原・君津・香取地域、次いで海匝・夷隅地域、殆ど見られないのが、長生・安房地域である。台地状のある程度の平場がないと造れないものであり、逆に丘陵城郭では八方に延びる尾根筋による地形の複雑さが、人為的な折り歪み構造を不要なものにしたためではないだろうか。

枡形虎口については、千葉・山武・君津地域に多く、不明確な枡形虎口については、香取地域に若干多い傾向である。前者については、16世紀半ば以降の後北条氏の進出の影響ではないだろうか。また、後者については、香取地域、つまり、大須賀・国分氏の築城意識の表れでないかと考えられる。

7. 地名について (第4表、第167図)

「掘之内」は、低地の居館跡に残る地名とされる。しかし、千葉県内の発掘調査例は少なく、データ表に掲載した地名は、台地や丘陵の城館の下に見られるものも掲載した。よって、地域による傾向は、現時点ではあまり意味がないが、千葉・夷隅・君津地域では殆ど見られないのは、何か意味があるかもしれない。

「要害」は、香取・海匝・夷隅・市原・安房地域にやや多く、千葉には殆ど見られない。

「城山」は、東飾・香取・山武・市原・安房に多く、印旛・千葉・海匝・長生・夷隅地域には殆ど見られない。

「根小（古）屋」は、香取・山武・夷隅地域に多く、長生・安房地域に少ない。他地域はほぼ同様である。

「宿」は、山武地域が突出して多く、次いで千葉・市原・長生地域に多く、少ないのは東飾・海匝・安房地域である。

「根小屋」は、16世紀後半以降の城郭に伴う傾向があるとされ、「宿」は、城下町の萌芽的機能であることが推測されているが、街道筋に伴うもの、またその街道が近世以降のものである可能性も考慮する必要がある。山武地域に宿が突出して多い理由は不明であるが、他は時期的なものを考慮しなければならぬので、次節で改めて検討したい。

第3節 地域、時期、城・城主クラス別特色

本節では、地域毎に①曲輪数、②曲輪面積、③堀の種類、④堀・土塁の長さ、⑤特殊構造の有無、⑥城館関係地名の有無、等について、各城館の最終段階の時期、さらに各段階の城及び城主クラスを分けて、その変化を検討したものである。なお、集計表（第5表）やグラフ（第165図～第173図）の作成に当たっては、データ表（第3表）を元としているが、発展過程を見やすくするために、時期をⅠ期→Ⅱ期→Ⅲ期→Ⅳ期→Ⅴ期に、城及び城主クラスをEクラス→Dクラス→Cクラス→Bクラス→Aクラスという順に並べた。なお、第1節でも触れたが、時期、城・城主クラスについては、その多くが仮定である。また、数値は平均値である。

1. 東葛飾地域（第12図～第19図）

東葛飾地域は破壊された城館跡が多く、概念図や測量図等の資料が少ないので、データとしては少ないことを考慮しなければならない。

(1) 曲輪数

主要郭数は、Ⅱ期Dクラス（金井野城跡）は3、Ⅲ期はDクラス（佐津間城跡 1）→Cクラス（松ヶ崎城跡・箕輪城跡・増尾城跡他 2.3）→Bクラス（小金城跡・手賀城跡 7）と増加する。

腰曲輪数は、Ⅱ期Dクラスは存在しない。Ⅲ期はDクラス（2）→Cクラス（8）→Bクラス（14）の順に増加する。Ⅱ期Dクラスとした例は、金井野城跡のみであるが、東葛飾地域の広大な台地上に占地することから、腰曲輪の代わりに主要郭が3と多く造られている可能性も考えられる。

(2) 曲輪面積

Ⅰ期Dクラスは14,000m²弱、Ⅲ期はDクラス（14,000m²余り）→Cクラス（27,000m²弱）→Bクラス（180,000m²弱）へと増加する。外郭部は、Ⅱ期にはなく、Ⅲ期Dクラス・Cクラスは13,000m²であるが、特にⅢ期Bクラス（小金城跡・手賀城跡）の外郭部は100,000m²近くに突出して広大である。

(3) 堀の種類

横堀のセット数は時期に限らず2～3前後と県内では多く、堀切は殆ど見られない傾向がある。しかし、堀切と豎堀はⅢ期Cクラスで0.5前後と若干見られるようになる。Bクラスにはないが、斜面部の発掘調査によって検出される可能性は高いことが考えられる。

(4) 堀・土塁の長さ

空堀の長さは、Ⅱ期Dクラスで820m、Ⅲ期はDクラス・Cクラスは300m代であるが、Bクラスは2,600mと大幅に増加する。

土塁の長さは、Ⅱ期Dクラス（270m）→Ⅲ期Dクラス（400m）→Cクラス（約460m）→Bクラス（約800m）の順に増加する。

(5) 特殊構造

折り歪み数は、Ⅱ期Dクラスは2.0と低いが、Ⅲ期はやや増加し、Dクラスは4.0、Cクラスは2.5、そしてBクラスは9.0と大幅に増加する。

明確な桁形虎口は、Ⅲ期Cクラスに0.2と僅かに存在する。

不明確な桁形虎口も、Ⅲ期Cクラスに0.2と僅かに存在する。

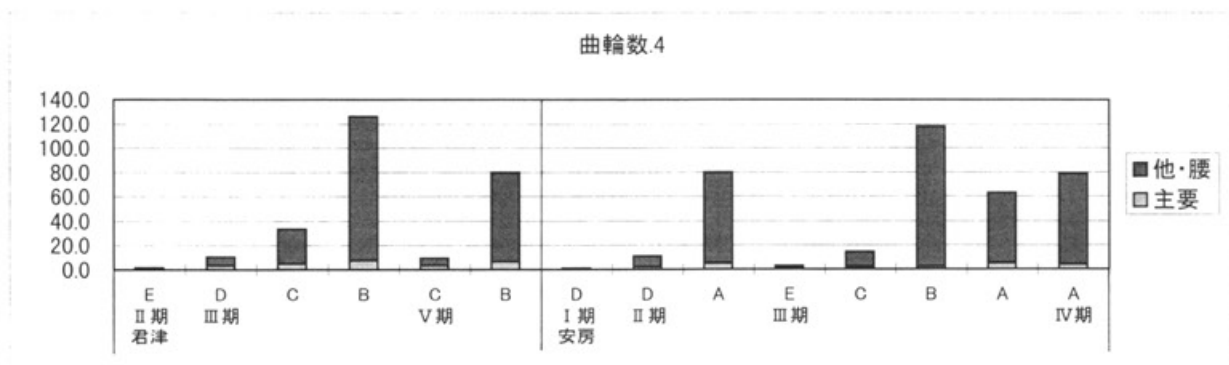
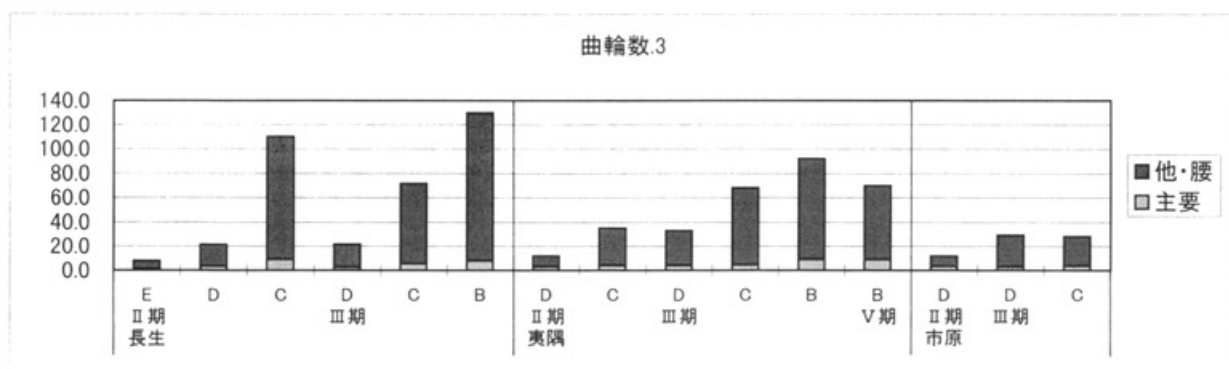
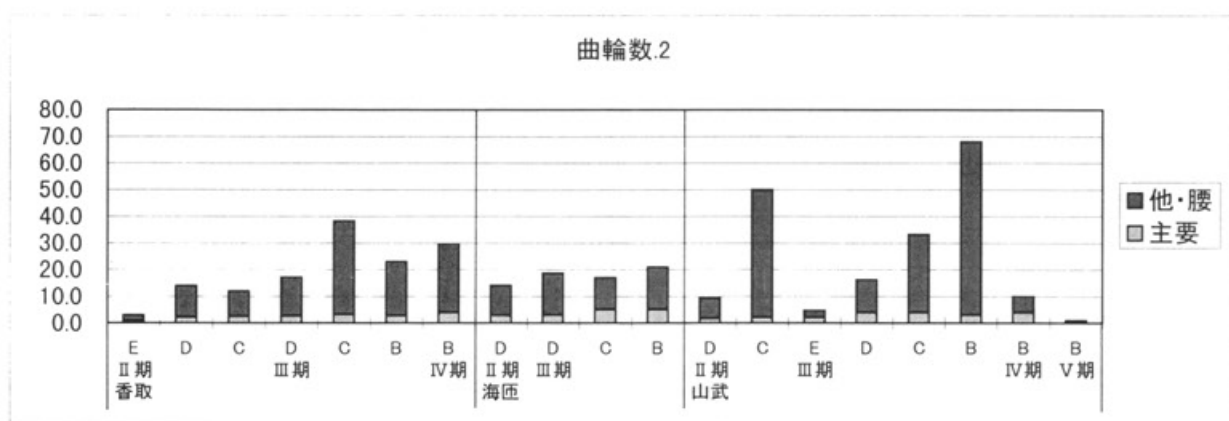
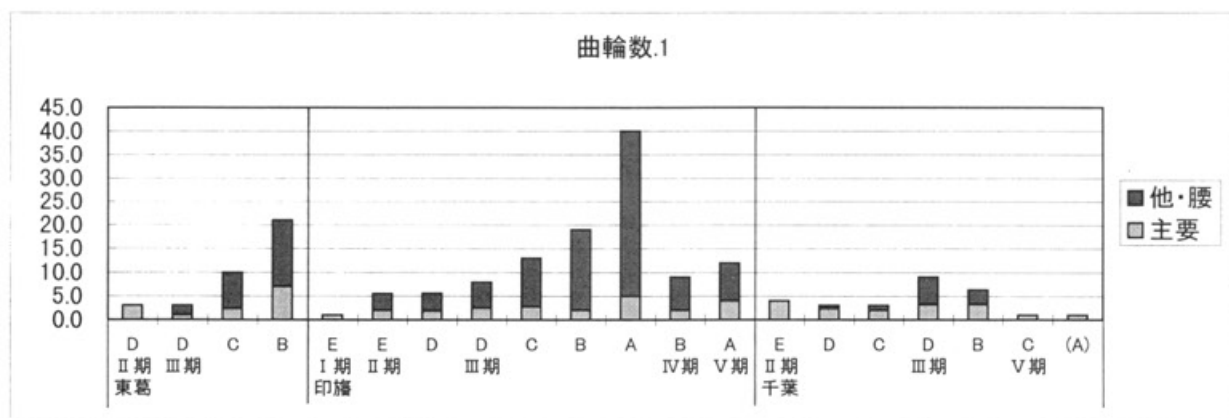
第5表 千葉県内中近世城館跡構造等 地域、時期、城・城主クラス別データ

時期：Ⅰ期：12c～15c前半、Ⅱ期：15c後半～16c初頭、Ⅲ期：16c前葉～末、Ⅳ期：16c末～17c初頭、Ⅴ期：17c前葉～19c

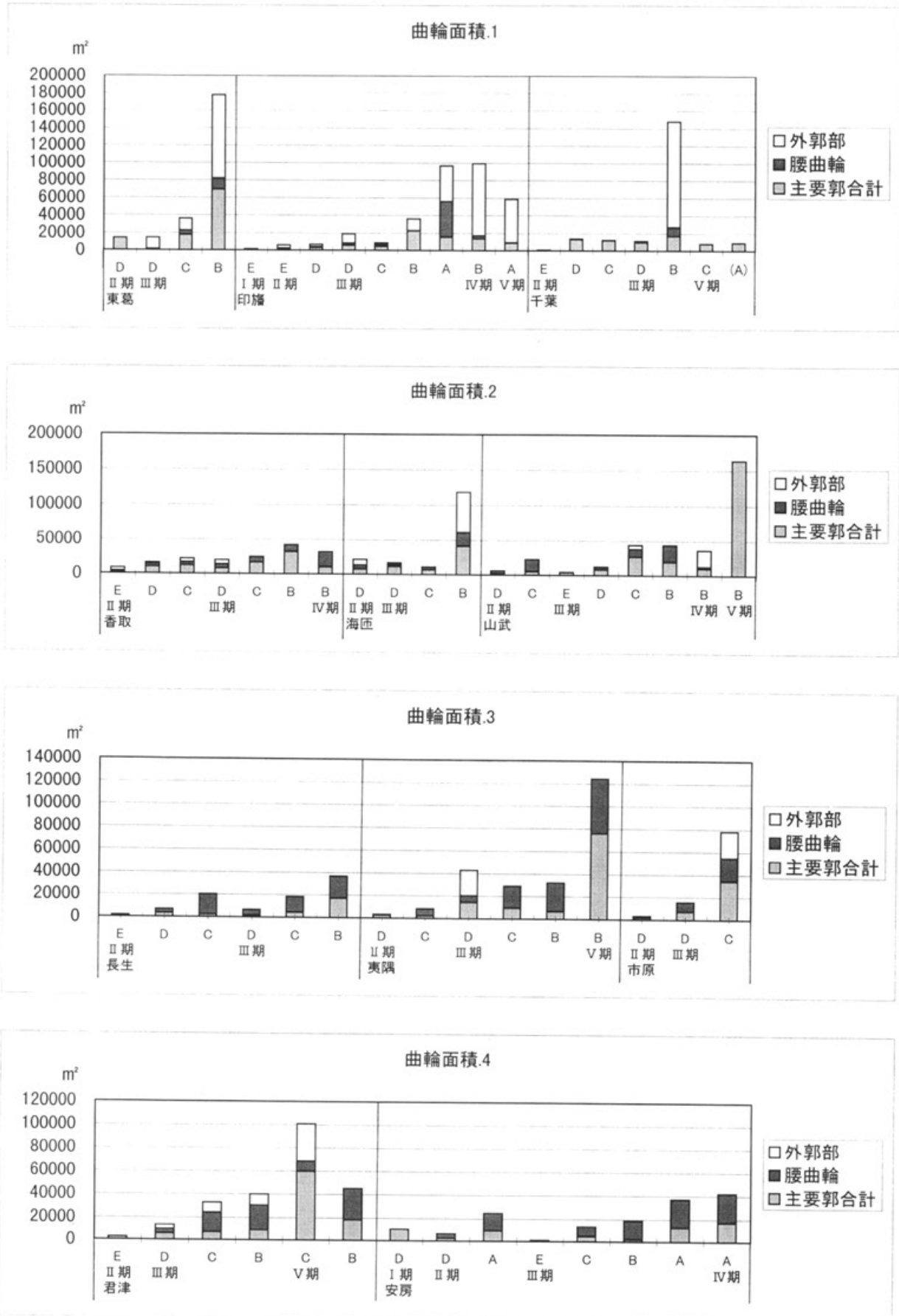
城・城主クラス：A：一国以上の領域を持つ戦国大名（千葉宗家・里見氏）の本城/B：一部～数郡の領域を持つ、国人領主層・戦国大名被官（原・大須賀・国分・酒井・正木・武田等）の本城＝戦国大名の支城/C：現市町村規模の領域を持つ、国人領主重臣層の本城/D：数村規模の領域を持つ在地領主層の城/E：一村程度の領域を持つ小領主層・上層農民層の城

地域	時期	城・城主クラス	立地						曲輪数			曲輪面積 (㎡)						空堀				土塁		構造					地名								
			地形区分			地形内位置			比高	主要	他・腰	合計	主郭	Ⅱ郭	Ⅲ郭	他の主要郭	主要郭面積合計	腰曲輪	外郭部	合計	横堀セツト数	堀切数	竪堀数	堀長さ	土塁長さ	土塁状尾根	折れ歪み数	櫓形虎口（明確）	櫓形虎口（不明確）	馬出し	堀之内	要害	城山	根小（古）屋	宿		
			丘陵	台地	低地	先端	内部・奥	先端から奥																													
東葛	Ⅱ期	D	0.0	1.0	0.0	0.0	1.0	0.0	1	3.0	0	3	3100	3470	7420	0	13990	0	0	13990	3.0	0.0	0.0	820	270	0	2.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	
		D	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	13	1.0	2	3	840	0	0	0	840	290	13090	14220	2.0	0.0	0.0	380	400	0	4.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0	0.0	
		C	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	14	2.3	8	10	1783	3140	3450	37700	17542	4793	13615	26873	1.6	0.5	0.6	307	456	0	2.5	0.2	0.2	0.0	0.0	0.2	0.3	0.0	0.0		
東葛	Ⅲ期	B	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	17	7.0	14	21	4690	8170	21900	49350	69075	12450	95800	177325	2.0	0.0	2.5	2600	795	0	9.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.0	
		E	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	29	1.0	0	1	1230	0	0	0	1230	0	0	1230	1.0	0.0	0.0	230	170	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
		E	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	19	2.0	4	6	1303	530	0	540	1703	380	3720	2918	0.5	0.0	1.0	133	81	33	1.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.0	0.0	0.0	
印旛	Ⅱ期	D	0.0	1.0	0.0	0.9	0.1	0.0	18	1.9	4	6	1989	1603	0	0	2904	1085	2640	3901	1.1	0.6	0.1	194	226	0	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	0.3	0.2	
		D	0.0	1.0	0.0	1.0	0.1	0.0	21	2.5	5	8	2424	2141	2867	2592	5560	2504	10783	10798	1.0	0.5	0.7	241	286	0	2.7	0.2	0.3	0.0	0.1	0.1	0.1	0.3	0.2		
	Ⅲ期	C	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	16	2.8	10	13	2060	2047	413	905	4358	2343	1925	7663	1.5	1.3	0.8	318	308	0	2.5	0.3	0.0	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
		B	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	24	2.0	17	19	19200	3300	0	0	22500	0	13500	36000	1.0	2.0	0.0	400	130	0	3.0	0.0	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0	1.0	0.0	0.0	
		A	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0	1.0	24	5.0	35	40	3480	6380	2170	3220	15250	40310	41000	96560	1.0	4.0	1.0	2480	1100	160	9.0	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0	0.0	0.0
	Ⅳ期	B	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0	1.0	22	2.0	7	9	5845	9420	6020	0	13570	3390	82265	99225	1.5	1.5	0.5	795	385	0	3.5	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0	0.0
		A	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0	1.0	28	4.0	8	12	1490	2270	3340	1560	8660	500	49280	58440	5.0	0.0	0.0	2310	3640	0	13.0	4.0	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0	1.0	0.0	0.0	
千葉	Ⅱ期	E	0.0	1.0	0.0	0.0	1.0	0.0	22	4.0	0	4	510	100	140	50	800	0	0	800	1.0	0.0	0.0	180	130	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
		D	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	16	2.3	1	3	5713	4025	2600	10630	12807	855	0	13377	0.7	1.3	1.7	207	403	0	1.0	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.3	0.3	
		C	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	18	2.0	1	3	11580	270	?	?	11850	460	0	12310	0.0	0.0	0.0	30	150	0	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	Ⅲ期	D	0.0	1.0	0.0	0.8	0.3	0.0	20	3.3	6	9	3226	5705	845	425	9566	1830	0	10939	1.5	1.0	0.8	383	415	0	2.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.0	0.5	0.5	
		B	0.0	1.0	0.0	0.3	0.3	0.3	18	3.3	3	6	5930	2875	3405	10330	17003	9790	121217	144747	1.7	1.7	0.3	850	490	0	4.3	1.0	0.3	1.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.3	0.3	
Ⅴ期	C	0.0	1.0	0.0	0.0	1.0	0.0	0	1.0	0	1	8000	0	0	0	8000	0	0	8000	1.0	0.0	0.0	470	310	0	5.0	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0	0.0	
	(A)	0.0	1.0	0.0	0.0	1.0	0.0	13	1.0	0	1	9020	0	0	0	9020	0	0	9020	1.0	0.0	0.0	450	420	0	2.0	2.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0		
香取	Ⅱ期	E	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	23	1.0	2	3	2013	0	0	0	2013	1477	4440	4970	0.3	0.0	0.3	67	97	7	0.0	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	
		D	0.2	0.9	0.0	1.0	0.1	0.0	25	2.1	12	14	4673	4709	2580	6215	9728	4476	1810	14747	0.7	0.6	0.8	228	202	0	0.7	0.1	0.3	0.0	0.1	0.2	0.1	0.0	0.1	0.0	
		C	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	24	2.5	10	12	1930	6855	0	0	12060	4570	5400	19330	0.0	1.5	0.5	140	185	10	1.5	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	Ⅲ期	D	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	26	2.6	15	17	2724	4694	2634	2046	7774	5565	6636	15892	0.8	1.3	1.6	275	250	11	2.1	0.1	0.2	0.2	0.0	0.2	0.2	0.6	0.2	0.6	0.2
		C	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	34	3.3	35	38	4470	8848	2863	1350	16518	7963	0	24480	1.3	3.0	3.8	309	370	23	3.3	0.0	0.5	0.3	0.0	0.0	0.5	0.5	0.5	0.5	
		B	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	31	2.8	20	23	6236	17514	7975	4685	32004	9998	0	42002	1.4	0.2	0.4	638	434	0	2.6	0.2	0.6	0.2	0.0	0.4	0.2	0.6	0.4	0.4	
Ⅳ期	B	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	24	4.0	26	30	3820	1430	2040	2910	10200	21820	0	32020	0.0	4.0	7.0	420	280	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
海匝	Ⅱ期	D	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	31	2.9	11	14	3717	2512	2090	4295	7255	5888	8550	14211	0.6	2.8	0.6	186	239	0	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.1	0.0	0.0	0.0	
		D	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	25	3.0	16	19	2050	2170	10760	590	11590	3057	2210	15383	0.7	2.3	3.3	253	153	0	0.7	0.7	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	
	Ⅲ期	C	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	22	5.0	12	17	2200	620	2550	1310	6680	4610	0	11290	1.0	3.0	0.0	110	280	0	1.0	1.0	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
		B	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0	1.0	27	5.0	16	21	5620	8800	3280	23380	41080	20000	57660	118740	3.0	2.0	2.0	710	330	0	3.0	0.0	0.0	0.0	1.0	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

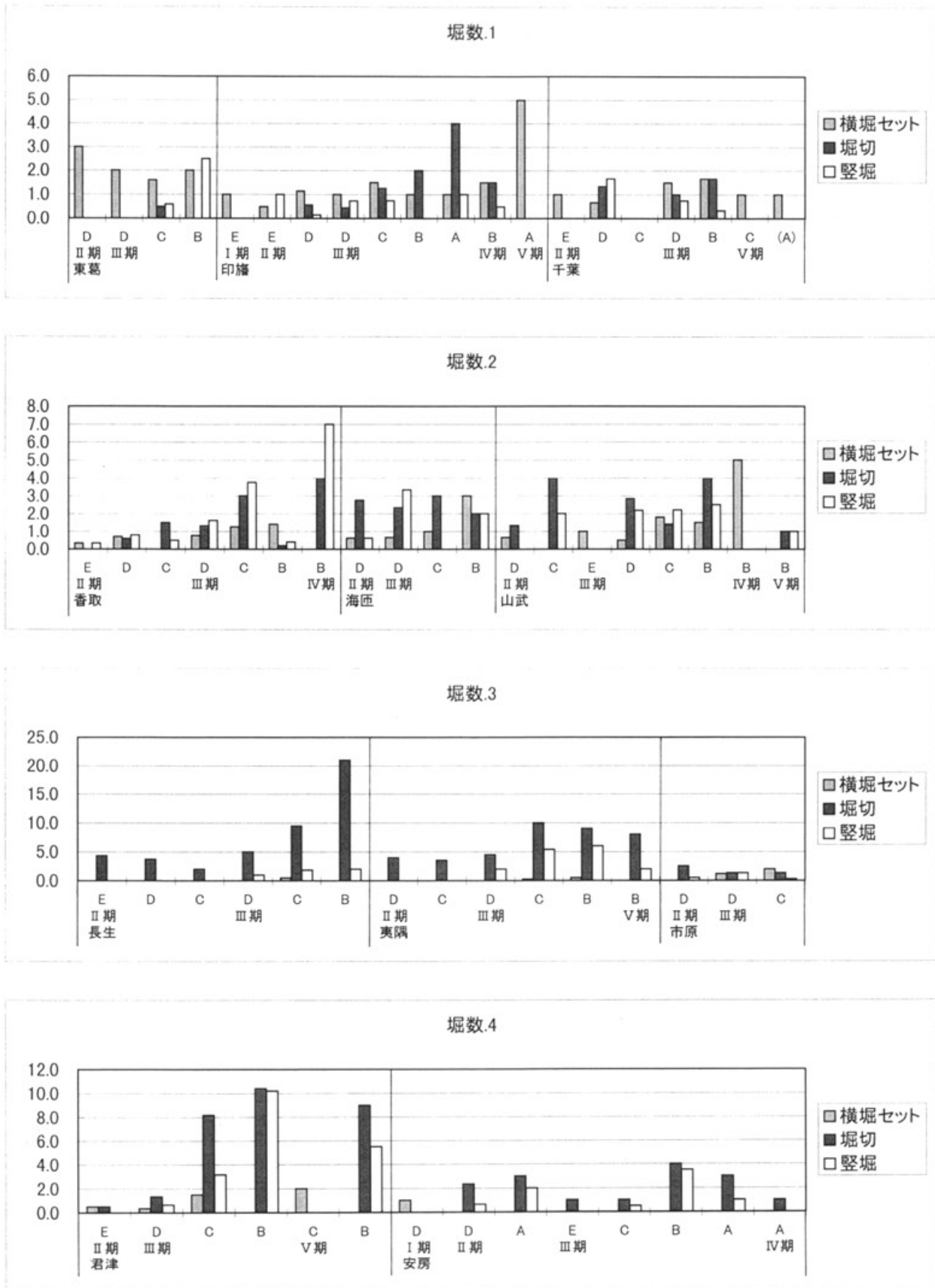
第3節 地域、時期、城・城主クラス別特色



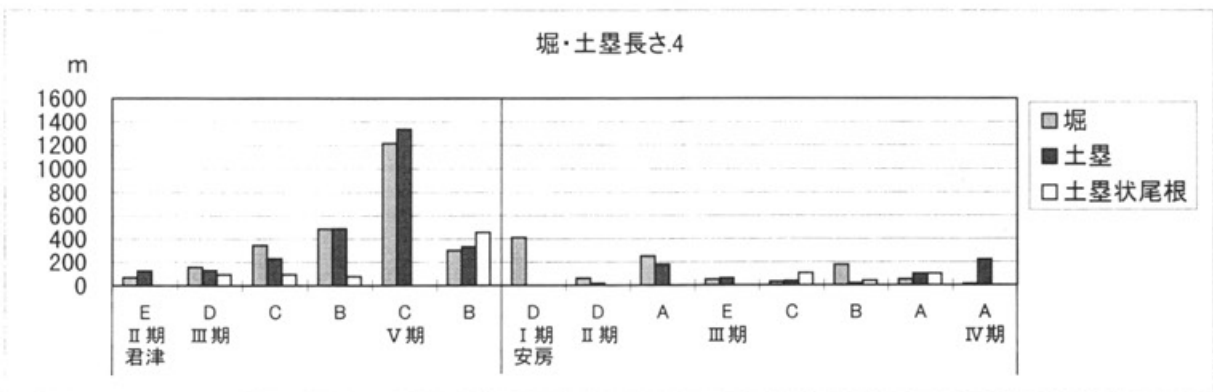
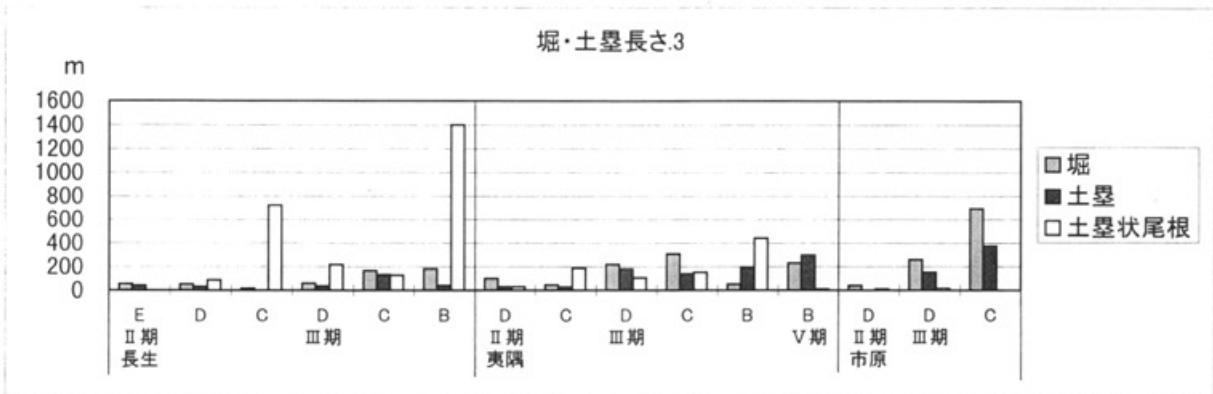
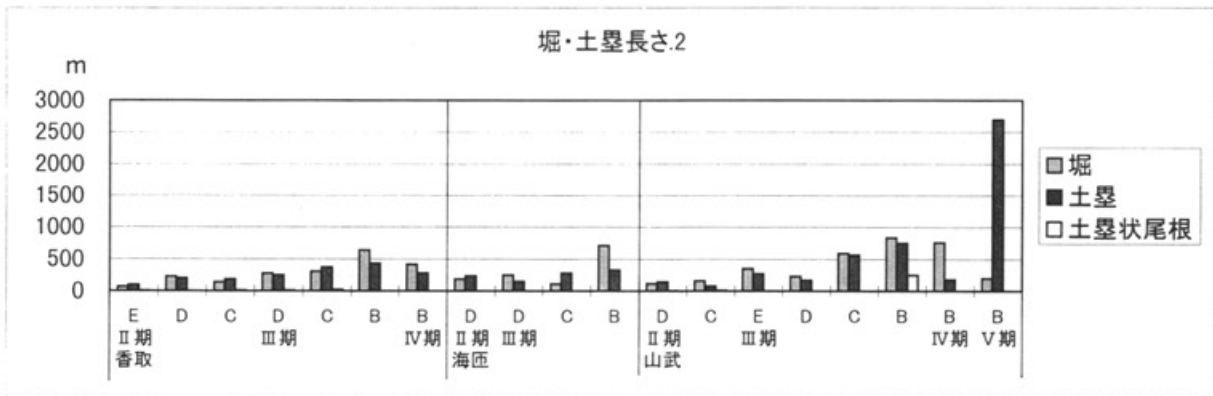
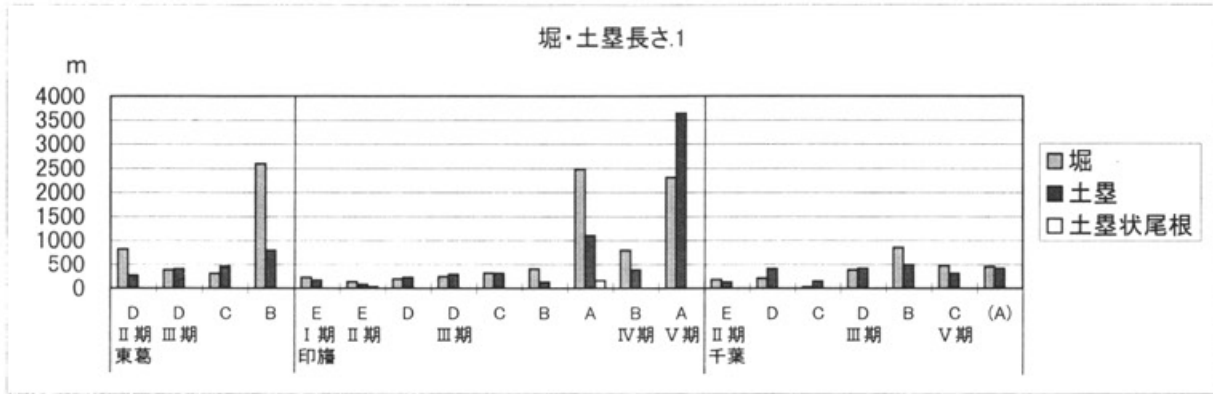
第168図 地域、時期、城・城主クラス別曲輪数



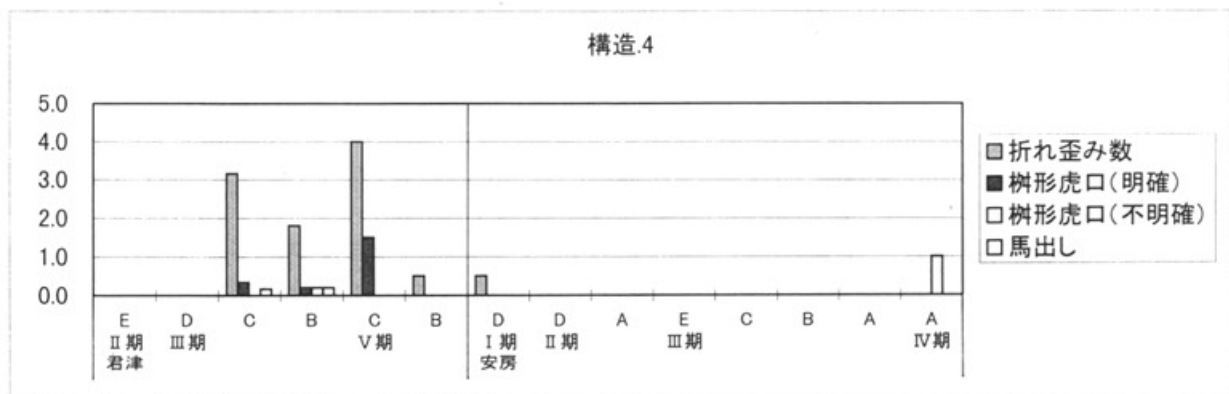
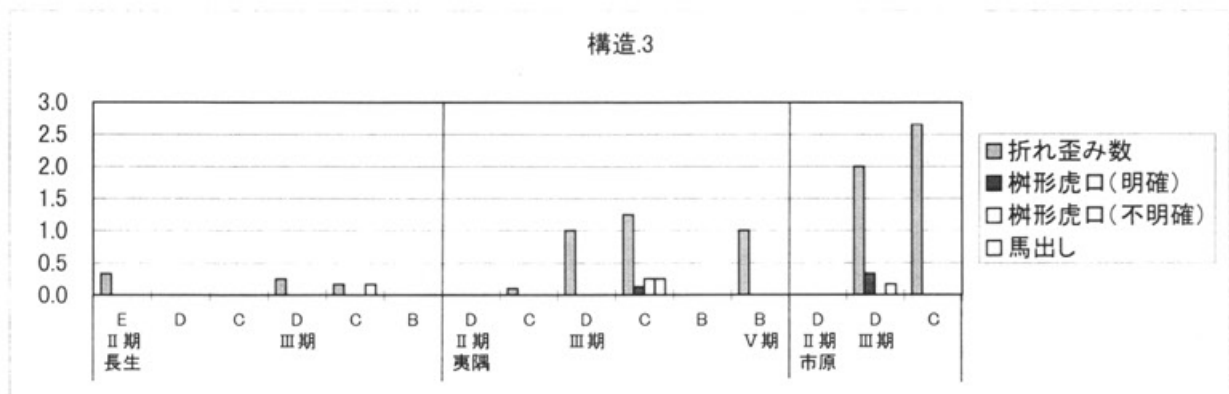
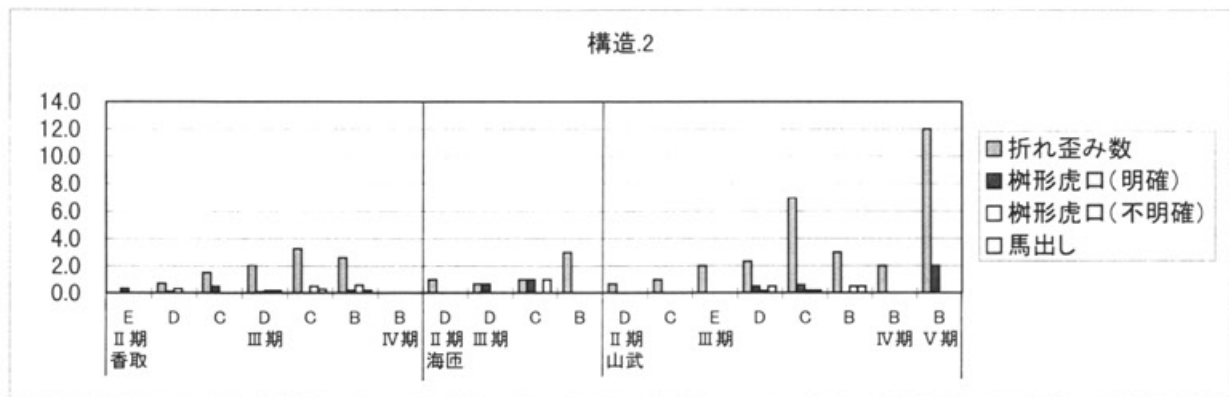
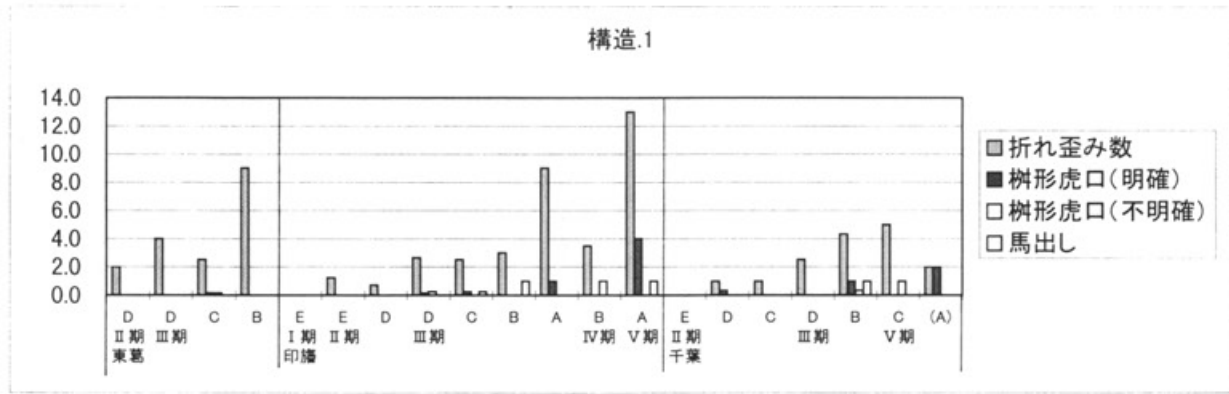
第169図 地域、時期、城・城主クラス別曲輪面積



第170図 地域、時期、城・城主クラス別堀数



第171図 地域、時期、城・城主クラス別堀・土塁長さ



第172図 地域、時期、城・城主クラス別特殊構造

(6) 地名

地名については、数値は有無（0または1）の平均なので、1は該当する時期・城主クラスの城館跡全てに存在するということである。

「掘之内」は、II期Dクラスに1.0と見えるのみである。

「要害」は、III期Cクラスに0.2と僅かに見えるのみである。

「城山」は、II期Dクラスに1.0とIII期Cクラスに0.3に見える。

「根小屋」は、II期にはなく、III期Dクラスに1.0、Bクラスに0.5見える。

「宿」は、データの城館跡内には存在しない。

データは少ないが、全体的には「掘之内」はII期に、「要害」・「城山」はIII期に、「根小屋」はIII期に多い傾向である。ただ、注意しなければならないのは、城館跡周辺の地名も含んでいること、I～V期の時期は機能した最終段階を示すため、機能した時期が長ければ古い時期の地名が残存していることもあることである。

2. 印旛地域（第20図～第43図）

(1) 曲輪数

主要郭数は、I期(1)→II期(2前後)→III期D・C・Bクラス(2～3)→III期Aクラス(5)と増加し、近世は、IV期(2)→V期(4)と徐々に増加する。

腰曲輪数は、東葛地域や千葉地域と比較すれば腰曲輪数は多い方で、I期Eクラス(小林城跡古段階)は存在せず、II期Eクラス(東作城跡他)・Dクラス(北ノ作遺跡古段階他 4)→III期Dクラス(小林城跡新段階・笠神城跡・駒井野城跡・鹿渡城跡他 5)→Cクラス(北ノ作遺跡新段階・古屋城跡・和良比堀込城跡・長勝寺館跡他 10)・Bクラス(向根古屋城跡 17)→Aクラス(本佐倉城跡 35)と増加し、近世は、IV期Bクラス(臼井城跡・岩富城跡)は7、V期Bクラス(佐倉城跡)は8と減少する。本佐倉城は下総国から上総国北部にかけて広がる千葉氏一族の本城であったのでIII期Aクラスとした。なお、III期の和良比堀込城跡は、16世紀中頃に里見氏が下総を攻撃した際の一時的な基地となった事実はあるが、本来はCクラスであろう。また、IV期の臼井城・岩富城のIII期段階は、前者は千葉氏一族内において本宗家をも凌駕する勢力を有し印旛・千葉地域を領域とした原氏の本城でBクラス、後者は原氏一族の有力支城でCクラスであったので、16世紀後半(III期後半)にはほぼ現状の曲輪配置や惣構構造(データには入れていない)ができていたと考えられる。

(2) 曲輪面積

I期(1,200㎡余り)→II期Eクラス(約3,000㎡)→Dクラス(4,000㎡弱)→III期Dクラス(約10,800㎡)と増加するが、III期Cクラスは7,700㎡弱とやや減少し、III期Bクラス(36,000㎡)→Aクラス(約96,600㎡)・IV期Bクラス(約99,200㎡)と大幅に増加し、V期(佐倉城跡)は60,000㎡と若干減少する。III期Aクラスの本佐倉城跡・IV期Bクラスの臼井城跡・岩富城跡は、データには城下町を含む惣構は入れていないが、外郭部は82,000㎡強と城郭本体だけでも巨大である。

(3) 堀の種類

横堀セット数は、I期～III期がほぼ1前後であるが、IV期Bクラスで1.5と微増し、V期Bクラス(佐倉城跡)では5と突出し、近世城郭の特徴といえる。堀切数は、I期とII期のEクラスには見られず、III期は

Dクラス(0.3)→Cクラス(1.5)と増加するが、Bクラスは1.0とやや減少し、Aクラスは4と増加し、IV期Bクラスは1.5と減少し、V期には存在しない。堅堀は、各期を通じて1以下と僅かに見られ、V期Aクラスには存在しない。

(4) 堀・土塁の長さ

堀の長さは、I期Eクラスは230mであるが、II期以降は、II期Eクラス(約130m)→Dクラス(200m弱)→III期Dクラス(約240m)→Cクラス(約320m)→Bクラス(400m)と徐々に増加し、Aクラスは約2,500mと突出する。近世は、IV期Bクラス(約800m)→V期Bクラス(2,300m余)の順に増加し、特にIV期・V期の長さは突出する。

土塁の長さは、I期Eクラスは170mであるが、II期Eクラス(約80m)→Dクラス(約230m)→III期Dクラス(290m弱)→Cクラス(約320m)と増加し、III期Bクラスは130mと減少するが、Aクラスは約2,500mと突出し、近世は、IV期Bクラス(約620m)→V期Bクラス(3,640m)の順に増加する。

堀・土塁共に、I・II期は短い、III期には若干長くなり、III期Aクラス以降は長大となる傾向である。IV期Bクラスの臼井城跡・岩富城跡は、本来III期には本佐倉城の有力支城であり、数値的にもIII期Aクラスの次に位置する。

(5) 特殊構造

折り歪みはI期にはなく、II期はEクラス・Dクラスで1.0前後であるが、III期はDクラス・Cクラス・Bクラスが3.0前後と増加し、Aクラスは9.0と突出する。近世は、IV期Bクラス(5.3)→V期Bクラス(13.0)と大幅に増加する。

明確な桁形虎口は、I期・II期にはなく、III期はDクラス・Cクラスに0.2~0.3と少なく、Bクラスは3.0と増加する。III期Aクラスは1.0、IV期Bクラスは0.3と減少するが、V期Bクラスは4.0と増加する。

不明確な桁形虎口もI期・II期にはなく、III期はDクラスに0.3、C・B・Aクラスにはなく、IV期Bクラスに1.0と僅かに増え、V期Bクラスはない。

馬出しについては、III期Cクラスは0.3であるが、Bクラスは1.0と増加し、Aクラス・IV期Bクラスにはなく、V期Bクラスは復活して1.0である。

以上の発展した構造については、I・II期には見られず、基本的にはIII期→IV期→V期と数も増加する傾向と言えるが、発展した虎口については、III・IV期には少なくV期には明確になる。III・IV期は、発掘調査で多く検出されるのではないかと考えられる。

(6) 地名

「堀之内」はIII期Dクラスに0.1と僅かに見えるのみである。

「要害」はII期Eクラスに0.5、III期Dクラスに0.1と若干見えるのみである。

「城山」はI期Dクラスに0.1、III期Dクラスに0.1と若干見えるのみである。

「根小屋」はI期~II期Eクラスまで見えず、II期Dクラスに0.1と僅かに存在し、III期はDクラス(0.3)→Bクラス(1.0)と、IV期Bクラス(0.3)→V期Bクラス(1.0)と増加する。II期Dクラスの「根小屋」は印西市竜崖城跡の例であり、構造・規模的にはII期に最終段階と考えたが、水上交通関連の要所としてIII期まで機能した可能性もあろう。

「宿」は、I期・II期・V期には見えず、III期Dクラスに0.2、IV期Bクラスに0.7と見える。

全体的には、II期は「要害」、III期は「根小屋」、IV期は「宿」がやや多く見られる傾向である。

3. 千葉地域 (第44図～第51図)

(1) 曲輪数

主要郭数は、II期はEクラス(南屋敷遺跡)が4と多いが、D・Cクラスは2前後、III期は3.3、V期は1.0である。ただ、南屋敷遺跡は基本的には単郭であり、内部が仕切られているので郭数が多いだけである。つまり、基本的にはII期からIII期へと増加すると言ってよいであろう。なお、V期は御茶屋御殿跡と森川陣屋跡で、単郭方形である。

腰曲輪数は、県内でも最も少ない地域であり、II期はEクラス(南屋敷遺跡)・Dクラス(米本城跡・城の腰城跡他)・Cクラス(亥鼻城跡)が1～2、III期Dクラス(城山城跡・中野城跡・多部田城跡他)が6、Bクラス(北・南生実城跡・高品城跡)が3、V期Cクラス(森川陣屋跡)・(A)クラス(御茶屋御殿跡)は単郭方形である。ただ、亥鼻城跡は一部の発掘調査による遺物時期によりII期としたが、周囲の開発による破壊が著しく、本来はより規模の大きなIII期の城郭の可能性も考えられる。

(2) 曲輪面積

II期はEクラス(800m²)→Dクラス・Cクラス(13,000m²前後)、III期はDクラス(11,000m²弱)→Bクラス(145,000m²)と増加し、III期Bクラスの外郭部は120,000m²と広大である。

(3) 堀の種類

横堀セット数は、II期が1.0以下であるが、III期に1.5～1.7と増え、V期は1.0と減少する。V期の減少は、御茶屋御殿と森川陣屋が単郭であるからである。堀切数は全体に少ないが、II期Dクラス(1.3)・III期Dクラス(1.0)・Bクラスで(1.7)で僅かに見られる。竪堀数は堀切数と同様、II期Dクラス(1.7)・III期Dクラス(0.8)・Bクラス(0.3)で僅かに見られる。

(4) 堀・土塁の長さ

堀の長さは、II期はEクラス(180m)→Dクラス(200m余)と増加するが、Cクラスは30mと減少する。III期はDクラス(約380m)→Bクラス(850m)と増加し、V期はCクラス(470m)・(A)クラス(450m)とほぼ一町四方の方形館跡の堀である。

土塁の長さは、II期Eクラス(130m)→Dクラス(約400m)と増加するが、Cクラスは150mと減少し、III期はDクラス(410m余)→Bクラス(500m弱)と増加し、V期はCクラス(300m余)→(A)クラス(420m)と増加する。

土塁状尾根は、当地域には存在しない。

(5) 特殊構造

折り歪みはII期はEクラスにはなく、Dクラス・Cクラスが1.0と出現し、III期はDクラス(2.5)→Bクラス(4.3)→V期Cクラス(5.0)と増加し、(A)クラス(御茶屋御殿)は2.0と減少する。

明確な桁形虎口は、II期Dクラスに0.3、III期Bクラスに1.0と僅かに存在するが、V期(A)クラスは2.0と増加する。

不明確な桁形虎口はII期にはなく、III期Bクラスに0.3、V期Cクラスに1.0と若干存在する。

馬出しは、II期にはなく、III期Bクラスにのみ1.0と若干存在する。

全体的には、発展した構造はII期は少ないが、III期はDクラス→Bクラスへ増加する。V期(A)クラスの御茶屋御殿跡は方形単郭ながら2か所の出入り口に明確な桁形虎口を形成している。

(6) 地名

「堀之内」・「要害」は、データの中では当地域には見られない。

「城山」はII期・V期には見られず、III期のDクラスで0.3と若干見られるのみである。

「根小屋」は、II期DクラスとIII期Bクラスに0.3と若干見られる。II期Dクラスは八千代市米本城跡の例であるが、破壊が著しく、残存した構造からはII期で機能を閉じたものと考えられるが、伝承は16世紀後半に廃城となっており、III期の可能性もあろう。

「宿」は、II期Dクラスに0.3、III期はDクラスに0.5、Bクラスに0.3、V期はCクラスに1.0と若干見られる。

全体的には、III期には「城山」・「根小屋」・「宿」地名が少しずつ見られる傾向である。

4. 香取地域（第52図～第75図）

(1) 曲輪数

（曲輪数）

主要郭数は、II期Eクラス（前林城跡・大根氏館跡他）が1であるが、II期Dクラス（大友城跡・鶴崎城跡他）・Cクラス（神崎城跡・名古屋城跡他）・III期Dクラス（久井崎城跡・武田砦跡・南敷城跡他）が2.5前後→III期Cクラス（馬洗城跡・籙木城跡・沼掛城跡他）・Bクラス（森山城跡・須賀山城跡・松子城跡・助崎城跡）が3前後→IV期Bクラス（大崎城跡）が4と増加する。ただ、大崎城跡は基本的にはIII期の構造と考えられる。

腰曲輪数は、II期はEクラス(2)→Dクラス(12)へ、III期Dクラス(15)→Cクラス・Bクラス(25～35)と増加し、IV期Bクラスが(26)である。

(2) 曲輪面積

II期はEクラス(5,000m²弱)→Dクラス(約14,750m²)→Cクラス(25,000m²弱)へ、III期はDクラス(約15,900m²)→Cクラス(25,000m²弱)→Bクラス(42,000m²)と増加する。外郭部は、II期Eクラス・Dクラスは3,000m²～4,000m²であるが、Cクラスは約5,400m²、III期Dクラスは、約6,600m²と増加し、Cクラス・Bクラス、IV期Bクラスはデータ上は0である。ただ台地下の裾部が概当する可能性が考えられる。

(3) 堀の種類

横堀セット数は、II期Eクラス・Dクラスに0.3～0.7と僅かに見られ、III期はDクラス(0.8)→Cクラス(1.3)→Bクラス(1.4)と僅かであるが増加傾向がある。IV期には見られない。

堀切数は、II期はEクラスになく、Dクラス(0.7)→Cクラス(1.5)と、III期はDクラス(1.3)→Cクラス(3.0)へと僅かに増え、Bクラスは0.2と減少するが、IV期Bクラスは4.0と増加する。

縦堀数は、II期はEクラス(0.3)→Dクラス(0.8)へ僅かながら増加するがCクラスは0.5と減少する。III期はDクラス(1.6)→Cクラス(3.8)と増加し、Bクラスは0.4と減少する。IV期Bクラスは7.0と増加する。

(4) 堀・土塁の長さ

堀の長さは、II期はEクラス(70m弱)→Dクラス(約230m)と増加し、Cクラスは140mと減少する。III期はDクラス(270m余)→Cクラス(約310m)→Bクラス(約640m)と増加するが、IV期Bクラスは420mと減少する。

土塁の長さは、II期Eクラス(100m弱)→Dクラス・Cクラス(約200m)→III期Dクラス(250m)→Cクラス(370m)→Bクラス(430m余)と増加し、IV期Bクラスは280mと減少する。

土塁状尾根は少ないが、II期Eクラスは7m、Dクラスにはなく、II期Cクラス・III期Dクラス(10m余)→III期Cクラス(23m)と増加し、以降はない。

(5) 特殊構造

折り歪みは、II期Eクラス・IV期Bクラスにはなく、II期Dクラス(0.7)→Cクラス(1.5)→III期Dクラス(2.1)→Cクラス・Bクラス(3.0前後)と増加する。

明確な桁形虎口は、II期各クラスに0.1~0.5、III期はDクラス・Bクラスに0.1~0.2存在する。

不明確な桁形虎口は、II期Eクラス・Cクラス・IV期Bクラスにはなく、II期Dクラス・III期Dクラスに0.2と僅かに存在し、III期Cクラス・Bクラスに0.5前後と若干見られる。

馬出しは、II期各クラス・IV期Bクラスにはなく、III期各クラスに0.2~0.3と若干見られる。

全体的には、発展した構造はII期は少ないが、III期はDクラス→Cクラス→Bクラスの順に増加する傾向と言える。

(6) 地名

「掘之内」はII期Dクラスに僅かに0.1と見られるのみである。

「要害」はII期はDクラスに0.2、III期はCクラスにはないが、Dクラス(0.2)→Bクラス(0.4)と若干増加する。IV期Bクラスにはない。

「城山」は、II期はEクラスに0.3、Dクラスに0.1と僅かに見られ、III期はDクラス(0.2)→Cクラス(0.5)と若干増えるが、Bクラスは0.2と減り、IV期Bクラスにはない。

「根小屋」はII期には見られず、III期の各クラスに0.5~0.6とやや多く、IV期Bクラスにはない。

「宿」は、II期はDクラスに0.1と僅かに見られ、III期はDクラス(0.2)→Cクラス・Bクラス(0.4~0.5)とやや増加し、IV期Bクラスにはない。

全体的には、「要害」・「城山」はII期からIII期にかけて増加し、「根小屋」はIII期にのみ、「宿」はIII期に城主クラスが高い程多く見られる傾向がある。

5. 海匠地域 (第76図~第83図)

(1) 曲輪数

主要郭数は、II期Dクラス(篠本城跡・見廣城跡他)(2.9)→III期Dクラス(大浦城跡・飯高城跡他)(3.0)→III期Cクラス(新城跡他)・Bクラス(中島城跡)(5.0)と増加する。

腰曲輪数は、II期Dクラス(11)→III期Dクラス(16)と増加し、III期Cクラスは(12)とやや減少するがBクラスは16と増加する。II期Dクラスについては、見廣城跡が22と多いが、台地先端部から延びる尾根(丘陵地形)に占地するためであろう。

(2) 曲輪面積

II期は14,200m²余、III期はDクラスが15,400m²弱、Cクラスが約11,300m²だが、Bクラス(中島城跡)は120,000m²弱と突出して広くなる。海匠地域では中島城跡が外郭部も58,000m²と際立って大規模であるが、他は小規模である。

(3) 堀の種類

横堀セット数は、II期Dクラス(0.6)→III期はDクラス・Cクラスが0.7~1.0であるが、Bクラスでは3.0と増加する。

堀切数は当地域は少なく、II期Dクラスが2.8、III期はDクラスが2.3、Cクラスが3.0、Bクラスが2.0と2～3前後であり、比較する程の差はない。

堅堀数は、II期Dクラスが0.6、III期はCクラスにはなく、Dクラス・Bクラスが2.0～3.3と若干存在する。

(4) 堀・土塁の長さ

堀の長さは、II期Dクラス(約190m)→III期Dクラス(250m余)と増加し、III期Cクラスは110mと減少するが、Bクラスは710mと突出する。

土塁の長さは、II期Dクラスは約240mであるが、III期は若干減り、Dクラス(150m)→Cクラス(280m)→Bクラス(330m)と増加する。

土塁状尾根は、当地域には存在しない。

(5) 特殊構造

折れ歪み数は、II期Dクラス・III期Dクラス・Cクラスは1.0と少ないすが、Bクラスでは3.0と増加する。

明確な桁形虎口はII期にはなく、III期Dクラス(0.7)→Cクラス(1.0)と増加し、Bクラスにはない。

不明確な桁形虎口は、データの中では当地域には存在しない。

馬出しは、III期Cクラスに1.0と見られるのみである。

全体的には、発展した構造は、II期は少ないがIII期に城主クラスが高い程増加する傾向である。

(6) 地名

「堀之内」は、III期Dクラスに0.3、Bクラスに1.0と見られるのみである。

「要害」は、II期Dクラス(0.1)→III期Dクラス(0.3)→Cクラス・Bクラス(1.0)と増加する。

「城山」は、II期Dクラスに0.1と篠本城跡のみに見られるのみである。

「根小屋」はII期にはなく、III期Dクラスに0.5と見られるのみである。

「宿」は、当地域のデータではない。

全体的には、「要害」が多く、「城山」・「宿」は少ないようである。また、「根小屋」はIII期のみに見られる。

6. 山武地域(第84図～第99図)

(1) 曲輪数

主要郭数は、II期が2前後、III期が2～4、IV期が4と増加し、V期(松尾城跡)は2と減少する。松尾城跡は、従来の日本城郭とは異質である洋式城郭をめざしており、計画段階であったため内部を仕切る施設も未完成であるためと言えよう。

腰曲輪数は、千葉県北部の中では数が多く、II期はDクラス(埴谷周路遺跡・岩山城跡 8)→Cクラス(田間城跡 48)、III期はEクラス(木原城跡 3)→Dクラス(山中城跡・大網城跡他 12)→Cクラス(山室城跡・飯櫃城跡・田向城跡・大台城跡・坂田城跡 29)→Bクラス(東金城跡・土気城跡 65)へ増加する。IV期はBクラス(成東城跡)が6である。しかし、II期の腰曲輪数は、Dクラスの埴谷周路遺跡は基本的には単郭であること、Cクラスの田間城跡は伝承では東金城に移る前の酒井氏の居城であり規模が大きいことは注意しなければならない。

(2) 曲輪面積

II期はDクラス(約4,650m²)→Cクラス(約22,600m²)へ、III期はEクラス(4,500m²弱)→Dクラス(12,300m²)

→Cクラス(40,000m²弱)→Bクラス(約44,000m²)と増加する。なお、V期(松尾城跡)の面積は164,000m²と突出するが、計画段階で内部の仕切りもなく、この中に外郭部も含むと考えられる。外郭部はⅢ期Cクラスで6,000m²だが、Ⅳ期Bクラスは約24,000m²と広大になる。

(3) 堀の種類

横堀セット数は、Ⅱ期はDクラスが0.7でCクラスにはなく、Ⅲ期はEクラスが1.0、Dクラスが0.5であるが、Cクラス・Bクラスは1.5~1.8と若干増加し、Ⅳ期Bクラスは5.0と突出する。なお、V期Bクラスにはない。

堀切数は、Ⅱ期はDクラス(1.3)→Cクラス(4.0)と増大し、Ⅲ期はEクラスになく、Dクラスは2.8、Cクラスは1.4であるが、Bクラスは4.0と増大し、Ⅳ期Bクラスにはなく、V期Bクラスには1.0と若干存在する。

竪堀数は、Ⅱ期はDクラスにはなく、Cクラスは2.0と若干存在する。Ⅲ期はEクラスにはなく、Dクラス・Cクラス(2.2)→Bクラス(2.5)とⅡ期よりもやや増え、Ⅳ期Bクラスにはなく、V期Bクラスは1.0と僅かに存在する。

以上の堀の種類の変遷は、例えば、東金城跡が丘陵に、土気城跡や成東城跡が台地に占地する様に、時期や城主クラスに関わらず、むしろ丘陵城郭と台地城郭が併存する地域のためと考えられる。

(4) 堀・土塁の長さ

堀の長さは、Ⅱ期Dクラスは110m余あるが、Cクラスは160mと増加し、Ⅲ期はEクラスが350mあるが、Dクラス(230m余)→Cクラス(約600m)→Bクラス(830m余)と増加し、Ⅳ期はBクラス(760m)であるが、V期Bクラスは200mと減少する。Ⅱ期Dクラスには基本的には単郭方形館の埴谷周路遺跡の例があることから堀の長さが多い。また、V期Bクラスの松尾城跡は計画段階でもあり、発掘調査で周囲に空堀が検出される可能性もある。

土塁の長さは、Ⅱ期はDクラス(150m弱)→Cクラス(80m)と減少し、Ⅲ期はEクラスが270mであるが、Dクラス(170m)→Cクラス(562m)→Bクラス(750m)と増加し、Ⅳ期はBクラスが180mと減少するが、V期Bクラスで2,700mと突出する。

土塁状尾根の長さは、Ⅱ期Dクラスが3m、Cクラスが10mと若干存在し、Ⅲ期以降はBクラスに250mと長く存在するのみである。

全体的には、Ⅱ期が短くⅢ期に城主クラスが高くなる程長くなる傾向があるが、ややばらつきがあるのは、③で触れた様に、時期や城主クラスに関わらず、むしろ丘陵城郭と台地城郭が併存する地域のためと考えられる。

(5) 特殊構造

折れ歪み数は、Ⅱ期Dクラス(0.7)→Cクラス(1.0)→Ⅲ期Eクラス(2.0)→Dクラス(2.3)と徐々に増加し、Ⅲ期Cクラスは7.0と突出するが、Ⅲ期Bクラス(3.0)→Ⅳ期Bクラス(2.0)と少なく、V期Bクラスで12.0と再び突出する。V期Bクラスの松尾城跡は洋式城郭なので、全体的には従来の日本城郭の系譜にはない構造である。

明確な桁形虎口は、Ⅱ期~Ⅲ期Eクラスにはなく、Ⅲ期Dクラス・Cクラスが0.5~0.6と若干存在するが、Ⅲ期Bクラス・Ⅳ期Bクラスにはなく、V期Bクラスで2.0と再登場する。V期Bクラスの松尾城跡の桁形虎口は日本の中近世城郭の流れを踏襲するものである。

不明確な桁形虎口は、やはりⅡ期~Ⅲ期Eクラスにはなく、Ⅲ期Dクラス・Cクラス(0.2)→Bクラス(0.5)

と増加するが、IV期・V期にはない。

馬出しは、同様にII期～III期Eクラスにはなく、III期の各クラスに0.2～0.5と若干存在する。

全体的には、発展した構造はII期は少ないが、III期はEクラス→Dクラス→Cクラスの順に増加し、V期の松尾城跡は全体は洋式ながらも、中近世日本城郭の系列である明確な枡形虎口を備えている。

(6) 地名

「堀之内」は、III期Bクラスに0.5と見られるのみである。

「要害」は、III期Dクラスに0.2と僅かに見られるのみである。

「城山」もII期にはなく、III期にDクラス(0.2)→Cクラス(0.4)と若干増えるが、BクラスとIV期・V期にはない。

「根小屋」も「城山」同様、II期にはなく、III期Dクラス(0.5)→Cクラス(0.6)と若干増加するが、BクラスとIV期・V期にはない。

「宿」はII期にはなく、III期Eクラス(1.0)→Dクラス(0.7)→Cクラス(0.4)と減少するが、Bクラスで1.0と若干増加する。IV期・V期にはない。III期の下級城主クラスに多く見られるのは、在地に直結した城館跡であるためであろうか。

全体的には、「要害」・「城山」・「根小屋」・「宿」はII期にはなく、III期に登場し、IV期・V期には見られなくなる傾向である。

7. 長生地域 (第100図～第114図)

(1) 曲輪数

主要郭数は、II期はEクラス(碓城跡・下芝原城跡他 1.3)→Dクラス(小林城跡・利根里城跡他 3.5)→Cクラス(石神城跡 9.0)へ、III期はDクラス(榎本城跡他 2.8)→Cクラス(真名城跡・本納城跡・勝見城跡・一宮城跡他 5.5)→Bクラス(長南城跡 8)へと増加する。

腰曲輪数は県内で最も多い地域であり、II期はEクラス(7)→Dクラス(18)→Cクラス(101)と増加し、III期はDクラス(19)→Cクラス(66)→Bクラス(122)と増加する。上位クラスは兎に角随所に平場を造成する傾向があり、II期のCクラスからIII期Bクラスへ受け継がれる様である。なお、一宮城跡は近世に加納藩陣屋が築かれたが、内部に築かれたので、全体の構造はIII期の遺構と考えられる。ただ、破壊が著しいので参考資料である。

(2) 曲輪面積

II期はEクラス(約1,160㎡)→Dクラス(7,000㎡弱)→Cクラス(20,300㎡)へ、III期はDクラス(6,600㎡余弱)→Cクラス(約18,400㎡)→Bクラス(約36,800㎡)と大幅に増加する。当地域の外郭部は、データ上はないが、斜面の腰曲輪の集合体として機能した可能性がある。ただ、どの部分が外郭部に相当するかの判断は難しい。

(3) 堀の種類

横堀セット数は、III期Cクラスに0.5と僅かに存在するのみである。

堀切数は、II期はEクラス・Dクラスが4前後、Cクラスは2.0であるが、III期はDクラス(5.0)→Cクラス(9.5)→Bクラス(21.0)と大幅に増加する。

竪堀はII期にはなく、III期Dクラス(1.0)→Cクラス(1.8)→Bクラス(2.0)と若干増加する。

横堀セット数は、県内では安房地域と並んで少なく、逆に掘切数は最も多い地域であるのは、馬の背状の尾根を有する丘陵地形であるからであろう。

(4) 堀・土塁の長さ

堀の長さは、II期はEクラス・Dクラス(50m余)であるが、Cクラスは15mと減少する。III期はDクラス(65m)→Cクラス(165m)→Bクラス(180m)と目立って増加する。

土塁の長さは、II期はEクラスが40mであるが、Dクラスは24mと減少し、Cクラスにはない。III期はDクラス(40m弱)→Cクラス(130m余)と増加するが、Bクラスは40mと減少する。

土塁状尾根は、II期はEクラスにはないが、Dクラス(90m弱)→Cクラス(720m余)と増加し、III期はDクラスが215mであるが、Cクラスは約130mと減少し、Bクラスで1,400mと突出する。

丘陵地帯のため、空堀・土塁は短い土塁状尾根が目立つ地域である。

(5) 特殊構造

折れ歪みは、II期EクラスとIII期Dクラスに0.3、Cクラスに0.2と若干存在するのみである。

明確な枡形虎口・不明確な枡形虎口共、当地域には見られない。

馬出しは、III期Cクラスに0.3と若干存在するのみである。

丘陵地帯のため、発展した構造である折れ歪み・枡形虎口・馬出しは、全体的に少ない傾向であるが、III期Cクラスに若干見られる。

(6) 地名

「掘之内」は、II期Eクラスに0.3、III期Dクラスに0.2と見られるのみである。

「要害」はII期にはなく、III期はDクラスに0.3と若干見られるが、Bクラスは1.0と増加する。

「城山」は、当地域のデータ内では見られない。

「根小屋」はII期にはなく、III期のDクラスに0.3、Cクラスに0.2と若干見られる。

「宿」もII期にはなく、III期にはDクラスに0.5、Cクラスに0.3と若干あるがBクラスは1.0と増加する。

全体的には、「城山」は見られず、「要害」・「根小屋」・「宿」はIII期に登場する。

8. 夷隅地域 (第115図～第127図)

(1) 曲輪数

主要郭数は、II期はDクラス(中滝城跡 3)→Cクラス(最明寺裏城跡 3.6)へ、III期はDクラス(大野城跡・矢竹城跡・鶴ヶ城跡他 4.0)→Cクラス(布施殿台城跡・城ヶ谷城跡・金山城跡・吉宇城跡・興津城跡 4.5)→Bクラス(万喜城跡・勝浦城跡 9.0)へと増加する。V期Bクラス(大多喜城跡)は9である。

腰曲輪数は、II期がDクラス(9)→Cクラス(26)へ、III期はDクラス(29)→Cクラス(64)→Bクラス(83)へ増加し、V期Bクラスは61である。

(2) 曲輪面積

II期Dクラス(約3,400㎡)→Cクラス(7,000㎡弱)→III期Dクラス(約28,500㎡)→Cクラス(32,800㎡余)の順に増加し、BクラスはCクラスとほぼ同規模の約32,300㎡、V期Bクラス(大多喜城跡)は約124,400㎡と突出して広大となる。III期Dクラスのみ外郭部が存在するが、鶴ヶ城跡の外郭部が広大なためである。大多喜城跡は台地裾部の広大な曲輪を外郭部と捉えた方がいいかもしれない。

(3) 堀の種類

横堀セット数は、II期からIII期Dクラスまでなく、III期はCクラス(0.3)→Bクラス(0.5)と少ないながらも若干増加し、IV期にはない。

堀切数は、II期は4.0前後であるが、III期はDクラス(4.5)→Cクラス・Bクラス9.0~10.0と増加し、IV期Bクラスはほぼ横這いで8.0である。

竪堀は、II期にはなく、III期Dクラス(2.0)→Cクラス(5.4)→Bクラス(6.0)と増加するが、V期Bクラスは2.0と減少する。

横堀が少なく堀切が多い傾向は長生地域と同様であるが、竪堀が多いのは夷隅地域の特徴と言えるであろう。

(4) 堀・土塁の長さ

堀の長さは、II期Dクラスは100mであるが、Cクラスは約50mと減少し、III期はDクラス(約220m)→Cクラス(約310m)と増加し、III期Bクラスは50mと減少するが、V期Bクラスは230mと再び増加する。III期Bクラスが短いのは万喜城跡や勝浦城跡で丘陵城郭のためであろう。

土塁の長さは、II期Dクラス・Cクラス(約30m)→III期Dクラス(約180m)と増加し、Cクラスで約140mと減少するが、以降III期Bクラス(195m)→V期Bクラス(300m)と増加する。

土塁状尾根の長さは、II期はDクラス(30m)→Cクラス(140m余)、III期はDクラス(100m余)→Cクラス(150m)→Bクラス(440m)と増加するがV期Bクラスは10mと減少する。

全体的には、堀・土塁はII期が短く、III期は城主クラスが高い程長くなり、V期は更に長くなる傾向があるが、III期Bクラスの短い堀等占地地形によりばらつきはある。

(5) 特殊構造

折れ歪みはII期にはCクラスで0.1と僅かに登場し、III期はDクラス(1.0)→Cクラス(1.3)と若干増え、BクラスにはないがV期Bクラスで1.0と再登場する。

明確な桁形虎口はII期にはなく、III期Cクラスに0.1と僅かに存在するのみである。

不明確な桁形虎口もII期にはなく、III期Cクラスに0.3と若干存在するのみである。

馬出しは当地域のデータでは存在しない。

全体的には、発展した構造はIII期Cクラスにやや多く見られるが、長生地域と同様、丘陵地形が多い地域なので、少ない傾向と言える。

(6) 地名

「堀之内」は、II期Cクラスにのみ1.0と見られる。

「要害」はII期にはなく、III期のDクラスに0.5、Cクラスに0.1のみである。

「城山」は、当地域のデータでは存在しない。

「根小屋」はII期にはなく、III期Dクラスに0.5、Cクラスに0.4のみである。

「宿」もII期にはなく、III期Bクラス(0.5)とV期Bクラス(1.0)のみである。

全体的には、「堀之内」はII期に、「要害」・「根小屋」はIII期に、「宿」はIII期以降に見える。

9. 市原地域 (第128図~第136図)

(1) 曲輪数

主要郭数は、II期Dクラス(平蔵城部田城跡・吉沢城跡他 3.5)→III期Dクラス(池和田城跡・真ヶ谷城

跡他 3.0) と若干減少するがⅢ期Cクラス(椎津城跡・佐是城跡・分目要害城跡他)は3.7とやや増加する。

腰曲輪数は、Ⅱ期(9)→Ⅲ期(25~27)と大幅に増加する。なお、Ⅲ期Cクラスの分目要害城跡は台地裾部から沖積地の主要部のみで、台地上の平場群も関連遺構とすると更に増えるものである。

(2) 曲輪面積

Ⅱ期は約3,400m²と極めて狭く、Ⅲ期はDクラス(約15,700m²)→Cクラス(約62,600m²)へ増加する。外郭部はⅡ期にはなく、Ⅲ期Cクラスの椎津城跡にのみ3,400m²存在する。

(3) 堀の種類

横堀セット数は、Ⅱ期Dクラスにはなく、Ⅲ期はDクラス(1.2)→Cクラス(2.0)と増加する。

堀切数は、Ⅱ期Dクラス(2.5)→Ⅲ期Dクラス・Cクラス(1.3)と減少する。

縦堀数は、Ⅱ期Dクラス(0.5)→Ⅲ期Dクラス(1.3)と増え、Ⅲ期Cクラスは0.3と減少する。

時期・城主クラスに関わらず、全体に堀切・縦堀は少ない地域であるが、堀切数がⅢ期に減少するのは、占地在丘陵から台地に移ったためであろう。

(4) 堀・土塁の長さ

堀の長さは、Ⅱ期Dクラス(40m)→Ⅲ期Dクラス(約260m)→Cクラス(690m)と大幅に増加する。

土塁の長さは、Ⅱ期Dクラスにはないが、Ⅲ期Dクラス(150m余)→Cクラス(373m)と増加する。

土塁状尾根の長さは、Ⅱ期Dクラス(10m)→Ⅲ期Dクラス(約25m)へ若干増加するがCクラスにはない。

全体的には、Ⅱ期からⅢ期へ長くなる傾向であるが、土塁状尾根がⅢ期Cクラスに見られないのは堀切・縦堀と同様、占地在台地上に移動したためであろう。

(5) 特殊構造

折れ歪みはⅡ期には存在せず、Ⅲ期はDクラス(2.0)→Cクラス(2.7)と若干増加する。

明確な柵形虎口もⅡ期には存在せず、Ⅲ期Dクラスにのみ0.3と若干存在する。

不明確な柵形虎口は、当地域のデータには見られない。

馬出しの数は、Ⅱ期には存在せず、Ⅲ期Dクラスにのみ0.2と僅かに存在する。

全体的には、発展した構造は、Ⅱ期は見られず、Ⅲ期に登場する。

(6) 地名

「掘之内」は、Ⅱ期Dクラスに1.0であるが、Ⅲ期Dクラスは0.3と減少し、Cクラスには見られない。

「要害」はⅡ期にはなく、Ⅲ期にDクラス(0.3)→Cクラス(0.7)と増加する。

「城山」は、Ⅱ期Dクラスに0.5見られるが、Ⅲ期のDクラス・Cクラスは0.2~0.3と減少する。

「根小屋」はⅡ期にはなく、Ⅲ期はDクラス(0.2)→Cクラス(0.3)と若干増加する。

「宿」は、Ⅱ期Dクラスに1.0と見られるが、Ⅲ期はDクラスに0.3のみである。

全体的には、「掘之内」・「城山」はⅡ期に、「要害」はⅢ期に、「根小屋」はⅢ期にやや多い傾向である。

10. 君津地域(第137図~第152図)

(1) 曲輪数

主要郭数は、Ⅱ期Eクラス(高谷館跡群 1.5)→Ⅲ期Dクラス(高谷掘之内城跡他 3.3)→Cクラス(笹子城跡・中尾城跡・天神山城跡他 4.8)→Bクラス(真里谷城跡・峰上城跡・小糸城跡・造海城跡 7.8)と増加し、Ⅴ期Cクラス(飯野陣屋跡・真武根陣屋跡)は3.5と少なく、Bクラス(佐貫城跡・久留里城跡)は

6.5である。

腰曲輪はII期がなく、III期はDクラス(7)→Cクラス(29)→Bクラス(118)と増加し、V期はCクラス(6)→Bクラス(74)へ増加する。ただ、V期のCクラスとBクラスは、陣屋と城郭という差があり、特に後者は既に16世紀後半には概ね現状となっていたことが想定され、注意しなければならない。

(2) 曲輪面積

II期Eクラス(2,500m²弱)→III期Dクラス(11,000m²弱)→Cクラス(約27,000m²)→Bクラス(32,000m²強)の順に増加する。V期はCクラスが96,600m²強、Bクラスは45,000m²強である。外郭部はIII期Dクラス(4,000m²強)→Cクラス(約8,700m²)→Bクラス(約9,600m²)→V期Cクラス(約32,500m²)と増大するが、V期Bクラスにはデータ上はない。V期Cクラスは飯野陣屋跡が60,000m²と広大である。

(3) 堀の種類

横堀セット数は、II期Eクラスは0.5であるが、III期はDクラス(0.3)→Cクラス(1.5)と増え、Bクラスにはなく、V期Cクラスに2.0と若干存在する。

堀切数は、II期Eクラス(0.5)→III期Dクラス(1.3)→Cクラス(8.2)→Bクラス(10.4)の順に増加し、V期はCクラスになくBクラスは9.0と増加する。

竪堀数は、II期にはなく、III期Dクラス(0.7)→Cクラス(3.2)→Bクラス(10.2)の順に大幅に増加し、V期はCクラスになく、Bクラスは5.5である。

当地域は特にIII期Cクラス・Bクラスに堀切と竪堀が目立ち、竪堀は県内でも最も多い地域である。また、V期Cクラスは台地と沖積地の陣屋跡のため、堀切や竪堀は存在しない。

(4) 堀・土塁の長さ

堀の長さは、II期Eクラス(70m)→III期Dクラス(157m)→Cクラス(343m)→Bクラス(486m)の順に長くなり、V期Cクラスは1,220m弱、Bクラスは300mである。

土塁の長さは、II期Eクラス・III期Dクラス(130m弱)→Cクラス(232m)→Bクラス(488m)の順に増加し、V期Cクラスは1,340m弱と突出し、Bクラスは330mである。

土塁状尾根はII期にはなく、III期Dクラス・Cクラスが90m余であるが、Bクラスが80m弱とやや減少し、V期はCクラスにはなく、Bクラスは455mと突出する。

全体的には、II期は短い、III期は堀・土塁共Dクラス→Cクラス→Bクラスの順に増加し、V期はBクラスがIII期Bクラスより若干短くなり、Cクラスは土塁状尾根以外は突出する。これは、Bクラスが久留里城跡・佐貫城跡という戦国末期の里見氏本城を利用した丘陵城郭で、Cクラスが台地や沖積地上の陣屋跡であるからと考えられる。

(5) 特殊構造

折れ歪みは、II期～III期Dクラスまで存在せず、III期はCクラス(3.2)→Bクラス(1.8)とやや減少し、V期はCクラスが4.0と多く、Bクラスは0.5と少ない。

明確な桁形虎口も、II期～III期Dクラスまで存在せず、III期Cクラス(0.3)→Bクラス(0.2)とやや減少し、V期はCクラスが1.5と多く、Bクラスにはない。

不明確な桁形虎口は、II期～III期CクラスとV期には存在せず、III期Bクラスにのみ0.2と僅かに存在する。

馬出しも、II期～III期DクラスとV期には存在せず、Cクラス・Bクラスにのみ0.2と僅かに存在する。

全体的には、発展した構造は、III期Cクラス・Bクラスに見られ、しかもCクラスの方が若干高い。これ

は、Cクラスに笹子城跡・中尾城跡等武田氏系列の城郭の例が多くあり、上位Bクラスの里見氏系城郭より構造的に技巧的な特徴を有していたことによるものと考えられる。

(6) 地名

「掘之内」は、当地域のデータには見られない。

「要害」は、II期Eクラス～III期Dクラスにはなく、III期Cクラス・Bクラスに0.3～0.4と若干見られるが、V期にはない。

「城山」はII期にはなく、III期Dクラスに0.3、Bクラスに0.2であるが、V期Bクラスは1.0と多く見られる。

「根小屋」はII期～III期Dクラスにはなく、III期Cクラスに0.5、Bクラスに0.2と見られる、V期にはない。

「宿」もII期～III期Dクラスにはなく、III期Cクラスに0.3、V期Cクラス・Bクラスに0.5と見られる。

V期Bクラスに「城山」が見られるのは、佐貫城跡・久留里城跡がIII期の城郭を再利用したためであり、全体的には、「要害」・「城山」・「根小屋」は、II期・III期の下位・V期には見られず、III期の上位城郭に多い傾向がある。

11. 安房地域 (第153図～第164図)

(1) 曲輪数

主要郭数は、I期Dクラス(下ノ坊館跡 1.0)→II期はDクラス(石堂城跡他 2.0)→Aクラス(稲村城跡 5.0)へ、III期はEクラス(山本城跡 1.0)→Cクラス(西郷氏館跡・山之城城跡 2.0)→Bクラス(宮本城跡・葛ヶ崎城跡・用田要害城跡他 2.5)→Aクラス(岡本城跡 5.0)へ増加し、IV期Aクラス(館山城跡)は4.0である。ただ、稲村城跡は更に広域に斜面の平場が広がり、後世の畑や植林によるものの可能性があるため城域が未確定であるが、里見氏の初期の城なので、主郭のある尾根を中心とする範囲が考えられる。

腰曲輪数は、I期がなく、II期はDクラス(9)→Aクラス(75)と増加し、III期はEクラス(2)→Cクラス(13)→Bクラス(116)と増加するが、Aクラスは58である。また、IV期のAクラスは75である。III期はAクラスとBクラスが逆転している様相であるが、Aクラスが里見氏本城、Bクラスが正木氏系で、腰曲輪を多く造成する正木氏系状郭の特徴が表れているのではないかと考えられる。

(2) 曲輪面積

I期は15,600㎡、II期はDクラス(8,700㎡弱)→Aクラス(34,000㎡強)へ、III期はEクラス(1,700㎡)→Cクラス(約15,500㎡)→Bクラス(約20,800㎡)→Aクラス(約50,000㎡)へと増加する。IV期は60,000㎡弱である。ただ、館山城跡は、築城途中で里見氏が転封されたと見られるので、城下町整備も含め全体は更に広大な面積となった可能性がある。外郭部はデータ上当地域にはないが、長生地域同様、腰曲輪の集合体として機能した可能性が考えられる。

(3) 堀の種類

横堀セット数は、I期Dクラスに1.0と存在する他にはない。

堀切数は、I期Dクラスにはなく、II期はDクラス(2.3)→Aクラス(3.0)、III期はEクラス・Cクラス(1.0)→Bクラス(4.0)と増えるが、Aクラスは3.0であり、IV期Aクラスは1.0と減少する。

竪堀数は、I期Dクラスにはなく、II期Dクラス(0.7)→Aクラス(2.0)とやや増え、III期はEクラスになく、Cクラス(0.5)→Bクラス(3.5)と増えるが、Aクラスは1.0と減少し、IV期Aクラスにはない。

当地域は、横堀は少ない。堀切・竪堀がIII期にはAクラスよりBクラスの方が多いが、曲輪数の項で触れた様に、Aクラスが里見氏系、Bクラスが正木氏系の差であろう。

(4) 堀・土塁の長さ

堀の長さは、I期Dクラスは410mと約1町四方の方形館跡であり、II期はDクラス(60m)→Aクラス(250m)と増加し、III期はEクラスが50mであるが、Cクラス(30m)→Bクラス(175m)と増加し、Aクラスは50mと減少する。IV期Aクラスは10mと短い。ただ、IV期Aクラスの館山城跡は周囲の沖積地に堀(水堀)が巡っていたことも推測され、築城途上であったことも考慮するとかなり長い堀となる。

土塁はI期Dクラスにはなく、II期Dクラス(17m)→Aクラス(180m)と大幅に増加する。III期はEクラス(60m)→Cクラス(35m)→Bクラス(25m)と減少し、III期Aクラス(100m)→IV期Aクラス(220m)と増加する。

土塁状尾根はI期・II期にはなく、III期のCクラスが105mと長く、Bクラス(約40m)→Aクラス(100m)と増加し、IV期Aクラスにはない。

全体的には、I期Dクラスは約1町四方の堀を巡らし土塁のない方形館跡である。堀・土塁共基本的にはII期→III期→IV期と長くなるが、土塁のIII期が城主クラスが上位程短くなるのは先述の様に正木氏系城郭と里見氏城郭の差であろうか。

(5) 特殊構造

折れ歪みはI期Dクラスに0.5と見られるのみである。

明確な柵形虎口は、当地域のデータ内には存在しない。

不明確な柵形虎口は、IV期Aクラスで1.0と存在するのみである。

馬出しも当地域のデータ内には存在しない。

全体的には、I期に若干折れ歪みが見られるが、明確な柵形虎口や馬出しはII期・III期にはなく、IV期に不明確な柵形虎口が登場する。里見氏系城郭の特徴であろうか。

(6) 地名

「掘之内」はI期・II期には見られず、III期Eクラスにのみ1.0と存在する。I期の沖積地の方形館跡にこの地名が残存しないのは通説的ではない。「掘之内」はむしろII期(15世紀後半)の遺構である可能性も考えられる。

「要害」はI期には見られず、II期Aクラスに1.0、III期Bクラスに0.5と見られ、IV期にはない。

「城山」もI期には見られず、II期Aクラスに1.0、III期Bクラスに1.0と見られ、IV期にはない。

「根小屋」は、I期・II期・III期には見られず、IV期Aクラスのみに1.0と見られる。このIV期Aクラスの館山城跡は16世紀末から築城が開始されており、III期後半に付いた名称と考えられる。

「宿」は、I期・II期には見られず、III期Aクラスに1.0と見られるのみである。

全体的には、「掘之内」はII期に、「要害」・「城山」はII期とIII期の上位クラスに、「根小屋」・「宿」はIII期に見られる。

第4節 まとめと課題

1. はじめに

本章では、第1節で千葉県内の中近世城館跡の計測したデータや概念図等を提示し、第2節で千葉県内の地域別特色を概括し、第3節で地域別に時期や城主クラスの差を検討した。なお、度々触れたが、各城館跡の時期や城・城主クラスについての判断はまず文献史料と発掘調査成果を元にしたが、資料のない多くの城館跡については規模・縄張り構造・地名等を総合して判断した。つまり、従来の文献史学や発掘調査の成果により中世城館の構造・機能の変化がおおよそ判明しており、中近世を通して歴史的背景の元に発展進化することを前提として仮定したものである。以下、第2節・第3節の検討成果をまとめてみたい。

2. 地域別特色

中近世城館は、まず、地域支配の拠点として集落や耕地との関係が重要であり、第2に特に戦国期には地形に即していかに有効な防御施設を造るかが課題となる筈である。その意味で、千葉県は北部が台地形と樹枝状谷津、南部が丘陵地形と比較的広大な沖積地で、中央部がその両者併存するという多様な地形があることから、地域別特色は地形の差が大きいと考えられる。第1節でデータを検討した結果を改めて簡単にまとめてみたい。なお、以下おおよそ東飾・印旛・千葉地域を北西部、香取・海匝・山武地域を北東部、長生・夷隅・市原地域を中央部、君津・安房地域を南部として述べたい。

- (1) **立地** 正に県内の地形に即した結果となった。つまり、基本的には、北部は台地上、南部は丘陵と沖積地、中央部は両者併存である。地形内の位置については、北部が先端部、南部が奥、中央部が両者併存である。比高については、北部が低く南部が高くなる。
- (2) **曲輪数** 中央部から南部が40～50と多く、北西部が10以下と少ない。これも基本的には地形によるものであるが、第4節で後述する領主の築城意識も現れていると考えられる。
- (3) **曲輪面積** 主郭部は北西部が広く中央部の長生地域が狭くなり、腰曲輪は中央部の面積が広い。また、外郭部は北西部が広大である。これらはやはり地形と領主の差であろう。ただし、丘陵地形の城郭でも腰曲輪の集合体として外郭部の機能を有した可能性は高い。
- (4) **空堀** 横堀が北西部に多く、次いで中央部に多い。堀切数は中央部に多く、北西部に少ない。縦堀は夷隅・君津地域が突出するが他にはあまり見られない。堀の長さは北西部が長く、次いで中央部、短いのは長生・安房地域である。これは基本的には地形に左右されている。
- (5) **土塁の長さ** 空堀と同様な傾向であり、両者共地形に左右されている。
- (6) **発展した構造とした折れ歪み・枡形虎口・馬出し** 北西部と山武地域に多く、長生・安房地域が少ない。これは、丘陵城郭が山自体が要害性が高いのに比べて、台地城館は比高がなく平らなために工夫が必要であったことが第1であるが、領主層の築城意識も現れていると考えられる。なお、留意しなければならない点として、第1節でも触れたが、折れ歪みについては、丘陵城郭は地形に沿って造成するのみでも平場（曲輪）が折れを有しその数は膨大になるので、基本的には空堀に伴うものとした結果、台地城館には多く丘陵城郭には少なくなってしまった。空堀は丘陵地形の様な比高のある急斜面のない台地に丘陵地形のような斜面を造り出す意味があると考えられる。空堀を伴わず意識的に折れを造成したものは丘陵地域でも夷隅・市原・君津地域に多い。つまり、丘陵城郭は未発展な構造なのではなく、それだけで要害性

は非常に高いのである。

(7) **地名** データ自体が全体構造がわかるものにとどめたために参考でしかない。「堀之内」は千葉・夷隅・君津地域に少ない。「要害」は北東部・中央部・南部に多い。「城山」はばらばらで、東飾・香取・山武・市原地域に多く、印旛・千葉・海匝・長生・夷隅地域に少ない。「根小屋」は香取・山武・夷隅地域に多く、長生・安房地域に少ない。「根小屋」がこの地域に少ないのは空堀・土塁の長さ・発展した構造等についても同様であり、比高があり馬の背状の尾根を有する地形と領主層の築城意識や権力構造の差と考えられる。

3. 領主別特色

(1) **千葉氏** 千葉東飾・千葉・印旛・香取・海匝地域は、平安時代末期以来千葉氏一族が樹枝状に解析された小谷津を生産基盤として各地域に広がった。この歴史的地理的背景が中世前期に台地上に多くの小規模方形館を形成したものと見られる。次いで戦国期前半（15世紀後半）には、千葉宗家・原氏・高城氏・大須賀氏・国分氏等が小規模在地領主層を取り込み領域を拡大しそれに応じた大規模城郭を構えるが、小規模在地領主層は未だ在地を基盤とした本城を構えていたことが推測される。ところが、戦国期後半（16世紀前葉以降）に広域領主層は小規模在地領主層の各城館を廃城または臨時的な砦と化し、16世紀半ば以降の後北条氏の進出によって技巧的な縄張りや城下町を形成した惣構構造の超大規模城郭（本佐倉城（第40図）・臼井城（第41図）・小金城（第19図）等）を造成したと考えられる。

(2) **井田・山室氏** 山武地域北部は、戦国期前半に内陸寄りの細長い谷津を生産基盤として、井田・山室氏が本拠とした（山室城（第92図）・田向城（第94図）等）が、戦国期後半には山室氏が飯櫃城（第95図）へ、井田氏が大台城（第93図）へと栗山川流域の長大な沖積地へ進出し、16世紀後半には井田氏が山室氏を含め周辺在地領主層を取り込み、東部の広大な沖積地を望み後北条氏の影響を受けた技巧的な坂田城（第96図・図版10-1）を築城する。田向城跡は発掘調査では16世紀後半の遺物はほとんど検出されなかったが、技巧的な縄張り構造は明らかに後北条氏の影響と考えられ、居住性は少ないが当該期の城郭であり、或いは井田氏の居城として天正18年に登場する文献上の「大台城」は、田向城に比べて技巧的ではないことから、実はこの田向城の可能性もあるのではないだろうか。

(3) **東金酒井氏** 山武地域南部は、戦国期、土気・東金両酒井氏が領域とした。東金酒井氏は九十九里平野を望む丘陵斜面全体に平場を造成する城郭を築城し、伝承では田間城（第86図）から東金城（第97図）へ移動したとのことであるが、いずれも丘陵の斜面に数多くの平場を造成する手法で、後者は規模が大幅に増大している。

(4) **土気酒井氏** 土気酒井氏は、戦国期前半に台地上に大規模城郭である土気城（第98図）を築城したが、戦国期後半の恐らく16世紀後半に後北条氏の影響で技巧的な縄なりに改造し、城域も大幅に拡大していると考えられる。

(5) **長南武田氏** 長生地域は、戦国期に長南武田氏が長南城（第114図）を本城に領域を形成したが、東金城同様、丘陵斜面全体に平場を造成する大規模城郭を築城した。戦国期前半から後半にかけては平場をさらに造成していき城域を拡大させていった過程と考えられる。大きな特徴として、尾根筋の脇に帯曲輪の様に平場を連続させることによって、尾根を土塁や通路として機能させる「土塁状尾根」が随所に見られる。

(6) **真里谷武田氏** 市原・君津地域は、戦国期前半に真里谷武田氏が真里谷城（第148図）を本城に領域を

拡大した。同地域は丘陵と台地の両者併存地域であり、比高のある丘陵ではあるが、頂部はある程度の平坦面を有する地形に占地し、技巧的かつ斜面に多くの平場を造成するという山武地域と長生地域の城郭を合わせたような大規模城郭を築城したと考えられる。一族内の内乱と里見・後北条氏の勢力争いのため、16世紀前葉には勢力を失うが、15世紀後半から16世紀前葉にかけては、城域を拡大させる過程であったと考えられる。

(7) **土岐氏** 夷隅地域北部は、戦国期に土岐氏が領域とした。丘陵と台地地形の併存する地域であるが、丘陵地形の万喜城(第126図)、台地地形の鶴か城(第119図)共に、斜面に数多くの平場を有し、尾根に平行した垂直の壁を造成する大規模城郭を築城するが、あまり技巧的ではないのが特徴といえる。

(8) **正木氏** 夷隅地域南部から安房地域北部は、戦国期正木氏が領域とした。城谷城(第120図)・金山城(第121図)のように頂部に若干の平坦部を有する丘陵地形を利用して技巧的な城郭を築城するが、斜面の平場は長生地域ほどの密度はない。正木氏は、戦国期後半には里見氏の重臣的位置にあるが、度々反乱を起こす等半独立的であった。安房地域にあっては主君である里見氏よりも技巧的な城郭を築城したと言えよう。

(9) **里見氏** 君津南部から安房地域にかけては、戦国期里見氏の領域であった。比高のある丘陵地形であるが、頂部は狭く、斜面に平場を造成し、大規模だが正木氏に比べあまり技巧的でない城郭を築城したと言える。本城を稲村城(第157図)→久留里城(第151図)→佐貫城(第152図)→岡本城(第163図)→館山城(第164図)と移したが、久留里城・佐貫城は当初は真里谷武田氏による築城と考えられ、戦国末期から近世にかけて築城された館山城は築城途中ながら主要部には明確な枳形虎口等が見られないことはそれを物語るものと考えられる。

4. 県内中近世城館の変遷

第3節では地域別に各項目ごとに時期、城・城主クラスの差をまとめたが、ここでは千葉県内中近世城館の時期的変遷を概略して本節のまとめとしたい。

I期(12世紀～15世紀前半・中世前期)

県北部から中央部の台地上では1辺40m～50mで低い土塁や浅い空堀を巡らせた小規模方形館(印西市小林城跡古段階・四街道市池ノ尻館跡(第21図)・同市東作城跡・千葉市南屋敷遺跡(第44図)・長南町埴谷周路遺跡(第85図)等)が、中央部から南部の沖積地では土塁を伴わず浅い空堀を巡らせた1辺100m余(1町)の方形館(鋸南町下ノ坊館跡(第153図)・鴨川市西郷氏館跡(第154図・図版12-2)等)が造られる。また、台地上では光町篠本城跡(第76図・図版9-1)・四街道市館ノ山遺跡(図版3)のように、沖積地では長南町岩川館跡(図版10-2)のように空堀で区画した屋敷地の集合体の例も存在する。これらの階層としては、有力名主層が考えられ、単郭構造のものは有力名主層でも土豪クラスといったより上位に位置するものと考えられる。なお、「掘之内」地名はこの段階のものより後出の場合が多いことが考えられる。

II期(15世紀後半～16世紀初頭・戦国期前半)

県北部から中央部の台地上では、小規模方形館を改造して周囲に郭や腰曲輪を配置した防御を意識した城郭が、中央部から南部の丘陵では頂上近くの斜面に平場を造成した小規模城郭(山城)が築かれる。前者の例としては、印西市小林城跡の発掘調査(第22図)で明らかとなった。これらは、名主層が武力を有

して1村から数村程度の領域を有した小規模在地領主層と考えられるが、国人領主層はそれらを支城としてさらに規模の大きな本城を築く。地名では、「要害」・「城山」が付けられることが多い。また、「宿」地名も登場し始める。

Ⅲ期（16世紀前葉～16世紀末・戦国期後半）

県内全体で、Ⅱ期よりも更に広大な領域を有する在地領主層（国人領主層）や戦国大名によって、Ⅱ期の小規模城郭が取捨選択されて、廃城されるか常駐しない純軍事的機能を有した砦的な城郭に変化すると考えられる。広域領主層は曲輪面積を増大させ、北部の台地城郭は外郭部を造成し、南部の丘陵城郭は平場を更に増加させる。北部では更に後北条氏の進出によって、直線的な折り歪み・明確な枡形虎口・馬出し等も多く出現し、縄張り構造的には技巧に優れた城郭が出現し、本佐倉城（第40図）・臼井城（第41図）・生実城（第50図）・小金城（第19図）のように城下町を取り込んだ惣構構造も登場する。地名では、「要害」・「城山」に加えて、山下に「根小（古）屋」地名が付けられるものが多い。「根小屋」は、城主・家臣団の居住区と考えられてきたが、発掘調査によって山上の曲輪にも生活痕跡が見られることは、或いは「根」は「寝」の意味ではなく、単に山の麓の意味で、この時期家臣の城下集住が見られる証はないかと推測され、改めてその性格を検討しなければならないだろう。

Ⅳ期・Ⅴ期（16世紀末～19世紀・近世）

天正18年（1590）、小田原城をはじめ後北条領国の諸城が落城し、房総にも安房の里見氏を除き徳川家臣団が入部する。その後、江戸に近いために60程の多くの藩と旗本の知行地が入り組む形となっていくが、明治時代初めの廃藩置県まで廃藩・改易が繰り返された。城持ち大名の多くはⅢ期の主要城郭を再利用しているが、藩のクラスにより規模は異なる。矢作城（第75図）は、Ⅲ期Bクラスの城であったが鳥居元忠が4万石で入部し、水戸の佐竹氏対策と考えられる。佐貫城（第152図）は内藤家長が2万石、久留里城（第151図）には大須賀忠政が3万石でⅢ期のAクラス（里見氏）を引き継ぎ、大多喜城（第127図）はⅢ期にはBクラスと推定されるが本多忠勝が増築して10万石の藩となる。これらは里見氏を抑える役目であったと推測されている。また、水上交通の要所として関宿城を居城とした関宿藩（松平氏2万石）の例もある。なお、城を持たずに陣屋を構えた藩も多い（高岡・小見川・多古・生実・鶴牧・飯野・一宮・加知山等）。生実藩の森川氏が構えた森川陣屋は、生実城の一部を利用している（第50図）が、深い堀をわざわざ埋めて浅い堀を巡らした方形館状の構造となる。一方、新規に造られた飯野陣屋（第150図）は大規模であり折り歪みを多く使い虎口に明確な枡形を造る等発展した構造となるが、沖積地に立地するため防御的には弱くなる。これらは城持ち大名の城とは明確に差がつけられた。全国的には国主（国持）・準国主・城主・城主格・無城（陣屋）のランクがあった。

近世城郭の典型としては、17世紀初めに築城された佐倉城（第43図）があげられる。発掘調査の結果、15世紀代の中世の堀の一部が検出され、直下には「根古屋」地名も残るので、Ⅲ期の城郭を大幅に改造したものであろう。周囲の低地に水堀を巡らせ、折り歪みや枡形虎口や馬出しを多用し、天守閣を有し、家臣団屋敷地や城下町を備える。しかし、建物の礎石では石を使用するが、一般の近世城郭の要素である石垣が存在しないことは、千葉県北部が石を産出しない地域であることに起因すると考えられる。

また、天守閣を有し、城下町を形成する近世城郭ではあるが、中央部から南部の佐貫城・久留里城・大多喜城等は、中世段階同様に技巧的な構造とは言えない。これは、丘陵地形によるものであろう。結局、中世段階でも地形に左右された構造であった証となるものと考えられる。

特異な例として、御茶屋御殿（第51図）と松尾城（第99図）があげられる。前者は、徳川将軍の東金方面鷹狩りのために造られた御成街道沿いの御茶屋御殿がある。方形単郭ながら明確な枡形虎口を有するもので、中世城館の発展形が17世紀の館に反映されたものであろう。松尾城は明治初年に稜堡式の洋式城郭をめざして築城が進められたが、築城途中で廃藩置県を迎え廃城となった。五稜郭に類する鋭角の突出部を随所に有する全体構造は従来の日本城郭にはないものであるが、虎口は中近世の日本城郭の系譜を正當に受け継ぐ明確な枡形虎口を用いている。この松尾城をもって千葉県いや日本の城郭は終焉を迎えたと言えよう。

以上、要約すると次のとおりである。中世城郭は、単郭構造の段階から時代と領主規模の大きさに比例して複郭化と腰曲輪の造成が行われ、構造も技巧的となる。やがて、取捨選択されて、「根小屋」（城下の家臣団居住区）を有する規模の大きな城や、外郭部・城下町を有する惣構構造の大規模城郭に取り込まれるものもある。近世では、戦国期の取捨選択が「一国一城令」の廃城へつながり、さらに格式・家格の差が明確化されていく。しかし、以上は単一線上の発展ではなく、各地域で地形に即した構造を有した点が重要であろう。

なお、近世城郭が石垣や鉄砲狭間を設けたのは小銃対策であり、幕末に登場した稜堡式城郭の鋭角の突出部は大砲射撃を目的としたものであり、近現代の「城郭」は、戦車砲・航空機爆撃・ミサイル等から防衛するために大砲・ミサイル・対空火砲等を備えてコンクリートや鉄板で造られる「要塞」へと続く。近代、房総沿岸に設置された砲台は要塞の最初の形態であろう。移動式城郭（要塞）とでも形容できるのは、戦艦・航空母艦であろう。これらは「城郭」が、武器の進化によって変化したことを物語るものであろう。

5. 課題

第3節では地域毎に各城館の時期・城及び城主クラスを仮定してその変化を追ったが、地形や領主の築城思想に左右されながらも、県内全体では、基本的にはほぼ同様な変遷（発展過程）が確認された。つまり、仮定はおおよそ証明されたということと考えられる。ただ、領域範囲で推定した城主クラスの差のみでは判断できないものとして、特に16世紀後半の臨時的な城館があることを考慮しなければならないだろう。計測データについては、土塁・空堀は破壊や埋没があること、斜面の腰曲輪も埋もれたものがあると推測されること等は考慮しなければならない。さらに、紙数の都合上、計測データの項目の内、本章で記述していないデータも多い。主郭・II郭・III郭と仮定して計測した結果は今後の検討課題であり、その面積比の比較は新たな知見を得るものであろう。また、本章は、全体構造が判明する城館に限ったので、地名については、城域あるいは周辺のどの部分に位置するかを含めて、今後改めて個々の検討が必要であろう。

本章は、千葉県内の中近世城館についての地域や領主の違いに伴う規模・構造等の変遷をたどることを目的として、概念図や測量図が存在する200以上の城館跡について、従来試みられなかった曲輪等の面積や土塁・空堀等の長さを計測したデータを作成し、時期、城・城主クラス等を仮定したが、近年中世城館の変遷が明らかにされつつある中で、いくつかの新知見を交えながらも、基本的には数値化することによってそれを証明したものではないかと考えられる。

第2章 検出遺構について

第1節 障子堀の分類と編年

井上哲朗

1. はじめに

近年は、全国的に中近世城館跡の発掘調査が増加し、堀底に地山を掘り残すことによって仕切りを造る構造の堀が多く検出されてきた。千葉県内でも松戸市小金城跡・多古町多古城跡等は新聞記事にも取り上げられ、その他の城館跡でも数多く検出されているが、その名称は「障子堀」・「堀内障壁」・「畝堀」等と呼ばれ、特に統一性はない。城郭研究者としては、「障子」を明障子の棧の形態に由来するものとして、堀内部に仕切りが格子状に広がるものを「障子堀」、一つ一つが直線的につながる形態を「畝堀」と捉える傾向がある。井上は、1998年『第15回全国城郭研究者セミナー』で「堀内障壁の分類と編年試案—千葉県内の事例を中心として—」と題した報告を行ったが、その際のレジメ作成時では、私自身も「障子」を明障子の格子状の棧に由来するものと考えていた。しかし、『同セミナー』における小笠原清氏（小田原城郭研究会）の報告によって、そもそも「障子」は部屋の内外を仕切る障屏具の一種で、襖障子、唐障子、衝立障子、通障子、明障子、硝子障子等の種類があり、江戸時代の軍学で使用された「障子堀」・「堀障子」の用語も堀内の仕切りを示す言葉であること等が指摘された。よって、本節は、井上報告及びそれをまとめた「同題」（『中世城郭研究』第13号（1999年）所収^{②-377}）の内容を、小笠原氏の報告を踏まえた上で「堀内障壁」を有する堀を「障子堀」として捉え、更に内容を改めて検討したものである。

なお、「障子堀」は、山中城跡で検出された空堀がその代表的な例として取り上げられるため、後北条氏の下総支配に関連づけて考察されることが多い。しかし、近年は、後北条氏の影響を受けた16世紀後半の下総地域でも、出土遺物が16世紀前葉以前の城館跡で「障子堀」が検出される例が増えたことにより、疑問視されてきたといえよう。「障子堀」は、千葉県内のみならず、全国的にも多くの形態が検出されているので、これらの機能や系譜を整理するために、まず、小笠原氏の報告に従い江戸時代の軍学に見える「障子堀」の用語と当時の研究を紹介し、それを踏まえた上で各城館跡検出の遺構について分類を行い、最後にその系譜や年代等について考えてみたい。

2. 用語・機能について

まず、江戸時代の軍学で使用された「障子堀」について、小笠原氏の報告で紹介された史料を提示して考えてみたい。

「障子堀」・「堀障子」を記載する主な軍学書を年代順に並べると、山鹿素行（山鹿流）『兵法神武雄備集』（寛永19年（1642））、北条氏長（北条流）『兵法雄鑑』（正保2年（1645））、北条氏長（北条流）『士鑑用法』（正保3年（1646））、山鹿素行『武教全書』（明暦2年（1656））、有澤武貞（有澤流）『兵法拔書疋夫之抄私解』（宝永4年（1707））、津軽耕道（山鹿流）『武教全書諸説詳論家伝秘抄』（正徳3年（1713））、広瀬寛常（北条流）『城制図解』（享保20年（1735））、窪田清音（山鹿流）『武教全書 弘化本』（弘化4年（1845））、同氏『武教全書詳解』（文久元年（1861））、同氏『武教全書解』（幕末）等である。この三流派は、武田家の『甲陽軍

鑑』（17世紀初頭高坂昌信著）で知られる甲州流（武田流）を祖としているが、同書や関連史料には見えない。つまり、史料上は、17世紀中葉から登場したものと言える。以上の中からの抜粋を紹介する。

・有澤武貞『兵法拔書 夫之抄私解』（1707年）

「障子堀

カラホリノ内ニ、少キ土居ニテモ柵ニテモ付置、敵堀ノ内迄入テモ、障子ニ障ル所ヲ塀櫓等ヨリ打也。又平城ノ水堀ニテモ、タテ横ニ罅ヲ残シヲケハ、水モ一度ニ不引シテ能也。」

・津軽耕道『武教全書諸説詳論家伝秘抄』（1713年）

「○ 山の見立武功の事

一 地形水引の考 付水底障子の事

山城には地に高下ある故、敵より低き方を見切りて堀の水を堀切りて落すことあり。故に切落さるる処なき様に水を用ふべし。或は又其の方には矢倉を上げ、番兵を置きて堅固にすべし。尤も要害に受たる堀にても池にても、水底に障子をすべし。其の利多し。

○ 堀之事

一 堀障子の事

私に曰はく、広き堀には堀の底に堀様あり。堀様と言うは、水下にみえざるやうに幾筋も十文字に畦障子切かきを仕り置き、広さ或は一尺、或は二尺ばかりにも、乃至それより細くとも、縦横に仕置くべし。其の徳第一、忍の者付くことなり悪し。云心は、水底に処々に障りある故、自由に水中を往来することなからざるが故也。第二、敵堀を乗るとも、水下の障りに隔てられ、士卒連って越悪し。第三に縦横に障りあれば、水底自ら滞って深泥、深田の如く溜るもの也。第四に、処に由って要害を此上に結ぶこと之れあり。第五に、内より秘に外へ人を出すには、又便なることもあり。

又言はく、障子といふは堀様の仕方を云う也。障子なければ水一度に出でて堀悪し、故に請取々々の場所を定めて、その間々に堀掛けをするを障子と云ふ。堀出来て、水底、右の障子を其の儘置く時は、人馬足たまりの害となる也。

又言はく、山城の堀障子と云うは、地形不直なるゆえ、水持ちの為に横に堤の如く筋を立置くこれも障子と言う。平城にもあるべし。但し是れは下の箇条に出でたり。

一 地形水引の処ほりやうの事

地形水引の処とは、一方下りなる地を云ふ。此処を常の如く掘れば、水低き方へ落ちて持悪し。故に処々に堤の如く横に水を溜め切って、山城の堀障子の如くする也。」

・窪田清音『武教全書』（弘化本）（1845年）

「ほりを掘る時、縦横にうねを立て掘るを軍詞に堀障子と言う。」

・窪田清音『武教全書詳解』（1861年）

「堀ノ内ニ横ニウネヲ立テホル其ウネヲ堀障子ト言。」

「水障子ト言ハ、水底ヲ仕切土居ヲ中ニ築キテ仕切ヲナスコト也。其土居ヲ障子ト号ス。」

「水仕切ハ堀障子ノ大ヒナル高キモノヲ、堀ノ内ニ処々残シ置、是ニテ水ヲ、タタヘ留メオクノ設ケ也」

「堀ヲ一段々々ニ畦ヲ立テ、水ヲタタヘ置ク仕方也、是ヲ場ニ依リテハ柵ト云フ。山ノ中腹へ幾段ニモ柵ノ様ナル物ヲ作りテ水ヲ集メ、溜オク仕方也」

「小口ヲ土橋ニシテ水ヲタモタス工夫有ベシ」

・窪田清音『武教全書解』（幕末）

「堀ノ水下土井ノ如クニ縦横ニ掘残ス、尤水下三四尺斗ニ有常ノ堀ニハ無之。」

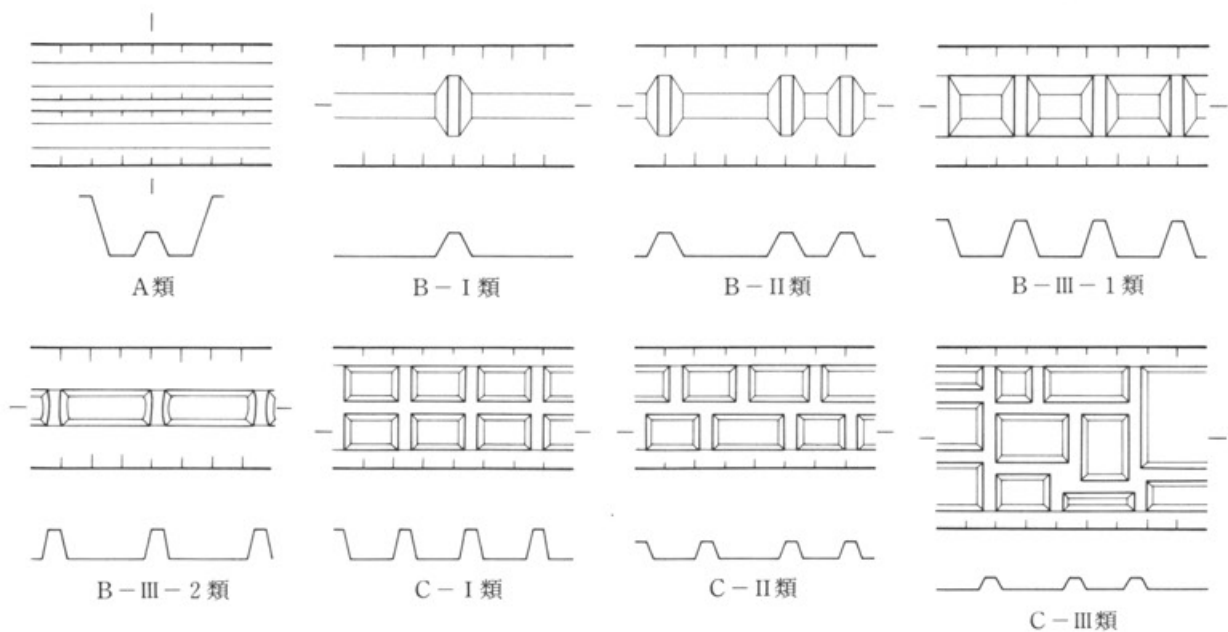
以上によれば、まず、「堀障子」が全て堀内の水が深く関連していることに気づく。つまり、平城の広い堀については、水の下に見えないように障害を造ることだけではなく、堀内に保水しそれによって底が泥状となることにより敵の動きを阻止し、さらに秘かに城外へ人を出すには便利であるとする。また、山城についての「障子堀」も堀に水を引き、保水の為としている。勿論、これらの軍学は、中世の城館跡の施設を江戸時代になってから考察したものであり、全てが中世時における認識とは言えないが、台地上の障子堀に関しては保水機能も考慮する必要があるだろう。実際、発掘調査で検出される台地上の堀にはなかなか水がたまらないが、近年、15世紀後半は現在よりも低気温が続き、不作が続いたという説が有力となっていること、また、篠本城跡・北ノ作遺跡・田向城跡など、堀底に水溜土坑と考えられるものや井戸が掘られる例も多いので、地下水位の変化を考慮する必要があるだろう。

3. 分類試案 (第174図)

堀内障害の施設としては、障壁だけではなく、段差・竖穴（陥穴）逆茂木等があり、障害となる堀そのものの形態としては葉研堀、堀に密接に関連する障害としては土橋があげられよう。堀内障害施設の中でも堀内障壁（障子）を持つ堀（障子堀）は、平行畝・畝状堀・方形の仕切りが連続する堀等多くの形態が検出されているので、次のように分類した。

(A類) 堀底に堀の方向に沿って平行に畝が造られているもの。

(B類) 堀底内に障壁が単独或いは一列に連続するものとし、さらにⅠ～Ⅲ類に細分した。



第174図 障子堀分類模式図

- B-I類 障壁が単独或いは二カ所に存在するもの。
- B-II類 障壁がある程度の距離をおいて不規則に連続するもの。
- B-III類 障壁が規則的に連続し、方形の竪穴が一行に連続するようになるもの。

事例の多いB-III類をさらに細分すると、

- 1類 竪穴の平面形が円形から方形。
- 2類 竪穴の平面形が細長い楕円形から長方形。

(C類) 堀底内に障壁が二列以上連続し平面的に広がるものとし、さらにI~III類に細分した。

- C-I類 障壁によって造られる竪穴が規則的に連続し、障壁が十字の規則的な連続に見えるもの。
- C-II類 障壁によって造られる竪穴の堀に平行する軸の長さがまちまちで、障壁がT字が不規則に連続して見えるもの。
- C-III類 障壁によって造られる竪穴規模の長軸・単軸共まちまちで、障壁の十字・T字が広域に連続して見えるもの。低地の幅広い堀に障壁の高さが低く水田の畦状となる。

これらの機能や目的は、2で紹介した江戸時代の軍学史料によると、各類共、敵が堀底を移動するのを阻むものであるが、A類は保水とは関係ない施設、B類・C類は保水に関係するものであろう。

4. 全国の城館跡の障子堀分類 (第6表)

全国の堀内障壁が検出された調査例は、先述の『第15回全国城郭研究者セミナー』(1998年)及び『中世城郭研究』第13号(1999年)における池田光雄氏の「^{②-376}障子堀」について」で報告された。その資料に基づき、3の分類試案に沿って千葉県内以外の城館跡検出の障子堀について列挙すると、第6表のとおりである。なお、調査範囲内で一部が検出されて詳細な分類が不可能なものは除外した。

これによると、①障子堀は東北から畿内にかけて広く分布すること、②関東、特に埼玉県・千葉県北部・静岡県等、16世紀後半には後北条領国化した地域に多いこと、③古代豪族館跡(宮城県山前遺跡)でも類似遺構が検出されていること、④明らかな後北条氏系城郭はB-III類の方形竪穴列が多いこと、⑤C類は沖積地の水堀に造られる例が多いこと、⑥C-III類は、現段階では埼玉県にのみ見られ、地域的特徴の可能性があること、⑦障子堀は、城域の外縁部や大規模城郭の外郭に造られる傾向があること、⑧B-III-2類は少なく、千葉県内では松戸市小金城跡(図版1-1)・千葉市生実城跡(図版7-2)のみであること、⑨小金城跡の障子堀は、堀の方向に対して直交する溝の列状を呈しており、他では管見の限り、他には神奈川県河村城跡だけに見られるに珍しい形態であること、等があげられる。

5. 編年試案 (第7表)

発掘調査による出土遺物から、城館の時期がわかるものについて抽出して障子堀の分類試案を当てはめてみた。

代表的な例として、神奈川県小田原城跡では、16世紀末から17世紀初頭の久保氏の時期石垣の使用の水堀のC-II類が、16世紀代の後北条氏の時期の石垣を使用しない水堀のB-III類を切っ^{④-111}て造られていることから、C類はB類よりも後出であることがわかる。また、C-II類は、埼玉県花崎城跡・小田原城跡のほか、愛知県清洲城跡・京都府御土居跡・旧二条城跡等の織豊系城郭に見られ、16世紀第4四半期の出現の傾向がある。

第6表 全国の城館検出障子堀形態

遺跡名	所在	時期	B I類	B II類	B III 1類	B III 2類	C I類	C II類	C III類	備考	挿図・写真図版
柏山館跡	岩手県金ヶ崎町	15世紀代か			○						
我妻館跡	山形県米沢市	15世紀代		○							
山前遺跡	宮城県子牛田町	古墳時代		○	○					豪族居館	
洞ノ口遺跡	宮城県仙台市	15世紀代		○							
北目城跡	宮城県仙台市	16世紀末			○		○			伊達氏	
鎌田館跡	福島県福島市	15世紀代		○	○						
名倉館跡	福島県郡山市	15世紀代		○	○						
保原城跡	福島県保原町	15世紀代か			○						
若松城跡	福島県会津若松市	17世紀初頭			○					蒲生氏、外郭堀	
梅津山城跡	新潟県両津市	15世紀代			○						
上中居辻薬師遺跡	群馬県高崎市	15世紀代か			○						
割目遺跡	茨城県阿見町	15世紀代か									
下小池城跡	茨城県阿見町	15世紀代か			○						
伊奈城跡	埼玉県伊奈町	16世紀代			○						
花崎城跡	埼玉県加須市	15世紀後半～ 16世紀代			○			○	○		
滝ノ城跡	埼玉県所沢市	16世紀後半			○					後北条氏	
岩槻城跡	埼玉県岩槻市	16世紀代				○				後北条氏	
騎西城跡	埼玉県騎西町	16世紀代							○	後北条氏	
南屋敷遺跡	千葉県千葉市	15世紀前半		○						屋敷外縁堀一辺	第44図
神山谷遺跡	千葉県匝瑳郡光町	15世紀前半			○					篠本城対岸台地縁辺部	
小林城跡	千葉県印西市	15世紀前半～ 15世紀後半	○							方形館跡周囲築研堀	第22図
多古城跡	千葉県香取郡多古町	15世紀代			○					台地を切る城域端部	
笹子城跡	千葉県木更津市	15世紀後半	○							北端部腰曲輪	第139図
北ノ作遺跡	千葉県四街道市	15世紀後半～ 16世紀前葉			○					主要郭西端部、底に井戸を有する箱堀を切る。	第37図・ 図版1
分目要害城跡	千葉県市原市	15世紀後半～ 16世紀前葉			○					主要部北端部（微高地）	第135図
田向城跡	千葉県山武郡芝山町	15世紀後半 （～16世紀末）			○					II郭中央堀、井田氏、後北条氏系	
小金城跡	千葉県松戸市	15世紀後半～ 16世紀末	○			○				城域北端金杉口、高城氏（後北条氏系）	第19図・ 図版1
生実城跡	千葉県千葉市	16世紀末				○				惣構東端部、原氏（後北条氏系）	第50図・ 図版7
本佐倉城跡	千葉県印旛郡酒々井町	15世紀後半～ 16世紀末			○					小谷斜面惣構堀、千葉宗家（後北条氏系）、大堀館跡（16世紀末）の可能性有り。	※
小田原城跡	神奈川県小田原市	16世紀代			○	○	○			外郭水堀、後北条氏	
河村城跡	神奈川県山北町	16世紀代				○				後北条氏系	
小田原城跡	神奈川県小田原市	16世紀末～17 世紀初頭						○		外郭石垣使用水堀、前期大久保氏	
葦山城跡	静岡県葦山町	16世紀代			○					後北条氏	

遺跡名	所在	時期	B I類	B II類	B III 1類	B III 2類	C I類	C II類	C III類	備考	挿図・写真図版
山中城跡	静岡県三島市	16世紀後半			○		○			後北条氏、西ノ丸周辺	
小川城跡	静岡県焼津市	15世紀後半～16世紀か		○				○		後北条氏系か	
松田城跡	静岡県新居町	15世紀代か									
長久保城跡	静岡県長泉町	16世紀代			○					後北条氏、水堀	
清洲城跡	愛知県清洲町	16世紀後半～17世紀初頭						○		水堀、織豊系	
御土居跡	京都府京都市	16世紀後半						○		水堀、織豊系	
旧二条城跡	京都府京都市	16世紀後半						○		水堀、織豊系	
福住井之市城跡	奈良県天理市				○						
大坂城跡	大阪府大阪市	16世紀末～17世紀初頭						○		三の丸水堀、織豊系	

※平成12年1月発掘調査。情報提供・勲印旆郡市文化財センター。

第7表 障子堀の出現時期（案）

	15世紀				16世紀				17世紀				
	第1 四半期	第2 四半期	第3 四半期	第4 四半期	第1 四半期	第2 四半期	第3 四半期	第4 四半期		第1 四半期	第2 四半期	第3 四半期	第4 四半期
								前期	後期				
B-I・II類	—————												
B-III類				—————									
C-I・II・III類							—————						
関東の政治的状況	小規模台地上館・低地館の消滅	戦国期の開始、築城ラッシュ	戦国期の開始、中小城郭	国人領主間勢力紛争	城館跡の取捨選択・一方で大規模城郭出現	上杉・里見氏対後北条氏、国人領主間紛争継続	下総地域後北条氏の影響に入る	後北条氏系城郭、豊臣方	後北条氏系城郭、豊臣方	後北条氏系城郭、豊臣方	後北条氏系城郭、豊臣方	後北条氏系城郭、豊臣方	後北条氏系城郭、豊臣方

千葉県内の例では、下総地域が後北条氏の影響下に入る時期は、16世紀後半以降であるのに、B-I・II類は出土遺物からみた時期では15世紀前葉には出現している。また、B-III類も16世紀前葉までの城館で出現している。後北条氏系城館に多く見られるB-III類の方形竪穴列の障子堀については、千葉県内では、光町神山谷遺跡^{①-091}・四街道市北ノ作遺跡^{②-363}（第37図・図版4-1、5-1）・市原市分目要害城跡（第178図）^{①-091}で検出されているが、遺物は神山谷遺跡が15世紀代、後二者が16世紀前葉で止まっていることから、在地

で発展した可能性もある。

しかし、注意しなければならない点は、出土遺物がないということは生活痕跡がないことであるが、16世紀後半の東国においては、瀬戸美濃製品の搬入量が減少し漆器が代用された可能性があり、また、大規模城郭に取り込まれて常駐しない純軍事的機能を有した城郭へ変化した可能性も考えなければならない。例えば、B-III類の芝山町田向城跡や前述の北ノ作遺跡^{③-231}の出土遺物は16世紀前葉で止まっているが、果たしてその時点で機能を閉じたか否かである。田向城跡は、城主井田氏が後北条氏との繋がりが深く、構造から見る限り16世紀後半の様相を示し、唯一16世紀後半以降の遺物として土塁覆土中から鉄砲玉が出土している。また、北ノ作遺跡の外郭部では若干16世紀後半の遺物も出土しており、この時期の城本体は臨時的な砦的機能を有した可能性もある。これらの検討のためには、明らかに16世紀後半或いは後北条氏に関連した城館として捉えられる文献史料を伴う城館の発掘成果が望まれる。しかし、いずれにしてもB-III類は15世紀末以降16世紀代で出現したことが推測される。

また、千葉県内では、現段階ではC類が検出されていないが、微高地で検出された障子堀としては唯一市原市分目要害城跡(B-III類)があり、B-III類も保水機能を一つの目的としたものであることの証拠となろう。

C類については、京都市二条城跡・御土居跡のII類は、堅穴が浅いこと、埼玉県騎西城跡・花崎城跡のC-III類は沖積地の城館で障壁は水堀内であること、小田原城跡・大阪市大坂城跡三の丸も水堀であること等から、C-II・III類の堅穴の浅いものは、沖積地の広大な水堀内に造られるようである。

さて、これらから、堀内障壁の出現時期については、B-I・II類が15世紀前葉から15世紀後半、B-III類が15世紀末から16世紀末、C類が16世紀末から17世紀初頭に推定される。当時の歴史的背景を含めると、B-I・II類は防御性の薄いもので、生活用水や水利を第一目的とした保水機能であったが、15世紀後半以降戦国の動乱に突入して防御性の強い城館が必要となってB-III類が出現し、16世紀第4四半期の関東では豊臣勢の関東侵攻に対抗して整備され、その過程で低地の城館の堀にC類が出現したことが推測される。

6. まとめとして

以上、現在までの管見の限りの発掘調査事例からは、障子堀の構造の系譜として、15世紀前葉にB-I類が出現し、B-II類へ発展し、さらに15世紀後半にB-III類へ発展したこと、B-III類からC類のI・II・III類のそれぞれへ発展したものではないかと考えられる。B-III類の出現時期である15世紀末期は、戦国の動乱が本格的になり、千葉県内は勿論、全国的に城館が多く築城される時期である。つまり、B-III類は、I・II類以上に防御機能を重視して造られたものであろう。そして、障子堀は後北条氏系城郭の特有のものではなく、各地域で発展したものであった。しかし、後北条氏系特有のB-III類の方形堅穴列の障子堀も存在したであろうことは現段階では否定できない。また、C類の出現は、埼玉県騎西城等の沖積地の城館の水堀の防御に有効であると共に、小田原城跡や大坂城跡等の例から、石垣により深い堀を造ることができ、保水機能も整備された結果ではないだろうか。つまり、歴史的には、C類は中世城郭から近世城郭への移行期に多く出現したものではないかと考えられる。江戸時代の軍学や発掘調査で堀底に検出される井戸や水溜土坑の存在も考慮すると、千葉県内の台地上の城館跡の障子堀に多いB-III類も、保水の観点から見直す必要があろう。

なお、障子堀の類似遺構は、古墳時代の豪族居館（宮城県山前遺跡ほか）にも見られるが、弥生時代の環濠集落（佐賀県吉野ヶ里遺跡ほか）や古代ヨーロッパの石垣を使用しない城郭が、周囲に屈曲を持った土塁・堀を巡らせ、内部の「郭」は突出部を有すること等、日本における中世城郭の発展した構造に近い例がある。これら防御を意識した縄張りを始めとした構造の工夫については、各時代の戦乱の時期に生み出されては消えていったものと考えられる。その中で、障子堀については、15世紀後半に防御機能を重視した施設が造られ16世紀末に最も発展したが、その消滅は、石垣の登場による深く保水機能の整備された堀の出現によるものと捉えることができる。換言すれば、障子堀の消滅は、城館遺構に現出した中世の終焉と近世の幕開けを象徴するものではないだろうか。

第2節 地下式坑のデータ分析

豊田秀治

1. はじめに

中近世城館跡には様々な遺構が存在する。郭や堀、虎口と言った城館の主要な施設については、戦闘時の防御的機能を有するものとしてその性格が明らかであるが、地下式坑については、城館の貯蔵施設・葬送施設とするものや、城館構築以前の貯蔵施設・葬送施設とするものなど多様な解釈がなされている。このような模糊とした有様なのは、これまでの城館跡調査が発掘を伴わない歩測による縄張り遺構等の表面観察が主流であり、数少ない発掘調査例も、城館跡のごく一部分であったことに原因するものであろう。したがって部分的な調査によって地下式坑が検出されても、それが城館跡全体の中で占める位置を求めることは不可能に近い状況であったと考えられる。ところが近年の大規模開発は、時には城館跡全体を発掘調査の対象として、余すところ無く晒された城館跡からは、幾重にも重なる時代の変遷と、諸施設の状況が城館跡全体を構成する要素の一部として、次第に明らかになってきた¹⁾。

本章は、城館跡検出の遺構について、第1節では障子堀の分類と編年を行なっている。本節では地下式坑について、これまで発掘調査された中近世城館跡で検出された地下式坑の規模や、構造・伴出遺物等をまとめ、墓地など城館跡以外の場所から検出された地下式坑と対比し、検討を加えることによって、中近世城館跡研究に寄与できればと考えている。

2. 研究史

1970年代後半に中田英氏は、神奈川県草山遺跡の発掘調査による成果に基づいて、地下式坑を総合的な分析へ進めた。中田氏は、1976年に草山遺跡の報告書をまとめ²⁾、更に1977年には「地下式坑研究の現状について」と題する論考を発表され³⁾、ここにおいて地下式坑の全国的な集成を行い、その分布・立地・形態・構築年代・機能について論じている。

全国的な分布については、関東・北部九州・琵琶湖周辺に固まって検出されており、他地域ではあまり報告されておらず、この3地域においても、地下式坑の形態におけるバリエーションに違いが認められた。機能については、その構造上、頻繁な出入りを想定し、貯蔵用施設と結論されている。

中田氏に続いて半田堅三氏が、千葉県台遺跡の発掘調査による成果に基づいて、地下式坑の分析を発展させた^{②-112}。

半田氏は、中田氏の地下式坑の形態分類をより精緻なものにし、その機能の解釈において、地下式坑単体だけではなく、その周辺で検出した遺構の存在に注意をはらった。台遺跡においては、火葬跡や、溝・土坑等が検出され、それらの伴出遺物として、常滑の甕や瀬戸の天目茶碗などが確認されている。このことから、中世における台遺跡は墓地であったと判断し、地下式坑についても、「中世仏教を背景にした墓地の内部で機能している施設の一つ」と結論された。

貯蔵施設と葬送施設、異なる機能を想定された地下式坑は、その後江崎武氏が、1985年に文献史料から、葬制に関するものとして半田説を支持している^{②-148}。江崎氏は、中世において禅宗系の葬制に「地を掘りて窖をつくり」と言う例が存在していることや、中世仏教の葬制に、茶器を取り扱うこと、分骨・納骨が行われていること等から、地下式坑の使用想定図をイラストで示された。このイラストは、見るものに強いイン

パクトを与えた。

江崎氏が地下式坑葬送施設説を支持した翌1986年、池上悟氏が地下式坑を葬送施設であるとの前提に立って、全国的な地下式坑の形態分類^{②-158}を行った。池上氏の形態分類は、中田・半田分類と異なり、地下式坑の主室の形態に着目し、その基本形態が関東地方に存在すると結論付けられた。基本形態の存在する関東が、地下式坑の発祥地であり、そのことがパラエティーに富んだ地下式坑を関東地方各地に地域差を持って存在させたとしている。更に、北九州に分布する地下式坑については、遷西御家人による伝播と考え、その造営者が中世武士団であることを強調された。

同年、東京都五反田遺跡の報告において、地下式坑を伴う中世遺構群が、自然のヘコタミに手を加えた段切状遺構に伴う墓域とされた。これは、千葉県台遺跡における台地整形遺構に伴う地下式坑の状況とも相俟って、中世社会における葬送空間の存在を想定させるようになる。

地下式坑が葬送施設であるとの論考が増える一方で、貯蔵施設等の論考は、主に近世史において発展することになる。これは、東京都における近世考古学の隆盛において、江戸の街中や、大名屋敷からの地下式坑の検出例が増加し、その配置、出土遺物、文献史料、落語等から貯蔵施設を想定するようになってきた。

地下式坑＝貯蔵施設の考えは、近世社会における遺構として、かつて江戸と呼ばれた地域を中心として存在したのとしてまとめられ、中世社会における地下式坑は、葬送施設として認識されるようになり、その周辺遺構との関わりが検討されるようになる。

かつて半田氏が地下式坑を葬送施設と結論付ける契機となった千葉県台遺跡は、その後も発掘調査が続けられ、新たな遺構の存在が明らかにされるようになり、この成果を基に、半田氏は自説を発展させ、中世の葬送形態を、単に地下式坑だけの問題ではなく、土坑・掘立柱建物等を含む葬送境域の存在へと論を進めている^{②-257}。

中世地下室坑の機能については、遺構単体ごとの分析をとおして、地下式坑を貯蔵施設と考えた中田氏の論考以降、墓域的性格が強い台遺跡における地下式坑の検出例の紹介から、地下式坑が葬送施設として結論付けられ、文献的な補強を伴いながら、台遺跡同様、墓域的性格の遺構が周辺に伴う事例の増加により、地下式坑＝葬送施設との考えが、大勢を占めている。

一方城館跡から検出された地下式坑については、東京都青梅市今井城跡や、松戸市大谷口小金城跡等の検出例から、中田氏は貯蔵施設であると結論する根拠となしている。半田氏は、城館構築以前、或いは廃城後に使用されたもの、又は屋敷墓として城館に伴うものとして、葬送施設説に当てはめていった。しかし池上氏は、その規模が墓域等から検出するものとは異なる点に着目し、葬送施設以外の機能にも注意を呼びかけている。

その後、栃木県等において、地下式坑が城館跡内だけでなくその周辺にも存在することが指摘されるようになり、この現象を齊藤弘氏は、地下式坑＝葬送施設との観点に立って、城館を指向するような位置に墓地を造営したものと評価され、更にこれが発展して、城館内に墓地を造営したのではないかと想定している^{②-329}。

城館跡と地下式坑との関係は、葬送施設・貯蔵施設の機能的問題と、使用期間の同時・先後といった時間的問題が論議されるようになってきた。

このような問題に対して、井上哲朗氏は千葉県小林城跡の発掘成果から、城館の構築以前に地下式坑を

伴う葬送境域が存在したことを導き出された。^{②-286}城館築城以前の葬送境域の存在については、柴田龍司氏も同様の意見を述べている。^{②-300}

また、葬送施設の変遷について笹生衛氏が、房総における中世墓の変遷を論考されたときに、地下式坑を14世紀末から15世紀にかけて、墓域の拡大と共に成立したものと結論され、その背景には、新興勢力の台頭が想起されている。^{②-302}このことから、新たな階層の出現・環境の変遷等が、城館跡等の築造、墓地空間の設定、葬送様式の変化等社会生活そのものに影響を及ぼしているとも考えられる。

墓地的性格を有する遺跡から検出される地下式坑に対して葬送施設の機能を付与するのは妥当性が高いが、部分的な発掘による遺跡の性格解明の多い現状においては、断片からの全容想定が行われる危険性も憂慮すべきかと思われる。城館跡のように、墓地以外の性格を有する遺跡からの検出例を同様の視点で論じることにも問題はあろう。しかし近年においては、遺跡のほぼ全体を対象として、精密な調査が行われ、それによる遺跡内の時間的変遷が明かになり始めており、今一度地下式坑の属性についてまとめる必要があると考える。

今回中近世城館跡から検出された地下式坑をまとめ、その特徴を導き出し、葬送的性格の強い墓地から検出された地下式坑と対比し、その相違を明かにすることを目指し、サンプルとして千葉県内の45遺跡(城館跡19遺跡・墓地26遺跡) 315基の地下式坑を取り挙げた。

3. 検討項目

各遺構ごとに、観察項目を設定し、想定した条件の範囲内で分類を行う。項目と条件については、以下のとおりである。

- (1) **立地** 検出された場所が、台地上か低地か。また台地上としても傾斜の始まる縁辺か、台地の奥の平らな部分か。中田氏の小高く広く乾燥した場所を選地するという説に対し、半田氏が台遺跡の調査で確認された、水の溜まる窪地(後述)や、斜面部にも多く見うけられる例の存在から、何れが主体を占めるのか、或いはその差がそれぞれの地下式坑の機能を反映しているのかを明らかにしたい。
- (2) **占地** 台地整形区画のように、大規模な地山掘削を行っている場合、その内側か縁辺か。そのような地山掘削が行われていないか、行われていたとしても地下式坑とは関係の無い状況か。先に述べたように、半田氏が台遺跡の調査で確認された、台地上に人工的に造られた窪地の周囲、内部に地下式坑が認められる例の存在から、地下式坑の構築に際してその前段階として、大規模な地山掘削を行なっている例がどの程度存在するのかを明らかにしたい。
- (3) **規模** 竪坑の幅・奥行き・深さ、主室⁴⁾の幅・奥行き・高さ・面積・深さ、竪坑底と主室底の段差。地下式坑に対して、出来る限り客観的な観察を行い、各地下式坑における特徴の抽出と、地域的共通性の存否を明らかにしたい。
- (4) **天井部** 構築時の天井の有無。但し、破損が著しく判別できないもの等は不明とした。斎藤氏が栃木県の例において、覆土中に崩落した天井の痕跡が認められないものが存在していることから、構築当初から掘り残しによる天井⁵⁾が存在せず、板等を渡すことによって地下施設を構成したものの存在を指摘しておられる。このことが斎藤氏の言うように、関東ローム層の堆積が薄い北関東の特徴なのか、関東ローム層が厚く堆積する南関東の状況は如何なものなのか、明らかにしたい。
- (5) **竪坑の方向** 台地整形区画が存在してその内側を向いているか、又は存在しないで谷側を向くか、

存在の有無に関わらず谷側を向かないか。先に半田氏が確認した窪地との関係のほか、齋藤氏の考えた天井の保安、掘削労力の節約等がどの程度当てはまるかを明らかにしたい。

- (6) **遮蔽物** 地上から竪坑・主室へと至る部分に、出入りを規制するものが存在するかどうかを明らかにする。通行を阻害する物体を対象とする。
- (7) **付帯施設** 主室や竪坑入り口などに、何らかの機能を有する施設の存在を窺わせる痕跡があるか。上屋や、棚の設置等、地下式坑の空間利用方法を明らかにしたい。
- (8) **出土遺物** 地下式坑の使用に関わる床面直上のもの、使用直後に入り込んだ床面～天井の間、天井崩落後に陥没穴から流れ込んだもの、出土位置がわからないもの、全く無いものにかけて、その内容を明らかにしたい。
- (9) **周辺に見られる遺構** 地下式坑が機能していたときに、その近くに存在していた遺構の有無と、その種類を明らかにする。半田氏が再三に渡って注意を呼びかけている問題で、周辺に存在する同時期の遺構は、地下式坑と有機的な関係を持ち、地下式坑の性格を把握する一助となる。
- (10) **地下式坑と重複する遺構** 地下式坑が機能した前後の時期、またその環境を推定できる。
- (11) **半田氏の形態分類** 有段はY、無段はM、竪坑から主室に至る間に階段の無いものは1、あるものは2、地表から竪坑底に至る階段のあるものは3、竪坑底から主室に至る間に羨道状の部分があるものをa、すぐに主室に至るものをb、竪坑底の一部が主室に直接入り込むものがc、竪坑底がそのまま主室底に至るものをd、竪坑と主室の有り方に関係無く副室の有るものをeとした。
- (12) **池上氏の形態分類** 主室の平面形が縦長なら [長]、正方形なら [S]、横長なら [T]、竪坑と主室の間に高低差があればY、無ければm、竪坑底から主室に至る間に羨道状のものがあればY、無ければm。ただし今回、主室の平面形態が凸字状・円形状のものがあったため、新たに凸字状のものを [凸]、また円形のものについては [r] とした。
- (13) **時期** 報告書作成者が想定した構築の西暦年代である。

以上13項目について城館、墓地において、検出された地下式坑について一覧表に整理し、それぞれの傾向をまとめてみた (第8表)。

4. 城館跡検出の地下式坑

城館跡において検出された地下式坑は、19遺跡109基である。立地は、台地縁辺・台地奥ほぼ同数であるが、一遺跡内でどちらか一方が認められるものと、両者が認められるものとが存在する。台地縁辺のみに存在するものが7遺跡(1基のみのものが4遺跡)、台地奥のみに存在するものが3遺跡、両者が存在するものが3遺跡認められる。これらの内10数基は堀によって一部を破壊され、それ以外のは郭の平坦面から検出されている。

台地整形区画の縁辺や内側に占地するものは、1遺跡6基のみである。但しこの台地整形区画については、掘り残し土塁として報告されているものである。

天井部の有無については、約9割が間違いなく存在していた。ただし不明の6基については、覆土の説明がなされていないものなので、ほぼ全てにおいて存在していたと考えて良からう。

竪坑の方向については、6割が谷側に面しておらず、山側等を向いており、谷や山に対する関心、掘削労力の削減を図る等の意図が存在したとは思えない。

遮蔽物については、僅かに1例が挙げられる。主室底部に白色粘土層が認められたもので、主室を閉塞したものとも考えられるが、不確かである。

付帯施設については16例で、主室底面にピットや周溝が設けられている。排水に対する意識が存在した可能性が窺える。

出土遺物については1/4の地下式坑からは検出されていない。床直や天井以下の覆土から検出された例は27例で、約1/4を占めている。五輪塔や土器・陶器も多少は見られるが、遺物の多くは貝殻や炭化物である。

周辺に見られる遺構としては、ピット群や土坑の様に性格の不明な物が多いが、掘立柱建物や方形竪穴等も1割以上の頻度で確認されている。地下式坑からは若干離れてはいながら、同じ遺跡内において確認された遺構を見ると、火葬施設⁶⁾や、井戸も少数例ながら検出されている。

遺構形態については半田分類におけるYがほとんどで、Mのものは1割にも満たない。Mのものは竪坑と主体部が近接するものが多い。Yにおいては、階段等の施設を持たない素段のものが多く、竪坑と主室が近接するc・d類が多い。竪坑の平面形も方形を呈する1類が若干多い。

池上分類では、Tが約半数を占め、ついでS、長の順になる。各平面形とも有段がほとんどで、更に無羨道のもの9割以上を占める。

形態分類については、段や羨道の有無については、共通した分類であり、有段無羨道のものが多いことを示している。半田分類からは、有段と言っても階段状の施設等を持たないものが多いということが判明している。また池上分類からは、T・S・長の割合がほぼ5：3：2の割合であることが判明している。

5. 墓地検出の地下式坑

墓地において検出された地下式坑は、26遺跡206基である。その立地は、台地の奥が6割を占め、やや多い傾向にあるが、一遺跡内では、台地の奥或いは縁辺に固まっている。両者が認められる遺跡においても、1～2基が奥まったり、縁よりだったりする程度で、大勢は一方に固まる傾向にある。したがって、全体的には、台地の奥だけにかたまった遺跡が多いということになる。

台地整形区画に関わるものが3割強とあまり多くないが、25遺跡中15遺跡において台地整形区画が確認されていない状況であり、台地整形区画そのものは地下式坑の存在に対する必要条件ではないのであろう。

天井部については9割近くが有しているが、存在の怪しいものも9例ほど確認されている。

竪坑の方向については、5割強が台地整形区画なり、谷側なりを向いており、主体部を標高の高い方に構築している。

遮蔽物を有する地下式坑は認められなかった。

付帯施設を有するものは23例で、比率的には城館のものと変わらない。壁溝やピットが多いのも同じだが、少数例ながら龕や棺座を設けている例も認められる。

出土遺物については、半分近くの地下式坑からは検出されていない。床直や天井までの覆土中から遺物が出土したものは12例と全体の1割強である。獣骨や骨粉も見られるが、その多くは土器や陶器の類である。

周辺に見られる遺構としては、溝や土坑・墓壇⁷⁾、火葬施設等が比較的多い。城館では比較的多く認められた掘立柱建物は、墓地においては8例と少数派である。地下式坑からは、若干離れているが、同じ遺跡内において確認された遺構を見ると、粘土貼土坑や、井戸もかなり多く検出されている。

第8表 地下式坑一覧（該当するところに 1） 単位：m

城館検出				立	地	占	規	模	天	整	遮												
城 番 号	遺跡名	遺構番号	旧郡	台	地	占	規							天			整		遮				
				地	地	地	整	整	主	主	高	面	深	段	有	無	不	谷	無	有	無		
				緑	奥	他	坑	行	深	室	行	高	積	さ	差	部	内	内	有	有	有	有	
				辺		形	幅	行	幅	幅	行	さ	積	差		側	側	り	り	り	り	り	
1	中馬場遺跡	SK001	東葛飾郡	1			0.85	0.85	1.40	2.40	2.85		6.84	2.00	0.60	1							1
2	中馬場遺跡	SK003	東葛飾郡	1			0.80	0.30	1.20	4.05	1.90		7.70	2.80	1.60	1							1
3	北の内遺跡	2号墓	東葛飾郡	1			1.50	1.50	2.50	2.80	2.30		6.44	2.50	0.80	1							1
4	北の内遺跡	3号墓	東葛飾郡	1																			1
5	北の内遺跡	1号墓	東葛飾郡	1			1.78	1.70	1.70	3.50	2.80		7.00	1.70	0.80	1							1
6	小金大谷口城跡	1号地下式土倉	東葛飾郡	1			1.50	1.90	0.70	2.40	2.00		4.88	2.20	1.50	1							灰白色粘土
7	小金大谷口城跡	2号地下式土倉	東葛飾郡	1			1.50	1.30	0.45	2.10	1.95		4.10	1.90	1.45	1							1
8	願平買遺跡	土蔵B	東葛飾郡	1			0.80	0.90	1.00	1.80	1.80		3.24	2.35	1.35	1							1
9	堀之内遺跡	土倉	東葛飾郡	1			0.90	0.90	3.48	3.00	0.80		2.40	3.40	0.80	1							1
10	小林城跡	SK22SK23	印旛郡	1			1.40	1.20	0.70	2.40	2.40		5.76	3.00	2.30	1							1
11	小林城跡	SK24SK25	印旛郡	1			1.00	1.00	0.40	2.10	2.10		4.41	3.60	3.20	1							1
12	小林城跡	SK35SK58	印旛郡	1			1.00	1.00	0.40	2.80	2.28	1.80	6.16	2.40	2.00	1							1
13	小林城跡	SK103	印旛郡	1			0.40	0.40	1.60	4.80	3.00		14.40	2.00	0.40	1							1
14	小林城跡	SK110	印旛郡	1			1.00	1.00	0.80	2.50	2.00	1.00	5.00	1.90	1.10	1							1
15	小林城跡	SK111	印旛郡	1			1.00	1.00	0.80	2.80	4.20	1.00	11.76	2.00	1.20	1							1
16	小林城跡	SK119	印旛郡	1			1.00	1.00	1.40	3.20	2.40		7.68	2.40	1.00	1							1
17	小林城跡	SK120	印旛郡	1			0.80	0.80	1.90	2.40	2.00		4.80	2.50	0.80	1							1
18	岩戸市場遺跡	1号地下式土蔵	印旛郡	1			0.80	0.60	1.10	2.85	1.80		5.13	1.90	0.80	1							1
19	池ノ尻館跡	1号地下式土倉	印旛郡	1			0.90	1.00	0.20	2.93	1.50	1.00	3.50	1.80	0.80	1							1
20	池ノ尻館跡	2号地下式土倉	印旛郡	1			0.80	0.50	0.80	0.97	1.04		1.01	1.00	0.20	1							1
21	池ノ尻館跡	3号地下式土倉	印旛郡	1			1.00	0.20	0.30	1.40	1.00	0.00	1.40	1.40	1.10	1							1
22	池ノ尻館跡	4号地下式土倉	印旛郡	1			0.90	0.60	0.50	2.10	1.99	1.30	3.99	2.20	1.70	1							1
23	池ノ尻館跡	5号地下式土倉	印旛郡	1			0.55	0.66	0.80	2.30	1.70	1.00	3.91	1.30	0.50	1							1
24	池ノ尻館跡	6号地下式土倉	印旛郡	1			0.75			1.67	1.50	0.75	2.51	1.50	1.50	1							1
25	池ノ尻館跡	7号地下式土倉	印旛郡	1			0.86	0.54	0.34	3.10			1.30	0.96		1							1
26	池ノ尻館跡	8号地下式土倉	印旛郡	1			0.60	0.70	1.20	2.40	1.40	1.10	3.36	2.00	0.80	1							1
27	池ノ尻館跡	9号地下式土倉	印旛郡	1			0.80	1.00	0.50	2.70	1.95		5.27	2.00	1.50	1							1
28	池ノ尻館跡	10号地下式土倉	印旛郡	1						2.40						1							1
29	池ノ尻館跡	11号地下式土倉	印旛郡	1			0.70	0.70	0.60	1.50	1.00	1.10	1.50			1							1
30	池ノ尻館跡	12号地下式土倉	印旛郡	1			0.60	0.40	0.50	1.70	1.30		2.21	1.40	0.90	1							1
31	和良比羅込城跡	001地下式坑	印旛郡	1			1.78	1.60	2.48	2.81	2.80	2.00	7.87	3.66	1.18	1							1
32	和良比羅込城跡	002地下式坑	印旛郡	1			2.44	2.20	1.16	2.53	2.34	1.55	5.82	2.20	1.04	1							1
33	和良比羅込城跡	003地下式坑	印旛郡	1			1.71	2.14	2.68	0.96	0.70	1.88	0.67	3.67	0.99	1							1
34	和良比羅込城跡	004地下式坑	印旛郡	1			2.80	2.00	2.48	3.19	2.88	2.10	9.19	3.71	1.23	1							1
35	和良比羅込城跡	005地下式坑	印旛郡	1			2.40	1.60	1.32	2.80	2.70	1.80	7.56	2.91	1.59	1							1
36	和良比羅込城跡	006地下式坑	印旛郡	1			1.55	1.60	2.60	2.48	2.46	2.17	6.10	4.12	1.52	1							1
37	和良比羅込城跡	007地下式坑	印旛郡	1			1.02	1.02	1.91	2.68	1.80	1.80	4.82	2.95	1.04	1							1
38	和良比羅込城跡	008地下式坑	印旛郡	1			2.00	2.12	1.59	2.45	2.33	1.60	5.71	2.91	1.32	1							1
39	和良比羅込城跡	008地下式坑	印旛郡	1			1.29	1.20	1.67	3.04	2.77	1.65	8.42	2.82	1.15	1							1
40	和良比羅込城跡	010地下式坑	印旛郡	1			2.12	1.80	1.55	2.21	2.60	1.50	5.75	2.44	0.89	1							1
41	和良比羅込城跡	011地下式坑	印旛郡	1			0.95	1.10	1.64	2.39	2.20	1.52	5.26	2.75	1.11	1							1
42	和良比羅込城跡	012地下式坑	印旛郡	1			2.05	2.50	1.78	3.13	2.20	2.96	6.89	3.00	1.22	1							1
43	和良比羅込城跡	013地下式坑	印旛郡	1					1.98	2.78	2.35	1.55	6.53	2.86	0.88	1							1
44	高品城	1号地下式壇	千葉郡	1			1.26	0.86	1.10	2.34	1.84		4.31	2.08	0.88	1							1
45	高品城	2号地下式壇	千葉郡	1						2.60			1.50			1							1
46	高品城	3号地下式壇	千葉郡	1			0.75	0.90	1.20	2.70	2.10		5.67	1.76	0.56	1							1
47	高品城	4号地下式壇	千葉郡	1			1.16	1.16	0.60	3.00	1.94		5.82	1.40	0.80	1							1
48	高品城	5号地下式壇	千葉郡	1			1.54	1.60	2.10							1							1
49	高品城	6号地下式壇	千葉郡	1			1.65	2.10	2.30	2.80	2.40		6.72	2.70	0.40	1							1
50	高品城	7号地下式壇	千葉郡	1			1.20	0.90	1.00	2.42	1.84		4.45	2.12	1.12	1							1
51	高品城	8号地下式壇	千葉郡	1			2.84	2.10	2.00	4.46	3.80		16.35	3.00	1.00	1							1
52	高品城	9号地下式壇	千葉郡	1			1.64	1.68	1.20	4.00	3.16		12.64	2.30	1.10	1							1
53	高品城	10号地下式壇	千葉郡	1			1.60	1.70	1.80	3.90	2.90		11.31	3.10	1.30	1							1
54	高品城	11号地下式壇	千葉郡	1			1.68	1.40	2.00	2.26	2.24		5.86	2.24	0.24	1							1
55	高品城	12号地下式壇	千葉郡	1			1.44	1.70	2.60	3.40	2.34		7.96	3.80	0.40	1							1
56	高品城	13号地下式壇	千葉郡	1			1.80	0.46	1.06	1.70	1.72		2.92	1.26	0.20	1							1
57	高品城	14号地下式壇	千葉郡	1			1.84	2.05	2.60	3.34	2.26		7.55	3.00	0.40	1							1
58	高品城	15号地下式壇	千葉郡	1			1.00	1.00	1.60	3.30	2.90		6.60	1.90	0.30	1							1
59	高品城	16号地下式壇	千葉郡	1			1.60	1.92	1.70							1							1
60	高品城	17号地下式壇	千葉郡	1				0.68	1.94	2.64	2.26		5.97	2.14	0.20	1							1
61	高品城	18号地下式壇	千葉郡	1						2.30						1							1
62	高品城	19号地下式壇	千葉郡	1			1.56	1.94	0.90	3.20	2.40		7.68	1.60	0.70	1							1
63	高品城	20号地下式壇	千葉郡	1			0.80	0.80	1.00							1							1
64	高品城	21号地下式壇	千葉郡	1			1.90	1.86	1.20	3.80	3.80		11.40	2.00	0.80	1							1

第2章 検出遺構について

城館検出			立地		占地		規模							天井部		竪坑の方向			遺蔵物																			
城番号	遺跡名	遺構番号	旧郡	台地縁辺	台地奥	低地	その他	整形区縁	整形区内	無関係	竪坑幅	奥行	深さ	主室幅	奥行	高さ	面積	深さ	段差	有	無	不明	整形内側	谷側	無関係	有	有りの場合何か	無	不明									
																														1	2	3	4	5	6	7	8	9
65	高品城	2号地下式塼	千葉郡	1						1	1.92	1.56	1.06	4.40	2.88		12.67	1.46	0.40	1									1									
66	高品城	23号地下式塼	千葉郡	1	1					1	1.70	1.60	1.28	3.60	3.00		10.80	2.38	1.10	1										1								
67	高品城	24号地下式塼	千葉郡	1	1					1	0.80	0.54	0.14	1.60	2.00		3.60	0.56	0.42	1										1								
68	高品城	25号地下式塼	千葉郡	1						1							1.00			1											1							
69	小見川城跡	SK-002	香取郡	1						1	0.90	0.70	1.00	2.50	2.00		5.00	1.10	0.10	1											1							
70	大六天遺跡	SK-147	香取郡	1				1			0.80	0.80	1.96	2.75	1.55		4.26	2.00	0.04	1											1							
71	大六天遺跡	SK-170	香取郡							1	1.15	1.15	2.00	2.40	1.90		4.56	2.40	0.40	1											1							
72	大六天遺跡	SK-216	香取郡							1	0.90	0.70	0.93	0.94	0.81		0.76	1.26	0.33	1												1						
73	大六天遺跡	SK-220	香取郡							1	1.10	1.18	1.83	2.01	1.38		2.77	2.09	0.26	1												1						
74	傍示戸遺跡	1号地下式坑	海部郡	1						1	0.90		0.90	5.60	3.12		17.47	3.12	2.22	1												1						
75	田向城	001地下式坑	山武郡		1					1	0.50	0.60	0.40	2.10	2.00		4.20	1.00	0.60	1												1						
76	田向城	002地下式坑	山武郡		1					1	0.70	0.95	0.90	1.85	1.90		3.52	1.45	0.55	1													1					
77	埴谷周路	1号地下式坑	山武郡		1					1	2.90	3.00	3.64	3.60	1.70	2.02	6.12	3.64	0.90	1													1					
78	埴谷周路	2号地下式坑	山武郡		1					1				2.55	1.51		3.85	3.40		1													1					
79	埴谷周路	3号地下式坑	山武郡		1					1	1.00	0.75	0.50	3.00	2.75		8.25	3.00	2.50	1													1					
80	埴谷周路	4号地下式坑	山武郡		1					1	1.20	0.80	1.20	2.30	1.95		4.49	3.00	1.80	1														1				
81	神田山第三遺跡	H-012	長生郡							1	2.52	2.00	2.84	3.78	4.32		16.33	2.28	-0.56	1				1										1				
82	神田山第三遺跡	H-015	長生郡							1	1.00	0.88	1.72	3.04	2.82		8.57	2.78	1.06	1				1											1			
83	神田山第三遺跡	H-020	長生郡							1	2.04	2.00	2.12	3.58	2.82		10.10	2.18	0.06	1				1											1			
84	神田山第三遺跡	H-035	長生郡		1					1	2.25	1.80	2.34	3.85	2.82		10.86	2.38	0.04	1				1											1			
85	神田山第三遺跡	H-038	長生郡		1					1	1.10	1.20	2.24	3.70	2.42		8.95	2.28	0.04	1				1											1			
86	神田山第三遺跡	H-046	長生郡		1					1	2.20	1.82	2.24	4.12	3.10		12.77	2.28	0.04	1				1											1			
87	神田山第三遺跡	H-047	長生郡		1					1	1.32	1.72	1.84	4.04	3.78		11.23	1.88	0.04	1				1											1			
88	神田山第三遺跡	H-050	長生郡		1					1	1.52	1.16	2.04	2.87	2.22		6.37	2.08	0.04	1				1											1			
89	山木白船城跡		市原郡		1					1	1.00	1.00		2.50	2.30		5.75			1				1											1			
90	山木白船城跡		市原郡		1					1				2.00							1				1											1		
91	分目要害遺跡	11号地下式塼	市原郡		1					1	1.00	0.40	1.20	2.20	3.00		6.60	2.40	1.20	1				1											1			
92	分目要害遺跡	13A号地下式塼	市原郡		1					1	0.80	0.60	1.20	1.60	1.20		1.92	1.80	0.60	1				1												1		
93	分目要害遺跡	14号地下式塼	市原郡		1					1	1.60	1.90	0.80	1.60	2.20		3.96	2.20	1.40	1				1												1		
94	分目要害遺跡	24A号地下式塼	市原郡		1					1				2.50	2.50		6.25	1.60		1				1												1		
95	分目要害遺跡	24B号地下式塼	市原郡		1					1											1				1												1	
96	分目要害遺跡	28号地下式塼	市原郡		1					1	0.80	0.20	0.20	1.60	2.50		4.00	1.60	1.40	1				1												1		
97	分目要害遺跡	29号地下式塼	市原郡		1					1	0.80	0.40		1.40	1.20		1.68	2.40		1				1												1		
98	分目要害遺跡	30号地下式塼	市原郡		1					1	1.20	1.20		1.80	2.10		3.78	1.80		1				1												1		
99	分目要害遺跡	31号地下式塼	市原郡		1					1	1.40	0.60		1.80	1.20		2.16	2.20		1				1												1		
100	分目要害遺跡	32A号地下式塼	市原郡		1					1	0.80	0.80		1.60	2.60		4.16			1				1												1		
101	分目要害遺跡	32B号地下式塼	市原郡		1					1	0.80	0.60		1.60	2.40		4.32	3.40	3.40	1				1												1		
102	分目要害遺跡	34号地下式塼	市原郡		1					1				1.60	2.80		4.48			1				1												1		
103	分目要害遺跡	35号地下式塼	市原郡		1					1	0.80	0.60		1.60	2.49		4.32			1				1												1		
104	分目要害遺跡	36号地下式塼	市原郡		1					1	0.80	0.80		1.60	2.20		3.52			1				1												1		
105	分目要害遺跡	37A号地下式塼	市原郡		1					1	0.80	0.40		2.00	3.60		6.00	1.20	1.20	1				1												1		
106	分目要害遺跡	37B号地下式塼	市原郡		1					1	0.60	0.60	0.40	2.00	2.00		4.00	1.80	1.40	1				1												1		
107	分目要害遺跡	38号地下式塼	市原郡		1					1	1.20	1.20		2.10	2.10		4.41	2.60		1				1												1		
108	分目要害遺跡	41号地下式塼	市原郡		1					1				1.70	2.00		3.40	2.20		1				1												1		
109	真里谷城	地下式塼	君津郡							1	0.70	0.40		2.80	2.30		6.44			1				1											1			

第2章 検出遺構について

墓地検出				立	地				占地		規 模								天井部			塹坑の方向		遮蔽物								
墓地番号	遺跡名	遺構番号	旧郡	台地縁辺	台地突	低地	その他	整形区	整形区内	無関係	塹坑		主室		奥室		高さ		面積		段差		有	無	不明	整形内側	無関係	有	有りの場合か	無	不明	
											幅	奥行	幅	奥行	幅	奥行	幅	奥行	幅	奥行	幅	奥行										
1	三輪野山第三遺跡	室4	東葛飾郡	1							0.80	1.20	1.20	2.38	1.52			3.62	2.28	1.08												
2	三輪野山第三遺跡	室5	東葛飾郡	1							1.10	2.60	2.60	2.78	1.82			5.06	2.98	0.36												
3	三輪野山第三遺跡	室6	東葛飾郡	1							0.80	0.40	1.80	2.46	1.78			4.38	2.37	0.57												
4	三輪野山第三遺跡	室7	東葛飾郡	1							0.80	0.60	1.60	2.64	1.88			4.96	2.34	0.74												
5	三輪野山第三遺跡	室8	東葛飾郡	1							0.80	0.60	2.20	2.20	1.00	1.80		2.20	3.20	1.00												
6	三輪野山第三遺跡	室9	東葛飾郡	1							1.20	0.80	1.00	1.80	1.46			2.63	2.45	1.45												
7	三輪野山第三遺跡	室10	東葛飾郡	1							0.80	0.60	0.20	2.06	2.64			5.44	1.24	1.04												
8	三輪野山第三遺跡	室11	東葛飾郡	1										1.90	1.64			3.12	1.88													
9	三輪野山第三遺跡	室12	東葛飾郡	1							1.10	1.40	2.20	2.28	1.34	1.40		3.06	3.18	0.88												
10	三輪野山第三遺跡	室13	東葛飾郡	1							1.40	1.40	2.20	2.43	1.82			4.40	3.10	0.90												
11	三輪野山第三遺跡	室14	東葛飾郡	1							2.20	1.00	1.40	1.96	1.60			3.14	2.30	0.80												
12	三輪野山第三遺跡	室15	東葛飾郡	1							1.10	1.10	1.60	2.28	1.60	1.10		3.63	2.30	0.70												
13	三輪野山第三遺跡	室23	東葛飾郡	1							1.40	1.60	1.80	2.30	2.40	1.10		5.52	1.80	0.60												
14	若宮第二遺跡	S K 1	東葛飾郡	1							2.40	0.60	0.80	2.40	1.80	1.50		4.32	2.40	1.60												
15	若宮第二遺跡	S K 2	東葛飾郡	1							0.80	0.80		2.20	1.40	1.40		3.08	1.90													
16	若宮第二遺跡	S K 4	東葛飾郡	1							0.80	0.40	1.10	2.40	1.50	1.20		3.60	1.80	0.70												
17	若宮第二遺跡	S K 5	東葛飾郡	1							0.80	0.20	1.30	3.00	2.06	1.40		6.00	2.60	1.30												
18	若宮第二遺跡	S K 6	東葛飾郡	1										1.40	1.70	1.00		2.38	2.00													
19	若宮第二遺跡	S K 8	東葛飾郡	1										2.30	0.80	1.10		1.84	2.20	2.20												
20	若宮第二遺跡	S K 9	東葛飾郡	1										2.30	0.80			1.84	1.60													
21	鹿島前遺跡	212号	東葛飾郡	1							1.60	1.80		2.40	1.70			4.08	2.10													
22	鹿島前遺跡	255号	東葛飾郡	1							2.50	2.50		2.80	1.60	1.50		4.48	2.90													
23	鹿島前遺跡	267号	東葛飾郡	1							2.30	2.30		3.90	2.90	1.70		11.31	3.60													
24	鹿島前遺跡	271号	東葛飾郡	1							1.30	1.20	1.50	3.00	2.20	1.50		6.60	2.50	1.00												
25	鹿島前遺跡	356号	東葛飾郡	1							1.50	1.20	2.10	4.30	2.60			11.8	3.20	1.10												
26	布施向山遺跡	1号地下式竈	東葛飾郡	1							1.00	0.75	1.00	2.00	1.30			2.60	2.00	1.00												
27	布施向山遺跡	2号地下式竈	東葛飾郡	1							1.50	0.75	1.50	2.50	1.75			4.38	2.75	1.25												
28	布施向山遺跡	3号地下式竈	東葛飾郡	1							1.50	1.00	1.25	1.50	1.75			2.63	2.70	1.45												
29	布施向山遺跡	4号地下式竈	東葛飾郡	1							1.75	1.00		1.75	1.50			2.63	3.25													
30	布施向山遺跡	5号地下式竈	東葛飾郡	1										1.30	0.90			1.17	3.80													
31	布施向山遺跡	6号地下式竈	東葛飾郡	1							1.50	1.00	1.00	1.75	1.50			2.63	2.00	1.00												
32	布施向山遺跡	7号地下式竈	東葛飾郡	1							1.30	0.80	0.80	1.70	2.70			4.59	2.30	1.50												
33	布施向山遺跡	8号地下式竈	東葛飾郡	1							2.40	1.75	1.30	1.50	1.20			1.80	3.70	2.40												
34	印内台遺跡1・2次	1号地下式横穴	東葛飾郡	1							1.00	1.00	1.00	1.90	2.60	1.60		4.94	1.60	0.60												
35	印内台遺跡1・2次	2号地下式横穴	東葛飾郡	1							1.00	1.00	1.00	1.60	2.65	1.30		4.24	1.30													
36	印内台遺跡1・2次	3号地下式横穴	東葛飾郡	1							1.15	1.28	1.30	2.35	1.80			4.23	1.30													
37	印内台遺跡1次	1号地下式横穴	東葛飾郡	1							1.20	1.20	2.00	1.20	1.20			1.44	2.20	0.20												
38	印内台遺跡1次	2号地下式横穴	東葛飾郡	1							1.30	1.10	3.60	2.80	2.80			4.80	3.60	0.60												
39	印内台遺跡1次	3号地下式横穴	東葛飾郡	1							1.60	1.20	2.80	2.20	2.00			4.40	2.80	0.60												
40	印内台遺跡1次	4号地下式横穴	東葛飾郡	1							1.00	1.00	2.00	2.00	2.00	1.40		4.00	2.30	0.30												
41	印内台遺跡1次	5号地下式横穴	東葛飾郡	1							1.00	0.80	1.60	2.40	2.80	1.20		4.80	2.00	0.40												
42	東中山台遺跡群	073地下式竈	東葛飾郡	1							1.10	1.30	1.40	3.10	1.80			5.58	2.40	1.00												
43	東中山台遺跡群	302地下式竈	東葛飾郡	1							0.70	1.30		3.10	1.90			5.89	2.00													
44	東中山台遺跡群	306地下式竈	東葛飾郡	1							0.40	1.10		2.80	1.90			5.32	2.60													
45	東中山台遺跡群	066地下式竈	東葛飾郡	1										2.50	1.90			4.75	2.40													
46	東中山台遺跡群	062地下式竈	東葛飾郡	1							1.10	0.90	1.10	2.20	1.80			3.96	1.60	0.50												
47	東中山台遺跡群	043地下式竈	東葛飾郡	1										2.40	2.30	1.70		5.52	1.50													
48	東中山台遺跡群	005地下式竈	東葛飾郡	1							1.80	1.60	1.00	1.80	1.70			3.06	1.70	0.70												
49	東中山台遺跡群	232地下式竈	東葛飾郡	1							0.80	1.10	1.80	2.90	1.90			5.51	1.80	0.80												
50	東中山台遺跡群	237地下式竈	東葛飾郡	1							0.90	1.30	0.60	3.40	2.20			7.48	2.30	1.70												
51	東中山台遺跡群	288地下式竈	東葛飾郡	1							0.90	0.80	1.10	3.00	2.00			6.00	1.80	0.70												
52	東中山台遺跡群	285地下式竈	東葛飾郡	1							0.50	0.30	0.30	2.50	2.10			5.25	1.10	0.80												
53	東中山台遺跡群	284地下式竈	東葛飾郡	1							0.60	0.80	0.70	2.10	2.00			4.20	1.60	0.90												
54	宮内遺跡	第1号地下式坑	印旛郡	1							0.60	0.80	0.40	1.45	1.90			2.76	0.80	0.40												
55	宮内遺跡	第2号地下式坑	印旛郡	1							0.20	0.50	0.60	1.90	2.10			3.99	1.00	0.40												
56	宮内遺跡	第3号地下式坑	印旛郡	1							0.30	0.20	0.50	1.60	1.90			3.04	0.90	0.40												
57	宮内遺跡	第4号地下式坑	印旛郡	1							0.40	0.40	0.20	1.70	1.95			3.32	0.90	0.70												
58	宮内遺跡	第5号地下式坑	印旛郡	1							0.60	0.25	0.10	2.10	2.70			5.67	0.80	0.70												
59	宮内遺跡	第6号地下式坑	印旛郡	1							0.80	0.70		1.55	2.80			3.10	1.10													
60	宮内遺跡	第7号地下式坑	印旛郡	1							0.70	0.80	1.10	4.75	2.50			11.88	2.30	1.20												
61	宮内遺跡	第8号地下式坑	印旛郡	1							0.70	0.80	1.80	2.20	1.70			3.74	2.55	0.75												
62	宮内遺跡	第9号地下式坑	印旛郡	1					</																							

第2章 検出遺構について

墓地検出			立地		占地		規模									天井部			竪坑の方向			遮蔽物							
墓地番号	遺跡名	遺構番号	旧郡	台地縁辺	台地奥	低地	その他	整形区緑	整形区内	無関係	竪坑			主室			高さ			有	無	不明	整形内側	谷側	無関係	有	有りの場合か	無	不明
											幅	奥行	深さ	幅	奥行	深さ	幅	奥行	深さ										
64	宮内遺跡	第11号地下式坑	印旛郡								0.70	1.10	1.50	3.70	1.50		6.66	2.30	0.80										
65	島内遺跡	301号跡	印旛郡								1.60	1.40	2.20	2.10	1.10		2.31	2.20	0.00										
66	島内遺跡	344号跡	印旛郡								1.20	1.40	1.35	2.30	1.50		3.45	1.75	0.40										
67	古屋敷遺跡	第1号室状遺構	印旛郡								1.20	1.20	1.60	2.70	2.40		6.48	1.90	0.30										
68	古屋敷遺跡	第2号室状遺構	印旛郡								0.20	0.30		2.40	2.10		5.04	1.40											
69	江原台遺跡	1号地下式塚	印旛郡								3.80	3.60	2.60	2.15	1.45		3.12	3.45	0.85										
70	江原台遺跡	2号地下式塚	印旛郡								2.40	2.40	2.20	2.00	1.30		2.60	2.70	0.50										
71	臼井屋敷跡遺跡	1号地下式坑	印旛郡								1.20	1.00	2.50	2.84	2.04		5.79	3.14	0.64										
72	臼井屋敷跡遺跡	2号地下式坑	印旛郡								0.80	0.60	2.10	3.45	1.80		6.21	3.20	1.10										
73	臼井屋敷跡遺跡	3号地下式坑	印旛郡								1.20	0.50	1.40	2.00	1.70		3.40	2.30	0.90										
74	臼井屋敷跡遺跡	4号地下式坑	印旛郡								1.20	0.55	0.25	4.00	2.40		9.60	1.20	0.95										
75	臼井屋敷跡遺跡	5号地下式坑	印旛郡								1.50	2.90	2.40	3.40	2.00		8.84	2.20	-0.20										
76	臼井屋敷跡遺跡	6号地下式坑	印旛郡								2.20	2.60	0.40	4.00	2.00		10.40	2.60	2.20										
77	臼井屋敷跡遺跡	7号地下式坑	印旛郡								1.30	1.90	1.40	2.01	2.05		4.12	2.00	0.60										
78	臼井屋敷跡遺跡	8号地下式坑	印旛郡								1.50	1.10	1.70	2.60	2.00	1.40	5.20	2.40	0.70										
79	臼井屋敷跡遺跡	9号地下式坑	印旛郡											1.80	1.40		2.66	1.70											
80	臼井屋敷跡遺跡	10号地下式坑	印旛郡											1.06	1.82	1.00	1.93	1.40											
81	臼井屋敷跡遺跡	11号地下式坑	印旛郡											2.34	1.60		3.74	0.60											
82	和良比掘込II地区	010号地下式坑	印旛郡								0.95	0.85	1.48	2.90	2.04	1.63	5.92	2.38	0.90										
83	和良比掘込II地区	017号地下式坑	印旛郡								1.26	1.60	0.70	3.33	2.03	1.40	6.76	1.88	1.18										
84	和良比掘込II地区	018号地下式坑	印旛郡								0.64	0.64	1.40	2.36	1.60	1.29	3.78	2.04	0.64										
85	和良比掘込II地区	019号地下式坑	印旛郡								—	—	1.58		1.35		2.56	0.98											
86	和良比掘込II地区	020号地下式坑	印旛郡								1.67	1.00	1.47	2.10	2.00	1.30	4.20	2.39	0.92										
87	和良比掘込II地区	021号地下式坑	印旛郡								1.03	1.03	0.92	2.73	2.32	1.35	6.33	1.51	0.59										
88	和良比掘込II地区	022号地下式坑	印旛郡								1.15	1.15	2.15	1.70	1.30	1.40	2.21	2.90	0.75										
89	上本佐倉上宿遺跡	VI区1号地下式坑	印旛郡								1.10	0.90	0.80	3.00	2.10	1.50	6.30	2.00	1.20										
90	上本佐倉上宿遺跡	VI区2号地下式坑	印旛郡								1.00	1.00	0.70	2.60	2.20	1.30	5.72	0.70	0.00										
91	上本佐倉上宿遺跡	V区1号地下式坑	印旛郡								2.60	2.10	1.00				1.50	0.80											
92	上本佐倉上宿遺跡	V区2号地下式坑	印旛郡								1.20	1.50	1.25																
93	井戸向遺跡	U001号遺構	千葉郡								1.05	1.16	0.82	4.00	2.90		11.60	1.85	1.03										
94	井戸向遺跡	U002号遺構	千葉郡								1.09	1.06	0.60	2.95	1.87		5.52	1.82	1.22										
95	井戸向遺跡	U003号遺構	千葉郡								1.03	1.08	1.10	2.86	2.26		6.57	1.70	0.60										
96	井戸向遺跡	U004号遺構	千葉郡											3.50	3.05		10.68	1.60											
97	井戸向遺跡	U005号遺構	千葉郡								1.50	1.30	0.76	3.40	2.70		9.18	1.94	1.18										
98	井戸向遺跡	U006号遺構	千葉郡								0.82	1.40	0.66	3.05	1.44		4.39	1.15	0.49										
99	井戸向遺跡	U007号遺構	千葉郡								1.33	1.04	0.25	2.94	2.50		7.35	1.82	1.57										
100	井戸向遺跡	U008号遺構	千葉郡											3.08	3.30		10.16	1.38											
101	井戸向遺跡	U009号遺構	千葉郡								1.10	1.05	0.68	2.60	2.60		6.78	1.64	0.96										
102	井戸向遺跡	U010号遺構	千葉郡								1.25	1.06	1.00	3.60	2.96		10.66	1.20	0.20										
103	井戸向遺跡	U011号遺構	千葉郡								1.54	0.42	0.06	2.90	2.90		8.41	1.54	1.48										
104	井戸向遺跡	U012号遺構	千葉郡								0.92	0.93	0.76	2.78	2.00		5.56	1.76	1.06										
105	井戸向遺跡	U013号遺構	千葉郡								2.10	1.06	0.50	2.86	2.10		6.22	1.80	1.30										
106	井戸向遺跡	U014号遺構	千葉郡								1.88	1.03	1.18	3.00	1.68		5.04	2.24	1.06										
107	井戸向遺跡	U015号遺構	千葉郡								0.82	0.90	1.13	1.88	1.75		3.47	1.96	0.83										
108	井戸向遺跡	U016号遺構	千葉郡								1.00	0.60	0.66	3.00	2.18		6.54	1.38	0.72										
109	井戸向遺跡	U017号遺構	千葉郡								2.20	1.47	1.40	2.16	1.40		3.02	2.04	0.64										
110	井戸向遺跡	U018号遺構	千葉郡								1.15	1.00	1.76	2.72	1.80		4.90	1.76	0.00										
111	井戸向遺跡	U019号遺構	千葉郡								0.84	0.64	0.65	1.54	1.10		1.69	1.54	0.89										
112	井戸向遺跡	U020号遺構	千葉郡								1.08	0.70	0.45	3.00	3.00		3.00	1.10	0.65										
113	井戸向遺跡	U021号遺構	千葉郡								0.85	0.85	1.30	0.70	0.65		0.46	1.50	0.20										
114	井戸向遺跡	U022号遺構	千葉郡								0.90	0.86	0.86	2.50	1.52		3.80	1.75	0.89										
115	井戸向遺跡	U023号遺構	千葉郡								0.80	1.00	1.25	2.42	2.00		4.84	2.05	0.80										
116	井戸向遺跡	U024号遺構	千葉郡								1.70	1.40	1.10	1.88	1.38		2.32	2.10	1.00										
117	西屋敷遺跡	204号跡	千葉郡								1.10	1.80	0.75	2.30	1.40	1.50	3.22	2.10	1.35										
118	西屋敷遺跡	205号跡	千葉郡								1.40	1.40	1.15	2.50	1.60	1.40	4.00	2.15	1.00										
119	西屋敷遺跡	300号跡	千葉郡								1.80	1.80	1.20	2.55	1.70		4.34	2.60	0.80										
120	西屋敷遺跡	367号跡	千葉郡								1.80	2.00	1.30	3.30	2.25		7.43	1.70	0.40										
121	西屋敷遺跡	401号跡	千葉郡								1.60	1.60	1.00	2.90	2.30		6.67	2.50	1.50										
122	西屋敷遺跡	403号跡	千葉郡								1.30	0.30	0.50	1.50	1.20		1.60	1.20	0.70										
123	西屋敷遺跡	406号跡	千葉郡								1.30	1.60	1.80	2.75	1.85		5.09	2.50	0.70										
124	西屋敷遺跡	423号跡	千葉郡								1.50	1.50	1.20	3.25	2.85		8.61	1.95	0.75										

第2章 検出遺構について

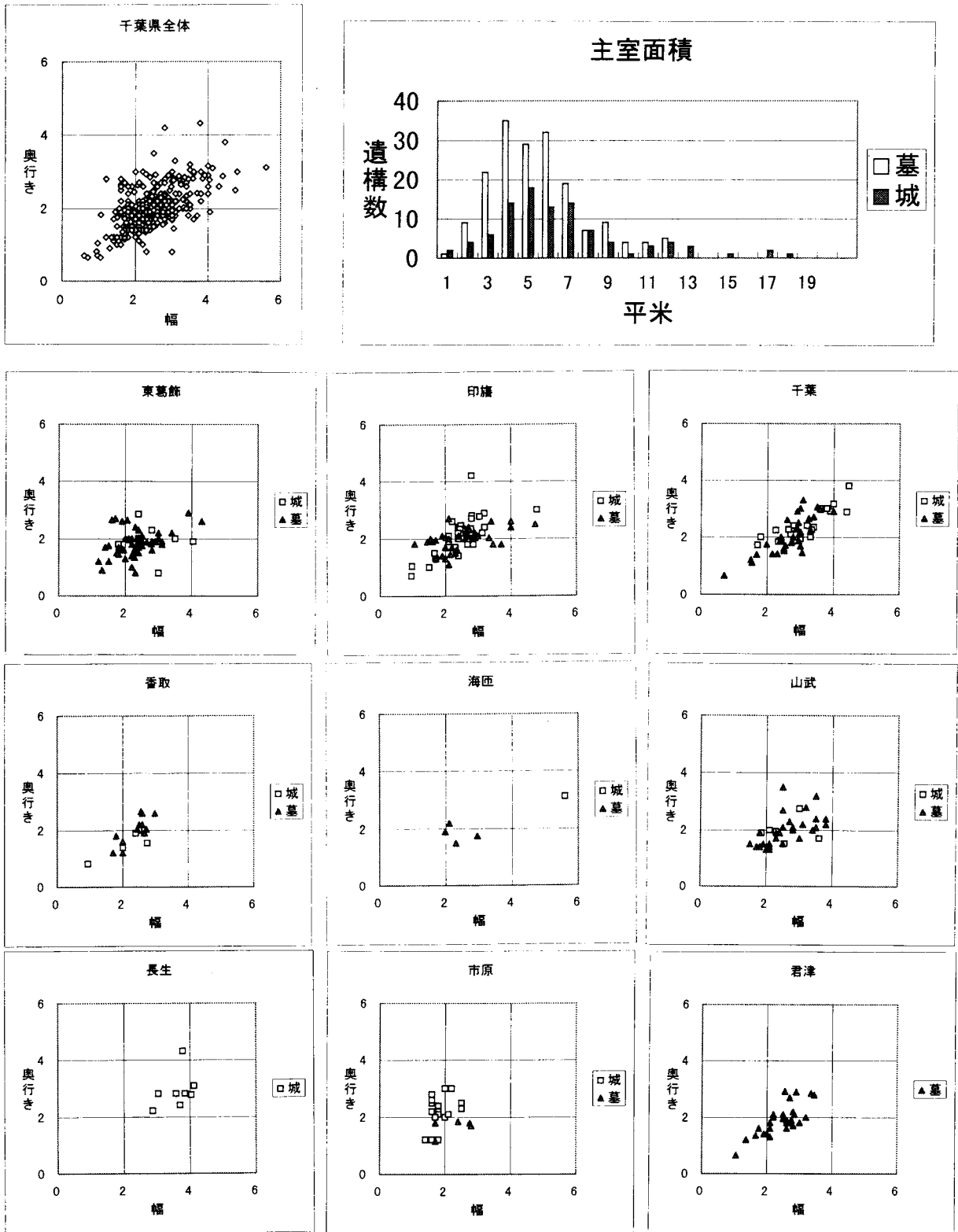
墓地検出				立地		占地		規模								天井部		竪坑の方向		遺蔵物								
墓地番号	遺跡名	遺構番号	旧郡	台地縁辺	台地奥	低地	その他	整形区	無関係	竪坑：幅	：奥行	：深さ	主室：幅	：奥行	：高さ	：面積	：深さ	：段差	有	無	不明	整形内側	谷側	無関係	有	有りの場合何か	無	不明
125	西屋敷遺跡	67号跡	千葉郡							2.00	1.40	1.50	2.40	1.90		4.56	1.90	0.40										
126	下男山遺跡	SK-1	香取郡							0.80	1.02	0.60	2.66	1.92		5.11	1.66	1.06										
127	下男山遺跡	SK-2	香取郡							1.62	1.54	1.40	2.56	2.66		6.81	2.08	0.68										
128	下男山遺跡	SK-3	香取郡							0.72	0.88	0.80	2.72	2.04		5.55	1.38	0.58										
129	下男山遺跡	SK-6	香取郡							0.74	1.04	0.80	2.44	2.04		4.98	1.40	0.60										
130	下男山遺跡	SK-7	香取郡							0.88	1.30	1.20	2.00	1.60		3.20	2.00	0.80										
131	下男山遺跡	SK-8	香取郡							1.20	1.10	1.10	2.50	2.20		5.50	1.88	0.78										
132	下男山遺跡	SK-9	香取郡							0.88	1.60	1.60	2.98	2.60		7.75	2.04	0.44										
133	下男山遺跡	SK-12	香取郡							1.00	1.50	1.00	2.66	1.90		5.05	1.66	0.66										
134	吉原三王遺跡	503号土壇	香取郡							1.10	1.10	2.20	1.70	1.20		2.04	2.40	0.20										
135	吉原三王遺跡	515号土壇	香取郡							0.60	0.60	1.80	2.00	1.20		2.40	2.40	0.60										
136	吉原三王遺跡	523号土壇	香取郡							0.90	0.40	2.40	2.60	2.60		6.76	1.60	-0.80										
137	吉原三王遺跡	583号土壇	香取郡							0.90	0.80	1.20	1.80	1.80		3.24	2.10	0.90										
138	吉原三王遺跡	635号土壇	香取郡							1.00	0.90	1.20	2.60	2.20		5.72	2.20	1.00										
139	八石田遺跡	1 A号地下式土壇	海防郡							1.10	1.00	0.90	2.95	1.75		5.16	1.52	0.62										
140	八石田遺跡	1 B号地下式土壇	海防郡							1.00	0.90	1.20	1.98	1.98		3.76	1.84	0.64										
141	八石田遺跡	2号地下式土壇	海防郡							1.10	1.00	0.70	2.10	2.20		4.62	2.90	2.20										
142	八石田遺跡	3号地下式土壇	海防郡							1.30	1.20	1.30	2.30	1.50		3.45	1.60	0.30										
143	吉宿・上谷遺跡	P-061	山武郡							1.20	1.30	1.00	2.50	3.50		8.75	1.50	0.50										
144	吉宿・上谷遺跡	P-062	山武郡							1.10	1.10	1.00	2.30	1.90	1.40	4.37	1.30	0.30										
145	吉宿・上谷遺跡	P-063	山武郡							1.10	1.10	0.40	1.50	1.50		2.25	0.90	0.50										
146	吉宿・上谷遺跡	P-067	山武郡							1.20	1.30	1.10	2.80	2.10		5.88	1.80	0.70										
147	吉宿・上谷遺跡	P-070	山武郡							1.50	1.30	1.20	2.70	2.30		6.21	1.70	0.50										
148	吉宿・上谷遺跡	P-072	山武郡							1.20	1.20	0.30	3.10	2.20		6.62	2.00	1.70										
149	吉宿・上谷遺跡	P-091	山武郡							1.70	1.60	1.20	2.50	2.10		5.25	2.10	0.90										
150	吉宿・上谷遺跡	P-097	山武郡							1.40	1.80	0.20	1.90	1.90		3.42	1.80	1.60										
151	吉宿・上谷遺跡	P-115	山武郡							1.20	1.10	1.80	2.10	1.30		3.15	1.50	0.50										
152	吉宿・上谷遺跡	P-163	山武郡							1.50	1.20	0.50	2.40	1.90		4.56	1.60	1.10										
153	吉宿・上谷遺跡	P-164	山武郡							1.10	1.00	0.70	3.80	2.20		6.36	1.70	1.00										
154	吉宿・上谷遺跡	P-175	山武郡							3.00	2.00	1.40	3.00	1.70		5.10	2.30	0.90										
155	吉宿・上谷遺跡	P-182・183	山武郡							1.60	1.40	1.00	2.10	1.40		2.94	1.50	0.50										
156	吉宿・上谷遺跡	P-177	山武郡							1.20	1.10	1.00	3.40	2.00		6.80	1.70	0.70										
157	吉宿・上谷遺跡	P-178	山武郡							1.30	1.80	1.20	3.80	2.40		9.12	2.10	0.90										
158	吉宿・上谷遺跡	P-191	山武郡							1.50	1.80	1.00	3.50	2.40		8.40	2.00	1.00										
159	吉宿・上谷遺跡	P-288・287	山武郡							1.40	1.50	0.70	3.50	2.10		7.35	1.00	0.30										
160	山中台遺跡	1号地下式土壇	山武郡							0.80	0.40	0.50	3.50	3.20		11.20	2.90	2.40										
161	山中台遺跡	2号地下式土壇	山武郡							0.80	0.20		3.20	2.50		8.96	1.70											
162	山中台遺跡	3号地下式土壇	山武郡							1.10	0.60	1.30	2.50	2.70	2.00	6.75	2.70	1.40										
163	山中台遺跡	4号地下式土壇	山武郡																									
164	山中台遺跡	5号地下式土壇	山武郡																									
165	山中台遺跡	6号地下式土壇	山武郡																									
166	山中台遺跡	7号地下式土壇	山武郡							0.40	0.60	0.60	2.30	1.70		3.91	1.60	1.00										
167	久我台遺跡	SX 1	山武郡							1.10	0.85	1.40	1.90	1.50		2.85	2.45	1.05										
168	久我台遺跡	SX 2	山武郡							0.90	0.70	1.50	1.80	1.40	1.60	2.52	2.50	1.00										
169	久我台遺跡	SX 3	山武郡							0.80	1.05	0.80	1.70	1.40		2.38	1.60	0.80										
170	久我台遺跡	SX 4	山武郡							0.60	0.90	1.60	2.00	1.30	1.50	2.60	2.60	1.00										
171	久我台遺跡	SX 5	山武郡							0.90	0.90	1.20	2.10	1.30	1.60	2.73	2.20	1.00										
172	久我台遺跡	SX 6	山武郡							1.20	0.20	0.85	2.50	1.50		3.75	1.30	0.45										
173	久我台遺跡	SX 7	山武郡							0.35	0.20	2.55	2.80	2.00	1.90	5.60	2.55	0.00										
174	草刈六之台遺跡	246号地下式土壇	市原郡							0.77	0.85	1.45	2.40	1.85	1.50	4.44	2.75	1.30										
175	草刈六之台遺跡	345号地下式土壇	市原郡							0.60	0.70	0.95	1.70	1.15	1.10	1.98	2.05	1.10										
176	草刈六之台遺跡	251号地下式土壇	市原郡							0.70	0.87	1.25	1.70	1.80		3.06	2.08	0.83										
177	草刈六之台遺跡	761号地下式土壇	市原郡							0.80	0.60	1.63	2.76	1.80	1.54	4.97	3.17	1.54										
178	草刈六之台遺跡	777号地下式土壇	市原郡							0.80	1.00		2.80	1.70	1.20	4.76	1.20											
179	神田遺跡	73号跡	君津郡							1.50	1.60	3.00	3.45	2.80	2.00	9.66	3.20	0.20										
180	神田遺跡	74号跡	君津郡							1.60	1.70	2.65	2.90	2.90	2.00	8.41	3.25	0.60										
181	神田遺跡	75号跡	君津郡							1.87	3.30	2.75	3.55	3.92	1.68	7.45	3.10	0.35										
182	神田遺跡	79号跡	君津郡							1.74	1.90	1.70	2.70	2.70	1.70	7.29	3.00	1.30										
183	荒久(2)遺跡	SK-68	君津郡							2	0.2	0.2	2.2	2.1		4.62	2	1.8										
184	荒久(2)遺跡	SK-70 a	君津郡							0.8	0.6		1.35	2.85		6.5475	2.8	1.8										
185	荒久(2)遺跡	SK-31	君津郡							1	1	0.8	1.75	1.6	0.8	2.6	1.2	0.4										

第2章 検出遺構について

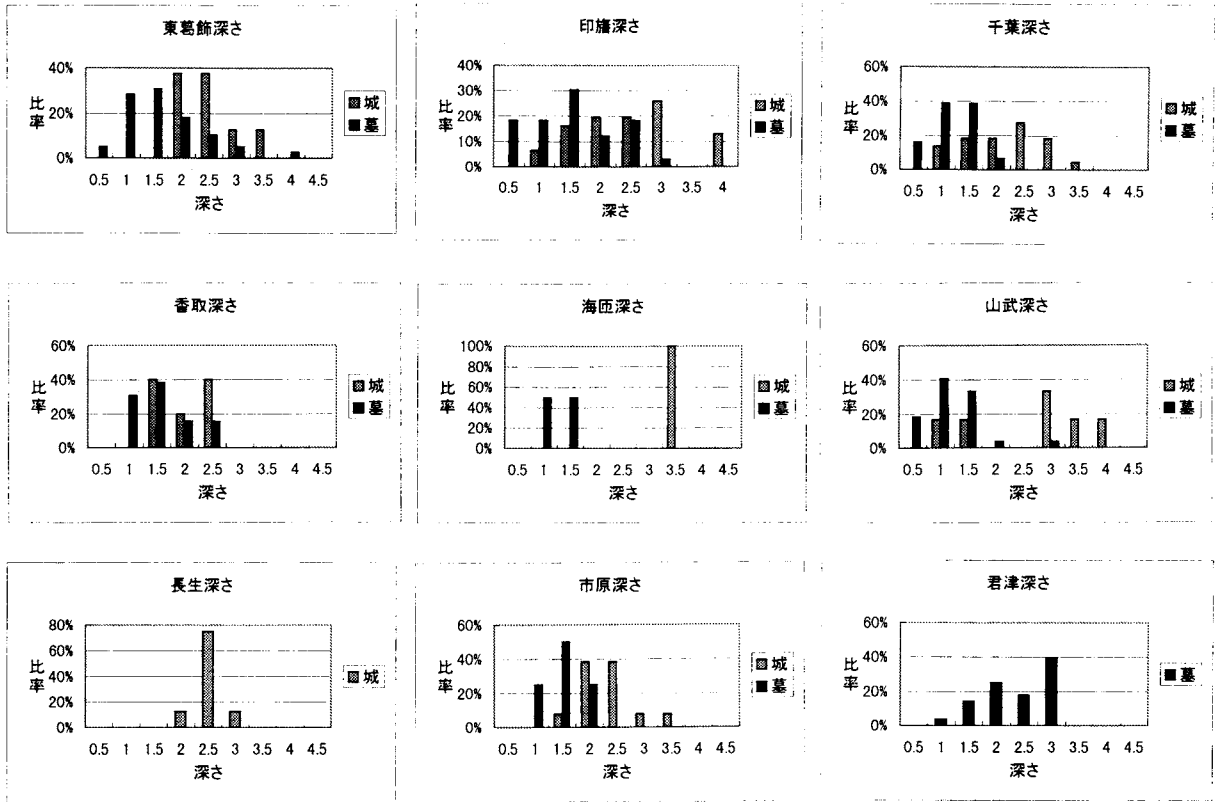
墓地検出			立地				占地				規模							天井部			竪坑の方向			遮蔽物								
墓地番号	遺跡名	遺構番号	旧郡	台地縁辺	台地奥	低地	その他	整形区縁	整形区内	無関係	竪坑幅	奥行	深さ	主室幅	奥行	高さ	面積	深さ	段差	有	無	不明	整形内側	谷側	無関係	有	有りの場合何か	無	不明			
																														62	118	0
186	荒久(2)遺跡	SK-13	君津郡							1	0.9	1.2	1.3	2.75	1.8		4.95	1.3	0									1				
187	荒久(2)遺跡	SK-12	君津郡	1						1	1.95	1.95	2.4	2.2	2	1.5	4.4	2.4	0	1				1					1			
188	荒久(2)遺跡	SK-71	君津郡	1						1	1.2		1.5	1.35	1.2		1.82	1.5	0	1				1					1			
189	荒久(2)遺跡	SK-87	君津郡	1						1	1.15	1.25	0.3	1.05	0.65	0.65	0.6825	0.6	0.5	1										1		
190	荒久(2)遺跡	SK-41	君津郡	1						1	1	1	1.2	2.1	1.8	2	3.78	2.45	1.25											1		
191	荒久(2)遺跡	SK-43	君津郡	1						1	1.3	1.3	1.2	2.6	1.9		4.94	2.75	1.55					1						1		
192	荒久(2)遺跡	SK-61	君津郡	1						1	1.1	1.1	1.7	2.75	1.8		5.225	1.7	0	1				1						1		
193	荒久(2)遺跡	SK-58	君津郡	1						1	0.55		2.55	2.8	2.2		6.16	2.55	0					1						1		
194	荒久(2)遺跡	SK-56	君津郡	1						1	1		1.4	2.6	1.8		4.68	2.1	0.7											1		
195	荒久(2)遺跡	SK-113	君津郡	1						1	0.7		0.3	2	1.4		2.8	1.25	0.95					1						1		
196	荒久(2)遺跡	SK-117	君津郡	1						1	1.4		1.6	2.6	1.95		4.875	1.9	0.3					1						1		
197	荒久(2)遺跡	SK-122	君津郡	1						1	1.4	1.4	2.6	2.6	1.6	1.7	4.16	2.6	0	1									1			
198	荒久(2)遺跡	SK-88	君津郡	1						1	1.2	1	2	2.1	1.3	1.8	2.73	2.63	0.63	1										1		
199	荒久(2)遺跡	SK-89	君津郡	1						1	1.4	1.4	1.5	3	1.8	1.5	5.4	2	0.5	1										1		
200	荒久(2)遺跡	SK-90	君津郡	1						1	1	0.9	1.7	2.1	1.6	1.9	3.36	2.8	1.1											1		
201	荒久(2)遺跡	SK-135	君津郡	1						1	1.7	2.9	1.8	2.5	2.1	1.55	5.25	2.55	0.75											1		
202	荒久(2)遺跡	SK-143	君津郡	1						1	1.4	1.1	1.4	3.2	2	1.65	6.4	2.45	1.05											1		
203	荒久(2)遺跡	SK-240	君津郡	1						1	1.2		1.65	2.6	1.7		4.76	2.25	0.6											1		
204	荒久(2)遺跡	SK-158	君津郡	1						1	1.2		0.6	1.65	1.35		2.2275	1.8	1.2											1		
205	荒久(2)遺跡	SK-231	君津郡	1						1	0.9	0.9	2.8	2.85	2.1	1.7	5.965	2.8	0	1										1		
206	荒久(2)遺跡	SK-175	君津郡	1						1	0.9		0.7	1.9	1.4		2.66	1.9	1.2												1	
			62 118 0 0 27 34 120																	158 9 13 38 60 80 0			63 114									
			34% 65% 0% 0% 15% 19% 66%																	87% 5% 7% 21% 33% 44% 0%			35% 63%									

第9表 地下式坑出土遺物

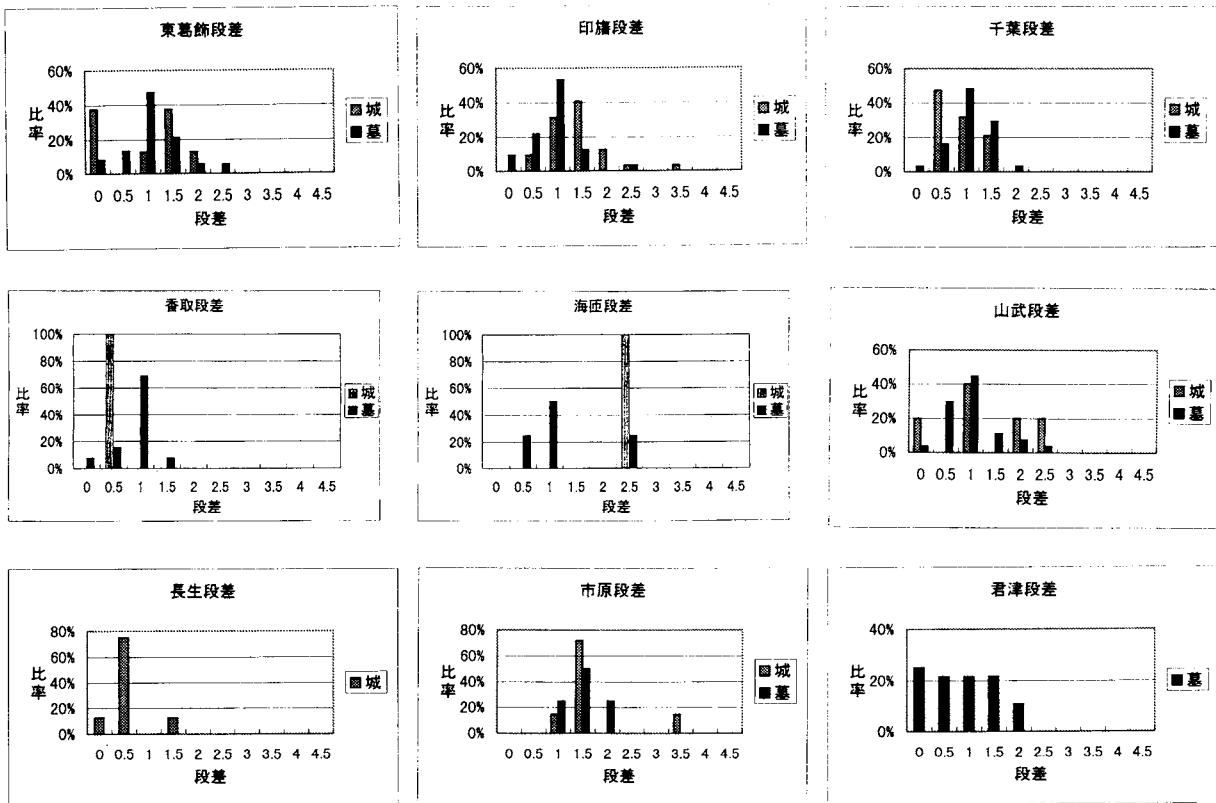
性質	種類	墓							城							計															
		市原	山武	香取	千葉	印旛	東葛	君津	市原	長生	山武	香取	千葉	印旛	東葛																
石	石			1			1																								1
石	五輪塔																														3
石	石遺物		1				1																								0
金属	鏡					1																									0
金属	刀子																														1
金属	古銭					1		1		2	1					1															2
器	カラケ					2				2																					4
器	搔鉢							1		1																					1
器	火鉢		1							1																					0
青磁	碗		1					1		2																					0
瀝美	甕		1							1																					0
古瀬戸	平鉢							1		1																					0
瀬戸	平碗			1						1																					0
瀬戸	皿									0																					3
瀬戸美濃	小皿									1			1																		1
瀬戸美濃	盤									1																					0
瀬戸美濃	天目茶碗			1						1					1																2
常滑	甕	1	1			1	1			4					1																1
常滑	平鉢					1				1																					0
陶磁器										0					1																2
有機質	貝							1		1					1																2
有機質	骨									2					2																0
有機質	敷物									1					1																0
有機質	獣骨									1					1																0
有機質	炭化材									1					1																11
有機質	灰									0																					1
	計		1	7	1	8	3	8	28	3	13	2	4	1	6	5	1	35													



第175図 地下式坑主室面積 (単位はm)



第176図 地下式坑深さ



第177図 地下式坑段差

遺構形態については、半田式のYがほとんどで、Mは僅か3例である。Yの中でも階段等を有さない1が4/5を占め、その中でも竪坑と主室が近接するc・d類が多い。竪坑の平面形については、若干方形が多い傾向に有る。

池上分類ではTが2/3以上を占め、次いでS、長の順になる。この他にr、凸が若干見られる。各平面形ともYが多く、あまり羨道部は見られない。

形態分類については、段や羨道の有無については、共通した分類であり、有段無羨道のものが多いことを示している。半田分類からは、有段と言っても階段状の施設等を持たないものが多いということが判明している。また池上分類からは、T・S・長の割合がほぼ6：3：0.5の割合で、残り0.5がr・凸を呈している。

6. 地下式坑の規模

今回地下式坑の客観的対比を目指して、竪坑、主室の規模を計測値によって表した。

主室の大きさをグラフにまとめると(第175図)、幅と奥行き比が同じ1：1から、幅が奥行きより長くなる3：2までになるような比率のものが大半を占める。このことを、郡別に見てみると、香取郡や千葉郡においては同様の傾向が明確に窺える。しかし、東葛郡や印旛郡・市原郡においては、幅と奥行き比が2：3となるような、平面が長方形を呈するものが目に付く。

主室の幅と奥行きを乗算した面積についてみると(第175図)、城館跡・墓地ともに4㎡～7㎡のものが多く、しかし、墓地から確認された地下式坑は、12㎡を超えるものが見られないのに対して、少数例ながら城館跡においては13㎡～18㎡に至る大きめのものが認められる。

確認面から計測した深さを、各郡別に城館跡検出数、墓地検出数の比率で示したもの⁹⁾を見てみると(第176図)、城館跡・墓地いずれもかなりのばらつきがあるが、1m～2mの範囲の数量において、城館跡から確認されたものよりも、墓地から検出されたものの方がかなり多い傾向に有る。東葛郡、印旛郡、千葉においては城館跡から検出されたものが2m～3mの範囲において墓地から検出されたものを上回っている⁹⁾。先の主室面積と合わせて考えると、城館跡から検出されたものは、墓域から検出されたものよりひとまわり大きい傾向を示している。

同じような状況が、竪坑の深さにおいても見て取れる。竪坑の場合は、墓地から確認された地下式坑は約1mのものが最も多く、城館跡から確認されたものの倍以上を数える。

また、竪坑と主室の段差(主室の深さ－竪坑の深さ)においても、墓地から確認された地下式坑は、1m～2mの範囲に集中する傾向を見て取れる(第177図)。

1遺跡における地下式坑の数量については、城館跡も墓地も1基から20数基と幅広い(第10表)。しかし墓地においては、単独で確認されることは少なく、4基～7基、10数基を数えるものが多い。台地整形区画の認められる遺跡においては4基～11基、特に7基～8基確認されるものが多い。このことは、墓地における地下式坑が、群をなして構築される傾向にあることを示している。これに対して城館跡では1遺跡において1基～2基しか確認されない例が多いことを示している。但し1基～2基しか確認されない城館跡についても、調査範囲が城館跡の一部分にすぎず、未調査部分において存在している可能性は否定できない。

7. 城館跡と墓地の比較

城館跡で検出された地下式坑と、墓地で検出された地下式坑を比べると、立地においては、どちらも台地上にあり、その台地上でも縁辺、奥ほぼ同数であった。台地整形区画については、どちらも確認出来なかった例が多い。ただし城館跡において検出されたものが、城館としてその空間が使用される以前に構築されたものであり、城館構築の際削平されたと考えることも出来る。しかし城館跡から検出された地下式坑の深さは、墓地から検出された地下式坑と比べて浅いと言うことは少なく、どちらかといえば深いという傾向が窺える。城館と地下式坑の間に前後関係があったにしても、台地整形区画が存在していた可能性は少ないと言えよう。

天井についてはどちらも掘り残しの天井で占められているが、墓地においては若干例ではあるが掘り残しではない可能性を指摘できるものが存在している。南関東においても、天井が確認出来ない地下式坑において、崩落等によって天井部を失ったもの以外の理由も考えてみるべきであろう。竪坑の方向については、墓地において主室側より低い場所を選んでいる例が若干多い傾向にある。しかしそれは、台地整形区画に関わるものが4割近くを占めており、それ以外の谷側を向いているものは、山側を向いているものよりは少ない。竪坑の方向については、それが主室よりも高いとか低いと言う理由で決められるのではなく、他の要因が存在していると考えべきであろう。その例として台地整形区画の存在を、竪坑の掘削面を主室の地表より下げるためのものではなく、平面的な区域の設定にあるとすれば、他の例においても何らかの形で区域が設定されており、それに従って竪坑の方向が決定されたと考えられる。

遮蔽物については、ほとんど認められなかった。地下式坑の構築時にその存在を想定していたかどうかはなお検討の余地はあるが、最終的な段階では存在しなかったと言えよう。

付帯施設については、ピット、壁溝が多いと言う共通点が指摘できる。但し墓地から検出されたものには少数例ながら、龕や棺座のように、葬制と関るものが認められるのに対して、城館跡からのものには、明確に葬制に関ると判断できるものは認められなかった。

出土遺物については、城館跡において検出されたものの方が比率的には若干多い傾向にある（第9表）。但しそれは炭化材の検出例が際立ったことによるもので、それを除けば墓地から検出されたものの方が質量共に勝っている。しかし何れの場合においてもその遺物内容から、地下式坑が葬送施設とする根拠にはならないが、貯蔵用の施設とするにもあまりに貧弱な内容である。

周辺に見られる遺構として、城館跡においては掘立柱建物が卓越しているが、これは地下式坑と同時存在していたと言う確証は無く、掘立柱の柱穴と重複した例も認められることから、地下式坑の機能が失われた後で構築された可能性が高い。それよりも少数例ながら確認されている火葬施設のように葬制を示す遺構の存在を注意すべきであろう。

地下式坑の形態については、城館跡・墓地何れから検出されたものについても、竪坑と主室の間に段を有し、羨道、階段などを伴わずに主室に至り、主室は竪坑側から見て横長に普請されているものが多い傾向にある。但し主室の形態については、墓地から検出されたもののほうが、バラエティーに富んでいるということが出来る。

地下式坑の年代については、城館跡・墓地何れにおいても明確な時期を挙げることは出来ない。今回地下式坑を検出した遺跡の存続時期は、「第3章出土遺物」から時期を類推すると、その最古は吉原三王遺跡の11世紀後半、最新のもので三輪野山遺跡の19世紀前半であるが、これは遺跡としての年代であり、地下

式坑そのものと直接関係するとは限らない。しかしその他の神田第III遺跡や高品城、東中山遺跡や井戸向遺跡などを合わせて見ると、15世紀段階にこれらの遺跡の存続時期がまとまる傾向がある。地下式坑についてもこの周辺に関係する可能性を考えるべきであろう。

8. まとめ

城館跡・墓地それぞれの遺跡から検出された地下式坑について、様々な角度から検討を加えたところ、両者には類似する点が多々認められることから、大半の城館跡における地下式坑には、その機能もまた葬送施設という同じ働きのために構築されたと考えるべきかもしれない。高品城跡や小林城跡・和良比掘込城跡などがその例である。

城館跡において群集する地下式坑の存在について、その多くは、その場所が、城館として機能する以前に構築されたものと言えよう。その場所は、地下式坑を構築した地理的・社会的・精神的連携を持った人々の葬送に関するものであった。しかしその人々にとって、地下式坑を構築する墓地が、城館を構築する場所に変化していったと捉えられる。その際大規模な土木工事が行われたことになるが、その工事において、地表面の削平はあまり行われていないと考えられる。これは先に述べたとおり、城館跡から確認された地下式坑も、墓地から確認された地下式坑と深さにおいて遜色がない状況を呈しているからである。地下式坑を作るための空間としても、ある程度の土木工事が行われ、その結果として存在した造成地に城館としての施設を継ぎ足すような形で変異していったと考えられる。

また、城館跡から検出された地下式坑については、その葬送の対象者において、墓地から検出されたものとは、階層などが若干異なるのではないだろうか。城館跡から検出された地下式坑は、墓地が城館へと変化したときに土木工事が行われたとしても、深さを減じたと感じさせないほど深く掘り窪めていたのに対して、墓地であり続けたような遺跡から検出された地下式坑は、その後の土木工事が行われていないにも関わらず、深さが浅い状況を呈している。

高品城跡においては、城館跡内から25基の地下式坑が検出されている（第48図・図版7-1）が、この25基は調査範囲の南北2か所にまとまって分布している。北側のまとまりをI群、南側のまとまりをII群とし、地下式坑の数は、それぞれ11基と14基で南側のII群がやや多い傾向にある。両群の間には、深さにおいて、南側のものが北側のものより深い傾向を示している。築瀬裕一氏は、I群から検出された地下式坑の形態がII群の地下式坑のものより簡略化されていることから両者の違いを、南側のII群が古く、その後浅いI群のものが構築されたとして、時期差に求めている。古いものほど深くしっかりしたものが構築され、新しくなるにつれて浅くシンプルなものへと変化していくと言う考えは、他の地下式坑についてもこの傾向を当て嵌めることができるのではないだろうか。高品城と同様に、近接して検出された和良比掘込城跡の地下式坑13基と和良比掘込II地区の6基・和良比台畑地区の1基計7基において、その面積が、前者の平均は6.2㎡なのに対して後者が4.9㎡、深さが、前者は3.0mなのに対して後者が1.7mと差が認められる。このことは高品城跡の結果と符合している。

地下式坑が、時代を経るに従って、浅くシンプルになる傾向をもっていると考えると和良比掘込城跡の結果を見ると、当初墓地であった場所が、城館へと変化し、少し離れた場所に墓地を構築したとも考えられるが、高品城跡のように前後差を有する墓地群が何れも城館へと変化している様子もあることから、城館の構築場所は、早くから地下式坑を構築出来た集団に関する場所と考えるべきではないだろうか。これは、

古くから地下式坑を使用していた集団の占有地が、城館へと変化したことになる。

笹生氏は、千葉県における城館跡内からの地下式坑の検出については、上層農民層より一段高い土豪層の墓域が、城域へと変化していく状況を想定されている^{②-302}。この論考において、現在われわれに地下式坑として認識される遺構が検出する遺跡の性格は、その地下式坑を構築した集団の階層における、その後の領域に対する意識の変革の有無によって決定付けられたものとされている。

また墓域を城域に変化させた一因について、井上哲朗氏は、「村の城」として、村落間紛争等から始まる防御施設の必要から発生したものと想定された^{②-286}。特にその後の社会的変動の中で武士層に取りこまれ度重なる変革を加えられたものが、大規模な城館として成立した可能性を示唆されている。これは、地下式坑を検出する中世城館跡は、その生い立ちが「村の城」であり、その前身が土豪層による墓域と考えることも出来る。その背景には中世後半に経済的飛躍を成し得た地縁的・血縁的集団の存在が想定されよう。

かつて宇田川洋氏が、北海道のチャシについて「祭りの場」から「談合の場」、更に「戦闘の要塞」へと発展して言ったものと想定されている^{④-131}。これは柴田龍司氏が述べているような、「聖」から「俗」への転化、集団の精神的場所であった領域が、戦闘的場所へと変化していったことと共通している^{②-300}。中世の千葉における城館の構築に際しても同様に、在る空間に対する集団内の意識に変化があったものと考えべきであろう。

ただし、城館跡から検出された地下式坑と、墓地から検出された地下式坑との間にはなお若干ではあるが傾向の異なる点も存在している。恒常的、突発的に関らず、戦闘に関する施設である城館において、備蓄、隠匿と言った行為の存在は当然考えるべき問題であり、そのための施設としての地下式坑の存在も看過できない¹⁰⁾。或いは、それ以外にも何らかの要因が働いていた可能性を考えるべきかもしれない。今後城館跡の調査・整理等による更なる資料の蓄積が、これらの問題についてより高度な検討を可能とするであろう。

今回地下式坑を集成するに際して、その覆土の状況や遺物の出土状態が明記されていないものを散見した、これらは遺構の使用状態や廃棄状態を考察する上で欠くべからざる資料となるので、今後は地下式坑という形態のみの把握ではなく、できる限りの情報収集が望まれる¹¹⁾。

注

- 1) 既に本報告がなされている四街道市和良比掘込城跡^{③-195}（図版6-1）や千葉市高品城跡^{③-280}（図版7-1）をはじめ、光町篠本城跡^{④-130}（図版9-1）や、木更津市笹子城跡^{②-258}（図版11-1）のような、破壊を前提にした調査はその隅々まで曝け出してくれる。
- 2) 中田 英 1976『草山遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告11 のまとめの部分において若干の考察を加えている。
- 3) 昭和50年以前の研究史については、中田氏が論を始めるにあたって詳しく述べておられるので、こちらを参照願いたい。
- 4) 地下室・玄室・主体部等とも呼ばれるが以降は「主室」として統一する。
- 5) 竪坑と主室を平面形どおりに地表面から掘り下げるのではなく、先ず竪坑を掘り下げ、その底部付近から横に掘り進み、地山を天井として掘り残したもの。
- 6) 火葬墓と火葬土坑を合わせて火葬施設とした。
- 7) 人骨や副葬品の伴うものや調査担当者が墓と認めたものを墓墳とし、それ以外を土坑とした。ただし

この土坑としたものも墓として構築された可能性が高い。

- 8) 確認面からの深さを0.5m単位でまとめ、それを城館跡からの検出数109と、墓地からの検出数206で割った数値をグラフ化した。
- 9) 君津郡や長生郡のような上総北部においても同様な傾向が認められるが、これらの地域は、墓地だけ、または城館跡だけから地下式坑が検出されており、両者の対比としての深浅ではない。
- 10) 小見川城跡や田向城跡・堀之内遺跡において検出された地下式坑に、その可能性が窺える。
- 11) 地下式坑において天井部が残存しているものについては、安全上やむおえずその天井部を除去した後に調査を行わねばならない場合が多いことは、仕方のないことであろう。しかし、それ以外に情報の存在している部分は存在しているはずであり、新たな情報の探索は常に心がけるべきであろう。

第3章 出土遺物について

鳴田浩司

第1節 はじめに

発掘調査の中で中心的ともいえる遺物である広域流通する陶磁器類については、その生産地や年代の特定できる大量消費地での出土遺物との摺り合わせの結果、まだ完全とは言わないまでも、全国的に編年的な共通認識がほぼできあがってきた観がある。

一方で、カワラケは本来、儀式で使われたものと考えられ、中世では集落や墓地遺跡よりも城館跡で多く見られる。従来、千葉県では貿易陶磁器や瀬戸・美濃産、常滑産等の県外からの搬入品の編年に頼っていた部分があるが、例えば、文献上16世紀末まで確実に機能していたはずの東金城跡や大多喜城跡などの城館跡で、その供給量の差や城館の機能の差であろうか、瀬戸・美濃製品があまり出土しない例がある。それを明らかにするために、在地産土器の編年作業はその基礎となるものであり、城郭全体や各種遺構の研究上必要な作業である。

折しも、県内ではバブル経済時の大規模開発に伴う城館跡の広域な調査が終息し、ようやくその成果が徐々にではあるが、明らかにされつつある。また、大規模な城館跡以外の小規模な居館跡や中世墓などの資料も増加してきた。その結果、県内各地域ごとに、各時代の資料が蓄積され、それに伴いいくつかの特徴のある土器が認められるようになってきた。

そこで、この紀要を通じて、陶磁器類以上に出土量の多いカワラケを始とする、いわゆる在地産土器を整理・分類し、陶磁器類の研究成果をフィードバックさせ、カワラケを中心とした在地産土器類による編年を試みた。とりわけ、カワラケは生産に始まり使用から廃棄までのサイクルが最も短いものと考えられ、かつ広域に流通するものではなく、生産地＝消費地の図式が成り立つということで、消費地編年がそのまま生産地編年となりうる特性を持つ、極めて重要な遺物である。しかも中近世遺跡では普遍的に出土する遺物であり、時間軸を設定する遺物としては、最適であると考えられる。

対象とする年代は中世から近世までの流れを継続的におきたいため、13世紀から19世紀までとした。

対象遺物は、近世に入ると、土器は中世からの形態以外に、器種が爆発的に増加するので、カワラケ、内耳土器、土釜、土器搦鉢、深鉢形土器に限った。このうち、カワラケは対象とする全時代に見られ、内耳土器、深鉢形土器は中世後期から近世・近代にかけて継続的に見られる。また、土器搦鉢・土釜は、中世後期に出現し、近世初頭に消滅する器種で、その存在が、遺跡の時代を知る上で重要である。ところで、焙烙と呼ばれる内耳土器は19世紀には、内耳が付かなくなるのが一般的である。したがって本来内耳土器で取扱うのは明らかに不適切であるが、使用目的や使用方法に類似点が多いため、ここでは内耳土器の範疇に含めて取扱うことを了解していただきたい。

以下、過去の城館跡調査から出土した遺物を再検討すると共に、城館跡出土遺物に限らず、広く県内の中近世遺跡から出土した遺物を、整理し編年図作成を試みた。

資料の操作方法は、遺構一括資料に乏しいため、遺跡内の供伴遺物から、ある程度年代幅が押さえられる遺物を基準とし、形態変化を考慮して時間軸に沿って並べたものである。

第2節 千葉県および周縁の土器研究史

まず最初に、県内の土器研究で先駆的な例として、大橋康二氏は、四街道市池ノ尻館跡の発掘調査で多量に出土した土器播鉢と内耳土器に着目し、土師質や瓦質の土器播鉢を胎土や焼成方法、形態差から5種類に分類している。また、近代においても東金市東田間で、土器焙烙や植木鉢、蛸壺を生産していたり、成田や酒々井、東金周辺、五井付近で内耳土器(焙烙)が製作されていたことを紹介し(馬場脩; ⑤-001)、近代において地域の要望に応じた形態差が認められることを考慮して、中世においても内耳土器や土器播鉢に形態や焼成方法が異なるものが多いことから、消費地に近いところで需要に応えるべく、生産地が存在していたことを想定している。さらに、口縁部の形態の特徴から、瀬戸系播鉢の影響を強く受けていることを指摘している^{⑤-005~007}。

津田芳男氏は、氏のフィールドである長生から安房地域の土器編年を、早くから試みている。まず、関東の内耳土器を鍋形と焙烙形に大きく分類し、各々をA類からG類、A類からB類に細分類している。また、内耳土器の分布と各地域の様相をまとめ、その使用法や系譜などについても論じられている。この中で千葉県の内耳土器の出現を15世紀半ばとし、15世紀後半に盛期があるとした。また、土師器以外の灰色の色調で硬く焼き締められ、還元焼成が行われている土器や、池ノ尻館跡に見られる、大型で体部立ち上がり^{⑤-019}が緩やかで、直線的なものを南関東独特なものとし、この地域に焼成窯の存在の可能性を指摘した。翌年氏は、千葉県を中心とした中世煮炊具の資料集成と分類を行った。この中で、内耳土器は15世紀前半には出現し、15世紀後半から16世紀初頭に盛期をむかえるとし、前年の内容を一部訂正している^{⑤-021}。更に翌年、茂原市国府関の阿波瀨神社遺跡出土遺物に、岩川遺跡や神田山第Ⅲ遺跡、長南城跡出土遺物を加え、長生郡内のカワラケ編年を試みている^{⑤-025}。ここではカワラケを4つに形態分類し、1類を15世紀代、2類を16世紀初頭、3類を16世紀前半以降、4類を15世紀前半以前とした。また、②-298では、総計569点に上るカワラケをAからHの8類に分類して、16世紀後半から17世紀にかけてのカワラケを抽出している。

笹生衛氏は、千葉県のカワラケを上総中心に、大きくA、B、C、D、E類に型式分類し、編年した^{②-211}。氏の研究は土器・陶磁器の組成に主眼を置き、初現形態である杯A類の祖形、A類からD類の法量変化、カワラケ生産の問題点をはじめ多岐にわたる。県内の中世の土器組成に言及した初めての論文であった。

小野正敏氏は、県内の城館跡出土の陶磁器組成と機能分担に主眼を置き、まず、カワラケが灯明具、ハレの皿、酒杯として使用されていたこと、在地産の土師質播鉢は、調理具の主体となる瀬戸・美濃産播鉢を補完していること、煮炊具に在地産の内耳鍋があることを指摘した。また、全国的な視野からカワラケの地域圏、煮炊用土器の地域圏を設定し、県内土器の特徴を抽出している^{②-209}。さらに、本佐倉城跡確認調査例を取り上げ、陶磁器の組成による、城館の曲輪ごとの空間特性分析の可能性を指摘している^{②-263}。

白根義久氏は、在地産土器そのものの編年に主眼を置き、千葉県のみならず茨城県を含めた常総地域の中で、13世紀から16世紀のカワラケを大きさ、底径：口径比、高台の有無、体部の形態差で細分類し、編年した^{⑤-046}。それまでの分析が口径と器高の比を基準としていたのに対し、底径と口径の比を基準としたことに大きな違いがある。

また、築瀬裕一氏は、千葉市内の最新の中世城館跡調査資料を基に、千葉市域のカワラケ編年を試みている^{⑤-061}。

以上が主に中世の千葉県内及び、千葉県内の土器を中心とした研究であるが、続いて、それ以外の千葉

県の土器を取扱った研究や、特に千葉県の土器を研究するにあたって重要なものについて、その幾つかを見てみよう。

まず、中世では浅野晴樹氏が、埼玉県を中心とした関東一円の土師質土器・瓦質土器の編年と段階の設定、土器組成に言及した。^{⑤-016}更に引き続き、その対象となる地域を東国一帯に広めて、中世在地系土器における画期の設定を行い、供膳具、瓦質壺、調理具、煮炊具、その他の瓦質土器に分けて、地域ごとに分析した。また、京都・東海諸窯との関連、生産工人を始とした様々な問題を提起した。^{⑤-026}

山口剛氏は、小田原城内・城下の豊富なカワラケを集成し、後北条時代から江戸時代までのカワラケを4期に区分した上で、変遷の歴史的背景についても考察している。^{⑤-027}小田原のカワラケはロクロを使用したものと、手づくね成形のものに、成形技法上大別される。カワラケ1期(15世紀始めから16世紀初頭)はロクロ成形のカワラケのみで構成される。2期(16世紀初頭から16世紀末)は手づくねカワラケが出現する時期で、底部がくぼむいわゆるへそカワラケもこの時期に出現する。この時期に登場する手づくねカワラケは、形態的に多種多様で薄手の作りとなり、量的・質的にカワラケが全盛となった。3期(16世紀末から17世紀前葉)は形態的・量的にカワラケが極端に減少する。カワラケにかわって志野皿が灯明皿として使用される。しかし、4期(17世紀中葉から18世紀末)には丁寧なナデ調整で、硬質な焼成になり、器形も器壁と底部との境が明瞭になる。技術的に大きく変化した時期となる。特に2期は後北条氏が勢力を伸ばした最盛期にあたり、その勢力拡大に伴う社会的発展などの背景の下に成立したと捉えている。千葉県では、丁度小田原カワラケ2期(II a 期新段階)のころ、後北条氏と関係の深かった千葉氏の居城である本佐倉城で、手づくねカワラケを模倣したロクロカワラケが出土しており、この小田原城の編年は重要である。

服部敬史氏は、15・16世紀の関東・甲信地域の在地産土師器皿を編年的に整理し、その中で土師器皿(カワラケ)が「外反皿形」と「椀形」とに分類され、関東を古利根川を境に東西に分布するとし、前者の存在は「統一的地域権力」である後北条氏との関連で捉えられるとした。その基本となる2形態以外の地域色として、下総西部の16世紀後半に「椀形」土師器の地域形と見られる、腰に丸みのある形態を「下総タイプ」として捉え、境界となる古利根川流路沿いに見られる現象の一つであるとした。^{⑤-047}

旧下総国に属する葛飾区葛西城跡の種類・量ともに豊富な資料は、16世紀から17世紀前半に至る(すなわち中世から近世への過渡期)カワラケの生産・流通・編年と使用方法の研究はもちろんのこと、江戸カワラケの出現を研究するに当たって、格好の材料となった。

ここで、葛西城跡とその周辺の遺跡から出土したカワラケの編年について、簡単に触れてみる。

最も早くカワラケを分析した長瀬衛氏は、2次調査資料で、口径と高さの比率を基準にカワラケを「坏型」と「皿型」のグループに初めて分類し、更に口径の大きさによって大小に分類した。A群は「大型坏型」、B群は「小型坏型」、C群は「大型皿型」、D群は「小型皿型」となる。^{⑤-002}更に3次調査資料で、手づくねカワラケをE群、耳カワラケをF群として追加している。また、氏はカワラケを口径の大きさにより幾つかに分類し、古文書に記載された「かわらけ」と対比させて、その使用方法に言及するなど、単に形態分類だけにとどまらない意欲的な研究を行った。以後葛西城跡及びその周辺遺跡のカワラケは長瀬氏の編年が基準となっている。^{⑤-003}

その後、谷口栄氏は長瀬氏の研究業績を整理し、いくつかの問題点を提示している。^{⑤-036}江上智恵氏は、葛飾区上千葉遺跡や同区柴又帝釈天遺跡のものを、永越信吾氏は、上千葉遺跡15号溝出土のカワラケを分類

し、近世初頭のカワラケの様相について論じている。^{⑤-069}それによれば、16世紀後半から17世紀前半のカワラケには、右回転糸切りで、厚手の中世的なものと、左回転糸切りで、薄手、直線的な体部を持つ近世的なものが混在しているという。また、両角まり氏は葛西城跡周辺の内耳土器について、形態差から8つに分類したが、^{⑤-048}カワラケ同様に中世的な器形と近世的な器形とが、混在しているのを指摘した。葛西城跡周辺のカワラケ編年はまだ確実なものとは言い難いが、今後の千葉県の土器研究の上で、重要な位置を占めることは間違いない。

近世陶磁器・土器研究の進展著しい江戸遺跡³⁾での、カワラケ・内耳土器・土器播鉢・深鉢形土器について見てみよう。

中世末期のカワラケから、江戸カワラケへの転換に関する論考がいくつか出されている。その中で、小林謙一氏は、中世末期16世紀後半から末までの資料として、長勝寺脇館跡の鎮壇遺物である右回転ロクロ成形で、底部内面が盛り上がる厚い底部、弱く張る体部、やや突出した立ち上がり、直線的な外傾口縁をもつ一群のカワラケを「下総タイプ」と分類した。^{⑤-035}

佐々木彰氏は東大医学部付属病院地点の資料を以下のように分析している。^{⑤-022}17世紀前葉のカワラケは白を基調とした褐色の粗い胎土に、粗雑な調整の手づくねで、口縁が外反し、口縁下部の器壁が厚い右回転のロクロ成形である。17世紀中葉には、器壁が厚く丁寧なナデ調整の手づくねで、底径が大きく器高が低い右回転のロクロ成形となる。17世紀後葉になると手づくねが激減し、底径が大きく内湾ぎみの左回転ロクロ成形が主体となる。18世紀以降はすべて左回転のロクロ成形となる。江戸カワラケが左回転に転換したのは、上方から江戸の町作りに連れてきた土器職人の影響と考えた。

鈴木裕子氏は、東大御殿下記念館地点の資料を分析し、左回転糸切り底タイプを「江戸タイプ」とし、^{⑤-020}17世紀後半に外反の器形から内湾化、底径の大型化へと変化すると論じた。

また、両角まり氏は、体部と底部の間に見られる切れ目を、今戸焼き職人の子孫に対する聞き取り調査から、「折り返し技法」によるものと解釈している⁴⁾。その技法の出現は17世紀後葉から18世紀初頭で、氏はこの技法の出現をもって、江戸在地系土器⁵⁾生産が本格化したと見ている。それに先行して、17世紀中葉には、^{⑤-034}輪積み成形からロクロ水挽き成形に移行したと捉えた。

次に、近世江戸在地系焙烙について見てみよう。佐々木彰氏は、江戸在地系焙烙が17世紀前葉から中葉に平底から丸底に転換しており、この背景にはカワラケ同様、徳川家康の江戸入府に伴う関西方面からの土器職人の移入を想定している。^{⑤-023}両角まり氏は、器形上の特徴から、関東には上野・北武蔵を中心に分布するもの、常陸・下総を中心に分布するもの、及びその後者に出自を求められる「江戸在地系焙烙」の三者がある一方で、南関東から相模には土器焙烙自体が分布しないことを明らかにした。^{⑤-049,062}氏は同じ系譜上にある内耳土鍋と焙烙を区分せず、内耳土器として大きく3群に分類し、中世末期から近世にかけての関東地域の形態変化を追っている。この章を執筆するにあたって、内耳土鍋と焙烙を区別せず、一括して内耳土器として扱った。

更に、鈴木裕子氏のように土器播鉢や深鉢形土器など、今まで江戸遺跡で取扱われることがほとんどなかった江戸周縁の在地産土器について、問題提起するようになってきている。^{⑤-066}

このように、江戸遺跡からの近世在地産土器成立に対するアプローチはあるものの、千葉県内からの見解は次の藤尾氏の論考以外、特に目立ったものはない。

近世内耳土器については、藤尾慎一郎氏が、国立歴史民俗博物館研究棟建設予定地内の豊富な発掘資料

を、胎土・形態・成形・整形・法量などの点から詳細に分析を加え、分類した。^{⑤-028}この分類は今回の編年の基準として使用しているように、以後刊行された多くの報告書の分類基準となっている。氏は佐倉城跡出土焙烙を細分類し、江戸在在系焙烙と異なる当該地域在地焙烙を抽出し、その中で18世紀後葉から19世紀前葉にかけて、平底から丸底に転換したと考えている。氏の分類については、第3節佐倉城跡で詳細に説明する。一方、下総国に接する茨城県側では、白田正子氏によって中世から近世の内耳土器の編年案が提示されるようになってきた。^{⑤-068}

最後になるが、近年中世在地産土器に対する資料の集成が顕著に見られるようになってきている。1997年から1999年にわたり、「神奈川の考古学」の中で、中世プロジェクトチームによって神奈川県内の「かわらけ」が集成された。^{⑤-056,063,070} そのほか茨城県や福島県など、関東各県や東北地方でもグループによる中世土器研究の気運が盛り上がりつつある。^{⑤-041} ^{⑤-051,057,067}

さらに、これまで蓄積されてきた全国の中世食器が集大成されており、全国の中世の食器様相を知る上で貴重である。^{⑤-058}

注

1) 分類は以下の通りである。

1類a：底部からやや外反して立ち上がり、中程で稜をつくり内湾して立ち上がる。淡い赤褐色。口径7.8cm～8.7cm、器高1.4cm～1.7cm、口高指数17～20%。器壁は体部・底部とも厚い。

1類b：形態は1類aと同じ。口径6.1cm、器高1.6cm、口高指数26%。

2類：口径7.8cm～8.7cm、器高1.4cm～1.7cm、口高指数19～23%。体部は口縁部に向けて内湾して立ち上がる。淡褐色。器壁は体部・底部とも厚い。

3類：口径8.8cm、底径5.6cm、器高2.4cm。口高指数26%。厚い底部から外反して口縁部に立ち上がる。淡褐色。

4類：底径6.5cm～6.8cm。大型。淡褐色。

2) 分類は以下の通りである。

杯A類：底部を柱状に厚く切り残し、体部は強く内湾、口縁端部が外反するもの。口高指数（口径に対する器高の割合）は30%前後以上。

杯B類：底部を柱状に厚く切り残し、体部は強く内湾するが、口縁端部の外反は見られない。器面にはロクロ目が強く残され、A類と比較して、整形に要するロクロ回転数が少ないものである。口高指数は30%前後以上。

杯C類：体部中位が強く内湾し、そのまま口縁部に至るもの。口高指数は30%前後以上。

杯D類：体部は内湾して立ち上がり、そのまま口縁部に至るもので、口高指数は20%前後。C類と比べ、器高を著しく減少させる一群である。

杯E類：体部は直線的に立ち上がり、そのまま口縁部に至るもの。口高指数が20%前後のE2類と、30%前後以上のE1類とに細分類できる。

3) ここで言う「江戸遺跡」は、近世都市江戸における同時代の遺跡で、地域としては朱引き線内（町奉行管轄地）に限定される。

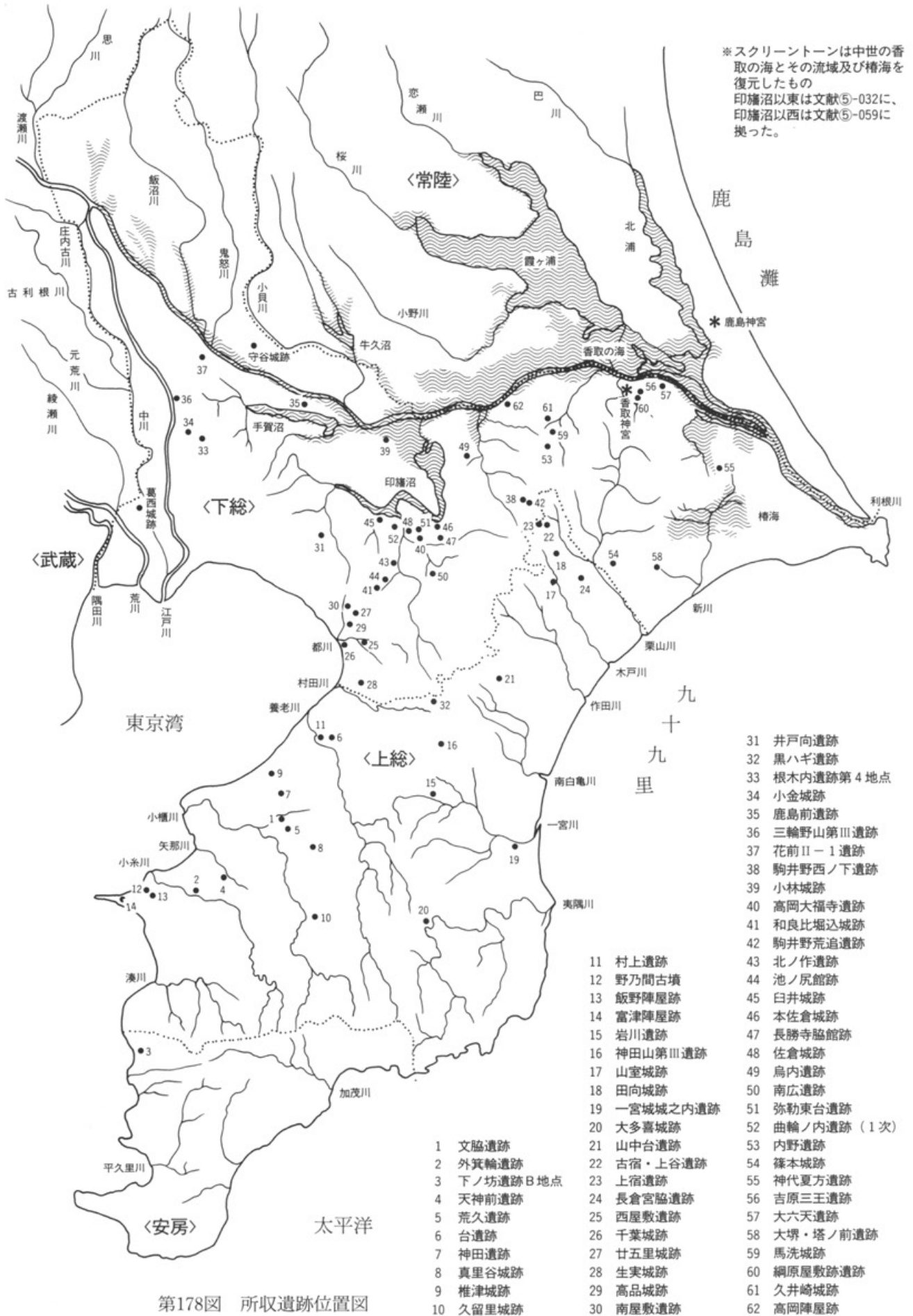
4) 小林謙一氏は基本的には両角まり氏を指示しているが、折り返しの痕跡については、「腰折れ状痕」と

第3章 出土遺物について

⑤-055
呼びかえている。

一方で、小川貴司氏は「折り返し技法」について、実際に製作した場合に技術的な観点から否定的見解を示している。
⑤-043～045

5) ここで言う「江戸在地系土器」は、近世江戸地域において伝統的に生産・消費された土製の器物類である。



第178図 所収遺跡位置図

第3節 所収遺跡の概説と出土土器

まず、県内及び県外の遺跡の概要と、出土した中近世遺物を紹介する。また、検出した遺構や出土した遺物から得られた遺跡の時期幅と遺物の中心となる時期を第11表に一覧とした。基本的に、この時期設定に基づき土器の編年を行った。なお、挿図中のカワラケの縮尺は1/3で、それ以外は1/6にしている。

県内

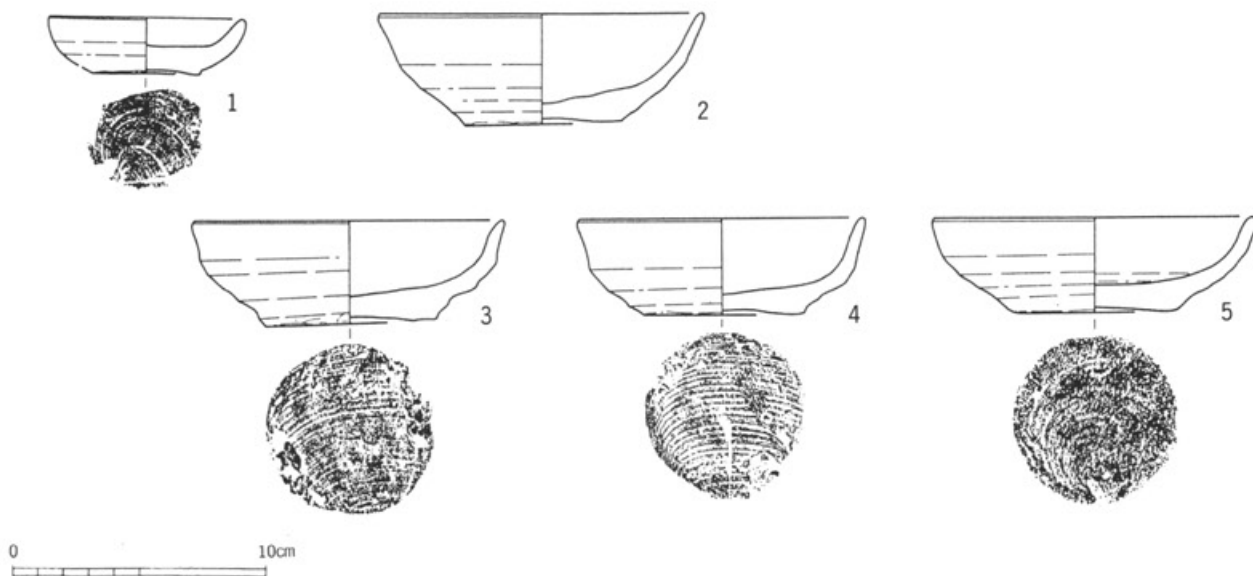
(1) 安房郡・君津郡・市原市地域

文脇遺跡 (第179図)

文献③-206

文脇遺跡は袖ヶ浦市野里に所在する。小櫃川中流北岸の標高40m前後の台地上に立地する。小櫃川中流域から上流にかけての地域は、古代には畦蒜郡に属しており、中世初頭の『吾妻鏡』文治2年(1186)6月11日条によると、畦蒜荘として、源頼朝から熊野社別当へ寄進されている。調査地区の北側と中央に1号・2号道路遺構があり、区画溝が埋没する過程で、道路として使用されていた。覆土中からカワラケが出土している。また、土坑墓からは和鏡2面(菊花双雀鏡、桜花双雀鏡)が出土した。

カワラケは小型と大型に大きく分類できる。1は小型で、口径7.9cm、底径4.5cm、器高2.2cm、全体に厚手、体部は緩やかに内湾する。2は大型で口径13.0cm、底径6.3cm、器高4.4cm、底部は静止糸切りで、底部はわずかに突出する。体部は緩やかに内湾する。3～5は2号道路状遺構・26号溝から出土した。2と同形態であるが、底部の突出が顕著である。カワラケはいずれも、胎土中に金雲母・鉄分・白色針状物を含み、明褐色～淡褐色に発色するが、2のみ淡黄灰色である。



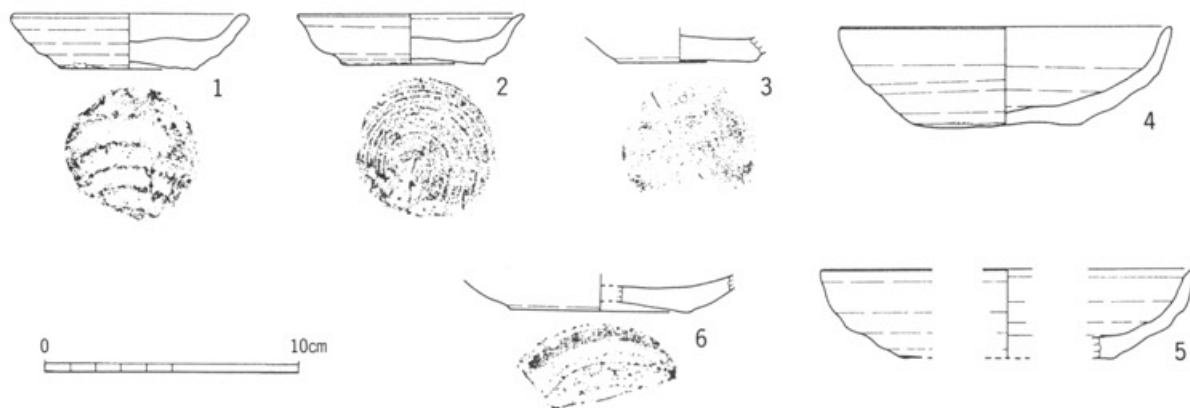
第179図 文脇遺跡

外箕輪遺跡 (第180図)

文献③-164

外箕輪遺跡は君津市外箕輪に所在する。小糸川中流北岸、標高16m前後の低位段丘上に立地する。中世では周東郡に含まれていたと考えられ、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけては上総氏の一族である周東氏の支配下に置かれていた可能性が高い。建物面積が60㎡～70㎡に達する大型建物や大型の区画溝が検出され、遺物にも二彩陶器盤や青白磁梅瓶などが含まれることから、有力農民層の屋敷地か在地領主層の居館の一部である可能性が考えられている。

カワラケは小型のものとは大型のものに大きく分けられる。小型の1は口径9.4cm、底径5.3cm、器高2.2cmで、口縁端を丸く仕上げる。胎土中には鉄分・白色針状物・細砂粒を含み、淡明褐色。底部は静止糸切りである。2は口径9.0cm、底径5.4cm、器高2.0cmで、口縁端で内面に稜をもち、外反する先端が鋭利になる。底部は左回転糸切りで、赤褐色～暗褐色である。3は胎土中に雲母を含み、灰白色である。4は口径13.2cm、底径6.5cm、器高4.0cmで、1に調整・成形・胎土が対応する。同様に5は2に、6は3にそれぞれ対応する。



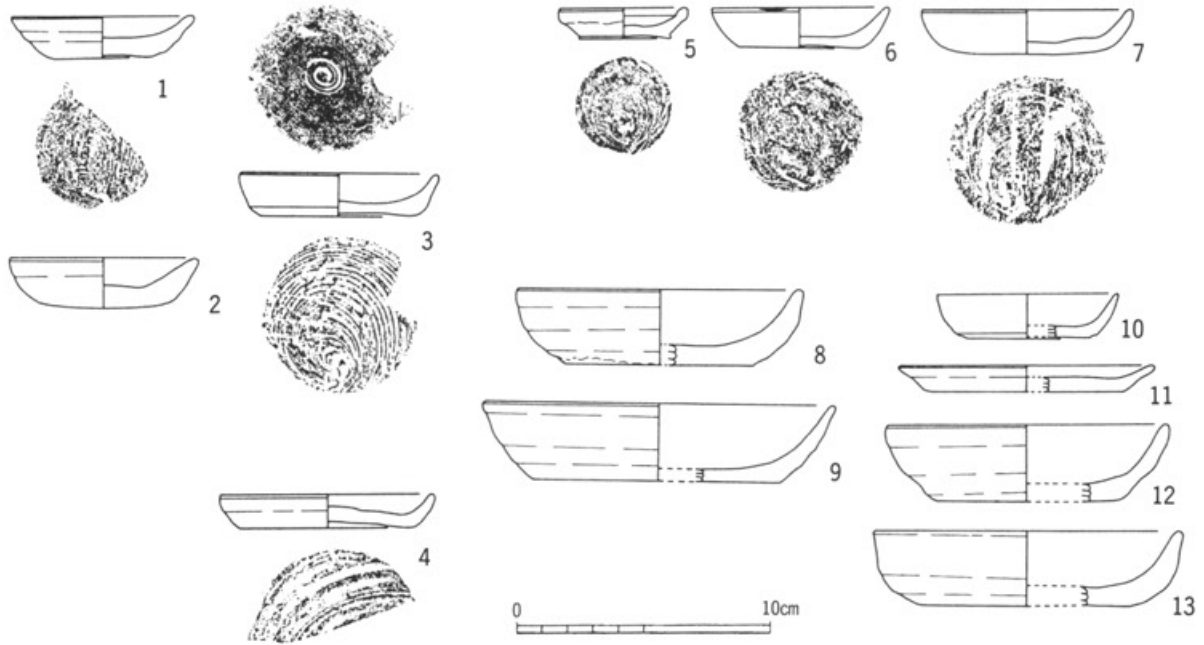
第180図 外箕輪遺跡

下ノ坊遺跡B地点 (第181図)

文献③-176

下ノ坊遺跡B地点は安房郡鋸南町保田に所在する。保田川中流域の北岸、標高10m前後の低位段丘面上に位置する。中世には安房北郡に含まれ、三浦氏、二階堂氏、北条(大仏)氏に領有されていた。発掘調査では掘立柱建物、井戸、塀、堀などが検出されている。SB-2(大型建物)は桁行3間以上、梁行3間の主屋に南北の両面庇が付く。掘立柱建物はいずれも調査区北端部分に集中している。

様々な形態のカワラケが出土している。1、2はSE-1(井戸)から出土したもので、いずれも小型である。1は口径7.2cm、底径3.8cm、器高1.7cmで、暗褐色、石英・赤色粒子を含む。底部には回転糸切り痕と箕の子状圧痕が残る。3、4はSE-2(井戸)から出土したもので、3は口径7.8cm、底径6.2cm、器高1.7cm、内面に渦状の痕跡を残す。淡橙色で、砂粒・赤色粒子・黄褐色粒子を含む。5、6、7はSA(塀)から出土したもので、5は口径5.2cm、底径3.6cm、器高1.2cmで、明橙色、石英・雲母・赤色粒子を含む。6は灯明皿として使用されていた。8～13はグリッド出土で、11は扁平で皿状になる。いずれも口径と底径の比が小さく、器厚が厚いものが多い。8、9、10、13は胎土中に雲母を含む。



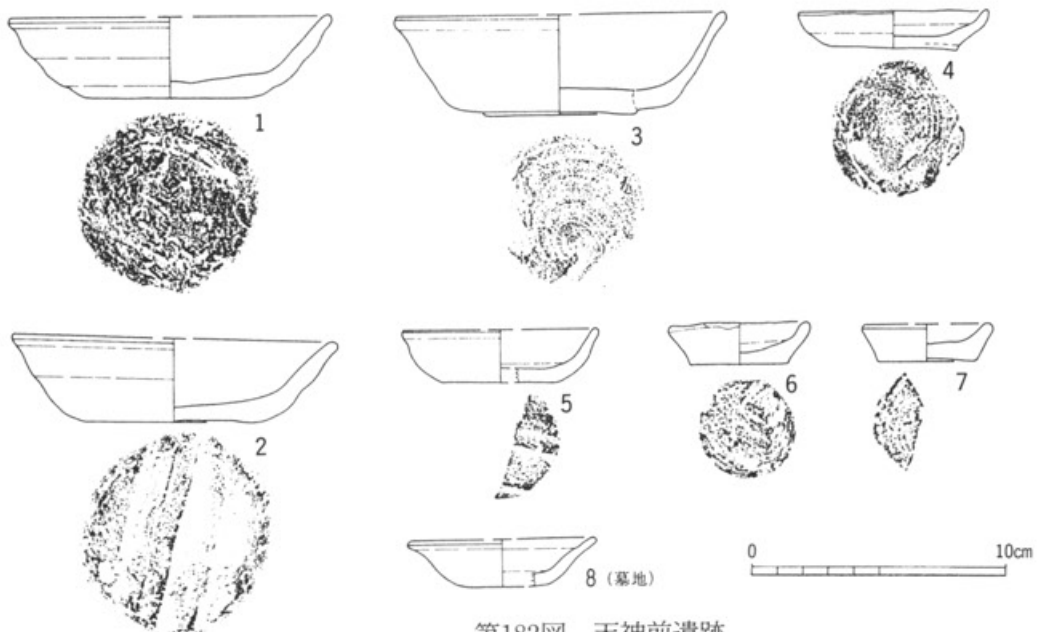
第181図 下ノ坊遺跡B地点

天神前遺跡 (第182図)

文献③-207

天神前遺跡は木更津市矢那に所在する。矢那川上流域左岸、標高50m前後の台地斜面に立地する。遺跡周辺は上総鋳物師集団の拠点の一つとされる。調査では斜面を削平して造り出した平坦面に、火葬墓を中心とした40基の中世墓を確認した。

カワラケはテラス部分の墓域から出土している。1、2は合わせ口で出土した。1は口径13.0cm、底径7.0cm、器高3.6cm、内面の立ち上がりは緩やかで、若干外反気味である。3は体部がやや深く、口縁端が



第182図 天神前遺跡

肥厚する。底部糸切り範囲は直径6.0cmとかなり狭い。4は口径7.6cm、底径5.0cm、器高1.5cmで、体部が内湾し、細くなるタイプである。6は口径5.6cm、底径4.0cm、器高1.6cmで、小型厚手のタイプである。4～8はいずれも灯明皿として使用されていた痕跡が見られる。また、カワラケはいずれも胎土中に白色砂粒と白色針状物が含まれる。なお、3、4が出土した遺構からは共に6a形式の常滑壺が出土している。

荒久遺跡 (第183図)

文献③-298

荒久遺跡は袖ヶ浦市高谷に所在する。小櫃川中流北岸の標高35mの台地上に位置する。小櫃川中流域から上流にかけての地域は、古代には畦蒜郡に属しており、中世初頭の『吾妻鏡』文治2年(1186)6月11日条によると、畦蒜荘として、源頼朝から熊野社別当へ寄進されている。応永23年(1416)の「畦蒜荘横田郷検注帳案」(「覚園寺戌神将胎内文書」)などで知られる禁裏御服料所である横田郷の東約2kmにあたる。また、鎌倉街道(久留里往還)や真言宗中本山延命寺に面している。調査では掘立柱建物、地下式坑、方形竪穴状遺構、土坑墓などが検出され、区画溝やその配置から、居住区域、倉庫・作業区域、墓域などに空間が分割できる。

SK-013(地下式坑)出土のカワラケ1～5のうち、1、5と3、4がそれぞれ重なり、合わせ口となって出土した。2は若干離れて出土したが、5点が1セットになると考えられる。最も大型の4は口径17.9cm、底径9.0cm、器高4.5cmで、内面に横方向の指ナデが見られる。最も小型の5は口径11.4cm、底径5.1cm、器高3.0cmである。いずれも体部が直線的に大きく開く。供伴遺物に常滑片口鉢II類10型式、古瀬戸後II期の折縁深皿があり、15世紀半ばに近い後半頃と推定される。6と7は合わせ口でP-268(地鎮遺構)から出土している。6は口径7.9cm、底径4.3cm、器高2.0cmで、内面に不動明王を表した梵字で「カーンマーン」を墨書する。8、9はSK-068(地下式坑)覆土中位から出土した。8の内面には梵字で「ウン」を墨書する。10は色調が灰色で、須恵質の瓦質土器搦鉢である。口縁端に溝が巡る。胎土には鉄分粒を含み、外面はナデ調整を施す。11、12は土師質の内耳土器である。11は復元口径29.0cm、器高17.0cmで、胎土中に石英を含み、外面には煤が付着する。12は口径28.0cmで、1対2の紐状内耳が付く。11、12共に、下側内耳接合部から体部が大きく外側に折れる。

台遺跡 (第184図)

文献①-091

台遺跡は市原市加茂に所在する。養老川右岸、北東から南西に延びる海岸線と3kmほど離れて並行する縁辺をもつ国分寺台の西端に位置する。遺跡は区画溝により北部・中央部・南部の3つの遺跡群に分かれる大規模な中世墓地である。

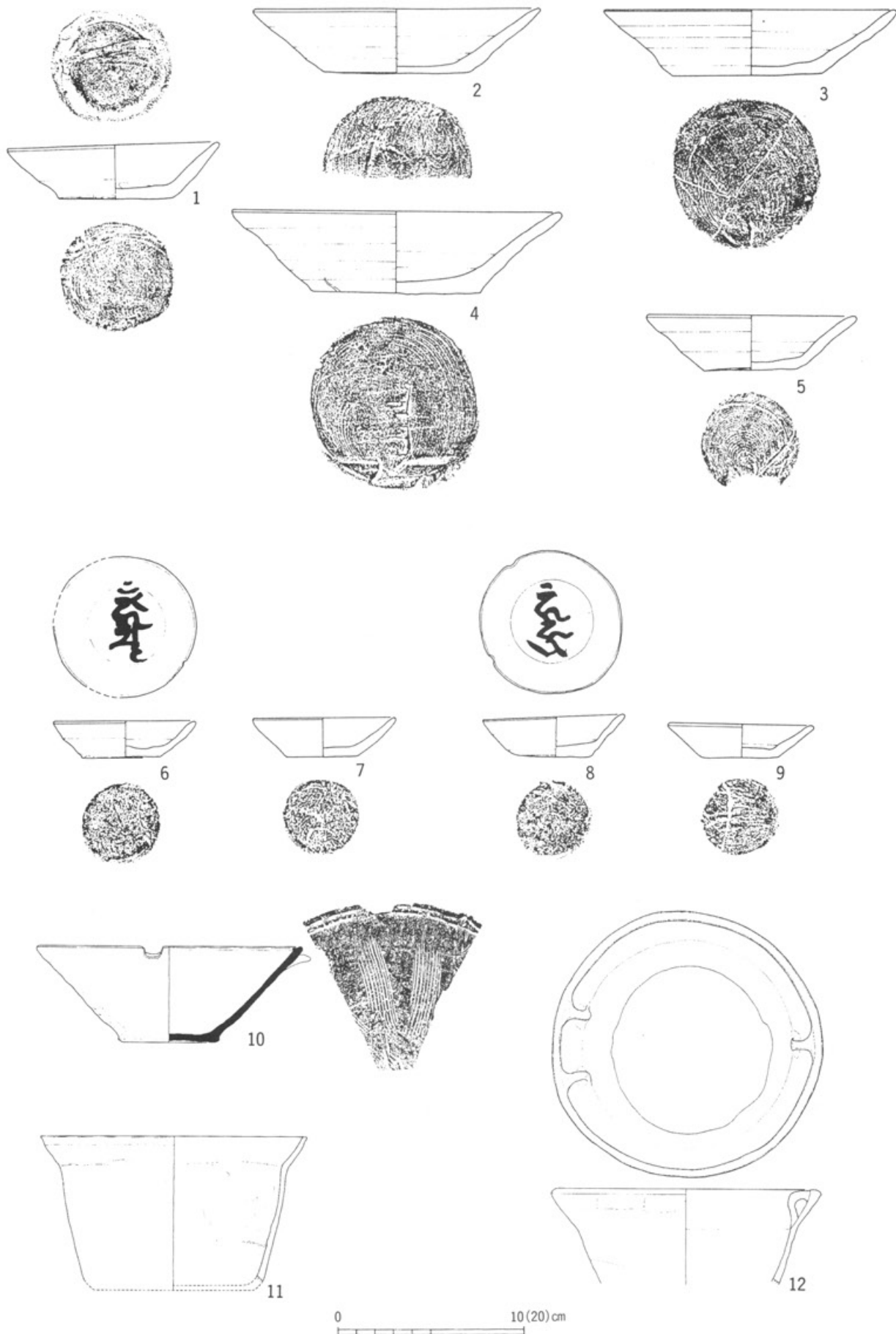
土器搦鉢は瓦質で、体部はわずかに外反するが、概ね直線的に延びる。口縁端は沈線状になるものや、内側に摘み上げるものが見られる。内耳土器は土師質で、底が深く、内面の内耳下側接合部の高さに稜が入り、そこから上が外側に張り出すタイプが見られる。

神田遺跡 (第185図)

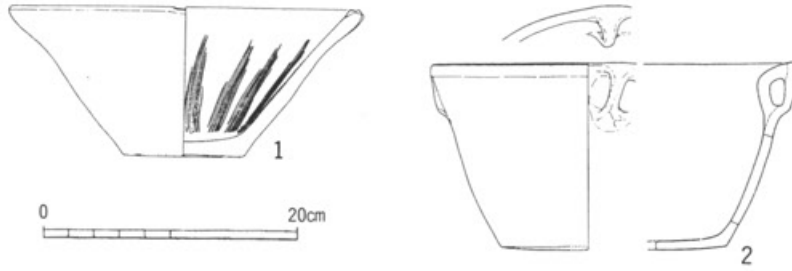
文献③-243

神田遺跡は袖ヶ浦市倉波に所在する。倉波川中流域北岸、標高40m前後の台地縁辺部に立地する。養老川流域と小櫃川流域の中間地点になっている。調査では土坑墓56基、火葬土坑6基、地下式坑4基を検出した。墓域の中心をなす階層は、14世紀当時在地で実力を蓄えつつあった土豪層で、板碑や五輪塔を伴い、周辺には土豪層に関連する氏族か農民層の中世墓地であったと推定される。

カワラケは大型のものと小型のものに大きく分類できる。大型の1は口径9.4cm、底径5.2cm、器高2.9cmで、鈍い黄橙色、胎土中に砂粒・石英粒を含み、口縁端が肥厚する。小型の2は口径7.4cm、底径3.8cm、

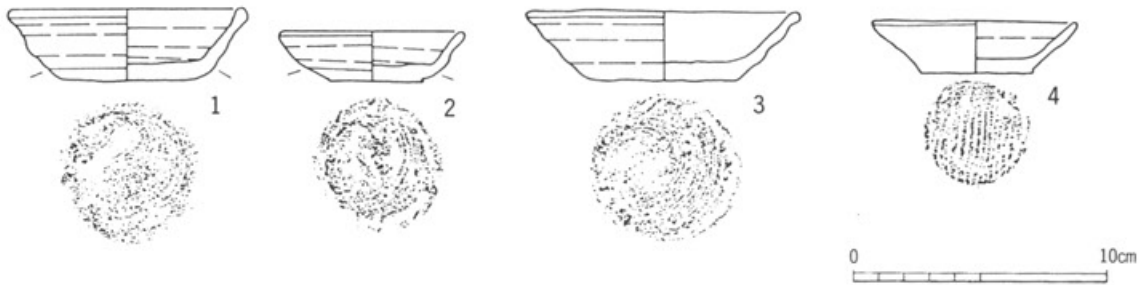


第183図 荒久遺跡



第184図 台遺跡

器高1.9cmで、腰が張り、口縁が外反する。大型の3は口径10.9cm、底径5.8cm、器高2.7cmで、体部は直線的に延びるが、口縁端が玉縁状に肥厚する。小型の4は口径8.2cm、底径4.4cm、器高2.0cmで、体部が肥厚する口縁端には煤が付着する。



第185図 神田遺跡

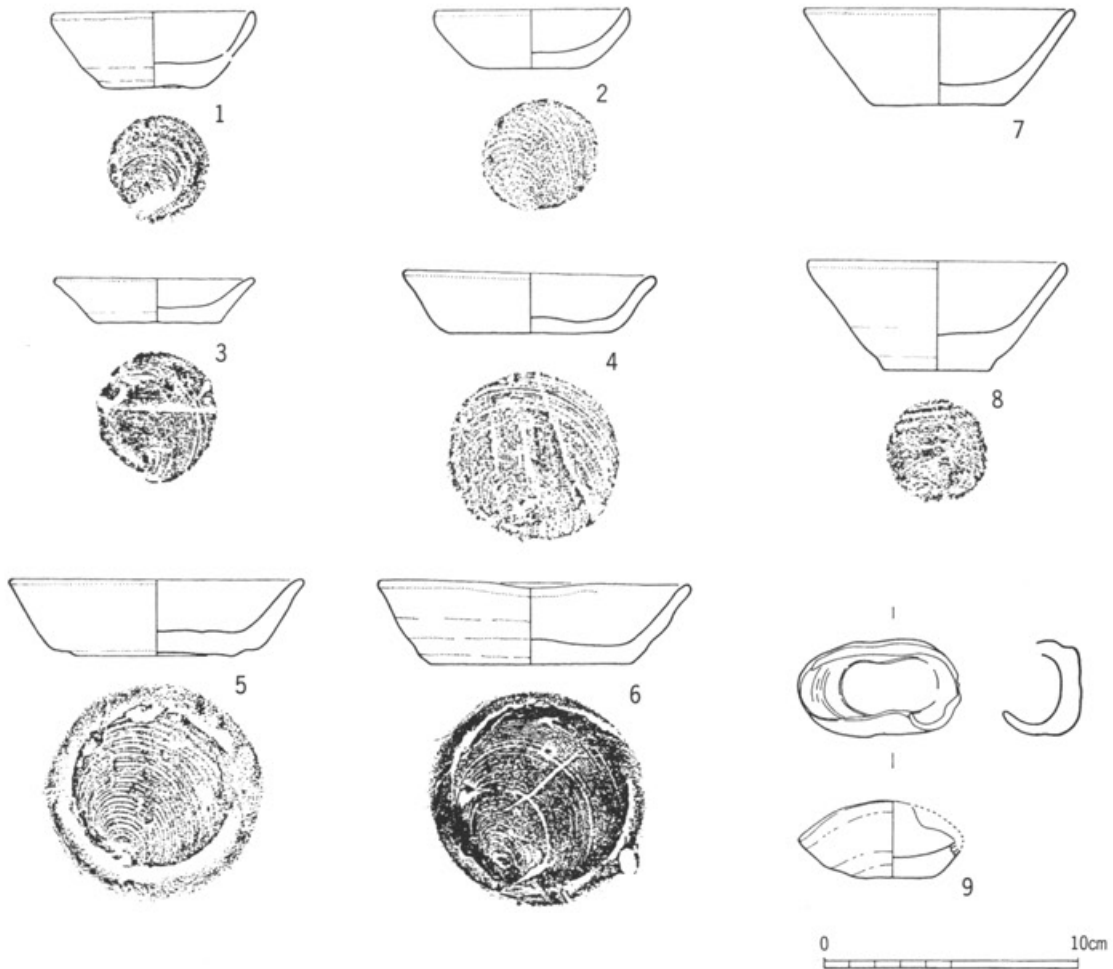
真里谷城跡 (第186図)

文献③-109

真里谷城跡は木更津市真里谷に所在する。小櫃川の支流武田川と泉川に挟まれた、標高約140m~160mの丘陵上に位置する。城の存続期間は、康生2年(1456)に武田信長が入部してから真里谷信政が椎津城で敗死した天文21年(1552)前後といわれる。

カワラケ1は口径8.0cm、底径4.0cm、器高3.0cmで、底部が厚く、体部がやや内湾する。2は底部から口縁にかけて緩やかに内湾する。3は口径7.9cm、底径5.0cm、器高1.8cmで、体部は直線的に緩やかに外反する。4は中型で、口径9.9cm、底径6.2cm、器高3.5cm、見込みに横方向の指ナデ痕があり、口縁端は外反する。暗褐色である。5、6はカワラケ中で最も多いタイプである。底部には円盤状の粘土塊を貼り付け、その粘土塊を回転糸切り離しするため、底部と立ち上がり部とが一致しない。口縁端で若干外反する。5で口径12.6cm、底径6.7cm、器高3.1cmである。7、8は1に近いやや大型のタイプで、8は高台状に切り残したため、結果として底部が分厚くなっている。砂粒を含み、茶褐色である。9は耳カワラケで、底径3.2cm、最大高3.0cmである。砂粒含み、暗褐色である。焼物の組成中、カワラケは57%を占める。

③-263



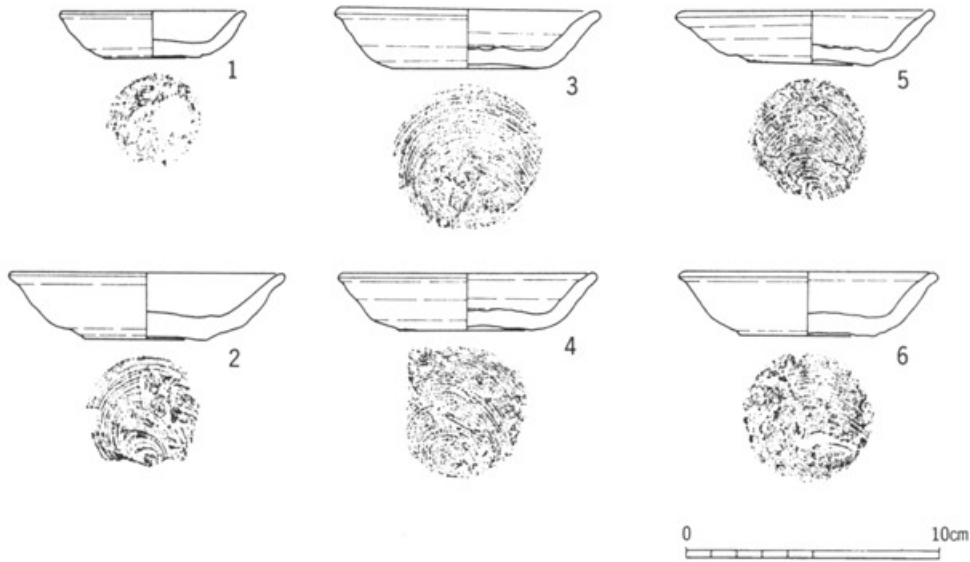
第186図 真里谷城跡

椎津城跡 (第187図)

文献③-171

椎津城跡は市原市椎津に所在する。東側と北側に境川が流れる、標高30m前後の台地の先端に位置する。永正16年(1519)ごろの「足利高基感状写」(「木連川家文書案」)に「椎津要害」の記述が見られるのが初現である。真里谷武田氏一族の居城で、一時足利義明の手に落ちるが、国府台合戦(1537)の後再び武田氏が復帰する。しかし、天文21年(1552)に武田信隆が没すると間もなく、里見氏の攻撃を受け、落城する。以後、里見氏と後北条氏勢力がめまぐるしく交替するものの、天正5年(1577)には後北条氏の支配下になっていたようである。

カワラケは小型と大型のものに大きく分かれる。1は小型で、口径7.2cm、底径3.8cm、器高1.9cm、2は大型で、口径10.7cm、底径4.9cm、器高2.6cm、1、2共に淡褐色から赤褐色で、胎土中に白色針状物・金雲母を含む。体部の腰が張る皿形である。3～6は一括出土遺物で、口径10.0cm～10.3cm、底径4.9cm～6.2cm、器高2.1cm～2.5cm、茶褐色で、砂粒を含む。皿形で底部がやや盛り上がり、口縁端が外反する。



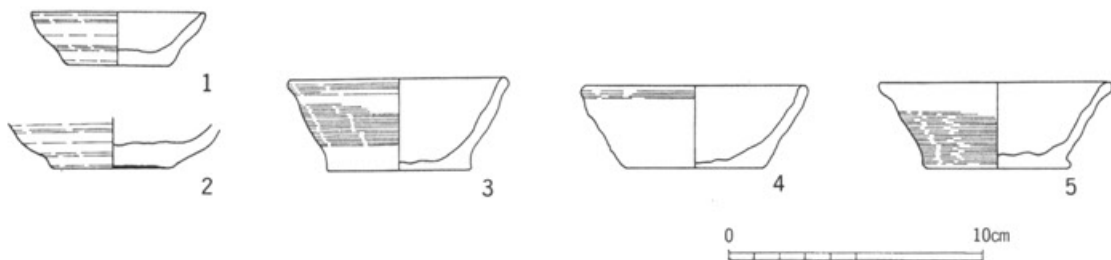
第187図 椎津城跡

久留里城跡 (第188図)

文献③-060

久留里城跡は君津市久留里に所在する。上総・安房の境に連なる清澄山系から北方の東京湾に流れ出る小櫃川中流の山間部と平野部の接点に位置する。久留里城は『君津郡誌』によれば、真里谷武田氏の築造とされる。しかし、里見氏全盛期(義堯・義弘)の40年間、安房より勢力を拡大してきた里見氏の勢力下に入り、里見氏の本城となった。この間、後北条氏との間で数度に渡る激しい攻防の場となったという。天正5年(1577)には後北条氏と和睦し、本城を佐貫に移した。天正18年(1590)には大須賀忠政が入城する。慶長6年(1601)に土屋氏に交代し、忠直・利直・頼直三代の後、延宝7年(1679)に酒井忠清の領地となり、一時廃城となった。しかし、寛保2年(1742)に黒田直純が入城すると、城修築のため幕府が5千両を下賜している。以後明治維新に至るまで黒田氏の治世が続いた。

カワラケは、いくつかの形態に分類できる。1は口径6.9cm、底径4.1cm、器高2.1cmで、体部の腰が締まり、体部途中が肥厚する。2は1の大型で、体部が大きく内湾する。3～5は本丸掘立柱建物遺構前面のピットから一括して出土している。3は口径8.8cm、底径5.7cm、器高3.6cmで、底部は薄く、高台状に切り残す。体部はロクロ目がきつよいようである。口縁端は丸く仕上げる。1と3は口縁に煤が付着しており、灯明具として使用されたようである。



第188図 久留里城跡

村上遺跡 (第189図)

文献③-289

村上遺跡は市原市村上にあり、養老川下流の標高4m～7mの段丘、自然堤防及び旧河道に立地する。古代から近世に至る複合遺跡であるが、近世では水田面や道路遺構を検出している。

道路として使用されていたと考えられる有段・断面箱形のSD10から多くの内耳土器片が出土している。深い丸平底で、底部は薄いが体部は肉厚となり、口縁端でやや外反するものと、底部がほとんど平底で、内耳の下部からすぐに底面となり、比較的底が浅い形態のものに大きく分類できる。前者は復元口径32.6cm(1尺1寸)～34.8cm(1尺2寸?)で、後者は復元口径32cm前後(1尺1寸)のものと37cm(1尺2寸)のものに分かれる。内耳は稜の明瞭なものも多く、完全な団子形とは言えない。底面には型作りに伴う離れ砂の痕跡か、ちぢれ目が明瞭に残る。体部との接合部は横方向にヘラ削り調整される。

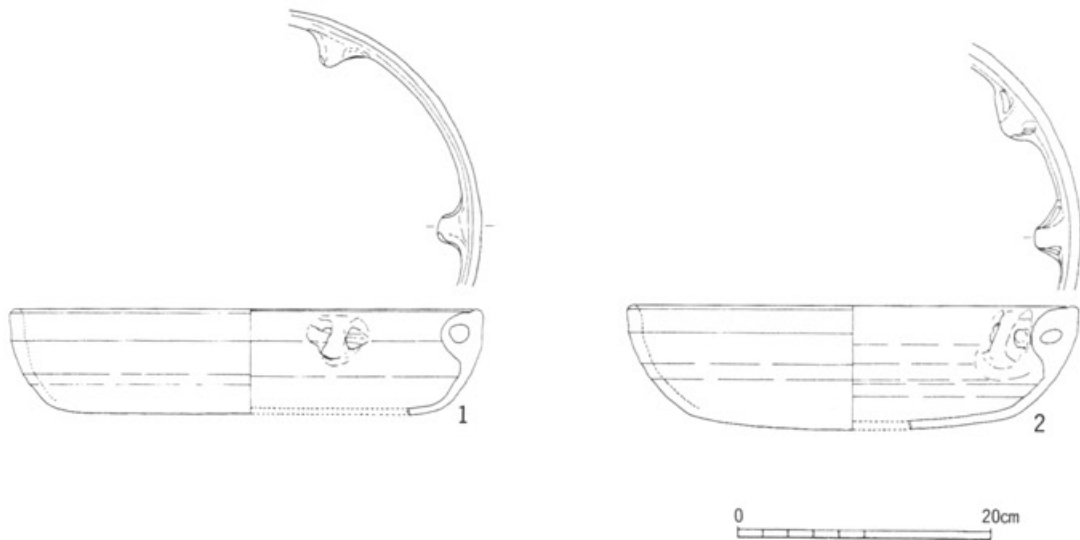


第189図 村上遺跡

野乃間古墳 (第190図)

文献③-146

野乃間古墳は、富津市上飯野にあり、大型前方後円墳である内裏塚古墳と九条塚古墳などとともに内裏塚古墳群を形成する。飯野陣屋跡から西北西へ約400mの地点になる。当古墳は、二重周溝の方墳で、緑釉新羅焼陶器が出土した古墳として有名である。昭和62年の調査区北端部の内側の周溝内貝殻廃棄坑からは、貝殻に伴って多量の18世紀後半代の陶磁器・土器類が出土した。調査者は、飯野藩の土族が所有していた生活用品だと考えている。



第190図 野乃間古墳

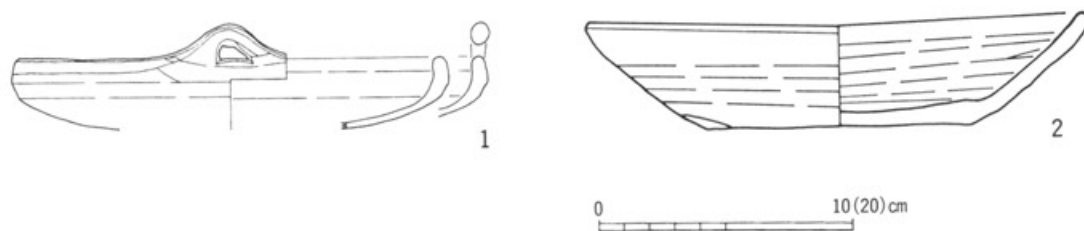
内耳土器1は、胎土は黄褐色で極めて脆い。口径37.2cm（1尺2寸）、器高8.2cmで、底部は薄く平坦であるが、その立ち上がりは丸く緩やかで、口縁部内外面は丁寧に横ナデされている。団子形に近い内耳は対面して2対、合計4個付く。外面全体には煤が付着する。一方、2は胎土が暗褐色で硬い。口径35.5cm（1尺2寸）、器高9.8cmで、1に比べ丸底傾向が強い。稜がはっきりとした耳は対面して2対、合計4個付くと考えられるが、1に比べ間隔が狭い。内面と口縁外面に横位のナデ、外面下半の一部にヘラ削り調整を施す。外面全体と内面の一部に煤が付着する。

富津陣屋跡（第191図、図版12-1）

文献③-287

富津陣屋跡は富津市の北西部に突出した富津洲から東へ4kmの、標高5mの沖積平野に立地する。幕末の江戸湾海域を防衛するために造られた、海防陣屋の一つである。文政4年(1821)幕命により、白河藩が造立にあたった。以後幕府や諸藩の統治を経て、明治元年(1868)8月頃には廃棄された。約48年間存続した陣屋である。会津藩か柳川藩統治下頃(1847~1858)の絵図があり、検出遺構と明瞭に対比できる。調査地点は陣屋推定地の北西隅に当たる。礎石立ての長屋建物跡や白洲跡、井戸跡、塀跡、貝殻地業跡をはじめ、地盤が緩い地点に重量物を建設する場合に採用される、ろうそく石礎石列が検出された。出土遺物がほぼ陣屋の存続時期と一致する、19世紀中葉の遺跡である。

出土した内耳土器は推定口径34.8cm（1尺1寸）の丸底のもので、耳が口縁上部に付く。ふつう内耳は、耳が土器の中心に向かって付けられるが、この器種は口縁に平行であるのが大きな特徴と言える。器面は橙色から黒褐色に発色している。また、カワラケは、口径20.0cm（7寸）、底径10.6cm、器高4.4cmで、内面立ち上がり部はやや溝状にくぼみ、体部はほぼ直線的に伸びる。底面には回転糸切り痕を残す。器面は橙色に発色している。



第191図 富津陣屋跡

飯野陣屋跡（第192図）

文献③-155他

飯野陣屋跡は、小糸川下流域の標高7m~8mの沖積地上に立地する。飯野藩主保科正貞が、慶安元年(1648)に、現在の富津市下飯野に築造したとされる。平成9年度末現在までに陣屋内と周辺を含めて、18次に及ぶ発掘調査を実施している。遺構には、貝殻地業跡や礎石跡、土坑、溝などが見られる。國學院大學図書館に旧飯野県に県庁が置かれていた頃(明治4年)の絵図が残っており、検出遺構と概ね対比できる。しかし、同年飯野県は木更津県に併合され、陣屋は取り壊されたようである。遺物には18世紀から明治以降に至る陶磁器・土器類が多量に出土しているが、これらは飯野藩藩士や家族が使用した遺品である。

内耳土器は、いずれも丸底で、内耳をもたない薄手の底部のタイプである。大きくは口縁端が内面方向に膨らみ折り返されるもの(1)と、緩やかに内湾するもの(2)とに分類できる。口径は後者が32cm~33cm（1尺1寸）であるのに対し、前者は約27cm（9寸）である。



第192図 飯野陣屋跡

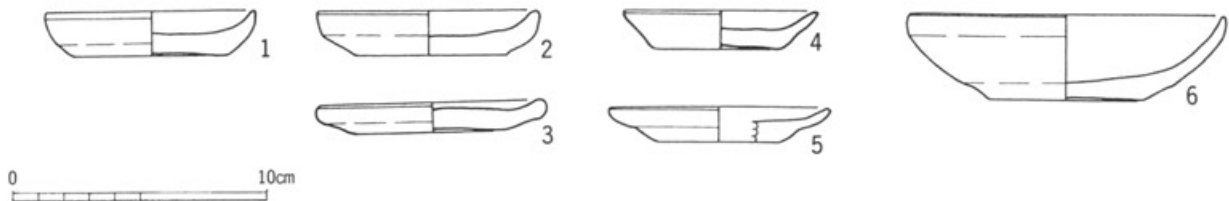
(2) 夷隅・長生・山武郡地域

岩川遺跡 (第193図、図版10-2)

文献③-170

岩川遺跡は長生郡長南町岩川に所在する。一宮川上流域右岸、標高15m前後の自然堤防上に位置する。遺跡南東の墨田・須田地区は、弘安2年(1279)8月25日「大膳職申状」(「兼仲卿記裏文書」)に見られる大膳職領としての「上総国墨田保」に当たると考えられる。調査では堀によって区画された範囲に、礎石建物、掘立柱建物、井戸、竪穴状遺構、土坑などから構成される屋敷跡が検出された。上総系平氏の中心氏族である角田氏の居館であった可能性が高いと考えられている。

カワラケは小型の皿形のもの、大型の杯形に大きく分類できる。1は口径8.4cm、底径6.1cm、器高1.8cmで、底部が厚く内面は極めて浅く、内湾する口縁端が鋭利である。2は1に比べ口縁端が丸く処理される。3は極めて扁平で、コースター状である。4、5はやや小形で、体部は直線的で細くなる。いずれも砂粒を含み、褐色になる。6は口径12.4cm、底径6.1cm、器高3.3cmで、内面が緩やかに立ち上がり、外面も緩やかに内湾する。砂粒を含みやや白っぽい褐色である。焼物の組成中、カワラケは20%、瓦質土器が^{③-263}58%を占める。



第193図 岩川遺跡

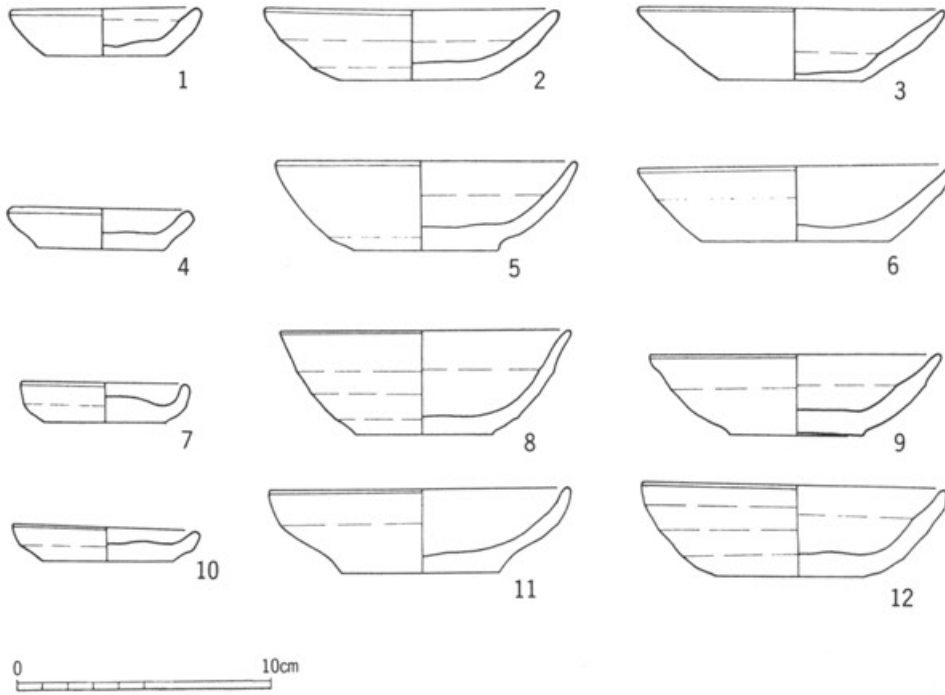
神田山第Ⅲ遺跡 (第194図)

文献③-219

神田山第Ⅲ遺跡は茂原市桂に所在する桂遺跡群を構成する遺跡の一つである。村田川最上流の標高100m前後の丘陵上で、太平洋と東京湾側の分水嶺にあたる。調査では掘立柱建物8棟、溝5条、土坑38基、地下式坑8基、火葬土坑1基などが検出された。その他の遺構には多数の塚や火葬土坑があり、また遺物には白磁碗・白磁四耳壺・石鍋・伊勢鍋等が見られるため、中世の寺院跡と考えられている。

1～3はH-012(地下式坑)覆土中位から出土した一括資料の内の3点である。そのうち3は内面底部から立ち上がり部にかけてかなり薄い、途中から厚みを増すため境目に稜ができる。口径12.3cm、底径5.7cm、器高2.5cm、白っぽい褐色で、砂粒を含む。4～6はH-015(地下式坑)出土一括遺物の内の3点である。5は底部を一部高台状に切り残す。5は口径12.1cm、底径5.8cm、器高3.6cmである。7～9は塚出土

遺物で、7は底面がかなり盛り上がっている。また、8は器高が4.2cmと、かなり深い。10～12はグリッド出土遺物で、11は腰が顕著に張るタイプである。口径12.1cm、底径6.2cm、器高3.4cm、白っぽい褐色で、砂粒を含む。カワラケに様々な形態が確認できるのは、おそらく、ある程度の年代幅があるからであろう。



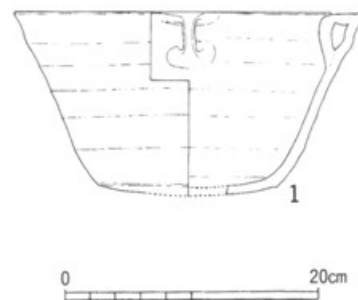
第194図 神田山第Ⅲ遺跡

山室城跡 (第195図)

文献③-201

山室城跡は山武郡松尾町山室に所在する。太平洋に注ぐ木戸川上流の右岸の台地先端に占地する。16世紀前葉に飯櫃城に移った山室氏の本城に推定されている。調査は崖面に近い台地先端部のみであったが、少ない資料の中に底部まで復元できる瓦質の内耳土器がある。

この内耳土器は推定口径26.0cm、底径14.0cm、器高14.5cmで、体部の立ち上がり部は明瞭ではあるが、底面は緩やかな弧を描き、中心部が最も垂れた丸平底である。体部は外傾して直線的に開き、内外面ともナデ調整される。内耳は粘土紐を口縁端から底部方向へ回し、体部との接合個所では肉厚となる。内耳の個数は不明である。



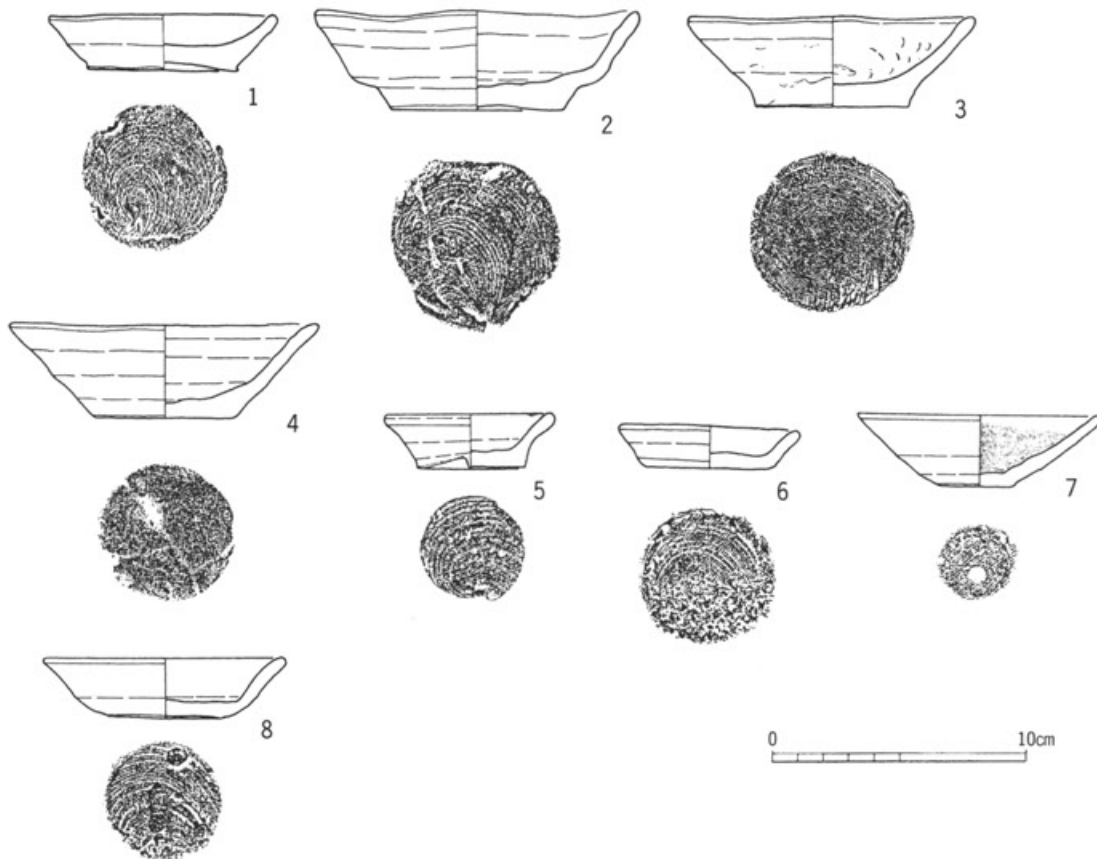
第195図 山室城跡

田向城跡 (第196図、図版9-2)

文献③-231

田向城跡は山武郡芝山町小池に所在する。栗山川支流の高谷川と木戸川に挟まれた標高39m~42mの台地上に位置する。『総州山室譜伝記』によれば、戦国時代後半に、現在の山武郡北半から匝瑳郡にかけての地域を領有した井田氏の最初の居城として登場する。井田氏については古文書で明らかだが、田向城については上記の軍記物以外に記載がない。

1~6は掘立柱建物の地鎮遺構から出土した一括資料である。ピットの対角線上と中心部分に一つずつ正位に置き、中央・東・南のカワラケ内には銭貨が文字面を上にして置いてあった。7は高台の突出が明瞭で、腰が張り出す。口径12.8cm、底径6.8cm、器高3.9cmを測る。長石・スコリアを含む。8は細砂・長石を含む。外面は橙褐色で内面は黒褐色である。9は底部から口縁まで一直線に開くもので、口径12.2cm、底径5.5cm、器高3.7cmである。10、11は小型で10は器高が2.2cm、11は器高が1.6cmである。12は口径と底径の比が大きく、胎土緻密で、内面に油煙が付着する。13は皿状の器形で、体部が緩やかに外反する。口径9.5cm、底径4.5cm、器高2.3cmである。



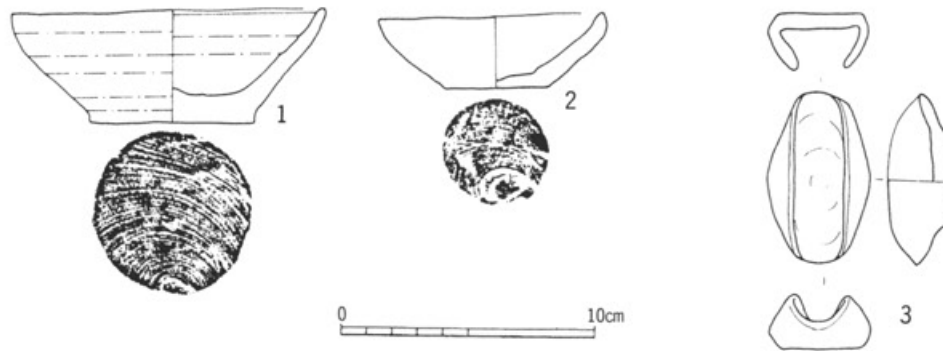
第196図 田向城跡

一宮城城之内遺跡 (第197図)

文献③-106

一宮城城之内遺跡は夷隅郡一宮町一宮に所在する。九十九里平野を眼下に見下ろす、標高18mの丘陵の東端に位置する。中世には正木氏の居城であり、近世に入ると明暦3年(1657)の脇坂淡路守と文政年間の加納久儔が一宮に陣屋を構えている。陣屋は幕末まで使用されたというが、一宮陣屋には脇坂陣屋と加納陣屋があり、双方とも位置についてははっきりしない。

カワラケは大小2種類あり、大きい方は口径12.5cm、底径6.5cm、器高4.4cmで、小さい方は口径9.0cm、底径4.1cm、器高2.8cmである。大型のものは底部が厚く、底部を少し残して糸切りしている。小型のものは底部よりも体部の方が厚くなっている。口縁端でやや内湾する傾向にある。また、口縁の最大幅6.8cm、最小幅2.0cm、底径3.3cm、最大高2.2cmを測る耳カワラケも出土している。



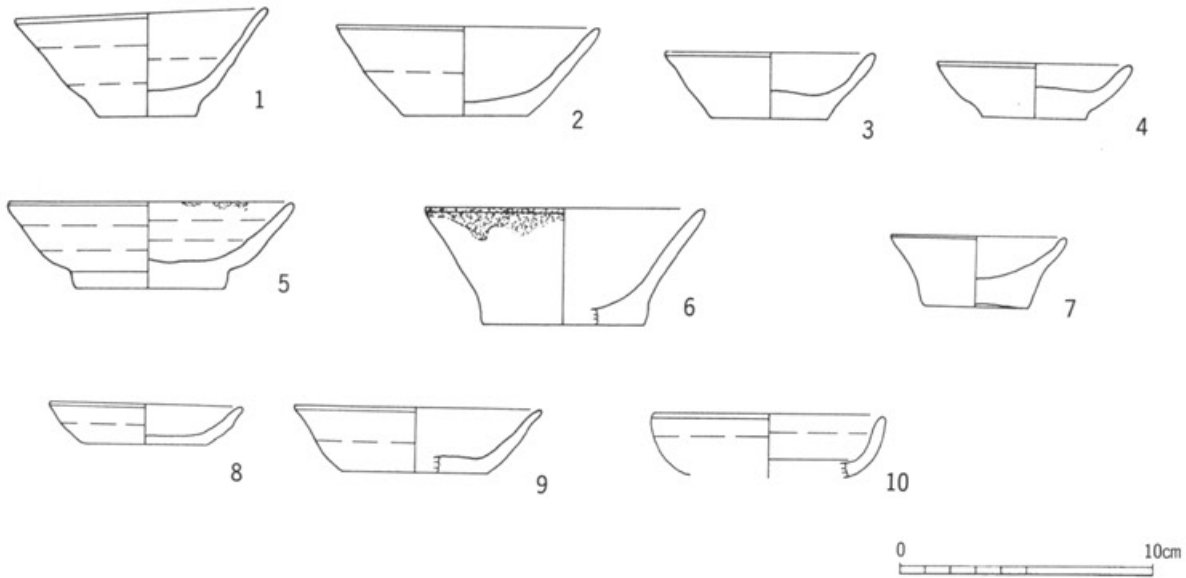
第197図 一宮城城之内遺跡

大多喜城跡 (第198図)

文献③-022

大多喜城跡は夷隅郡大多喜町大多喜に所在する。太平洋に注ぐ夷隅川が、中流域で流れを北から東へ変えるが、この屈曲部に西から東に張り出した丘陵上に位置する。近世になって著された軍記物によれば、上総武田氏が大永元年(1521)頃に築城し、天文13年(1544)に里見氏の重臣正木時茂が武田氏にかわって入城したとされる。天正18年(1590)には本多忠勝が入城するが、その後、阿部、稲垣、大河内松平氏などが城主となり、明治維新を迎えた。県立総南博物館建設時に発掘調査が実施されており、その際に出土したカワラケは、津田芳男・矢野淳一両氏により分類②-298されているので、これを基準に紹介する。

1はA類で、台状で底厚の底部をもち、器形は直線的に開き口縁部に至る。器高は高く碗形のものである。体部下端を強くナデ、底部を台状に作り出す。2はB類で、器形は直線的に開き口縁にいたる。器高は高く碗形のものである。底厚でやや台状になる底部をもつが、A類ほど顕著ではない。3はC類で、小型の皿類。底部は厚手である。4はD類で、小型の皿類。器形はC類に似るが、A類と同様に厚手で台状に作り出す底部をもつもの。5はE類で、D類に似て底厚で台状に作り出す底部をもつ、大型の皿類。口縁部に煤が付着するものが多く、灯明皿に利用されたものであろう。6、7はF類で、底部から外反気味に立ち上がる器形。大型と小型がある。8、9はG類で、小型の皿類。C、D類に比べ底径は大きくなり、器厚が薄い。10はH類で、丸みをもつ器形の小型の皿。底径は大きく、器厚も薄い。カワラケは概して、回転糸切り離したが、まれに静止糸切りが見られる。また、見込みを指ナデするものや、底面に板目状の圧痕が残るもの、底部外面を指ナデで、糸切り面を消すものもある。焼物の組成中、カワラケが48%、土師質土器が1%を占める。③-263



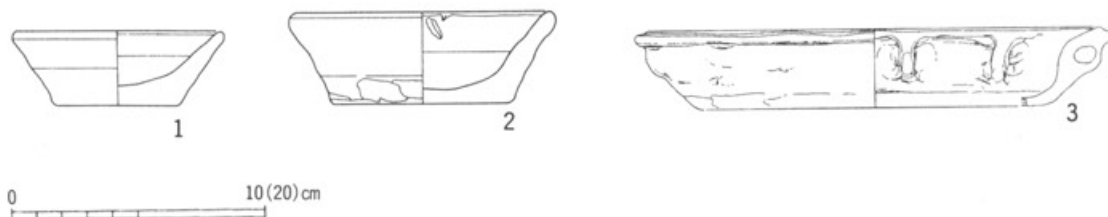
第198図 大多喜城跡

山中台遺跡 (第199図)

文献③-239

山中台遺跡は東金市山田に所在する。太平洋に注ぐ真亀川の支流小野川に北方から開析を受けた南北に伸びる舌状台地のほぼ中央に立地する。中世から近世の遺構・遺物を検出したが、中世を主体とする地点と近世を主体とする地点に、大きく分かれる。近世を主体とする地点からは、屋敷を構成する掘立柱建物、地下室、土坑墓、溝、土坑、ピット等が検出された。9号地下室からは、瀬戸・美濃産織部皿、唐津三島手大鉢、肥前磁器染付碗、青磁香炉などと共に、内耳土器が出土している。

この内耳土器3は、口径推定38.4cm (1尺3寸)、底径27.4cm、器高6.2cmを測る。底部はおそらく平底と思われる。体部立ち上がりは緩やかで、微妙に内湾する。外面にはナデ調整は認められない。内耳の個所では、体部が押し出され、器厚がその部分だけ薄くなっている。胎土中に石英粒やスコリア、雲母を含む。内面は暗茶褐色で、外面は真っ黒く煤けている。また、同じ遺構からロクロ目の明瞭な大小2種のカワラケが出土している。大きい方2は推定口径10.6cm (3寸半)、底径7.4cm、器高3.7cmで、底部静止糸切り、体部は直線的に立ち上がる。総じて器壁が厚い。小さい方1は、推定口径8.6cm (3寸)、底径5.0cm、器高3.0cmで、底部回転糸切りである。胎土中には小砂粒、黒色粒、スコリアを含み、明褐色から暗黒褐色に発色する。



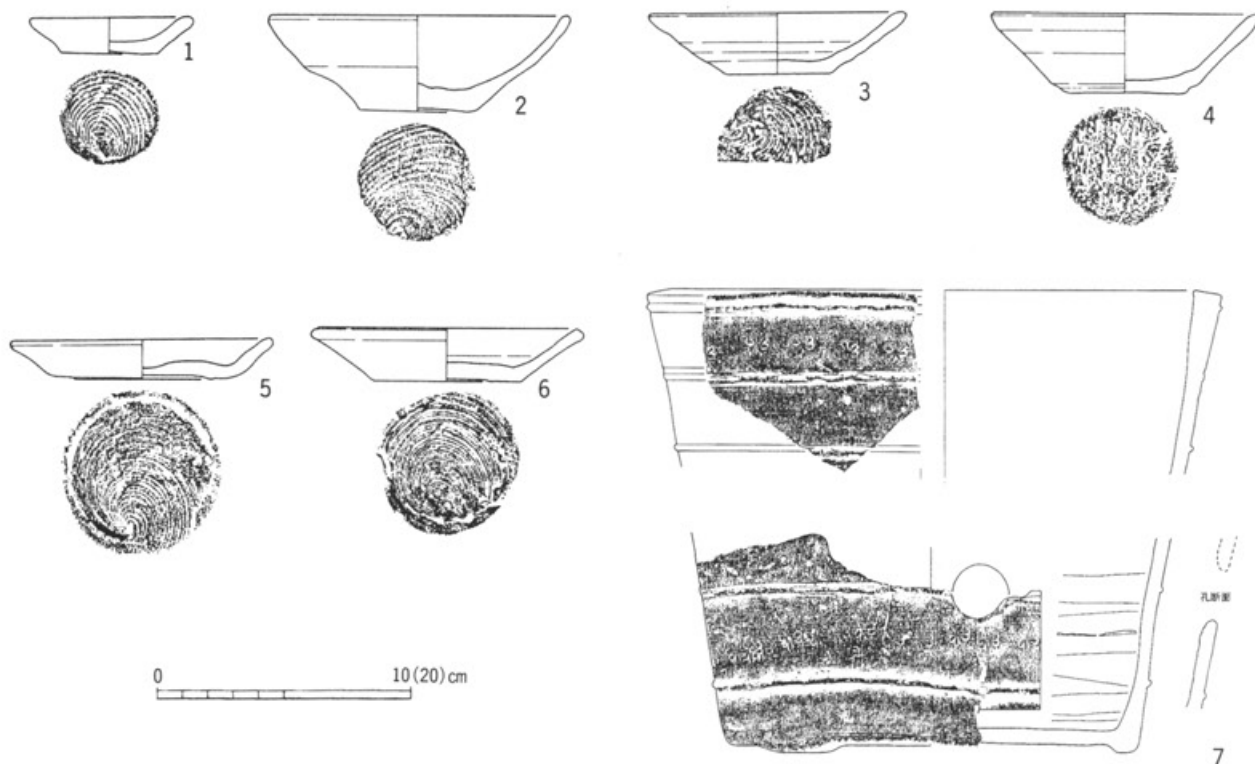
第199図 山中台遺跡

古宿・上谷遺跡 (第200図)

文献③-296

古宿・上谷遺跡は山武郡芝山町古宿に所在する。中世岩山城に隣接する遺跡で、13世紀後葉から16世紀半ばにかけての遺物が出土する土豪層の墓域や、17世紀半ばから18世紀にかけての近世屋敷関連の掘立柱建物、作業場的な浅い大型の土坑、貯蔵施設としての地下式坑、井戸、区画溝などの遺構が確認された。遺物は、17世紀前葉から18世紀代の土器・陶磁器が主体となる。

カワラケは中世から近世のものまで出土している。1は口径6.5cm、底径3.8cm、器高1.5cmで、底部回転糸切り、体部は直線的に短く立ち上がる。2は口径11.9cm、底径4.7cm、器高3.9cmで、口径と底径の比が大きく、体部は緩やかに立ち上がり、内湾する。3は口径10.2cm、底径4.1cm、器高2.4cmで、体部が大きく開き直線的に延びる。4は口径10.6cm、底径5.8cm、器高3.2cmで、底部と体部との接合部が外面でやや薄くなっている。5は口径10.4cm、底径5.5cm、器高1.6cmで、内面にタールが付着し、真っ黒になっている。立ち上がり部にやや歪みをもつ。6は口径10.7cm、底径5.7cm、器高2.1cmである。5、6共に内面の底部と体部の接合部が窪むのが大きな特徴である。7は土師質深鉢形土器である。底部から胴部にかけてと口縁部に大きく2分割され、接合できない。これは図面上で復元したものである。報告書では5本のタガを想定したが、他の遺跡出土の深鉢形土器に比べて口径に対する器高が短くなってしまった結果となったので、タガを6本に想定し直し器高を高くした。その結果、口径が45.4cm(15寸)、器高が36.7cmとなった。



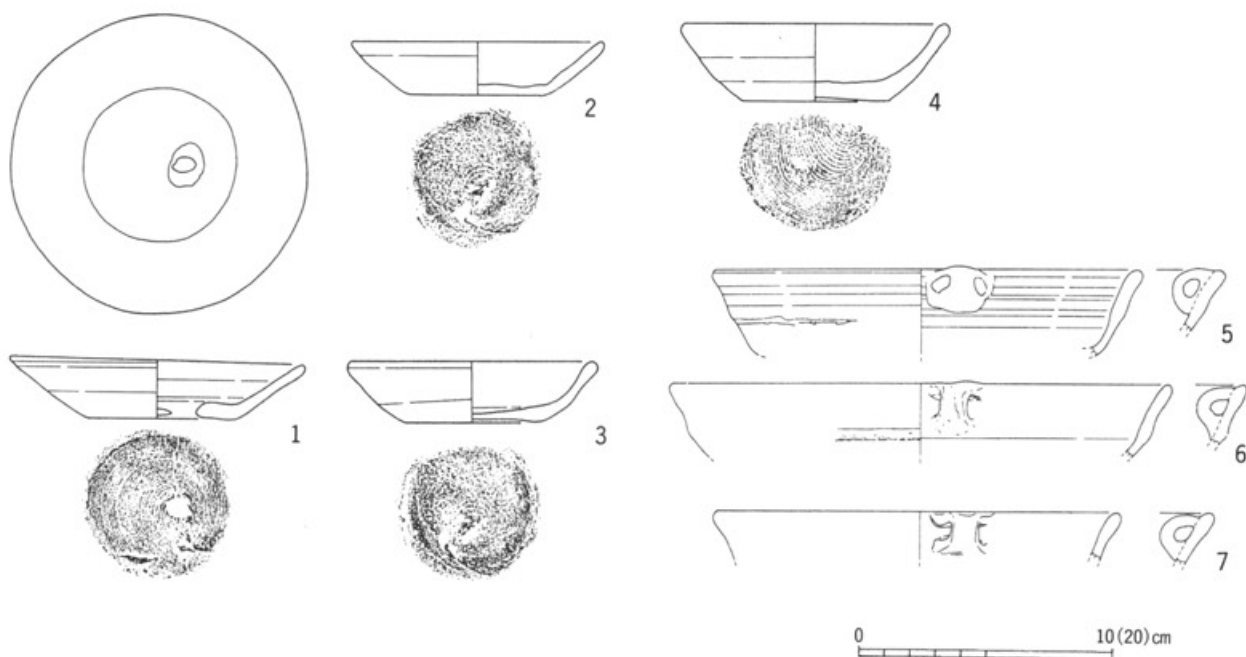
第200図 古宿・上谷遺跡

上宿遺跡 (第201図)

文献③-301

上宿遺跡は古宿・上谷遺跡に隣接し、数十年前までは、岩山地区最大の集落であった。検出した遺構は溝、方形竪穴状遺構、土坑、溝及び土坑列、竈、土蔵基礎部などで、古宿・上谷遺跡で見られた掘立柱建物を検出していない。遺物の主体は18世紀第3四半期から19世紀前半であり、おそらく18世紀第3四半期以降、建物が掘立柱建物から礎石を伴う建物へと変化していったものと考えられる。

この地点で出土したカワラケ2は推定口径10.0cm、底径5.5cm、器高2.1cmで、底部回転糸切り、体部は直線的に立ち上がる。内面立ち上がり部と底面が明瞭に窪んでいる。胎土は薄い褐色で、雲母細粒や鉄分粒を多量に含み、極めて企画性が高い。内耳土器は体部が底部に比べ厚く、口縁端でやや外反する。口唇部は丸くなっている。また、体部と底部との接合部はヘラケズリされている。耳の形態は様々で、団子状のもの(5)、太い粘土紐状のもの(6)、幅の広い板状のもの(7)などが見られる。ほとんどのものが丸平底のタイプである。



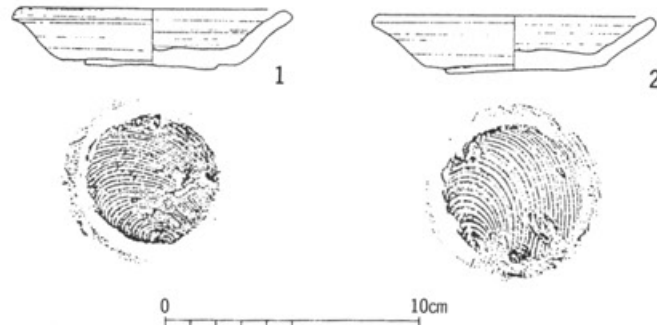
第201図 上宿遺跡

長倉宮脇遺跡 (第202図)

文献③-122

長倉宮脇遺跡は山武郡横芝町長倉に所在する近世塚である。標高37mの狭い台地上に2基並んでいるうちの東側の塚を調査した。平面形態は一辺約8.5mの正方形で、盛土高は約2.6m、主軸は南北方向をさす。墳頂下の旧表土面上から、青銅製双盤1点、和鏡2面、カワラケ2点、寛永通寶11点が出土した。

カワラケ1は口径10.8cm(3寸半)、底径6.8cm、器高2.2cm、底部回転糸切りで、体部はやや外反する。胎土は細砂粒を含み、色調は内外面茶褐色、硬質である。2は口径11.0cm(3寸半)、底径6.9cm、器高2.2cm、底部回転糸切りで、体部は直線的に開く。胎土は細砂粒を含み、内外面とも淡茶褐色、硬質である。塚造営時に何らかの仏教法要を行ったと思われる遺物群である。伴出した寛永通寶(古寛永1枚、文銭11枚)により、塚造営の時期が17世紀後半と考えられる。



第202図 長倉宮脇遺跡

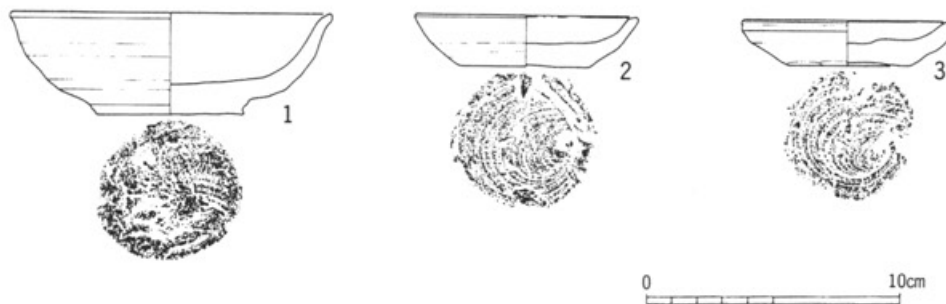
(3) 千葉市・八千代市地域

西屋敷遺跡 (第203図)

文献③-058

西屋敷遺跡は千葉市若葉区大宮町に所在する。都川とその支流に挟まれた標高20m前後の台地上に位置する。千葉氏宗家が滅亡する15世紀後半頃までは、千葉氏宗家か家臣の直接の支配下にあったものと考えられる。遺跡は名主などの上層農民の墓域を核とした集団墓と考えられている。遺跡は調査範囲で3つの台地整形によって造り出された区画に分割される。

010号跡(土坑墓)内から副葬品として一括して5点のカワラケが出土した。図示したのはそのうちの3点である。1は大型で、口径12.6cm、底径5.8cm、器高4.0cmで、底部は高台状に厚く切り残し、腰が張り、口縁端で大きく外反する。内面には一方向に指ナデ痕が残る。明黄褐色である。2、3は小型のもので、口径8.3cm~8.9cm、底径4.7cm~5.6cm、器高1.8cm~2.0cmで、体部は短く緩やかに内湾する。3の口縁端には、棒かへらによる沈線が廻る。外面底部は若干上げ底状になる。



第203図 西屋敷遺跡

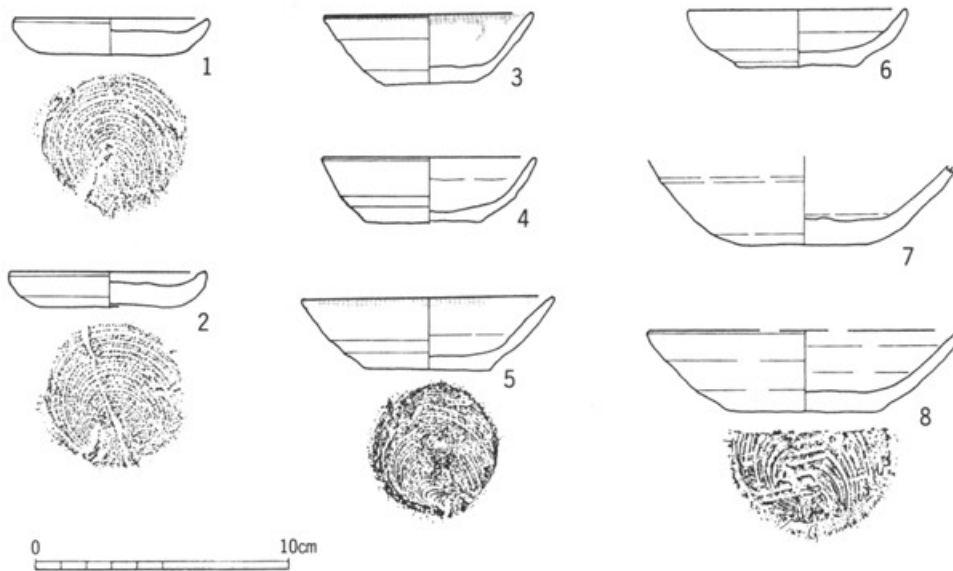
千葉城跡 (第204図)

文献①-091

千葉城跡は千葉市中央区亥鼻に所在する。東京湾を見下ろす北西方向(亥の方角)に突き出た標高約20mの台地先端に位置する。鎌倉時代から室町時代にかけて千葉宗家の居城であったが、享徳4年(1455)千葉胤直とその子胤宣は、一族の原氏と馬加康胤によって、自害に追い込まれた。その後、馬加氏は千葉

宗家を継ぎ本佐倉城を本拠としたため、千葉城は廃城になったと言われる。

主郭土塁下部から蔵骨器として使用されていた常滑産6a型式の壺、古瀬戸前II b期の灰釉四耳壺の蓋として、カワラケが2点(1、2)出土している。小型扁平で、底部は厚く体部は短い。また、多年度にわたる調査から様々な形態のカワラケが出土している。3～5は1号土坑(1982年度調査)出土一括資料で、大小2形態ある。5は立ち上がり部が一旦くびれ、明瞭な稜線をもって肥厚する。また、いずれも底径が短く、腰部が少し張るように見受けられる。6～8は1号地下式坑(1996年度調査)出土一括資料で、やはり大小2形態ある。いずれも、体部が緩やかに内湾する。底部を高台状に切り残すものと、高台がないものがある。



第204図 千葉城跡

廿五里城跡 (第205図)

文献③-131

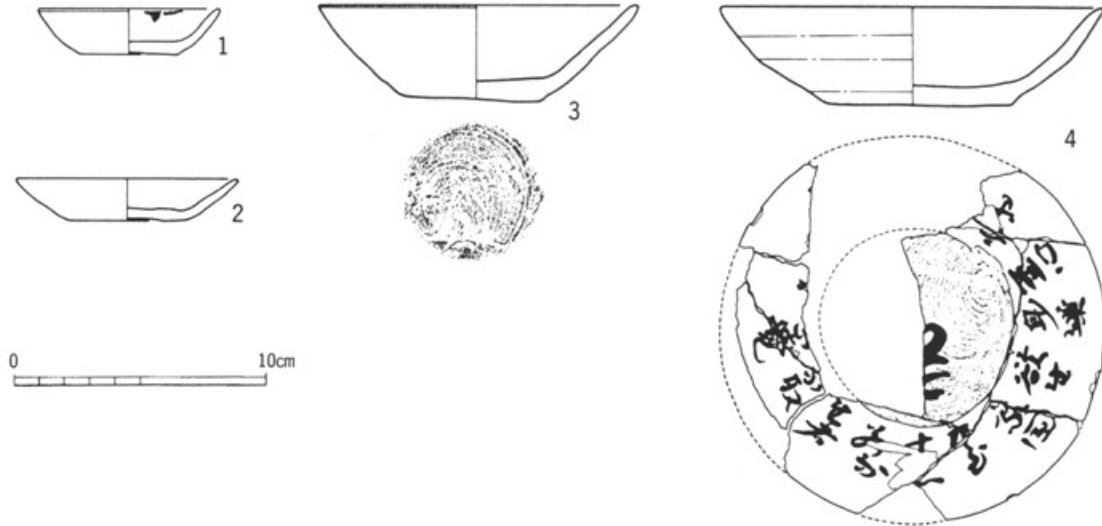
廿五里城跡は千葉市若葉区東寺山町に所在する。東京湾に流れ込む都川支流によって開析された標高25m前後の台地上に位置する。中世には千葉氏の所領下にあったものと考えられる。城館遺構と共に、甕棺墓(塚)、土坑墓、火葬墓、火葬土坑を検出した。

カワラケは小型と大型に分類できる。1は口径6.9cm、底径3.8cm、器高1.8cm、茶褐色で、細砂粒含む。口縁端に煤が付着する。内面中央に横方向の指ナデ痕が残る。2は口径8.5cm、底径4.6cm、器高1.7cm、細砂粒を含み、赤褐色である。3は口径11.4cm、底径5.3cm、器高3.8cmで、明茶褐色。4は口径15.1cm、底径5.9cm、器高3.8cmで、外面体部に『無量寿経』の阿弥陀仏四十八願のうち十八願が墨書される。いずれの形態も皿形で、口縁端が細くなる。

生実城跡 (第206図、図版7-2)

文献①-091他

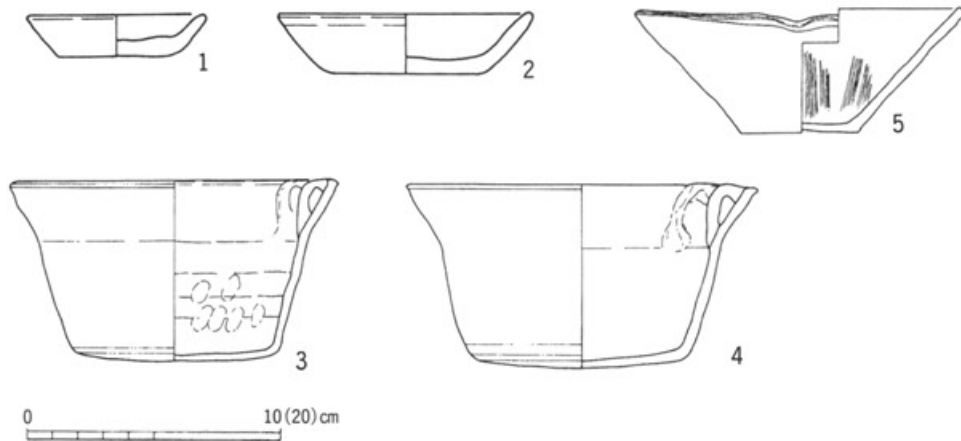
生実城跡は千葉氏中央区生実町に所在する。村田川によって形成された沖積平野を臨む、標高16m～22mの台地上に位置する。足利義明が小弓御所を奪うまで、原氏は小弓城を居城としていたが、国府台合戦で義明が戦死すると、天文8年(1539)原胤定が北生実の地に生実城を築いたとされる。この後、原氏は



第205図 廿五里城跡

臼井城に移り、生実城は上総方面に対処する拠点となった。永禄4年(1561)と元亀2年(1571)には里見氏に攻め落とされるが、再び原氏が奪回した。天正18年(1590)以後、徳川家康の家臣西郷家員が元和6年(1620)まで在城し、その後森川氏が生実藩1万石の領主として、城内の一角に陣屋を構え、明治4年(1871)の廃藩置県まで続いた。

1、2のカワラケは地下式坑一括資料で、大小2形態ある。いずれも皿形で、口径と底径の比が小さい。また、底部と体部の厚さに著しい違いが無く、体部は概ね直線的に延びる。内耳土器3、4は地下式坑覆土一括資料で、底部はやや深めで丸みを帯び、体部は内耳接合部下部から外側に折れる。内耳接合部で、体部が著しく外に突出するようなことはないようである。いずれも1対2の3耳で、外面に煤が付着する。5の土器挿鉢は片口状で、口縁端に浅い溝をもつ。瓦質である。



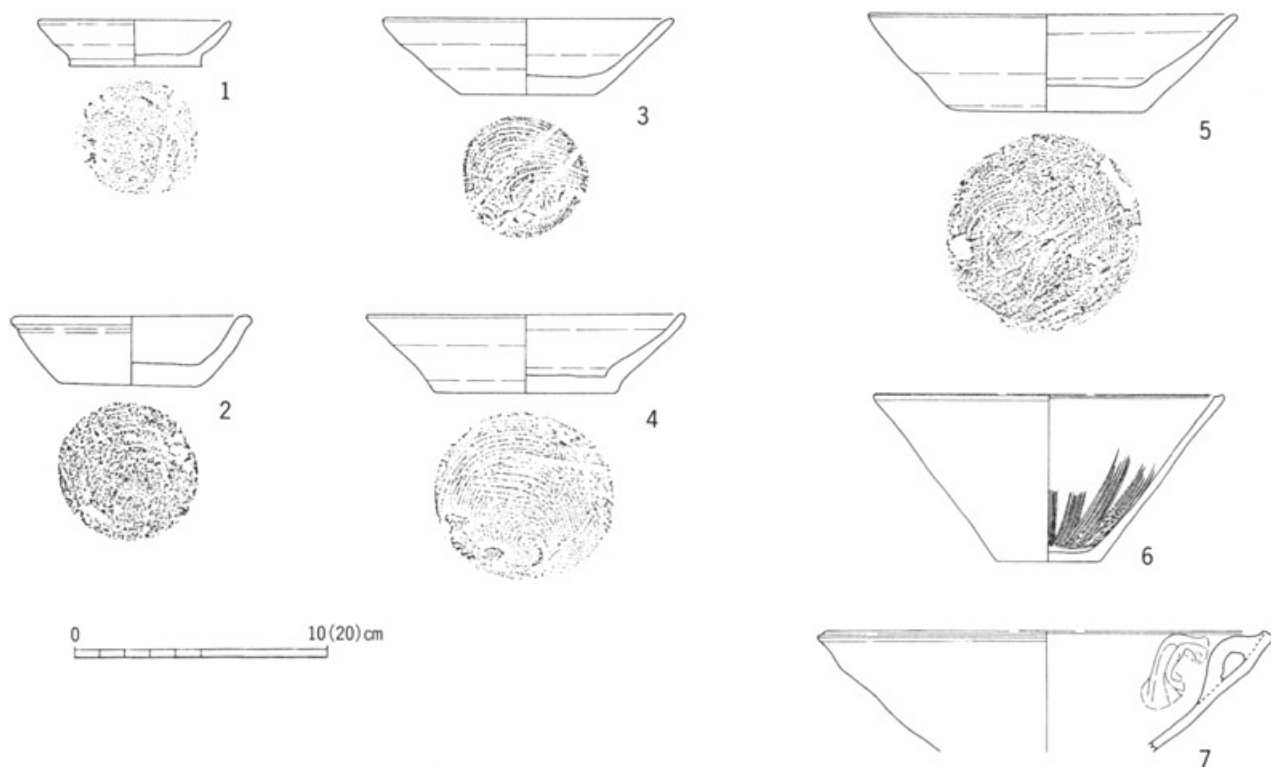
第206図 生実城跡

高品城跡 (第207図、図版7-1)

文献③-279

高品城跡は千葉市若葉区高品町に所在する。東京湾に面する沖積平野を見下ろす、標高約25mの台地上に位置する。中世には千葉庄高篠にあたり、中世を通じて千葉氏や家臣の支配下にあった。

カワラケは小型、中型、大型に大きく分類できる。小型の1は口径7.5cm、底径5.3cm、器高1.9cmで、見込み横ナデ、胎土中に白色針状物を含み、明黄褐色。2は全体に厚手で、口径9.0cm、底径5.4cm、器高2.8cm、見込み横ナデ、底部外周ナデ、胎土中に白色針状物を含み、黒褐色である。中型の3は径11.2cm、底径5.2cm、器高3.0cmで、底部に板状圧痕が残り、黄褐色である。4は口径12.4cm、底径7.1cm、器高3.1cm、胎土中に白色針状物を含み、黄褐色である。大型の5は口径14.4cm、底径7.5cm、器高3.9cm、見込み横ナデ、胎土中に白色針状物を含む。底面に簾状圧痕が残る。明黄褐色である。瓦質の内耳土器6は口径27.4cm、底径7.8cm、器高13.2cmで、砂粒多く、黒褐色。土器挿鉢7は口径に比べ底径が著しく小さいタイプのもので、瓦質である。



第207図 高品城跡

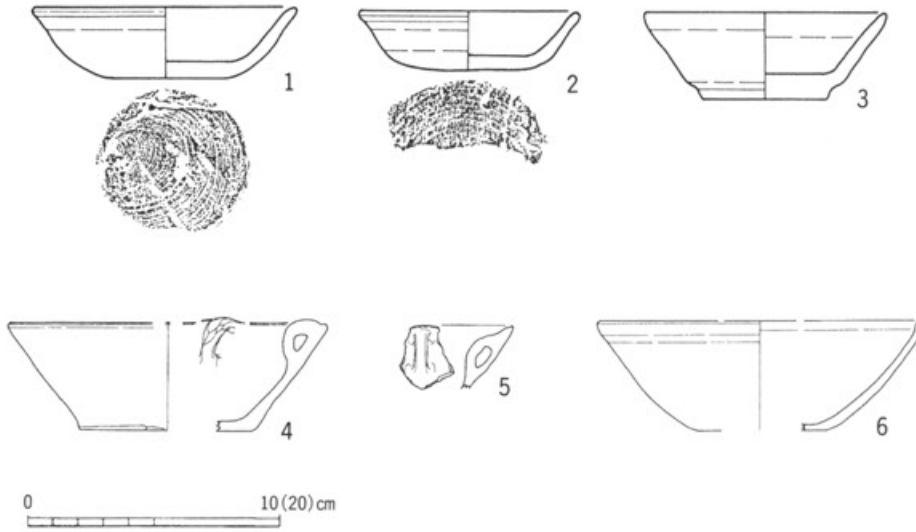
南屋敷遺跡 (第208図)

文献①-091

南屋敷遺跡は千葉市若葉区源町に所在する。葭川支流によって開析された標高約30mの舌状台地の中央部からやや基部側に寄った所に位置する。中世には千葉荘寺山郷に属し、鎌倉中期には千葉氏家臣「名主寺山殿」による支配を受けていた。15世紀初頭には寺山氏や木内氏の所領があった。遺跡は四方を土塁と堀によって囲まれた方形館跡である。総じて遺物量は少ないものの、大窯1段階の縁釉挟み皿や挿鉢が主体で、15世紀後葉から16世紀初頭の年代を想定できる。

カワラケは1、2が大小2形態の皿形で、口縁端でやや外反する。3は杯形で、底部を高台状に切り残

しているため、結果的に底部が分厚くなっている。体部は直線的に延びる。内耳土器（4～5）はいずれも瓦質で、5は4に比べ口径と底径の比が大きいものであろうか。6は4に比べ薄手で、体部は緩やかに内湾し、口縁端が玉縁状に肥大する。



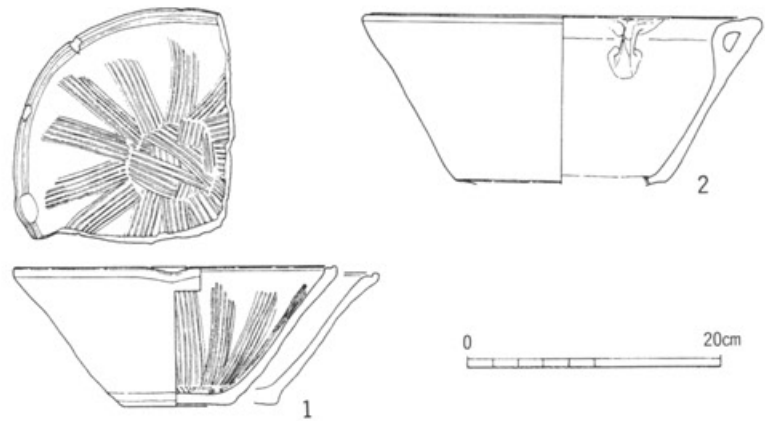
第208図 南屋敷遺跡

井戸向遺跡（第209図）

文献③-142

井戸向遺跡は八千代市萱田に所在する。印旛沼に流れ込む新川の中流左岸、標高20m前後の台地上及びその斜面に位置する。12世紀から13世紀前半にかけては国衙領であったが、13世紀後半伊勢神宮の御厨になった。中世の墓地遺跡で、調査では土坑墓から「山吹双鳥鏡」と短刀が出土している。また、小型方形の埋納銭土坑からは新の貨銭にはじまり明の宣徳通寶、朝鮮通寶に至るまで660枚の輸入銭貨が出土している。

土器擂鉢1は口径25.2cm、底径8.7cm、器高11.1cmで、胎土中に砂粒を含む。黒褐色で、底部に木葉痕が残る。口縁端が片口状になり、内面には櫛目が入る。内耳土器2は口径31.3cm、底径16.4cm、暗褐色で瓦質。砂粒を含み、外面には煤が付着する。



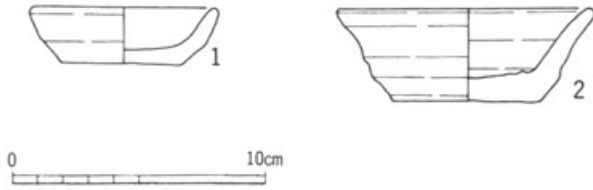
第209図 井戸向遺跡

黒ハギ遺跡 (第210図)

文献⑤-061

黒ハギ遺跡は千葉市緑区土気町に所在する。標高90m前後の鹿島川源流部の台地上一帯に立地する。平成9年度のI区調査では、中世掘立柱建物35、溝40、道路4、土坑23、井戸1、地下式坑3などを検出しており、現在も調査を継続している。

紹介したカワラケは大小あるが、いずれも小型で、口径と底径の比が小さく、体部の立ち上がりが急である。



第210図 黒ハギ遺跡

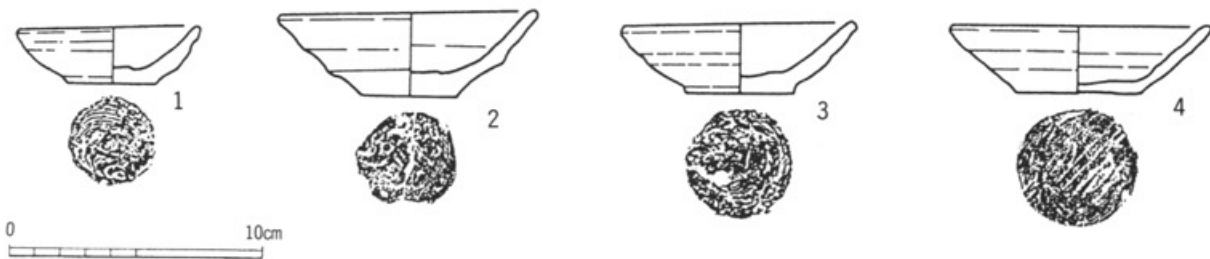
(4) 東葛飾郡地域

根木内遺跡第4地点 (第211図)

文献③-270

根木内遺跡第4地点は松戸市根木内に所在する。後述する小金城跡の東方約1km、標高23m前後の台地上に位置する。根木内城の一角にあたり、高城氏が小金城にその拠点を移すまで在城していたとされる。第4地点では、空堀、掘立柱建物、土坑等城郭の一部の遺構が検出された。空堀の張り出し部コーナーから、底面より約10cm程浮いた状態で、2か所でカワラケが重なって出土した(3が1点、4及びその同形態合計5点)。

カワラケ1は口径7.3cm、底径3.5cm、器高2.3cmで、胎土中に混和材を含まない。2は口径10.2cm、底径3.8cm、器高3.3cmで、体部外面に明瞭な稜を残す。3は口径9.4cm、底径4.3cm、器高2.8cmで、回転糸切り離したが、高台状に底部を残している。4は口径10.4cm、底径4.9cm、器高2.7cmで、体部は直線的に延びる。全体に薄手で、胎土中に砂粒・白色粒子を若干含む。3及び4は出土状況から同一時期のものである。



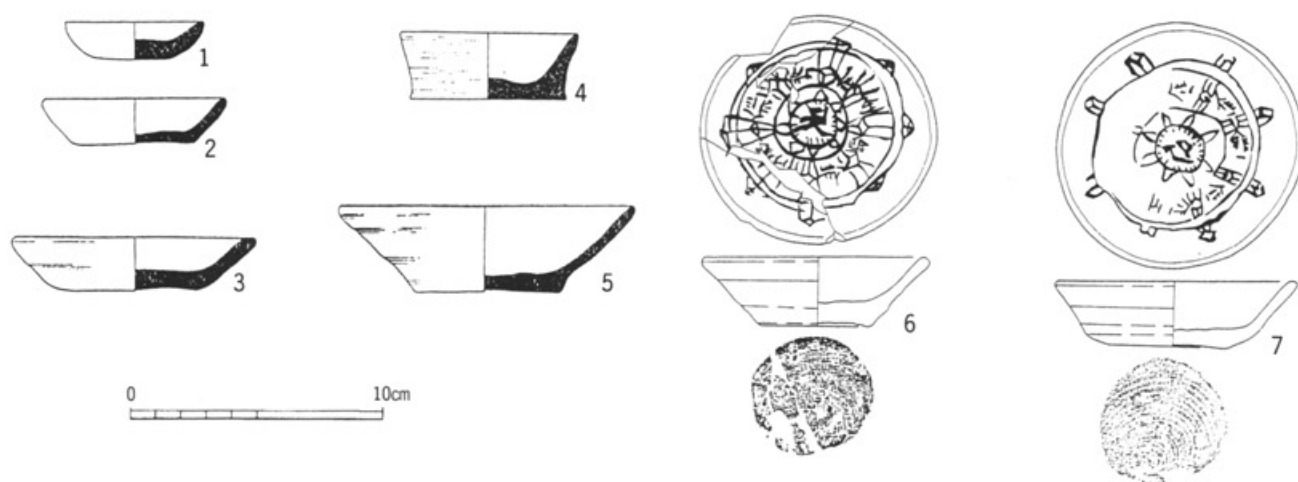
第211図 根木内遺跡第4地点

小金城跡 (第212図、図版1-1)

文献③-005・271

小金城跡は松戸市大谷口に所在する。江戸川に向かって東から西に突き出た標高20m余りの台地上に位置する。戦国時代後期には原氏と主従関係にあった高城氏が、天文7年(1538)以降小金城を本拠としていた。東西800m、南北600mに及ぶ大規模な城郭である。

カワラケ1は口径5.5cm、器高1.5cm、小型・厚手で立ち上がりがはっきりしない。2は口径7.3cm、底径4.6cm、器高1.8cmで、胎土は5に類似する。3は口径9.6cm、底径5.0cm、器高2.1cmで、器壁厚く焼成やや不良で、脆い。灯明皿としての痕跡が残る。4は口径7.0cm、底径6.1cm、器高2.7cmで、底面は厚く、体部は外反しながら垂直に近く立ち上がる。水引き痕が明瞭である。5は口径11.7cm、底径5.7cm、器高3.5cm、口縁はやや内湾気味で、肥大する。淡黄褐色ないし橙褐色で、胎土は精選されている。内面には顕著な口クロ目が残る。建物付近から多く出土している。6及び7は輪宝墨書土器で、6は口径8.7cm、底径4.2cm、器高2.8cm、7は口径9.3cm、底径4.5cm、器高2.7cmを測る。いずれも赤褐色で、胎土中に鉄分を含み、緻密である。



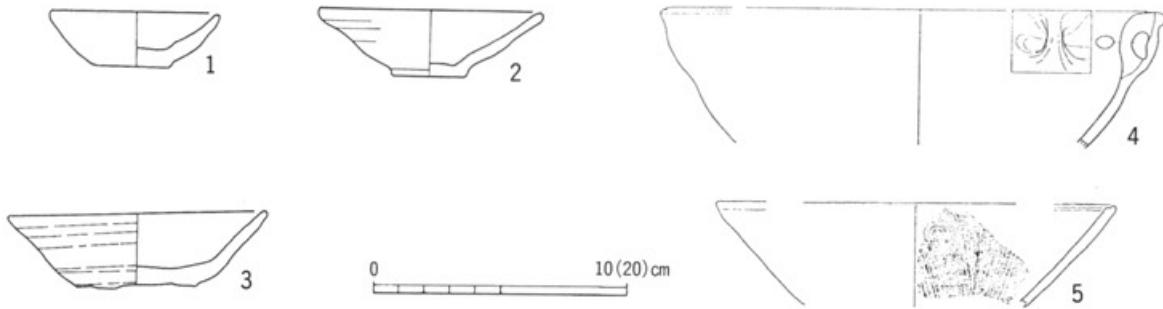
第212図 小金城跡

鹿島前遺跡 (第213図)

文献③-077

鹿島前遺跡は我孫子市中峠台に所在する。手賀沼と利根川に挟まれた、標高約20mの台地上に位置する。当地域は中世前期には相馬御厨に含まれていた。また、本土寺過去帳に天正17年(1589)没した「道悦 中峠 河 石雲齋/天正十七巳丑三月」など、河村氏が中峠に居住したことが見え、同氏が城主とされる中峠城跡(*)も所在する。中世から近世にかけての大規模な墓地遺跡である。

カワラケ1は厚手で、若干内湾気味である。赤褐色で胎土中に雲母を少量含む。2は底径が著しく小さく、体部が直線的に大きく開く。底部と体部接合部内面が大きく扶れるように薄くなる。胎土は密で、褐色である。3は大形で、胎土は密で、黄褐色である。立ち上がり部が若干張り出す。4の内耳土器は胎土中に雲母・石英が含まれ、薄い褐色である。内耳は紐状で体部との接合部は太くしっかりしている。また、内耳接合部の体部面は内側から指で押し出され、器壁が薄くなっている。内耳土器は概ね立ち上がり之急で、深いタイプのものばかりである。雲母・石英含み、薄い褐色である。5の土器播鉢は内面灰色、外面暗褐色である。



第213図 鹿島前遺跡

三輪野山第Ⅲ遺跡 (第214図)

文献③-150

三輪野山第Ⅲ遺跡は流山市三輪野山に所在する。江戸川中流左岸の標高約17mの台地上に位置する。中世前期には矢木（八木）郷に含まれ、相馬氏一族の八木氏の支配下にあり、戦国時代には高城氏の支配に入っていたと考えられる。中世から近世にかけての大規模な墓地遺跡である。開元通寶から宋元通寶、宣和通寶、咸淳元寶、洪武通寶、永楽通寶、宣徳通寶、寛永通寶、文久永寶などの27種393枚の多量の錢貨が出土している。したがって、カワラケ、内耳土器にもかなりの年代幅が想定される。

内耳土器は、1のように胎土中に多量の雲母を含み、体部が緩やかに立ち上がるものと、2、3の雲母を含まない底部が平坦、体部が垂直に立ち上がるものの2種類に大きく分類できる。1は復元口径39.0cm（1尺3寸）、底径30.5cm、器高5.7cmで、体部のほぼ中間あたりに紐状の内耳を付ける。2、3は板状の耳を口縁端から底面に掛けて貼り付けている。



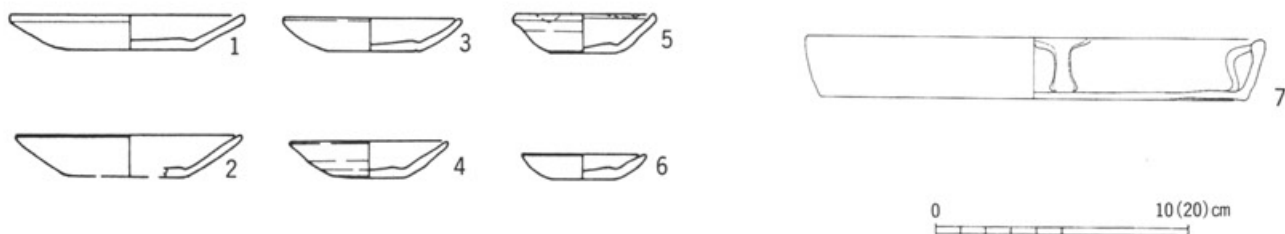
第214図 三輪ノ山第Ⅲ遺跡

花前Ⅱ-1遺跡 (第215図)

文献③-078

花前Ⅱ-1遺跡は柏市船戸に所在する。田中藩第25代代官を勤めた増田半兵衛の屋敷跡と考えられる。6間×8間の主屋や土蔵の基礎部分をはじめ井戸、流し溜、土坑、溝などを検出した。主屋の基礎は粘土・ロームで版築し、その上に土台石を置いて上屋を構築したもので、土蔵は布堀り後、ローム、粘土、黒色土を交互に充填し、築き固めている。

出土したカワラケは、大きさから大中小の3種類に分類できる。大型の1は口径9.3cm（3寸）、底径5.0cm、器高1.4cm、非常に薄手で、内面立ち上がり部が深く窪む。2は同型で、3はやや小型（2寸半）のものである。中型の4は口径6.3cm（2寸）、底径2.8cm、器高1.5cmで、小型の6は口径5.0cm（1寸半）、底径2.4cm、器高1.0cmである。1、3、5はいずれも灯明皿として使用されていた。カワラケは江戸カワラケと見られる。内耳土器7は口径36.5cm（1尺2寸）、底径33.7cm、器高4.8cmで、内面は赤みを帯び、外面は煤が付着する。底面は完全に平坦で、体部は短く口縁端で肥厚する。内耳は幅の広いものが、口縁部から底部立ち上がりに近いところに付く。



第215図 花前II-1遺跡

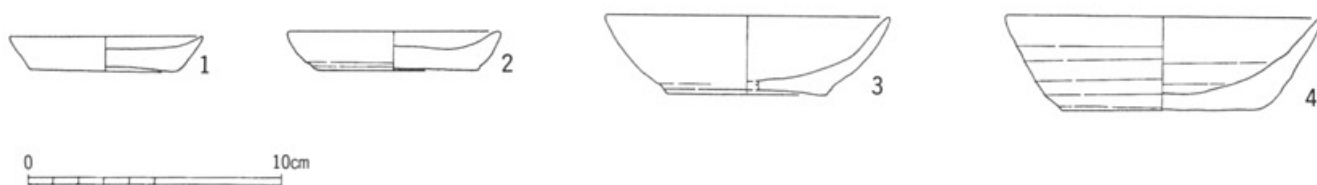
(5) 印旛郡地域

駒井野西ノ下遺跡 (第216図)

文献②-306

駒井野西ノ下遺跡は成田市駒井野に所在する。利根川に注ぐ取香川の最上流部に面した、標高40m前後の台地上に立地する。駒井野という地名は貞和4年(1348)正月晦日「平清胤寄進状」(「香取分飯司家文書」)に見え、平清胤が駒井野の阿弥陀堂に免田を寄進したことがわかる。調査では溝によって区画された範囲に2間×6間、四面縁で、廊状の張り出しが見られる掘立柱建物が検出された。中世の掘立柱建物としては珍しい礎石立ての建物で、在地土豪層の屋敷跡と考えられる。

掘立柱建物を囲む溝の北西コーナー付近から、数十点を数える一括廃棄されたカワラケが出土した。このカワラケは大きさで大きく2つに分類できる。1は口径7.6cm、底径5.7cm、器高1.4cm、底面が分厚く体部がほとんどなく、すぐに口縁となり、口縁端が鋭利な処理をされる。2は口径8.4cm、底径6.5cm、器高1.6cmで、口縁端が少し丸みを帯びている。1、2ともに体部が短く、まるでコースターのようなものである。一方3は口径11.2cm、底径6.3cm、器高3.1cmで、底部外面がやや窪む。体部は緩やかに内湾する。4は口径12.5cm、底径7.6cm、器高3.7cmで、体部立ち上がりが分厚く、内面は緩やかに立ち上がる。結果的に立ち上がり部が相当分厚くなっており、重量感がある。底部はいずれも回転糸切りである。



第216図 駒井野西ノ下遺跡

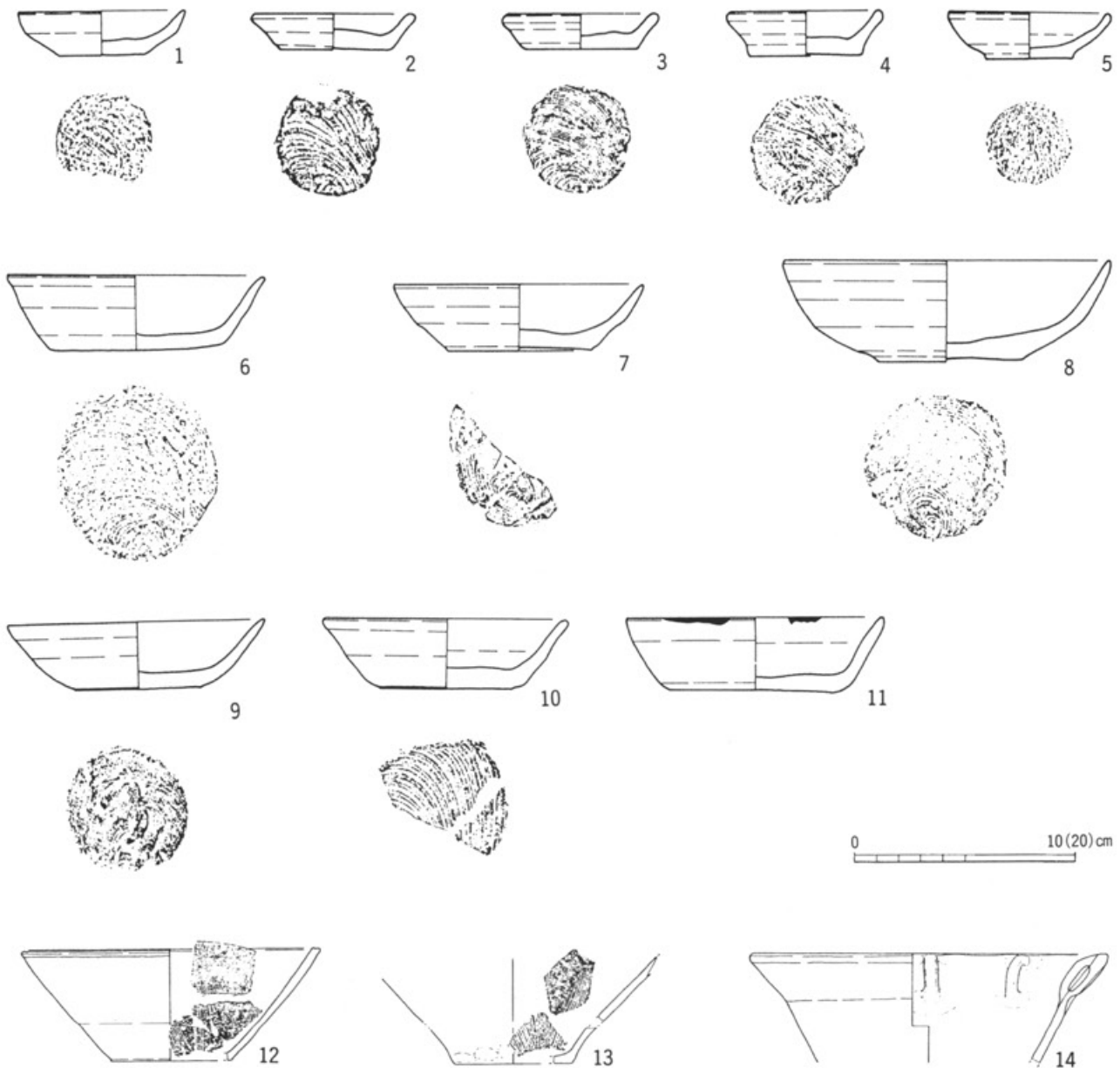
小林城跡 (第217図、図版1-2・2-1・2-2)

文献③-228

小林城跡は印西市小林に所在する。利根川及びその支流である将藍川と長門川によって開析された標高25mの台地先端部に位置する。小林城を直接示す中世史料はない。16世紀半ば以降には印西荘が千葉宗家の所領となっていた。中世の出土陶磁器・土器のうち土師質土器(カワラケを含む)が411点(49.5%)と最も多く、次いで内耳土器(土鍋)84点、瓦質土器115点となり、73%を在地産土器が占める。

カワラケは大きさから大中小の3種類に分類できる。小型の1と5は口径7.4cm~7.6cm、底径3.9cm~4.0cm、器高2.0cm~2.1cmで、口径と底径の比が大きく、体部が緩やかに内湾する。一方2~4は口径7.1cm~7.5

cm、底径5.0cm～5.1cm、器高1.6cm～2.0cmで、口径と底径の比が小さく、底部が厚めで、体部が短く直線的である。中型の7と9は口径と底径の比が比較的大きく、緩やかに立ち上がった後、口縁端が鋭利になる。1と同形態になる。6、10、11は7、9に比べると口径と底径の比が小さく口縁端も丸く処理される。口径11.1cm～11.7cm、底径5.9cm～7.7cm、器高3.2cm～3.5cmである。8は大型で1と形態が類似する。口径15.0cm、底径6.5cm、器高4.5cmである。土器挿鉢(瓦質)12は口径27.1cm、底径11.0cm、器高10.4cmで、体部は直線的に立ち上がり、口縁端に浅い沈線が巡る。内耳土器14は口径32.6cmで、底部は不明。細いリング状の内耳が付く。口縁から5cmほど下部のところで、体部が大きく外側に折れる。外面黒褐色で、内面浅黄橙色である。



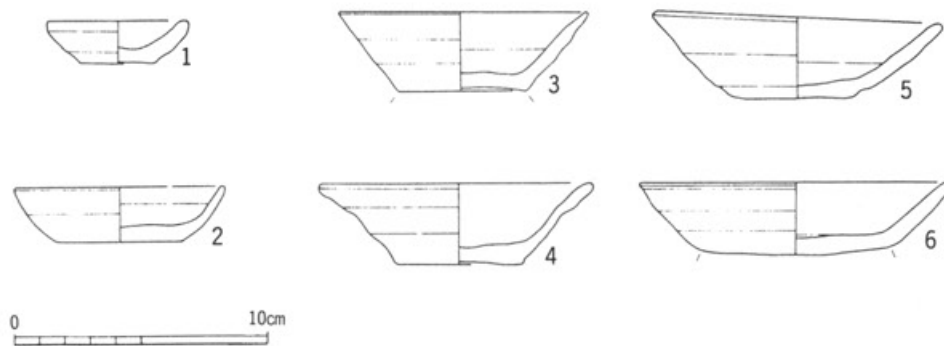
第217図 小林城跡

高岡大福寺遺跡 (第218図)

文献③-210

高岡大福寺遺跡は佐倉市高岡に所在する。鹿島川支流の高崎川右岸、標高30m前後の台地上に立地する。12世紀後半には遺跡は印東荘に含まれ、上総氏系印東氏の拠点の所領であった。13世紀中ごろ以降は千葉氏の勢力下にあった。4万㎡に及ぶ広範囲の調査区は7ブロックに分かれ、15世紀代には、屋敷、寺院、墓地となっていた。屋敷地は百姓・作人層のもので、寺院は土豪や有力農民層により維持・運営されていたものとされる。

カワラケは大きさで、大中小に分類できる。小型の1は口径5.6cm、底径2.9cm、器高1.7cmで、全体に厚手で、体部は短く内湾する。鉄分粒・白色砂粒を含み、淡茶褐色。中型の2は口径8.3cm、底径4.9cm、器高2.2cmで、底部は厚く体部は緩やかに内湾する。口縁部に油煙付着し、胎土は1に同じである。大型の3、4は鉄分粒・白色砂粒・半透明砂粒を含む。3が口縁が細く真っ直ぐなのに比べ、4は口縁端が肥大し、外反する。5は体部がやや内湾気味である。底部外面に板状の圧痕がある。内面指ナデ、淡茶褐色である。また、外面の底部と体部の接合面が窪む。3～5が口径と底径の比が大きいのに比べ、6はその比が小さい。口径12.3cm、底径7.4cm、器高2.9cmである。胎土中には雲母を含む。



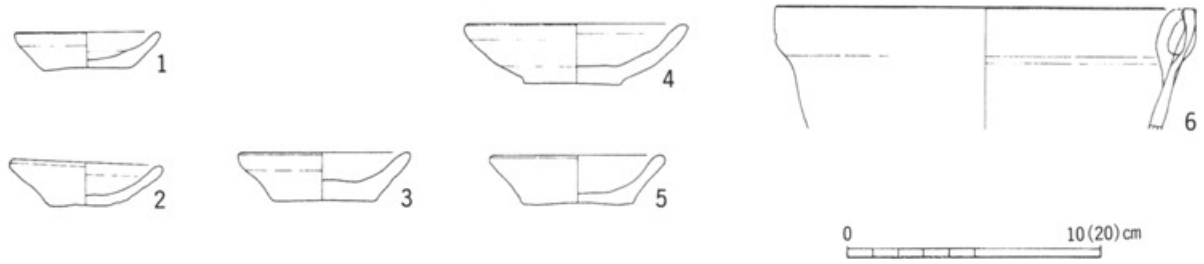
第218図 高岡大福寺遺跡

駒井野荒追遺跡 (第219図)

文献③-196

駒井野荒追遺跡は成田市駒井野に所在する。浅い谷を隔てて、駒井野西ノ下遺跡の南東側に位置する。調査では中世から近世にかけての建物関連の遺構を検出した。掘立柱建物内の不整形の土坑内から、正位の状態でカワラケ5点が出土している。この長軸0.75m、短軸0.68m、深さ0.20mの不整形の土坑は炭化物や焼土を多く含み、カワラケ自体も被熱している。

大きさから大中小の3種類に分類できる。小型の1は口径と底径の比が比較的小さく、逆に2は大きい。3、5はほぼ同形態であるが、底部の厚さが著しく異なる。4は口径と底径の比が大きく、口縁端がやや肥大し、内湾する。1は口径5.6cm、底径3.5cm、器高1.4cmで、3は口径6.6cm、底径4.0cm、器高1.9cmで、4は口径8.6cm、底径3.8cm、器高2.4である。内耳土器の6は体部の立ち上がりがかかなり急で、口縁端に内耳が付く。内耳の下側接合部の位置から外側に大きく屈曲するのが、当遺跡出土の内耳土器に共通する特徴である。口径33.0cmで、胎土中に石英・雲母を多く含む。



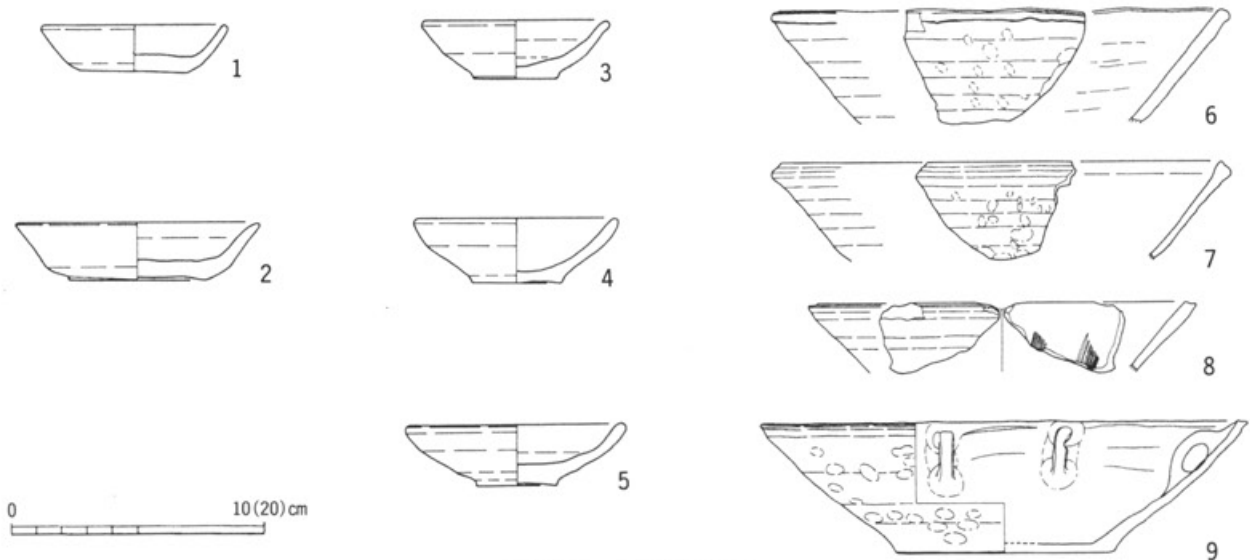
第219図 駒井野荒追遺跡

北ノ作遺跡 (第220図、図版4-1・4-2・5-1・5-2)

文献②-360・363

北ノ作遺跡は四街道市物井に所在する。印旛沼に注ぐ鹿島川の左岸、標高28m前後の台地上に立地する中世城館跡である。北ノ作(A区)出土遺物については、文献②-363にデータが発表されており、概ね15世紀第3四半期から16世紀初頭を中心としている。

カラケは形態及び大小の違いから大きく4つに分類できる。1は土師器杯形で、口径7.1cm、底径4.1cm、器高2.0cm、底部回転糸切りで、底面が厚く体部はやや内湾気味である。2は口径9.5cm、底径6.5cm、器高2.3cm、底部回転糸切りで、外面立ち上がりに稜をもち、口縁が外反する。3は口径7.4cm、底径3.3cm、器高2.3cm、底部回転糸切りで、口径と底径の比が大きく、口縁が外反する。4は口径8.1cm、底径3.5cm、器高2.6cm、底部回転糸切りで、3と比べ口縁部が肥厚し、内湾する。4は3がさらに扁平になったものである。瓦質の播鉢や鉢、内耳土器も出土している。8は口径38.5cm、底径17.1cm、器高10.5cmで、口径と底径の比が大きい。内耳は細い紐状で、接合部体部面はほとんど外面に突き出ていない。内面はナデ、外面には指頭痕が顕著に残る。



第220図 北ノ作遺跡

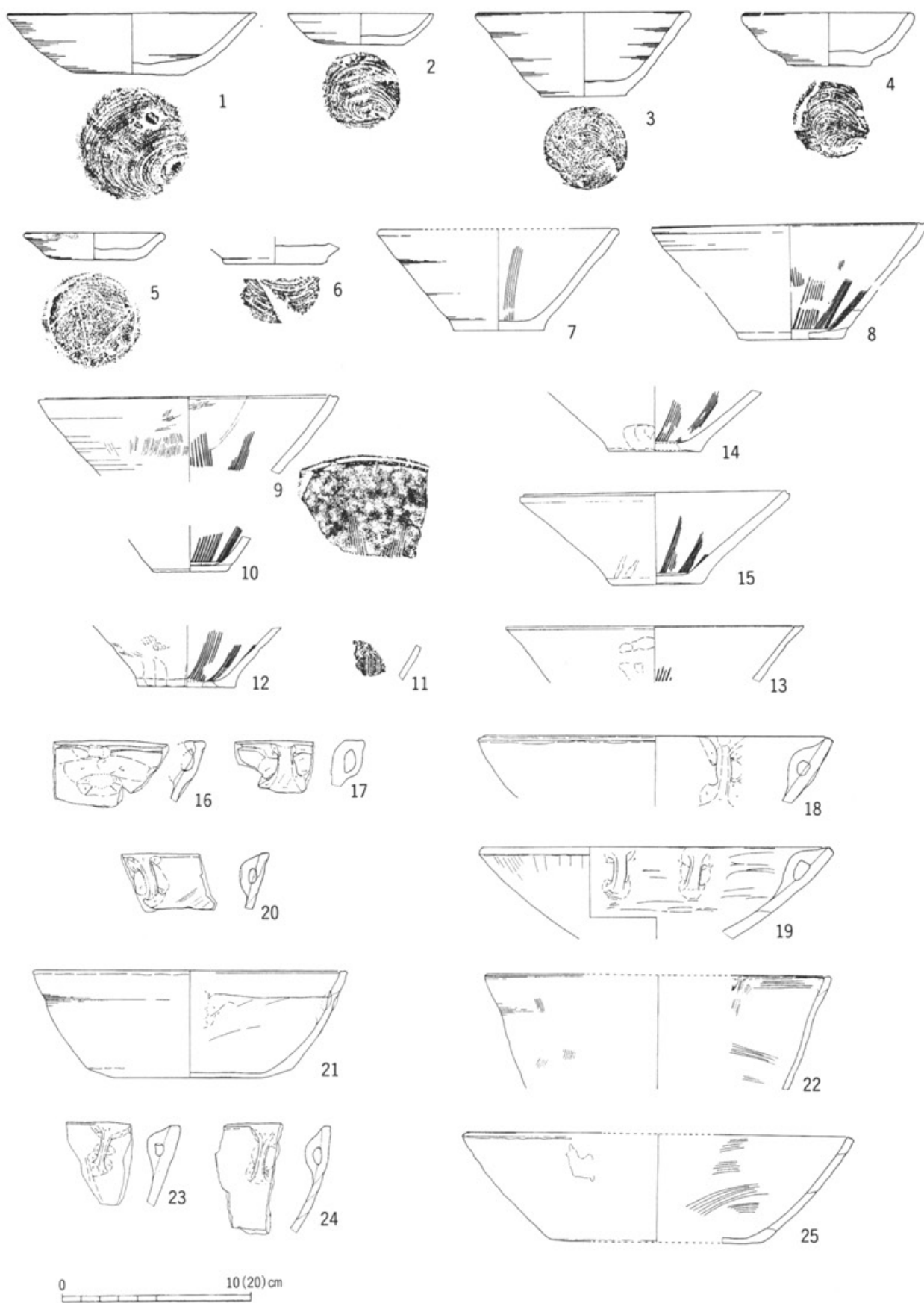
池ノ尻館跡（第221図）

文献③-128

池ノ尻館跡は四街道市栗山に所在する。印旛沼に注ぐ鹿島川の支谷最奥部標高29mの台地上に立地する。周辺には「栗山（栗山）」、「山無（梨）」、「鹿渡」、「小名（小名木）」、「蕨（和良比）」など、『神代本千葉系図』や『千学集抜粹』に見える白井氏一族の名字と一致する地名が残されており、戦国期の白井氏と強い結びつきが確認できる地域である。遺跡は土塁と空堀によって正方形に区画され、3つの郭から成る。中心となるI郭で検出した1号建物は2間×4間の主屋の東辺と北辺に縁が付き、さらに中門廊状の張り出しが見られる。出土土器に関しては、調査報告書で詳細に分類しているので、それを基に、以下に説明する。

カワラケはIa、Ib、II、III、IV、Vの6つに分類される。Ia類（1）は口径13.0cm、底径6.0cm、器高3.0cm前後の大型の皿で、底面には簧の子状圧痕が顕著で、内面中央には指ナデ痕が見られる。口縁はわずかに外反する。精選された胎土で、淡黄褐色である。Ib類（2）は口径7.5cm、底径4.0cm、器高1.7cm前後で、II類（3）は口径11.5cm、底径4.5cm、器高4.5cm前後で、杯状である。内外に鋭いロクロ痕を残す。口縁端は肥厚し、やや外反する。見込み中央に一方向の指ナデ痕が見られる。小石や砂粒を含む。III類（4）は口径9.2cm、底径4.4cm、器高2.8cm前後で、やや厚手。体部は内湾する。IV類（5）は口径7.5cm、底径4.0cm、器高1.4cm前後の極めて浅い皿である。口縁端がやや外反し、器壁が少し厚い他はIb類と同様である。V類（6）は底径5.5cm～6.5cmの大型の皿で、6は軟質で淡黄褐色。土器擂鉢はA～Eの5種類に分類される。A類（7、8）は胎土中に雲母と小砂粒を含み、赤褐色に硬く焼き締まっている。外面は指頭痕が顕著に残る。口縁端には小さな溝がある。B類（9、10）は内面から口縁外面にかけてナデ調整されている。9は茶褐色で、焼け斑が著しい。C類（11）は灰色で、硬く焼き締まっている。雲母や小石を含み、一見すると須恵器のようである。D類（12、13）は黒色で、比較的薄手の擂鉢である。E類（14、15）はD類より厚手で、柔らかい感じの器肌である。黒色で、雲母と小砂粒を含む。内耳土器はA～Gの7種類に分類される。A類（16、17）の口縁端は内側へ突出させることによって幅広く作り、上面に浅く広い凹帯を巡らす。色調は赤褐色、内耳は口縁突帯から下方へと橋状に貼り付ける。外面が著しく膨らむ。B類（18）は、胴部は微かに外方へ膨らみ、器厚が一定である。口唇上部には小さな溝を巡らす。全体に雑な作り。C類（19）は素地は淡い灰色であるが、器表は鼠色で、硬く焼き締められている。D類（20）はA～C類に比べて耳の頂部がやや上方に移り、口唇が丸みを帯びて凹帯が見られない。素地は灰色で、器表は青みの強い鼠色を帯びる。E類（21）は器表は鼠色、外壁の口縁下約3.4cmにくびれを作り、その内面には明瞭な稜線を巡らす。断面は弱い「く」字状になる。F類（22）は薄手で焼き締めも良好。口縁下4cm程にくびれを設けるが、内面に稜はない。深い鉢形。G類（23～25）は黒色で、耳の断面が細く丸い。内面は粗いハケ目のナデ調整を施す。

また、カワラケ焼成窯と考えられる土坑が西辺の堀の中から検出されている。これは長軸1.1mで、堀底から土塁裾部の堀壁面にかけて斜めに掘り込まれて造られ、堀底の土坑下端部付近で木炭が、堀壁面に当たる土坑上半部内で、杯・皿形が5個体出土している。



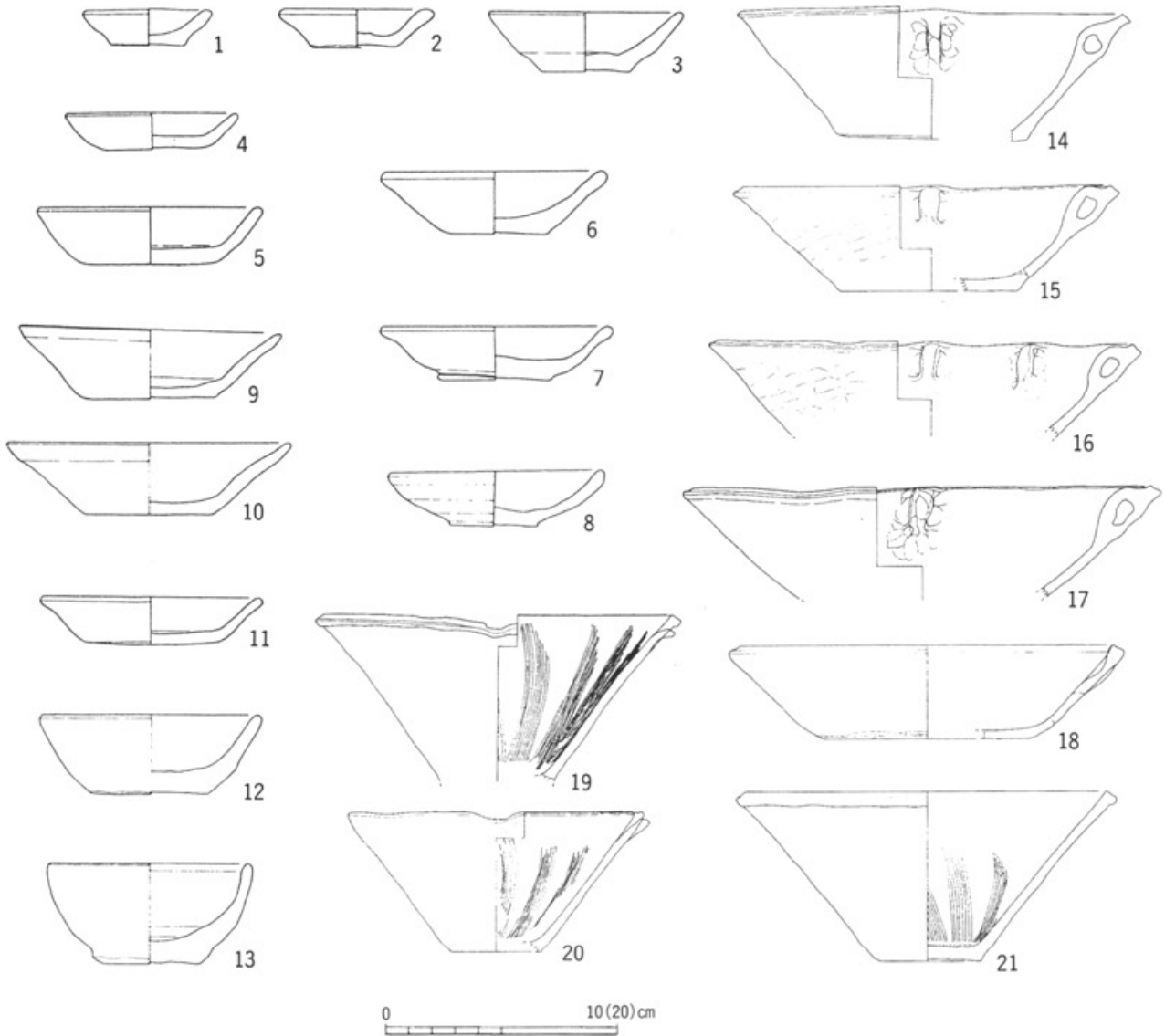
第221図 池ノ尻館跡

和良比堀込城跡（第222図、図版6-1）

文献③-194

和良比堀込城跡は四街道市和良比に所在する。印旛沼に注ぐ鹿島川の支流によって開析された支谷最奥部の、標高約28mの舌状台地先端に立地する。池ノ尻館跡同様、戦国期の臼井氏との関係が深い地域である。

カワラケには様々な形態が見られる。1は体部中位でやや内湾するもの。2は口唇部が肥厚し、外反するもの。3は体部中位で外側に突出するもの。4は皿形で体部が直線的に延びるものの内小型のもの、同じく5は大型のもの。6は口唇部が肥厚し、直線的に延びるもの。7は腰が張り口唇部が肥厚するもの。8は体部がやや内湾するもの。9、10は体部が緩やかに外反するが、口縁部で内湾し、大きく蛇行するもので、底部に板目状圧痕が残る。11は皿状で、体部がやや外反するもの。12、13は深めのもので、12は口径9.7cm、底径5.3cm、器高3.5cmである。14~18は内耳土器である。全体に口径と底径の比が大きく、内面が浅い。体部外面に指圧痕が残ったり、内耳に紐による擦痕も見られた。19~21は土器播鉢であるが、胎土中に白色・半透明粒子・雲母が混入する。21は口径33.5cm、底径9.6cm、器高15.1cmである。



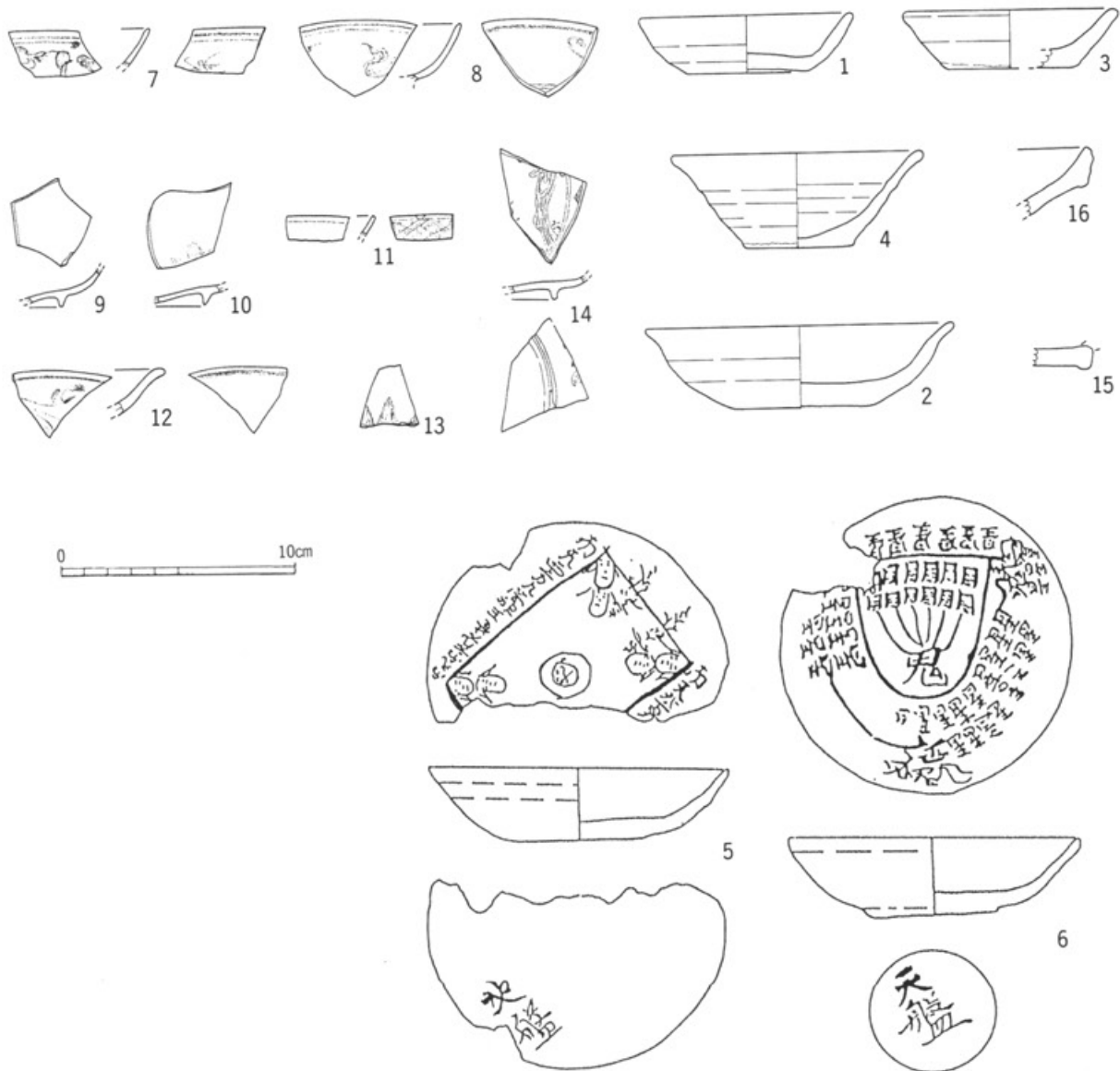
第222図 和良比堀込城跡

白井城跡 (第223図)

文献③-113・130

白井城跡は佐倉市白井台、白井田、八幡台にあり、印旛沼の南岸、標高27mの台地上に立地する。白井城の築城については不明な点があるが、千葉介常兼の三男白井六郎常康が12世紀後半には当地に居を構えていたと考えられる。文明11年(1479)に太田道灌と武蔵千葉氏に攻められ落城するが、程なく千葉氏の手に戻ったとされる。天文7年(1538)以後後北条氏の支配の下で千葉氏の重臣原氏が入城した。永禄4年(1561)里見氏の攻撃により一旦は落城するが、再び原氏の支配に置かれ、天正18年(1590)の小田原後北条氏の滅亡を迎える。天正19年(1591)に徳川家康は酒井家次を封じ、慶長9年(1604)まで酒井氏の居城となった。

出土したカワラケ1は口径9.2cm、底径5.3cm、器高2.4cm、底部回転糸切り後板目状圧痕、内面中央指ナデで、胎土中に白色・黒色微粒子や針状物を含む。薄い褐色。土師器の杯形に似る。2は口径13.3cm、底



第223図 白井城跡

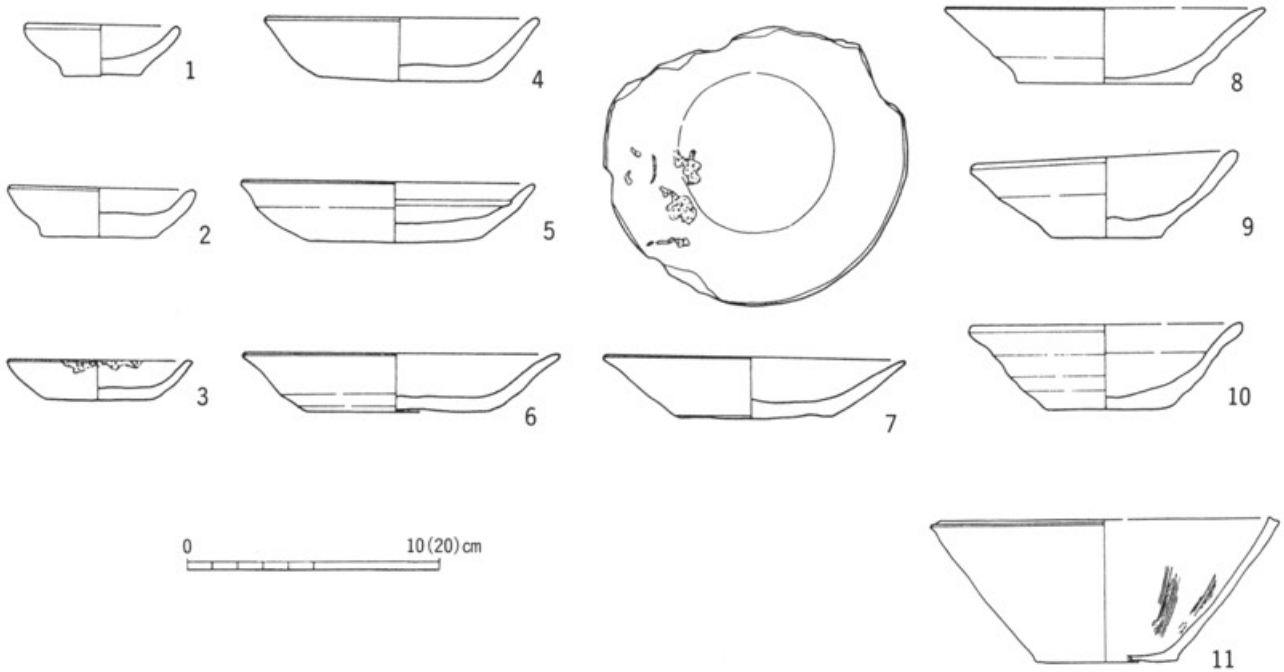
径6.6cm、器高3.5cm、底部回転糸切り、底面はかなり厚手で、口縁端が外反する。内面が摩滅する。胎土中に鉄分、白色砂、雲母粒を多く含む。非常に薄い褐色で、口縁端に油煙が付着しているため、灯明皿として使用されていた。瀬戸・美濃大窯1段階の縁釉挟み皿に似ている。3は復元口径9.2cm（3寸）、底径5.8cm、器高2.5cm、底部回転糸切りで、鉄分や白色砂粒を含む。薄い褐色である。4は口径10.9cm、底径4.7cm、器高5.0cmで、底部回転糸切り、高台状に低く切り残す。口縁端はやや肥厚化し外反する。内面立ち上がりは緩やかに立ち上がり、底面は平坦ではない。胎土中に白色砂粒を多量に含む。練りが足りないためか、土の小塊が確認できる。薄い褐色である。5と6は地鎮墨書土器である。5は『外面には「地盤」、内面には重圈内中央に「鬼」字と長方形の四方結界線の四隅に各々2段の四方諸神の顔を描き、界線外の片側に「南無西方□神王」及び「南無南方九□神王」の文字を上下に対置し、他の側に「南無北方九・・」の文字があり、さらに界線をまたいで「急急如律令」が上下に対置して各々2行墨書した身』で、一方6は『外面には「天盤」、内面には鬼を頂点とする12神王とその眷属の諸星・鬼を顔形に表現した、中央顔形の界線内に12個の顔面と「鬼」字とを6本の線で結ぶ図を描き、周囲に34文字の「星」と7文字の「鬼」を巡らせた蓋』で、5と6が合わせ口で出土した（『内⑤-029引用）。その他、中国製染付皿E群、同B群、碗C群、同E群の破片が合計12点（7～14）、瀬戸・美濃大窯1段階の播鉢口縁破片（16）、天目茶碗底部片（15）などが出土している。

本佐倉城跡（第224図）

文献③-236

本佐倉城跡は印旛郡酒々井町本佐倉と佐倉市大佐倉に所在する。印旛沼の南岸、標高36mの台地上に築かれ、内郭群、外郭群、城下町を含む総構えの三重の同心円構造で、総面積は35万㎡に及ぶ。享徳3年（1454）千葉氏の内紛により千葉城が荒廃し、続く文明年間（1469～1486）に千葉輔胤によって当地に築かれ、天正18年（1590）まで千葉氏の居城となり、下総国の首府として栄えた。

出土したカワラケは大小さまざまな形態が確認できる。1～3は小型のもので、1は浅い高台を持ち、厚手で、口径と底径の比が比較的大きいのに比べ、3は薄手で、口径と底径の比が小さい。1には雲母を含み、2、3は砂粒・白色針状物を含む。4～8は大型の皿形の器形で、4のように比較的厚手で、体部が直線的であるもの、5のように体部内面が沈線状に窪むもの、6、7のように体部がやや外湾気味に細く開くもの、8は底部外面が少し開くものなどがある。9、10は口径と底径の比が大きく、器高が高いもので、口縁端が肥大し、外反する。9は茶褐色で、砂を多量に含み、焼成不良である。1と10は雲母と砂粒を含み、淡茶褐色に発色する。また、3と7には内面に油煙が付着している。特に、5は小田原後北条氏の影響を強く受けた手づくねカワラケを模倣したロクロカワラケとされ、他の遺跡では見ることのできない遺物である。口径11.5cm、底径6.8cm、器高2.4cmを測る。土器播鉢は瓦質で、口縁端に沈線状の溝が巡る。器壁の厚さは口縁端でやや厚くなる程度で、体部は若干内湾気味である。



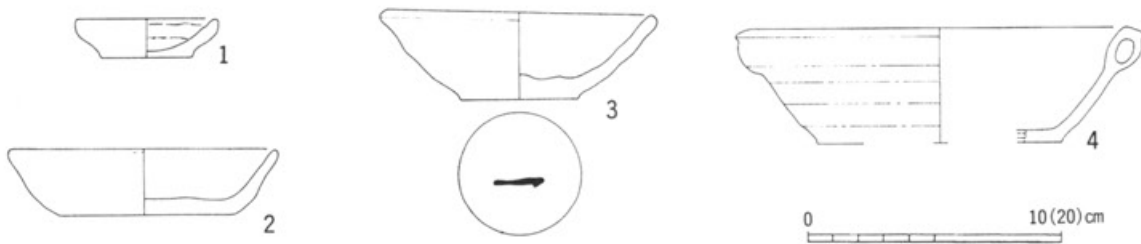
第224図 本佐倉城跡

長勝寺脇館跡 (第225図、図版6-2)

文献③-167

長勝寺脇館跡は印旛郡酒々井町上本佐倉の、鹿島川支流、高崎川によって開析された標高35m前後の台地上に位置する。本佐倉城の南方外縁部に位置し、本佐倉城の支城の一つとして、16世紀代に機能していた。005号掘立柱建物(南北5間×東西1間、東・南・西面に一間の庇が付属する)は館内最大の建物で、身舎四隅柱穴内から、いずれも合わせ口の状態で、2枚セットで合計8点のカワラケが出土した。

カワラケ1は口径5.6cm、底径3.5cm、器高1.5cmで、底部回転糸切り、体部はやや膨らみ、内面に粘土紐の接合痕を残す。2は口径10.6cm、底径6.8cm、器高2.7cmで、口径と底径の比が小さい。底部回転糸切りである。3は、合わせ口で出土した地鎮カワラケで、口径10.9cm、底径4.6cm、器高3.6cmで、底部回転糸切り、外面底部に墨書「一」が見られる。その他の地鎮カワラケも概ね同一の形態である。内耳土器4は復元口径32.0cm、底径19.3cm、器高9.2cmである。内耳は口縁近くに付き、外面が大きく張り出し、底部は平底である。



第225図 長勝寺脇館跡

佐倉城跡 (第226図)

文献③-079、⑤-028他

佐倉城跡は徳川家康の命により、土井利勝が慶長15年(1610)に佐倉に封ぜられた翌年から元和2年(1616)までの間に、中世鹿島城の地に築いたとされる城郭である。佐倉城は平成11年6月の時点で、城内・城下を含めて27回以上にわたって調査が行われている。今回の資料は、国立歴史民俗博物館研究棟敷地内の資料である。この地区は、椎の木曲輪と呼ばれる一角で、佐倉藩の上級武士の屋敷の敷地内にあたる。この調査で出土した多量の内耳土器については、藤尾慎一郎氏が研究報告の中でまとめている。ここでは焙烙形とした資料について詳細に紹介する。ちなみに1は土鍋形とされたものである。

I類 瓦質で体部がまっすぐに立ち上がるもの。ベタの平底でやや内湾しながら立ち上がる器形。色調は灰褐色で、細砂混じりの粒度の細かい胎土。口径1.3尺、器高2寸、底径1.2尺。底部ちぢれ目。紐状内耳B。外面上部から内面にかけてロクロナデ仕上げ。外面下半は指ナデ。煤は見られなかった。

II類 土師質で体部は湾曲しながら立ち上がる平底の焙烙

A 暗褐色系。底部は平底と思われ体部が湾曲しながら立ち上がり、形態的には焙烙形だが、器高は高いほうである。口唇部は内側や外側にかえりをもつ。横ナデによって上面が窪む。内耳は粘土紐を口唇部の上端から体部にかけて渡す紐状内耳で、内面の上の方に偏って貼り付けられる。耳に対応する体部外面は大きく張り出す。I類に比べて体部が外傾している。胎土は長石がやや目立つ程度で、3mm大の石英を含む。底面には何か敷いた上で底板を作ったと考えられる粗面と合わせ目が見られる。体部は粘土板積み上げである。体部外面から口縁部体部内面まではロクロナデ、内面中央は斜め方向のナデ、体部下半は指ナデ。煤は口唇部外端部から体部外面にかけてみられ、特に口縁部外面に強く残る、口唇部上面と底部には煤が付かない。

B 茶褐色。金雲母・長石を含む。底部は上げ底で底板に粘土の合わせ目がある。内耳は体部の上半に偏る。底部には簾状の粗面が見られる。外面下半にケズリ状のヘラ調整が見られる。

III類 土師質で、体部が湾曲しながら立ち上がる平底の焙烙で、口唇部の形態から2つに分類できる。

A 体部上半のロクロナデによって二次的に口縁部が内側に折れたり、体部外面に稜が生じる。底部はやや上げ底で湾曲気味に立ち上がる体部をもつ。口唇部は土鍋状のかえりをもつものや内折するものなどがある。紐状内耳は口縁部の上端から体部の下半まで粘土紐を掛け渡す紐状内耳。内耳部の体部外面は外側に張り出す。色調は茶赤色で金雲母を少し含む。粗面には簾状のものと粗い離れ砂のものがある。底板との合わせ目は体部外面最下端に移動する。体部は3段にわたって粘土板を積み上げる。

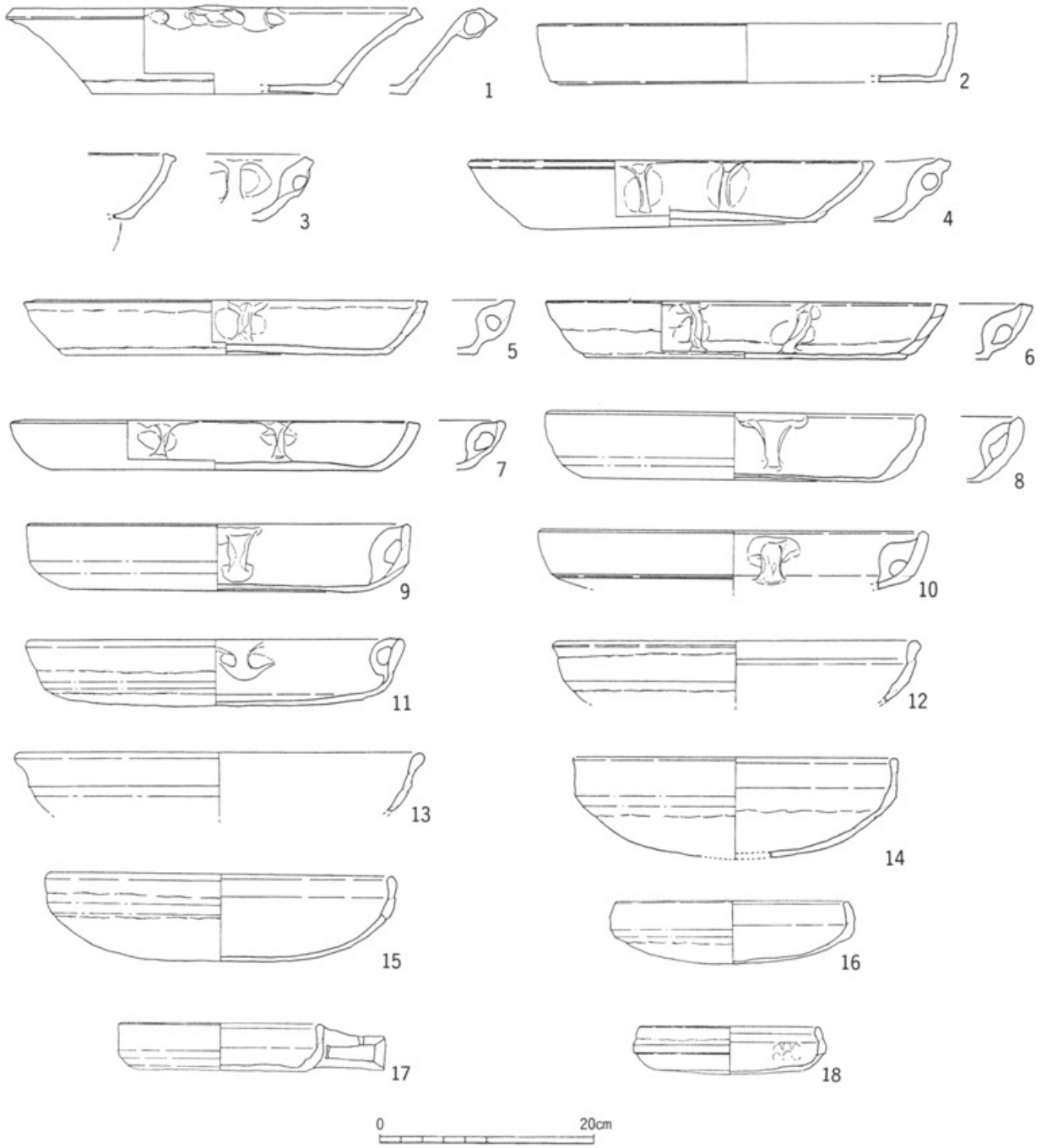
B 口唇部がロクロナデによってわずかに内側に突出する鐔状口縁をもつ。内湾しながら立ち上がる体部、茶赤色の器壁、金雲母を含む。金雲母の量が著しく多く、底板には簾状のものと粗い離れ砂のものがある。内耳はやや扁平になり体部いっぱい貼り付ける紐状内耳である。内耳の断面は丸みをもつ逆二等辺三角形である。体部の粘土帯積み上げは内傾接合である。18世紀中心。

IV類 器高に占める体部高の割合が50%以上の平丸底焙烙で、紐状の内耳をもつ。内耳の付け方は体部のロクロナデの後に貼り付ける。黄褐色系。

A やや上げ底。ケズリを体部側に施すことで底部との境に稜をもつ。器高が口径の割に高く、焙烙としては深い部類に入る。体部下半の器壁は厚い。耳は口唇部の下から内面いっぱい紐状粘土で貼り付ける。断面は平べったい楕円形。底面は粗い離れ砂痕をナデ消したもの。ケズリが体部側に用いられる。胎土は精良で、焼きがよい。器壁に還元帯が認められる。

B 1.2尺の口径をもつ大型の焙烙で、ケズリを体部側に施す。底板の縁を上方に折り曲げ、その上に粘土板を積み上げて体部を直線的に立ち上げる。口唇部は外側にロクロナデによる稜をもつ。耳はがっちりしたもので、孔は垂直方向に細長くなっている。内面の調整が全面ロクロナデになる。胎土は精良で、焼きがよい。器壁に還元帯が認められる。18世紀代。

C 幅3cmほどの紐状内耳をもつ。粗い離れ砂の痕跡をもつ底板に粘土板を積み上げ、外に開き気味に仕上げる。口唇部は丸みをもたせている。体部と底部の境にヘラで削り取ったような部分がある。棒を挟んだ紐状内耳もある。18世紀中心。



第226図 佐倉城跡

V類 平丸底で、体部高が器高の50%以上の焙烙の内、体部をロクロナデした後、粘土塊を貼り付け孔をあける粘土塊内耳。胎土は黄褐色系で精良だが、わずかに石英を含む。口径7寸、1.1尺のものがある。粗面は粗い離れ砂の他にちぢれのもので出現する。口唇部は丸くおさめる。内耳には粘土塊製作時から挟み込んでいた棒を抜き取ることによって孔をあけるものと、指で孔をあけたものがある。体部外面上半と内面は全面ロクロナデ。ケズリが体部側に施される。18世紀から19世紀にかけて。

VI類 底部形態ははっきりしないが、丸底に近い。粗い離れ砂の粗面をもつ。底板に粘土板を3段積み上げ、ロクロナデの口唇部。口径1.2~1.3尺。混和材をほとんど含まない。色調は暗黄褐色である。還元帯が認められる。

A 口縁部の下に強いロクロナデを幅狭く加えて整形。18世紀前葉から19世紀前葉。

B 口縁部の下に幅広く深いロクロナデを加える。

VII類 内耳をもたない。口径が1.1尺の中型で、器高に占める体部高の割合が50%以下の焙烙。

A 直線的に立ち上がる体部と底板側にケズリを加える。

B 内湾気味に立ち上がる体部をもつもので、底部側にケズリ調整を加えるものと、体部と底部にまたがってケズリを施すもの。

VIII類 口径が6寸半ほどの小型丸底焙烙で、器形はVII B類に似ているが、やや扁平で、体部の内湾度も強い。胎土は精良で、焼成良、明るい橙色。底板には非常に細かい離れ砂の痕跡。18世紀末から19世紀の早い時期

IX類 口径6.5寸の把手付小型平底焙烙。立ち上がりのない底部に体部が湾曲しながら立ち上がる。精良な胎土で、還元帯はない。底板の粗面には細かい離れ砂がびっしりと残されている。体部外面から内面は全面ロクロナデ。筒状に作った把手を貼り付ける。19世紀。

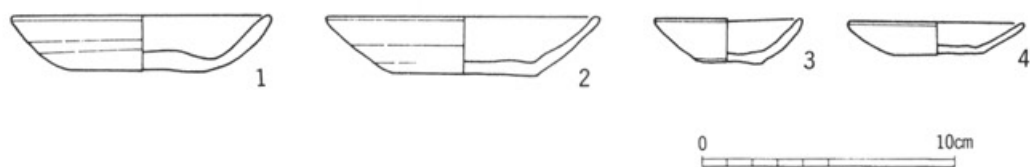
X類 口径5.5寸の極小型焙烙。丸底に近い底部。VIII類を小型化したもの。底板の粗面は離れ砂の跡をナデ消したよう。体部との境界付近に近い底板の縁の部分はちぢれによるしわが激しく認められる。18世紀末から19世紀の早い段階。

烏内遺跡 (第227図)

文献③-119

烏内遺跡は成田市松崎に所在する。利根川に流れ込む根木名川支流の谷の最奥部に近い台地上に位置する。近世遺構は標高30m~33mの台地の南側を、方形に区画整形された地点に確認された。この区画の中から、掘立柱建物、地下式坑、地鎮遺構(土坑)、土取り穴状の浅く大きな掘り込みなどの遺構が検出された。特に316号跡、328号跡、317号跡のいずれも掘立柱建物に関する遺構から、合わせ口のカワラケが8組、入子状のカワラケが1組出土した。

カワラケは1から4の4種類に分類できる。1は口径10cm強、器高2.3cm前後で、底部回転糸切り、内面体部と底部の接合部がやや窪む。胎土中に鉄分粒・砂粒を含む。2は口径10cm強、器高2cm以下で、底部回転糸切り、胎土中に鉄分粒を含む。底部は平坦で、体部が直線的に開く。3は口径6cm、器高2cm以下で、底部回転糸切り、胎土中に雲母を含む。4は口径7cm前後、器高1.5cm程度で、底部回転糸切り、胎土中に鉄分粒を含む。2の小型品である。いずれも明らかに近世のカワラケであるが、このような状況で多量に出土した例は少ない。同じ区画内からは17世紀半ばから18世紀はじめを主体とする陶磁器類が出土しているが、これらの遺構群の性格は判然としない。



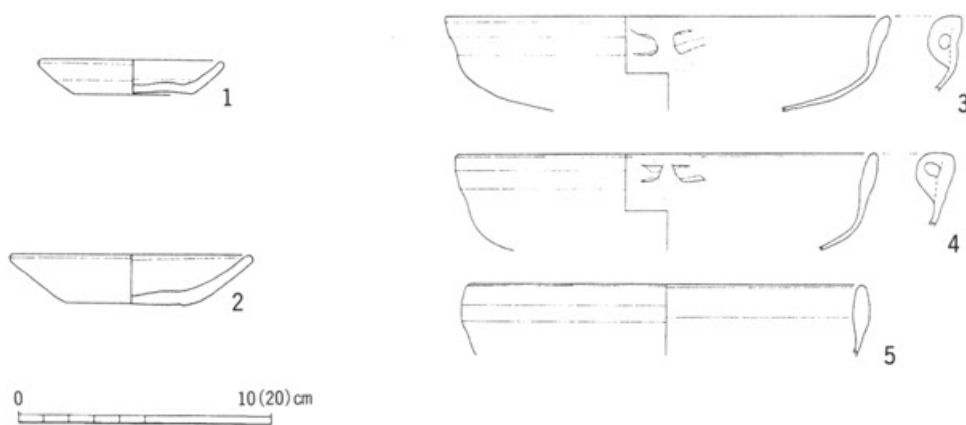
第227図 烏内遺跡

南広遺跡 (第228図)

文献③-211

南広遺跡は佐倉市大作に所在する。鹿島川に流れ込む高崎川支流に面した台地上に位置する。近世遺構が検出されたのは、遺跡の東北端、標高30m～33mの南側に面した緩斜面部である。掘立柱建物（3間×2間）、方形竪穴10基、柵列4群、溝、土葬墓、火葬墓等から構成される。出土遺物から18世紀後半頃の、佐倉藩内の農家屋敷跡と考えられる。佐倉城跡をはじめ武家地の調査が主体である近世遺跡の発掘調査の中で、農村部の調査成果として貴重である。

カワラケは大小2種類で、1は口径7.4cm（2寸半）、底径4.6cm、器高1.4cm、2は口径9.7cm（3寸）、底径4.7cm、器高2.0cm、いずれも底部回転糸切りで、概して薄い作りである。内耳土器は推定口径33cm（1尺1寸）～35cm（1尺2寸）で、体部は肥厚し、高速回転のロクロを使用して体部から口縁端部が丸く仕上げられる。また、口縁に向かって体部が緩やかに外反するものが多い。内耳はかなり団子形に近く、丸みを帯びる。カワラケは約7個体と少なく、逆に内耳土器は13個体と多い傾向にある。



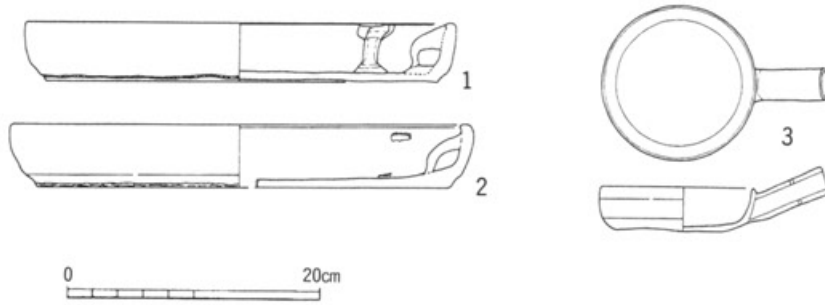
第228図 南広遺跡

弥勒東台遺跡 (第229図)

文献③-276

弥勒東台遺跡は佐倉市弥勒町に所在する。佐倉城開府藩主土井利勝の菩提寺である松林寺の境内の一角を調査した。松林寺外郭の土塁と堀跡を検出し、その堀跡中から多量の遺物が出土した。廃棄された遺物は17世紀から18世紀代・19世紀代を中心に一部明治に至るものまで、数百年の幅を持つ。記録によれば、明治17年（1884）に松林寺本堂が解体されており、それと同時に本堂隣の庫裏も解体され、収蔵物類も廃棄されたと考えられる。近世佐倉に搬入された土器・陶磁器類の生産地や流通量、経路を知る上で重要な遺跡である。

内耳土器は佐倉城跡出土遺物と同形態のものがいくつか見られるが、佐倉城跡に見られない形態として、口径37.8cm（1尺3寸?）、底径31.2cm、器高5.0cmの平底タイプ（2）や、口径35.6cm（1尺2寸）、底径30.4cm、器高5.0cmの平底で、外面底部にちぢれ目、胎土には雲母・石英多量に含むものがある（1）。これらの内耳の付け方は口縁端から底面に渡しているもので、下野・南武蔵タイプと呼ばれているものに非常に似通っている。また、口径12.0cm（4寸）、底径8.5cm、器高3.3cmの外面底部以外に透明釉を掛けた把手付きの炒り鍋が出土している（3）。おそらく江戸在地産のものであろう。

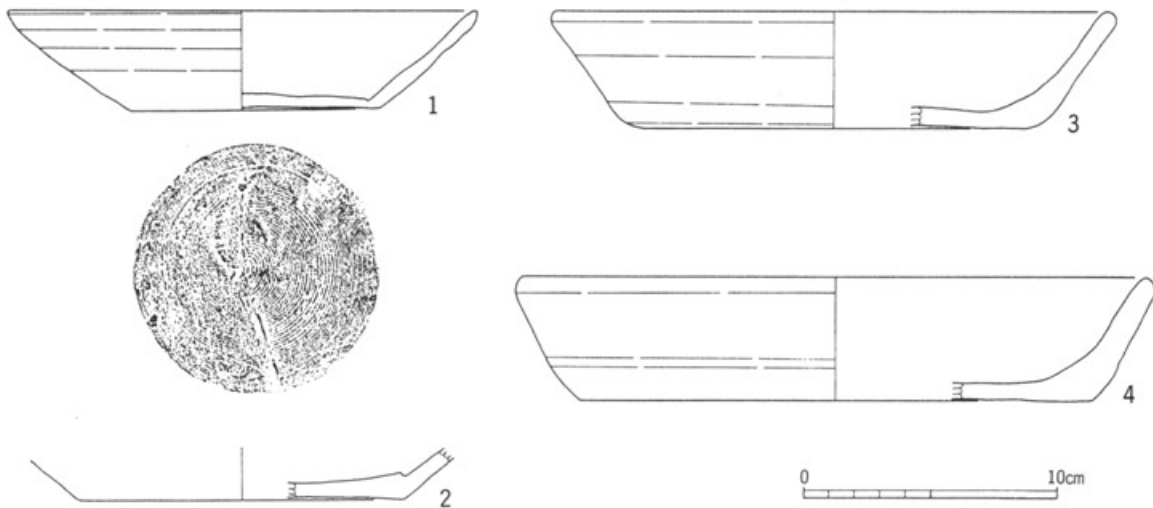


第229図 弥勒東台遺跡

曲輪ノ内遺跡（1次）（第230図）

文献③-181・253

曲輪ノ内遺跡は佐倉市江原に所在し、印旛沼に面する標高28mの台地中央部に位置する。佐倉城とは、鹿島川を隔てて対岸に位置する。江戸から成田に至る佐倉道（成田街道）に面しており、この街道に並行するように、武家長屋の掘立柱建物遺構が検出された。2次調査では佐倉道側に間口1間、奥行2間、反対側に間口1間、奥行3間の長大な長屋遺構を検出している。1次調査では袍衣遺構と考えられる、一辺30cm×22cm×深さ25cmの小土坑を検出した。内部から瀬戸・美濃産高田徳利2点、大型のカワラケ4点、挿鉢片1点が出土した。19世紀半ば頃の良好な遺物群である。



第230図 曲輪ノ内遺跡（1次）

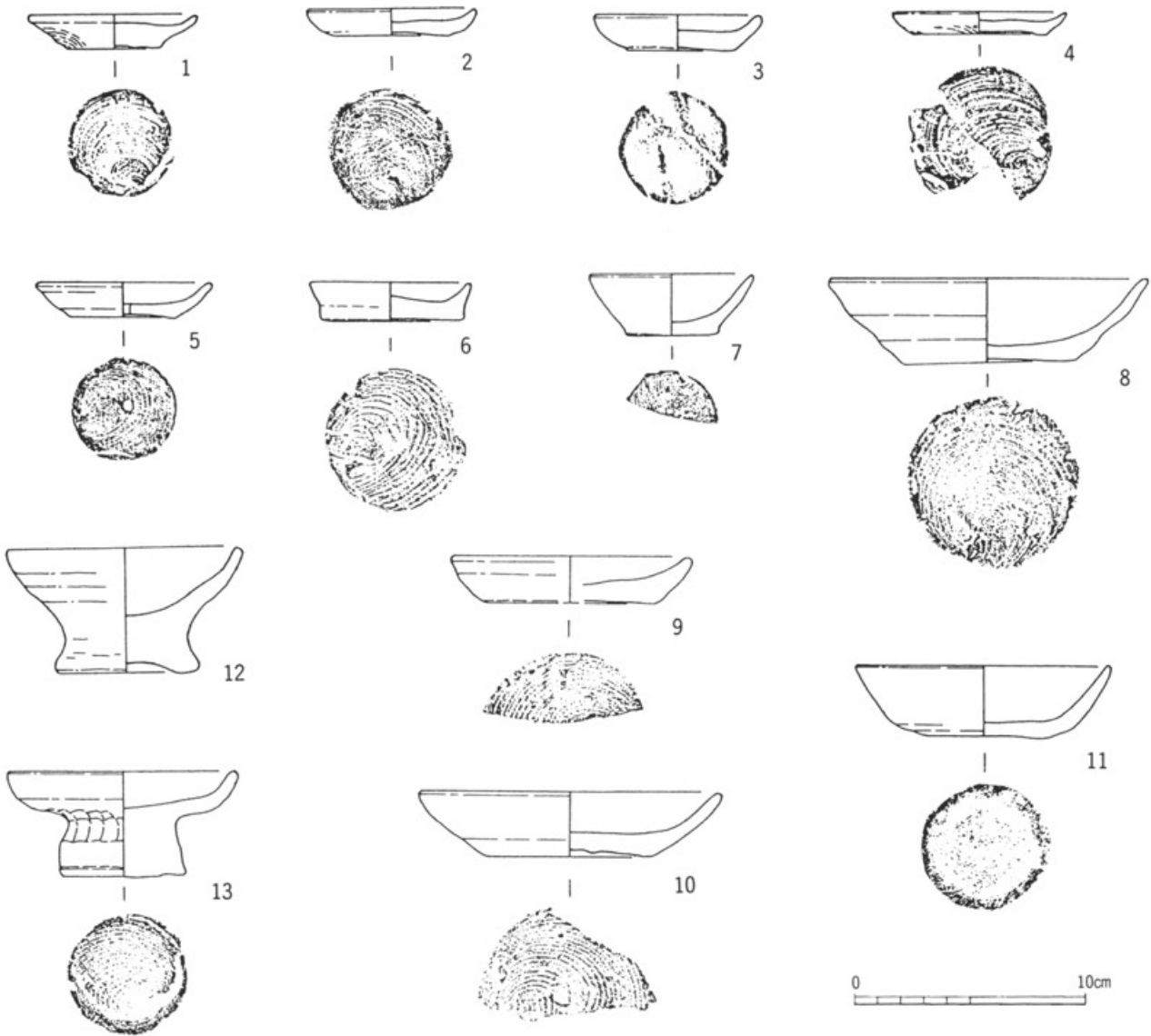
カワラケは器厚の薄いもの（1、2）と、厚いもの（3、4）とに大きく分類できる。前者は口径18.4cm（6寸）、底径9.8cm、器高3.9cmで、底部回転糸切り、体部は直線的に立ち上がる。おそらく江戸カワラケそのものと考えられる。一方、後者は、復元口径22cm～25cm（7寸～8寸）、底径15.2cm～20.0cm、器高4.6cm～4.9cmで、底部ヘラナデ、体部は直線的に立ち上がり、特に立ち上がり部で肉厚となる。中世以来の、在地産カワラケの特徴を残している。

（6） 匠瑳・海上・香取地域

内野遺跡（第231図）

文献③-154

内野遺跡は香取郡大栄町伊能に所在する。利根川支流の大須賀川上流標高40mの台地上に立地する。大須賀氏の居城である松子城跡から南東方向へ、直線距離にして1.7kmに位置する。調査では溝・土塁で区画された地点に、掘立柱建物、土坑、地下式坑、土坑墓、火葬跡、柵列、井戸などが検出されており、土豪層の居館跡と考えられる。後述する馬洗城跡と異なり、当遺跡は文献等で周知されていたものではなかつ



第231図 内野遺跡

た。

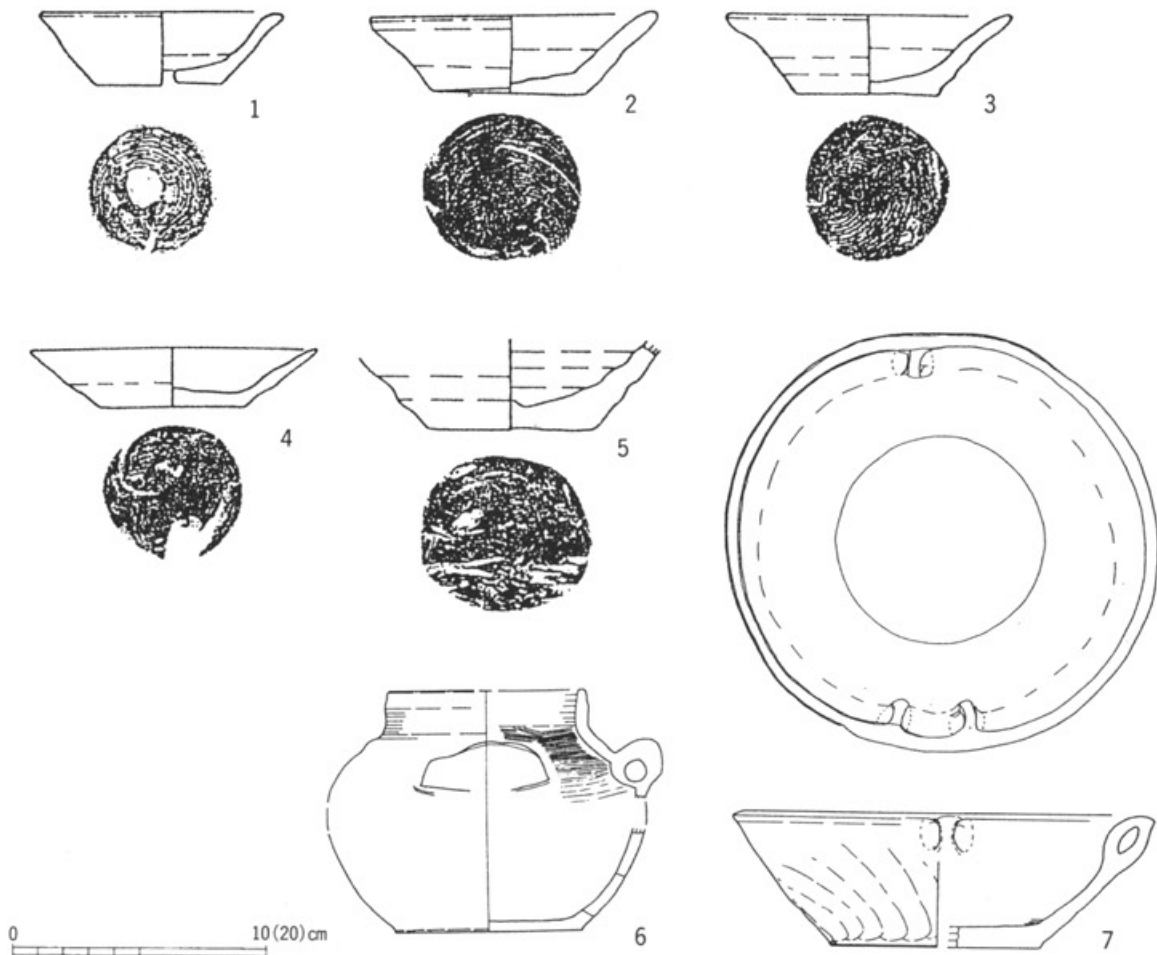
カワラケには口径7.4cm、底径5.8cm、器高1.0cmで、器高が著しく低く、立ち上がりから口縁部間が短く、外面では内湾し、口縁端が鋭利になるものが存在する(4)。これとセットになる大型のものは口径13.6cm、底径7.3cm、器高3.5cmで、体部中央がやや薄くなる(8)。時期に幅があるため、その他様々な形態が存在する。いわゆる杯形、皿形以外に脚部をもつロクロ使用の土器がある。胎土は総じて細砂粒や小砂粒を含み、薄橙褐色から褐色に発色している。底部は摩滅して分からないもの以外、全て回転糸切りである。

篠本城跡(第232図、図版9-1)

文献④-130

篠本城跡は匝瑳郡光町篠本に所在する。篠本城のある標高35m~36mの城山台地は、菱形の形をして、その一角が南側に突き出し、周囲は比高差25mの急峻な崖となって、一気に谷底に落ちている。篠本地区は中世には千田荘に属し、南北朝期には当地を名字とする竹本(ササモトか)氏が千葉氏の内紛をめぐって登場し、以後千葉氏の有力家臣として古文書にたびたび現れる。16世紀にはこの竹本氏にかわって、椎名氏の一族がこの地を領有した。堀によって台地が幾つにも区画され、それぞれの区画に掘立柱建物、地下式坑、土坑墓、粘土敷き土坑、井戸などをはじめ多くの遺構を検出した。

ほとんどのカワラケの体部は緩やかに外反する。1、2、3は底部が最も窪んでおり、そのため中央付



第232図 篠本城跡

近の厚さが最も薄い。4はやや扁平で、体部が次第に薄くなり、口縁端で鋭利になる。体部外面に稜をもつ。5は大型のものであるが、体部上半が不明である。6は土釜で、底部は平底、胴部は球形で、外面には煤が付着する。7は内耳土器で、1対2の3個の内耳が付く。外面には底面から口縁部方向に斜めにナデ調整の痕跡が残る。焼物の組成は、カワラケが6%、内耳鍋が52%で、その他を瀬戸・美濃、常滑、中国陶磁^{③-263}で占める。

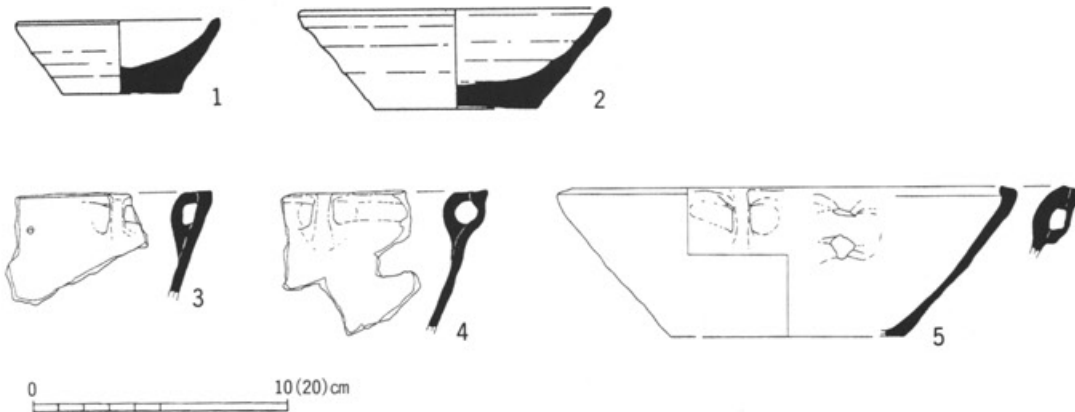
神代夏方遺跡 (第233図)

文献③-198

神代夏方遺跡は香取郡東庄町東和田に所在する。利根川の支流である黒部川の源流に近い標高51mの台地上に位置する。享徳4年(1455)、千葉氏内紛(享徳の乱)に対して、将軍足利義政は内紛鎮圧のため、東常縁を関東に下向させた。常縁は馬加城に籠もる馬加康胤、原胤房らを攻め落とし、また、この時期に常縁は本領である下総国東庄において、和歌一首を王子神(東大神)^{①-055}に献じている。

溝で区画された範囲に、掘立柱建物、土坑、地下式坑、土坑墓、井戸、竪穴状遺構などが検出された。掘立柱建物は1間×3間または2間×2間の規模で、掘立柱建物を中心とした中世の屋敷跡と考えられる。

カワラケは口径8cm、底径4.6cm、器高2.8cmの小型のもの(1)と、口径12.2cm、底径6.3cm、器高4.0cmの大型のもの(2)がみられる。いずれも底部が厚く、内面立ち上がりが緩やかで、口縁端でやや肥厚する。内耳土器には口径33.8cm~36.0cm、底径15.2cm~18.2cm、器高11.7cm~13.9cmのものが見られる。内耳はいずれも紐状であるが、紐が付く位置の体部が外に大きく張り出すもの(4、5)と、張り出さないもの(3)の2種類ある。また、口縁端部の処理も内と外方向に若干張り出すもの(4)と、内側にのみ大きく摘み出すもの(5)の2種類が存在する。



第233図 神代夏方遺跡

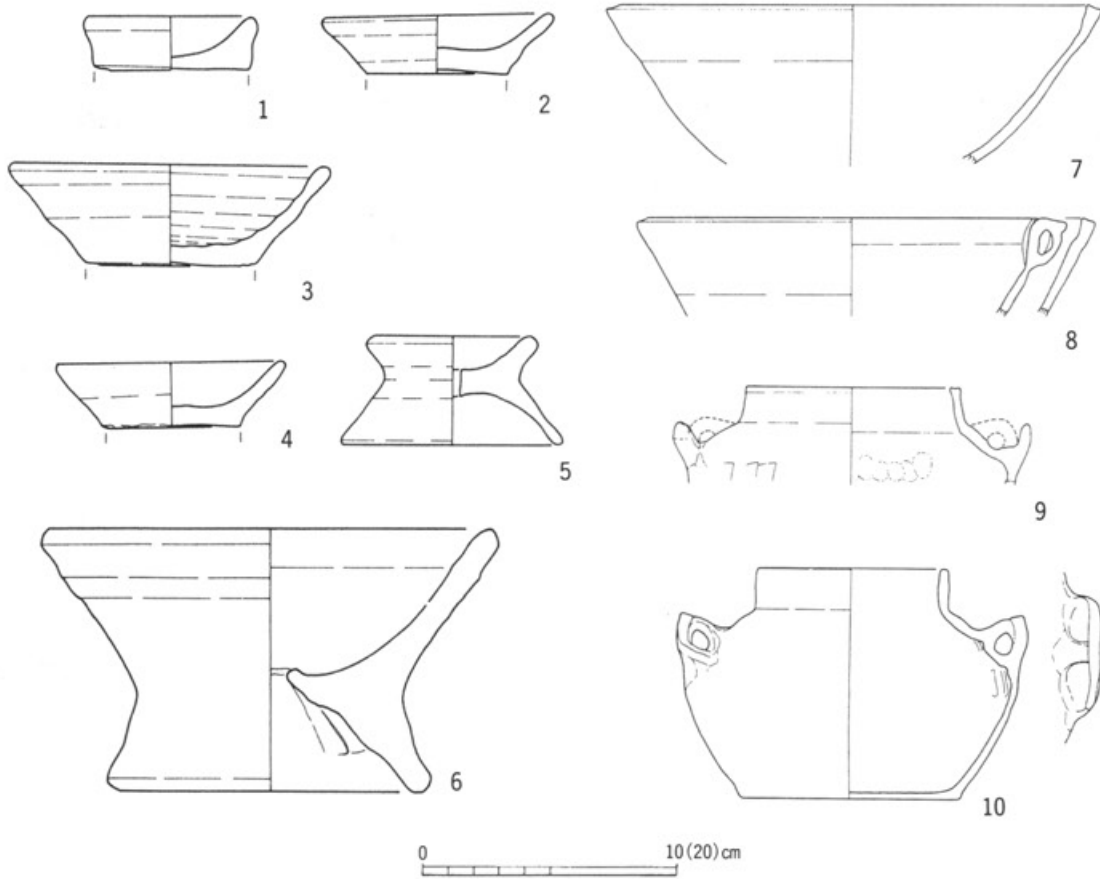
吉原三王遺跡 (第234図)

文献③-169

吉原三王遺跡は佐原市丁子に所在する。利根川下流域の南岸、標高40m前後の台地上で、香取神宮の南東1.3kmに位置する。香取社領34か里のうちの吉原里に相当し、香取神宮の強い影響下にあった。通路として使用されていた溝により3区画に区切られる。11世紀から16世紀に及ぶ墓地遺跡である。

カワラケは大中小の3種類に大きく分類できる。小型の1は口径6.8cm、器高2.1cmで、体部はほぼ直立する。胎土中に長石・石英粒を含む。口縁部には煤が付着する。3は大型で、口径12.6cm、器高4.1cmで、内外面ともロクロ目が顕著に残る。赤褐色で、砂質のため器面がザラザラする。2、4は中型のものであ

る。5、6は脚をもつ特殊な形態で、焼成前に内面中央に孔をあけている。6の脚部内面は工具によって、粘土を掻き取っている。いずれも灯明具として作られたもののようである。内耳土器8は胎土中に雲母を多く含む。土釜28は口径15.2cm、器高18.0cmで、同様に胎土中に雲母が多く含まれる。全体に薄手の作りで、内外面とも丁寧な仕上げである。



第234図 吉原三王遺跡

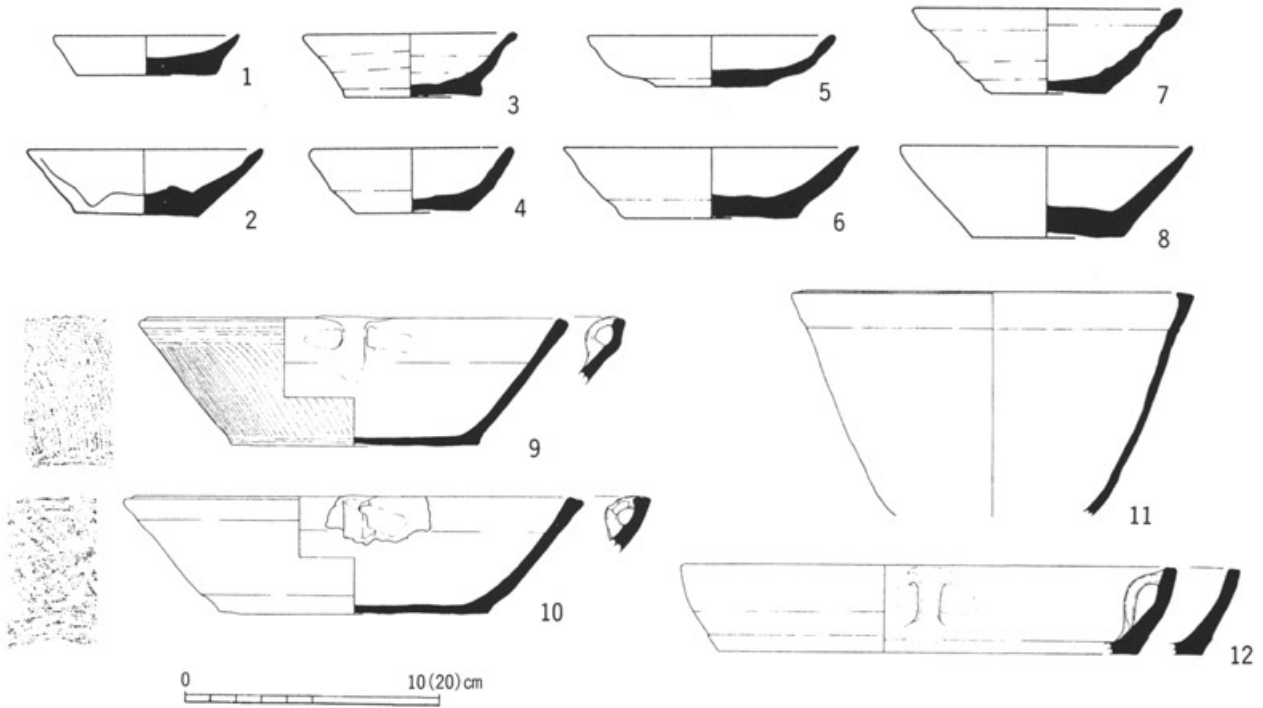
大六天遺跡 (第235図)

文献③-238

大六天遺跡は香取郡小見川町に所在する。利根川下流域南岸、標高40mほどの利根川の流れを見渡せる台地先端に位置する。遺跡隣接地には千葉氏一族である木内氏の名の地である「木内荘木内郷」がある。一方で、近接する境宮神社には永正11年(1514)に粟飯原氏により社殿が造営されたとの社伝があり、16世紀には木内氏から粟飯原氏へ支配者が交替したものと考えられる。調査では堀や溝、段整形によって構成される8つの区画を確認した。中心となるI-e区では、掘立柱建物10棟と曲屋状の掘立柱建物を検出した。この建物は桁行5間、梁行2間の建物に、3間×2間の建物を曲屋状に配置したものである。

カワラケは小型(1)と大型の皿(5、6)があり、また、椀形にも小型(2、3、4)と大型(7、8)がある。5は明褐色で、腰が張り、底部切り離しが狭い。2は内面にロクロ目が顕著に残る。3は口縁端が外反している。灯明皿として使用されていた。7は口縁端が肥厚し、胎土は白色。軽量で、他のカワラケと全く異なる。内耳土器は深いものと浅いものと大きく分かれ、深い11は口縁端が内側に張り出

し、口縁周辺は横ナデを施す。浅いもの（9、10、12）にはそれぞれ特徴が見られる。9は体部外面に斜め方向のハケ目状の痕跡が、また、口縁と底部接合部には横方向のハケ目状の痕跡がある。底面は平坦で、体部は直線的に開く。10は体部外面に底部から口縁に向かって斜め方向のヘラケズリを施す。9、10共に瓦質（須恵質）である。12は近世の内耳土器で、平底の浅いタイプである。内耳は口縁端から体部最下部に付く。内面は横ナデされる。



第235図 大六天遺跡

大塚・塔ノ前遺跡（第236図）

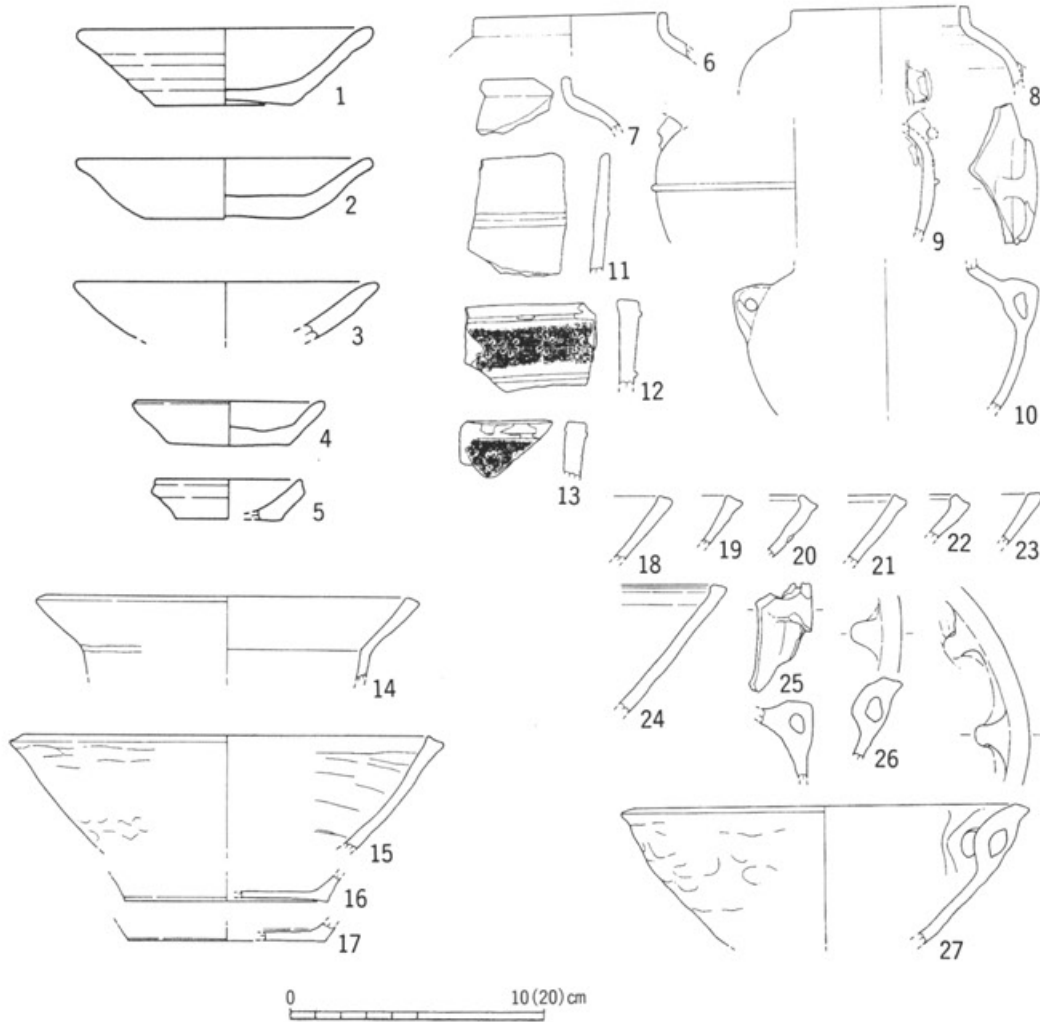
文献③-258

大塚・塔ノ前遺跡は八日市場市横須賀に所在する。標高6m～7mの九十九里砂堤上に立地する。中世横須賀城推定地及び名利長徳寺に接する。長徳寺・横須賀城に関する伝承・経歴によれば、延久2年(1070)から承保元年(1074)頃に源頼義の六男の伊予の阿闍利が地藏堂を創建したと伝えられ、以後幾多の盛衰を繰り返して、現在に至っている。発掘調査では土坑、小ピット群、溝を検出しているが、狭小な調査範囲のため、全体は不明確である。遺物には、瀬戸・美濃大窯2または3段階の鉄釉稜皿をはじめ中世から近世の陶磁器、150点のカワラケ片、95点の内耳土器片、23点の土釜片が出土している。

カワラケには5つのタイプがある。Aタイプ(1)は口径10.4cm～11.6cm、器高2.4cm～3.0cmのもので、内面は底部から緩やかに口縁に延び、口縁端が膨らむ。胎土には白色砂粒と鉄分粒を多く含む。Bタイプ(2)は口径10.0cm前後、薄手で、内面の立ち上がり部分が窪む。直線的で端部を摘み出す口径12.0cm前後のもの(Cタイプ、3)と、小型の口径7.4cmのもの(Eタイプ、4)。Dタイプ(5)は口径5.8cmの2段口縁の小形のものである。内耳土器(14～27)は、口縁端が外側に摘み出されるのが一般的であるが、中には大きく内側に厚く摘み出されるものがある。この内側の端部は使用によるものか著しく摩滅しているものが見られる。これは常滑片口鉢II類11型式の特徴に非常に良く似ている。土釜(6～10)は胎土は

やや砂っぽく、表面は比較的硬く焼け締まっている。体部に鏝の付くものと、付かないものがある。作りは丁寧である。花文のスタンプが見られる深鉢形土器（12、13）の口縁部の破片が出土している。

遺物組成を見ると、土器摺鉢の破片は1点であるが、陶器摺鉢は瀬戸・美濃産が7点、常滑産が1点出土している。内耳土器・土釜には土師質と瓦質があり、破片数で両者ともそれぞれほぼ2対1の比率となり、土師質の方が多い。



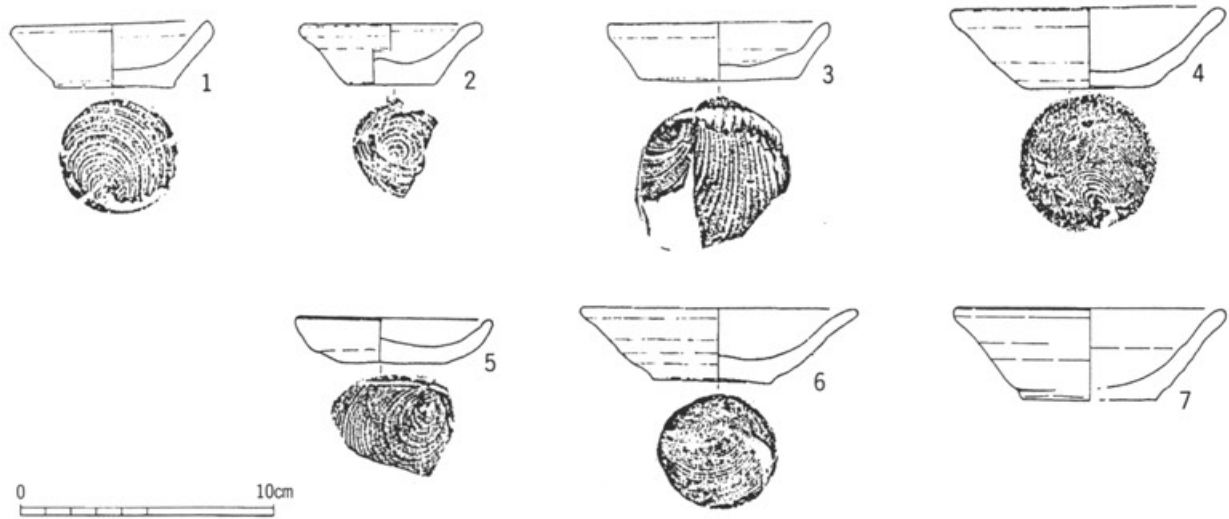
第236図 大塚・塔ノ前遺跡

馬洗城跡（第237図）

文献③-160

馬洗城跡は香取郡大栄町に所在する。利根川支流の大須賀川中流域左岸、標高42mの台地南端に位置する。久井崎城同様、大須賀氏の居城松子城を取り囲むように造られた支城といえる。調査では主郭部に掘立柱建物が集中して検出された。日常的に居住していた空間と考えられる。

カワラケは口径10.7cm～10.9cm、器高2.9cm～3.5cmの大型のものと、口径7.2cm～7.9cm、底径2.4cm～2.6cm、器高1.8cm～2.6cmの小型のものに大きく分類できる。大型のものは底部を薄く高台状に切り残し、立ち上がりは内湾気味であるが、口縁端で外反する。内面立ち上がりは緩やかである。小型のものには体部が内湾するものも見られる。また、3は口径8.4cm、底径6.0cmで、5と同様口径と底径の比が小さいものである。胎土中には細砂粒を含み、赤褐色～橙褐色に発色するものが多い。7は雲母粒を含む。

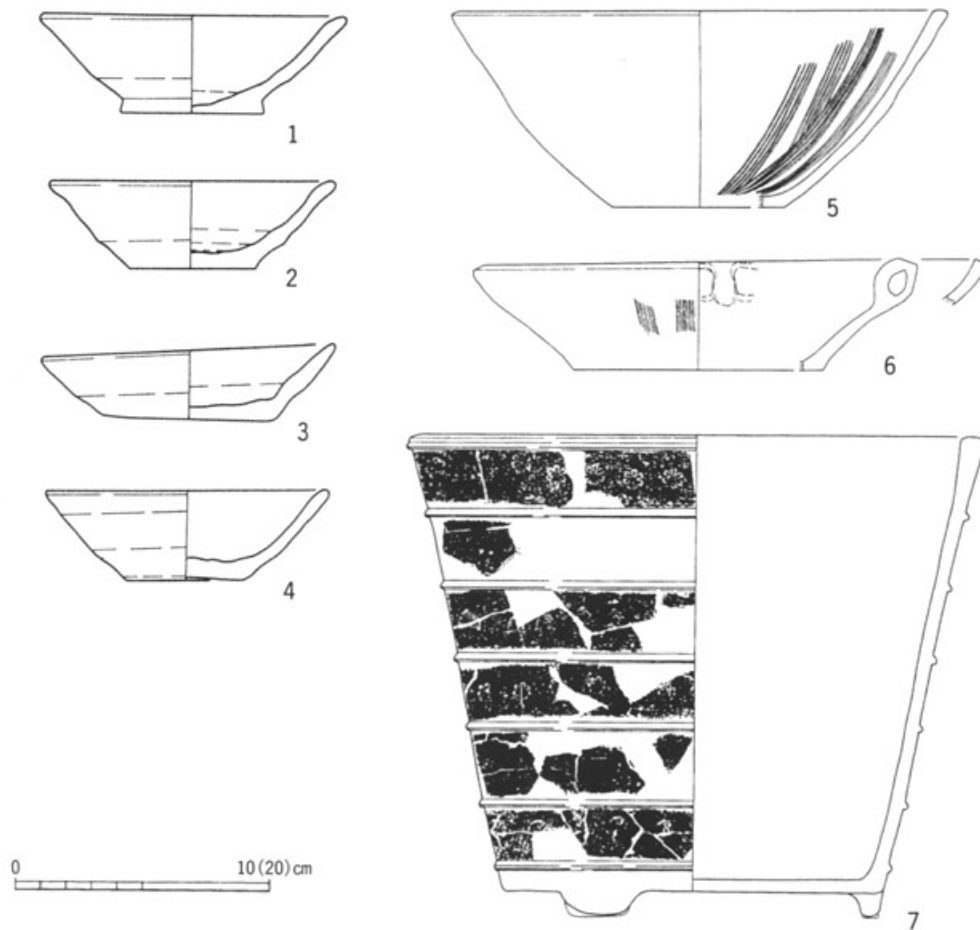


第237図 馬洗城

網原屋敷跡遺跡 (第238図)

文献③-186

網原屋敷跡遺跡は佐原市多田に所在する。利根川支流の小野川上流北岸、標高40mほどの台地上に位置する。網原村は中世にあっては大禰宜家の所領で、「葛原牧」の一部であった可能性がある。発掘調査では、



第238図 網原屋敷跡遺跡

土塁によって5つに区画される牧の捕込遺構が確認された。この区画の中で小規模ながら5棟の掘立柱建物を検出している。

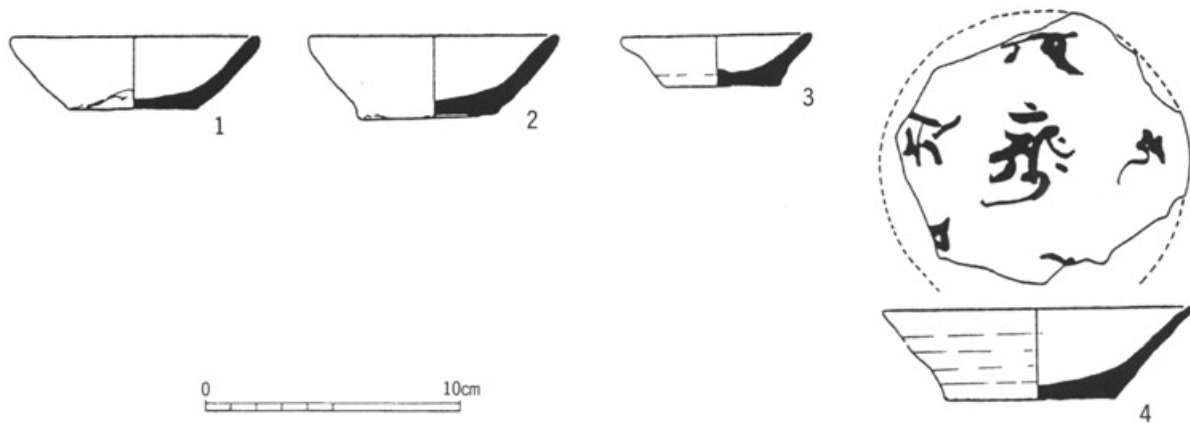
カワラケ1は高台状に切り残すため、底部が突出する。2は口径11.6cm、器高3.5cmで、体部下半の腰が張る。暗褐色で、砂粒を含む。3は全体に歪みが著しく、底部は静止糸切り。暗褐色で、長石・石英粒を多く含む。4は口縁端がやや肥厚する。5は土師質の播鉢で、口径39.2cm、全体に摩耗が著しい。黒褐色で、長石・石英粒を含む。6の内耳土器は推定口径36.4cm、器高8.6cmで、全体にナデ調整されるが、外面には並行タタキ目の痕跡が一部残る。瓦質の深鉢形土器7は推定口径46.6cm、器高33.2cmで、紐状突帯により7つに分割される。1段目と4段目は印花文、3段目は回文、5段目は菊花文である。脚は3つで、先端がかなり摩滅している。全体に丁寧なナデ調整で、器外は黒褐色、器肉面は茶褐色、長石・雲母の小砂粒を含む。

久井崎城跡（第239図、図版8-2）

文献①-091

久井崎城跡は香取郡大栄町に所在する。利根川支流の大須賀川上流、標高33mの舌状台地先端に位置する。当地は大須賀氏の本領である大須賀保の中心に位置し、当城も松子城の支城で、大須賀氏の一族である成毛氏の居城とされる。調査では、主郭部と外郭部で40棟以上の掘立柱建物や土坑、溝、地下式坑を検出した。松子城を防御するように、大須賀氏の家臣を日常的に居住させていたものと考えられる。

カワラケは口径6cm～10cm以内のもので、大きさによって大小2種類以上には分類できそうである。いずれも器壁は厚く、内面が緩やかに立ち上がる。多くが灯明皿として使用された痕跡をもつ。空堀から出土したカワラケ（4）には内面中央に「アーク」（大日如来種子）、それを巡るように「キャ、カ、ラ、バ、ア」と梵字が墨書されている。

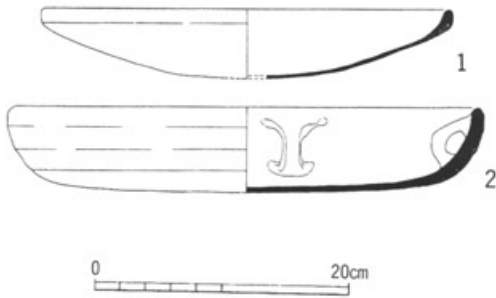


第239図 久井崎城跡

高岡陣屋跡（第240図）

文献③-294

高岡陣屋跡は香取郡下総町高岡の利根川右岸標高5m前後の、自然堤防上に立地する。陣屋付近には利根川水運で栄えた源太河岸、高岡河岸がある。高岡藩は初代井上正（政）重が、寛永17年（1640）に、一万石を加増され大名となった時をもって成立した。高岡に陣屋を構えたのは3代正（政）蔽の時で、延宝4年（1676）から貞享元年（1686）の間と推定される。陣屋関係の遺構としては、池跡、池の水位調整のための寄せ木式木樋跡、掘立柱建物跡、ゴミ廃棄土坑などを検出した。



第240図 高岡陣屋跡

内耳土器には、内耳のない丸底で体部が短く、口縁端で内折するもの（1）と、丸平底で体部が緩やかに内湾するもので、内耳はがっしりしたもの（2）が出土している。前者で口径32.8cm（1尺1寸）、後者で口径38cm（1尺3寸?）、器高6.7cmを測る。

県外

（1）相馬郡地域

守谷城跡（第241図）

文献③-265

守谷城跡は茨城県北相馬郡守谷町（旧下総国）に所在する。守谷城は下総相馬氏の居城で、大永5年（1525）には、相馬胤広が守谷に城を構えていたようである。しかし、永禄9年（1566）に後北条氏の軍勢と共に古河公方義氏の母が守谷城に入城することによって、守谷氏の居城としての守谷城に終止符を打った。永禄11年（1568）には公方義氏の御座所として進上された守谷城の拡張・修築工事が行われている。しかし、天正18年（1590）、小田原城落城と後北条氏の滅亡に伴い、守谷城には徳川家康の家臣菅沼（土岐）定政が入城するが、三代目の頼行の時、寛永5年（1628）出羽上山へ移封になる。寛永19年（1642）には佐倉藩領となり、寛文9年（1669）から天和元年（1681）にかけて酒井氏が居城したが、以後守谷領は関宿藩領に編入され、守谷城は空城となった。

発掘調査では郭B調査地区から掘立柱建物が数棟検出され、多数の土器・陶磁器が出土している。この掘立柱建物は盛土整地土層が築かれてから造られており、遺物の主体が大窯期の製品になることから、文献に残る永禄11年の拡張・改修時の遺構と判断されるものである。また、郭A調査地区を含めて、遺物の上限については瀬戸・美濃製品からほぼ17世紀の中頃と考えられる。従って、大半を占める遺物は16世紀前半から17世紀半ばまでの一世紀余りのものと考えられる。

遺物中でもとりわけカワラケの出土量が多く、全出土量の約50%を占める。カワラケは口径と体部形態によって7タイプに分類される。

a タイプは口径8.3cm～10.2cmのもので、体部の立ち上がりがやや内湾気味に開く。

b タイプは口径9.0cm～10.6cmのもので、体部はほぼ直線的に外傾して立ち上がるもの。

c タイプは口径8.5cm～11.0cmのもので、体部はやや外反気味に立ち上がる。

d タイプは口径5.8cm～10.3cmのもので、体部がほぼ直線的か、やや外反気味に立ち上がる。

e タイプは口径5.3cm～7.5cmのもので、体部はやや内湾気味に立ち上がる。

f タイプは口径9.5cm～16.8cmのもので、体部はほぼ直線的なものからやや外反気味のもの。

g タイプは底部が丸底で糸切り痕が見られず、体部の立ち上がりが浅いもの。15は耳カワラケになる。

内耳土器はA・B両地点で出土しているが、A地点のものは底部が深いもので、B地点のものは浅く、口径と底径の比が小さい。土器播鉢は、21が口径31.0cm、底径12.0cm、器高11.2cmで、片口状になる。



第241図 守谷城跡

(2) 葛飾郡地域

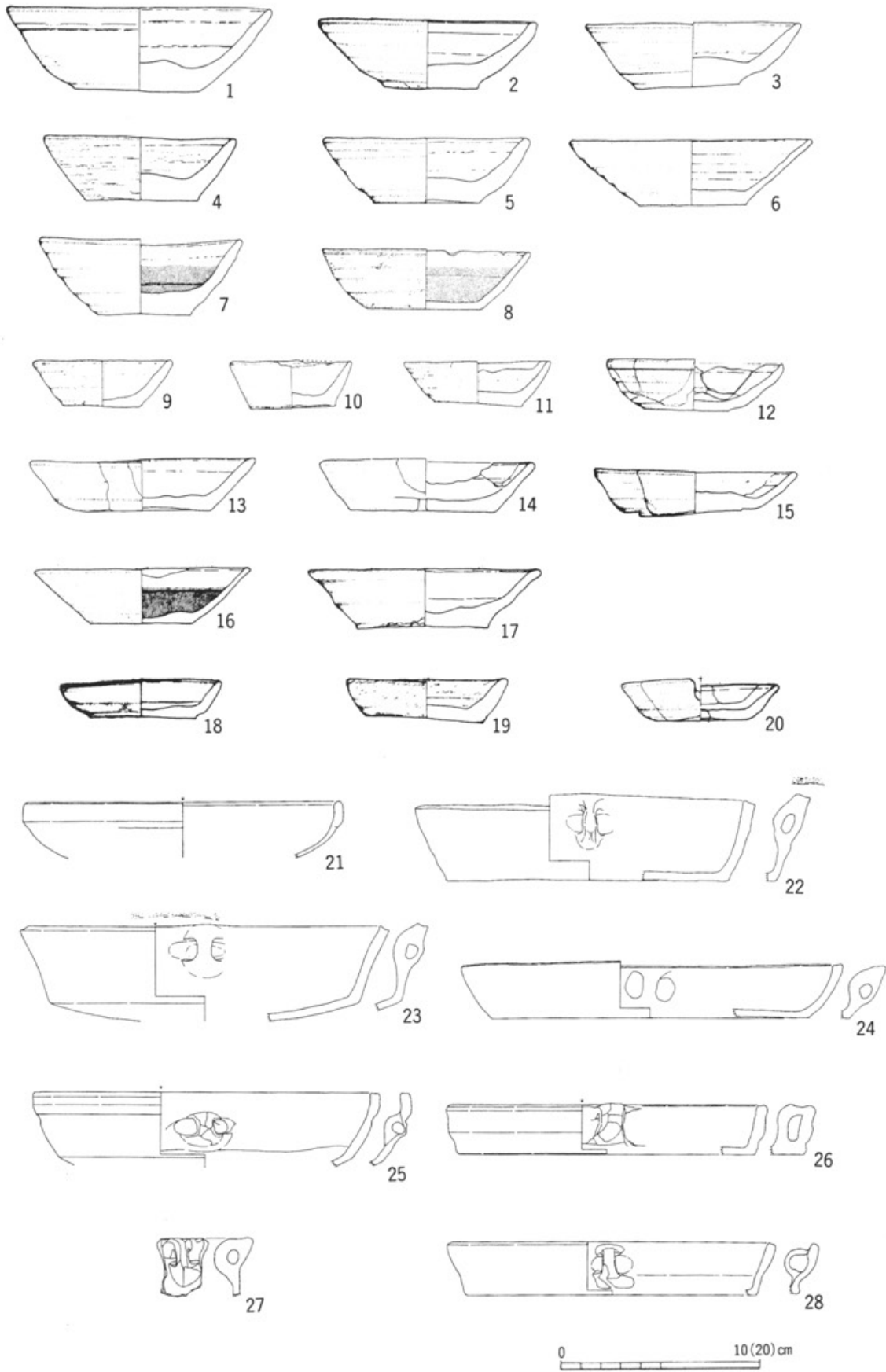
葛西城跡とその周辺 (第242図)

文献③-023、029、266、267

葛西城跡は葛飾区(旧下総国)青戸に所在する。中川右岸に形成された標高2m程の微高地上にあり、中川を東の備えに、西に水田あるいは湿地帯という自然環境を巧く生かしている。葛西城は関東管領上杉方の軍事拠点として、享徳の乱(1454)前後に築造されたようである。以後一時期千葉氏が入城したとも言われるが、大石氏が城主となっていた。天文7年(1538)第1次国府台合戦の後、後北条氏方に移るが、永禄3年(1560)長尾景虎の小田原城攻撃の際、葛西城は反小田原方に落ちた。しかし、長尾軍の撤退が始まると、永禄5年(1562)には再び後北条方の領地になる。天正18年(1590)、小田原城落城の際葛西城も落城したが、徳川家康はこの葛西城の跡地に青戸御殿(葛西御殿)を建設した。慶長10年(1605)にはすでに宿泊施設ができていたようで、寛永16年(1639)と慶安2年(1649)には改修工事を行っている。しかし、延宝6年(1678)に御殿は取り壊され、廃止となった。

カワラケについては、2次調査資料を長瀬衛氏が口径と高さの比率を基準に「坏型」と「皿型」のグループに、口径の大きさによって大小に分類している。A類は「大型坏型」、B類は「小型坏型」、C類は「大型皿型」、D類は「小型皿型」となる。更に3次調査資料で、手づくねカワラケをE群、耳カワラケをF群として追加している。谷口栄氏によれば、これらの資料の大半が16世紀の後北条氏支配以降17世紀中ごろまでに収まるようである。また、内耳土器については両角まり氏が葛西城周辺遺跡である柴又帝釈天遺跡・上千葉遺跡出土遺物についてまとめている。

カワラケの1~8はA類、9~12がB類、13~17がC類、18~20がD類に相当する。内耳土器の21はa類で、22はb類、23はc類、24はd類、25はe類、26はf類、27はg類、28はh類となる。このうちc類は器高が口径のおおよそ1/3未満、1/6以上、体部から口縁部に掛けて比較的直に立ち上がるものである。相対する2か所に1対2の3内耳をもつ。内耳断面は円形で、団子状または団子状に極めて近い形態である。丸底で、底部外面から体部外面下半にかけてハケもしくは木端状の工具による丁寧なナデ調整が施される。内面はナデ調整で、胎土は乳白色に近い肌色を呈し、粒子は細かく均質で、やや砂っぽい。葛西城及びその周辺でのみ確認される。また、b類は常陸・下総を中心に16世紀末葉に見られる。d類は佐倉城で藤尾氏がII類としたものである。



第242図 葛西城跡(1~20)、柴又帝釈天遺跡(21~23)、上千葉遺跡(24~28)

注

1) 遺跡の概要については文献①-091および各報告書に基づき説明した。表中の遺物の分類、形式決定については、ほとんどの遺跡で文献①-091を参考にしたが、疑問があるものについては本報告を再確認し、実測図・写真などから、独自に再設定したものもある。文献①-091と、陶磁器分類の基本文献は同一なので、解釈や読み違いなどがある場合は、すべて責任は当方にある。

この中の、いくつかの遺跡の瀬戸・美濃製品については、(財)瀬戸市埋蔵文化財センターの藤澤良祐氏に、再確認していただいたものがあり、時期設定にあたっては消費地の成果を考慮に入れつつも、生産地編年を優先させたものである。

また、中世遺跡については、文献⑤-030、053で、古瀬戸様式から大窯期の遺物の出土地名表を作成されており、これも参考とさせていただいた。

なお、本文と表中の大窯に付随する数字は“段階”を、連房式(近世)に付随する数字は“小期”を意味する。

基本文献：⑤-004、008~011、013~015、018、024、033、037~040

第11表 所収遺跡一覧

安房郡・君津郡・市原市地域

遺跡名	市町名	遺構	遺物(土器、陶磁器)	時期	文献
文島遺跡	袖ヶ浦市	道路、掘立柱建物、土坑墓、竪穴遺構、竪穴住居状遺構、溝、棚列	同安窯系青磁碗Ⅰ類、龍泉窯系青磁碗(Ⅰ-1、Ⅰ-2、Ⅰ-5類、杯Ⅰ類)、常滑埴鉢(5、6型式)、甕(5、6型式、その他)、渥美埴鉢、カワラケ、伊勢系土鍋	12世紀後半から14世紀前半で、13世紀中葉から13世紀末中心	③-206
外箕輪遺跡	君津市	掘立柱建物、井戸、溝、土坑、塀、木棺墓、水田	龍泉窯系青磁碗(Ⅰ-1、Ⅰ-1b類、Ⅰ-2a、Ⅰ-4a、Ⅰ-5b、Ⅲ類)、青磁小碗(Ⅰ-1類)、青磁杯(Ⅲ類)、青磁皿(Ⅰ類)、筒形香炉、白磁碗(V類)、口禿小皿(Ⅸ類)、白磁皿(Ⅸ類)、二彩陶器盤、青白磁梅瓶、常滑埴鉢(2~3、5~6型式)、甕(2、3型式)、渥美甕(2型式)、壺(1b~2型式)、古瀬戸緑釉小皿(後期)、鉦皿(後期)、四耳壺、合子、カワラケ、伊勢系土鍋	12世紀後半から14世紀後半で、12世紀後半から13世紀末中心	③-164
下ノ坊遺跡B地点	鋸南町	掘立柱建物5、塀、井戸、大形溝	龍泉窯系青磁碗(Ⅰ-4、Ⅰ-5b、Ⅰ-2またはⅠ-4類)、龍泉窯系青磁盤(Ⅲ類)、白磁皿(Ⅷ、Ⅸ類)、白磁壺、褐釉陶器壺、常滑甕(3、5、6型式)、埴鉢(5、6、8型式)、小型壺(6型式)、渥美壺、古瀬戸鉦皿(中Ⅳ期)、平碗(中Ⅳ期)、播鉢(後期)、カワラケ(皿、杯)、土鍋	12世紀後半から14世紀後半で、13世紀後半から14世紀前半中心	③-176
天神前遺跡	木更津市	掘立柱建物、土坑、土坑墓、埋葬施設	古瀬戸四耳壺(前期)、筒形容器(後Ⅰ)、緑折深皿(後期)、常滑壺(6型式)、甕(6型式)、埴鉢(7~8型式)、カワラケ、瓦質火鉢、東海系罌蓋	13世紀半ばから15世紀後半で、13世紀後半から15世紀中心	③-207
荒久遺跡	袖ヶ浦市	道路、掘立柱建物9、地下式坑24、方形竪穴6、播鉢状遺構8、土坑185以上、井戸2、溝28	白磁皿(森田D群)、龍泉窯系青磁蓮弁文碗(Ⅰ-5b類)、碗(Ⅳ類)、端反小碗、蓮弁文盤、染付皿、古瀬戸灰釉印花文瓶子(中期)、鉄軸香炉、花瓶、灰釉香炉(後Ⅲ期)、灰釉合子(後Ⅲ期)、碗形鉢(後Ⅱ期)、折縁深皿(後Ⅲ~Ⅳ期)、緑釉小皿(後Ⅲ~Ⅳ期)、播鉢(後Ⅳ期)、鉦皿(後Ⅰ~Ⅱ期)、緑釉狭み皿(大窯1)、天目茶碗(大窯1)、黒釉粗母懷茶壺、常滑埴鉢(11形式)、甕(10~11型式)、カワラケ、在地産播鉢、内耳土器、東海系罌蓋	14世紀から16世紀前半で、15世紀前葉から16世紀前葉中心	③-298
台遺跡	市原市	台地整形区画、土坑墓、火葬跡、地下式坑、道路、区画溝、土坑、掘立柱建物、井戸	常滑甕(7、10型式)、古瀬戸平碗(後Ⅳ期)、天目茶碗(後Ⅲ~Ⅳ期)、緑釉小皿(後Ⅳ期)、花瓶(後期)、合子(中Ⅳ期)、香炉(後Ⅲ~Ⅳ期)、瓦質播鉢、内耳土器、カワラケ	14世紀前半から15世紀末まで、15世紀前半から15世紀後半中心	①-091
神田遺跡	袖ヶ浦市	土坑墓、火葬土坑、地下式坑	古瀬戸緑釉皿(後Ⅳ)、播鉢(後~大窯)、瀬戸・美濃端反皿(大2)、カワラケ	14世紀半ばから17世紀まで、15世紀から16世紀中心	③-243
真里谷城跡	木更津市	柱穴、土坑、捨て場遺構、掘立柱建物、地下式坑、平場、道路、空堀、物見台	染付皿(B1群Ⅵ~Ⅷ類、D群Ⅳ類)、白磁皿(D、E群Ⅰ+2+3類)、青磁鉢(B-II・a、B-Ⅳ、B-Ⅳ類)、緑釉壺、褐釉四耳壺、瀬戸・美濃天目茶碗(大窯1、2)、緑釉小皿、播鉢(後Ⅳ新~大窯2)、常滑甕(9~11型式)、カワラケ、耳カワラケ	15世紀半ばから16世紀前半で、ほぼ、同時期中心	③-109
椎津城跡	市原市	掘立柱建物、井戸、土坑	染付碗(CⅠ類)、古瀬戸灰釉平碗(後Ⅳ新)、緑釉小皿(後Ⅳ期)、灰釉端反皿か丸皿(大窯2)、丸皿か後皿(大窯2)、天目茶碗(大窯期)、播鉢(大窯1)、鉄軸茶壺、蘭竹文鉄絵志野皿、カワラケ	15世紀半ばから17世紀前半、15世紀後半から16世紀半ば中心	③-171
久留里城跡	君津市	石敷、礎石建物、天守台、長屋塀、土塀、堀	瀬戸・美濃陶磁器、カワラケ、瓦	17世紀後半から19世紀末まで、18世紀後半から19世紀中心	③-060
村上遺跡	市原市	溝、水田	常滑播鉢(10~11型式)、甕(6~7型式)、内耳土器、カワラケ、瀬戸・美濃産陶磁器、肥前産陶磁器、堺産播鉢、京都・信楽系陶器、火鉢、土器灯明具	13世紀後半から19世紀まで、18世紀から19世紀中心	③-289
野乃間古墳	富津市	古墳周溝内廃棄遺物包含層	肥前産磁器碗、瀬戸・美濃産陶器(掛け分け碗、香炉、皿、鉢、灯明皿)、内耳土器	18世紀前半から18世紀末中心	③-146
富津陣屋跡	富津市	礎石建物、ろうそく石礎石列、井戸、庭、溝、土坑	肥前産陶磁器、瀬戸・美濃産陶磁器、相馬陶器、万古陶器、堺播鉢、京都信楽系陶器、備前陶器、志戸呂陶器、萩陶器、明・清朝磁器、ヨーロッパ陶器、瓦、カワラケ、内耳土器、その他土器類	ほぼ文政4年(1821)から慶応4年(1868)まで	③-287
飯野陣屋跡	富津市	溝、土坑、貝殻地蔵、濠、道路、礎石、土坑、柱穴列、道路、基礎	肥前産陶磁器、瀬戸・美濃産陶磁器、瓦、カワラケ、内耳土器、土人形、ヨーロッパ陶器	18世紀から19世紀末まで	③-155他

夷隅・長生・山武地域

遺跡名	市町名	遺構	遺物(土器、陶磁器)	時期	文献
岩川館跡	長南町	堀、掘立柱建物、井戸、礎石建物、土坑、火葬墓、竪穴遺構	同安窯系青磁(碗Ⅰ類、皿)、龍泉窯系青磁碗(Ⅰ-2、Ⅰ-5類、小盤Ⅲ類、碗Ⅳ類、盤Ⅳ類、不明)、白磁四耳壺、白磁皿Ⅸ類、盤、青白磁瓜形水注、合子、常滑甕(3、5~6、7、9、10型式)、埴鉢(5~6、6、7、8、9型式)、渥美埴鉢、甕、小型壺、瀬戸深皿(中Ⅰ~Ⅱ、後Ⅲ)、平碗(中期、後期)、鉦皿(中期~後期)、四耳壺+瓶子(中期)、花瓶(中期)、香炉、緑釉小皿(後期)、天目茶碗(後期~大窯)、播鉢(後期~大窯)、備前播鉢、山茶碗、カワラケ、瓦質火鉢、播鉢	12世紀後半から16世紀前半で、12世紀後半から14世紀中心	③-170
神田山第Ⅲ遺跡	茂原市	掘立柱建物、火葬土坑、土坑、塚、溝、地下式坑	白磁碗(V-4類)、白磁皿(Ⅸ類)、白磁四耳壺(Ⅲ-3類)、龍泉窯系青磁碗(Ⅰ-5a+b、E類)、常滑甕(2、3、5、6、8型式)、埴鉢(5、6、8、9型式)、渥美壺、備前播鉢、古瀬戸緑釉皿(後Ⅲ~Ⅳ)、鉦皿(後Ⅲ期)、平碗(中Ⅳ期~後Ⅰ)、天目茶碗(後Ⅲ)、香炉、花瓶(中期)、底脚目皿(中Ⅲ)、折縁深皿(後Ⅲ)、直縁大皿、播鉢(後期)、東海系罌蓋、カワラケ	12世紀後半から15世紀まで	③-219
山室城跡	松尾町		古瀬戸鉦目付大皿(後Ⅳ新)、直縁大皿、平碗、天目茶碗、播鉢、常滑甕、内耳土器、カワラケ	15世紀初頭から15世紀後半	③-201
田向城跡	芝山町	掘立柱建物、地鎮遺構、木橋跡、竪穴状遺構、空堀、地下式坑、土坑、ピット群、棚列	染付、青磁、瀬戸天目茶碗、灰釉碗、小皿、蓋、香炉、瓶子、鉄軸水注、鉄軸水注、粗母懷茶壺、花瓶、播鉢(後Ⅳ~大2)、常滑甕、土器播鉢、瓦質土器、内耳土器、カワラケ	14世紀後半から16世紀前半? 15世紀中心?	③-231
一宮城域之内遺跡	一宮町	掘立柱建物、礎石、切石組水路、玉石敷遺構	染付皿(B1、C群)、白磁皿(C1、C2群)、青磁端反皿、白磁四耳壺、青白磁陰刻花瓶、古瀬戸瓶子、香炉、水注、瀬戸・美濃天目茶碗、播鉢(大1、2)、常滑甕(7、8、9、10、11型式)、カワラケ、耳カワラケ、内耳土器、瓦、その他	14世紀前半から17世紀以降まで、15世紀末から16世紀前半中心	③-106
大多喜城跡	大多喜町	柱穴群、溝、土坑	白磁皿(C群)、染付皿(B2群)、染付碗、瀬戸・美濃灰釉皿、鉄軸皿、天目茶碗、播鉢、常滑甕、カワラケ、瓦質土器	16世紀中心?	③-022
山中台遺跡	東金市	掘立柱建物、地下室、土坑墓、溝、焼土、土坑、ピット、火葬墓	瀬戸・美濃陶磁器、京焼き系陶器、志戸呂陶器、信楽陶器、堺播鉢、丹波播鉢、肥前陶磁器、相馬陶器、カワラケ、内耳土器、その他土器	17世紀から19世紀	③-239
古宿・上谷遺跡B地区北	芝山町	掘立柱建物、井戸、土坑、地下式坑、区画溝	カワラケ、火鉢、内耳土器、土鈴、瀬戸・美濃陶器天目茶碗、志野皿、摺絵皿、灯明皿、播鉢、香炉、丹波播鉢、堺播鉢、肥前染付碗、小杯	17世紀前葉から18世紀代	③-296
上宿遺跡	芝山町	土坑列、方形周溝状遺構、井戸、方形竪穴、土坑、溝、竈、土蔵基礎	カワラケ、火鉢、内耳土器、瀬戸・美濃陶器碗、皿、播鉢、徳利、香炉、灯明皿、堺播鉢、京都・信楽系碗、常滑甕、益子播鉢、肥前染付碗、皿、瀬戸・美濃染付碗・皿	18世紀第3四半期から19世紀前半	③-301
長倉宮脇遺跡	横芝町	塚	カワラケ	17世紀後半	③-122

第3章 出土遺物について

千葉市・八千代市地域

遺跡名	市町名	遺構	遺物(土器、陶磁器)	時期	文献
西屋敷遺跡	千葉市	掘立柱建物、土坑墓、地下式坑、回廊状遺構、道路状遺構、火葬土坑	龍泉窯系青磁碗(Ⅰ-5b類、Ⅰ-2類)、古瀬戸平碗(後Ⅲ~Ⅳ)、折縁深皿(後Ⅲ~Ⅳ)、瓶子(後Ⅲ~Ⅳ)、播鉢(後Ⅲ~Ⅳ)、緑釉小皿(後Ⅳ~大1)、香炉、銅皿、常滑埴鉢(8~11型式)、甕(8~9型式)、壺(6型式)、瀬美甕(2型式)、志野皿、カワラケ、内耳土器	12世紀後半から17世紀前半まで、14世紀後半から15世紀中心	③-058
千葉城跡	千葉市	堀、溝、土坑、墓跡、道路、掘立柱建物、櫓列、地下式坑	青磁、同安窯系青磁、古瀬戸灰釉四耳壺(前Ⅱb)、鉄釉印花文瓶子、天目茶碗、仏花瓶、銅皿、折縁深皿、灰釉皿、筒形容器、常滑壺(6a型式)、甕、埴鉢、カワラケ	13世紀から15世紀前半まで14世紀後半から15世紀初頭中心	①-091
廿五里城遺跡	千葉市	土塁、道路、溝、塚(墓棺墓)、土坑墓、火葬土坑、火葬墓	常滑甕(9型式)、埴鉢(9型式)、カワラケ	15世紀前半中心	③-131
生実城跡	千葉市	堀、溝、土塁、地下式坑、井戸、土坑、竪穴状遺構、粘土貼り土坑、掘立柱建物	龍泉窯系青磁、白磁、染付、瀬戸・美濃天目茶碗、鉄釉小皿、茶入、仏花瓶、水滴、灰釉皿、三足盤、播鉢(後Ⅳ新、大1、2)、常滑埴鉢(10型式)、甕(10、11、12型式)、内耳土器、瓦質茶釜、羽釜、播鉢、土師質香炉、カワラケ	15世紀から16世紀後半まで	①-091他
高品城跡	千葉市	地下式坑44、土坑墓1、馬埋葬土坑2、堀5、土塁6、溝16、掘立柱建物23、土坑約100、橋1、虎口3、大型竪穴1、竪穴状遺構11、井戸13	龍泉窯系青磁桜花皿、瀬戸・美濃緑釉小皿(後Ⅲ~Ⅳ、大1)、平碗、深皿、天目茶碗(大2)、灰釉印花文瓶子(中期)、常滑甕(7、9、11型式)、カワラケ、瓦質火鉢、内耳土器	15世紀から16世紀まで	③-279
南屋敷遺跡	千葉市	地下式坑、掘立柱建物、土坑、虎口、通路、井戸、溝、堀、土塁	龍泉窯系青磁碗、瀬戸緑釉鉄皿(大1)、播鉢(大1)、古瀬戸三足盤、カワラケ、内耳土器、土師質香炉	15世紀後半から16世紀はじめ中心	①-091
井戸向遺跡	八千代市	土坑墓、方形竪穴、地下式坑、埋納銭土坑	瀬戸・美濃緑釉小皿(後Ⅳ)、内耳土器、土器播鉢	15世紀後半から16世紀	③-142
黒ハギ遺跡	千葉市	掘立柱建物35、溝40、道路4、土坑30以上、井戸5、火葬跡1、地下式坑3、竪穴状遺構3	青磁、白磁、青白磁、染付、瀬戸、常滑、瀬美、カワラケ、内耳土器、瓦質火鉢	12世紀から16世紀まで	⑤-061

印旛郡地域

遺跡名	市町名	遺構	遺物(土器、陶磁器)	時期	文献
駒井野西ノ下遺跡	成田市	掘立柱建物4、方形竪穴8、地下式坑7、火葬土坑、土坑区画溝、道路	カワラケ、常滑甕(6~7型式)、その他未整理	13世紀後半から14世紀前半?	②-306
小林城跡	印西市	土塁8、空堀2、門2、道路2、掘立柱建物4、柱穴21、塚1、地下式坑8、土坑墓5、土坑106	龍泉窯系青磁桜花皿、蓮弁文碗、古瀬戸灰釉皿(後Ⅲ、Ⅳ)、灰釉小壺(大1)、直縁大皿(後Ⅱ)、播鉢(大1)、常滑埴鉢、壺、甕、カワラケ、内耳土器、播鉢、香炉、火鉢	14世紀末から16世紀前半	③-228
高岡大福寺遺跡	佐倉市	掘立柱建物、竪穴状遺構、地下式坑、土坑、井戸、火葬墓、土坑墓、溝、道路、墳墓堂	龍泉窯系青磁碗(Ⅰ-2a、Ⅰ-5b類)、青磁杯(Ⅲ類)、染付皿(B1群)、古瀬戸銅皿(後Ⅳ)、天目茶碗(後Ⅳ)、折縁深皿(Ⅲ、後Ⅳ新)、香炉(中期)、緑釉小皿(後Ⅲ~Ⅳ)、平碗(後Ⅲ~Ⅳ)、常滑埴鉢(9、10型式)、甕(9型式)、東海系罌蓋、火鉢、カワラケ、内耳土器、土器播鉢	13世紀から15世紀後半まで、15世紀中心	③-210
駒井野荒沼遺跡	成田市	掘立柱建物、井戸、土坑、地下式坑、水溜土坑	龍泉窯系青磁碗(Ⅰ-2類)、古瀬戸甕類(中Ⅳ前後)、平碗(後Ⅲ)、天目茶碗(後期後半)、緑釉小皿(後期後半)、折縁深皿(後Ⅱ)、端反皿(大2)、丸皿(大3)、銅皿、合子、常滑埴鉢(7型式)、広口壺(9型式)、埴鉢(9型式)、備前播鉢?、カワラケ、内耳土器	14世紀前半から16世紀前半まで、15世紀前半から16世紀はじめ中心	③-196
北ノ作遺跡	四街道市	主要曲輪2、腰曲輪9、土塁2、空堀8、溝15、掘立柱建物11、門3、柱穴群、土坑、地下式坑、井戸	龍泉窯系青磁桜花皿、青磁碗(D類)、染付皿(C群)、瀬戸美濃緑釉皿(後Ⅳ新)、腰折皿(後Ⅳ新)、緑釉狭み皿(大1前)、灰釉端反皿(大1後)、灰釉内壳皿(大3前)、灰釉折縁皿(大4前)、鉄釉皿(大3後)、灰釉平碗(古瀬戸)、天目茶碗(後Ⅳ新、第1小期)、三足盤(後期)、播鉢(後Ⅳ新、大1後、3前)、鉄釉壺(後Ⅲ~Ⅳ)、罌蓋(大窯?)、緑釉丸碗(第1小期)、志野皿(登窯初期)、常滑甕、埴鉢、土器播鉢、内耳土器、壺、埴埴、東海系罌蓋、カワラケ	15世紀第3四半期から17世紀前半まで、15世紀第3四半期から16世紀はじめ中心	②-360 ②-363
池ノ尻遺跡	四街道市	掘立柱建物、門、地下式坑、カワラケ焼成坑、鍛冶炉	龍泉窯系青磁蓮弁文鉢、端反碗、桜花皿、同安窯系青磁皿(Ⅰ類)、白磁口壳碗、割高台小皿、緑釉碗、古瀬戸洗(前Ⅰ)、合子(中Ⅲ)、緑釉小皿(後Ⅲ、Ⅳ)、平碗(後Ⅲ)、天目茶碗(中Ⅱ、後Ⅲ)、折縁深皿(後Ⅳ)、播鉢(後期、大窯)、銅皿、深皿、瓶子、常滑壺(4~6型式)、甕(6型式)、埴鉢(6、8、9型式)、瀬美甕(3型式)、備前?、土器播鉢、内耳土器、カワラケ、東海系罌蓋	12世紀後半から16世紀初頭まで、12世紀後半から14世紀前半と、14世紀後半から15世紀中ごろ中心	③-128
和良比堀込城跡	四街道市	掘立柱建物、竪穴状遺構、地下式坑、土坑、堀底土坑	染付、青磁、白磁、瀬戸・美濃天目茶碗、小皿、播鉢(後Ⅳ新、第1、2)、香炉、茶入、壺、水差、鉢、常滑甕、土器播鉢、内耳土器、羽釜、カワラケ	15世紀前半から16世紀半ばまで	③-194
臼井城跡	佐倉市	土塁、土坑、地鎮土坑、掘立柱建物、盛土、礎石、土坑墓	龍泉窯系青磁、染付皿(B、E群)、碗(C群)、白磁碗(E群)、常滑壺(11型式)、瀬戸・美濃天目茶碗、灰釉小皿、播鉢、志野皿、甕、水滴、カワラケ	16世紀後半中心で、17世紀前半まで	③-113 ③-130
本佐倉城跡	酒々井町	掘立柱建物、櫓台、空堀	龍泉窯系青磁碗、盤、香炉、白磁碗、皿、杯、染付皿、甕、瀬戸・美濃天目茶碗(後Ⅳ新、大1、大2、大2後、大3後、1小期)、灰釉端反皿(大1)、灰釉端反丸皿(大1か2)、灰釉ソギ丸皿(大2前)、緑釉小皿(後Ⅳ新)、灰釉丸皿(大2)、灰釉腰折皿(後Ⅳ新)、播鉢(後Ⅳ新、大1、大2前、大2後、大3前、1-2小期、6小期)、徳利(大3か4)、鉄釉つまみ(大窯か)、鉄釉広口有耳壺(後Ⅲ)、鉄釉桶(大3か4)、志野丸皿(大4後、1-2小期)、常滑甕(11、12型式)、志戸呂祖母模壺(後Ⅳ新)、広口有耳壺(後Ⅳ)、建水(連房か)	15世紀後半から17世紀初頭まで、大窯4が少ない	③-236
長勝寺脇館跡	酒々井町	掘立柱建物7、礎石建門1、虎口1、地下式坑1、空堀5、井戸3、腰曲輪8、火葬墓	染付碗、皿(B2群)、白磁、瀬戸・美濃天目茶碗(大1後、大2後)、灰釉平碗、灰釉丸皿(大2前、2、3前)、灰釉ソギ丸皿(大2前、2、3前)、灰釉端反丸皿(大1か2、2)、灰釉内壳皿(大3後)、鉄釉桜皿(大3前)、鉄釉丸皿(大3前か)、灰釉緑釉小皿(後Ⅳ新)、鉄釉徳利(大窯)、鉄絵皿(1小期)、志戸呂播鉢、播鉢、鉄絵志野皿、カワラケ、土器播鉢、内耳土器	15世紀後半から17世紀初頭まで、16世紀前半から16世紀末中心大窯4が少ない	③-167
佐倉城跡(国立歴史民俗博物館研究棟)	佐倉市	礎石、井戸、地鎮遺構、畑跡、坑跡、地下倉	肥前産染付磁器碗、皿、鉢、肥前産陶器碗、瀬戸・美濃産陶器碗、皿、甕、徳利、瀬戸・美濃産磁器碗、皿、播鉢、卵産播鉢、丹波産播鉢、京都・信楽系碗、鉢、皿、土瓶、急須、カワラケ、内耳土器、火鉢、その他	17世紀半ばから19世紀後半まで	③-079 ⑤-028
烏内遺跡	成田市	台地整形区画、地下式坑、掘立柱建物、竪穴状遺構、土坑、溝、地鎮遺構	カワラケ、内耳土器、瀬戸・美濃志野皿、鉄絵皿、菊皿、片口、徳利、天目茶碗、碗、香炉、播鉢、肥前産染付磁器碗、小杯、卵産播鉢	15世紀から18世紀後半まで	③-119

第3節 所収遺跡の概説と出土土器

遺跡名	市町名	遺構	遺物(土器、陶磁器)	時期	文献
南広遺跡	佐倉市	掘立柱建物、方形竪穴建物、棚列、土坑墓、火葬墓、溝、壇上遺構	肥前産染付磁器碗、皿、徳利、赤絵、瀬戸・美濃産陶器碗、掛け分け碗、灯明皿、鉢、播鉢、壺、徳利、香炉、塀産播鉢、カワラケ、内耳土器、土人形	18世紀後半中心	③-211
弥勒東台遺跡	佐倉市	土塁、堀、道路、土坑、井戸、掘立柱建物	肥前産磁器碗、皿、鉢、蓮華、徳利、花器、香炉、仏飯具、紅猪口、肥前産陶器碗、鉢、瀬戸・美濃産磁器碗、皿、瀬戸・美濃産陶器碗、皿、鉢、土鍋、徳利、壺、灯明皿、香炉、お歯黒壺、常滑壺、丹波播鉢、京都・信楽系碗、皿、鉢、土瓶、燗徳利、灯明皿、塀播鉢、備前徳利、志戸呂徳利、灯明皿、カワラケ、内耳土器、その他多数	17世紀後半から19世紀後半まで	③-276
曲輪ノ内遺跡	佐倉市	掘立柱建物3、棚列3、井戸1、土坑29、袍衣遺構1	カワラケ、内耳土器、瓦、肥前産磁器碗、皿、小杯、鉢、蓋、肥前産陶器碗、瀬戸・美濃産磁器碗、猪口、瀬戸・美濃産陶器碗、皿、香炉、徳利、播鉢、水差し、土人形	17世紀半ばから19世紀後半まで、18世紀後半から19世紀半ば中心	③-181 ③-253

東葛飾郡地域

遺跡名	市町名	遺構	遺物(土器、陶磁器)	時期	文献
根木内遺跡第4地点	松戸市	掘立柱建物1、土坑8、空堀1、地下式坑14、ピット1、溝2	龍泉窯系青磁蓮弁文碗、白磁面取盃、瀬戸・美濃灰釉皿(印:大窯)、播鉢(後IV新、大1)、緑釉狭口皿(大窯)、常滑壺(11型式)、カワラケ、内耳土器、土器播鉢	15世紀前半から16世紀前半まで	③-270
小金城跡	松戸市	掘立柱建物、虎口状遺構、空堀、畝畑、土塁、土坑、地下式坑	染付皿(B1、C、E群)、碗B群、白磁皿(E群)、龍泉窯系青磁小型壺、高台付壺、菊皿、瀬戸・美濃灰釉丸皿(大2)、鉄釉皿、緑釉小皿(後IV)、碗、天目茶碗(大3、4)、播鉢(大3、4)、茶入、壺、常滑壺、カワラケ(輪宝)、初山皿、内耳土器、土器播鉢	15世紀から16世紀後半まで	③-005 ③-271
鹿島前遺跡	我孫子市	溝、土坑、井戸、地下式坑	龍泉窯系青磁碗、瀬戸・美濃緑釉小皿(後IV)、播鉢(後IV新)、天目茶碗(後IV新)、常滑播鉢(9~10型式)、内耳土器、カワラケ、土器播鉢	15世紀前半から後半まで	③-077
三輪ノ山第III遺跡	流山市	方形竪穴、土坑墓、火葬施設、溝	龍泉窯系青磁蓮弁文碗、瀬戸・美濃天目茶碗、白天目茶碗、播鉢(後IV新、大窯、6小期)、丸皿、灯明皿、餌入れ、徳利、肥前磁器染付碗、小杯、仏具、塀播鉢、内耳土器、土器播鉢、カワラケ、土器灯明具、瓦	15世紀半ばから19世紀まで	③-150
花前II-1遺跡	柏市	建物跡2、井戸2、流し溜3、土坑4、溝9、古道	肥前染付碗、皿、陶器鉢、瀬戸・美濃染付碗、陶器徳利、鉢、壺、塀播鉢、土瓶、急須、カワラケ、内耳土器、火鉢	18世紀後半から19世紀まで	③-078

匝瑳・海上・香取郡地域

遺跡名	市町名	遺構	遺物(土器、陶磁器)	時期	文献
内野遺跡	大栄町	土塁、空堀、溝、掘立柱建物、土坑	龍泉窯系青磁碗、白磁皿(IX類)、常滑壺(6a型式)、片口鉢I類(3、5、6a型式)、片口鉢II類(9型式)、古瀬戸天目茶碗(後期)、灰釉瓶子I類(前~中期)、折縁深皿(中IV)、灰釉平碗(後I)、緑釉小皿(後期)、カワラケ、内耳土器	13世紀後半から15世紀前半まで	③-154
篠本城跡	光町	堀、掘立柱建物、地下式坑、土坑、溝、墓坑群、井戸	龍泉窯系青磁碗(B1、D、E類)、椀花皿、盤、白磁皿(口禿、割高台、その他)、角杯、丸杯、天目茶碗、褐釉壺、粉青沙器、瀬戸緑釉小皿、緑釉狭口皿、平碗、天目茶碗、折縁中皿、節皿、折縁深皿、直縁大皿、節目付大皿、播鉢、袴腰形香炉、筒形香炉、水滴、合子、花瓶、瓶子、四耳壺、茶壺、志戸呂茶壺、播鉢、常滑壺(4~10型式)、壺、片口鉢、窪美壺、壺、瓦質香炉、火鉢、カワラケ、内耳土器、茶釜、土器播鉢、香炉	13世紀末から16世紀はじめで、15世紀中ごろ中心	④-130
神代夏方遺跡	東庄町	掘立柱建物、土坑、地下式坑、土坑墓、井戸、棚列、溝、竪穴状遺構	古瀬戸緑釉狭口皿(大1)、節皿、折縁皿(後II、III)、常滑壺(6b、7型式)、内耳土器、カワラケ、土釜	13世紀末から15世紀末まで、15世紀前半中心か	③-198
吉原三王遺跡	佐原市	土坑墓、地下式坑、溝、大形土坑	龍泉窯系青磁碗(I、I-5b類)、同安窯系青磁碗(I類)、青白磁梅瓶、青白磁合子、白磁皿(I類)、緑釉陶器壺(河南系)、古瀬戸瓶子(中期)、平碗(後I)、折縁三足盤(後III)、緑釉小皿(後III~IV)、天目茶碗、深皿、鉄釉仏花瓶、播鉢(後III)、常滑壺(6、8、9型式)、控鉢(8型式)、カワラケ、内耳土器、土釜、土師質台付皿	11世紀から16世紀まで	③-169
大六天遺跡	小見川町	掘立柱建物、棚列、道路、溝、土坑、土坑墓、火葬土坑、地下式坑	瀬戸・美濃緑釉小皿(後IV)、平碗(後II~III)、天目茶碗、折縁深皿(後III~IV)、播鉢(後III~IV)、碗形鉢、節皿(後II~III)、椀皿(大)、香炉(後III~IV)、尊形花瓶(後III~IV)、常滑壺(5、6、8~11型式)、控鉢、カワラケ、内耳土器、瓦質火鉢、風炉	13世紀から16世紀まで、14世紀後半から15世紀中心	③-238
大堺・塔ノ前遺跡	八日市場市	土坑、ピット、溝	古瀬戸瓶子(中期前半)、天目茶碗(大2、近世)、白天目茶碗(3小期)、カワラケ、内耳土器、瓦質土釜、火鉢、椀皿(大2、3、4)、灰釉皿(大1か2)、肥前染付丸碗、筒形碗、広東茶碗、瀬戸・美濃陶器御室茶碗、灯明皿、香炉、片口鉢、徳利、播鉢	14世紀前半から18世紀末まで	③-258
馬洗城跡	大栄町	土塁、空堀、掘立柱建物、土坑、地下式坑、火葬施設、墓坑	染付輪花皿、瀬戸・美濃天目茶碗、灰釉丸皿、播鉢、志野皿、常滑壺、カワラケ、土器播鉢、内耳土器	16世紀から17世紀前半	③-160
綱原屋敷跡遺跡	佐原市	牧捕込、掘立柱建物、粘土敷き土坑、地下式坑、土坑	瀬戸・美濃鉄釉椀皿(大)、カワラケ、内耳土器、土器播鉢、瓦質火鉢	15世紀から16世紀	③-186
久井崎城跡	大栄町	掘立柱建物、土坑、溝、地下式坑	白磁、染付、瀬戸・美濃天目茶碗、緑釉小皿、丸皿、菊皿、折縁皿、志野丸皿、播鉢、常滑壺、壺、控鉢、カワラケ	15世紀末から17世紀前半で、16世紀代中心	①-091
高岡陣屋跡	下総町	池、木燵、掘立柱建物、土坑	肥前磁器碗、皿、鉢、水滴、そば猪口、蓋、仏飯具、花瓶、肥前陶器皿、瀬戸・美濃磁器碗、皿、蓋、急須、白磁皿、小碗、瀬戸・美濃陶器碗、皿、鉢、香炉、徳利、播鉢、植木鉢、壺、灯明具、相馬土瓶、益子播鉢、志戸呂灯明具、信楽系燗徳利、灯明具、塀播鉢、土器火鉢、植木鉢、香炉、内耳土器、カワラケ、焼塩壺、瓦、中国徳化窯白磁碗、景德鎮窯散蓮華、ヨーロッパ陶器	18世紀後半から19世紀後半以降まで、19世紀代中心	③-294

相馬郡地域

遺跡名	市町名	遺構	遺物(土器、陶磁器)	時期	文献
守谷城跡	茨城県守谷町	掘立柱建物、土坑、ピット、盛土土築遺構、地下式坑、竪穴状遺構、粘土敷き土坑、溝	染付碗(C群、その他)、染付皿(B1群、その他)、白磁(皿C1群)、華南瀾璃釉小皿、瀬戸・美濃天目茶碗、端反皿(大1)、緑釉狭口皿(大窯)、播鉢(大1、2、3、その他)、四耳壺、常滑壺(6、10、11、12型式)、志野角形鉢、鉄絵志野丸碗、志野皿、唐津大鉢、カワラケ、播鉢、内耳土器	15世紀末から17世紀中葉まで、16世紀半ばから17世紀前葉中心	③-265

第4節 土器編年

ここでは、各器種ごとの編年観をまとめてみる。なお、編年図中のカワラケの縮尺は1/4、それ以外は1/8とした。

(1) カワラケ (第243～250図)

中世前半については笹生氏の編年を軸に、さらに同一系譜上にある器形と判断されるものについては、形態変化を類推して時期決定した。なお、県内のカワラケは基本的にロクロを使用している^り。

まず基準となる地域として、安房・上総・市原地域を見てみよう。13世紀後半のカワラケは大小2形態あり、底部が突出し、口径対底径の比が大きく、内湾する体部が口縁端で外反する特徴を持つ。14世紀前半には底部突出が小さくなり、外反も弱くなる(笹生B類からC類への変化)。この間の様相は鎌倉に似ており、鎌倉の強い影響を受けているといわれている^{②-211、⑤-058}。この時期県下全域でカワラケに大きな相違点は見られず、単純な大小2形態の組み合わせから構成される。

14世紀後半になると、全体に厚手で、体部が内湾する器形に漸次変化する(笹生D類)。このころから大型カワラケと小型カワラケが、それぞれさらに大小2形態に分化するようである。15世紀前半には体部が直線的に立ち上がり、口縁端がやや肥厚し、15世紀後半には全体に小型化する。

15世紀後半から末にかけては、主体が皿形の器形へと大きく変化する時期である。初めは古代の杯を彷彿とさせるやや器高が高め、直線的な体部で、口径が比較的小さい箱形のものであったが、16世紀には次第に扁平化し、また口縁端が外反し始める。いわゆる「外反皿形」が顕著になっていく。

印旛・千葉市域も、細部には若干の相違があるものの基本的な流れは一致する。一方、14世紀後半から15世紀代の山武・長生・夷隅地域のカワラケは、内面に特徴ある稜をもつ(第244図5、6、8)。この稜線の位置が口縁から底面方向へと次第に下がるにつれ、薄型、扁平、直線的な立ち上がりへと変化するように見受けられる。15世紀末から16世紀初頭には一宮城城ノ内遺跡で見られるような、厚手で器高が高く、体部立ち上がりが急な小型のものが登場する(第244図10、11)。16世紀には県内各地域でこのような形態が見られるようになる。外反皿形とともにこの時期を特徴づけるものである。また、香取・海上・匝瑳地域では、16世紀に至っても皿形形態は少なく、15世紀代から通じて器高の高く、口径対底径の比が大きい体部が直線的な器形が主流で、これは、香取の海対岸の鹿島神宮周辺でも同様な傾向にあり、一つの流通圏を形成していたと考えられる。12世紀後半以来、香取の海に面した津に集住した海夫を支配下に置いた香取神宮と、香取神宮から交通上の特権を保証された海夫により、積極的な商品流通が行われていた傍証^{⑤-032}の一つとなろう。一方、最も解かりにくいのが東葛飾地域である。資料的制約があり、現段階ではほとんどが15世紀でも後半以降の土器であるとしておく。県内の他地域でも、この時期には様々な形態が見られ、戦国末期の混沌とした状況を顕著に現している。

それでは、その他の15世紀後半から16世紀代の、他地域の土器・陶器を模倣したと見られる遺物を見てみよう。

まず、15世紀末から16世紀初頭の市原・千葉・印旛地域で見られる、大型で体部立ち上がりの直線的なカワラケ(第243図19、20他)は、南部系山茶碗尾張型11型式(古瀬戸編年後IV平行)に酷似していると考^{⑤-060}えている。ただし、形態は非常に似ているものの、県内では山茶碗の出土量は微々たるもので、大きさも

カワラケが口径17.9cm、器高4.5cmと、山茶碗に比べてかなり大きい。同じように、瀬戸・美濃産陶器と器形が似ているものには、臼井城で出土している底径が小さく厚手で、体部が内湾気味に開き、口縁端で大きく外反する形態（第246図17）があり、瀬戸・美濃大窯1段階の縁袖挟み皿に酷似していると思われる。^{⑤-060}本来この器形は13世紀末から14世紀初頭のカワラケの特徴に近いが、遺跡の時期から見て、以上のように判断した。

16世紀後半の本佐倉城跡の体部内面に沈線を持つ扁平の皿形（第246図22）は、小田原後北条氏の強い影響を受けているといわれる²⁾。これは小田原編年II a 期新段階（16世紀第2～3 四半期）に登場する手づくねカワラケを模倣したロクロカワラケである。千葉氏は、弘治3年（1557）に六代城主親胤が暗殺されると、後北条氏の影響下に置かれ、さらに天正13年（1585）に八代城主邦胤が殺害されると、後北条氏が軍事介入し千葉氏を支配下に置き、邦胤の子重胤は人質として小田原城に送られた。当時後北条氏と密接な関係にあった千葉氏の本城ならではの遺物といえる。

また、15世紀末から16世紀代に見られる、扁平で、口径対底径の比が大きく、底部が突出し、体部が内湾する形態（第249図6～9 他）は、東葛、印旛、千葉市、守谷城跡で見られる形態で、茨城南部からそれに接する東葛、印旛地域に特徴的な形態である。土浦城櫓門出土カワラケ（17世紀中葉）の系譜上にあり、^{⑤-017}茨城県南部では17世紀には主体となる器形であると考えられる。その他、印旛地域に見られる底部が極めて薄手で、体部内面が緩やかに外反するカワラケ（第247図8）も、石岡市外城遺跡で同形態が出土しており、分布域に共通点が見られる。

16世紀末から17世紀前半は、カワラケのみならず、陶磁器全体の出土量が激減し、空白の期間となっている。特徴的なのは、遺物が少ない時期にあって、その中で目に付くのが瀬戸・美濃産志野皿である。小田原城では同時期にカワラケが極端に減少し、灯明皿には志野皿を使用しているという。千葉県も同様な傾向であったろう。

17世紀半ばから18世紀にかけてのカワラケとしては、古宿・上谷遺跡出土の皿形カワラケがあげられる（第250図8）。これと同形態のものは、隣接する洞谷台遺跡（未掲載）、長倉宮脇遺跡でも出土している。この器形の大きな特徴は、底部内面中央と内面立ち上がり部が帯状に窪むこと。短い体部立ち上がりが大きく内湾し、逆に体部が緩やかに外反すること。加えて回転糸切りによる切り離し面が体部立ち上がり面より著しく内側に位置し、その切り離し面と体部との間に明瞭な凹部が見られるということである。以後皿形では、同様な痕跡が見られるものが増える。

一方、同時期に全く異なる、いわば杯形と呼べる、肉厚で、口径と底径の比が著しく小さいカワラケが存在する。山武地域の山中台遺跡で出土している（第250図3、4）が、この祖形を真里谷城跡・大多喜城跡・久留里城跡及び館山城跡（未掲載）出土カワラケに求めたい（第243図23、24、第244図12、13、第250図1、2）。大多喜城跡・久留里城跡出土カワラケの時期は、資料不足から限定できず、16世紀後半から17世紀前半の中で考えている。また、館山城跡出土カワラケは里見氏の居住した16世紀末から17世紀初頭を中心としたものであろうか。ただ、おそらく、江戸遺跡で「下総」タイプとした範疇に入るものであろう。

同様に、杯形と呼べるやや大振りな器形（第250図5、6）も、古宿・上谷遺跡、上宿遺跡で出土している。この祖形をどれに求めるかは、やはり資料が少ないので難しいが、強いて言えば、山武地域から香取・匝瑳・海上地域に見られる中世の主体となる器形（例えば第248図12）に求めることができるかもしれない。

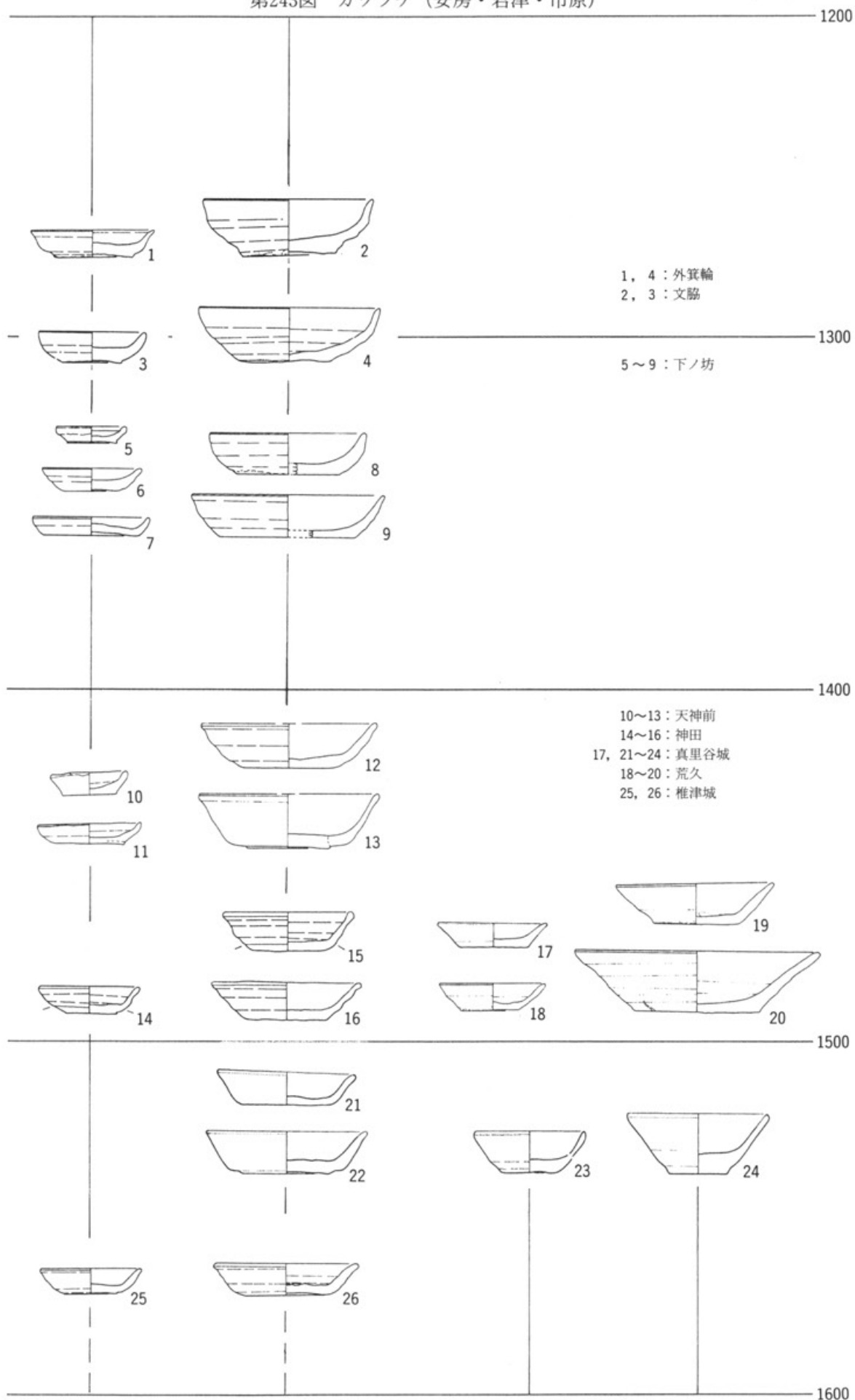
ところが、18世紀後半から末にかけて、形態的に江戸カワラケと全く同一のものが出現する（第250図9、

10)。それまでも、基本的に形態的には江戸カワラケと同じ皿形ではあったが、砂分を多く含み、器面がザラザラした感触で、褐色主体の発色であった(上宿遺跡)。新しいカワラケは薄手で、規格性に富み、胎土も比較的精選され、やや赤みを帯びた発色の江戸カワラケそのものと言える。

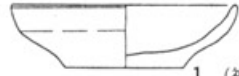
19世紀半ばには、大型の胞衣カワラケが、富津陣屋跡や佐倉市曲輪ノ内遺跡で出土している(第250図13、14)。また同じ曲輪ノ内遺跡では、江戸カワラケ以外に厚手の在地産カワラケも出土している(第250図12)。18世紀後半以降江戸カワラケが主体となるようだが、在地産カワラケも生産され続けている状況がわかる。

注

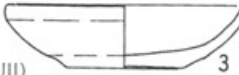
- 1) 名称については「かわらけ」、「カワラケ」、「土師質土器」、「土師質土器皿」、「土師質皿」など、研究者により異なる。また、細部の器形でも「杯形」、「椀形」、「皿形」などと区別していることが見られる。本編では特に積極的根拠はないが、「カワラケ」の名称を用いることとし、随時「杯形」、「椀形」、「皿形」を用いたが、杯形と椀形の区分は必ずしも明瞭ではない。
- 2) 小野正敏氏の御教示



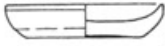
1200



1 (神田山第Ⅲ)



3 (岩川)

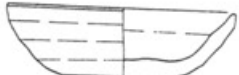


2 (岩川)

1300

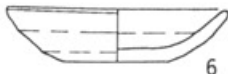


4 (神田山第Ⅲ)

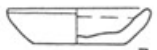


5 (神田山第Ⅲ)

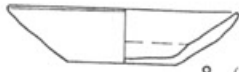
1400



6 (神田山第Ⅲ)

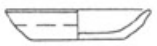


7 (神田山第Ⅲ)



8 (神田山第Ⅲ)

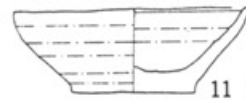
1500



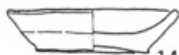
9 (大多喜城)



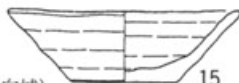
10 (一宮城)



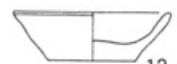
11 (一宮城)



14 (田向城)



15 (田向城)

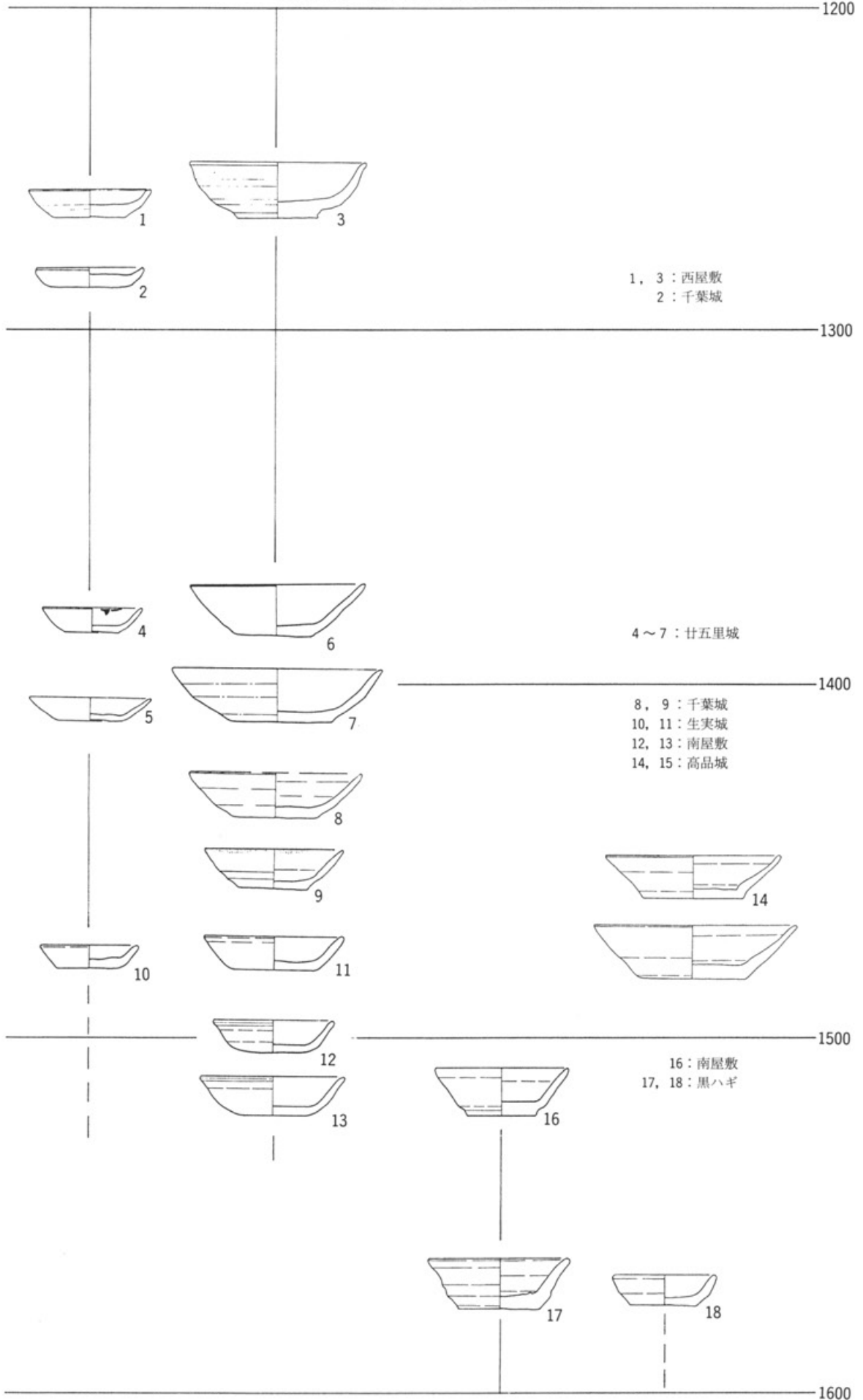


12 (大多喜城)



13 (大多喜城)

1600



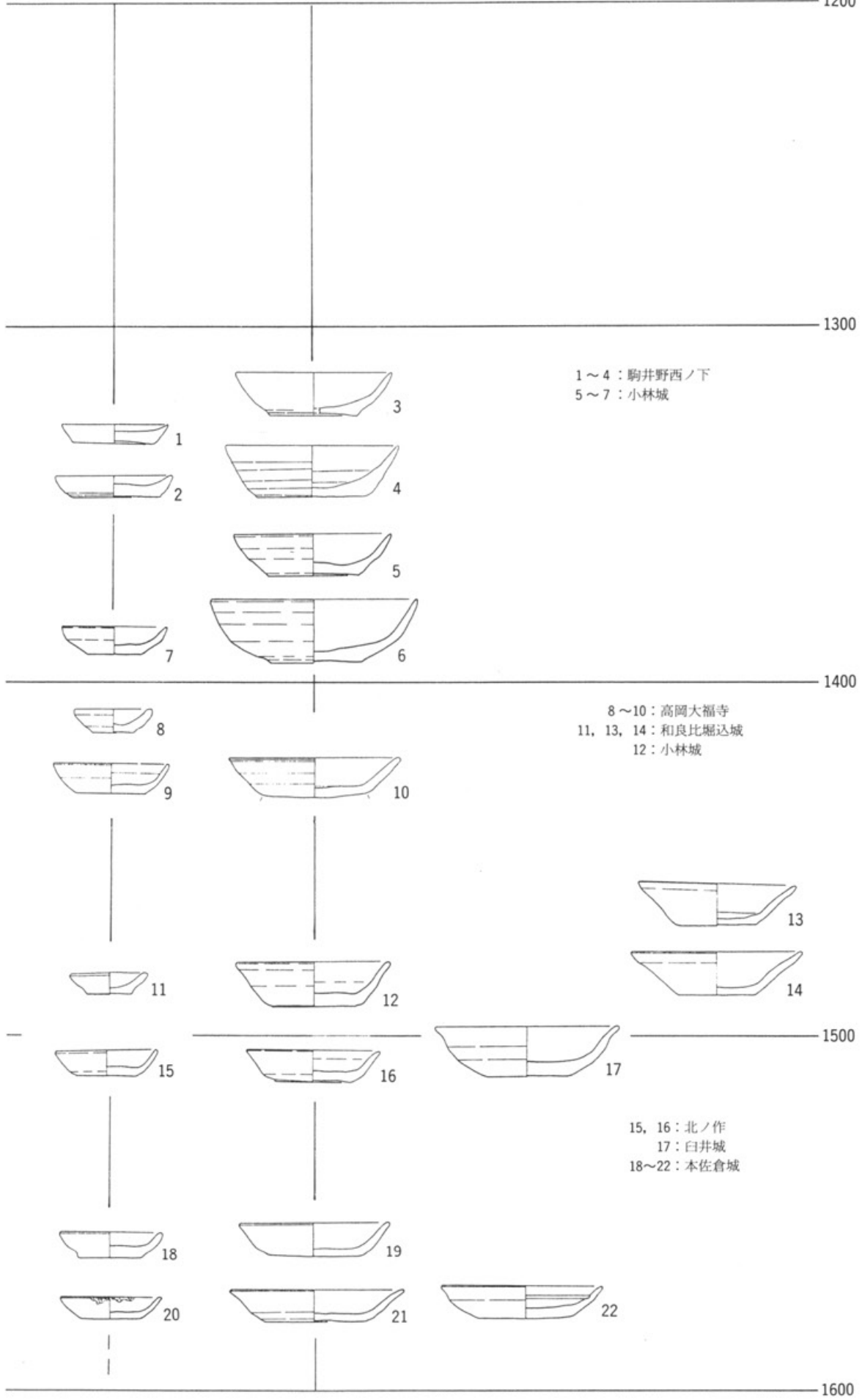
1200

1300

1400

1500

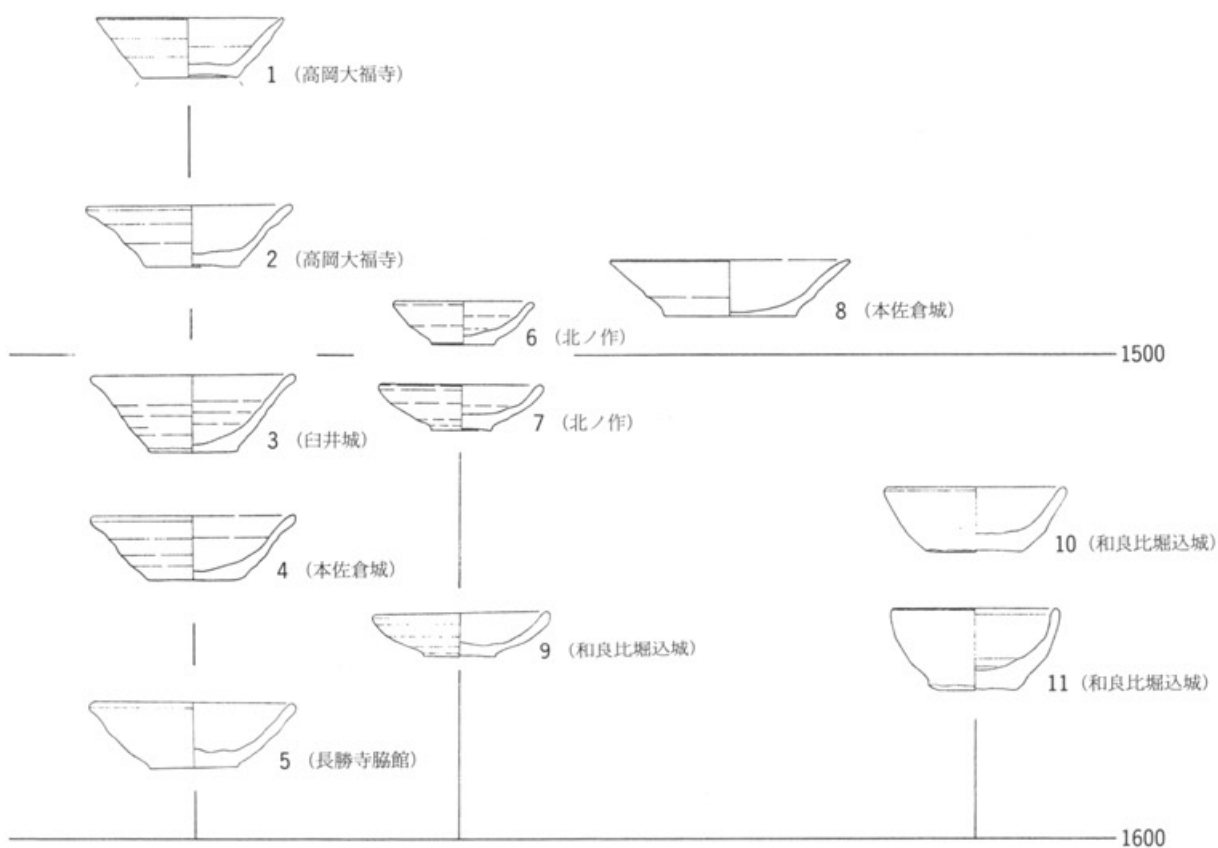
1600



1200

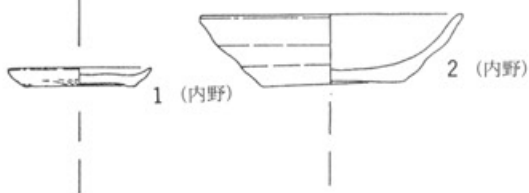
1300

1400



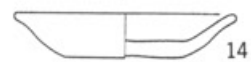
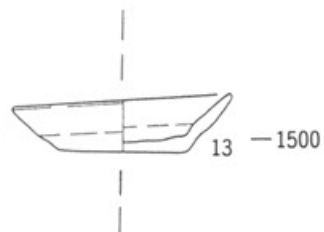
1200

1300



1400

- 3, 4 : 篠本城
- 5, 6 : 神代夏方
- 7, 9 : 馬洗城
- 8, 14 : 大塚・塔ノ前
- 10, 13 : 綱原屋敷
- 11, 12 : 久井崎城

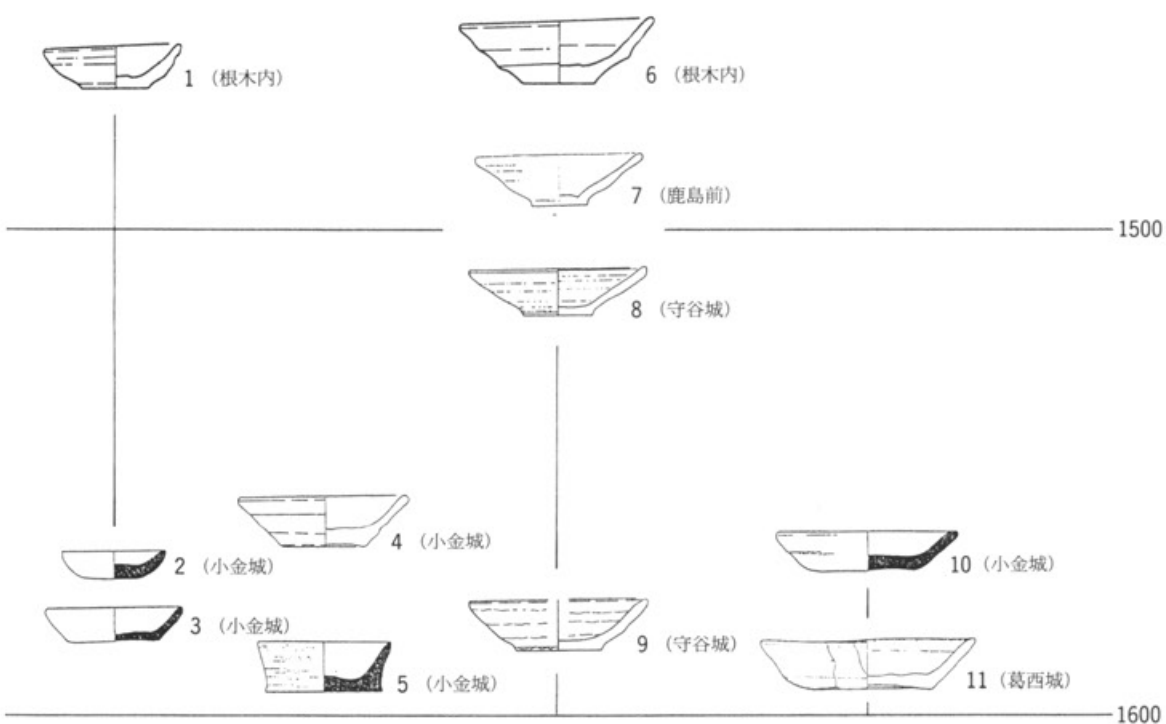


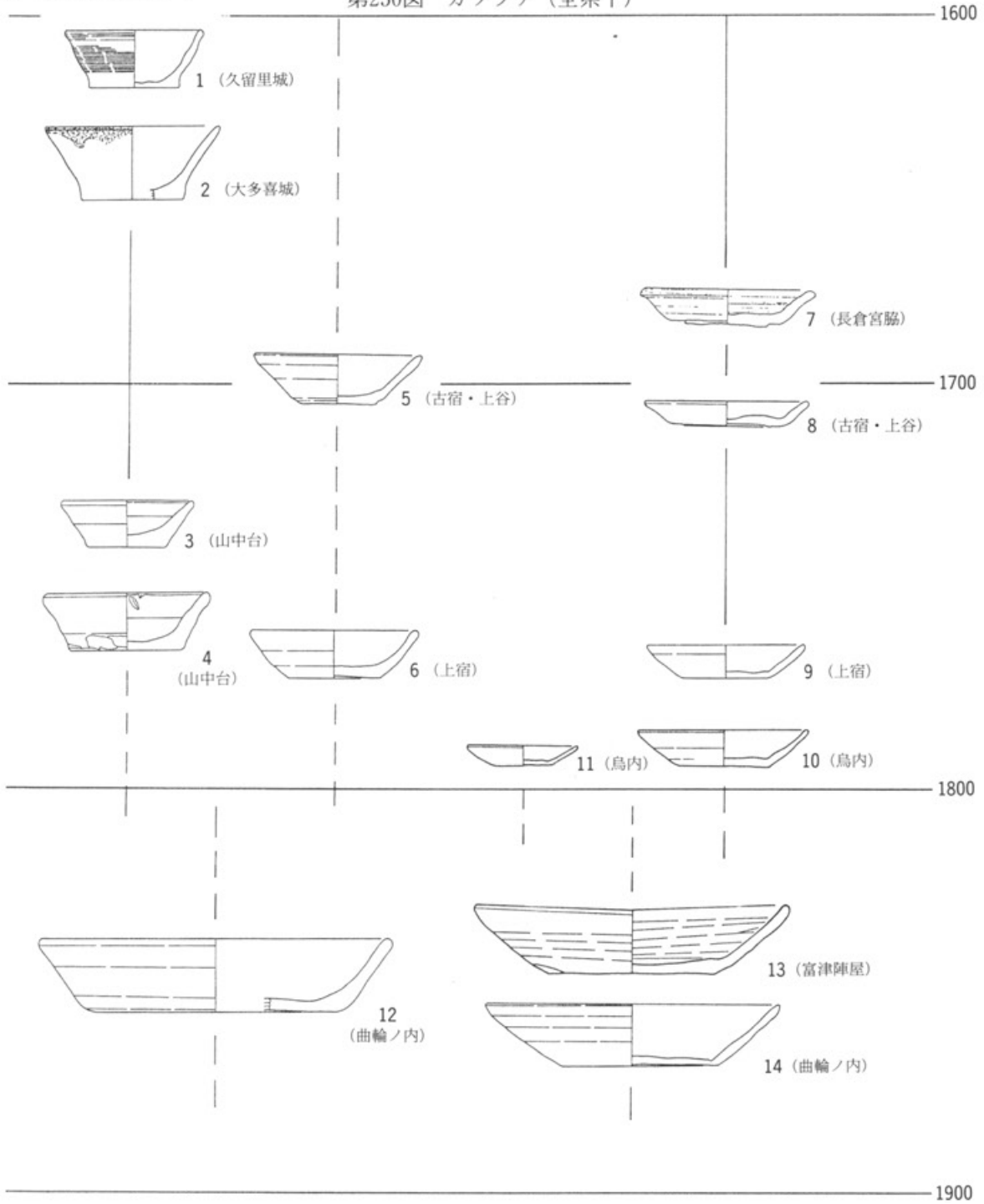
1600

1200

1300

1400





(2) 内耳土器と土釜 (第251～254、256～259図)

内耳土器は、中世には内耳(土鍋)、近世には焙烙と概ね区別しているようであるが、器形に限って言えば明確な分類の規定はない。とりあえず、口径に比べて器高がある程度高いものを内耳(土)鍋としているようである。ただ、内耳(土)鍋は本来煮炊具の範疇で捉えるべきものであり、炒ったり、蒸したりする焙烙とはその使用方法が全く異なる。

中世印旛地域の内耳土器の変化を見ると、口径と底径の比が小さく、器高が高く、内耳接合部下端から口縁部にかけて体部が大きく「く」の字状に外折するもの(第260図参、両角A群I類)から、次第に外折が無くなり、器高が低く、口径と底径の比が大きくなるものへと変化していくのが分かる。この古い形態の初現については、土器摺鉢の出現とほぼ軌を一にすると考えられる。また、この初期形態が鉄鍋のコピーとする点は、既に言われているところである。^{⑤-016,026}

中世末期の15世紀末から16世紀にかけては、体部が内湾し始める(両角A群II類)のが大きな特徴で、16世紀初めには北ノ作遺跡、和良比堀込城跡や池ノ尻遺跡で見られるような、口径の極端に大きな鉢形(第253図7他)も出現する。千葉市内も同様な推移を見せる。香取・海上・匝瑳地域では15世紀代から器高の低い資料が見られ、16世紀にかけて出土する。その中で、体部にハケ目やヘラケズリを施す地域色豊かなものが見られる。一方で、上総地域は16世紀代のものはほとんど見られない。この内耳土器と後述する土器摺鉢の分布域は、東京湾岸が袖ヶ浦市(小櫃川流域)以北、太平洋側が山武郡北部(木戸川上流域)以北に限られる。

佐倉城跡で土鍋型としたI類(第253図10)の特徴は低い器高と外反する体部、摘み出される口縁端と、大きな口径に現れるが、内耳の形が極めて特徴的であり、同時期の長勝寺脇館出土のもの(第253図6)とは異なる系譜のものであろう。

近世の内耳土器はどうであろうか。千葉県内の内耳土器の変遷は大略、佐倉城分類で理解することができる。すなわち17世紀半ばから18世紀半ばにかけては、平底で、口径と底径の比が次第に小さくなる。内耳は基本的に1対2の3耳で、細い紐状、内耳接合部の体部外面への突出も次第に消える。18世紀半ば以降それまで器高が低くなる傾向にあったものが、丸底へ転換すると共に、逆に、高く変化していく。また、口径も小さくなり、18世紀後半代の内耳は、団子状のがっしりした感じのものが多い。19世紀になるとその内耳もなくなり、さらに小型・高い器高のものに変わっていく(第256図)。

同じ、佐倉藩領の農村部でも、18世紀半ば以降丸底の内耳土器が現れる。南広遺跡(第257図1～3)のものは佐倉城跡V類に非常に良く似ている。これより以前については、資料が無く不明である。この傾向は上総でも全く同じである。この器形には東金市前畑遺跡(未刊行)のように2対2の4耳が見られる。ところで、同じ佐倉城下の弥勒東台遺跡に見られる平底形態(第257図5、6)は、佐倉城跡のものとは全く異なる系譜のもので、上野・北武蔵型に近いと考えられる。また、大六天遺跡で見られる平底の内耳土器(第257図4)についても同様に考えられる。さらに佐倉城跡と異なるものとしては、19世紀代に見られる内耳のない丸底・扁平で、体部が短く大きく内湾する形態(第258図10、11他)は、上総・香取地域など県内でもかなり広域に見られ、この点では、この時期むしろ佐倉城が特殊であったのかもしれない。19世紀前半にはすでに建築されていた佐倉武家屋敷(旧河原家、旧但馬家、旧武居家)には囲炉裏がなく、また竈も木製の台に置く2連式の小型移動式のものである。一方、下総の農家では座敷に囲炉裏を設けた例が多いが、新しい時期には「かって」につくるものが多くなる傾向にあるという。また、土間には竈を施

設するが、竈も頻繁に改善されており、当時の様子は明確にはできない¹⁾。佐倉城武家屋敷跡の特殊性は、こういった住居構造を反映しているかもしれない。その他、19世紀中葉の富津陣屋の口縁端上部に耳を付けるタイプも存在するが、県外からの搬入品の可能性が高い。

藤尾氏が指摘した平底(Ⅲ類)から丸底(Ⅳ類)への変化は、両角氏の平底(C群Ⅳ類)から丸底(C群Ⅴ類)への形態変化に相当する。弥勒東台遺跡出土焙烙には、平底でC群Ⅳ類のものと、丸平底の藤尾分類Ⅴ類が見られる。このⅤ類は体部が肉厚で緩やかに外反し、ロクロでナデられ、底部との接合部がヘラ削りされていて、両角分類のC群Ⅴ類とはやや異なる。また、口径と底径の比が著しく小さく、帯状の耳が体部上面から底面へ延びる平底形態が出土しているが、これは上野・北武蔵の系統に近いと思われる。上宿遺跡では大半が、藤尾分類のⅤ類である。高岡陣屋跡ではC群Ⅳ類とC群Ⅵ類が出土している。

一方、江戸遺跡に近い東葛飾地域はどうであろうか。柴又帝釈天遺跡では、平底で、体部から口縁部にかけて比較的直に立ち上がる、雲母を多量に含む内耳土器(両角B群Ⅲ類a)が出土しており、16世紀末のもので、江戸在地系焙烙の祖形とされている(第259図6)。また、続く17世紀初頭には底部の垂れた丸底土器(両角B群Ⅲ類b)へと変化して行き(第259図7)、この間概ね江戸の動きと一致する。しかし、葛飾区に接する千葉県東葛飾地域では17世紀半ば以降18世紀前半にかけて、佐倉城跡でⅡ類・Ⅲ類とされる内耳土器が登場する(第259図1、2)ものの、18世紀半ば以降、いわゆる上野・北武蔵型の平底形態に移行し、19世紀半ばまで推移する(第259図3～5)。

これに関連して、白田正子氏は茨城県内の中世末から近世にかけての内耳土器の集成の中で、茨城県も佐倉城跡と同様に18世紀の中葉から19世紀初頭に、平底から丸底への転換を予想し、また、茨城県西部では上野・北武蔵型の系譜のものが存在することを明らかにした^{⑤-068}。これに対応するように、東京都東部や埼玉県東部、茨城県西部と隣接する花前Ⅱ-1遺跡、三輪野山Ⅲ遺跡、鹿島前遺跡に平底形態が見られるのである。さらに、内陸の弥勒東台遺跡や利根川下流の大六天遺跡の資料は、近世の利根川通運を通じてもたらされたものであろう。

以上から、東葛飾地域は、常総型と言われる平底から18世紀半ば以降上野・北武蔵型の平底に転換し、東葛飾地域を除く千葉県内では、18世紀半ば以降に、平底から丸底に転換していったものと考えられる。

土釜は、出土量の少ない器種である。千葉県の資料を集成すると、分布にある程度の偏在性が見出せる。県内では篠本城跡、吉原三王遺跡、大塚・塔ノ前遺跡、本佐倉北大堀遺跡など匝瑳から香取、印旛地域に見られる。個体数が少ないので、明言できないが、酒々井町本佐倉大堀遺跡出土の土釜(供伴遺跡から16世紀末から17世紀初頭と思われる)は、器高は低くなっており、形態変化としては新しいものほど扁平化していくと考えられる²⁾。八日市場市大塚・塔ノ前遺跡では、体部中央に鏝を持つ瓦質のものが出土している。印旛を除き東総から香取地域は土器播鉢の少ない地域である。土釜の出土量が多いことと対称的である。

また、本来土釜は陶器製茶釜をコピーしたものであり、風炉とセットをなす。当然、用途が同じであればこの風炉が発見されるべきであろうが、ほとんど確認されていない。

注

- 1) 文献⑤-012によると、佐倉の武家屋敷では土間が狭く、竈はたいてい木箱の上に土で築いた2口のものや板の間に置いていた。流しは板の間に置いた高さの低いもので、床に膝をついて使っていた。農家

では大勢の人々を呼び、共に食べて歌うことが、村人の共同生活に大きな意味を持っていた。しかし、武家住宅では大規模な寄合は行なわれなかった。居住習俗の違いが、農家と武家住宅の構造に大きな違いをもたらしたと考えられる。

2) 木内達彦氏のご厚意により、実見させていただいた。

(3) 土器擂鉢 (第251~253、255図)

土器擂鉢には、土師質と瓦質があり、また、両者の中間的などちらともとれるようなものもある。瓦質擂鉢は基本的に炭素を器面に吸着させたものであり、土師質のものに比べて、焼成工程に燻す工程が加わり、経費的・時間的にコストがかかると思われる。

15世紀前半から後葉の土器を出土する小林城跡や、木更津市笹子城跡、田向城跡、池ノ尻館跡をはじめ、県内の同時期の主要城館には普遍的に見られる。土師質もあるが大半が瓦質である。また、初期のころから卸目をもつのも大きな特徴である。この土器擂鉢が瀬戸産擂鉢のコピーであれば、当時の瀬戸産擂鉢が光沢のない暗黒褐色や黒色の錆釉(鬼板)を掛けていたことを考慮に入れると、瓦質化により色彩までもコピーしようとしたことは想像に難くない。

大橋康二氏は、池ノ尻館跡の擂鉢の多くが、口縁端の上面に溝を有していて、これが瀬戸産擂鉢に非常によく似ていると指摘している。おそらくここでいう「瀬戸系擂鉢」とは、藤沢分類の擂鉢Ⅰ類と考えられる。大橋氏のいうように、土器擂鉢の出現に当たっては、この陶器擂鉢が手本となったであろう。

土器擂鉢の初現については、次のように考えたい。すなわち古瀬戸後期後半(15世紀中葉)頃、愛知県瀬戸市域で窯数が減少する一方、東美濃・三河・遠江では新たに古瀬戸系の施釉陶器生産が行われ、生産流通体制が再編成された。^{⑤-052}この時期に最も流通した器種が擂鉢である。この窯で生産された卸目を持つ擂鉢が千葉県内でも流通するようになると、その擂鉢をモデルとしたコピー商品である瓦質や土師質の土器擂鉢が生産され、流通するようになる。陶器、土器両者間の出土量の比率は不明確ながら、一定量流通するようである。陶器に比べ軟質で、質的に劣ると考えられる土器擂鉢が流通した理由の一つには、陶器に比べ大量に流通し、しかも安価だったことが考えられる。

これより以前、擂鉢は15世紀半ば(片口鉢Ⅱ類9型式前後)まで、卸目を持たない無釉の焼き締め陶器である常滑産のものが、千葉県ではほぼ独占状態を示していた。

土器擂鉢は香取地域では15世紀には確認できず、16世紀とされる綱原屋敷跡遺跡に見えるのみである。また、上総では15世紀代のみで、16世紀には内耳土器共々見られなくなる。したがって、印旛・千葉地域を中心とした明らかな偏在性を見出すことができる。

16世紀後半の主要城館である本佐倉城跡、長勝寺脇館跡などでも、瀬戸・美濃産擂鉢に比較した量は不明であるが、出土報告が認められる¹⁾。

15世紀から16世紀始めまで、年代によりモデルである瀬戸・美濃産擂鉢は口縁形態を大きく変化させるが、土器擂鉢には口縁部に明瞭な特徴ある形態変化が見られない。強いて言えば、瀬戸・美濃産擂鉢が器高が低く扁平化していくので、相対的に土器擂鉢もそのように変化するであろうか。また、大きさか見ると、16世紀初めに大型化したものが現れるようである。この時期のこういった変化は、内耳土器にも見られるようである。中でも体部が緩やかに外反し、口縁端が内面方向に大きく摘み出されるものは、皆比較的新しいようで、瀬戸・美濃産擂鉢口縁や常滑産擂鉢口縁にも見られる特徴である。

16世紀末から17世紀前半については極めて資料が乏しいが、葛飾区柴又帝釈天遺跡出土遺物には、極少量ではあるが土器播鉢片と瀬戸・美濃産播鉢が供伴して出土している。また、守谷城跡B区では、瀬戸・美濃大窯産播鉢や美濃産志野皿・志野織部向付など、16世紀から17世紀前半までの資料が出土しているが、ここでも瀬戸・美濃産播鉢と土師質の土器播鉢が供伴している。ここで出土する土器播鉢は底部から口縁端まで器厚が一定で、わずかに口縁端が肥大化するもので、茨城県の南部に見られる同時期の土器播鉢と同じ特徴をもつ。

しかし、遅くとも17世紀後半以降には、土器播鉢はほとんど出土しなくなる。古宿・上谷遺跡では、出土しているのはわずかに破片1点のみである。逆にこの時期には、丹波産の陶器播鉢が流通するようになる。東金市前畑遺跡では、県内随一と思われる量の丹波産播鉢が出土しており、千葉県のみならず、江戸周辺でも同じ様な傾向を示す。18世紀代には堺産、瀬戸・美濃産の陶器播鉢が市場を独占する。従って、千葉県内の土器播鉢は15世紀中葉以降、生産・流通しはじめ、瞬く間に広まり、県内各地に一定量供給され、16世紀始めにかけて最盛期を迎えるが、その後急速に減少し、遅くとも17世紀の前半以前には、ほとんど衰退してしまったものと考えられる。

下総国の様子は以上のようなものであるが、江戸遺跡の場合は在地産の土器播鉢が存在せず、すべて陶器播鉢で占められ、対照的である。17世紀前半の江戸遺跡では最も古い一括資料が、丹波、備前、瀬戸・美濃産で占められる。

一方、17世紀中葉で廃絶した茨城県つくば市古屋敷遺跡第11号溝で、土器播鉢が一定量出土している。^{③-300}瀬戸・美濃産陶器播鉢に比べて優位であるようにも見受けられる。同時期の城館跡の同県北浦村古屋敷遺跡^{③-177}で、やはり瀬戸・美濃産播鉢と土師質の播鉢が出土している。このように、茨城県南部には、17世紀半ば以降比較的遅くまで、土器播鉢が残るようである。

また、質的に見た場合、当初瓦質が主体であったと考えられる土器播鉢は、次第に陶器播鉢に駆逐され、その中で、コストと時間をかけてまで瓦質である意味が失われ、工程の単純な土師質へと変化し、さらに生産が衰退していったものと思われる。

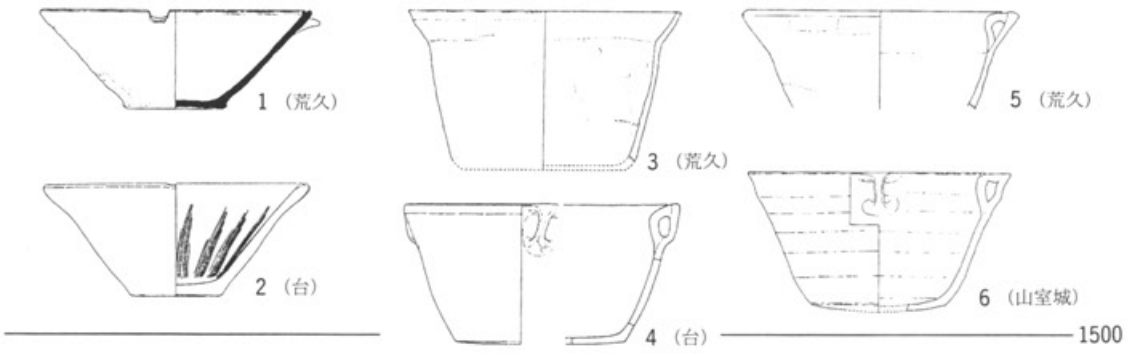
在地産土器の流通圏が生産地周辺に求められるならば、この現象から17世紀前葉から中葉頃まで茨城県南部に、この焼成窯があり、生産されていたことが考えられるであろう。したがって、茨城県南部に接する地域（特に東葛から印旛地域）では、千葉県内であっても、17世紀前葉を中心に、一定量の土器播鉢が出土する可能性がある。それは陶器播鉢の出土量と表裏一体の関係にある。

注

- 1) ただし、資料提示したものは16世紀前半以前となる可能性がある。

第251図 内耳土器・土器摺鉢（上総）

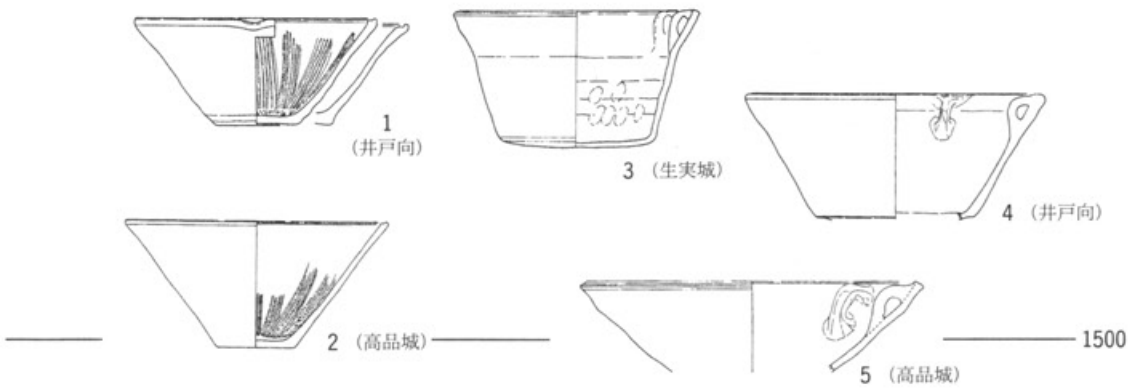
1400



1600

第252図 内耳土器・土器摺鉢（千葉・八千代・東葛飾）

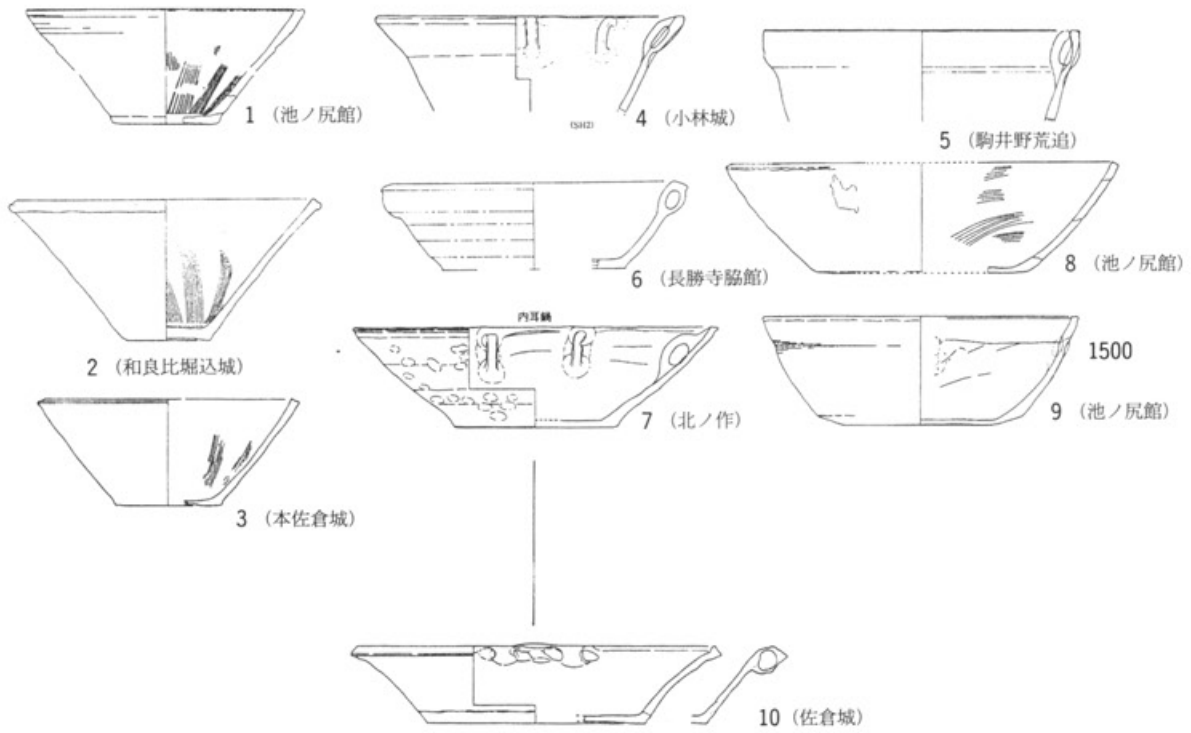
1400



1600

第253図 内耳土器・土器挿鉢（印旛）

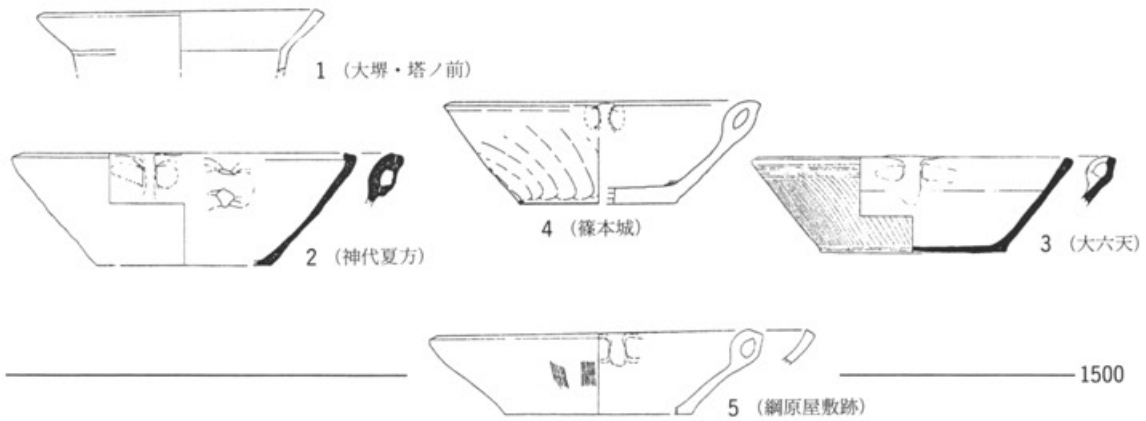
1400



1600

第254図 内耳土器（香取・海上・匝瑳）

1400

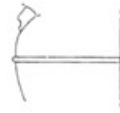
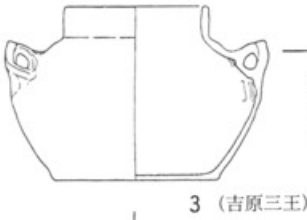
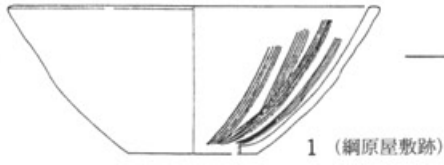
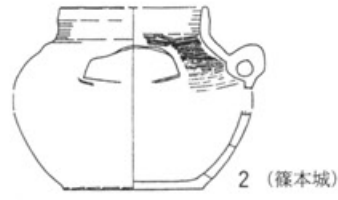


1500

1600

第255図 土器擂鉢・土釜（香取・海上・匝瑳）

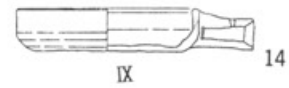
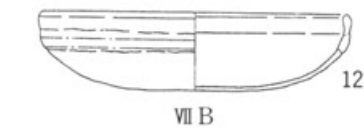
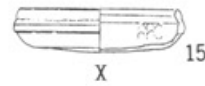
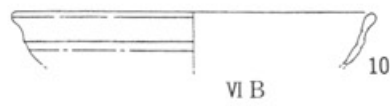
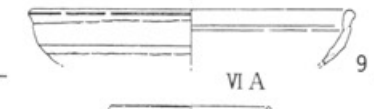
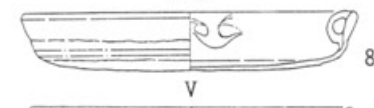
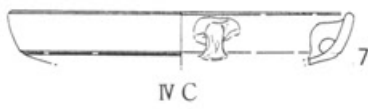
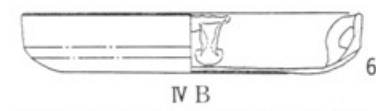
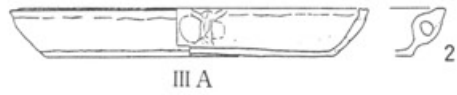
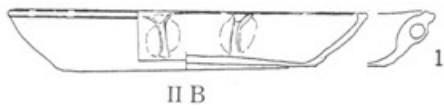
1400



4 (大堺・塔ノ前)

1500

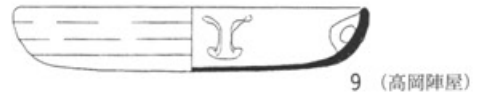
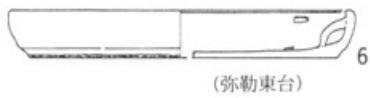
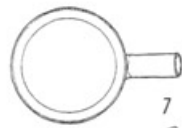
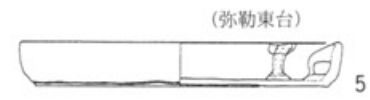
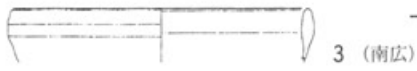
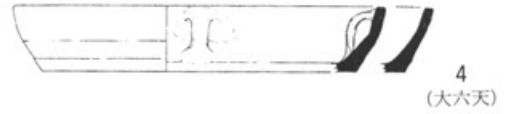
1600

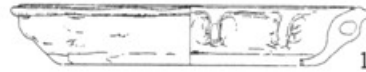


1700

1800

1900





1 (山中台)

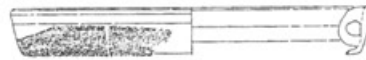
1700



4
(野乃間古墳)



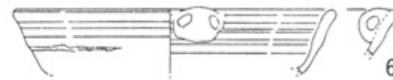
5
(野乃間古墳)



2 (村上)



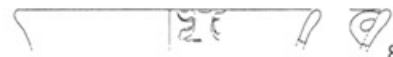
3 (村上)



6 (上宿)



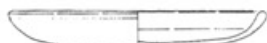
7 (上宿)



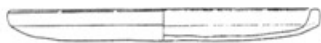
8 (上宿)



9 (富津陣屋)



10 (飯野陣屋)

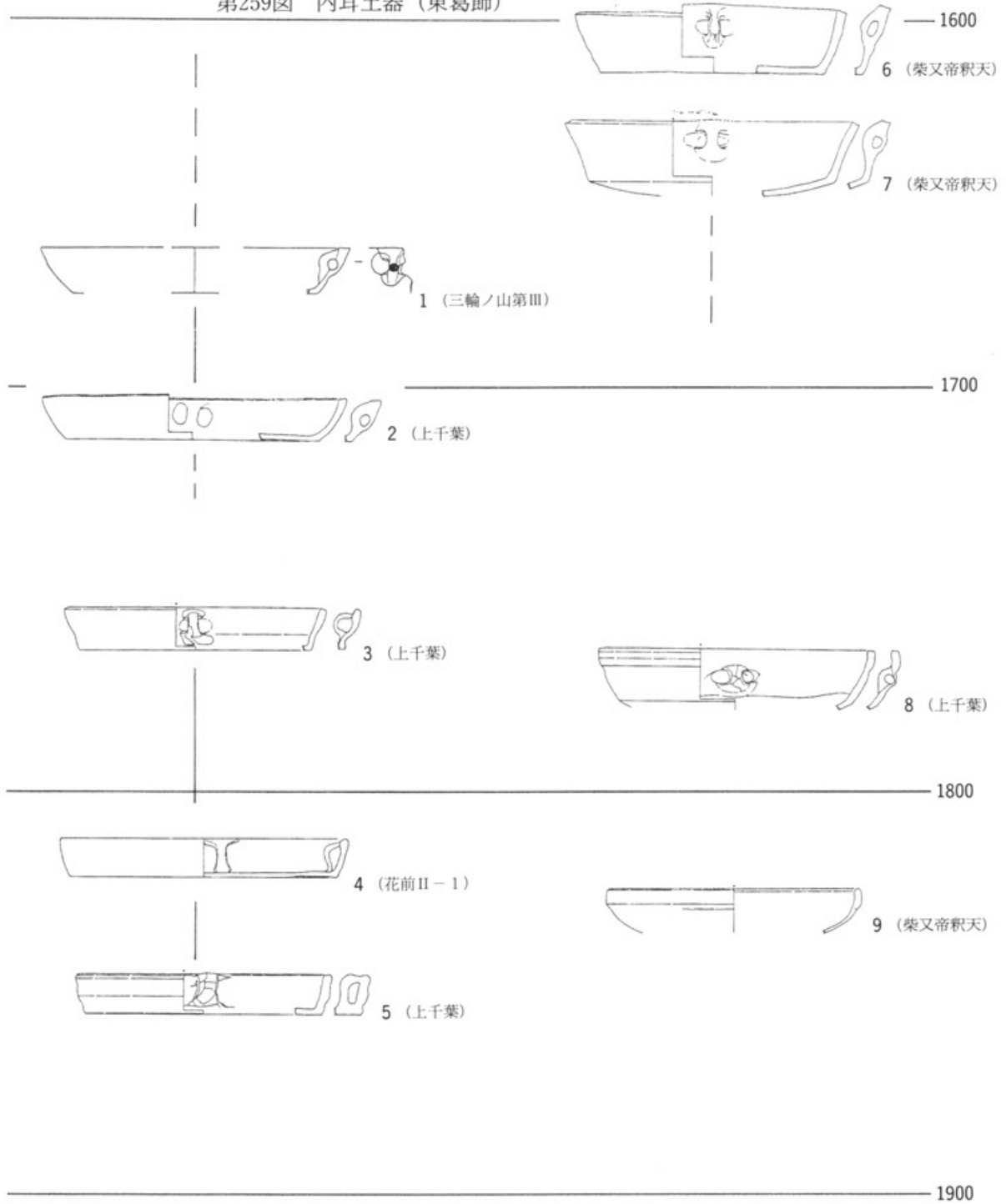


11 (飯野陣屋)

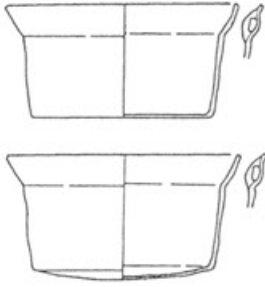
1900

第259図 内耳土器（東葛飾）

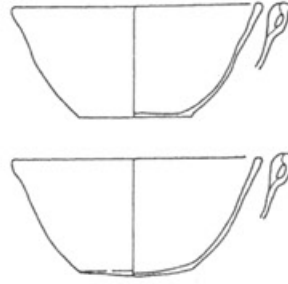
第4節 土器編年



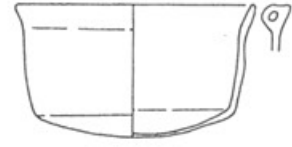
A群
I類



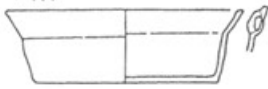
II類



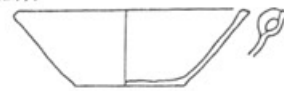
III類



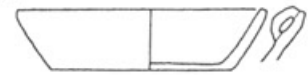
B群
I類



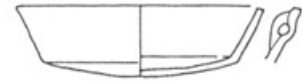
II類



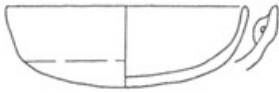
III類 a



b



IV類

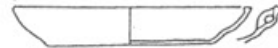


C群

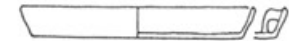
I類



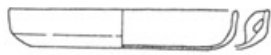
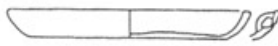
II類



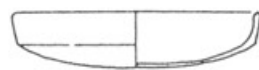
III類



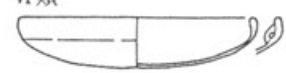
IV類



V類



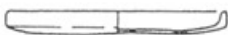
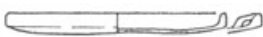
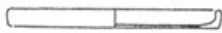
VI類



VII類



VIII類



(4) 深鉢形土器 (第261図)

中世後期に、大和国内において生産されたと考えられる瓦質土器火鉢を総称して奈良火鉢といい、ここで言う深鉢形土器は、この系譜上にあると考えられ、立石堅志氏分類の深鉢Ⅰ類に当たる。このタイプは^{⑤-042}斜め上方に緩やかに開く桶状のもので、脚を付すものと付さないものがある。口縁部の外面に凸帯を2条巡らせ、その間に花文などのスタンプを押捺する。底部付近に凸帯を1条巡らせるものもある。蓋を伴う可能性があり、火鉢以外の用途を考えることも必要である。法量には多様なものがある。この深鉢Ⅰ類の初現は14世紀末葉頃で、16世紀には出土量が大幅に増加するが、17世紀前半以降にはその姿を消したものと考えられている。ただし、大型の深鉢については18世紀まで生産されている。

江戸遺跡にはこの形態の出土例が余りなく、江戸内で作られたものではないようである。

県内の遺跡では、少なくとも15世紀中頃以前にはこの深鉢形態は見られないようである。

15世紀末から16世紀の城館である本佐倉城跡、臼井城跡に出土例がある。綱原屋敷跡遺跡で出土している瓦質のもの(1)は、^{③-010}供伴遺物から推定すると16世紀代の可能性が高い。その他、大栄町大慈恩寺遺跡、^{③-199}同松子城などに見られるが、これらは綱原屋敷跡遺跡と同時期と推定される。

古宿・上谷遺跡では、P-182・183(地下式坑)で美濃第3・4小期の天目茶碗と供伴している(3)。これは土師質の深鉢で、炭も出土しており火鉢として使用されていた痕跡が認められる。周辺の洞谷台遺跡(未刊行)、駒井野城遺跡(未整理)でも出土しており、この時期一定の流通が見られる。

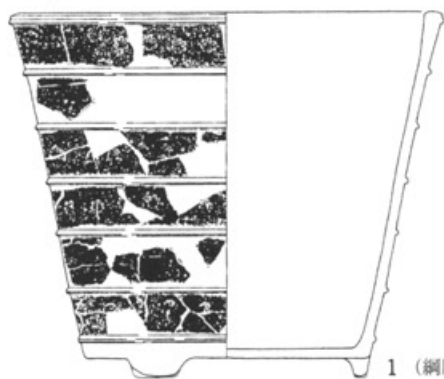
一方、18世紀から19世紀代の遺物が出土した佐倉城跡(1997県センター調査分)^{③-292}でも、ほぼ1個体になると思われる土師質の深鉢形土器が出土している(5)。

したがって、この深鉢形土器の生産時期は、16世紀から17世紀を中心に18世紀代以降にも及ぶ可能性がある。ただし、全時期に言えることであるが、総じて出土量は少ない。

一方、茨城県では^{③-125}鹿嶋市鹿島城跡や^{③-177}北浦村古屋敷遺跡、^{③-224}水戸市高原遺跡、^{③-300}つくば市古屋敷遺跡、^{③-225}取手市下高井城跡などで類例が認められ、概ね16世紀から17世紀の年代が与えられている。

このことから、その分布域は、鈴木氏が指摘するように霞ヶ浦周辺、特に南岸から北浦にかけて濃密であり、生産地がこの近辺にあるものと想定される。そして、千葉県内では、香取の海を隔てて隣接する香取郡や印旛郡域に主として供給されたものと考えられる。

1500



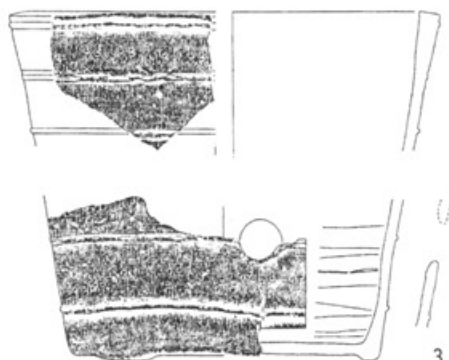
1 (網原屋敷跡)



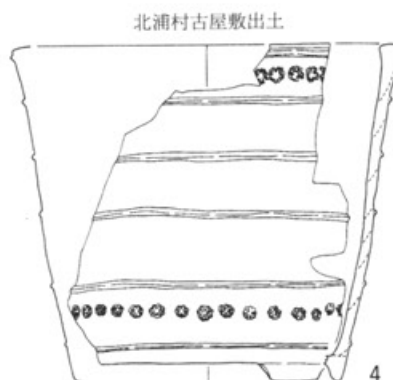
鹿嶋市鹿島城出土

2

1600



3 (古宿・上谷)



北浦村古屋敷出土

4

1700



5 (佐倉城)



6

豊島区北大塚遺跡出土

1800

1900

第5節 まとめと課題

以上、各器種ごとの編年作業を行ってきたが、最後にこの作業から得られた成果といくつかの問題点を改めてまとめてみる。

(1) 土器（カワラケ、土器播鉢、内耳土器、土釜、深鉢形土器）から見た画期の設定

ここでの画期の設定は、あくまでも土器の形態変化や土器間の組み合わせを中心に据えているので、他の陶磁器を含めた組成やその変遷はあまり考慮に入れていない。

I期：15世紀前葉までは、在地産土器は大小2から4形態のカワラケのみの生産である。この間、鎌倉の強い影響が見られる。この期の前半では常滑産甕・片口鉢I類、渥美産甕が見られ、後半になると常滑産甕・片口鉢II類、古瀬戸平碗を中心に、縁釉皿・折縁深皿・直縁大皿・天目茶碗が一定量見られる。また、輸入陶磁には龍泉窯系青磁蓮弁文碗A群・B群、白磁皿A群・B群、同安窯系皿が見られる。

カワラケの出土状況を見ると、井戸跡や屋敷溝から一括廃棄された形で出土する例が多く、ほとんどが儀式の際の、皿、酒杯や灯明皿として使用されたものと思われる。

I期の始まりについては、本論が便宜上13世紀から取り上げているため、13世紀初めと誤解されるかもしれないが、本来より古い時期の土師器を通じて見ていかなければならないのは言うまでもない。その場合、I期が2時期以上に分割できるかもしれない。

II期：15世紀中葉以降、カワラケ以外に土器播鉢、内耳土器、土釜が生産されるようになる。すなわち、瀬戸・美濃窯製品をモデルとするコピー製品の生産が開始される時期である。また、戦国末期の混乱期を反映するように、カワラケに地域ごとに形態差が現れ、分布するようになり、地域色が明瞭になる。この中で、近世に連続する皿形と碗形の2形態の萌芽がみられる。初期の段階では逆台形の箱形であったものが、次第に扁平になり、底径を増し、器高を減じて、外反皿形へと漸次変化する。城館跡出土カワラケには前期から引き続き、儀式の際の皿、酒杯や灯明皿としての機能以外に、建物築造の際の地鎮鎮壇具としての機能が見られるようになる。これは、城館以外でも、印西市大塚塚群第1号塚の例のように、塚築造の際の埋納品としても使用される。陶器は瀬戸・美濃後IV期以降の播鉢・天目茶碗・皿類・縁釉挟み皿が多く見られる。常滑製品はほとんど甕のみになる。輸入陶磁は染付碗C群・E群、皿B群・E群、白磁皿C群・D群が主体となっていく。

III期：16世紀末から17世紀前半は土器生産が激減した時期である。江戸及び東葛飾地域では、カワラケ、内耳土器に中世的なもの、近世的なものとの混在するという。いわば中世から近世への過渡期といえる。国産及び輸入陶磁共に出土量が極めて乏しい。その中で少量ではあるが、一定量出土するのが天目茶碗と志野（鉄絵）皿である。そのうちの志野皿が灯明具としてのカワラケの代用品として使用された可能性もあり、小田原と同じ様相が見られる。

IV期：17世紀後半から18世紀半ばに当たる。17世紀後半から18世紀にかけては、江戸カワラケの確立と発展の時期であるとされる。一方、千葉県では、皿形と碗形が未だ混在する。その中で、皿形カワラケは、次第に江戸カワラケへと指向していく。このころになるとカワラケが大量消費されることが無くなり、都市部・農村部で日常的に主として灯明皿として使用される。18世紀中葉前後に志戸呂産の灯明専用皿形陶器が登場するが、灯明具として使用されるカワラケは相変わらず存在する。藤尾氏の指摘するように内耳土器に見られる、18世紀中ごろの佐倉城III類からIV類への転換、すなわち、平底から丸底への転換は、囲

炉裏から竈への転換と相まって、大きな画期と考えられる。佐倉城のみならず、佐倉藩領の農村部でも竈への転換が進んでおり、千葉県内における大きな変化の時期である。この時期、それと呼応するように、一般農家の住居構造が掘立柱建物から礎石を伴うものに大きく変化しはじめる。また、陶磁器の出土量も前期に比べて飛躍的に増加する。

V期：18世紀後半から19世紀中葉は、カワラケの減少とともに胞衣カワラケなど、灯明具以外の特殊用途に限定されてくる。19世紀には江戸カワラケの流通とともに、カワラケと共に生産された内耳土器、灯明具、玩具などが、江戸やその周辺から流入するようになった。佐倉城武家屋敷跡にはなかった口縁端が内折し、器高の低い、内耳をもたない焙烙形態への変化は、江戸の影響そのものであろう。一方、東葛飾地域のみ、内耳土器が上野・北武蔵型の流通圏に組み込まれ、他の県内地域とは様相を異にする。灯明具は概ね、瀬戸・美濃産や信楽産の製品に取って代わられる。陶器は瀬戸・美濃産、磁器は肥前産で占められていたが、19世紀になると瀬戸・美濃産磁器が急速に市場に出回る。また、現代に継続する地方窯製品も多く見られるようになってくる。

(2) 瀬戸・美濃窯製品（モデル）と千葉県の土器（コピー）の関係

大橋康二氏は、池ノ尻館跡の播鉢の多くが、初期の段階から卸目を持ち、口縁端の上面に溝を有していて、これが瀬戸系播鉢に非常によく似ていると指摘している。おそらく氏の言う「瀬戸系播鉢」とは、藤澤分類の播鉢I類と考えられる。また、瓦質としたのは陶器播鉢に掛けられていた釉薬の色調をもコピーしたとも考えられる。

カワラケの中にも瀬戸・美濃製品のコピーが存在する。15世紀中葉以降南部系山茶碗尾張型、大窯1段階縁釉挟み皿など、主要な器種と共通した特徴が看取される。前者の山茶碗については千葉県内の出土例を知らないのが、この点に大きな疑問が残る。また、やや遡る例として、今回所収していないが、市原市姉崎棗塚遺跡で出土しているカワラケは、供伴する古瀬戸後III期の縁釉皿に非常に良く似た形態をもつ。このことは、すでに田中信氏が川越市内出土の中世土師器編年の中で、各時期の土師器には形態的にそれを模倣した原型となる器形があることを指摘している。氏が原型となる器形にあげているものには、木器椀、京都「白色土器」、京都白かわらけ、京都赤かわらけ、南部系山茶碗、京都系非ロクロ土師器皿がある。一方で、影響される期間は極めて短期間で、次段階まで継続することはほとんどないように思われる。

17世紀中葉段階では志野皿を灯明皿として使用している例が見受けられるという。小田原城が好例であるが、名古屋城三の丸では、志野皿以外に輪禿皿、反り皿、小皿にまでその痕跡が見られる。金子健一氏は、土器皿の灯明具としての利用率は、地域によってまた、同一遺跡内の調査地点、時期によっても異なることを指摘し、これには階層差や場所による使い分け、慣習や嗜好の差などが要因と見られるとした。^{⑤-031} 県内の当期の検出例を見ても小田原城同様に、志野皿が比較的多く出土する傾向にある。また、完形よりも破片となって出土することが多く、油煙などの痕跡を必ずしも確認できたわけではないが、おそらく小田原城と同じように、志野皿を灯明皿として使用していた例もあったであろう。

このように見てくると、次項で取り上げた17世紀中葉前後の皿形カワラケに見られる、内面中央部が窪む特徴の祖形を、同期の志野皿・輪禿皿に求めることは強ち無謀とは言えないように思える。

(3) 江戸カワラケと千葉県のカワラケの関係

小林謙一氏によれば、17世紀初頭の江戸遺跡には、下総タイプ(輪積み成形後、ロクロ回転ナデ、底厚、底体間厚い。器高がやや高く底部突出)と南武蔵タイプ(輪積み成形後、ロクロ回転ナデ、底厚、底体間厚い。器高がやや低く底部の立ち上がりが滑らかなもの)のカワラケが混在する。17世紀中葉に小林A類(手捏ね)と南武蔵タイプの系譜を引く江戸C類(背が低く、底径が大きい外反口縁。底部が薄く底体間はやくびれる、ロクロ製品)が多量に出土するようになる。そして、17世紀後葉、折り返し技法のロクロ成形の小林F類(内湾口縁、ロクロ製品)が安定して出土するようになる。^{⑤-035}

ここでいう、下総タイプの例に、長勝寺脇館跡の鎮壇遺物や葛西城跡のA類中の遺物を挙げている。これは椀形の範疇に入る器形である。確かに、氏が下総タイプとした器形は下総に特徴的な器形かもしれないが、本論で明確にしたように、他に皿形とした器形も16世紀以前から継続して存在する。これは、むしろ17世紀には県内で主体となる器形で、形態変化から見た場合明らかに中世と連続している。椀形だけでは千葉県のカワラケと江戸カワラケとの関係は17世紀初頭をもって途絶えてしまう。皿形を含めた、江戸カワラケとの関係を再度考察する必要がある。ただ、現在の所千葉県内には17世紀初頭に確実に比定できる資料がないため、この点は資料の出現を待ちたい。

ところで、胎土から見ると、千葉県内のカワラケは、砂粒を多く含み器面がザラザラして、くすんだ褐色に発色しているのに対し、江戸カワラケは胎土が精選されており、焼き上がりは明褐色を帯びている。したがって胎土・焼成・色調からは明確に両者の相違を見出せる。また、小林氏の江戸カワラケ編年によると、17世紀後半から末以降18世紀代まで、器形は県内の変化とかなり異なる。一方で、技法面から見た場合、江戸カワラケに良く似た皿形のカワラケが、17世紀中葉前後に存在する。

両角氏が示し、小林氏が支持した「折り返し技法」については、小川貴司氏が疑問を投げ掛けているように、確かに技術的に見て否定的にならざるを得ない。すなわち、内面底部が台状に盛り上がっている点、内底部周縁が沈んでいる点、つまり、腰の部分を薄く水挽きしたために腰が落ちており、結果として台状部と周縁の沈みが作られていることに特徴があるが、氏はこの技法を「挽落とし」と命名し、その成形復元図を提示している。これは基本的に粘土塊から一気に挽き上げる粘土塊ロクロ成形で、従来の粘土紐輪積みによる成形とは異にするが、極めて合理的な説明で、千葉県のカワラケにも適合できそうである。

しかし、千葉県のカワラケで更に特徴的なのが、上宿遺跡、古宿・上谷遺跡、長倉宮脇遺跡および芝山町洞谷台遺跡出土遺物に見られる内面中央部が著しく窪み、結果的に中央部の器壁が薄くなっている点である。洞谷台遺跡のものは供伴遺物から17世紀前葉まで遡る可能性がある。氏の説明からすると職人が比較的高度な技術を持っていることが想定できるのに、なぜこのように器厚を一定に保てないか、合理的な説明ができない。

一方で、使用方法や目的面から見ると、中央部が窪んでいるために容積が増加する。少ない量であれば中央部にのみ、液体を溜めておける。また、上宿遺跡に見られるように、焼成後に底部中央部を穿孔しているものがあり、穴を開けやすいと考えることもできる。この穿孔の目的については、灯明具として利用するためと言われているが、どのように使用したか説明が必要となろうが、この器形の特徴に、灯明具としての性格付けもできるのではなかろうか。

このように、17世紀前葉から中葉頃には千葉県のカワラケは、江戸カワラケと極めて良く似た技術により、同じ様な形態が製作されていたと考えられる。17世紀前葉とされる丸の内三丁目遺跡52号土坑出土の

遺物（⑤-065図1の13カワラケ）などはその好例であると考える。

ただこの後、江戸カワラケが急速に薄型、直線的になっていくのに対し、千葉県のカワラケの変化は至って緩やかである。小林氏がF類とした典型的な江戸カワラケが登場するのは18世紀後半まで時間を要する。しかし、18世紀後半から末にかけて、県内産のカワラケは著しく減少し、生産の縮小現象と呼応するように、江戸カワラケが県内に供給されるようになる。灯明具としては、18世紀前半は志戸呂産、18世紀半ば以降は瀬戸・美濃産、19世紀には信楽産が大量に流通し、カワラケの灯明具としての需要がなくなるのであろう。消費量が激減し、需要が縮小した、一方、コストの増加に見合う収入が見込まれないため、千葉県のカワラケ生産が急速に衰退したと考えられる。カワラケと同時に生産されている内耳土器、灯明具、玩具なども流通するようになったものと考えられる。しかし、その中で灯明具は千葉県の場合、陶器製が主体で、土製のものが広まることは、あまりなかった。

（4）生産と流通に関して

15世紀後半以降、カワラケに地域的特色が見られるようになることは、前項で述べたとおりであるが、これは生産依頼者である支配者層の違いが、土器の形態の相違に現れてきた可能性を示唆するものである。つまり、15世紀後半から16世紀代の様々な形態の土器の分布と、戦国後期の領主交代やそれに伴う支配関係の範囲とが一致するのではなかろうかと考えたい。その典型例として、本佐倉城跡の手捏ねカワラケ模倣のロクロを使用したカワラケがあげられよう。したがって、カワラケは、その分類に、領主層の交代・主従関係の変化を加味していくことで、より詳細な分類が可能となるのではなかろうか。この点で文献史学との連携が必要になってくると思う。

^{⑤-001}馬場脩氏の文献（昭和15年）には、昭和15年時点での興味深い民俗例が記されている。以下部分的に加筆したものを引用する。

「千葉県の上総の大部分と下総の一部の農家において、内耳の土焙烙が使われており、色々な物、餅、豆、茶等を煎るために使用されて、特に正月農繁期に最も多く用いられている。産地は成田や酒々井付近、東金付近、五井付近に小規模の焙烙屋が数軒所在して、製作しているが、酒々井、東金付近の物は質がやや硬いようである。五井付近のものは赤褐色を呈し、質は黒色のものよりややもろい。特に五井付近の浅井の産は破損しやすいということである。内耳の付け方に2種あって、三耳の物と四耳のものがあるが、三耳付きの物は五井から千葉船橋方面に好まれ、四耳付きのものは五井から木更津寄りの方面の好みとなっている。これは煎返しによる好みによるものである。これらの土焙烙には大小二三種あるが、概して計約35cm内外、深さ5～6cm位のもので、三耳付きのものも耳は均等の距離になく、二耳がやや接近して、他の一耳に相對して付されているし、四耳付きの物は前述の北千島出土の土鍋の四耳付きの手法である。これらは古くは農家の爐鍵につるされて、北斎の絵のごとくに使用されたものであったが、今日爐鍵のない家が多分あるので、多くは耳に紐を通して手を以て煎返している。」

この記述から、県内には4か所ほどの生産地があったこと。その使用目的・消費地の好みに応じた個数の耳の焙烙を生産していたこと。生産地による胎土や焼きの違いがあること。焙烙屋が生産も行っていたことなどがわかる。

内耳土器の生産が昭和15年当時突然始まったとは考えにくく、おそらくこれらの生産地は近代初頭かそれ以前に操業開始時期を求められるのではなかろうか。また、当然この時点にはすでに生産を終了してい

る生産地もあるであろう。特に、金雲母を多量に含む平底の内耳土器は、19世紀に入るとほとんど見られなくなる。金雲母を胎土中に含む土器は古来より、利根川下流域の佐原や対岸の茨城県東町付近に見られるということから、当地付近に生産地が求められるかもしれない。

以上、現在までの成果の幾つかをまとめたつもりではいるが、画期の設定では時期設定がかなり雑駁になってしまった感がある。また、筆者の力不足のため、先行する研究が提起した様々な問題点に何ら触れることができず、当初掲げた房総の中近世城館跡の構造と特質という遠大なテーマに到底達することはできなかった。資料不足の時期・地域については、今後の資料の増加を待って、再検討する必要がある。また、遺物を研究するにあたっては、地域相互間の資料のデータ化と共通理解の必要性をあらためて認識した次第である。

今回の成果を遺構へフィードバックさせることによって、各種遺構の機能論、城館の場としての機能論などもより一層具体的なものになると考えられる。さらなる城館研究の進展を祈念し、大方のご指導・ご教示をお願いしたい。

最後になるが、章末に近世城館跡・陣屋跡の調査成果を一覧表にしてとりまとめた。余り対象とはされない時代であるが、ここに含まれない城館以外の近世遺跡の調査も、少なからず実施されていると思うと、中近世考古学の更なる発展を祈念してやまない。

第12表 近世城館跡・陣屋跡の調査経歴

佐倉城跡・城下跡 (慶長16年1611～明治4年1871)

佐倉市城内町他

	調査区	文献	面積(m ²)	調査期間	調査機関	検出遺構	近世遺物
1	椎木曲輪、三の丸	③-007	400	昭和46年7月25日～同年8月31日	国立歴史民俗博物館設置予定地内遺構調査団	濠	陶磁器、カワラケ、瓦、煙管、焙烙、金属製品
2	椎木曲輪、馬出し地区	③-031	約1,300	昭和51年6月1日～同年7月15日	(財)千葉県文化財センター	濠、井戸	陶磁器、在地産土器、瓦、銭貨、刀
3	椎木曲輪、馬出し地区	③-066	1,200	昭和52年1月28日～同年3月28日		濠	?
4	椎木曲輪	③-044	1,200	昭和52年10月31日～53年3月31日		濠(中世鹿島城に伴う)	陶磁器、瓦、銭貨、カワラケ
5	三の丸	③-066	1,650	昭和54年12月1日～55年3月31日		馬出、堀、門、礎石、土塁	陶磁器、鉄釘、銭貨、瓦
6	本丸	③-079	?	昭和55年1月19日～56年4月6日	佐倉市教育委員会	礎石、井戸、堀	瓦、釘、鎌
7	三の丸	③-073	800	昭和55年12月1日～56年3月31日	(財)千葉県文化財センター	溝状遺構	瓦
8	三の丸	③-101	1,300	昭和58年10月3日～同年12月3日	国立歴史民俗博物館	井戸、濠、溝、土坑、柱穴群	陶磁器、瓦、焼塩壺
9	椎木曲輪(中級～上級武家屋敷地区)	③-209	3,000	昭和59年7月10日～60年1月24日		礎石、地鎮跡、畑畝、井戸、かわや、地下倉	陶磁器、在地産土器、カワラケ、武器、武具、煙管、簪、鉄、毛抜き等
10	並木町(武家屋敷?)	②-161	800	昭和62年2月23日～同年3月3日	(財)印旛郡市文化財センター	井戸、土坑、地下式坑	陶磁器、カワラケ、焼塩壺、瓦
11	竊木小路遺跡第1地点(下級武家屋敷地区)	*	256 348.3	昭和63年4月25日～6月1日(確認) 平成元年1月17日～同年3月15日(本調査)	佐倉市教育委員会	地下式坑、土坑、門、畝状遺構、	陶磁器、カワラケ、砥石、銭貨、煙管、釘、刀、在地産土器、槍、鎌 柱穴群、井戸
12	曲輪ノ内遺跡(1次)(武家長屋敷地区)	③-181	128 1,317	平成元年10月30日～同年11月2日(確認) 平成元年12月1日～同年12月22日(本調査)	(財)印旛郡市文化財センター	掘立柱建物、柵列、井戸、土坑	陶磁器、カワラケ、焙烙、硯、砥石、瓦、銭貨、金属製品、土製品
13	新町遺跡(市立美術館)	*	不明	平成4年9月25日(試掘)	佐倉市教育委員会		陶磁器、カワラケ、袍衣容器
14	佐倉中学校・大手門脇(上級武家屋敷地区)	③-252	60 600	平成5年7月14日～同年7月16日(確認) 平成5年9月1日～同年10月29日(本調査)	(財)印旛郡市文化財センター	礎石、地下倉、水溜、土坑、柵列、溝	陶磁器、在地産土器、カワラケ、土製品、瓦、砥石、煙管、鉄釘
15	曲輪ノ内遺跡(2次)(武家長屋敷地区)	③-253	2,785	平成6年7月22日～同月25日(確認) 平成6年7月26日～同年9月9日(本調査)		掘立柱建物、土坑、井戸、堀、溝、柱穴列、柱穴群	陶磁器、在地産土器、硯、砥石、櫛、杓子、煙管、銭貨、釘、鉄等
16	竊木小路遺跡第2地点(下級武家屋敷地区)	*	50	平成7年2月13日～同年2月17日	佐倉市教育委員会	土坑、溝、礎石	陶磁器
17	竊木小路遺跡第3地点(下級武家屋敷地区)	③-278	502	平成7年10月16日～同年11月10日		礎石、井戸、地下式坑、土坑、土坑墓、小鍛冶跡	陶磁器、釘、刀装具、袍衣容器(カワラケ)
18	弥勒東台遺跡(寺社屋敷地区・旧松林寺)	③-276	584	平成8年8月1日～同年8月31日	(財)千葉県文化財センター	土塁、堀、溝、道路、掘立柱建物、土坑、井戸	陶磁器、在地産土器、鉄製品、銅製品、石製品、銭貨、瓦、埴塼、鉄滓
19	竊木小路遺跡第4地点(下級武家屋敷地区)	②-359	391	平成8年8月1日～同年9月6日	(財)印旛郡市文化財センター	建物跡、土坑	陶磁器、カワラケ、瓦、土製品、鉄製品、煙管、飾り金具、銭貨
20	佐倉中学校体育館(上級武家屋敷地区)	②-359	2,208	平成8年8月19日～同年10月18日		井戸、溝、ピット、掘立柱建物、土坑	陶磁器、瓦、青銅製品、鉄製品、銭貨
21	曲輪ノ内遺跡	②-358	1,143	平成9年3月4日～同年3月7日		掘立柱建物、土坑、井戸、堀、溝	陶磁器
22	佐倉東高校(上級武家屋敷地区)	③-292	50	平成9年4月3日～同年4月21日	(財)千葉県文化財センター	井戸、土坑、焼土	陶磁器、カワラケ、土鍋、土製品、瓦、砥石、鋳型、金属製品、銭貨
23	曲輪ノ内遺跡	*	220	平成9年8月20日～同年8月26日(本調査)	佐倉市教育委員会	掘立柱建物、道路状遺構、柵状遺構	カワラケ、陶磁器、煙管、銭貨、鉄製品
24	三味線堀	*	363	平成9年11月5日～同年11月11日(確認)	(財)印旛郡市文化財センター	土手	陶磁器、銭貨、人形、瓦
25	野狐台町遺跡(1次)足軽長屋付近	*	290	平成11年4月21日(試掘)	佐倉市教育委員会	なし	陶磁器
26	野狐台町遺跡(2次)足軽長屋付近	*	307	平成11年4月22日～同年4月28日(確認・本調査)		柵状遺構、鉄製品、泥面子	
27	新町遺跡(美術館西隣接地)	*	84	平成11年6月8日～同年6月9日(確認)		埋立造成、町屋跡(礎石、硬化面)	陶磁器、カワラケ、銭貨

*佐倉市教育委員会より御教示いただいた。

飯野陣屋跡 (慶安元年1648ごろ～明治4年1871) 富津市下飯野

	調査区	文献	面積(m ²)	調査期間	調査機関	検出遺構	近世遺物
1	二の丸	③-084	242	昭和56年11月	稲荷口遺跡調査会・富津市教育委員会	溝、土坑	陶磁器
2	外邸	③-111	-	昭和58年8月～同年12月	(財)君津郡市文化財センター	溝	陶磁器、在地産土器
3	外濠・土塁	③-124	80	昭和59年6月		溝、土坑(古墳周溝)	陶磁器、瓦、在地産土器、土人形、硯
4	本丸・二の丸・三の丸	③-155	200	昭和62年11月	(財)千葉県文化財センター	溝、土坑、貝殻地業、(古墳周溝)	陶磁器、瓦、在地産土器、土人形、鉄釘、砥石
5	九条塚古墳周溝・亀塚古墳周溝	③-190	616	平成元年1月～同年3月	(財)君津郡市文化財センター	(古墳周溝)	陶磁器、瓦、土人形、銭貨
6	三条塚古墳周溝・石室	③-174	500	平成元年11月～同年12月		藩校建物基礎、(古墳周溝)	陶磁器、矢立、石盤、簪
7	稲荷塚古墳周溝	③-190	150	平成2年11月		(古墳周溝)	陶磁器
8	二の丸	③-223 ③-222	1,154	平成4年8月		濠、溝、道路、礎石、柱穴列、堅穴遺構、土坑群、土坑	陶磁器、在地産土器、板ガラス、ガラス容器、瓦、土人形、鉄釘、砥石
9	三の丸	③-234	432	平成5年8月		溝	瓦
10	亀塚古墳周溝	③-242	1,925	平成6年11月		溝、土坑、貝殻地業	陶磁器
11	三の丸	③-261	404	平成7年7月		溝	陶磁器、瓦、砥石
12	内裏塚古墳周堤・三の丸	③-288	559	平成8年6月		土坑、溝	陶器、瓦
13	三の丸	③-297	500	平成9年11月		溝、土坑、(古墳の周溝)	瓦

飯野陣屋跡周辺の遺跡

	調査区	文献	面積(m ²)	調査期間	調査機関	検出遺構	近世遺物
14	内裏塚古墳周溝・野乃間古墳周溝	③-124	-	昭和59年7月～60年2月	(財)君津郡市文化財センター	(古墳周溝)	陶磁器
15	野乃間古墳周溝	③-146	751	昭和62年4月～同年5月		(古墳周溝)	陶磁器、在地産土器、石臼
16	南口遺跡	③-175	2,400	昭和63年10月～同年11月		溝、土坑群、(溝、土坑)	陶磁器、漆器、銭貨、煙管
17	内裏塚古墳周溝・九条塚古墳周溝・武平塚古墳周辺	③-205	482	平成3年5月～同年6月		溝、(古墳周溝)	陶磁器、瓦、土錘、杭、下駄
18	内裏塚古墳周堤	②-275	1,683	平成6年1月	富津市教育委員会	溝	なし

千葉御茶屋御殿跡 (徳川家康・秀忠・家光三代1614～1630使用) 千葉市若葉区

	調査区	文献	面積(m ²)	調査期間	調査機関	検出遺構	近世遺物
1	郭内・外	③-033	-	昭和48年8月1日～同年12月27日	千葉市御茶屋御殿跡調査団	測量調査	-
2	郭外	③-020		昭和49年7月3日～同年8月23日		堀、掘立柱建物、堅穴状遺構	陶器、瓦、鉄製品、銭貨
	郭内	③-184	?	昭和49年11月6日～50年3月31日			
3	郭内主殿	③-183	約650	平成2年11月1日～同年12月1日	千葉御茶屋御殿跡調査会	建物基礎、柱穴列、土塁、溝、土坑、硬化面	染付、土鍋、瓦、砥石、鉄製品、簪、煙管
4	北門・郭内南西地区	③-212	?	平成3年8月3日～同年8月15日	国立歴史民俗博物館	掘立柱建物	?
5	郭内中央部、御主殿・御休息所	③-212	3,000	平成4年7月24日～同年8月31日	千葉御茶屋御殿跡調査会	礎石建物、掘立柱建物、掘立柱塀、土坑、通路、道路、溝	陶器、カワラケ、焙烙、瓦、釘
6	郭内東部、長屋	③-214	3,000	平成5年7月17日～同年9月6日?		礎石建物、掘立柱建物、掘立柱塀、井戸、貯水槽、土塁、通路	陶器、瓦質播鉢、瓦、釘
7	郭内西部	③-230	2,500	平成6年7月18日～同年9月20日?		掘立柱建物、土塁、土坑、地割り溝	陶器、瓦質播鉢、瓦

森川陣屋跡(生実城跡) (寛永4年1627~明治4年1871) 千葉市中央区

調査区	文献	面積(m ²)	調査期間	調査機関	検出遺構	近世遺物
1 大手口北側堀	③-091	?	昭和56年10月1日~57年6月30日	(財)千葉県文化財センター	堀	?
2 郭内・堀・郭外	②-188	7,500	昭和63年6月1日~平成元年1月28日	(財)千葉市文化財調査協会	堀、土坑、溝	陶磁器、キセル、簪、釘
3 郭外東	②-248	650	平成3年6月3日~同年10月5日		溝、柱列	?
4 郭内南西隅・堀	②-266	500	平成5年1月11日~同年3月26日		掘立柱建物、柵列	?
5 郭内南端・郭外	②-289	1,050	平成5年5月6日~同年11月17日		井戸、土坑、ピット、建物?	陶磁器、
6 大手口東・西側	②-307	5,500	平成6年4月1日~同年10月31日		鋳物屋建物	?
7 大手口北側	②-342	4,720	平成8年2月16日~同年3月29日		堀、造成面、土坑、ピット、溝	陶磁器、
8 大手口北側	②-364	4,890	平成8年4月1日~同年9月30日		掘立柱建物、柱穴列、土坑、ピット、溝	?

高岡陣屋跡 (延宝4年1676~貞享元年1684~明治4年1871) 香取郡下総町高岡

調査区	文献	面積(m ²)	調査期間	調査機関	検出遺構	近世遺物
1 主郭部中門周辺	③-294	570	平成9年1月16日~同年2月24日	(財)香取郡市文化財センター	池、木樋、掘立柱建物、土坑	陶磁器、在地産土器、輸入陶磁、瓦、銅製品、硯、土人形、どろめんこ、銭貨

関宿城跡 (~天正18年1590~明治8年1875ごろ) 東葛飾郡関宿町久世曲輪

調査区	文献	面積(m ²)	調査期間	調査機関	検出遺構	近世遺物
1 本丸	③-140	400	昭和61年11月4日~同年11月29日	(財)千葉県文化財センター	石積遺構、溝、建物基礎(瓦片)	陶磁器、在地産土器、瓦、石製品、羽口、金属製品、銭貨
2 本丸、武家屋敷、三の丸	③-149	500	昭和62年9月1日~同年10月13日		石積遺構、溝、建物基礎(瓦片)、同(粘土)、土坑	陶磁器、在地産土器、金属製品、銭貨、鉛玉、基石
3 武家屋敷、他	③-158	1,000	昭和63年8月16日~同年10月4日		建物基礎(粘土)、井戸、土坑、溝	陶磁器、在地産土器、瓦、石製品、金属製品、銭貨

大多喜城跡 (~天正18年1590~明治4年1871?) 夷隅郡大多喜町

調査区	文献	面積(m ²)	調査期間	調査機関	検出遺構	近世遺物
1 本丸	③-022	約600	昭和48年春、夏	大多喜城址調査団	掘立柱建物、溝、配石遺構	陶磁器、在地産土器、瓦、石製品、金属製品

久留里城跡 (~天正18年1590~明治4年1871) 君津市久留里

調査区	文献	面積(m ²)	調査期間	調査機関	検出遺構	近世遺物
1 本丸、二の丸	③-060	591	昭和52年7月1日~同年8月31日	久留里城址発掘調査団	石敷、礎石建物、天守台、長屋塀、土塀	陶磁器、瓦、在地産土器(カワラケ)、釘、銭貨、砥石、金属製品
2 三の丸外堀	③-202	118	平成3年11月1日~同年11月12日	君津市教育委員会	堀	瓦、陶磁器

富津陣屋跡 (文政4年1821~慶応4年1868) 富津市富津

調査区	文献	面積(m ²)	調査期間	調査機関	検出遺構	近世遺物
1 郭内 通称 屋敷畑	③-287	508 3,400	平成8年9月5日~同年9月13日(確認) 平成9年1月6日~同年2月14日(本調査)	(財)君津郡市文化財センター	礎石建物、ろうそく石礎石列、井戸、庭、溝、土坑	陶磁器、在地産土器、瓦、簪、硯、温石、煙管、鉄製品、銭貨、鉛玉、木製品

真武根陣屋跡 (嘉永3年1850~慶応4年1868) 木更津市請西

調査区	文献	面積(m ²)	調査期間	調査機関	検出遺構	近世遺物
1 ?	②-351 ②-370 ②-374	13,800	平成9年9月1日~10年3月10日	(財)君津郡市文化財センター	土塁、堀、溝、瓦囲炉	瓦、鉄製品

西郷氏館跡(陣屋跡) (元和6年1620~元禄5年1692) 鴨川市東町

調査区	文献	面積(m ²)	調査期間	調査機関	検出遺構	近世遺物
1 郭内・外	③-290	20,050	平成7年4月6日~同年9月29日	東条地区遺跡調査会	堀、井戸	陶磁器、木製品

佐貫城跡 (~永禄12年1569~天正18年1590~明治4年1871?) 富津市佐貫

調査区	文献	面積(m ²)	調査期間	調査機関	検出遺構	近世遺物
1 I 郭他	③-074	202	昭和55年12月15日~56年2月14日	佐貫城跡・本佐貫城跡発掘調査団	石垣、土塁、土橋	瓦

館山城調査跡 (天正18年1590~慶長19年1614) 館山市館山

調査区	文献	面積(m ²)	調査期間	調査機関	検出遺構	近世遺物
1 御殿跡、千畳敷土塁	③-055	109	昭和53年2月28日~同年3月3日(確認調査)	館山城跡調査会	遺物包含層	陶磁器、鉄滓
2 御殿跡、鹿島堀	③-062	176	不明		堀、掘立柱建物?	陶磁器
3 御殿跡、鹿島堀	③-072	不明	昭和54年10月22日~同月30日 昭和55年1月21日~同月25日		堀、掘立柱建物?	不明
4 鹿島堀	③-112			館山城跡鹿島堀調査会		
5 御殿跡	③-147	不明	昭和61年11月4日~同年11月22日	第4次館山城跡調査会	掘立柱建物	陶磁器、カワラケ、土師質土器、瓦質土器、瓦

付章 文 献 目 録

本目録は、主に千葉県内の中近世城館跡に関連する文献であり、千葉城郭研究会編『千葉城郭研究』第1号（1989年）～第5号（1998年）所収の文献目録を参考に、基本的には平成11年（1999）年度上半期に入手できたものを加えたものである。また、本書本文中で取り上げた県外の文献を加え、以下の様に種別にし、掲載された遺跡を地域別に記号化し、通し番号も改めて振り直した。なお、第3章の遺物に関する参考論文については、直接城館跡とは関わらず煩雑となるので末尾に加えた。

文献種別記号

- ① 自治体史（第13表）
- ② 雑誌・定期刊行物（第14表）
- ③ 発掘・測量調査報告書（第15表）
- ④ 単行本（第16表）
- ⑤ 第3章参考論文（第17表）

地域別記号

原則として以下のように近世郡域により分けた。記号は、縄張構造等の表・グラフと同一である。

- A 東葛飾地域（旧葛飾郡南東部）
- B 印旛地域（旧印旛郡）
- C 千葉地域（旧千葉郡（習志野市・八千代市を含む））
- D 香取地域（旧埴生郡・香取郡）
- E 海匝地域（旧匝瑳郡・海上郡）
- F 山武地域（旧武射郡・山辺郡（千葉市土気地区を含む））
- G 長生地域（旧長柄郡・埴生郡）
- H 夷隅地域（旧夷隅郡）
- I 市原地域（旧市原郡）
- J 君津地域（旧望陀郡・周准郡・天羽郡）
- K 安房地域（旧平郡・長狭郡・朝夷郡・安房郡）
- L 県内全域または広域
- M 県外

第13表 文献目録①(自治体史)

番号	発行年	地域	編著者	書名	発行者
001	1878	L	安川柳溪	上総国誌(改訂房総叢書第四輯地誌(二)(1959年)に所収)	
002	1886	K	内務省地理局	大日本国誌 安房	近藤活版
003	1912	B	印旛郡教育会	印旛郡誌 前篇 各章	印旛郡役所
004	1913	B	印旛郡教育会	印旛郡誌 後篇 各章	印旛郡役所
005	1913	G	長生郡教育会	長生郡郷土誌 第六章古城址	長生郡教育会
006	1916	A	松戸町	松戸町誌 第十七章名勝旧蹟	松戸町
007	1916	A	小金町	小金町誌 第十七章名勝旧蹟什宝	小金町
008	1916	F	山武郡教育会	山武郡郷土誌 第十五旧跡・名所	山武教育会
009	1916	I	市原郡教育会	市原郡誌 第三沿革及史蹟 第二章旧蹟	市原郡教育会
010	1917	E	海上郡教育会	海上郡誌 第十五章名勝旧蹟・第三節古城址	海上郡教育会
011	1919	L	千葉県	稿本 千葉県誌 卷下 第三章城址・第四章館址	多田屋書店
012	1920	A	菅井敬之助	湖北村誌 第一編 第十一章旧蹟	湖北村役場
013	1921	D	香取郡役所	香取郡誌 第十七編旧蹟誌、第十九編城主誌	香取郡役所
014	1921	E	匝瑳郡教育会	匝瑳郡誌 第三章古城址附古墳	匝瑳郡教育会
015	1923	A	奥原経営	関宿町誌 第十四章名所旧跡	奥原経営
016	1923	A	東葛飾郡教育会	東葛飾郡誌 第十六章名所旧蹟	東葛飾郡教育会
017	1923	H	夷隅郡教育会	夷隅郡誌 第十二章名所旧蹟名邑城址及び砦址・館誌	夷隅郡役所
018	1926	C	千葉郡教育会	千葉郡誌 第十五章第三節古城址	千葉郡教育会
019	1926	K	安房郡教育会	安房郡誌 第十四章社寺及名勝旧蹟	安房郡教育会
020	1927	J	君津郡教育会	君津郡誌 下巻 第三編名勝旧蹟・第二章城砦址	君津郡教育会
021	1929	D	佐原町	佐原町誌 第五章旧蹟	佐原町
022	1942	L	房総叢書刊行会	上総国誌(復刻) 上総諸城誌・治城・陣屋	房総叢書刊行会
023	1943	D	高木卯之助	古城村誌前編 第四章守護時代	香取郡古城村
024	1952	D	高木卯之助	古城村誌後編 第一章地誌第七節旧蹟	古城村誌復刻刊行会
025	1955	G	本納町	本納町史 第二章第五節本納城と酒井氏	吉川弘文館
026	1956	E	銚子市史編纂委員会	銚子市史 第三章第六節東氏と海上氏の衰亡	銚子市史編纂委員会
027	1956	F	大橋栄	豊岡村誌 第二編第六節諸城址と史蹟	豊岡村郷土史研究会
028	1962	A	高橋源一郎	船橋市史 前編 金堀城址、殿山	船橋市
029	1962	J	君津町誌編纂委員会	君津町誌 前巻 第二章沿革資料第三節名所旧蹟	君津町誌編纂委員会
030	1966	D	島田七夫	佐原市史 第二章中世・矢作城の推移	佐原市役所
031	1969	A	柏市史編纂委員会	富勢村誌「柏市史資料編Ⅰ」第四編名所旧蹟第二章旧蹟	柏市史編纂委員会
032	1971	B	篠丸頼彦・伊禮正雄	佐倉市史 卷一 第二編第二章中世 中世城址	佐倉市
033	1971	K	館山市史編纂委員会	館山市史 第四章中世の館山	館山市
034	1972	J	木更津市史編集委員会	木更津市史 第二編第三章南北朝・室町・安土桃山時代	木更津市
035	1973	A	奥原謹爾	関宿志 関宿城	関宿町教育委員会
036	1973	G	長南町史編纂委員会	長南町史 第二章中世・庁南城について	長南町
037	1973	J	君津町誌編纂委員会	君津町誌 後編 第七章第九節吉野室町・安土桃山時代	君津町
038	1973	J	平川町史編纂委員会	平川町史 第一章第三節参考資料	袖ヶ浦町
039	1974	A	小室栄一	市川市史 第二巻 第十七章市川の城と館	吉川弘文館
040	1974	B	八街町史編纂委員会	八街町史 第十二章町内そぞろある記	八街町
041	1974	D	栗源町史編纂委員会	栗源町史 四、町史資料	栗源町
042	1974	J	小糸町史編集委員会	小糸町史 第一章原始・古代・中世	小糸町
043	1975	B	栗原東洋	四街道町史 通史編 第四章中世の鹿島川流域と臼井氏	四街道町
044	1975	E	千潟町史編纂委員会	千潟町史 第三章第四節中世の動乱と武士の動向	千潟町
045	1976	E	八日市場市史編纂委員会	新編飯高村郷土史付飯高村誌 市史編纂資料7	八日市場市史編纂委員会
046	1976	F	後藤和民	千葉市史 史料編一 第四節第五項3大椎城址とその周辺	千葉市
047	1976	F	伊藤一男	横芝町史 特別寄稿篇 戦国井田領の形成と展開	横芝町史編纂委員会
048	1976	J	清和村誌編纂委員会	清和村誌 第四節城砦墳墓	清和村誌編纂委員会
049	1977	G	長柄町史編纂委員会	長柄町史本篇 第二章伝承の城址と豪族	長柄町
050	1978	C	村田一男	八千代市の歴史 第3章第2節武士の館、第4節戦国の世	八千代市
051	1978	J	小櫃村誌編纂委員会	小櫃村誌 第九章第二節城址、遺構	君津市
052	1979	A	佐藤立身	沼南町史 中世・城郭史	沼南町
053	1981	B	綿貫啓一	富里村史 第4章中世・富里の城館址	富里村
054	1981	E	飯岡町史編纂委員会	飯岡町史 第三章中世のあゆみ	飯岡町

番号	発行年	地域	編著者	書名	発行者
055	1982	D	伊藤一男	東庄町史 上巻 第2章中世・中世の城館跡と伝承	東庄町
056	1982	E	八日市場市史編纂委員会	八日市場市史 上巻 第二編第七章八日市場地方の中世城址	八日市場市史編纂室
057	1982	J	富津市史編纂委員会	富津市史 通史 第三編第一章富津地方の推移	富津市
058	1982	J	木更津市史編集委員会	木更津市史 富来田編 第3編第2章真里谷城址と周辺の城郭	木更津市
059	1983	E	光町編纂委員会	光町史	光町
060	1983	H	橋口定志	岬町史 第三章中世	岬町
061	1983	H	柴田龍司	岬町史 第十二章岬町の中世城郭	岬町
062	1984	B	高橋三千男	印旛村史 第三編中世・城址と城主	印旛村
063	1984	F	伊藤一男	松尾町の歴史 上巻 II、中世の武士と村落	松尾町
064	1984	K	三芳村史編纂委員会	三芳村史 第二章中世の三芳村	三芳村
065	1985	D	多古町史編纂委員会	多古町史 上・下巻 第3章第4節中世後期 他	多古町
066	1985	D	山田勝治朗	山田町史 中世編 第2章第4節中世城館跡	山田町
067	1985	E	野栄町史編纂委員会	野栄町史 通史編 第二章第三節野手氏と野手館	野栄町
068	1985	J	牛房茂行	袖ヶ浦町史 通史編 第3編第4章中世の城址	袖ヶ浦町史編纂委員会
069	1986	B	村田一男	成田市史 中世・近世編 第4章市域の中世城郭史と伝承	成田市
070	1986	F	小高春雄	大網白里町史 第2章中世・大網白里の城館址	大網白里町
071	1986	F	伊藤一男	成東町史 第二章第四節房総の動乱と成東城	成東町
072	1986	I	伊藤正雄 他	市原市史 中巻 第二章南北朝時代	市原市
073	1987	B	高橋三千男	酒々井町史 通史編上巻 第四章第四節酒々井地方の中世城跡	酒々井町
074	1988	F	伊藤一男	山武町史 通史編 二章 四節・五節戦国房総の動乱と土豪層	山武町
075	1988	F	小高春雄	山武町史 通史編 二章 六節山武町の中世城郭	山武町
076	1990	D	植竹好明 他	下総町史 原始・古代・中世編	下総町史編さん委員会
077	1991	A	高橋三千男 他	船橋市史 原始・古代・中世編	船橋市
078	1991	C	村田一男 他	八千代市の歴史 資料編 原始・古代・中世	八千代市
079	1991	D	日下武史 他	小見川町史 通史編	小見川町史編さん委員会
080	1991	H	伊藤一男 他	大多喜町史	大多喜町史編さん委員会
081	1993	C	村田六郎太 他	絵にみる図でよむ千葉市図誌	千葉市史編さん委員会
082	1993	H	加藤晋平 他	御宿町史	御宿町史編さん委員会
083	1993	K		富山町史	富山町史編さん委員会
084	1993	L,M	藤澤良祐	瀬戸市史 陶磁史篇四	愛知県瀬戸市
085	1994	B	遠山成一 他	図説成田の歴史 (市域の武将と中世城館跡)	成田市
086	1996	F	佐脇敬一郎 他	芝山町史 資料集2 中世編	芝山町
087	1997	A	佐脇栄一郎 他	柏市史 原始・古代・中世編 (市域の中世城館跡)	柏市教育委員会
088	1997	I	柴田龍司・滝川恒昭	袖ヶ浦市史基礎資料調査報告書7 袖ヶ浦の中世城館跡	袖ヶ浦市教育委員会
089	1998	C	保立道久	「鎌倉時代、千葉の「うり酒」」「千葉県の歴史 資料編 中世2」付録 「県史のしおり」	千葉県
090	1998	K	滝川恒昭・遠山成一 他	天津小湊町の歴史 上巻	天津小湊町
091	1998	L	笠生 衛・柴田龍司 他多数	千葉県の歴史 資料編 中世1 考古資料	千葉県

第14表 文献目録② (雑誌・定期刊行物)

番号	発行年	地域	編著者	論文名	書名	発行者
001	1906	K		安房城址	風俗画報 347	
002	1915	M	梅原末治	越後敦賀郡の遺跡遺物	考古学雑誌 第5巻第8号	考古学界
003	1917	B	篠丸頼彦	佐倉城とその周辺	月刊文化財 昭和46年11月号	第一法規
004	1917	H	森 輝・川村 優	大多喜藩の調査覚え書	千葉文華 5号	千葉県文化財保護協会
005	1926	K	鳥羽正雄	里見氏の古城址	歴史地理 53-4	歴史地理学会
006	1933	K	大野大平	房総里見氏談 6	房総郷土研究 第1巻第3号	千葉県師範学校郷土研究室
007	1933	K	大野大平	房総里見氏談 7	房総郷土研究 第1巻第4号	千葉県師範学校郷土研究室
008	1934	A	浦邊仙橋	千葉県船橋町花輪城址踏査報告	武蔵野 21巻12号	武蔵野文化協会
009	1934	K	大野大平	安西景益館址考	房総郷土研究 第1巻第8号	千葉県師範学校郷土研究室
010	1935	K	松川 清	環斎屋敷考	房総郷土史研究 第2巻第3号	千葉県師範学校郷土研究室
011	1936	D	塩原伝・後藤寿一	下総国香取郡米沢村及其附近の遺跡並びに遺物に就いて	考古学雑誌 第26巻第11号	日本考古学会
012	1938	K	大野大平	屋代家の遺蹟	房総郷土研究 第5巻第9号	千葉県師範学校郷土研究室
013	1954	B	相京晴次	将門山千葉故城址考	佐倉地方文化 5号	佐倉地方郷土文化研究会
014	1955	B	万年 一	臼井城について	佐倉地方文化 7号	佐倉地方郷土文化研究会
015	1955	B	成田史談会	印旛の古城址	成田史談 1号	成田史談会
016	1955	C	吉田 格	千葉県城の台貝塚	石器時代 1号	

②雑誌類

番号	発行年	地域	編著者	論文名	書名	発行者
017	1957	B	武藤 彬	佐倉城の戦略的価値	佐倉地方文化 9号	佐倉地方郷土文化研究会
018	1958	K	千葉耀胤	房総史料其の二十四 館山城址一〜六	房総及び房総人 275〜280	房総社
019	1958	K	藤田正興	風雲稲村城	旭光 33の3	千葉県旭光会
020	1959	L	内田栄一	千葉県の城	城郭 1-4	日本城郭協会
021	1960	G	古市貞男	本納城落城	房総展望 14-6	房総展望社
022	1960	L	内田栄一	千葉県の城	城郭 2-2〜4	日本城郭協会
023	1961	A	酒巻省三	箕輪城址について	松戸史談会紀要 1	松戸史談会
024	1961	F	篠丸頼彦	東上総の豪族屋敷村	房総研究 第1集	千葉県地理学会誌
025	1962	D	小笠原長和	建武期の千葉氏と下総千田荘	史観 65・66・67合併号	早稲田大学史友会
026	1962	K	山岡俊明	房総里見氏研究の問題点	房総史学 4号	千葉県高等学校教育会
027	1964	J	桜井成廣	海賊城としての百首	城郭 6-2	日本城郭協会
028	1965	D	西村正衛	千葉県香取郡神崎町西ノ城貝塚	古代 45・46合併号	早稲田大学考古学会
029	1965	H	渡辺包夫	大多喜城天主絵図と本丸絵図	総南文化 4号	総南文化研究会
030	1966	B	平田鹿郎	佐倉城の今昔	房総及び房総人 370〜374	房総社
031	1966	B	篠丸頼彦	下総白井城と節戸城	城郭 8-6	日本城郭協会
032	1966	H	落合忠一	池和田城と多賀蔵人	南総郷土文化研究会誌	南総郷土文化研究会
033	1967	B	篠丸頼彦	佐倉城の歴史	房総及び房総人 381〜388	房総社
034	1967	H	平野元三郎	天正以前の大多喜城下町	千葉文華 1号	千葉県文化財保護協会
035	1967	H	渡辺包夫	大多喜城の変遷	千葉文華 1号	千葉県文化財保護協会
036	1967	H	篠丸頼彦	大多喜城下町の構造と機能	千葉文華 1号	千葉県文化財保護協会
037	1967	H	森 輝・川村 優	大多喜藩の調査覚え書	千葉文華 1号	千葉県文化財保護協会
038	1967	I	落合忠一	市原市の城郭跡について	市原地方史研究 3	市原地方史研究会
039	1967	K	田村逸郎	要害城縁起	鴨川 6・7号	鴨川図書館
040	1967	K	野村みのる	鴨川史跡・東条族と金山城跡	鴨川 8号	鴨川図書館
041	1968	H	森 輝・川村 優	大多喜藩の調査覚え書	千葉文華 2号	千葉県文化財保護協会
042	1969	C	鈴木三郎	大椎城と千葉城	特報 223	世味調査研究所
043	1969	C	鈴木三郎	土気城興亡の跡	特報 222	世味調査研究所
044	1969	H	森 輝・川村 優	大多喜藩の調査覚え書	千葉文華 3号	千葉県文化財保護協会
045	1969	I	田丸三二	椎津城跡雑感	市原地方史研究 6号	市原地方史研究会
046	1969	L	清川一史	城郭・別冊日本中世城郭資料第1集	城郭	日本城郭学生研究会
047	1970	A	村崎 勇	鎌ヶ谷町の佐津間城跡について	房総文化 11号	房総文化研究会
048	1970	H	森 輝・川村 優	大多喜藩の調査覚え書	千葉文華 4号	千葉県文化財保護協会
049	1970	H	小高 清	行川妙泉寺の由緒と狩野氏	総南文化 12号	総南文化研究会
050	1970	I	落合忠一	佐瀬城跡を訪ねて	市原地方史研究 7号	市原地方史研究会
051	1970	I	落合忠一	佐瀬城跡を訪ねて	南総郷土文化研究会会誌 7号	南総郷土文化研究会
052	1970	J	千葉新聞社	郷土史周辺・久留里城址とその周辺	週刊千葉 279〜284	千葉新聞社
053	1970	L	清川一史・野口 実	城郭・別冊日本中世城郭資料第3集	城郭	日本城郭学生研究会
054	1971	C	尾崎喜左雄	千葉県習志野市鷺沼古墳附城跡	日本考古学年報(昭和41年) 19	日本考古学協会
055	1971	H	小高 清	狩野氏の光福寺建設と作田明王院の伝承	総南文化 13号	総南文化研究会
056	1971	J	千葉新聞社	郷土史周辺 千本城とその周辺	週刊千葉 285・286	千葉新聞社
057	1971	J	清川一史	上総真里谷城	城郭史研究 11号	城郭史研究会
058	1971	L	清川一史	房総の中世城郭	千葉県の歴史 2号	千葉県
059	1971	L	中村恵次	千葉県中世遺跡調査	千葉県の歴史 2号	千葉県
060	1971	L	千葉県教育委員会	中近世遺跡調査	千葉県の文化 4号	千葉県教育庁文化課
061	1972	B	野口 実	本佐倉城	城郭史研究 12・13合併号	城郭史研究会
062	1972	C	後藤和民	大椎城址の調査(上)	千葉の歴史 4号	千葉県
063	1972	H	森 輝・川村 優	大多喜藩の調査覚え書	千葉文華 6号	千葉県文化財保護協会
064	1972	H	小高 清	伊北城と狩野氏	総南文化 14号	総南文化研究会
065	1972	H	渡辺包夫	大多喜城天守絵図と本丸絵図	総南文化 14号	総南文化研究会
066	1972	J	篠丸頼彦	上総の久留里城址	千葉文華6号	千葉県文化財保護協会
067	1972	J	鈴木 浩	まぼろしの亀山城 I	西上総文化会報 33号	西上総文化会
068	1972	K	君塚文雄	中近世遺跡調査の中から神余城址・金山城址	館山市文化財保護協会会報 5	館山市文化財保護協会
069	1972	K	生稲謙爾	岡本城址	富浦の文化 1号	富浦町教育委員会
070	1973〜75	A	佐藤立身	城址めぐり	郷土と自然 17〜30	柏市の文化財と自然を守る会
071	1973	C	後藤和民	大椎城址の調査(下)	千葉県の歴史 5号	千葉県
072	1973	H	渡辺包夫	城下町大多喜の今昔	千葉文華 7号	千葉県文化財保護協会
073	1973	H	小高 清	伊北城と狩野氏(二)	総南文化 15号	総南文化研究会
074	1973	K	落合忠一	加茂の中古城址について	南総郷土文化研究会誌 8号	南総郷土文化研究会
075	1973	L	伊藤一男	千葉県下の中世の城郭遺跡について	地方史研究 126号別冊	地方史研究協議会
076	1974	B	相川日出雄	四街道の中世遺跡	四街道の文化財 1号	四街道町教育委員会
077	1974	C	村田一男・安達 新	八千代市中世城跡1974年度調査	史学報 5号	県立八千代高校史学会
078	1974	H	加藤晋平・橋口定志	千葉県勝浦市における発掘調査(1)	考古学ジャーナル No98	ニューサイエンス社
079	1974	H	小高 清	伊北の狩野氏(その1)	千葉文華 8号	千葉県文化財保護協会
080	1974	J	鈴木 浩	まぼろしの亀山城II	西上総文化会報 35号	西上総文化会
081	1974	K	高橋 実	金山城について	嶺岡 1号	鴨川市郷土史研究会
082	1974	L	伊藤一男	房総における中世の城郭遺跡	房総の郷土史 1号	千葉県郷土史研究連絡協議会
083	1974	L	奥田直栄	これからの城郭研究	歴史読本 19巻10	新人物往来社
084	1975	J	朝生得一	亀山城の秘話	上総文化 2号	上総郷土文化研究会
085	1975	J	府間 清	房総城址探訪 2・10	房総及び房総人 476・484号	房総社
086	1975	J	田村 実	和田氏終えんの地・上総荏柄城	千葉文華 9号	千葉県文化財保護協会
087	1975	K	府間 清	房総史料 4・5	房総及び房総人 478・479号	房総社
088	1976	A	古宮隆信	根戸城遺跡	房総史学 17号	千葉県高校教育研究会歴史部会
089	1976	A	佐藤立身	中馬場の地名の由来と根戸台地の中世城郭	東葛地区研究 2.3.4.5.6.	
090	1976	C	八千代高校史学会	八千代市・中世の城郭「吉橋城」	史学報 7号	県立八千代高校史学会

番号	発行年	地域	編著者	論文名	書名	発行者
091	1976	C	宍倉昭一郎	千葉市猪鼻城址と周辺の遺跡	房総史学 17号	千葉県高校教育研究会歴史部会
092	1976	D	小松 繁	平良文館址考	房総の郷土史 4号	千葉県郷土史研究連絡協議会
093	1976	E	伊藤一男	匝瑳内山城跡の発掘調査(概報)	房総の郷土史 4号	千葉県郷土史研究連絡協議会
094	1976	E	島田 孝	見広夜話	海上町史研究 3号	海上町史編纂委員会
095	1976	J	府間 清	房総城址探訪 11・12・13・15・19	房総及び房総人 485~489・493号	房総社
096	1976	L	鈴木 浩	まぼろし城を尋ねて	上総文化 3号	上総郷土文化研修会
097	1977	D	小林東石	東庄平山記	東庄町史研究 2号	東庄町史編纂委員会
098	1977	K	生稲謙爾	宮本城と里見家の内紛	富浦の文化 3号	富浦町教育委員会
099	1977	K	君塚文雄	城郭の変遷と房州の古城	館山市文化財保護協会会報 10	館山市文化財保護協会
100	1977	M	中田 英	地下式壙研究の現状について	神奈川考古 2号	神奈川考古同人会
101	1978	C	高山 実	幻の猪鼻館	房総の郷土史 特集号	千葉県郷土史研究連絡協議会
102	1978	F	清川一史	山武郡の中世城郭	歴史手帖 52	名著出版
103	1978	F	伊藤一男	中世後期土豪層に関する研究序説	房総の郷土史 12号	郷土史研究連絡協議会
104	1978	H	小高 清	伊南城の落城について	房総の郷土史特集号	千葉県郷土史研究連絡協議会
105	1978	L	白井常之	古城址踏査雑記	千葉県の歴史 16号	千葉県
106	1978	L	伊禮正雄	両総における中世城址について	千葉県の歴史 15号	千葉県
107	1979	A	花島興一	東葛飾地方城館址の基礎的研究	船橋考古 8・9合併号	
108	1979	A	綿貫啓一	中世船橋略史	船橋市史談会報 2号	船橋市史談会
109	1979	E	吉岡清治	田方山砦と一口の短刀	海上町史研究 11号	海上町史編纂委員会
110	1979	H	清水 豊	上総権介平広常の居城について一布施城・柳沢城一	東総文化 3号	東総文化連絡協議会
111	1979	H	川城昭三	万木城とその城主	東総文化 3号	東総文化連絡協議会
112	1979	I	半田堅三	本邦地下式壙の類型学的研究	伊知波良 2	伊知波良刊行会
113	1979	K	川戸 彰	歴史をたずねて 朝夷郡と丸氏	千葉県の歴史 17号	千葉県
114	1979	L	服部英雄	千葉氏研究の成果と今後の課題	房総の郷土史 7号	千葉県郷土史研究連絡協議会
115	1979	L	服部英雄	書評「論集千葉氏研究の諸問題」	史学雑誌 88-1	史学会
116	1980	A	松下邦夫	最近の私の原稿などから	松戸史談 20号	松戸史談会
117	1980	C	宍倉健吉	史跡をたずねて・生実周辺	千葉県の歴史 19号	千葉県
118	1980	C	八千代高校史学会	正覚院館址と仏像	史学報 11号	県立八千代高校史学会
119	1980	D	伊藤一男	平忠常の反乱と大友伝説	東庄町史研究 4号	東庄町史編纂委員会
120	1980	H	橋口定志	上総伊北・大野城について	千葉県の歴史 19号	千葉県
121	1980	I	府間 清	御園生城址と池和田城址	さざなみ 20号	地域研究会
122	1980	J	牛房茂行	木更津市真里谷城址の調査	考古学ジャーナル No179	ニューサイエンス社
123	1980	L	菊池真太郎	発掘された中世城郭について	千葉県文化財センター研究紀要 5	千葉県文化財センター
124	1980	L	千葉県文化財センター	文献目録	千葉県文化財センター研究紀要 5	千葉県文化財センター
125	1981	A	森田洋平 他	共同研究 高城氏の研究 I	我孫子市史研究 5号	我孫子市教育委員会
126	1982	A	森田洋平	小金「大谷口城」考-共同研究高城氏の研究 II	我孫子市史研究 6号	我孫子市教育委員会
127	1982	B	専修大学城郭研究同好会	本佐倉城・白井城・師戸城	樹形山 5号	専修大学城郭研究同好会
128	1982	D	府間 清	謎深い御所台城址	さざなみ 26号	地域研究会
129	1982	F	古川 力	酒井東金城主の衆の編成について	房総路 10号	押尾孔版社
130	1982~	K	館山市立博物館	東京湾岸戦国史跡	館山市立博物館報 1~	館山市立博物館
131	1983	A	辺見 端	法花坊遺跡の伝説考	國學院雑 84-9	國學院大學
132	1983	A	森田洋平	匝瑳氏の動向-共同研究高城氏の研究 III-	我孫子市史研究 7号	我孫子市教育委員会
133	1983	H	中村てい	潤井戸の陣屋	上総市原 5号	市原市文化財研究所
134	1983	J	鈴木 浩	久留里城とその周辺	千葉県の歴史 26号	千葉県
135	1983	K	川名 登	館山城についての一考察	商経論集 16号	千葉敬愛短期大学
136	1984	A	船橋郷土資料館	船橋の中世城址	資料館だより 31号	船橋郷土資料館
137	1984	A	高橋三千男	中世の船橋-城址と文献-「中世城址について」	第23回郷土史講座講義目録	船橋郷土資料館
138	1984	B	森崎鉄男	鹿渡のろし台址群(仮称)によせて	四街道の文化財 10号	四街道市文化財審議会
139	1984	C	平岡和夫・大和久震平	小原子砦について	芝山町史研究 2号	芝山町
140	1985	B	印旛郡市文化財センター	「北大堀遺跡」	印旛郡市文化財センター年報 1	印旛郡市文化財センター
141	1985	B	印旛郡市文化財センター	「猿楽場遺跡」	印旛郡市文化財センター年報 1	印旛郡市文化財センター
142	1985	B	岡田茂弘	白井城の謎	うすい 創刊号	白井文化懇話会
143	1985	G	佐久間 甫	上総氏の興亡と大柳館址	千葉文華 20号	千葉県文化財保護協会
144	1985	I	印旛市原市文化財センター	「石川城跡」	市原市文化財センター年報 昭和157・58年度	印旛市原市文化財センター
145	1985	I	印旛市原市文化財センター	「村上城跡」	市原市文化財センター年報 昭和159年度	印旛市原市文化財センター
146	1985	J	平野雅之	「真里谷城跡」	君津郡市文化財センター年報 No3	君津郡市文化財センター
147	1985	J	光江 章	「千本城・大戸城跡」	君津郡市文化財センター年報 No3	君津郡市文化財センター
148	1985	M	江崎 武	中世地下式壙の研究	古代探叢 II	早稲田大学出版部
149	1986	A	松下邦夫	中世末の流山を考ふる(1)-中世城郭から流山市の中世後期史を類推する-	流山市史研究 4号	流山市
150	1986	B	遠山成一・外山信司	岩富原氏の研究	房総史学 26号	千葉県高校教育研究会歴史部会
151	1986	B	印旛郡市文化財センター	「堀込城跡」	印旛郡市文化財センター年報 2	印旛郡市文化財センター

②雑誌類

番号	発行年	地域	編著者	論文名	書名	発行者
152	1986	B	柴田龍司	戦国時代末期の城郭から見た権力構造	千葉県文化財センター研究紀要 10	財千葉県文化財センター
153	1986	F	財山武郡南部地区文化財センター	「小野城跡」	山武郡南部地区文化財センター年報 No1	財山武郡南部地区文化財センター
154	1986	G	財茂原市文化財センター	ふるさとの遺跡 (中世) - 神田山第3遺跡 -	郷土の文化財 4	財茂原市文化財センター
155	1986	H	小高 清	伊北の狩野氏	房総の郷土史 14号	千葉県郷土史研究連絡協議会
156	1986	I	財市原市文化財センター	「大羽根城郭跡」	市原市文化財センター年報昭和60年度	財市原市文化財センター
157	1986	M	小林 克	地下室考	物質文化 (47)	物質文化研究会
158	1986	M	池上 悟	地下式墳墓見	立正史学 59号	立正大学史学会
159	1987	A	松下邦夫	中世末の流山を考える (2)	流山市史研究 第5号	流山市
160	1987	B	柴田龍司	中世城郭の外郭部について	中世城郭研究 創刊号	中世城郭研究会
161	1987	B	財印旛郡市文化財センター	四街道市和良比遺跡 (堀込遺跡)	印旛郡市文化財センター年報3	財印旛郡市文化財センター
162	1987	B	財印旛郡市文化財センター	成田市押畑子の神遺跡	印旛郡市文化財センター年報3	財印旛郡市文化財センター
163	1987	G	財茂原市文化財センター	神田山第III遺跡・本納城外郭跡	茂原市文化財センター年報No1	財茂原市文化財センター
164	1988	B	外山信司	戦国期佐倉の人々	千葉県の歴史 36号	千葉県
165	1988	B	黒田基樹	後北条氏における支城領形成過程 - 下総佐倉領の場合 -	佐倉市史研究 8号	佐倉市史編さん委員会
166	1988	B	印旛郡市文化財センター	成田市押畑子の神城跡	印旛郡市文化財センター年報4	財印旛郡市文化財センター
167	1988	B	浜名敏夫	本土寺過去帳と白井	うすい 3号	白井文化懇話会
168	1988	F	遠山成一	東金酒井氏の居城 - 東金城について -	中世城郭研究 2号	中世城郭研究会
169	1988	I	財市原市文化財センター	白船城跡	市原市文化財センター年報昭和61年度	財市原市文化財センター
170	1988	I	財君津郡市文化財センター	金谷城跡	君津郡市文化財センター年報6	財君津郡市文化財センター
171	1988	K	松岡 進	戦国期城館遺構の史料的利用をめぐる	中世城郭研究 2号	中世城郭研究会
172	1988	M	井上哲朗	村の城について - 上野国三波川溪谷の城館址調査から -	中世城郭研究 2号	中世城郭研究会
173	1989	F	財山武郡南部地区文化財センター	小野城跡	山武郡南部地区文化財センター年報 4	財山武郡南部地区文化財センター
174	1989	G	財茂原市文化財センター	岩川遺跡	茂原市文化財センター年報 3	財茂原市文化財センター
175	1989	I	財市原市文化財センター	白船城跡 (2次)	市原市文化財センター年報昭和62年度	財市原市文化財センター
176	1989	J	財君津郡市文化財センター	蔵玉砦跡	君津郡市文化財センター年報7	財君津郡市文化財センター
177	1989	J	鳴田浩司	飯野陣屋跡出土遺物の新知見	研究連絡誌 30号	財千葉県文化財センター
178	1989	L	千葉城郭研究会	千葉県内城郭研究史・文献目録他	千葉城郭研究 1号	千葉城郭研究会
179	1989	L	柴田龍司	房総の『戦国期城下集落』小考	中世城郭研究 3号	中世城郭研究会
180	1990	A	中山吉秀	手賀沼周辺の考古学的調査	沼南町史研究 1号	沼南町史編さん室
181	1990	A	植竹好明	中世史研究序説 - 沼南町地域に関して -	沼南町史研究 1号	沼南町史編さん室
182	1990	A	千野原靖方	下総市川城の所在について	千葉文華 26	千葉県文化財保護協会
183	1990	A	平岡 豊	松戸の中世城館址 (-)	戸定論叢 1号	松戸市戸定歴史館
184	1990	B	財印旛郡市文化財センター	成田市長田要害遺跡	印旛郡市文化財センター年報5	財印旛郡市文化財センター
185	1990	B	財印旛郡市文化財センター	酒々井町本佐倉長勝寺館跡	印旛郡市文化財センター年報5	財印旛郡市文化財センター
186	1990	B	松村 侑	小林城跡とその地名	印西町の歴史 6号	印西町町史編さん室
187	1990	B	外山信司	戦国期佐倉についての覚え書 - 本佐倉城とその城下をめぐる -	佐倉市史研究 9号	佐倉市史編さん室
188	1990	C		生実城跡	千葉市文化財調査協会年報 2 昭和62,63年度	財千葉市文化財調査協会
189	1990	K	高梨俊夫	下ノ坊館跡	季刊自然と文化 30号	観光資源保護財団
190	1990	L	八巻孝夫	後北条氏領国の馬出	中世城郭研究 4号	中世城郭研究会
191	1991	A	松下邦夫	名都借の集落と寺院	流山市史研究 8号	流山市史編さん係
192	1991	A	長塚 孝	築田氏家臣鮎川氏の動向	郷土研究さしま 4号	猿島町史編さん委員会
193	1991	A	松下邦夫	名都借の集落と寺院 - 中世末の流山を考える (五) -	流山市史研究 8号	流山市教育委員会
194	1991	B	財印旛郡市文化財センター	酒々井町本佐倉南大堀遺跡	印旛郡市文化財センター年報6	財印旛郡市文化財センター
195	1991	B	木内達彦	長勝寺脇館跡	千葉史学 18号	千葉歴史学会
196	1991	B	財印旛郡市文化財センター	東和田城跡	印旛郡市文化財センター年報7	財印旛郡市文化財センター
197	1991	B	財印旛郡市文化財センター	岩戸城跡	印旛郡市文化財センター年報7	財印旛郡市文化財センター
198	1991	B	財印旛郡市文化財センター	本佐倉城跡	印旛郡市文化財センター年報7	財印旛郡市文化財センター
199	1991	B	柴田龍司	下総本佐倉城跡について - 「惣構」の検討 -	帝京大学山梨文化財研究所研究報告 4集	帝京大学山梨文化財研究所
200	1991	C	財千葉県文化財センター	ムコアラク遺跡	千葉県文化財センター年報16	財千葉県文化財センター
201	1991	D	三島正之	小野城をめぐる	中世城郭研究 5号	中世城郭研究会
202	1991	G	財長生郡市文化財センター	戦国時代の大名と城郭跡 - 長南城の調査から -	郷土の文化財 12号	財長生郡市文化財センター
203	1991	G	津田芳男	岩川遺跡 (館跡)	千葉史学 18号	千葉歴史学会
204	1991	H	井上哲朗	大野城跡の発掘調査	千葉史学 18号	千葉歴史学会

番号	発行年	地域	編著者	論文名	書名	発行者
205	1991	I, J	佐藤博信	房総における天文の内乱の歴史的位置—とくに上総真里谷武田氏の動向を中心として—	おだわら—歴史と文化 5号	小田原市
206	1991	J	諸愚知義	金谷城跡の調査	千葉史学 18号	千葉歴史学会
207	1991	J	勸君津都市文化財センター	蔵玉砦址	君津都市文化財センター年報 8	勸君津都市文化財センター
208	1991	K	高梨俊夫	下ノ坊B地点	千葉史学 18号	千葉歴史学会
209	1991	L	小野正敏	房総の城館出土陶磁器の問題	千葉史学 18号	千葉歴史学会
210	1991	L	柴田龍司	中世城館跡と考古学—課題と展望—	千葉史学 18号	千葉歴史学会
211	1991	L	笹生 衛	房総の中世土器様相について	史館 23号	史館同人
212	1992	A	市村高男	下総崎房秋葉孫兵衛旧蔵模写文書集の紹介	中央学院大学教養論叢 4巻2号	中央学院大学
213	1992	A	松下邦夫	天正18年の流山地方	流山市史研究 9号	流山市教育委員会
214	1992	A	中山吉秀	鎌ヶ谷市および周辺地域の中世城郭について	鎌ヶ谷市史研究 5号	鎌ヶ谷市教育委員会
215	1992	A	平岡 豊	松戸の中世城館址(二)	戸定論叢 2号	松戸市戸定歴史館
216	1992	A	中山文人	永祿期の小金城	千葉城郭研究 2号	千葉城郭研究会
217	1992	B	野口 実	鎌倉幕府の成立と下総白井氏一族	鎌倉 69	鎌倉文化研究会
218	1992	B	高橋健一	戦国時代佐倉の鹿島宿—伝承の検討を中心として—	房総の郷土史 20号	千葉県郷土史研究連絡協議会
219	1992	B	末武直則	成田市東和田城跡	印旛都市文化財センター年報 8	勸印旛都市文化財センター
220	1992	B	青山 博	佐倉市石川阿ら地遺跡	印旛都市文化財センター年報 8	勸印旛都市文化財センター
221	1992	B	木内達彦	酒々井町本佐倉城跡	印旛都市文化財センター年報 8	勸印旛都市文化財センター
222	1992	B	木内達彦	内方遺跡出土の内耳鍋について	千葉城郭研究 2号	千葉城郭研究会
223	1992	C	勸千葉市文化財調査協会	「生実城跡」	平成3年度千葉県遺跡調査研究発表会発表要旨	千葉県文化財法人連絡協議会
224	1992	C	吉田伸之	「生実陣屋と北生実村」	平成3年度特別講演会資料	勸千葉市文化財調査協会
225	1992	D	勸香取都市文化財センター	「久井崎城跡」	平成3年度千葉県遺跡調査研究発表会発表要旨	千葉県文化財法人連絡協議会
226	1992	D	三島正之	下総崎崎城跡	中世城郭研究 6号	中世城郭研究会
227	1992	D	外山信司	「原文書」に見る森山城—戦国末期における支城の考察—	千葉城郭研究 2号	千葉城郭研究会
228	1992	D	椎名幸一	次浦城について	千葉城郭研究 2号	千葉城郭研究会
229	1992	D	石井純一	仮称油田城・油田砦について	千葉城郭研究 2号	千葉城郭研究会
230	1992	D, I	小高春雄	城郭史におけるひとつの画期—資料にみる地域の例から—	千葉城郭研究 2号	千葉城郭研究会
231	1992	G	遠山成一	書評・小高春雄「長生の城」	千葉城郭研究 2号	千葉城郭研究会
232	1992	H	築比治正治	夷隅川流域の中近世城館の分布及び概要について	研究員紀要	千葉県立総南博物館
233	1992	H	吉野利春	大多喜根古屋城跡とその周辺	研究員紀要	千葉県立総南博物館
234	1992	H	鈴木正一	近世大多喜城跡について	研究員紀要	千葉県立総南博物館
235	1992	H	吉野利春	山中城跡(堀之内館跡)とその周辺	研究員紀要	千葉県立総南博物館
236	1992	K	滝川恒昭	房総里見氏の歴史過程における「天文の内訌」の位置付け—関係資料の紹介をかねて—	千葉城郭研究 2号	千葉城郭研究会
237	1992	L	橋口定志	1991年の考古学動向(中近世(東日本))	考古学ジャーナル No.347	ニューサイエンス社
238	1992	L	柴田龍司	堀跡や曲輪から出土する石塔	中世城郭研究 6号	中世城郭研究会
239	1992	L	柴田龍司	「曲輪」について	千葉城郭研究 2号	千葉城郭研究会
240	1992	L	井上哲朗	千葉県における地域別城郭研究史II	千葉城郭研究 2号	千葉城郭研究会
241	1992	L	千葉城郭研究会	千葉県に関する城郭文獻目録補遺	千葉城郭研究 2号	千葉城郭研究会
242	1992	L	佐藤博信	小弓公方足利氏の成立と展開	歴史学研究 No.635	歴史学研究会
243	1993	B	柴田龍司	本佐倉城「惣構」の再検討—長勝寺館跡の発掘調査の成果を通して—	中世城郭研究 7号	中世城郭研究会
244	1993	B	林田利之	駒井野荒追遺跡検出の中世の「屋敷跡」について	成田市史研究 17号	成田市教育委員会
245	1993	B	齋藤 毅 他	小菅天神台II遺跡	印旛都市文化財センター年報 9	勸印旛都市文化財センター
246	1993	B	川津和久 他	本佐倉城跡	印旛都市文化財センター年報 9	勸印旛都市文化財センター
247	1993	B	大澤 孝 他	本佐倉大堀遺跡	印旛都市文化財センター年報 9	勸印旛都市文化財センター
248	1993	C		生実城跡	千葉市文化財調査協会年報 5 平成3年度	勸千葉市文化財調査協会
249	1993	D	外山信司	「大慈恩寺文書」の国分一族と大戸庄堀籠村	中世房総 7号	房総中世史研究所・斎書房
250	1993	D	吉田博之	香取郡の城郭—大須賀川流域を中心として—	平成4年度千葉県遺跡調査研究発表会発表要旨	千葉県文化財法人連絡協議会
251	1993	E	滝川恒昭	中島城と宮内氏	千葉県史料研究財団だより創刊号	勸千葉県史料研究財団
252	1993	E	勸山武都市文化財センター	田向城跡	山武都市文化財センター年報 8	勸山武都市文化財センター
253	1993	G	津田芳男	長尾砦跡	長生都市文化財センター年報 7	勸長生都市文化財センター
254	1993	I	鈴木英啓	私の考古学日記(能満府中城と市原の城郭について)	市原市文化財センター研究紀要 II	勸市原市文化財センター
255	1993	I	滝川恒昭	中世の東京湾と養老川	千葉県史料研究財団だより第3号	勸千葉県史料研究財団
256	1993	I	半田堅三	山木白船城跡	市原市文化財センター年報 平成2年度	勸市原市文化財センター

②雑誌類

番号	発行年	地域	編著者	論文名	書名	発行者
257	1993	I	半田堅三	地下式墳再考	市原市文化財センター研究紀要II	市原市文化財センター
258	1993	J	柴田龍司	笹子城跡の概要	研究連絡誌 37号	市原市文化財センター
259	1993	J	柴田龍司	小櫃川流域における中世遺跡の変遷(中世後期の様相)	研究連絡誌 37号	市原市文化財センター
260	1994	A	長塚 孝	旧利根川下流域の城と町ー古河・栗橋・関宿を中心にー	野田市史研究 5号	野田市
261	1994	A	田嶋昌治	松戸城について	千葉史学 25号	千葉歴史学会
262	1994	B	遠山成一	戦国期成田地域に関するノート	成田市史研究 19号	成田市教育委員会
263	1994	B	遠山成一	戦国期成田地域に関するノートー幡谷氏と馬場氏の考察を中心にー	成田市史研究 18号	成田市教育委員会
264	1994	B	外山信司	「雲玉和歌集」と戦国期佐倉の文芸活動	戦国史研究 27号	戦国史研究会
265	1994	B	外山信司	白井庄根古屋城と塩古栗飯原氏について	千葉城郭研究 3号	千葉城郭研究会
266	1994	C	築瀬裕一	生実城跡	千葉市文化財調査協会年報 6 平成4年度	市原市文化財センター
267	1994	C	石井 進	たまたみす風景ー中世荘園行ー	みすず 36巻3号	みすず書房
268	1994	D,F	遠山成一	両総国境に分布する城館跡についてー栗山川・高谷川水系を中心にー	千葉城郭研究 3号	千葉城郭研究会
269	1994	F	遠山成一	戦国後期下総における陸上交通について	千葉史学 24号	千葉歴史学会
270	1994	H	市村高男	豊臣政権と房総ー里見分国上総没収をめぐるー	千葉県史研究 2号	市原市文化財センター
271	1994	H	津田芳夫・矢野淳一	大多喜城本丸出土遺物について	千葉県立総南博物館年報 1	千葉県立総南博物館
272	1994	I	木對和紀・桜井敦史	分目要害遺跡	市原市文化財センター遺跡発表会発表要旨	市原市文化財センター
273	1994	I	浜名敏夫	小弓公方の家臣上総権津氏	市原地方史研究 18号	市原市教育委員会
274	1994	I	浜名敏夫	上総権津氏の居城について	千葉城郭研究 3号	千葉城郭研究会
275	1994	J		飯野陣屋跡	平成5年度 千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報	千葉県教育庁生涯学習部文化課
276	1994	J	佐藤博信	房総の中世後期における寺院と権力ー特に日我「妙本寺年中行事」の検討を通してー	日本史研究 378号	日本史研究会
277	1994	K	佐藤博信	二階堂氏と安房国北部ー特に「二階堂文書」を通じてー	鎌倉 74号	鎌倉文化研究会
278	1994	K	滝川恒昭	房総里見氏と江戸湾の水上交通	千葉史学 24号	千葉歴史学会
279	1994	L	滝川恒昭	戦国期江戸湾岸における「海城」の存在形態	千葉城郭研究 3号	千葉城郭研究会
280	1994	L	柴田龍司	村落型城郭から都市型城郭へ	千葉城郭研究 3号	千葉城郭研究会
281	1994	L	松原宏昌	房総における複合寄生型代官所建築の概念	千葉城郭研究 3号	千葉城郭研究会
282	1994	L	千葉城郭研究会	千葉県における地域別城郭研究史III	千葉城郭研究 3号	千葉城郭研究会
283	1994	L	千葉城郭研究会	千葉県に関する城郭文献目録(補遺2)	千葉城郭研究 3号	千葉城郭研究会
284	1994	M	原田昭一	大分県における中世後半期の墓制変革ー地下式坑の成立と展開を通してー	同志社大学考古学シリーズVI	同志社大学考古学シリーズ刊行会
285	1995	A	田嶋昌治	松戸市殿平賀地域の中世城郭について	松戸史談 35号	松戸史談会
286	1995	B	井上哲朗	中世城郭の築城から廃城ー印西町小林城跡の発掘調査からー	千葉県文化財センター研究紀要 16号	市原市文化財センター
287	1995	B	渋谷芳則	石川館址	印旛都市文化財センターー千葉県内の発掘成果を通してー	市原市文化財センター
288	1995	B	高橋三千男	中世城址と地名	佐倉市史研究 第10号	佐倉市史編さん委員会
289	1995	C	築瀬裕一	生実城跡	千葉市文化財調査協会年報 7 平成5年度	市原市文化財センター
290	1995	C	築瀬裕一	南屋敷跡	平成6年度千葉市遺跡発表会要旨	市原市文化財センター
291	1995	C	白根義久	生実城跡	平成6年度千葉市遺跡発表会要旨	市原市文化財センター
292	1995	C	柴田龍司	二つのおゆみ城ー小弓城と生実城ー	千葉いまむかし No.8	千葉市教育委員会
293	1995	C	武藤健一	正覚院館跡・持田遺跡	平成6年度八千代市埋蔵文化財調査年報	八千代市教育委員会
294	1995	D	石井 進	たまたみす風景ー中世荘園行7	みすず 411号	みすず書房
295	1995	G	津田芳男	要害遺跡・要害城跡	長生都市文化財センター年報 No.9	長生都市文化財センター
296	1995	G	津田芳男	加納藩城跡	長生都市文化財センター年報 No.9	長生都市文化財センター
297	1995	H	滝川恒昭	勝浦正木氏の基礎的考察ー「正木武勝家賦」所収文書の紹介と検討を通してー	勝浦市史研究 1号	勝浦市教育委員会
298	1995	H	津田芳夫・矢野淳一	大多喜城本丸出土遺物について(2)	千葉県立総南博物館年報 2	千葉県立総南博物館
299	1995	I	桜井敦史	八幡・五所地域の中世石造物	市原市文化財センター研究紀要 III	市原市文化財センター
300	1995	L	柴田龍司	中世城館の構造とその変遷ー千葉県内の発掘成果を通してー	千葉県文化財センター研究紀要 16号	市原市文化財センター
301	1995	L	井上哲朗	都市・城館研究の最新情報(関東)	中世都市研究 2	中世都市研究会
302	1995	L	笹生 衛	東国における中世墓地の諸相ー房総の事例を中心にー	千葉県文化財センター 研究紀要16	市原市文化財センター
303	1995	M	中世研究プロジェクトチーム	神奈川県下における中世遺構の研究	神奈川の考古学 第5集	神奈川県立埋蔵文化財センター
304	1996	B	黒田基樹	戦国期下総国の政治構造に関する一考察ー白井原氏の基礎的検討ー	地方史研究 261号	地方史研究協議会
305	1996	B	日暮 学 他	根古屋城とその周辺ー予備踏査概報ー(遺跡調査概要報告)成田市駒井野西ノ下遺跡(成田国際物流複合基地)	八街市史研究 2号	八街市
306	1996	B	栗田則久	(遺跡調査概要報告)成田市駒井野西ノ下遺跡(成田国際物流複合基地)	千葉県文化財センター年報 No.21	市原市文化財センター
307	1996	C	白根義久	生実城跡	千葉市文化財調査協会年報 8 平成6年度	市原市文化財センター

番号	発行年	地域	編著者	論文名	書名	発行者
308	1996	C	築瀬裕一	千葉市高品城跡	平成7年度千葉県遺跡調査研究発表会発表要旨	千葉県文化財法人連絡協議会
309	1996	C	築瀬裕一	高品城跡	平成7年度千葉市遺跡発表会要旨	財団法人千葉市文化財調査協会
310	1996	C	外山信司	下総高品城と陸上交通	千葉城郭研究 4号	千葉城郭研究会
311	1996	D	石井 進	たみなす風景-中世荘園行8	みすず 419号	みすず書房
312	1996	D	柴田龍司	香取の遺跡紹介① 森山城跡	かとり 1号	財団法人香取市文化財センター
313	1996	E	高森良昌	海上氏の墳墓と菩提寺考	千葉市立郷土博物館研究紀要 2号	千葉市立郷土博物館
314	1996	F	井上哲朗	松尾町中谷遺跡の中近世墓地と集落-中近世における谷津景観の復元-	研究連絡誌 45号	財団法人千葉県文化財センター
315	1996	H	滝川恒昭	正木時茂に関する一考察	勝浦市史研究 2号	勝浦市史編纂室
316	1996	I	佐藤博信	上総椎津城とその周縁-見学会から学ぶ	千葉史学 29号	千葉歴史学会
317	1996	J	中井正代	久留里城について	中世城郭研究 10号	中世城郭研究会
318	1996	J,K	滝川恒昭	「里見分限帳」研究の一試論	千葉城郭研究 4号	千葉城郭研究会
319	1996	K	岡田晃司	館山町成立の契機について	房総路 34号	押尾孔出版
320	1996	K	遠山成一	稲村城跡保存運動の経過	千葉城郭研究 4号	千葉城郭研究会
321	1996	K	滝川恒昭	房総里見氏の歴史における稲村城	千葉城郭研究 4号	千葉城郭研究会
322	1996	K	柴田龍司	稲村城跡の発掘成果	千葉城郭研究 4号	千葉城郭研究会
323	1996	K	井上哲朗	稲村城跡内の横穴墓及び「やぐら」	千葉城郭研究 4号	千葉城郭研究会
324	1996	L	池田光雄	堀内部障壁の一形態について-千葉県内の事例紹介-	中世城郭研究 10号	中世城郭研究会
325	1996	L	遠山成一	中世房総水運史に関する一考察-舟戸・船津地名をめぐって-	千葉城郭研究 4号	千葉城郭研究会
326	1996	L	千葉城郭研究会	千葉県における地域別城郭研究史IV	千葉城郭研究 4号	千葉城郭研究会
327	1996	L	千葉城郭研究会	千葉県における城郭文獻目録 補遺	千葉城郭研究 4号	千葉城郭研究会
328	1996	M	斉藤 弘	中世後期の墓地-下野を中心に-	栃木県考古学会誌 18集	栃木県考古学会
329	1996	M	斉藤 弘	地下式墳と葬送儀礼-栃木県下の事例を中心に-	研究紀要 4号	(財)栃木県文化振興事業団 埋蔵文化財センター
330	1997	A	新井浩文	中世関宿城下の宿とその機能-網代宿を中心として-	千葉県立関宿城博物館研究報告 創刊号	千葉県立関宿城博物館
331	1997	A	田島昌治	松戸市内城跡踏査ノート	松戸史談 37号	松戸史談会
332	1997	A	薄井俊明	中世東葛飾の歴史概要-武士の起こりと東国(二)-	流山市史研究 14号	流山市立博物館
333	1997	B	中井正代	上総・東和田城山砦について	中世城郭研究 11号	中世城郭研究会
334	1997	B	井上哲朗	村を守る地侍の城-中世の四街道1-	マイルストーン 3巻1号	オフィスCKC
335	1997	B	井上哲朗	発掘された戦国の城-中世の四街道2-	マイルストーン 3巻2号	オフィスCKC
336	1997	B	井上哲朗	江戸時代の村-近世の四街道-	マイルストーン 3巻3号	オフィスCKC
337	1997	B	井上哲朗	(発掘調査速報) 戦国時代の山城跡-四街道市北ノ作遺跡-	房総の文化財 vol.14	財団法人千葉県文化財センター
338	1997	B	鈴木定明・井上哲朗	四街道市の遺跡	ウォーク・イン古代 4	財団法人千葉県文化財センター
339	1997	C	小澤清男	生実城跡	千葉県文化財調査協会年報 9 平成7年度	財団法人千葉市文化財調査協会
340	1997	C	外山信司	高品城跡-街道を押える中世城郭	千葉県史料研究財団だより 9	財団法人千葉県史料研究財団
341	1997	C	倉田義広	猪鼻城跡	平成8年度千葉市遺跡発表会要旨	財団法人千葉市文化財調査協会
342	1997	C	小澤清男	生実城跡	平成8年度千葉市遺跡発表会要旨	財団法人千葉市文化財調査協会
343	1997	C	斉藤慎一	戦国期城下町成立の前提	歴史評論 572号	歴史科学協議会
344	1997	C	伊藤一男	中世千葉の都市計画-大治元年千葉の町づくりはじまる-	カルチャー千葉 37	財団法人千葉市文化振興財団
345	1997	D	柴田龍司	香取の遺跡紹介② 下小野城跡	かとり 第2号	財団法人香取市文化財センター
346	1997	D	柴田龍司	香取地区の中世城跡(その1)	香取市文化財センター事業報告 VI	財団法人香取市文化財センター
347	1997	F	加藤正信	(発掘調査速報) 中世の屋敷と墓地-東金市前畑遺跡	房総の文化財 vol.12	財団法人千葉県文化財センター
348	1997	H	滝川恒昭	中・近世移行期における上総勝浦湊の実像-市の考察を中心として-	勝浦市史研究 3号	勝浦市史編さん室
349	1997	I	高橋康男	椎津五雲台遺跡	第12回市原市文化財センター遺跡発表会要旨	財団法人市原市文化財センター
350	1997	I	櫻井敦史	分目要害遺跡	市原市文化財センター年報 平成5年度	財団法人市原市文化財センター
351	1997	J		眞武根陣屋跡	君津市文化財センター年報 No14	財団法人君津市文化財センター
352	1997	J	當眞嗣史	君津地域における中・近世の調査	多知波奈考古 3号	橋考古学会
353	1997	K	滝川恒昭	戦国期の房総太平洋岸における湊・都市の研究-房総沖太平洋海運検討の前提として-	千葉史学 31号	千葉歴史学会
354	1997	K	佐藤博信	里見義通試論-前期里見氏研究深化のために-	千葉史学 30号	千葉歴史学会
355	1997	L	池田 誠	徳川家康築城遺構の一考察-上・下総に配置された家康臣僚たちの城郭から-	中世城郭研究 11号	中世城郭研究会
356	1997	L	野口 実	肥前千葉氏の遺産-佐賀県小城町の地域振興のために-	鹿児島経済大学地域総合研究 24-2	鹿児島経済大学
357	1998	A	新井浩文	中世関宿城の構造とその機能 -「正保城絵図」所収「下総国世喜宿城絵図」の検討を中心に-	千葉県立関宿城博物館研究報告 2号	千葉県立関宿城博物館
358	1998	B		佐倉城跡	千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報 平成9年度	千葉県教育庁生涯学習部文化課
359	1998	B		佐倉市佐倉城跡	印旛郡市文化財センター年報 13	財団法人印旛郡市文化財センター

②雑誌類・③調査報告書

番号	発行年	地域	編著者	論文名	書名	発行者
360	1998	B	井上哲朗	(遺跡調査概要報告)四街道市古屋城跡・北ノ作遺跡(物井地区)	千葉県文化財センター年報 No.22	千葉県文化財センター
361	1998	B	井上哲朗	佐倉市高岡砦跡について	中世房総 10号	中世房総史研究所
362	1998	B	井上哲朗	四街道市吉岡地域の中世城館跡について	千葉城郭研究 5号	千葉城郭研究会
363	1998	B	井上哲朗	鹿島川流域における戦国前期城館の一形態-四街道市北ノ作遺跡の調査から-	研究連絡誌 53号	千葉県文化財センター
364	1998	C	倉田義広	生実城跡	千葉市文化財調査協会年報 10 平成8年度	千葉県市文化財調査協会
365	1998	C	飛田正美	廿五里遺跡	平成9年度千葉市遺跡発表会要旨	千葉県市文化財調査協会
366	1998	E	実川 理	光町神山谷遺跡	平成9年度千葉県遺跡調査研究発表会発表要旨	千葉県文化財法人連絡協議会
367	1998	E	椎名幸一・遠山成一	匝瑳南条本郷の城館跡について	千葉城郭研究 5号	千葉城郭研究会
368	1998	H	遠山成一	落合川流域に並ぶ二つの大規模城郭をめぐって	千葉城郭研究 5号	千葉城郭研究会
369	1998	J	佐藤博信	安房妙本寺と房総里見氏-上総金谷城・妙本寺要害及び勝山城をめぐって-	千葉県史研究 6号	千葉県史料研究財団
370	1998	J	稲葉昭智・矢野淳一	幕末陣屋遺構の一例-木更津市請西真武根陣屋について-	君津都市文化財センター研究紀要VIII	君津都市文化財センター
371	1998	J	松本 勝	富津市富津陣屋跡	平成9年度千葉県遺跡調査研究発表会発表要旨	千葉県文化財法人連絡協議会
372	1998	L	千葉城郭研究会	千葉県における地域別城郭研究史V	千葉城郭研究 5号	千葉城郭研究会
373	1998	L	千葉城郭研究会	千葉県に関する城郭文献目録 補遺4	千葉城郭研究 5号	千葉城郭研究会
374	1999	J		真武根陣屋跡	君津都市文化財センター年報 No.16	君津都市文化財センター
375	1999	L	笹生 衛	東國中世村落の景観変化と画期-西上総、周東・周西郡内の事例を中心に-	千葉県史研究 7号	千葉県
376	1999	L.M	池田光雄	「障子堀」について	中世城郭研究 13号	中世城郭研究会
377	1999	L.M	井上哲朗	堀内障壁の分類と編年試案-千葉県内の事例を中心として-	中世城郭研究 13号	中世城郭研究会

第15表 文献目録③(発掘・測量調査報告書)

番号	発行年	地域	編著者	書名	発行者
001	1952	A	古宮隆信	文京区柏学園附近戸張遺跡調査概報	柏町公民館
002	1960	K	山岡俊明・上田勇次郎	館山城の考察	
003	1964	A	下津谷達男・古宮隆信	柏市根戸中馬場住居址調査報告書	柏市教育委員会
004	1964	D	神尾正明 他	千葉県遺跡調査報告書(昭和38年度)城山貝塚	千葉県教育委員会
005	1970	A	大川 清・岩崎卓也 他	大谷口・松戸市大谷口小金城跡発掘調査報告書	松戸市教育委員会
006	1971	B	四街道町教育委員会	四街道町中世砦跡調査報告書	四街道町教育委員会
007	1971	B	加藤晋平	国立歴史民俗博物館設置予定地内遺跡調査報告書	千葉県教育委員会
008	1971	C	篠丸頼彦	成東城跡調査報告書	千葉県教育委員会
009	1971	D	篠丸頼彦	千葉県東南部地区文化財総合調査報告書「上総の万喜城」	千葉県文化財千葉県文化財保護協会
010	1971	D	篠丸頼彦	松子城跡調査概報	松子城跡調査団
011	1972	A	下津谷達男・古宮隆信	中馬場遺跡・妻子原遺跡	日本国有鉄道常磐線複々線工事関係遺跡調査団
012	1972	B	城郭委員会	本佐倉城址測量調査中間報告	城郭研究会
013	1973	A	下津谷達男	流山市大畔台・下花輪第二遺跡調査概報	
014	1973	I	伊禮正雄	椎津城の歴史-本丸跡と内濠の試掘について	市原市教育委員会
015	1973	J	大場啓雄・乙益重隆	上総菅生遺跡(昭和47年度第1期調査)	木更津市教育委員会
016	1974	A	篠丸頼彦・渋谷興平	中峠城跡調査報告書	中峠城跡調査団
017	1974	A	戸張遺跡調査団	戸張遺跡第三次発掘調査報告書	戸張遺跡第三次調査団
018	1974	B	学習院大学	池の尻遺跡発掘調査レポート	学習院大学輔仁会史学会
019	1974	B		千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書III	千葉県文化財センター
020	1974	C		昭和49年度御茶屋御殿跡第2次調査中間報告書	御茶屋御殿跡調査団
021	1974	D	篠丸頼彦	神崎城跡調査報告書	千葉県教育委員会
022	1974	H	奥田直栄・吉井 宏	上総大多喜城本丸址発掘調査報告書	千葉県教育委員会
023	1974	M	長瀬 衛 他	青戸・葛西城址調査報告II	葛西城址調査会
024	1975	A	村崎 勇	鎌ヶ谷市佐津間城址初富向山馬込	鎌ヶ谷市史編纂委員会
025	1975	B	伊禮正雄 他	臼井南-千葉県佐倉市臼井南遺跡調査報告書-	佐倉市教育委員会
026	1975	B	渋谷興平	千葉県印西町小林古墳群遺跡	小林古墳群発掘調査団
027	1975	B	田村信行	円能遺跡発掘調査概報	佐倉市教育委員会
028	1975	C	伊藤一男・吉村 宏	内山城跡調査報告書	内山城跡調査団
029	1975	M	長瀬 衛 他	青戸・葛西城址調査報告III	葛西城址調査会
030	1976	A	古宮隆信	中馬場遺跡第三次発掘調査報告書	柏市教育委員会
031	1976	B	森 尚登	国立歴史民俗博物館(仮称)設置予定地内遺構確認調査報告	千葉県文化財センター
032	1976	B	三浦和信	吉高家老地遺跡	吉高家老地遺跡調査会
033	1976	C	薬師寺崇 他	千葉市御殿町御茶屋御殿跡-第一次調査概要-	千葉市教育委員会
034	1976	C	村田一男 他	八千代市中世館城址調査報告	八千代市教育委員会
035	1976	D	小林 繁	平良文館址	小見川町教育委員会
036	1976	F	平岡和夫 他	高砂城址	松尾町教育委員会

番号	発行年	地域	編著者	書名	発行者
037	1976	F	伊藤一男	小提要害城跡調査概報一横芝町文化財総合調査報告第1集一	横芝町教育委員会
038	1976	F	伊藤一男	小提要害城跡調査報告書一第一郭土塁遺構に関する発掘調査一	横芝町教育委員会
039	1976	F	伊藤一男	小提要害城跡	横芝町教育委員会
040	1976	H	大野城址調査団	大野城址の測量調査	立教大学考古学研究会
041	1976	I	篠丸頼彦	川原井中世城跡調査概報	袖ヶ浦町教育委員会
042	1977	A	関根孝夫・花島八十八	殿平賀遺跡「松戸市文化財調査小報」10	松戸市教育委員会
043	1977	A	古宮隆信	根戸城遺跡一法華坊遺跡調査報告書一	我孫子市教育委員会
044	1977	B	石田広美	国立歴史民俗博物館(仮称)建設予定地内発掘調査概報	勸千葉県文化財センター
045	1977	B	間野台・古屋敷遺跡調査団	間野台・古屋敷	佐倉市教育委員会
046	1977	C	森重彰文	武石遺跡・武石館調査報告	千葉市教育委員会
047	1977	C	岡川宏道 他	京葉II一千葉市東寺山戸張作遺跡一	勸千葉県文化財センター
048	1977	D	小松 繁	佐原市長部山遺跡	長部山遺跡調査団
049	1977	H	後藤和民・菊池義次 他	松部	千葉県文化財保護協会
050	1977	I	篠丸頼彦	千葉県木更津市請西台遺跡調査概報	請西台遺跡埋蔵文化財発掘調査団
051	1978	A	古宮隆信	根戸城遺跡法華坊遺跡北ノ内遺跡発掘調査報告書	我孫子市教育委員会
052	1978	B	佐藤克己	船尾城遺跡	印西町教育委員会
053	1978	D	伊藤一男・平岡和夫	助崎城址	助崎城址遺跡調査団
054	1978	H	伊禮正雄・橋口定志	大野城跡発掘調査概報	大野城跡緊急発掘調査団
055	1978	K	小室栄一・川名 登	館山城跡調査概報一第一次一	館山城跡調査会
056	1979	A	古宮隆信	戸張城山遺跡発掘調査報告書	東京都文京区教育委員会
057	1979	C	野村幸希・菊池真太郎	千葉市城の腰遺跡	勸千葉県文化財センター
058	1979	C	矢戸三男・谷 旬	千葉市西屋敷遺跡	勸千葉県文化財センター
059	1979	I	小高春雄	袖ヶ浦町川原井樋爪	樋爪遺跡発掘調査
060	1979	J	伊禮正雄・小高春雄	上総久留里城	君津市教育委員会
061	1979	J	伊禮正雄・牛房茂行	木更津市真里谷城址一遺跡確認調査概報一	木更津市教育委員会
062	1979	K	菊池真太郎・内野美三夫	館山城跡調査概報一第二次一	館山城跡調査会
063	1980	A	犬塚俊雄・戸松雅昭	中沢城発掘調査概報	鎌ヶ谷市教育委員会
064	1980	A	小林三郎・橋本喜正・小西ゆみ	埋蔵文化財発掘調査報告・昭和54年度	市川市教育委員会
065	1980	A	寺村光晴	印内台	印内台遺跡調査団
066	1980	B	堀部昭夫・高田 博	佐倉城跡遺構確認調査概報	勸千葉県文化財センター
067	1980	B	高田 博	佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書II	勸千葉県文化財センター
068	1980	C	村山好文・山本 勇	馬加城遺跡発掘調査書	馬加城遺跡調査会
069	1980	F	小高春雄	千葉市土気地区埋蔵文化財帖佐報告1一第一次予備調査概報一	千葉市土気地区遺跡調査会
070	1980	J	大場誓雄・乙益重隆	上総菅生遺跡	中央公論美術出版
071	1980	J	千葉県教育庁文化課	千葉県記念物実態調査報告書1一飯野陣屋濠跡一	千葉県教育庁文化課
072	1980	K	菊池真太郎 他	飯山城跡調査概報<第三次>	飯山城跡調査会
073	1981	B	堀部昭夫	国立歴史民俗博物館(仮称)建設予定地発掘調査報告書	勸千葉県文化財センター
074	1981	B,J	小室栄一 他	千葉県中近世城跡研究調査報告書 第1集一佐貫城跡・本佐倉城跡発掘調査報告一	千葉県教育委員会
075	1981	J	野中 徹 他	金谷城跡一二の郭発掘調査報告一	金谷城跡調査会
076	1982	A	小西ゆみ	埋蔵文化財発掘調査報告・昭和56年度	市川市教育委員会
077	1982	A	店橋初恵・岡村文真	鹿島前遺跡第4次発掘調査概報	我孫子市教育委員会
078	1982	A	郷堀英司 他	常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書I一館林、水砂、花前II-1一	勸千葉県文化財センター
079	1982	B	田村言行・高橋健一	総州佐倉城一佐倉城本丸址発掘調査概報一	佐倉市教育委員会
080	1982	B	道沢 明	北総線「城址」	東京電力北総線遺跡調査会
081	1982	C	武部喜充	埴谷周路遺跡	山武町教育委員会
082	1982	D	神崎町教育委員会	神崎町西の城貝塚保存整備報告書	神崎町教育委員会
083	1982	D,G	中山吉秀・天野 努	千葉県中近世城跡研究調査報告書 第2集一森山城跡・本納城跡発掘調査報告一	千葉県教育委員会
084	1982	J	梶山林継	飯野陣屋稲荷口遺跡調査報告	稲荷口遺跡調査会
085	1983	A	石田 勝	埋蔵文化財発掘調査報告・昭和57年度	市川市教育委員会
086	1983	A	小西ゆみ	市川市東部遺跡群発掘調査報告・昭和57年度	市川市教育委員会
087	1983	A	飯塚博和	埋蔵文化財調査概報1(昭和54・55年度)「金野井城址」	野田市郷土博物館
088	1983	B	村田一男	成田市中世城郭址調査報告書	成田市中世城郭址調査団
089	1983	B	寺島 博・平岡和夫	根本内北ノ台遺跡調査報告書	根本内北ノ台遺跡調査会
090	1983	B	谷 旬	成田新線建設事業内埋蔵文化財発掘調査報告書3「堀之内遺跡」	勸千葉県文化財センター
091	1983	C	白石 浩	千葉市大道遺跡・生実城跡発掘調査報告書	勸千葉県文化財センター
092	1983	D,F	加藤正信・柳 晃	千葉県中近世城跡研究調査報告書 第3集一大友城跡・坂田城跡発掘調査報告一	千葉県教育委員会
093	1983	F	大和久震平	埴谷周路館跡の研究	大和久震平
094	1983	F	大和久震平	埴谷周路遺跡	山武町教育委員会
095	1983	G	平岡和夫	鶴谷久保向遺跡	長柄町教育委員会
096	1983	H	中滝城址調査団	上総国・中滝城址I	立教大学考古学研究会

③調査報告書

番号	発行年	地域	編著者	書名	発行者
097	1984	A	片岡由美	埋蔵文化財発掘調査報告・昭和58年度「大柏小校庭内遺跡」	市川市教育委員会
098	1984	B	伊藤一男	印西小林城―千葉県印西町小林城跡調査報告書―	印西町小林城跡調査会
099	1984	B	藤原 均	北押出し遺跡調査報告書	酒々井町北押出し遺跡調査会
100	1984	B	藤原 均	成田市郷部北遺跡群調査概報「加定地・殿台遺跡」	成田市郷部北遺跡調査会
101	1984	B	岡田茂弘	国立歴史民俗博物館研究員宿泊施設予定地発掘調査概報	国立歴史民俗博物館
102	1984	C	大野康男	千葉東南部ニュータウン15「有吉城跡」	勸千葉県文化財センター
103	1984	D	江尻和正	名古屋横峰遺跡	名古屋横峰遺跡調査会
104	1984	D	小宮 孟	東総用水「高部宮ノ前遺跡」	勸千葉県文化財センター
105	1984	D	江尻和正	千葉県下総町文化財調査報告Ⅰ	下総町教育委員会
106	1984	G	大和久震平	一宮城跡城之内遺跡発掘調査報告書	一宮町教育委員会
107	1984	G	藤原 均	城之内遺跡調査報告書	一宮町城之内遺跡調査会
108	1984	I	鈴木英啓	石川城郭跡	勸市原市文化財センター
109	1984	J	伊禮正雄・牛房茂行 他	真里谷城跡	木更津市教育委員会
110	1984	J	小沢 洋	境遺跡	勸君津郡市文化財センター
111	1984	J	小沢 洋	千葉県富津市二間塚遺跡群確認調査報告書	富津市教育委員会
112	1984	K	木内達彦	館山城跡鹿島堀発掘調査報告書	館山城跡鹿島堀調査会
113	1984	K,B	天野 努・柴田龍司	千葉県中近世城跡研究調査報告書 第4集―稲村城跡・臼井城跡発掘調査報告―	千葉県教育委員会
114	1985	A	大賀 健	布施向山遺跡	山武考古学研究所
115	1985	B	岡田茂弘	臼居城Ⅰ郭跡発掘調査概報	臼井城跡研究会
116	1985	B	臼井城跡研究会	臼井城Ⅰ郭跡第2次発掘調査概要	臼井城跡研究会
117	1985	B	高橋博文	東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ「妙福寺裏遺跡」	勸千葉県文化財センター
118	1985	B	篠原 正 他	北大堀・猿楽場遺跡発掘調査報告書	勸印旛郡市文化財センター
119	1985	B	小林清隆 他	主要地方道成田安食線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ「成田市島内遺跡」	勸千葉県文化財センター
120	1985	D,H	石倉亮治・伊藤智樹	千葉県中近世城跡研究調査報告書 第5集―大崎城跡・万喜城跡発掘調査報告―	千葉県教育委員会
121	1985	F	谷 旬	本納城外郭跡	勸茂原市文化財センター
122	1985	F	藤下昌信・村山好文	長倉宮脇	横芝町教育委員会
123	1985	J	平野雅之	真里谷城跡	勸君津郡市文化財センター
124	1985	J	小沢 洋	飯野陣屋濠跡発掘調査報告書	富津市教育委員会
125	1985	M	橋本久雄	鹿島城址Ⅳ	鹿島町教育委員会
126	1986	A	石田守一 他	我孫子市埋蔵文化財報告第8集「根戸城跡」	我孫子市教育委員会
127	1986	B	平岡和夫 他	宗吾西鷺山遺跡	宗吾西鷺山遺跡調査会
128	1986	B	大橋康二 他	下総国四街道地域の遺跡調査報告書「池之尻館」「戸崎館」	中野遺跡調査団
129	1986	B	岡田茂弘 他	佐倉城の武家屋敷は語る	国立歴史民俗博物館
130	1986	B	臼井城跡研究会	臼井城Ⅰ郭跡3次発掘調査説明資料	臼井城跡研究会
131	1986	C	森本和男	千葉都市モノレール関係埋蔵文化財発掘調査報告書「廿五里城跡」	勸千葉県文化財センター
132	1986	D	八角 静・平岡和夫	大原遺跡	多古町遺跡調査会
133	1986	F	石本俊則	千葉県東金市小野城址	勸山武郡南部地区文化財センター
134	1986	H	大多喜町根古屋城址調査会	千葉県夷隅郡大多喜町 根古屋城跡確認調査報告書	大多喜町根古屋城址調査会
135	1986	I	鈴木英啓	大羽根城郭跡―南部外郭の測量調査―	市原市教育委員会
136	1986	I	山口直樹	村上城跡	勸市原市文化財センター
137	1986	K,I	柴田龍司	千葉県中近世城跡研究調査報告書 第6集―岡本城跡・佐是城跡発掘調査報告―	千葉県教育委員会
138	1986	M	谷口 栄 他	五反田遺跡	円福寺西方遺跡調査会
139	1986	M	堀越 徹 他	外城遺跡発掘調査報告書	石岡市教育委員会
140	1987	A	岡田光弘	関宿城跡Ⅰ	千葉県教育委員会
141	1987	A	綿貫喜郎	堀之内	市川市教育委員会
142	1987	C	奥田正彦	八千代市井戸向遺跡	勸千葉県文化財センター
143	1987	D	小高春雄	東関東自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ「南敷城」	勸千葉県文化財センター
144	1987	D	平野 功	小見川町内遺跡群発掘調査報告書「小見川城址」	小見川町教育委員会
145	1987	D,F	柴田龍司	千葉県中近世城跡研究調査報告書 第7集―飯櫃城跡・鍋木城跡発掘調査報告―	千葉県教育委員会
146	1987	J	小沢 洋	千葉県富津市野乃間古墳	勸君津郡市文化財センター
147	1987	K	藤原 均	館山城跡第4次調査報告	第4次館山城跡調査会
148	1987	M	大和久震平	釜利谷やぐら遺跡発掘調査報告書	釜利谷やぐら遺跡調査団
149	1988	A	岡田光弘	関宿城跡Ⅱ	千葉県教育委員会
150	1988	A	宇佐美義春	三輪野山第三遺跡	流山市教育委員会
151	1988	B	小高春雄 他	佐倉市中近世城跡測量調査報告書	佐倉市教育委員会
152	1988	B	末武直則	押畑子の神城跡発掘調査報告書	勸印旛郡市文化財センター
153	1988	D	藤原 均 他 (日本考古学研究所)	菊水城址主郭部調査報告書	下総町遺跡調査会
154	1988	D	柿沼修平・新井和之	千葉県大栄町長久保・内野遺跡	千葉県大栄町遺跡調査会
155	1988	D,J	鳴田浩司	千葉県中近世城跡研究調査報告書 第8集―山崎城跡・飯野陣屋跡発掘調査報告―	千葉県教育委員会
156	1988	F	萩原恭一	東金市久我台遺跡	勸千葉県文化財センター
157	1988	J	諸墨知義・甲斐博幸	金谷城跡	勸君津郡市文化財センター
158	1989	A	岡田光弘	関宿城跡	千葉県教育委員会

番号	発行年	地域	編著者	書名	発行者
159	1989	B	内田理孝 他	昭和63年度佐倉市埋蔵文化財発掘調査報告書(白井台長谷津遺跡)	佐倉市教育委員会
160	1989	D	青木幸一 他	馬洗城址発掘調査報告書	大栄町教育委員会
161	1989	E	新井和之	八石田遺跡発掘調査報告	光町八石田遺跡調査会
162	1989	F,C	西山太郎・井上哲朗	千葉県中近世城跡研究調査報告書 第9集-東金城跡・城山城跡発掘調査報告-	千葉県教育委員会
163	1989	J	諸墨知義	蔵玉砦跡	銚子津郡市文化財センター
164	1989	J	笹生 衛	外箕輪遺跡・八幡神社古墳発掘調査報告	銚子津郡市文化財センター
165	1990	A	中原幹彦	庚申前遺跡(第3次)	柏市教育委員会
166	1990	A	道上 文	印内台遺跡-7・8次	船橋市遺跡調査会
167	1990	B	木内達彦	長勝寺脇館跡	銚子津郡市文化財センター
168	1990	C	千葉県教育委員会	埋蔵文化財調査報告書(城山城跡他)	千葉県教育委員会
169	1990	D	栗田則久 他	東関東自動車道埋蔵文化財調査報告V(佐原地区2)「佐原市吉原三王遺跡」	銚子津郡市文化財センター
170	1990	G	三浦和信・津田芳男	岩川・今泉遺跡	銚子津郡市文化財センター
171	1990	I,E	笹生 衛	千葉県中近世城跡研究調査報告書 第10集-椎津城跡・大堀城跡発掘調査報告-	千葉県教育委員会
172	1990	J	諸墨知義	蔵玉砦跡	銚子津郡市文化財センター
173	1990	J	箕島正弘	袖ヶ浦町内遺跡群発掘調査報告書-久保田城跡・下向山遺跡-	袖ヶ浦町教育委員会
174	1990	J	小沢 洋	千葉県富津市三条塚古墳	銚子津郡市文化財センター
175	1990	J	桐村修司 他	千葉県富津市南口遺跡	銚子津郡市文化財センター
176	1990	K	高梨俊夫	下ノ坊B地点発掘調査報告書	銚子津郡市文化財センター
177	1990	M	藤原 均 他	古屋敷遺跡調査報告書	山田地区遺跡調査会
178	1991	A	中山文人 他	平成2年度松戸市内遺跡発掘調査概報	松戸市教育委員会
179	1991	B	喜多圭介 他	上宿遺跡(印旛郡市文化財センター年報7の付録)	銚子津郡市文化財センター
180	1991	B	飯島伸一 他	岩戸城内岩戸市場遺跡	銚子津郡市文化財センター
181	1991	B	中山俊之	曲輪ノ内遺跡	銚子津郡市文化財センター
182	1991	C	千葉県教育委員会	埋蔵文化財調査報告書(高品城跡他)	千葉県教育委員会
183	1991	C	岡田茂弘 他	千葉御茶屋御殿跡 第3次調査概報	千葉御茶屋御殿調査会
184	1991	C	青沼道文	「御茶屋御殿跡の第1次・2次調査について」[平成2年度遺跡発表会および特別講演会要旨]	銚子津郡市文化財調査協会
185	1991	D	青木 司	佐原市内遺跡群発掘調査概報V(鶴崎城跡他)	佐原市教育委員会
186	1991	D	栗田則久 他	東関東自動車道埋蔵文化財調査報告VI(佐原地区3)「大稲塚遺跡、樺木台遺跡、毛内遺跡、綱原遺跡、綱原屋敷遺跡、多田綱原遺跡、出口遺跡」	銚子津郡市文化財センター
187	1991	E,B	井上哲朗	千葉県中近世城跡研究調査報告書 第11集-中島城跡・鹿渡城跡測量調査報告-	千葉県教育委員会
188	1991	G	津田芳男	長南城跡	銚子津郡市文化財センター
189	1991	I	忍澤成規	平成2年度市原市内遺跡発掘調査報告(山木白船城跡遺跡他)	市原市教育委員会
190	1991	J	小高幸男	千葉県富津市内裏塚古墳群発掘調査報告書	富津市教育委員会
191	1991	M	高尾栄一 他	五反田遺跡II	五反田遺跡調査会
192	1991	M	岩松和光 他	鹿島町内遺跡発掘調査報告XII	鹿島町教育委員会
193	1992	B	大澤 孝 他	長田要害・長田長台遺跡発掘調査報告書	銚子津郡市文化財センター
194	1992	B	齋藤 毅 他	和良比遺跡発掘調査報告書	銚子津郡市文化財センター
195	1992	B	木川邦夫 他	成田市下金山城跡発掘調査報告書	成田市下金山城跡調査会
196	1992	B	林田利之 他	千葉県成田市駒井野荒追遺跡	銚子津郡市文化財センター
197	1992	D	岡田誠造	神埼町西の城貝塚	銚子津郡市文化財センター
198	1992	D	村山好文	神代夏方遺跡、稲荷入遺跡、稲荷入1号塚・2号塚	銚子津郡市文化財センター
199	1992	D	黒沢哲郎	大慈恩寺遺跡	銚子津郡市文化財センター
200	1992	D	吉田博之	下男山遺跡	銚子津郡市文化財センター
201	1992	F	井上哲朗	松尾町山室城跡	銚子津郡市文化財センター
202	1992	I	矢野淳一	君津市内遺跡発掘調査報告書(久留里城跡)	君津市教育委員会
203	1992	J	高梨俊夫	千葉県中近世城跡研究調査報告書第12集-峰上城跡測量調査報告-	千葉県教育委員会
204	1992	J	小高幸男・小沢 洋	千葉県富津市内裏塚古墳群確認調査報告書	銚子津郡市文化財センター
205	1992	J	佐伯秀人	内裏塚古墳群	銚子津郡市文化財センター
206	1992	J	山本哲也	千葉県袖ヶ浦市文協遺跡	銚子津郡市文化財センター
207	1992	J	小高幸男	千葉県木更津市天神前遺跡	銚子津郡市文化財センター
208	1992	M	岩松和光 他	国神遺跡V	鹿島町教育委員会
209	1993	B	杉山晋作 編	佐倉城の武家屋敷跡は語る	国立歴史民俗博物館
210	1993	B		千葉県佐倉市高岡遺跡群I	銚子津郡市文化財センター
211	1993	B	井上哲朗 他	佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書X「佐倉市南広遺跡」	銚子津郡市文化財センター
212	1993	C	岡田茂弘	千葉御茶屋御殿跡 第5次調査概報	千葉県教育委員会
213	1993	C	飛田正美	千葉市新田遺跡-平成3年度発掘調査報告書-	銚子津郡市文化財調査協会
214	1993	C	岡田茂弘	千葉御茶屋御殿跡第6次調査現地説明会資料	千葉県教育委員会・千葉御茶屋御殿跡調査会
215	1993	D	青木 司	佐原市内遺跡発掘調査概報VII(上小川砦)	佐原市教育委員会
216	1993	F	山下亮介	立山城跡	千葉県教育委員会
217	1993	F	小高春雄 他	土気南遺跡群III -大谷城跡・坂ノ越遺跡-	銚子津郡市文化財調査協会
218	1993	G	津田芳男	長南城跡確認調査報告書	長南町教育委員会

③調査報告書

番号	発行年	地域	編著者	書名	発行者
219	1993	G	津田芳男 他	桂遺跡群発掘調査報告書(神田山第三遺跡)	勸長生郡市文化財センター
220	1993	G		千代丸・力丸横穴墓群	勸長生郡市文化財センター
221	1993	H	半澤幹雄	千葉県中近世城跡研究調査報告書 第13集-鶴ヶ城跡・亀ヶ城跡測量調査報告書	千葉県教育委員会
222	1993	J	諸墨知義	飯野陣屋二の丸跡	勸君津郡市文化財センター
223	1993	J	黒澤 聡	平成4年度 千葉県富津市内遺跡調査報告書	富津市教育委員会
224	1993	M	横山雅彦	一般国道6号東水戸道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 I	茨城県教育財団
225	1993	M	宮内良隆 他	茨城県取手市下高井城跡発掘調査報告書	取手市教育委員会
226	1994	A	井上文男	城山遺跡	柏市教育委員会
227	1994	A	石田守一	羽黒前遺跡第1次発掘調査概報	我孫子市教育委員会
228	1994	B	井上哲朗	印西町小林城跡	勸千葉県文化財センター
229	1994	B	宮内理彦	宮内遺跡	勸印旛郡市文化財センター
230	1994	C		千葉御茶屋御殿跡第7次調査現地説明会資料	千葉市教育委員会・千葉御茶屋御殿跡調査会
231	1994	F	中野修秀	田向城跡	勸山武郡市文化財センター
232	1994	F,I	小高春雄	千葉県中近世城跡研究調査報告書 第14集-土気城跡・池和田城跡測量調査報告書	千葉県教育委員会
233	1994	I	小林信一	草刈六之台遺跡	勸千葉県文化財センター
234	1994	J	中能 隆	内裏塚南方遺跡の調査「富津市内遺跡発掘調査報告書」	富津市教育委員会
235	1994	K	滝川恒昭・遠山成一・小川和博	葛ヶ崎城跡調査報告書	天津小湊町教育委員会
236	1995	B	木内達彦	本佐倉城跡発掘調査報告書 -戦国 佐倉城の調査-	勸印旛郡市文化財センター
237	1995	B	喜多圭介	白井台大名宿遺跡-佐倉市白井台地区宅地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書-	勸印旛郡市文化財センター
238	1995	D	鬼澤昭夫	千葉県香取郡小見川町大六天遺跡	勸香取郡市文化財センター
239	1995	F	吉田直哉	山中台遺跡	勸山武郡市文化財センター
240	1995	G	津田芳男	要害遺跡・要害城跡	勸長生郡市文化財センター
241	1995	J	柴田龍司	千葉県中近世城跡研究調査報告書 第15集-造海城跡測量調査報告書	千葉県教育委員会
242	1995	J	笹生 衛	平成6年度 千葉県富津市内遺跡発掘調査報告書	富津市教育委員会
243	1995	J	當眞紀子	神田遺跡・神田古墳群	勸君津郡市文化財センター
244	1995	K	麻生正信・杉山春信 他	東条地区遺跡発掘調査概要	鴨川市教育委員会
245	1995	L	千葉県教育委員会	千葉県所在中近世城跡詳細分布調査報告書I -旧下総国地域-	千葉県教育委員会
246	1996	A	白井太郎	平成7年度船橋市内遺跡発掘調査報告書(東中山遺跡(8))	船橋市教育委員会
247	1996	A	増崎勝仁	平成7年度流山市内遺跡発掘調査報告書(花輪城跡)	流山市教育委員会
248	1996	B	林田利之	白井屋敷跡遺跡	勸印旛郡市文化財センター
249	1996	B	横山 仁・香取正彦・溝口優司	一般国道296号国道道路改良事業埋蔵文化財調査報告書1-酒々井町本佐倉北大堀遺跡-	勸千葉県文化財センター
250	1996	B	香取正彦	一般国道296号国道道路改良事業埋蔵文化財調査報告書2-佐倉市高岡砦跡・大蛇麻賀多脇遺跡-	勸千葉県文化財センター
251	1996	B	高谷英一	上本佐倉上宿遺跡発掘調査報告書-本佐倉城下町の調査-	勸印旛郡市文化財センター
252	1996	B	能勢幸枝	佐倉城跡-市立佐倉中学校給食室建設に伴う埋蔵文化財調査-	勸印旛郡市文化財センター
253	1996	B	江森幹浩・喜多圭介	曲輪ノ内遺跡(第2次)発掘調査報告書	勸印旛郡市文化財センター
254	1996	C	平岡和夫	千葉県千葉市山王遺跡-発掘調査概要報告書-	山武考古学研究所
255	1996	C	白根義久	千葉市原町遺跡群発掘調査報告書II 台畑遺跡	勸千葉市文化財調査協会
256	1996	C	小澤清男・白根義久	埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書-平成7年度-(高品城跡・栄福寺遺跡他)	千葉市教育委員会
257	1996	C	宮沢久史	千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告(正覚院館跡)	八千代市教育委員会
258	1996	E	高田博	八日市場市大塚・塔ノ前遺跡	勸千葉県文化財センター
259	1996	G	津田芳男	本納城外郭跡-2	茂原市教育委員会
260	1996	G	豊田秀治	千葉県中近世城跡研究調査報告書 第16集-真名城跡測量調査報告書	千葉県教育委員会
261	1996	J	諸墨知義 他	平成7年度 千葉県富津市内遺跡発掘調査報告書	富津市教育委員会
262	1996	K	野中 徹・杉山春信 他	東条地区遺跡発掘調査概報	鴨川市教育委員会
263	1996	L	千葉県教育委員会	千葉県所在中近世城跡詳細分布調査報告書II-旧上総・安房国地域-	千葉県教育委員会
264	1996	L	井上哲朗 他	千葉県やぐら分布調査報告書	千葉県
265	1996	M	玉井輝男	茨城県北相馬郡守谷町守谷城址	守谷町教育委員会
266	1996	M	永越信吾・江上智恵 他	柴又帝釈天遺跡VII	葛飾区遺跡調査会
267	1996	M	永越信吾・江上智恵 他	上千葉遺跡	葛飾区遺跡調査会
268	1997	A	寺村光晴 他	下総国府台 I	和洋学園校地埋蔵文化財調査室
269	1997	A	関山 純 他	平成7年度松戸市内遺跡発掘調査報告	松戸市教育委員会
270	1997	A	峰村 篤	根本内遺跡 第4地点発掘調査報告書	松戸市教育委員会
271	1997	A	大森隆志	小金城跡(第4地点)	松戸市教育委員会
272	1997	A	寺村光晴 他	下総国府台 I	和洋学園校地埋蔵文化財調査室
273	1997	A	石坂雅紀	東中山台遺跡群	勸船橋市文化・スポーツ公社埋蔵文化財センター

番号	発行年	地域	編著者	書名	発行者
274	1997	A	糸原 清	流山市若宮第II遺跡	㈫千葉県文化財センター
275	1997	B	香取正彦 他	一般国道296号国道道路改良事業埋蔵文化財調査報告書3-酒々井町上本佐倉上宿遺跡-	㈫千葉県文化財センター
276	1997	B	白鳥 章	佐倉市弥勒東台遺跡-千葉地裁家庭裁判所佐倉支部埋蔵文化財調査報告書-	㈫千葉県文化財センター
277	1997	B	寺里和久	石川館址発掘調査報告書-石川地区宅地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書-	㈫印旛郡市文化財センター
278	1997	B	高橋 誠 編	「鎌木小路遺跡第3地点」平成7年度 佐倉市埋蔵文化財発掘調査報告書」	佐倉市教育委員会
279	1997	C	築瀬裕一 他	千葉市高品城跡I	㈫千葉県市文化財調査協会
280	1997	C	小澤清男・築瀬裕一	(栄福寺遺跡) 埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書-平成7年度-	㈫千葉県市文化財調査協会
281	1997	D	岡田光広・遠山成一・外山信司	千葉県中近世城跡研究調査報告書 第17集-助崎城跡測量調査報告-	千葉県教育委員会
282	1997	E	道澤 明	寒風城跡 -町道1035号線災害防除工事に伴う埋蔵文化財調査-	㈫東総文化財センター
283	1997	F	平野雅一	東金市大関城跡-東金九十九里有料道路埋蔵文化財調査報告書-	㈫千葉県文化財センター
284	1997	F	海保孝則	上吹入城跡	㈫山武郡市文化財センター
285	1997	F	海保孝則	松尾城跡I	㈫山武郡市文化財センター
286	1997	I		平成8年度市原市内遺跡発掘調査報告書 下矢田城跡	市原市教育委員会
287	1997	J	松本 勝	富津陣屋跡発掘調査報告書-佐野一平宅地造成事業に伴う文化財調査報告-	㈫君津郡市文化財センター
288	1997	J	諸墨知義 他	平成8年度 千葉県富津市内遺跡発掘調査報告書	富津市教育委員会
289	1997	J	渡邊高弘	村上遺跡群埋蔵文化財調査報告書-市原市村上遺跡・村上山王前遺跡・廿五里十三割遺跡-	㈫千葉県文化財センター
290	1997	K	杉山春信	東条地区遺跡発掘調査概報・茱萸ノ木田遺跡発掘調査概報	鴨川市遺跡調査会
291	1998	A	岡田光広・柴田龍司・中山文人	千葉県中近世城跡研究調査報告書 第18集-増尾城・佐津間城跡測量調査報告-	千葉県教育委員会
292	1998	B	宮 重行	佐倉市佐倉城跡	㈫千葉県文化財センター
293	1998	D	鬼沢昭夫	小見川城跡	㈫香取郡市文化財センター
294	1998	D	黒沢哲郎	高岡陣屋跡	下総町教育委員会
295	1998	E	小林弘美	傍示戸遺跡・城ノ台遺跡・新城跡-八日市場線増強(その2)工事に伴う埋蔵文化財調査報告書-	㈫東総文化財センター
296	1998	F	鳴田浩司 他	空港南部工業団地埋蔵文化財調査報告書1「山武郡芝山町古宿・上谷遺跡」	㈫千葉県文化財センター
297	1998	J	諸墨知義	平成9年度富津市内遺跡発掘調査報告書(飯野陣屋三の丸跡他)	富津市教育委員会
298	1998	J	小林清隆	袖ヶ浦市荒久(2)遺跡	㈫千葉県文化財センター
299	1998	K		東条地区遺跡群発掘調査概報	鴨川市教育委員会
300	1998	M	白田正子	三度山遺跡 古屋敷遺跡	㈫茨城県教育財団
301	1999	F	鳴田浩司 他	空港南部工業団地埋蔵文化財調査報告書2「山武郡芝山町上宿遺跡・大堀切遺跡」	㈫千葉県文化財センター

第16表 文献目録④(単行本)

番号	発行年	地域	編著者	書名	発行者
001	1908	K	斎藤夏之助	安房志	多田屋支店
002	1913	E	能勢鼎三	鉄牛	千葉県内務部
003	1926	C	千葉県	史蹟名勝天然記念物調査 2	千葉県
004	1929	L	矢部鴨北	千葉県郷土志	千葉県郷土志刊行会
005	1931	E	神岡勝治	銚子半島と義経	文港堂書店
006	1933	L	大野太平	房総里見氏の研究	宝文堂書店
007	1933~	L	本邦築城史編纂委員会	日本城郭史資料	未刊(国立国会図書館蔵)
008	1950	L	千葉県史料研究会	千葉県史蹟	千葉県史料研究会
009	1953	B	宇田川興三郎 他	増補佐倉城址	国立佐倉療養所互助会
010	1953	D	加瀬包男	多古由来記研究会	加瀬包男
011	1957	E	新日本文化啓蒙社	八日市場市の沿革と人物	新日本文化啓蒙社
012	1959	D	飯田伝一	大友城址考-平常常について-	洋洋社
013	1959	F	清水浦次郎 他	東金史話	東金市教育委員会
014	1961	L	大類 伸	古城をめぐる	人物往来社
015	1962	L	大類 伸	名城名鑑	人物往来社
016	1963	K	千葉耀胤	館山城址	日本城郭協会
017	1964	K	千葉耀胤	館山城址後記	日本城郭協会
018	1965	L	小室栄一	中世城郭の研究-関東地方の築城遺構の実測とその諸問題-	人物往来社
019	1966	B	篠丸頼彦	佐倉城の歴史	佐倉市
020	1966	E	熱田白洋	野ざか	野ざか刊行会
021	1967	J	林 義雄	笹子城実地調査概況報告	
022	1967	K	川名正義	館山の文化財	館山市文化財保護協会
023	1967	L	内田栄一 他	日本城郭全集 3	新人物往来社

④単行本

番号	発行年	地域	編 著 者	書 名	発 行 者
024	1968	C	和田茂右衛門	稿本千葉市内城跡分布説明書	
025	1968	C	土気町役場	土気城跡	土気町
026	1968	K	川名 登	南総の豪雄・里見義堯	人物往来社
027	1969	D	市原市祐	香取郡水戸谷城主をめぐる一平安時代よりの多古周辺の情勢(上巻)一	市原市祐
028	1969	K	池田和弘	神余百年史	館山市神余小中学校PTA
029		L	鳥羽正雄 編	『日本城郭史論叢』	
029-1		G	鶴田恵吉	「宍南城を求めて」	
029-2	1969	B	篠丸頼彦	「二つの佐倉城一本佐倉城と佐倉城」	雄山閣
029-3		H	渡辺包夫	「上総大多喜根古屋城」	
029-4		K	千葉耀胤	「里見・北条氏の抗争に就いて、附館山城址」	
030		L	大多和晃紀	関東百城	東京史蹟めぐりの会
031	1970	I	佐久間謙之助	有吉城	
032	1970	J	林 義雄	矢那大坪城址を探る	
033	1970	J	林 義雄	幻の諸西城	
034	1970	J	林 義雄	有吉城跡探訪中間報告書	
035	1970	J	林 義雄	中尾城跡探訪途中経過報告書	
036	1971	E	本橋正三郎	匠達郡と椎名氏族	八日市場市郷土研究会
037	1971	L	小笠原長和・川村 優	千葉県の歴史	山川出版社
038	1971	L	松下邦夫	千葉県中近世遺跡調査目録(県北部)	千葉県教育委員会
039	1972	B	藤崎 徹	酒々井町墨区郷土史	酒々井地方史研究会
040	1972	F	清水浦次郎	山武郡の古城址	清水浦次郎遺稿刊行会
041	1972	L	松下邦夫	千葉県中近世遺跡調査目録(県南部)	千葉県教育委員会
042	1973	I	市原市教育委員会	市原のあゆみ	市原市教育委員会
043	1973	K	藤岡謙次郎 編	地形図に歴史を読む一里見氏の興亡とその居城一	大明堂
044	1973	L	千葉日報社	房総の史実と伝説	昭和書院
045	1974	J	林 義雄	笹子城探訪の手引	
046	1975	A	村崎 勇	鎌ヶ谷の歴史	崙書房
047	1975	D	大栄町教育委員会	郷土史話	大栄町教育委員会
048	1975	D	篠丸頼彦	多古の城址	多古町教育委員会
049	1975	E	山崎貞幹	ちょうとくじーその伝説と歴史一	山崎貞幹
050	1975	J	鈴木 浩	大戸城にまつわる史実と伝説	
051	1975	K	藪塚喜声造	新田一門史	
052	1975	L	伊藤一男	「千葉県における中世の城郭遺跡」『地域概念の変遷』	地方史研究協議会・大坂歴史学会・雄山閣
053	1976	C	穴倉健吉	稿本小弓城	千葉市南部地区誌編集委員会
054	1976	F	八角 静	高砂城跡を含む無木城跡について『高砂城址』	松尾町教育委員会
055	1976	J	林 義雄	久留里城	上総郷土文化研究会
056	1976	L	千葉日報社 編	下総千葉氏の群像	千葉日報社
057	1976	L	千葉県博物館協会	千葉氏一将門から秀吉まで一	千葉県博物館協会
058	1976	L		郷土資料事典 千葉県	人文社
059	1977	A	石井則孝・熊野正也	いちかわ再発見一考古学から見た市川一	市川ジャーナル
060	1977	L	府馬 清	房総の古城址めぐり 上・下	有峰書店
061	1978	L	杉山 博・清川一史	探訪 日本の城 2 関東	小学館
062		A	流山市史編纂室	流山の旧史旧跡	流山市教育委員会
062-1	1979	D	佐原市教育委員会	古老に聞く郷土百話	佐原市教育委員会
063	1979	J	久留里城再建協力会	久留里城誌	久留里城再建委員会
064	1979	L	岡崎文喜・古内 茂	北総台地	りくえつ
065	1979	L	千葉歴史散歩編集委員会	ちば歴史散歩50コース	三省堂
066	1979	L	川名 登	郷土史事典 千葉県	昌平社
067	1980	D	小見川町教育委員会	小見川のむかしばなし	小見川町教育委員会
068	1980	D	千潟町教育委員会	千潟町の文化財	千潟町教育委員会
069	1980	D	佐原市教育委員会	佐原市の文化財	佐原市教育委員会
070	1980	D	佐原市教育委員会	身近にある文化財	佐原市教育委員会
071	1980	D	多古町教育委員会	多古の文化財	多古町
072	1980	K	館山市立船形小PTA	船形史考	館山市立船形小PTA
073	1980	L	大木 衛 他	日本城郭大系 6 千葉・神奈川	新人物往来社
074	1981	A	相原正義	柏の風土記一市民のための歴史と地誌一	崙書房
075	1981	A	沼南町役場	沼南風土記	沼南町役場
076	1981	B	篠丸頼彦	佐倉の歴史	東洋書院
077	1981	L	千野原靖方	房総里見水軍の研究	崙書房
078	1982	A	松下邦夫	改訂新版 松戸の歴史案内	郷土史出版
079	1982	K	千葉吉男	長屋藩史考	館山市文化財保護協会
080	1983	A	植竹好明	「中世城郭の占地及び囲郭型式に関する一考察」『小室栄一教授古希記念論集』	五月書房
081	1983	A	天下井恵	金杉の歴史	
082	1983	C	相川日出男	地区探訪	四街道市役所
083	1983	L	大衆文学研究会	房総の秘められた話・奇々怪々話	崙書房
084	1983	L	川名 登	房総里見一族	新人物往来社

番号	発行年	地域	編著者	書名	発行者
085	1984	E	石毛光治	中島城にまつわる伝説	郷土史談会
086	1984	E,F	鎌田忠治	九十九里東部民俗伝承	千葉日報社
087	1984	K	綿貫啓一	船橋歴史風土記	嵩書房
088	1984	L	後藤和民 他	日本の古代遺跡 18 千葉北部	保育社
089	1984	L	川名 登 他	郷土千葉の歴史	ぎょうせい
090	1984	L	高橋良昌・石橋 修	ふるさとへの招待	千葉日報社
091	1984	L	千葉県観光協会	ふるさとへの散歩道	国土地理協会・千葉県観光協会
092	1984	L	西ヶ谷恭弘・甘利一馬	城郭と城下町 2 関東	小学館
093	1985	A	藪崎 香	増尾幸谷城跡	数崎香
094	1985	A	千野原靖方	市川歴史探訪—下総国府の周辺—	嵩書房
095	1985	D	坂本正亮	岩ヶ崎の歴史私記	天地人社
096	1985	E	銚子市教育委員会	銚子市の文化財	銚子市教育委員会
097	1985	L	千葉県文化財センター	千葉県埋蔵文化財分布地図 (1)	千葉県教育委員会
098	1986	D	東庄町教育委員会	東庄町の文化財	東庄町教育委員会
099	1986	E	八日市場歴史研究会	八日市場城と城主	八日市場歴史研究会
100	1986	L	千葉県教育庁文化課	房総のあけぼの III 古代のむらと中世の城	千葉県文化財保護協会
101	1986	L	千葉県文化財センター	千葉県埋蔵文化財分布地図 (2)	千葉県教育委員会
102	1987	A	船橋市教育委員会	船橋市の遺跡	船橋市
103	1987	L	千葉県文化財センター	千葉県埋蔵文化財分布地図 (3)	千葉県教育委員会
104	1987	L	三島正之・柴田龍司 他	図説 中世城郭事典 (一)	新人物往来社
105	1987	M	藤木久志	戦国の作法	平凡社
106	1988	G	今井 博 他	わがふるさと長南	長南町教育委員会
107	1988	L	千葉県文化財センター	千葉県埋蔵文化財分布地図 (4)	千葉県教育委員会
108	1988	L	市村高男	「中世城郭史研究の一視点」中世東国史の研究	東京大学出版会
109	1989	L	山本直彦 他	図説千葉県の歴史	河出書房新社
110	1990	F	遠山成一	千葉県歴史の道調査報告書 9 御成街道 附 土気往還・東金往還	千葉県教育委員会
111	1990	M	大島慎一・諏訪間順 他	小田原城とその城下	小田原市教育委員会
112			中世房総史研究会	「中世房総の権力と社会」	
112-1		A	長塚 孝	「後北条氏と下総関宿—支城制形成の一過程」	
112-2	1991	B	黒田基樹	「北条氏の佐倉領支配—「御隠居様」氏政の動向を中心として—」	高科書店
112-3		B	外山信司	「戦国末期の佐倉—城下集落の人々と後北条氏—」	
113	1991	B	遠山成一	千葉県歴史の道調査報告書17 佐倉道	千葉県教育委員会
114	1991	B	高橋健一	佐倉史断想	高橋健一
115	1991	B	高橋健一	芳桂院—戦国期東国の一女性とその周辺—	高橋健一
116	1991	G	小高春雄	長生の城	小高春雄
117	1991	L	伊藤一男	房総戦国土豪の終焉	嵩書房
118	1991	L	西ヶ谷恭弘	戦国の城 (上) 目で見る築城と戦略の全貌	学習研究社
119		L		「中世の城と考古学」	
119-1	1991	L	柴田龍司	中世城館の画期—館と城から館城へ—	新人物往来社
119-2		M	齋藤慎一	本藪の展開	
120	1992	B	瀬尾年勇	古村川上の歴史	瀬尾年勇
121	1993	A	中山文人 他	常設展示図録	松戸市立博物館
122	1993	B	勸印旛都市文化財センター	遺跡から見た印旛の歴史	勸印旛都市文化財センター
123	1993	K	岡田晃司	図録・里見氏の城と歴史	館山市立博物館
124	1994	K	山岡俊明	館山城とその城下町	中島書店
125				「房総考古学ライブラリー 8 歴史時代 (2)」	
125-1	1994	L	井上哲朗	「第 5 章 中世の城と館」	勸千葉県文化財センター
125-2		L	鳴田浩司	「第 6 章 近世から近代へ」	
126	1994	L	市村高男	「中世東国における宿の風景」「中世の風景を読む 2 都市鎌倉と坂東の海に暮らす」	新人物往来社
127	1995	L	黒田基樹	戦国大名北条氏の領国支配「御隠居様」北条氏政と旧公方領国	岩田書院
128	1995	L	さいとうはるき	房総城下町絵本	嵩書房出版
129			峰岸純夫・村井章介	「中世東国の物流と都市」	
129-1	1995	A	阿部浩一	「中世後期における関東内陸の水上交通と伝馬・宿—下総関宿を中心として—」	山川出版社
129-2		L	柴田龍司	「海城からみた流通と交通」	
130				「シンポジウム よみがえる篠本城跡—戦国動乱期城郭の謎にせまる—」	
130-1		E	道澤 明	「篠本城跡の発掘調査成果」	
130-2		E	伊藤一男	「中世篠本城郷の武士と村落」	
130-3	1995	E	小野正敏	「篠本城の残物が語ること」	勸東総文化財センター・光町教育委員会
130-4		E	椎名幸一	「東総の中世城郭」	
130-5		L	柴田龍司	「考古学からみた房総の中世城館の構造」	
130-6		E	橋浦芳朗	「篠本城跡の仏教遺物」	
130-7		D,E	遠山成一	栗山川流域の中世城館跡について	
131	1995	M	宇田川洋	北海道の考古学	北海道出版企画センター
132	1996	A	中山文人	小金城主高城氏 (企画展示図録)	松戸市立博物館
133	1996	F	伊藤一男 他	坂田城跡総合調査報告書 上総井田文書	横芝町教育委員会

④単行本・⑤第3章参考論文

番号	発行年	地域	編著者	書名	発行者
134		J,K	愛沢伸雄 他	『里見氏稲村城跡をみつめて』	
134-1		K	滝川恒昭	「里見氏の歴史における稲村城」(講演録)	
134-2	1996	K	遠山成一	「房総の中世城郭と稲村城」(講演録)	里見氏稲村城跡を保存する会
134-3		K	川名 登	「戦国大名里見氏の歴史」(講演録)	
134-4		K	事務局	「稲村城跡をめぐる人々のあゆみ」	
135			千葉歴史学会	中世東国の地域権力と社会	
135-1	1996	L	平野明夫	「高城氏と千葉氏・原氏・古河公方」	岩田書店
135-2		L	滝川恒昭	「戦国期房総における流通商人の存在形態」	
136	1996	L	さいとうはるき	房総の城下町45	審書房出版
137	1997	A	島田 洋	描かれた世喜宿城 (企画展示図録)	千葉県立関宿城博物館
138		B	木内達彦 他	「史跡本佐倉城一保存管理・整備基本計画策定報告書」	
138-1		B	外山信司	「本佐倉城の歴史」	
138-2	1997	B	市村高男	「中世東国における千葉氏の位置と本佐倉城」	酒々井町・佐倉市
138-3		B	木内達彦	「確認調査の結果について」	
138-4		B	小野正敏	「出土陶器からみた本佐倉城」	
138-5		B	木内達彦	「第3章 縄張の想定」	
139	1997	E	阿部 明・岩崎 功・伊藤信彦	中島城址と胤方以降	阿部明・岩崎功・伊藤信彦
140	1997	J	矢野淳一	君津地方の中世城郭 (企画展示図録)	君津市立久留里城址資料館
141		J,K	愛沢伸雄 他	『里見氏稲村城跡をみつめて 第二集』	
141-1		L	峰岸純夫	「中世館跡の調査と保存・活用」(講演録)	
141-2	1997	K	峰岸純夫 他	「房総里見氏の歴史における稲村城 その保存と活用」(討論録)	里見氏稲村城跡を保存する会
141-3		L	小野正敏	「陶磁器からみる房総の城の生活と文化」(講演録)	
141-4		L	佐藤博信	「安房里見氏とその周辺一特に木曾氏をめぐる」	
142	1997	L	山口美男 他	古河公方展 (企画展示図録)	古河歴史博物館
143	1997	L	千野原靖方	千葉氏 室町・戦国編	たけしま出版
144	1997	L	岸波宗岳	房総の戦国時代 (企画展示図録)	茂原市立美術館・茂原市立郷土資料館
145		J,K	愛沢伸雄 他	『里見氏稲村城跡をみつめて 第三集』	
145-1		J,K	滝川恒昭	里見氏研究の現状と課題 (講演録)	
145-2	1998	J,K	佐藤博信	前期里見氏の歴史的位置一特に「房州賢使君源義豊公」の検討を中心に一 (講演録)	里見氏稲村城跡を保存する会
145-3		J,K	峰岸純夫	享徳の大乱と里見義実 (講演録)	
145-4		J,K	川名登・佐藤博信・滝川恒昭・峰岸純夫	パネルディスカッション「里見氏再考ー里見氏の実像に迫るー」(講演録)	
146	1998	L	松岡利郎 他	城と道とー清川一史さんをしのんでー	清川一史氏遺作集編集委員会

第17表 文献目録⑤ (第3章参考論文)

番号	発行年	編著者	論文名	書名	発行者
001	1940	馬場 脩	日本北方地域及び付近外地出土の「内耳土器」に就て	人類学・先史学講座 第14巻	
002	1974	長瀬 衛	カワラケ・灯明皿	青戸・葛西城址調査報告 II	葛西城址調査会
003	1975	長瀬 衛	かわらけ	青戸・葛西城址調査報告 III	葛西城址調査会
004	1978	横田賢二郎・森田勉	太宰府出土の輸入中国陶磁器について	九州歴史資料館研究論集 4	九州歴史資料館
005	1980	大橋康二	中世播鉢考 (1)	考古学ジャーナル 175	ニューサイエンス社
006	1980	大橋康二	中世播鉢考 (2)	考古学ジャーナル 177	ニューサイエンス社
007	1980	大橋康二	中世播鉢考 (3)	考古学ジャーナル 179	ニューサイエンス社
008	1982	森田 勉	14~16世紀の白磁の分類と編年	貿易陶磁研究 No.2	貿易陶磁研究会
009	1982	上田秀夫	14~16世紀の青磁碗の分類について	貿易陶磁研究 No.2	貿易陶磁研究会
010	1982	小野正敏	15~16世紀の染め付け碗・皿の分類と年代	貿易陶磁研究 No.2	貿易陶磁研究会
011	1982	藤澤良祐	古瀬戸中期様式の成立過程	東洋陶磁 第8号	東洋陶磁学会
012	1982	丸山 純	武家屋敷と住宅	佐倉の武家屋敷	朝観光資源保護財団
013	1986	藤澤良祐	瀬戸大窯発掘調査報告	瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要 5	瀬戸市歴史民俗資料館
014	1987	藤澤良祐	本業焼の研究 (1)	瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要 6	瀬戸市歴史民俗資料館
015	1988	藤澤良祐	本業焼の研究 (2)	瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要 7	瀬戸市歴史民俗資料館
016	1988	浅野晴樹	関東における中世在地産土器について	研究紀要 第4号	朝崎玉県埋蔵文化財調査事業団
017	1988	石川 功	櫛門出土のかわらけについて	茨城県指定文化財 土浦城址内 櫛門保存修理工事報告書	土浦市教育委員会
018	1989	藤澤良祐	本業焼の研究 (3)	瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要 8	瀬戸市歴史民俗資料館
019	1989	津田芳男	所謂内耳土器について	茂原市文化財センター 年報No.3	朝茂原市文化財センター
020	1989	鈴木裕子	東京大学本郷構内遺跡御殿下記念館地点出土の17世紀代のかわらけ	江戸在地系土器研究会通信 No.8	江戸在地系土器研究会
021	1990	津田芳男	中世煮炊具に関する若干の覚書ー千葉県を中心にしてー	長生郡市文化財センター 年報No.4	朝長生郡市文化財センター

番号	発行年	編著者	論文名	書名	発行者
022	1990	佐々木彰	江戸時代のカワラケの動態と推移—大聖寺藩上屋敷出土の資料を中心に—	東京大学本郷構内の遺跡 3 医学部付属病院地点	東京大学遺跡調査室
023	1990	佐々木彰	近世焙烙の研究—大聖寺藩上屋敷跡出土資料を中心に—	物質文化 53	物質文化研究会
024	1991	藤澤良祐	瀬戸古窯址群Ⅱ—古瀬戸後期様式の編年—	瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要 10	瀬戸市歴史民俗資料館
025	1991	津田芳男	阿波測神社出土の遺物について	長生郡市文化財センター年報 No.5	長生郡市文化財センター
026	1991	浅野晴樹	東国における中世在地系土器について	国立歴史民俗博物館研究報告 第31集	国立歴史民俗博物館
027	1991	山口 剛	小田原城とその城下出土のかわらけについて	小田原市郷土文化館研究報告 27	小田原市郷土文化館
028	1991	藤尾慎一郎	佐倉と江戸—近世の瓦質・土師質土器から見た地域性—	国立歴史民俗博物館研究報告 36	国立歴史民俗博物館
029	1992	嶋谷和彦	“地鎮め”の諸相	関西近世考古学研究 III	関西近世考古学研究会
030	1993		付表 瀬戸・美濃大窯製品出土地名表	瀬戸市史 陶磁史編 4	瀬戸市
031	1993	金子健一	名古屋城三の丸遺跡にみる陶磁器・土器の組成と灯火具の変遷について	瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要 第1輯	瀬戸市埋蔵文化財センター
032	1993	木村 修	海夫・蔵本・富有人—中世の香取の海	香取の海—その歴史と文化—	千葉県立中央博物館
033	1994			全国シンポジウム「中世常滑焼きをとおって」資料集	日本福祉大学知多半島総合研究所
034	1994	両角まり	江戸在地系土器におけるロクロ技術の展開	江戸在地系土器の研究 II	江戸在地系土器研究会
035	1994	小林謙一	江戸在地系土器生産の成立に関する予察—近世都市江戸における17世紀の土師質皿—	考古学研究 第41巻第2号	考古学研究会
036	1994	谷口 栄	葛西城出土のカワラケ	江戸在地系土器研究会通信 No.42	江戸在地系土器研究会
037	1995	山本信夫	中世前期の貿易陶磁器	概説 中世の土器・陶磁器	中世土器研究会編
038	1995	藤澤良祐	瀬戸古窯址群Ⅲ—古瀬戸前期様式の編年—	瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要 第3輯	瀬戸市埋蔵文化財センター
039	1995	中野晴久	常滑・渥美	概説 中世の土器・陶磁器	中世土器研究会編
040	1995	中野晴久	生産地における編年について	常滑焼きと中世社会	小学館
041	1995	中・近世研究班	茨城県の中世カワラケについて	研究ノート 4	茨城県教育財団
042	1995	立石堅志	瓦質土器(奈良火鉢)	概説 中世の土器・陶磁器	中世土器研究会編
043	1995	小川貴司	土器製作技術と実験(1)	江戸在地系土器研究会通信 No.49	江戸在地系土器研究会
044	1996	小川貴司	土器製作技術と実験(2)	江戸在地系土器研究会通信 No.50	江戸在地系土器研究会
045	1996	小川貴司	土器製作技術と実験(3)	江戸在地系土器研究会通信 No.51	江戸在地系土器研究会
046	1996	白根義久	常総における中世在地系土器の展開	考古学雑誌	西野元先生退官記念会
047	1996	服部敬史	東国における15・16世紀の土師器皿様相	郷土資料館研究紀要 八王子の歴史と文化 第9号	八王子市郷土資料館
048	1996	両角まり	上千葉遺跡出土の内耳土器について	上千葉遺跡	葛飾区遺跡調査会
049	1996	両角まり	内耳鍋から焙烙へ—近世江戸在地系焙烙の成立—	考古学研究 第42巻第4号	考古学研究会
050	1996	江上智恵	上千葉遺跡出土の土師質土器について	上千葉遺跡	葛飾区遺跡調査会
051	1996	福島考古学会中近部会	かわらけ編年の再検討—11世紀から19世紀—(その1)	福島考古 第37号	福島考古学会
052	1996		古瀬戸流通の諸相	古瀬戸をめぐる中世陶器の世界 図録	瀬戸市埋蔵文化財センター
053	1996		古瀬戸出土遺跡地名表	古瀬戸をめぐる中世陶器の世界—その生産と流通—資料集	瀬戸市埋蔵文化財センター
054	1996	田中 信	川越市内出土の中世土師器皿について	江戸在地系土器研究会通信No.55	江戸在地系土器研究会
055	1997	小林謙一	江戸在地系土器成立期の土師皿の作成技術	関西近世考古学研究 V	関西近世考古学研究会
056	1997	中世研究プロジェクトチーム	神奈川県内の「かわらけ」集成(1)	かながわの考古学研究紀要 2	神奈川県立埋蔵文化財センター・財団法人かながわ考古学財団
057	1997	福島考古学会中近部会	かわらけ編年の再検討—11世紀から19世紀—(その2)	福島考古 第38号	福島考古学会
058	1997	服部敬史	中世食文化の基礎的研究	国立歴史民俗博物館研究報告 第71集	国立歴史民俗博物館
059	1997	桃崎祐輔	律宗系寺院と沿岸社会	中世の霞ヶ浦と律宗—よみがえる仏教文化の聖地—	土浦市立博物館
060	1997	藤澤良祐	中世瀬戸窯の動態	瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要 第5輯	瀬戸市埋蔵文化財センター
061	1998	築瀬裕一	黒ハギ遺跡(中世)	平成10年度千葉市遺跡発表会要旨	千葉市教育委員会・千葉市文化財調査協会
062	1998	両角まり	三つの焙烙—焙烙に見る江戸と周辺地域—	江戸と周辺地域 江戸遺跡研究会第11回大会発表要旨	江戸遺跡研究会
063	1998	中世研究プロジェクトチーム	神奈川県内の「かわらけ」集成(2)	かながわの考古学研究紀要 3	神奈川県立埋蔵文化財センター・財団法人かながわ考古学財団
064	1998	鈴木裕子	土器擂鉢の終焉	江戸在地系土器の研究 III	江戸在地系土器研究会
065	1998	小林謙一	17世紀前葉の土師質皿—丸の内三丁目遺跡52号土坑出土土師質皿の位置づけ—	江戸在地系土器の研究 III	江戸在地系土器研究会

⑤第3章参考論文

番号	発行年	編著者	論文名	書名	発行者
066	1998	鈴木裕子	江戸遺跡出土の非在地系の深鉢形土器について	東京考古 16号	東京考古談話会
067	1998	福島考古学会中近部会	中近世の在地土器・陶磁器	福島考古 第39号	福島考古学会
068	1998	白田正子	茨城県における中世末から近世にかけての土師質内耳土器について―つくば市古屋敷遺跡の出土例を中心として―	研究ノート 7号	鉾茨城県教育財団
069	1998	永越信吾	葛西城における近世初頭のかわらけの様相―上千葉遺跡15号溝出土資料の検討を中心として―	博物館研究紀要 第5号	葛飾区郷土と天文の博物館
070	1999	中世研究プロジェクトチーム	神奈川県内の「かわらけ」集成 (3)	かながわの考古学研究紀要 4	神奈川県立埋蔵文化財センター・財団法人かながわ考古学財団

写真図版



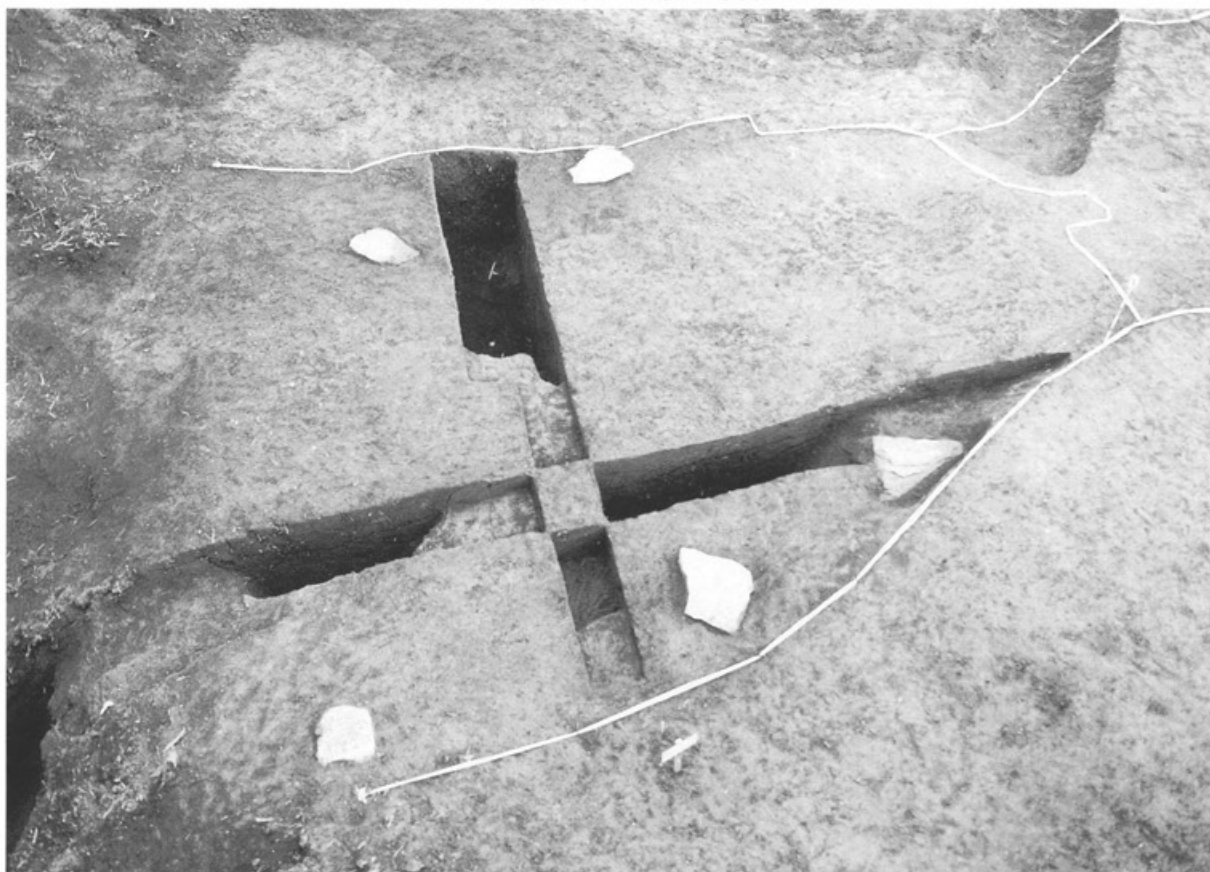
1. 松戸市小金城跡 金杉口畝状空堀 (松戸市教育委員会提供)



2. 印西市小林城跡 I 郭虎口門跡



1. 印西市小名城跡 II 郭虎口門跡 (I 期)



2. 印西市小名城跡 II 郭虎口門跡 (II 期)



1. 四街道市館ノ山遺跡 航空写真



2. 四街道市館ノ山遺跡 台地整形区画内



1. 四街道市北ノ作遺跡 航空写真 (台地上)



2. 四街道市北ノ作遺跡 航空写真 (斜面部)



1. 四街道市北ノ作遺跡 航空写真 (真上から)



2. 四街道市北ノ作遺跡 斜面部



1. 四街道市和良比堀込城跡 近景 (四街道市教育委員会提供)



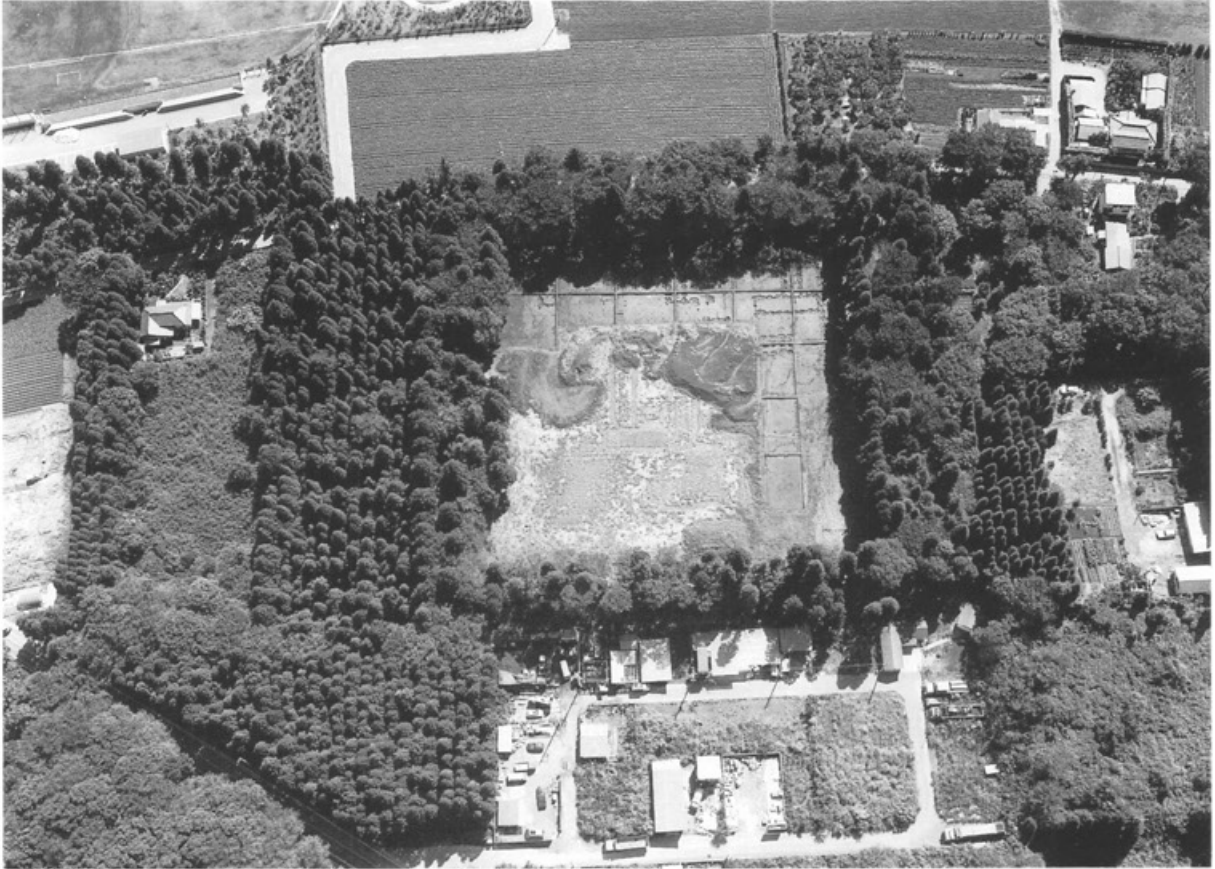
2. 酒々井町長勝寺脇館跡 航空写真 (酒々井町教育委員会提供)



1. 千葉市高品城跡 航空写真 (財団法人千葉市文化財調査協会提供)



2. 千葉市生実城跡 番後台地区畝堀 (財団法人千葉市文化財調査協会提供)



1. 千葉市千葉御茶屋御殿跡 航空写真 (千葉市教育委員会提供)



2. 大栄町久井崎城跡 航空写真 (財団法人香取郡市文化財センター提供)



1. 光町篠本城跡 航空写真 (財団法人東総文化財センター提供)



2. 芝山町田向城跡 航空写真 (芝山町教育委員会提供)



1. 横芝町坂田城跡 航空写真



2. 長南町岩川館跡 航空写真（財団法人総南文化財センター提供）



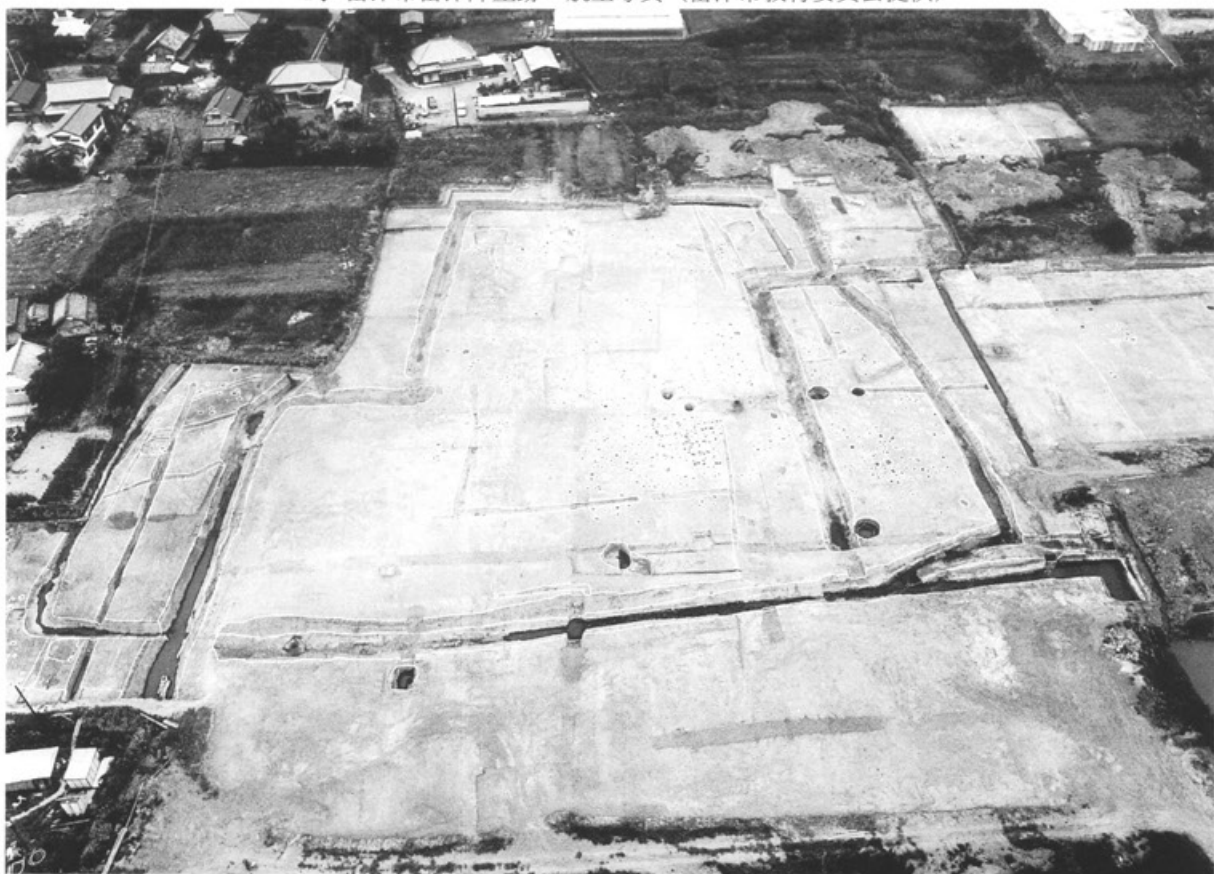
1. 木更津市笹子城跡 北端部 航空写真



2. 富津市造海城跡 航空写真



1. 富津市富津陣屋跡 航空写真 (富津市教育委員会提供)



2. 鴨川市西郷氏館跡 航空写真 (鴨川市教育委員会提供)

千葉県文化財センター研究紀要20

平成12年3月27日 発行

発行者 財団法人 千葉県文化財センター
千葉県四街道市鹿渡809-2
電話 043 (422) 8811

印刷所 株式会社 弘文社
市川市市川南2-7-2
